世の片隅で

pinokopapa

夫のこと　－１　－

喪主として夫の葬儀を終え、参列者を送ってやっと息をついた。子供二人はまだ幼くて、どういうことか解っていなかった。義母一人が目を泣き腫らしている。私はただぼんやりと突っ立ってるだけだった。悲しくなんかなかった。ほかの女の事で死ぬなんて、妻としては絶対に飲み込められなかったからだ。葬儀のときも、なにか囁いて私の顔を気の毒そうに見る。普通のときなら睨み返すところだ。しかしそんな気力もなく、無表情で下を見ていた。読経の声と、鉦の音、ジャラジャラと打ちならされる小さなシンバルのようなものの騒音に意識が引き付けられ、なにも考えていなかった。だから喪主の挨拶をとマイクを突きつけられると、何か言ったと思うのだが、今は何を言ったのか覚えていない。泣いてはいなかった。それを見て、情の薄い人なんよ、と言われていたようだった。気丈なのよ、そんな人なのよ・・・。

火葬場の炎の音は堪らなかった。ここまで付いてきた人も、しばらくすると厳粛な顔つきから手持ち無沙汰な顔に変り、待合室のあちこちで座ったり話したりしている。

姉さん、大変だったな。

と、弟が話しかけてきた。大変？どういう意味？女の事で気を病んで、挙句に道端をふらふら歩いて車に撥ねられ、即死したってこと？で、大変なのは女が原因だったってこと？それとも、急逝したこと？今度の何が本当は大変なの？私は、しんと沈んだ意識の中で混乱していた。

これからどうするんだ？

あんたの世話になんかならないから、心配しないで。

つい、つっけんどんに言ってしまった。私と弟は昔から仲が悪かった。ましてや二親が相次いで亡くなったときも、この弟夫婦は碌に世話もしなかったくせに、相続だけは口いっぱいに主張した。、家も土地も、今自分達が住んでいるんだから自分の物だと言い張った。姉さんは学校も大学まで出してもらったんだし、嫁入りのときも充分に支度してもらったんだから、それは生前贈与なんだから、それだけでいいだろう。じゃあ、あんた達はお父さんやお母さんの病気の世話をどれほどしたの。長患いの世話だけはこちらに押し付けといて、お母さんが息を引き取るときも、出張先で酒飲んじゃったから飲酒運転になるので直ぐには行けないなんて、いい訳にもならないこと言って病院には来ないで、二人してきたのは葬儀会館に遺体が安置されて、夜が明けてからだったじゃないの。弟にはそう罵った。弟嫁には、なにも言わなかった。小姑とは口も利きたくなさそうだったからだ。それに、実家の私の部屋だったところは、弟夫婦の子供の部屋になっている。弟は私の声を聞かなかった。それでお仕舞い。家を出た者は口で言うだ

けだった。

背を向けて立ち去る弟を見詰め、帰れないし、帰らない、そうおもった。この惨めな視線の中で生きて行かなければならないんだと思った。

葬儀に続くお七夜が終わると、参列者は引き潮のように去った。私は夫の骨箱と位牌を抱き、葬儀会館の前に出た。しかし帰る車がなかった。来るときは誰かしらが乗せてきてくれたが、その人も帰ってしまっていた。私も義母も途方にくれた、仕方なく、もう一度会館に入り、葬儀社の人にタクシーを呼んでくれるよう頼んだ。

いやぁ、タクシーも葬式帰りの骨壷を持った客は、縁起が悪いって乗せたがらないんですよ。いいです、当社がお送りしましょう。

そういって、なんか薄汚れたライトバンに皆を乗せて家まで送ってくれた。何も彼も、そして終わった後まで滲めな葬儀だった。

家に帰り着くと、義母が異様に張り切りだした。義姉と二人で、用意してあった祭壇に骨箱を乗せ、おりんを叩き、線香と蝋燭に火をつけて花も飾った。葬儀とは不思議なものだと思う。たぶんこれは、生きて残されたものを次々と色々な儀式で追い立てて、辛さや悲しみに浸る暇を与えないようにするためのものなんだと思った。私は祭壇の前でぼんやりと座り込んでしまい、立てなかった。

ママ、お腹すいた。

下の子がすねたしぐさで、￥身をよじって言った。上の子はじっと耐えていた。

はいはい、おばあちゃんが用意しますよ。

義母が下の子を抱いて台所へ連れて行った。上の子もそれに続く。

かなちゃん、着物だけでも脱いだら。

義姉が帯を解きながら言う。その声に立ち上がったが、浮いているような、空気がまとわり付くような気がする。義姉はもう平服に着替えていた。義母が義姉の喪服をたたんでいる。

かなこさん、これからの事は明日相談しましょ。

なにを？何の相談？そう思いながら、私は頷いた。

元々今のお店は、義父と義母が二人で切り盛りしてきた和菓子の店だった。それを、夫が帰って来て、和菓子もケーキも陳列した喫茶店に改装した。店は、大反対した義父の予想通りにはならず、上品な作りが好評で、それまで来たことがなかった女性客も来るようになった。和菓子は贈答用、ケーキは喫茶店でのスイーツで好評だった。義父は、元の和菓子の作業所だったところに家を増築し、義母とそちらで暮らすようになった。

だが、そんなことは結婚してから知ったことだった。

夫と出合ったのは、古風なといえばいいのか時代遅れと言えばいいのか解らないが、お見合いでだった。私は高校を出ると、都会の有名私立大学にすんなり合格し、さっさと進学した。後の弟の事を思えば、どうして父は私の進学をああも簡単に認めたのか解らなかった。そして大学を卒業すると、これもすんなりと銀行に就職でき、しばらくＯＬ生活を楽しんだ。

今思えばそんなこと、どこにでもある話だが、私は手ひどい失恋をし、身も心もぼろぼろの、この上ない不幸を背負った悲劇のヒロインになりきって逃げ帰ってきた。そんな私を弟だけは白い目で見た。私は父母から見ると、期待の星、だった。それゆえ父母は私を余計に不憫がり、労わった。私はそれに甘えて、２年を暮らした。といっても遊んで暮らしたわけではない。父のコネで、農協の金融部門に勤めた。都会とは違い、至ってのんびりした仕事だった。そしてようやく落ち着いた頃に、今度の見合い話しだった。

親戚の叔父夫婦が、改まった服装で神妙に座り、一冊の見合い写真と釣り書きの入った封筒を見せた。

どこの人？

＊＊の長男さんだ。

かなこさん、見てご覧、良さそうな人よ。

母が写真を広げて見ながら言った。父は釣り書きを見、

おい、二つ下じゃないか。

と、怒ったように言った。

ほんとだ、それも、かなこの高校の後輩ね。

私はその言葉に興味を引かれ、写真と釣り書きを見た。確かにどこかで見たような気がした。

会ってみたら？

合コンで会うのも、見合いで会うのも一緒よ。見合いのほうが未だ身元保証があっていいのよ。

叔母が言う。

身元保証とは上手い事を言うと思った。それと、相手が後輩だといことに身構えなくてもいい気楽さを感じた。

いいよ、あっても。気に入らなかったら断わったらいいんだしね。それに、見合いなんて知らないから、ちょっと興味あるし。

いいのよ、それぐらいの気安さで。一度経験しとくのもいいかもね。

そう叔母が言うと、いきなり見合いの段取りが出来てしまった。
　見合いの席は地元ではなく、どちらからも遠い県都の郊外の店でだった。席に座ると、窓越しに松と海が見えた。着慣れぬ着物が窮屈で仕方なかった。見合いは型どおり、お互いの挨拶と、それぞれ当人の経歴を紹介、その後少し食事をして、後は若いもの同士で、と庭に出た。
　二人だけになって、夫が最初に言った言葉が、
　先輩、もう弓道はやめたんですか。
だった。私は急に肩の力が抜け、こけそうになった。
　大丈夫ですか、先輩。
手を差し伸べてくる夫に、私は笑い出してしまった。
　自分のお嫁さんになるかもしれない人に、先輩はないでしょ。
　いやあ・・・
そういって笑った。
　昔から先輩の事を噂するときは、あの先輩ってかっこいいよなあっていってたから。
屈託なく言う。そこに育ちのよさが窺えた。そして少年の幼ささえ残っていた。
　以外ね、私がそんな噂されてたなんて。
　かっこよかったですよ、こう、白い上着に黒の袴を付けて、素足で道場に立って弓を引く姿は。凛々しかった。こう、胸を張って狙いを定めているときの黒い胸当てが目にしみた。
　どこ見てんのよぉ。
ＣＭの一節が出た。そして、和んだ気持ちになった。
　後日、いきなり婚約をという申し込みがあった。見合いだからと言って、そんないきなりはないだろうと、父が私の顔を見た。私は迷っていた。
　まあまあいいじゃありませんか。仲人口で言うわけじゃないが、これは良縁ですよ。ですから、ちょっとお付き合いをしてみたら。嫌なら、それから断わったらいい。
叔父の言葉は、正に仲人口だった。結婚なんて、こんなに簡単に決めていいのだろうか。あのお坊ちゃんでいいのだろうか。そう思うと、ふっと以前の事が胸をよぎった。今はもう思い出したくもない過去だった。私はもう一度あってもいいと返事した。
　　それから断わるかもしれませんが。
と付け加えて。

　結局、流れのまま結婚まで行ってしまったのだが、それは見合いというシステムに、まんまと乗せられてしまったこともある。見合いすれば次は婚約、結納と回りが走り出して、本人の意志などどこかに置き去りにされてしまう。当人の迷いなど押し流して、目出度い目出度いと周囲の善意が推し進めてゆく。いいんだね、と聞かれ、祖手の事などろくに知らないまんま、ちょっとした好印象に頼って頷くと、後はベルトコンベアーだった。

　だが私には、別な事情もあった。私の勤めている農協も貯金だけでなく、ファンドも扱うことになった。その指導に証券会社の者がやってきた。それが、私にゆがんだ破局を味あわせたおとこだった。会議室でその男の講義を聞かされたとき、私は驚きと苦渋と、・・・・、嫌悪で逃げ出しそうになった。何故こんな男に恋してしまってたのかと、苛立たしさを押さえ切れなかった。そして向うも私に気付いていたらしく、講義の後さりげなく近寄ってきて、今夜会わないかと誘ってきた。その臆面のなさの後ろに、この男はまだ女を自分のもの、誘えば付いてくるものと思い込んでいる勘違いが透けて見えた。

　あら、どなたかと間違えていらっしゃるんじゃありません？
虫唾がはしるって気分を、私は初めて肌に感じた。

　だが男は、一度でもそんな関係を持った女には何をしてもいいとおもっているのか、指導に来る度に私を誘い、悩ました。そして、そんなことが職場で噂になりそうだった。私はこんなことから逃げ出したくて、夫との婚約に頷いてしまった。

　婚約の前に、母と共に夫の家を訪ねて行き、その家の実情を見たことがあった。義父は夫とあまり口をきかなかった。夫の家族と挨拶をすると、義父はさっさと仕事場にこもった。夫は机を挟んで、気まずそうに笑っていた。そこへ、義母が和菓子を持ってはいってき、どうぞと出してくれた。菊をかたちどったお菓子だった。

　お父さんが、かなこさんにって今つくったの。
そういわれ、この家の私に対する気持ちが解った。

　なに迷ってるの、女は望まれて行くのが幸せなのよ。
母も叔母もそういった。自分たちは恋愛だったはずなのに。

　半年の婚約期間ののち、大叔母の　高砂　で私は結婚した。お色直しは三度。夫は、結婚式なんて、女のためにあるもんだと笑った。ウエディングドレスから、いきなり着物に変り、鬘の重さに耐えて会場を歩いた。そして大急ぎでドレスに着替え、更にもう一度。本当に息つく暇もなかった。

　　夫の葬儀の後、一週間店は休んだ。再開するにも目途の立たないこともあった。ケーキも和菓子も作る人間を失った今、私はこの家を出るしかなかった。それを義母が止めた。

　　私に考えがあるの。

そういって、義母はどこかへ行った。そして、数日後に帰ってくると

　　店を改装するからね。それから、二階は、たかこのブティックにして、注文服の専門店にするの。女三人力を合わせてやっていきましょ。

そういわれて、私は首を横に振った。

　　私は出て行きます。

沈黙があった。そして

　　あんな噂があったから？

言い出したのは義姉だった。

　　私はわからないわよ、でも四十九日も済ませないで出て行ったら、世間の人はどう思うでしょうね。

義母も重い口を開いた。

　　面当て？

　　いえ、そんなつもりは・・・。

そう答える私に、義母の怒気を孕んだ声が響いた。

　　あなたにその気がなくっとも、世間はそう見るわよ。わたし、そんなことの出来るあなたを、許せない。

私は、言い返す積りはなかった。

　　ここではもう私一人が他人ですから。

　　かずき　と　りょうか　の母親でしょ？だったら他人なんかじゃないわ。

私は、義姉の言葉に納得しなかった。

　　先の見込みを立て、半年ぐらい先で、二人を連れて出ます。

義母の頬が揺れ、ゆがんだ。

　　許さない、私はあなたを許さない。かずとし　を返して、あなたが　かずとし　を殺したのよ。かえせ！

私は、義母が何を言ってるのか解らなかった。また、めぐり巡って私が　かずとし　さんを　浮気に走らせたとしたら、それが私の罪だとでも言いたいのかとも一瞬は思った。

　　私はお父さんが亡くなったときに、もう泣きつくして涙も枯れたと思ってた。でも

、ああっ情けない。私、この人、信じられない。
そういうと義母の頬に涙があふれた。私は、何を言われているのか解らなかった。
　あなた、この家を出るならあなただけ出なさい。孫二人を連れて出るのは許しません。それが　かずとし　の意志でした。
私は心が冷えて行くのを感じた。
　かずとし　はもう何も考えられないほど悩んだの。だけど、かずき　は俺の子だって言い切った。
　母さん、母さん、それを言っちゃいけないでしょ。加奈子さんが残りたくても残れなくなるわ。
その言葉のあとは、私には二人の声が遠くで何か音がしているといった風にしか聞こえなかった。
　夫は　かずき　の血液型を幼稚園に出す書類で知った。夫は、悩みぬいて、かずき　の唾液を自分で収集し、ＤＮＡ鑑定に出した。そして、９９.４パーセント親子関係は存在しませんとの回答を突きつけられた。私は酔った夫が、眠っている　かずき　を抱きしめて、ごめんよ　ごめんよ　と号泣しているのを見ていた。それからだった、夫が　かずき　の顔をまともに見なくなったのは。そして、酔った夫が、それはないっすよ、先輩と一人繰言を言っているのも聞いていた。結婚式間近に、私はあの男に襲われた。それがこの結末だった。何年前だったろう、私は動かぬ意志で　かずき　の年を数えていた。
　ぞれでも、かずとし　は　かずき　を俺の子だと私に言った。
義母の声が聞こえた。
　かなこ　は俺の女房だ。だから、これからだって大事にしてゆく。かずとし　はそういったの。だから、出てゆくのは許しません。かずとし　が許しません。
あの、夫の暖かい体温が私を包んだ。私は声を上げて泣いていた。

何年前か前だったら、私も一応は人に知られていた。時代の流れの早い今では、忘れられるのも早い。私もいわば、一発屋だった。地味な演歌を歌い、何とかテレビにも出、ビールケースをレコード店の前においてカラオケ伴奏で自分の歌を歌って回った。歌っているときも振り返ってもくれないことがしょっちゅうだったが、路上ライブなんて言葉が知られるようになり、ギターを持って歌うようになると並べたＣＤにではなく、ギターケースに五百円硬貨だのが放り込まれることがあった。そんな時、私は俯き込んでしまった。投げた相手は私を素人のシンガー志望と思って、励ます積りで投げてくれたのだろうが、私はプロだと思ったからだ。

歓楽街でも歌って回った。ここは一曲歌うのも難しかった。地元の＊＊さん達に話を通しておかないと、とんでもないことになった。飛び込みでギターを抱いてバーに入れば、ママが目を吊り上げて私の肩を小突き、恐ろしい剣幕でたたき出された。その上、売れてなかったらこんなもんだと外を歩いていると、次はママさんから連絡を受けた地回りの兄ちゃんが、私を路地裏に連れ込んで殴る蹴るだった。マネージャーもいない一歌い手は、顔を殴るんじゃないぞという言葉を聞きながら、腹を蹴られて地面に這いつくばった。かといって、こんなこと警察に訴えられもせず、泣き寝入りするしかなかった。

他の土地で、私は何とか蛇の道に入る方法を見つけた。ビールケースに立って歌わせてもらったレコード店の店長に、この蛇の道に入れて貰った。店長がどこかに電話していた。そして、まずこの店に行って、そこから歌わせてもらえといわれた。

なに歌ってるの？演歌？ふーん、そのＣＤを売るの。

まあ、歌ってみて。

そんなもんなの。まあ、＊＊さんの口利きだから、何とか話は通しとくわ。
そういってもらえて、私はそこから叩き出されることだけは無かった。

夜の帳が折り始めた頃、私はＣＤラジオとギター、ＣＤアルバムを持って言われたバーに入っていった。すると、女の子達が、待ってたわよ、と声を掛けてきた。わたしは戸惑うばかりだった。話を通してもらうとこんなにも扱いが違うのか、そんな思いの裏で、なにか怖いものがあるんだと解った。そして、酔客から、

いよっ、兄ちゃん、流しかい？珍しいねぇ。
と、声が掛かった。仕事柄、言葉はしっていたが、自分が　流し　だといわれるとは思わなかった。

へぇ、めずらしいなぁ、じゃあ、お富さん、やってくれ。

お富さん？

そうだ、春日八郎のお富さん。

違うのよぉ、この子は将来有望な、今売り出し中の歌手なのよぉ。

歌手か、じゃプロなんだ、なら余計にお富さんだ。

昔、爺さんが風呂の中で歌ってた覚えがあった。伴奏の方は自信がないが、歌詞は解っている。やらせていただきます、そういって、

いきなくろべい　にこしのまあつに

と歌った。

いやあプロだねぇ、気に入った。

そういって、客は私に、２００円くれた。流しは昔一曲１００円だったと客は言った。

いいから取っときな。

剛毅な積りらしかった。

すいません、持ち歌、歌わせてください。

そういって、ＣＤラジオにマイクをつなぎ、音を流しながら熱唱した。・・・、だが

お富さんのほうがいいぜ。

湯の町エレジーやってくれ。流しの定番だろ？

おやんなさいよお、そしたら、ＣＤ一枚買ってもらうから。

女の子が酔客にしなだれかかりながら助け舟を出して暮れた。私はこの後三曲歌った。じいさんに助けてもらったようなものだった。そしてやっと一枚買ってもらったが、こいつはお前にやるよと、客は女の子に放り投げた。すると、女の子が曲名をみながら、カバー曲を歌えと言った。昔のグループサウンズの歌だ。

あまいろの　ながいかみを　かぜが　やさしくつつむ

女の子が歌い、客も歌った。私はもう本当の流しだった。

朝まで歌って歩いて、へたり込むように眠った。だが今日は次の町に行かなければならない。私は世話になったレコード店の店主に一応挨拶をと思い、立ち寄った。すると、

お前は私の顔をつぶす気か。

といきなり怒鳴られ、ばちっと頬が鳴った。えっと顔をあげ、店主を見上げた。店主は最初に行ったバーのママのところへ謝礼を持って行けと言った。そんなことも知らずにやってきたのか、プロダクションの社長は何を教えてるんだ、と息巻いた。

その日の夕方、私は次の地に出発するのを遅らせ、昨日のバーを訪れた。恐る恐るドアを開け、声をかけると、まだ支度をしていないママが上を羽織って出てきた。そしてじろっと私を見詰め、何しに来たといわんばかりだった。私は何と呼べばいいか解

らず、つい
　あねさん、昨日はお世話になりました。
そういって頭を下げた。
　あんたまだいたの。で、今日は何？
　昨日のお礼が出来ておりませんでしたので、お尋ねしました。有難うございました。おかげで、それなりに歌わせてもらいました。
　そう、いって私は胸ポケットから謝礼の入った封筒を出し、もう一度頭を下げた。
　そう。
ママは封筒に手を伸ばし、受け取った。私はその後用意していたバラの花束を、一杯に頭を下げて差し出した。ママはびっくりしていた。
　えっ、これ、私に？
　はい、ほんのお礼の気持ちです。
花束は持ちきれないほどのバラが赤く密集していた。ママの顔が一度にほころんだ。バラが一度に香った。
　バラね！花束なんて始めてもらった。・・・・、あんたぁ、あんたぁ。
　ママが二階に声をかけた。すると、男が降りてきた。ママが男にこれまでの事を話し、花束を見せた。
　ほぉ、良かったじゃねえか。若い衆、気に入った。おめえ、つぎはどこへ行くんだ？
私が次の地名をいうと、男は名刺を一枚くれた。名前の上に代紋が描かれて会長＊＊とあった。そして＊＊というところを訪ねて、この名刺を差し出せば、ちゃあんと面倒は見てくれるはずだといった。私がこの業界の仕組みに取り込まれた始まりだった。
　私の旅は順調に回りだした。そしてテレビとか歌謡ショウの前座も務めることが出来るようになり、マネージャーも付いた。だが、地方回りの途中で挨拶に行った地元の＊＊の会長から、
　あんた、いい顔してるねぇ、すまないがあの一座の助っ人に行っちゃくれないか。と言われたことがあった。大衆演劇の助っ人だった。
　言われた温泉場のホテルに行き、フロントで訪ねると、それまでにこやかに応対していた男の顔が、まるで見下げるように変った。
　表から入ってくるんじゃない、裏へ回れ、役者風情が。
唖然とするばかりだった。私は男の指差す方へ逃げるように向かった。場所などわからない。しかし、大広間の奥に舞台があり、私はその奥へ走りこんだ。顔を真っ白に塗り

、目と口がはっきりと描かれた着物の女にぶつかりそうになった。
　すいません、ごめんなさい。
そういったのは女の方だった。そうか、こんな世界なんだ、と私は思った。私は頭を下げ、
　＊＊会長からこちらにうかがうように言われた＊＊ですが、どちらにゆけばいいのでしょうか。
　ああっ。
白く塗った手が体の前でひらりと踊り、
　聞いております。座長があちらで待っております。どうぞ、こちらへ。
女は小腰をかがめ、頭を下げてそういった。まるで時代劇だ。

座長の部屋は、座員とは別だった。入り口に暖簾がかかり、女の座員は、座長、と声をかけて入っていった。

＊＊会長紹介の＊＊さんです。

鏡の前で鬘を除け、羽二重だけの座長が座っていた。

おお、あんたか、確かにいい顔してる。まあ、ちょっと立ってみてくれ。そしたら歩いてみな。そうじゃあねえ、すり足だよ。顔は俯き気味にして。脚は内股、手は少し前で急所の辺り。そこじゃねえ。手は重ねるんだ。・・・、いいねえ。これで顔を作ったら見られるんじゃねえか？

はい、そう思います。

若いねえ、若いってえのはいいねえ。おまえ、顔をしてやってくれ。

もう否応はなかった。いきなり鏡の前につれて行かれ、浴衣に着替えさせられ、上半身は裸にさせられた。髪はネットで押さえ、まぶたと鼻の両脇に朱が塗られた。その上を目といわず口といわず、まるで塗料をぬるように刷毛で真っ白に塗り込める。ああっ、これが白塗りって奴かとはじめてわかった。顔は輪郭だけで、後はキャンバスになった。その上を大きなパフで叩き、どうらんのてかりをなくする。羽二重を付け、さらにどうらんを塗って、パフで叩き、目尻と目頭に紅を差し、目の上と下に紅で目を作る。眉も形よく描かれた。最後に口紅を塗って、上唇と下唇を合わせ塗り広げるように言われた。下唇の方が色が薄いので、書き足される。さらに少し濃い色で輪郭線を引いて終わりだ。・・・、と、えっ、おんな？　女形のかつらがかぶせられた。衣装も一枚一枚着るのではなく、羽織れば全部着られるようになっており、後は前をあわせて帯を結べば形は整う。

おお、いいじゃないか、頬骨が飛び出してなくて、目も一重、鼻筋が通って唇も大きくない、それで女形に向いてると思ったんだな。立ち役もこなせｔるとは思うが、まあ無理だ。これで歌ってもらおう。

えっ、これで何歌うんですか、女の声は出ませんが。

いいんだよ、派手な歌をうたってくれりゃ、一応穴は埋まる。ただ、所作だけは覚えてくれ。

そういって、座長は立ち上がり、膝を寄せて腰を落とした。背筋はしっかり立て、上半身を少しよじる。顎を引き、少し伏目で顔を傾ける。手は胸の前で交差し、ゆっくりと開く。私も言われるまま、膝をゆるめ、顔をかしげた。

違うよぉ、頭の先を動かすんじゃなくて、顎の先を横に動かして傾けるんだ、目は

斜め上や斜め下に視線を持っていって、ゆっくり見る。これが女形の流し目だ。手は開いちゃいけない。四本の指はすっとそろえて、力を入れないでのばし、親指はそっと添える。指を曲げたら、お岩だ。それから、極めの時以外は手を肩より上に上げちゃいけない。常に膝は内股で軽く曲げ、腰と背筋は少しそらし気味、これさえ守れば、後は曲に合わせてまわってりゃ、女形の踊りさ。
そういって座長はくるりと回って両手を斜め下に持って行き、首を傾げて斜め下を見た。
　いいわ、出しちゃえ、ヘッドセットマイクをつけて歌わせて、お前、脇で踊ってろ。
座長が、私に化粧してくれた女に言った。
　大丈夫ですか、座長。
脇の立ち役が不安そうに言った。
　大丈夫、今から稽古だ。
そんなもんじゃない、できるわけがない、女に手を引かれながら私はおののいた。
　私が稽古で舞台にあがると、マネージャーが客席に座っていた。
　こいつを歌ってくれ。
カラオケが鳴り出した。
　こいのからくり　ゆめしばい　せりふ　ひとつ
私はただ突っ立って歌った。勿論男の声だ。歌い終わり、女の声は出ません、というと、それでいいんだ、と答えが返ってきた。
　もうちょっと喉を絞って歌ったら、それでいい。
客席のマネージャーがびっくりして飛んできた。
　どうなってるんですか！
私はそこで２年修行した。＜すけ＞　たのではなく、詰まり、助けたのではなく、私はここで修行したのだった。私はここで舞台の醍醐味を知った。恐ろしさと酔いしれるような高揚感がない交ぜになって私を襲ってきた。それは歌手として歌った後とは全く別なものだった。演技も踊りも出来はしない。だが私が闇の中で立って、スポットライトを浴びると観客席の空気が動く。どよめくといっていい。曲のイントロが流れ、脇で構えていた女が踊りだす。女形の豪華な衣装で構えた私も身をよじり、手を翻して歌いだす。脇の女がするすると動き、私に絡んでくる。私も体を回してすっと目を流す。全てが白塗りと闇の舞台のマジックだ。衣装の金糸がきらめいて、女と女姿の私がまとわりついて踊っている。曲の終わりに女の背が私にもたれかかり、私を見上げた。私はとっさに鷺娘の仕草で振袖を羽ばたかせ、女をはぐくむようにした。一瞬でライトが消え

、私と女は下手に下がった。曲が終わった。私は酸欠の金魚のようにあえいでいた。客の反応なんか解りゃしない。

　何時まで手を握ってるの。

私は女に言われて、驚いて手を離した。それが初舞台だった。

　あんた、舞台度胸があるねぇ。

後で座長が言った。私は芝居が終わると、他の座員と一緒に出口で客を見送った。座長もほかの座員も客一人ひとりに声をかけた。すると、初老の女性客が何人か私の前に立ち、

　あんた、ほんとにおとこ？

と、私をじっと見上げて言った。

　はい、おとこです。

　ほんとだ、男の声だ。

　ほんとう？

別の客が今度は、私の胸の辺りに手を伸ばして触った。

　ほんとだ、胸ないわぁ。

　あんた、ほんときれいねぇ。

そういうと、女性客が私の胴に手を回し、抱きついてきた。座長が目で、その客をハグするように合図してきた。私はそっと客の背を抱いた。

　きゃあ、わたしも。

客は私の胸元に一万円札をねじ込み、抱きついた。

　客の望みなら、パンツも脱いで見せるのが役者だ。

座長が胸元の札を見ながら、後で私に言った。

　翌日から、私は他の座員より先に起きて身支度をし、昨日してくれた娘役の女に化粧の仕方を教わった。役者は皆自分で自分の化粧をする。昨日は顔と、着物を着た後の手、それから足と脛まで白塗りに塗ってくれた。もちろん脛毛も剃った。その時、

　あなた、色が白いわねぇ。肌理もこまかいし、化粧が映えるわ。

と、襟足を塗って後、スポンジを叩きながら女は私に言った。

　本当のおんなみたい。

その時はまだ私はいっ時のことと思って聴いていた。翌朝、

　姉さん、おねがいします。

私は女の後ろに正座して頭を下げた。

　いい？見てて。

鏡の前でさっともろ肌を脱ぎ、化粧を始める。もちろん胸はさらしを撒いてある。昨日の通り、顔に化粧刷毛で歌舞伎白粉を油に説いたものを塗って行く。花の横は紅を差してあり、白塗りの下から浮いてくる。そして羽二重を被って更にその境目を塗り、わからなくする。目尻と目頭に紅を差し、唇にも塗り添える。あざやかに出来上がった。私は鏡に写った娘役の顔を見ながら、その手順を頭に叩き込んだ。小指と人差し指で紅を差す、上瞼の先を・・・、手順を確認しながら、ふっと顔が熱くなる思いがした。かつて見た風景、いやで逃げた風景・・・。

どうしたんえ。

姉さんの背中、まぶしいです。

戸惑ったような空気が流れた。

おっ、どうした？

座長が顔を出し、声をかけてきた。

はい、化粧の仕方を教わってます。

そうかい、しっかり教えてもらいな、だけどこいつに手を出すんじゃねえぞ、これは俺の娘だからなあ。

そういって座長は稽古場へ行った。私は知らなかった。女は菊子と言って、本当に座長の娘だった。

その後私と菊子は稽古場に行ったが、菊子だけが芝居稽古に加わり、私は横で見るように言われた。そして、芝居で何かやるのはまだまだ先だ、それより昨日の踊りは良かった、だから歌謡ショーの方に専念してくれ、といわれた。

だけど踊りだって菊子姉さんにリードしてもらったから格好が付きましたが、私一人じゃぁ、ああは行きません。

まあ、そのあたりは菊子と相談しながらやるんだなぁ。とにかく思ったより良かったよ。菊子もあんたに一目惚れしたみたいだし。なあ、菊子！

なに言ってるのよ、そんなことないわよ。

いや、俺には解る、あの踊りを見れば全部解る。なあ、にいさん、演技はその役者の気分や骨品が全部滲み出てくるもんなんだぜ。こいつが何を考えてるかなんて全部解っちまうもんさ。ましてや男と女、できちまっちゃ芸に甘えがでてしまう。芸が濁ってしまう。俺たちゃ、旅芸人で人間国宝なんて大それたもんじゃねえ。芸に媚も外連も下品もあってかまわねぇ。うけりゃいいんだ。だが濁っちゃいけない。あんた達は、初々しさと未だ出来ちまってない男と女の綺麗なところがでてた。それがお客様に伝わったんだ。そいつを汚しちゃいけないよ。わかったかい。

なにかを言い当てられたようで、ただ黙って聞くしかなかった。

翌々日が移動日だった。座長ともども座員全員がホテルの支配人に挨拶をし、車に分乗して出発した。私はトラックの助手席に乗ろうとすると、座長が菊蝶さんはこっちだ、と私を座長の車に乗るように言った。菊子は芸名菊華、それで私は菊蝶になった。菊蝶さんはうちの客分だから、そういって座長は私を同乗させた。ちょっと古い外車だった。

　座長が車を運転しながら、
　菊蝶さん、あんたも若いのに人が悪い。
と話し出した。
　えっ？
意外だったので聞き返すと、信号で車は止まり、その隙に座長は胸の前で両手の平をひらひらと動かし、
　あんた、名取りだってぇじゃあないか。
と言った。すこし言いよどんだが、
　はい。
と答えた。
　マネージャーさんに聞いたよ。どおりであああも舞台度胸よく菊子と踊れたんだ。たとえ当振りと言ったって、ああは行かない。それに品が良すぎる。所作と言い、腰の据わりようといい、菊子が負けてた。とんだ恥をかいちまった。
　申し訳ありません。母が日本舞踊の師匠をしておりました。それを見よう見まねで子供の時から、遊びのように踊っておりましてして、つい母も私を早くから発表会なんかの軽い舞台に引っ張り出し、相舞踏の相手をさせたりしておりましたもんですから。
　いけねぇいけねぇ、ほんとに恥をかいちまった。
　いえ、とんでもございません。しかし踊りでも芝居でも、その人の人柄、人間が全部出るという座長の言葉は、身にしみました。私の歌が売れないのは、そんなことからかもしれません。
　そのことだ。俺はあんたを当分預からせてもらう事にしたから。プロダクションの社長には俺から断わっといた。
　マネージャから聞いております。どうせそんなに売れてませんから。
　おっと、自分からそんなに卑下するこたあない。あんたを見つけてきたのは菊子だよ。レコード店の前で歌ってたろう。それで、座長、こんな人がいますって、あいつが俺に言ったんだ。それで俺も見に行って決めたんだ。だけど菊子を見ると、あいつが女の子の顔から、娘の顔に変ってやがった。あぶねえかなぁとは思ったんだが、背に腹は変えられねぇ、世話役さんに頼んで来てもらうことにしたんだ。しかし、若けえ股旅者とか若衆
.にするかと思ったら、菊子はあんたを女形にしちまいやがった。びっくりしたねぇ。だいじょうぶか、って思ってたら稽古でちゃあんと女形の格好がつくじゃあねえか。こ

いつは拾い物だと、俺りゃあ手を合わせたねえ。まあ、よろしく頼むよ。
　そういって、座長は頭を下げた。
　俺りゃ、もともと踊りは苦手なんだよ。ここだけの話だが。
そう言い足して座長は笑った。
　しばらく沈黙が続いた。そして、
　こいつは言おうかどうしようか、迷ったんだが・・・、
と座長が話し出した。
　中年の女の客が、あんたに抱きついたろう。
　はい。
　あれねぇ、あれはあんたが若衆姿だったら、いくら中年だって、ああも簡単に抱きつきゃしないよ。女の姿だから平気で抱きつけるのさ。女同士みたいな錯覚でね。菊子もそうだったんじゃないかなぁ。あんたは男だけど、女同士だってことにして、それであんな風に身を預ける仕草が出来たんじゃないかなぁ。
座長が何を言ってるのか、私には解っていた。稽古では踊りの最後は指先を握り合い、見詰め合って回りながら終わるはずだった。それが、指先を握って一回りすると、菊子が体を回して背を向け、手で胸を抱くように前で重ねて自分の体を私に預けてきた。私は踊りの仕草でとっさに体をそらし、菊子を胸で支えて両袖を蝶の羽のように一度羽ばたかせ、袖を重ねて菊子を包んだ。私はそれをアドリブだと思っていた。
　あぶねぇんだよな、頼むよ。あんたは客分なんだから。
・・・・、あいつは俺が外に作った子なんだ。
そういって、あとは押し黙ってしまった。そして不意に、
　まあ、、またそんな話をすることもあるかも、知れねぇな。
そういって、座長は車のスピードを上げた。
　菊華菊蝶は評判をとった。ポスターも、始めは座長の後ろで二人並んで映っていたが、次第に二人が大写しになり、座長と並ぶようにになった。それは女の姿をよそおった男に恋焦がれて身をゆだねようとする妖しさが、見る人に交錯する思いを抱かせたからだった。それゆえ、座長は私を芝居の方には出さなかった。芝居で何かの役を演じて、そのイメージを舞踊ショーに引きずらせてはいけないと思ったからだ。座長は今よりも更に豪華できらびやかな衣装を作らせて、私に着せた。しかしそれは、決して女は着ないだろうと思われるデザインだった。それが演出だと座長はいって見せた。
　女姿だけど実は男、それも女姿をしている男とはっきり解る、それがいいんだ。
闇の中でその衣装を着た私にスポットライトを当て、その効果を確かめながら座長が言った。

　　くるっと回ってみな。
私は藤娘の仕草で両袖を手の巻き。身を反らせて回って見せた。
　　いい女だねぇ。
座長が苦笑いしながら、菊子を見た。
　　おまえじゃ、ああは色気が出ない。
菊子は私を凝視したまま、何も言わなかった。
　　女形の色気だねぇ。
　　いいですね。
回りの座員も声を上げて言った。妖しい世界が現出された。菊子の化粧も更に妖しさを増した。
　　私達の踊る内容を決めるのは、座長と菊子だった。私はひたすらそれに付いていった。女の情念を歌い上げる演歌、戦前の歌謡曲、悲恋ものが中心で約１時間の長丁場のショーになった。時に早変りも入れた。そして踊りの合間に掛け声がかかった。
　　きくか！きくちょう！
それは座員が客席に混じってかける掛け声だった。これも、さくら、ではなく、ショーを盛り上げるための演出だ。つられて、
　　きっかちゃーん　　きくちょーさーん
と、女の客の声もかかる。舞台の前に花が飛ぶ。黒子が出て、タイミングよくそれを回収する。客席は何も飾らない、剥き出しで生の感情が溢れた。
　　座長、私は怖い。
私は座長にそのことを訊ねてみた。
　　そうだよ、俺達大衆演劇の舞台は、取り繕った教養とかお上品さで見てくれるようなもんじゃないんだ。みんな泣かせてもらいたい、笑い転げたい、妖しさに酔わせてもらいたいってそう思ってくるんだ。そいつをちょっとでも裏切ったら、すぐそっぽ向かれちまう。だから媚びて妖しくて、ケレン、バテレンでまよわせるんだ。
　　えっ、バテレンて何ですか。
　　言葉のあやだよ。あや。
そういって座長は笑った。
私の、漆黒の地に金糸銀糸の蝶の模様、白襟、緋の裾模様のひるがえりは、私の朱の口元をはえさせた。菊華の控えめの化粧と目姿が、紅色の袖の華やかさを際立たせた。
　　そんな舞台を夢中で続けていたとき、どこかのテレビが私達を取り上げた。そして私のプロダクションの社長が訪ねてきた。

座長、お約束の２年です。
社長が座長に切り出した。
ありゃ、あんたの仕掛けかい。
社長は黙って笑っていた。
いい仕掛け時だったなあ、今が一番いい時だ。それに、約束だから、かえさねえともいえないし。
そうですねぇ、それにご子息さんのお帰りもありますから。
社長の言葉に、菊子が反応した。顔に怯えが走った。
そうなんだよ、菊蝶さん、息子は本当の芝居をやるんだって言い出してね、劇団の研究生でやってたんだが、あんまりパッとしなかったのか、親父の後を継ぐって、今度かえってくるんだ。
あにさんが・・・
菊子が言った。本妻の子を、にいさんではなく、あにさんと呼んだ。
俺りゃ、覚悟はしてたんだよ。

、、

座長はそういうと座りなおし、
　菊蝶さん、いや佐川直人さん、菊子を連れていってくれないか。
と言い出した。
　菊子は以前言ったとおり、俺が外に作った子だ。ところが母親は菊子が３歳のとき亡くなった。それでやむなく俺は女房に頭を下げて、菊子を育ててもらった。女房は菊子に、自分を師匠と呼ばせ、俺は座長と呼ばせた。俺の長男はあにさんだ。だが、このあにさんが菊子をいじめ抜いた。だがそれを俺はかばってやれなかった。女房の手前もあるし、息子も可愛かったからだ。それもあったんだろう、息子は本当の芝居をするんだってぇ東京の劇団へいっちまった。こんなのは演劇じゃない、芝居じゃないってね。その後女房がいけなくなって、誰かいないかと捜してたときに、佐川さんに出会ったてぇ訳だ。
座長はそういうと、手をつき、、
　菊子を連れて行ってくれ。
と頭を下げた。
　だけど座長、座長の世話は誰がするんです。
菊子が言った。
　そんなこたぁ、なんとでもなる。こいつには俺が持ってるもんは全部おしえてある。躾も作法も芸も、みいんな教えた。親は子に何もかも与えて、それで満足なんだ。菊子、俺のものは全部持って行け。俺を踏み台にすりゃいいんだ。子はそうして離れていくもんだ。後は佐川さんに頼むだけだ。
　菊子さんを連れてっていいんですか。
私がそういうと、
　頼む。
座長は答え、もう一度頭を下げた。

　それからの日々はめまぐるしかった。退団記念公演、テレボデビュー、そして中央の劇場での歌手活動、それらをこなすだけでぼろぼろになった。私の武器は座長が持たせてくれた舞台衣装だった。
　佐川さん、綺麗ですね。ほれぼれします。
ワイドショーの司会者がわざとらしく言った。
　さてこの佐川直人さんですが、歌手活動をされていたとき、大衆演劇の座長に見出

され、女形として舞台を務めるようになりました。それが大評判になり、今日、また歌手に復帰されましたが、ここでは佐川直人さんではなく、そのときの菊蝶さんに戻っていただき、相方であり奥様でもある菊華さんとその舞台での踊りをご披露していただきましょう。
用意して構えていると、イントロが流れる。菊華が踊りだす。私の歌手復帰がはじまった。そして私のこれからの歌手活動がどうなるかは、これで決まった。それから数年、私はおぼえておくことも出来ないほど忙しかった。言われるままステージに立ち、歌い、菊華と舞って、また車、電車、飛行機を乗り継ぎ移動して、春も秋も知らなかった。曲も、レトロな内容のものばかりで、踊りがメインになっていった。そして、菊子に子供が出来、女の子が産まれた。私は1人になったが、子供の事など振り返れなかった。

菊子が復帰してきたとき、テレビですこしドッキリのような内容の番組に出さされた。歌手復帰の契機になった曲を先ず私が歌い、いつものようにメロディだけになると、二人で踊りだした。何時もこの手順を繰り返していたが、そのメロディに突然元歌の、大衆演劇では大御所といっていい人の歌が入った。さあーと背中を汗が流れた。菊華の顔も引きつった。懸命に建て直し、体が覚えた振りを空白な心でなぞった。私達の向うにもう一つスポットライトがあたり、大御所が歌っていた。

踊り終わると顔が上げられなかった。大きな拍手が聞こえた。

いやぁ凄い。菊蝶さん、凄い色気だねぇ、うちの欲しいよ。
大御所が言った。私達は彼の前で冷や汗をかき、頭を下げるのみだった。

番組の後、ご挨拶が遅れまして、といいかけた私に、

なに、いいんだ。売れりゃいいんだ。あんた達、この曲、好きに使ってくれていい。しかしなあ、売れてるときはいいが、俺たちぁ、いつまで経ってもきわもの、げてもの、外道扱いだから苦労だよ。芸もない連中が、妬み心で脚を引っ張る。気をつけなよ。

ところであんた達、菊子ちゃんのお父さんが悪いって知ってたかい。体悪くして、劇団離れて施設にいるらしいぜ。
知らなかった。こちらが忙しかったこともあったが、折り合いの悪い長男にはばかられ、電話もかけられなかったというのが本当だった。孫が出来たか、そうかい、そういって大層なお祝いが義父の座長から届きはした。しかし会いに来いとも孫を見たいとも言ってこなかった。

一座もあんた達が抜けた後、硬い芝居でやり始めたんだが、これが躓きのもとだった。副座長の方針らしかったが、それから傾きだして、あんまり芳しくなくなったよ

うだ。そこへ座長の病気で、旅から旅は無理だからと、座長から言い出して、今じゃ一人、施設暮らしらしいぜ。
そういうと、
　俺ももう還暦だし、そっちは対の揚羽でこっちは一人、はなっから勝負はついてたようなもんだ。知ってるかい、蝶は一頭二頭って数えるんだぜ、二頭なんてえのじゃ色気が失せるが、対のあげはでお稼ぎよ。
と言い残していってしまった。
　ところが、そのころから私達の人気は翳りが見え始めた。飽きられちまうんだぜ、と座長がいってた、その通りだった。しかし懸命に立て直そうと頑張っていた時、私達は座長のいる施設の近くに公演に行った。公演の終わった翌日を私達は休みにしてもらっていた。朝施設に電話し、座長がいることを確かめ、電話に出てもらった。
　もしもし、ざちょう。
　おお、菊子か。今はもう回りに誰もはばかる人はいないから、お父さんと呼んでくれていいんだ。
それを聞いて、菊子は声を上げて泣いた。
　私達が会いに行くというと、座長は衣装を持ってきて踊ってくれないか、と頼んできた。ここの人にも見せてやりたいし、俺も見たい、と言った。
　施設の舞台は娯楽の為の物だったから窮屈だった。しかし暗幕を引いてもらい、マネージャーに一基だけのライトを頼んで何曲か踊った。すると、重くよどんでいた客席の老人達から割れんばかりの拍手が起こった。
　きっか　ちゃーん　　きっちょう　さあーん
と、声まで飛んだ。車椅子の座長も泣いていた。
　帰る時、老人達から、昔見てたのよ、今も綺麗ね、菊華ちゃん、可愛いわよ、といちどきに声が掛かった。
　ありがとうございます。
と手を振り、車椅子の座長に、また来ます、と頭を下げた。
　踊りの前の面会時間で、座長が、直人さん、菊子に子供を授けてくれて有難う、といわれた。
　菊子はさみしい育ち方をしただけに、本当の家族が欲しかったんだ。今菊子が幸せなのは、顔みりゃ解る。俺達といた時にゃ、こんな和らいだ顔付きゃしてなかった。踊るともあんたのそばで、安心しきってる。有難う。良かった。
　そういって、菊子が手渡した孫の写真を手に持ち、ただ有難う、良かったをくりか

えした。
　お父さん、また来る。
菊子もそう呼べることが堪らなく嬉しそうだった。
　帰る道筋で、
　これからは、他の施設にも慰問によるようにしようか。
というと、菊子もうなずいた。だが、これがだんだん売れなくなってきていた私達に、新しい舞台を作ってくれることになった。
　面談の際、座長は私達に、
　何時までもおんなじことをやってちゃ、飽きられちまうんだ。だがね、大衆演劇にも、繰り返しやる永遠のテーマってえのがある。言ってみれば、湯島の白梅、それから瞼の母、一本刀土俵入り、てとこか。悲恋と母子、恩をかえす、この三つだ。間違っても義経千本桜なんかはやっちゃいけない。忠義てのは、泣かせられないからなぁ。
と、誰言う事もなく話し始めた。
　お客様は神様です、って言った歌手のことを世のなかぁ、茶化すように言うが、じかに客に触れてないもんには、その怖さや優しさがわからねぇから馬鹿にするんだ。客は怖いけど優しいよぉ。あんた達も一本立ちしなきゃ、なあ菊華。
座長は菊子の方を向いてそういった。座長には私達の翳りが見えていたようだ。
　帰り道、施設慰問の話をしながら、そこでの出し物を考えていた。そうだ、芝居をしよう、俺達は大衆劇団出身の、きわもの、げてものなんだ。私は今までどこかに日本舞踊の名取りという意識が抜けていなかった。座長には芝居は出させてもらえなかったが、菊子は全部知ってる。座長の口立てで芝居の内容や演出が決まる大衆演劇を、ずうっとやってきたのだから、そう思った。二人だけで出来る芝居をしよう、二人芝居だ。
　菊華、菊蝶、若い二人は私達劇団を離れ、新しい高みへと登ってまいります。どうか、この二人を今まで以上に暖かい目で見守っていただきますよう、隅から隅までずず、ずいっとおん願いあげたてまつりまーす。
私達の退団公演での座長の口上が、私の中で鳴り響いた。
　なに、やろうか。
　そうねぇ、なにがいいかしら、っていうより、なにができるかしら。二人だけで、でしょう？
　二人いりゃ充分だ、はじめっから終わりまでやるんじゃなくて、名場面だけ、舞踊劇のようにやるのさ、お前と俺とで。
　そうね、私一座でやってた演目、全部解ってるから。

えっ、と私は菊子を見た。そうだった、菊子は二歳から、旅の空で芝居を見、演じてきたのだから当然だとわかった。菊子が口立てで一幕の芝居を一人で演じるのを、私は聞いていた。
宝の山が、私には今までみえてなかった。

この娑婆にゃ辛いこと、悲しいことがたくさんある。だが、忘れるこった。忘れて日が暮れりゃあ明日になる。ああ、明日も天気か。
五十両はなくなったけど、おいら、お星様になったようなきぶんだぜ。

それって、なんて芝居だ？
関の弥太っぺ。座長が若い頃よくやってた芝居なの。
そうかぁ、しかし、台詞が中心で、舞踊劇にはむつかしいかなあ。
そうね、・・・。

菊子は他にも色々演じて見せてくれた。だが、突然ズンタカズンタカと言い出したのには呆れるやら馬鹿馬鹿しいやらで、一度にふきだしてしまった。

さあさあ、いらはい、いらはい

本日は新派大悲劇、湯島の白梅、湯島の白梅でござあい

なんだ、それ？

しらないの？ジンタよジンタ。座長が、いやお父さんが、湯島の白梅を演った時の出だしよ。もっとも、まじめにやったわけではないけど。こけたり、台詞を忘れた風にしたり。お客さんは大笑いしてたわ。

それじゃ、舞踊劇にはならいなあ。

・・・、わたし、考えてたことがある。藤十郎の恋、これがいいわ。二人でできる。

それが切っ掛けだった。私達は旅先でも休みでも、舞台に載せられるよう工夫した。

闇に下卑た声があらあらと響く。スポットがあわただしく動く。

さらばこそ前代未聞の密夫狂言じゃ。傾城買にかけて日本無類の藤十郎様を、密夫にしようとする工夫じゃ。

恐ろしい恋じゃ。命をなげての恋じゃ。

まかり間違えれば、粟田口で磔にかからねばならぬ、恐ろしい命がけの恋じゃ。

一度暗転。藤十郎の文を読む姿が浮かぶ。

独り御身様の不覚のみにてはこれなく、京歌舞伎の名折れにもなること、ゆめゆめご油断なきようご工夫専一に願いあげ候。

離れの座敷にお梶がはいってくる。

あれ、藤様で御座りましたか。いかい粗相をいたしました。御免下さりませ。（直ぐ去ろうとする。ふと、気が附いたるごとく）ほんとに女子供の気の附かぬ。このように冷える所で、そうして御座っては、御風邪など召すとわるい、どれ、私が夜の具をかけて進ぜましょう。

おおこれは、御内儀でありましたか。いかい御造作じゃのう。

（お梶は、藤十郎の不思議な緊張に、少しも気附かぬように、羽二重の夜具を藤十郎の背後からふうわりと著せる）

さあ、お休みなさりませ。彼方へ行ったら、女どもに水なと運ばせましょうわいな。（何気なく去ろうとする）

（藤十郎の眸が段々光って来る。お梶の去るのを、じっと見ていたが、急に思い附いたように後から呼びかける）お梶どの。お梶どの。ちと待たせられい。

（一寸駭いたが、併し無邪気に）何ぞ御用があってか。
（と座る）
（夜具を後へ押しやりながら）ちと、御意を得たいことがある程に、もう少し近く来てたもらぬか。
（少し不安を感じたるごとく、もじもじし、余り近よらない。やはり無邪気に）改まって何の用ぞいのう。おほほほほほ。
（低いけれども、力強い声で）ちと、そなたに聞いて貰いたい仔細があるのじゃ。もう少し、近う進んでたもれ。
藤様としたことが、又真面目な顔をして何ぞ、てんごうでも云うのじゃろう。（いざり寄りながら）こう進んだが、何の用ぞいのう。
（全く真面目になって）お梶どの、今日は藤十郎の懺悔を聴いて下されませぬか。この藤十郎は二十年来、そなたに隠していたことがあるのじゃ。それを今日は是非にも聴いて貰いたいのじゃ、思い出せば古いことじゃ、そなたが十六で、われらが二十の歳の秋じゃったが、祇園祭の折に、河原の掛小屋で、二人一緒に連舞を舞うたことがあるのを、よもや忘れはしやるまいなあ。（じっとお梶の顔を見詰める）

（昔を想うごとく、やや恍然として）ほんにあの折はのう。

われらがそなたを見たのは、あの時が初めてじゃ。宮川町の唄女のお梶どのと云えば、いかに美しい若女形でも、足元にも及ぶまいと、兼々人々の噂には聞いていたが、始めて見れば聞きしに勝るそなたの美しさじゃ。器量自慢であったこの藤十郎さえ、そなたと連れて舞うのは、身が退ける程に、思うたのじゃ・・・。（じっと、さし俯く） 顔を火のごとく赤くしながら、さし俯いて言葉なし）

（必死に緊張しながら）その時からじゃ、そなたを、世にも希なる美しい人じゃと思い染めたのは。

（さし俯きながら、愈々うなだれて、身体をかすかに、わななかせる）・・・。

（恋をする男とは、どうしても受取れぬ程の澄んだ冷たい目附で、顔さえもたげぬ女を、刺し通す程に鋭く見詰めながら、声だけには、烈しい熱情に顫えているような響きを持たせて）そなたを見初めた当座は、折があらば云い寄ろうと、始終念じてはいたものの、若衆方の身は、親方の掟が厳しゅうてなあ。寸時も己が心には、委せぬ身体じゃ。ただ心だけは、焼くように思い焦がれても、所詮は機を待つより外はないと、思い諦めている内に、二十の声を聞かずに、そなたはこの家の主人、清兵衛どのの思われ人となってしまわれた。その折われらが無念は、今思い出しても、この胸が張り裂くるように、苦しゅうおじゃるわ。（こう云いながら、藤十郎は座にも堪えぬげに身悶えをして見せる。が、彼の二つの眸だけは爛々たる冷たい光を放って、女の息づかいから容子を恐ろしきまでに、見詰めている）

（やや落着いたごとく、顔を半ば上げる。一旦、蒼ざめ切ってしまった顔が、反動的に段々薄赤くなっている。二つの眸は火のごとく凄じい）・・・。

（言葉だけは熱情に顫えて）人妻になったそなたを、恋い慕うのは、人間の道ではないと心で強う制統しても、止まらぬは凡夫の思いじゃ。そなたの噂をきくに附け、面影を見るにつけ、二十年のその間、そなたのことを、忘れた日はただ一日もおじゃらぬのじゃ。（彼は舞台上の演技にも、打ち勝つ程の巧みな所作を見せながら、しかも人妻をかき口説く恐怖と不安を交えながら、小鳥のごとく竦んでいる女の方に詰めよせる）が、この藤十郎も、たとい色好みと云わるるとも、人妻に恋しかけるような非道なことはなすまじいと、明暮燃えさかる心を、じっと抑えて来たのじゃが、われらも今年四十五じゃ。人間の定命はもう近い。これ程の恋を・・・二十年来忍びに忍んだこれ程の

恋を、この世で一言も打ち開けいで、何時の世誰にか語るべきと、思うに附けても、物狂おしゅうなるまでに、心が乱れ申してかくの有様じゃ。のう、お梶どの、藤十郎をあわれと思召さば、たった一言情ある言葉を。なあ！　お梶どの。（狂うごとく身悶えしながら、女の近くへ身をすり寄せる。が、瞳だけは刃のように澄み切っている）

わ・・・っ。（と云ったまま泣き伏してしまう）

（泣き伏したお梶を、じっと見詰めている。その唇のあたりは、冷たい表情が浮かんでいる。が、それにも拘らず、声と動作とは、恋に狂うた男に適わしい熱情を持っている）のうお梶どの。そなたは、藤十郎の嘘偽りのない本心を、聴かれて、藤十郎の恋を、あわれと思わぬか。二十年来、忍びに忍んで来た恋を、あわれとは思さぬか。さりとは、強いお人じゃのう。

（すすり泣くのみにて答えず）・・・。

（二人ともおし黙ったままで、暫くは時刻が移る。灯を慕って来た千鳥の、銀の鋏を使うような声が、手に取るように聞えて来る）

（自嘲するがごとく、淋しく笑って）これは、いかい粗相を申しました。が、この藤十郎の切ない恋を情なくなさるとは、さても気強いお人じゃのう。舞台の上の色事では、日本無双の藤十郎も、そなたにかかっては、たわいものう振られ申したわ。ははははははは。

（ふと顔を上げる。必死な顔色になる。低い消え入るような声で）それでは藤様、今仰しゃったことは皆本心かいな。

（さすがに必死な蒼白な面をしながら）何の、てんごうを云うてなるものか。人妻に言寄るからは命を投げ出しての恋じゃ。（浮腰になっている。彼の膝が、微かに顫える）

（必死の覚悟を定めたらしいお梶は、火のような瞳で、男の顔を一目見ると、いきなり傍の絹行燈の灯を、フッと吹き消してしまう。闇の裡に恐ろしい躊躇と沈黙が、二人の間にある。お梶は身体を、わなわな震わせながら、男の近づくのを待っている。藤十郎の眼が上ずってしまって、足がかすかに顫える。ようやく立ち上るとお梶の方へ歩みよる。お梶必死になるが、藤十郎は、その傍をスルリと通りぬけて、手探りに廊下へ出る）

（男の去らんとするに、気が附いて）藤様！　藤様！（と低く呼びながら、追い縋ろうとする）

（藤十郎、お梶の追うのに気附いて、背後の障子を閉める。お梶障子に縋り附いたまま身を悶えつつ泣き崩れる。藤十郎やや狼狽しながら、獣のごとく早足に逃げ去る。お梶の泣く声に交じるように千鳥の声が聞える）

（菊池寛　藤十郎の恋　青空文庫より引用　作者注）

菊子と二人、読みあわせをしながら稽古し続けた。冒頭の芝居は藤十郎の偽りの恋の仕掛けを台詞で演じ、原作にはないお梶の思いを菊華が舞った。しかし、舞えば舞うほど白々しく思えて投げ出してしまいそうになった。そして私が男姿になることも冒険だった。二人に不安がつのり、重苦しい不毛の日々が続いた。二人の間の会話も、殆どなくなった。

　オフになり、すこしまとまった休みが取れたので、私達は実家に帰った。いま母は直子を育てながら、踊りの発表会に時折出るだけになっていた。

　劇団を離れた当時、私は狂想曲のような日々を送って実家には帰れなかった。だが、元々私は母の跡を継ぐのが嫌で、歌手になるとこの家を出た。しかし、どうしても帰らないわけには行かなくなった。二年ののち、菊子の悪阻がひどく、中度の妊娠中毒症といわれ、早期流産もありうると医師に療養を勧められたからだ。頼るところなどなかった。私は母に、どんなに言われようと構わないと意を決していた。

　門の格子戸を開けると、三味の音が稽古場から聞こえてきた。私達は裏口に回り、戸を開けて入った。すると、

　まあ、若先生、お帰りなさい。どうしたんですか、こんなところから入ってきて。

　と、お茶の用意をしていたのか、古参の弟子が私達にそういった。

　私達はそっと居間に通り、母を待った。昼が過ぎ、午後の稽古が終わっても母は来なかった。ただ古参の弟子が、

　お昼をどうぞ。

と食事を出してはくれた。それが母の指図だと、それで解った。

　夕暮れ時、廊下に激しい気迫が走って、母が入ってきた。

　直人、よく帰ってこれたわねぇ。

これが第一声だった。

　この人が菊華さん？どこの馬の骨ともわからない人ね。大衆劇団の座長と、愛人の間に出来た子ってことね。帰るなら、まずあなただけで帰ってくるのが筋でしょ。そして、家を嫌って出て行ったことへの詫びからしなさい。こんな人、顔も見たくない。

母は激しく吐き捨てた。私達は座布団を外し、ただひたすら平伏していた。

　歌手になるって飛び出したのに、なに？歌手じゃ一本立ちできなくて、大衆演劇から、色物芸人に成り下がって、結局あなたの嫌った日本舞踊の真似事、それも女形なんてものに身をやつして、芸に頼って生きてるんじゃない。恥を知りなさい。第一なによ、あの踊りは。どうしてあんなに芸を崩したの。あんな踊りをして回るぐらいなら、かえってなんか来ないで。

母の叱責は激しさを増した。

　母さん、頼みます、菊子に無事子供を産ませて。

更に何か言おうとしていた母の言葉が一瞬とまった。

　妊娠中毒症で、子供が駄目になりそうなんだ。母さん頼む。

母が座敷にぺたんと座り込んだ。
　で、何ヶ月なの。
　四ヶ月になろうとしてます。
菊子が答えた。
　旅の空じゃ、体をいたわってやれないんだ。子供を殺したくない、たのむ。
　あんたのお母さんは？
母が菊子に訊いた。
　実の母は私が二才のとき、死にました。育ての母のお師匠さんも、つい二年ほど前まくなりました。
　そう、それじゃあしょうがないわね。そちらに女手がないのなら、赤ちゃんの事はこちらで見るしかないわね。
母が急に折れた。
　で、どうするの？
　一応妊婦健診をしてもらってた先生からの紹介状は貰っていて、いい産婦人科で診てもらって、先生の指示をあおげといわれてるんだ。
　そう。
　おねがいします、おかあさん。
菊子がそういうと、
　あなたにおかあさんって言われる覚えはない。
と母にぴしゃりといわれた。
　結婚の挨拶もなかったし、式も挙げてないのに、なんでそう呼ばれなければならないの。第一、あなた達の結婚を認めた積りはありません。・・・、でもまあ、預かりましょ、人助けの積りでね。それでいいわね。
そういって、母は出て行った。翌日から私は独りでまた各地を飛び回る日々が続いた。
　私が菊子を母の元に預けた日から、菊子は内弟子の部屋に置かれた。もう内弟子などはいないが、今母の世話をしている古参の久江さんは、かつての内弟子の一人だった。菊子は、この久江さんに付き添われ、病院にいった。そして一週間の入院が必要といわれ、一人入院の用意をして病院にいった。母からは、久江さんが時折来てそれなりの世話をしてくれた。旅と仕事の無理が原因でしょう、ここで無理をしちゃいけません、安静にしてれば大丈夫でしょうといわれていた。入院の初日と二日目は何も知らず眠ってしまっていた。はっと気がつき、目を開けると、久江さんが心配そうに覗き込んでたことがあった。
　若奥様、大丈夫ですか。

そう呼びかけられ、夢の中で混乱した。頬を冷たいタオルで拭かれ、また寝入った。
　体も次第に楽になり、起きて歩けるようになると、退院してよいと許可が出た。しかし、悪阻の苦しさは続いていた。一週間で、なんとか退院となり、直人の実家に帰った。
　久江さんと玄関を入り、久江さんが
　先生、若奥様がお帰りになりました。
と声をかけた。少しの間があった。そして母が出てきて、
　久江さん、若奥様とは誰の事。
と、勝手をしまして、と言いかけた菊子を見ることなく言った。
　それはっ。
答えに詰まる久江さんに、
　この人の事だったら、あなたの心得違いよ。この人は、家の預かり人、いわば居候。それに、私の後見さえ勤まる久江さんともあろう人が、芸の上でも年の上でもずっと下の人に、そんなにへりくだる必要はありません。この人は、内弟子部屋に住んでる人です。あなたが内弟子時代、わたしはあなたをなんて呼んでいました？菊子、か、菊子さん、ぐらいでいいんです。
そういって、奥に引っ込んでしまった。
　・・・、すみません。
菊子がそういうと、久江さんは笑いながら首を横に振り、荷物を持って菊子と部屋へ行った。
　菊子は母の部屋へ行き、退院のお礼と、あらためてお世話になりますとの挨拶をした。母は振り返りもせず、
　妊娠は特別なことではありません。女は皆、それを乗り越えて子供を産むのです。体をいたわるのも大事かもしれませんが、動かすこともお産の準備です。明日から久江さんに付いて家事をしてください。
と言われた。菊子はそれをきつい言い方とは思わなかった。むしろどこかに労わりの気持ちを感じた。
　翌朝から菊子は劇団にいたときのように朝を起き、表通り、玄関先、中庭の表周りを掃除し、台所で久江さんを待って朝食の手伝いをした。
　先生は、朝はパンなの。紅茶に食パン厚切り半分、ハムエッグかベーコンエッグ、サラダを少々、それに果物を二切れ、それとジャムは多め。それが毎日。・・・、ほんとは、直人先生の趣味だったんだけど、それをいまでも続けてらしゃっるの。

菊子はそれが何となく解る気がした。

菊子は台所の食卓で一人食べた。内弟子はそうしてたと久江さんから聞いたからだ。

食事が終わると、家内の掃除を始める。掃除機は使わず、箒とはたき、雑巾での掃除だった。特に稽古場の舞台は茶殻を撒き、手箒で手早く掃いて集め、硬く絞った真新しいタオルで拭いた。通りかかった母がそれをみて、何も言わず立ち去った。

お昼が終わり、三時のおやつに菊子も呼ばれた。スコーンにたっぷりのジャム、砂糖をいれない濃い目の紅茶だった。それは菊子も知らなかった。甘すぎるジャムが口に残った。

めまぐるしいほどの毎日と、それに慣れることで精一杯だった菊子は悪阻の辛さを忘れていたが、毎日の疲れがたまっていった。三週間ほどして、母と久江が大きな踊りの会で一日留守をした。菊子はここでの日課を済ませたあと、ぽっかり開いた一人っきりの時間で、すこし放心したような気持ちになった。菊子は部屋に戻り、細長い包みを稽古場に持ってきた。稽古舞台の前でそれを膝の上でほどき、中棹の三味線を取り出した。それを手布巾でぬぐい、糸を確かめ、糸巻きを締めて調弦する。きりりっと糸が鳴る。象牙の撥をあて、音を確かめる。そして唄いだした。

花も雪も 払へば清き袂かな
ほんに昔のむかしのことよ
わが待つ人も我を待ちけん
鴛鴦の雄鳥にもの思ひ
羽の凍る衾に鳴く音もさぞな
さなきだに心も遠き夜半の鐘
聞くも淋しきひとり寝の
枕に響く霰の音も
もしやといつそせきかねて
落つる涙のつららより
つらき命は惜しからねども
恋しき人は罪深く
思はぬことのかなしさに
捨てた憂き 捨てた憂き世の山葛

母がその時帰っていた。母は菊子を見咎め、叱ろうと声を上げかけ、黙った。菊子の三味線を調弦する姿に、見るものがあったからだ。そして唄われだした地唄、雪に廊下で

座り、聞き入った。そして唄い終わった菊子に、
　　あなた、何者？
と、自分でも思いがけない問いかけをしてしまった。振り返る菊子に、
　　職格者？
と、重ねた。その問いが解らず、見返しているだけの菊子に、
　　お免状持ちの、師範格なの？
更に解らない菊子に、
　　そんな地唄の難曲、雪をそこまで唄えるなんて、そうなんでしょ。
と続けた。
　　いえ、そんな者ではありません。これはお師匠さんに教えてもらった曲なんです。
　　お師匠さんって、育ての親の？
そういいながら、母の目は菊子の抱えた三味線をみていた。紅木金細の棹、花木の胴、象牙の糸巻きと撥。
　　それは？
　　お師匠さんの形見です。
菊子の持っているものの中で唯一誇れるものだった。
　　座長が、これはお前が持ってろと私にくれました。それが一番いい、あいつも喜ぶだろう。常々そういってたからなあ。

　　菊子、お前、お師匠さんを怨んでるか？怨まないでくれよなぁ、怨むなら俺を怨め、みいんな俺の罪だ。おれが仕出かしたことの報いだ。
　　おまえが小さい時、しゃがんで泣いてるお前の前で、手を振り上げたまま泣いているあいつを見た。どうしたと聞くと、あいつは急に俺の方に振り返り、
　　どうしたらいいの？　あなたは私に何をさせたいの？私、始めはこの子が憎くて憎くてしかたなかっった。でも、こうしてそばに置いて育ててると、可愛さが押さえられないの。可愛くて可愛くてたまらなくなってしまうの。だからこうして手を振り上げてしまうけど、叩いたりなんかできゃあしない。でも、抱きしめたりも出来ない。あなたは私にこの子の何になれというの。
　　そういって俺を叩くんだ。俺りゃ、このときほど悔やんだことはなかった。俺りゃ、あいつにも、おまえの母親にも、それからおまえにも詫びなきゃならねえ。あいつもおなえの母親も、菊子、おまえもなあんも悪くねぇ。わるいのは俺だ、皆んな俺がわるいんだ。

座長はそう話してくれました。そしてその後、お師匠さんが突然笑顔になって、

わたし、この子のお師匠さんになる。菊子、おまえはこれから私を、おばちゃん、て言うんじゃないよ。お師匠さんって呼んでね。あなた、ありがと。こんな可愛い、絶対逃げない弟子をわたしに呉れて。

と、言ったそうです。座長はそれを聞いて、声を上げて泣いたそうでした。

そこまで聞いた母の頬にも涙が流れていた。

そう、じゃあ、あなた、わたしもこれから、お師匠さんって呼んでね、いいわね。そういって母は稽古場を出て行った。菊子は畳に額を押し当てて平伏した。

　直人の母に、座長から電話が入った。菊子がおせわになります、という挨拶だった。たぶんびくびくものだったろうと思われる。

　菊子さん、お父さんからの電話よ。

お互いの挨拶が終わると、お師匠さんが受話器を菊子に渡した。

　有難うございます、お師匠さん。

そういった受け答えが、座長にも聞こえたらしい。

　おい、お姑さんをお師匠さんてよんでるのか。

と座長が聞いた。

　はい、お師匠さんになってくれました。

そういうと、なにか戸惑った沈黙が向うにあった。

　座長の劇団が近くに来ているらしかった。義母が会いに行くと言い出した。こちらは嫁に貰うほうですから、というのが理由だった。

　何時ごろだったらお父さん、ご都合がいいのかしら。

　こちらから言っておけば、午前中なら大丈夫と思います。

　そう。本当なら仲人立てて、結納なんかをお持ちしてご挨拶して、それから色々するもんだと思うんだけど・・・。

　先生。

久江さんが笑って言った。

　そうね、ご挨拶だけでいいわよね。

そういって母も笑った。

　私は踊りしか知らない、世間知らずだから。だから直人もあんなになったのかしら。

　母は座長の都合を聞いて出かけて行った。楽屋口でおとないを入れると、中年の座員と若い人が飛んできた。座長がお待ち申しておりましたと頭を下げる。若い男は吉之介と名乗った。

奥の部屋で、座長が座布団を外して、かしこまって待っていた。

　申し訳ございません、旅の身空ゆえこんなところで、お初にお目にかかります。高遠吉也てございます。

　中川直人の母、中川美智です。

そんな挨拶から始まった。

高遠吉也って芸名ですの？

いえ、呼び方は　きちや、ですが、字は吉哉でございます。　　ご高名は常々お伺い致しております。申し訳ございません。

そういって、ひれ伏してしまった。

あら、わたし、水戸のご老公さまじゃありませんわ。そんなに恐縮されても・・・。

母の言葉に、回りがふっとなごんだ。

水戸の、とは恐れ入りました。

後は笑いだった。少し気が楽になったのか、座長が自分を取り戻したように話し出した。

そちら様のことは何も知らず、私らみたいなものの常と一緒にして、ついついご子息に菊子を押し付けてしまい、申し訳ございませんでした。私らなんか、昨日くっ付いて明日別れるてなもんで。ところが、ご子息には、この私がほれ込みました。お人柄ですねぇ。

そういうと、思わず座長は母を見た。いきなり逆鱗に触れたかもしれないと気付いたからだ。しかし母は、

私、喜んでますの。菊子さんて、いい子ですよね。直人は自分の意志で家を出ました。結婚も自分で決めました。ところが、あんないい子を連れてきてくれて、わたし、喜んでおります。お師匠さんのお仕込みがよかったんですね。感心しております。いま私、不精をして踊るときの着物を菊子さんに着せてもらってますの。すると最初の一、二回きついゆるいと申しました。それからは、それがないんです。踊っても着崩れしないし、楽なんです。帯もころこれに結んでと、わざとにいろいろ言うんですけど、さらららっと結んでくれます。それも踊りの年齢に合わせ、若い年の踊りは少し胸高、落ち着いた踊りにはちゃんとしたところに手早く結んでくれます。それは私の古参の弟子も感心しておりました。

と、笑い、座長は神妙に聞いた。

それから、菊子さんの地唄はどうでしょ。お免状持ちの地唄です、お若いのに。お師匠さんがお教えになったとか。

菊子はそんなことまでお話しましたか。あれは、女房が教えました。菊子が二才のとき、生みの母が死にまして、どうにもならず女房に育てさせちまったんです。

そのいきさつは菊子さんから、聞きました。それで、こんどは私が、菊子さんのお師匠さんになることにしました。

そういうと、座長ははらはらと涙を落とした、

申し訳ございません。そのことをお話しすると、私の恥を全部さらけだしてしまうことになりますが、菊子の出自もご理解いただけると思いますんで。
俯きながら座長は話し始めた。
女房と私は、共に東京の劇団の研究生だったとき知り合いました。その劇団は文学座とかのインテリ劇団じゃなく、女の研究生は珍しかったんです。それが妙に気が合いまして。ですから少しはその劇団の演目について知っていた私に女房が頼ってきまして・・・。
えっ、親父、親父もそんなことがあったんか？
そういったのは吉之助だった。
そうだよ。おまえがこんな田舎芝居はいやだ、俺は本当の芝居のできる役者になるんだって、飛び出したとき、俺が止めなかったのは、昔の俺みたいなことを言ってらぁと思ったからだ。それで、俺には内緒ってことにして、母さんにおまえの仕送りをさせてたんだ。
吉之助にそういうと、顔を母に向け、話を続けた。
ところが女房も元は関西のいいとこのお嬢さんだったらしく、俺とは違って本道の芸を、ちゃあんと身につけておりました。それが地唄ってわけで。こっちは爺さんが、おらっちはオッペケペーからの一座だって、自分で勿体つけた、どさまわりの分際でしたが。
オッペケペーって？
母が訊くと、
いえっ、川上音二郎の・・・。
はい、あれですね。自由民権運動の。
爺さんのこじつけだとは思うんです。まあその時代からの、れっきとした、どさまわりってわけで。
そういって座長はうなじに手を置いた。
ところが、あんまりにも不人気になって、次の看板役者候補まで裏切って飛び出すありさまで、さしもの劇団もついには解散になりました。こちらは帰るところって言えば、親父の一座、女房は家を飛び出した事情から意地でも帰れないってことで、そうは乗り気じゃなかったんですが、看板女優にしてやると強引に騙すようにして引っ張って帰って来て、・・・挙句の果てに苦労させました。
こちらに帰ると、後はただ夢中で、子供が出来るわ、親父にゃ死なれるわ、お袋はもう第一線からは引くと言い出すし、その日その日を切り抜けるのがやっとでした。

それでも何年かすると、親父のときのご贔屓、後から私達のご贔屓になってくれた人なんかも出来てきて、ちょっと安心したとき、私は芸にもう少し厚みをを加えようと、地唄舞を教わることにしました。と言いますのも、女房が地唄を達者にしますんで、それを演目に加えられたらと思ったからです。まあ、とんだ愛妻物語ってわけで。それと、旅先でひょいと入った日本舞踊の発表会で、地唄舞てぇのを見かけまして、これだ、っと思ったもんですから。なかでも、草柳福寿の舞は、絶品でした。でも、これは女の踊りだ、こいつを女形が踊れば、もっと凄みと色気が出る、わたしはそう思いましてね。

ここからは私の恥をさらけださなきゃなりません。何度か教えてもらいに通ってるうちに、福寿と一対一の日が出来まして。福寿が一人、私の前で踊って見せてくれました。そこへ障子越しの夕日が差し込み、一面夕焼け色に染まって燃え上がるよう。そのなかを福寿が舞います。時折私を見詰めて。・・・、私は地唄舞の妖しさ、美しさ、本物の芸に引きこまれました。福寿に魅了されたといってもいいでしょう。そしてつい、ふらっと立ってしまい、・・・・。まあそこんとこはご勘弁ください。福寿は愛人とかじゃないんです。一度こっきり、それからは習いに行くのもやめました。それから三年でした、突然福寿が死んで、菊子が残されている、引取りに来いとなって、何のことだと思いましたが、菊子を見るとまさしく私の子、・・・、もう取り返しが付きません。私は首を括りたい気分で、菊子を抱いて帰ってまいりました。

一座に帰ってくると、菊子が泣きます。高熱を出してました。修羅場なんか、それで吹っ飛んでしまいました。医者に走る、乳を飲まそうとしても吐いてしまう、入院しろと医者に言われ、男の私じゃ埒があきません。それから女房が付きっ切りで看病し、お母さん、こんなになるまで気がつかなかったんですか、ってお医者様に怒られちゃった、って睨まれました。そんなこんなで、なし崩しに菊子は女房が育てることになっちまいました。いえ、女房がなんにも言わなかったわけじゃありません。殺されると思ったこともありました。とうぜんです。私はいつ殺されてもいいと覚悟してました。しかし次第に落ち着いてまいりまして。・・・、そっから先は男のずるさだとおもっております。

しばらくして、あいつが、あの人の墓参りに連れてけって突然言い出しました。

あの人って？

菊子のお母さんよ。わたし、こうして菊子を育ててると、あの人が可愛そうで、なんだか妹みたいな気がしてきて。このままじゃいけないって思うの。だから、一度ちゃあんとお墓参りして、菊子は私がそだてますって言っとかなくっちゃと思うの。

そういいますんで、とうとう福寿の墓に参ることになりました。そこで女房が福寿に、あの子は私が育てます、と祈ってました。

その帰り道、あいつが私に、

私、菊子のお師匠さんになって、地唄を教えて、あなたに嫌がらせをする。このことを忘れないように、ずうっと仕返しをしてやる。

と、宣言しました。それは、半分本気で、半分菊子可愛さからだってことは、充分解りました。

そういって、座長は頭をかいた。

それから先は、皆にわび続ける毎日でした。

菊子が来た最初のうちはこの吉之助も珍しがり、菊子を可愛がったりしてましたが、なんかの折からとてつもなく険悪になりまして、・・・、見ての通り一人息子で甘やかして育てておりましたから、母親を取られたと思ったんでしょう。母さんは、俺は叩くのに菊子は叩かない、って私に言ってきたことがありました。そりゃお前は男だろ、菊子は女だ。

でも後から来たよ。

そうだ、後から来て、何にも知らない。小さくて、なんも出来ない。お前より弱い。だから男は守ってやらなきゃいけないんだ、って言い聞かせたこともありましたが、やっぱり一人息子の甘えん坊で、結局我慢が出来なかったんでしょうね。一人立ちできるようになると、ぷいっと出てしまいました。それが急に帰ってくると言い出しまして、それでこのままじゃいけないってんで、菊蝶さんに頼みいったわけで・・・。

ところが、吉之助が帰ってくると、菊子がいない、どうしてだと問い詰められ、お前と菊子の仲があまりにも悪すぎて、みちゃあいられなかったんだ、間を取り持つ母さんもいなくなったんで、菊蝶さんて人に貰ってもらったというと、ひどく叱られました。俺だって菊子は腹違いといえども妹だ、かわいいとおもってたけど仲直りする切っ掛けがなくて今日まで来ちまった。それで一旦出て行って、次に帰ってきたときが良いきっかけだと思ってた、といわれ、親として恥じ入りました。親の心子知らず、子の心親知らず、親知らずなんか抜いちまえって、こいつに逆に説教されちまいました。

そうなんです、意地っ張りで不器用なもんですから、急に態度を変えられなくて。でも、私がいない間、倒れた母を一生懸命看病してくれた妹に、誰が邪険に出来ましょうか。嫌いだ、出てけ、いなくなれ、っていってたのは子供の時の私の我儘。ほんとは仲良くしたかったんです。でも、・・・、これを言うと親父がつらがりますが、外の子、と回りが陰で言いますのを聞いておりましたもんで、つい分別なく子供心に・・・。

母がいなくなった一座を、二人で支えなくちゃっと思って帰ってみると、菊子はいない。親父に怒ったんです。行かしちゃ駄目だって。
吉之助はそう訴えた。

座長は目を伏せ、膝に置いた両手で肩を突っ張り、

それもこれも私の気の迷い。ところが、こんな男に何も言わずに菊子を産んだ福寿、女房、菊子、それから吉之助、すまねえ、この通りだ。

直人さんやお母さんを、こんなことに巻き込んでしまって申し訳ございません。
そういうと、がばっと頭を下げた。

ー綺麗なまんまで話を聞いておいたら丸く治まる。事情は知れないけれど、それはそれでいいじゃない。つらい修羅場はもう結構。昔のことよー
母はそう思ったらしい。そうでなければ、福寿さんの事が解らない。母にとって、それは異次元のことだった。

どうせ、学もない、金もない、残してやれるもんは何にもない、こんな親です。この世に残すものは、こいつと菊子の子供二人。それを女房は、菊子を懸命に育て、少々ひがんでは育ちましたが吉之助も一人前にしてくれました。俺りゃ、あの世で女房と福寿に詫び続けます。

なあ吉之助、俺は田舎芝居の三流いも役者だ。お前に教える芸もない。なんも残しちゃやれねえが、少しはお客様を喜ばせることは知っている。見習うところがありゃ、取っていけ。菊子はお母さんが、杵屋千登勢としてとことん仕込んだ。それだけ菊子は幸せだったかも知れねえなあ。すまねえ、こんな頼りない父親で。親なんざあ、どうせ先に死ぬんだ。残る物がありゃ、みんな子らのもの。菊子にゃ母さんの三弦、おまえにゃ重荷かもしれねえが、この一座と一握りのご贔屓さん。それで精一杯だ。

母は、高遠吉弥、吉之助、そして杵屋千登勢、草柳福寿の名を聞いて帰った。菊子のおなかの子は女の子とわかっていた。母は菊子だけじゃなく、菊子のおなかの子のお師匠さんにもなろうと心に決めた。

ーふふっ、楽しみ、直人だから直子にして、私が直子のお師匠さんになって、家の芸を伝える、そうしようー
そう思った。竹原遊穐の名を継がせる、直子、頼むわよ。そう思うと、思いついたことがあった。そうだ、扇、それも飛びっきり素敵な舞扇を直子に買って帰ろう。それを生まれくる直子の枕元に置こう。

直人の母、竹原遊穐が帰った後、座長と吉之助は一時に力が抜けた。

貫禄が違う。
座長が小さく言った。

座長、親父、菊蝶さんの事、なんにも知らなかったんかい。
大の字になってた吉之助が、顔だけ上げて訊いた。
知らなかった、菊子が、あの人いい、ってレコード店の前でビールケースに立って歌ってる歌手を指差して言うから、見てみたんだ。まあ、間に合わせにはなるだろうぐらいに思って、世話役さんに仲介を頼んだんだが、・・・、びっくりしたよ、びっくりさせられっぱなしだ。直人さんにもだが、あのお母さん、本筋の芸を身につけたお人は、びしっとしてるねぇ。俺の負けだ、負け。
で、そんなに有名なんか？
そうらしい・・・。それで、その後世話役さんが、直人さんを女形にするなんざあ、目の付け所が違うねえって。あの人の母親ってぇのが、関西じゃ家元の次の踊りのおっ師匠さんで、直人さんも名取だったが、家を継ぐのが嫌さにとびだしっちまって歌手に転向したってことらしい。このことはマネジャーさんから直ぐ後聞いた。ひょうたんからこま、ってな訳だ。
そうか、それに比べりゃ、俺りゃ、こまにも成れないんだ。
吉之助が上を見ながら言った。
すまん、俺は自分の口に入れるものも、お前が欲しがりゃお前の口に入れてきた。でもなあ、自分の持ってないものは子供にも譲れやしない。所詮本物の芸を持たないものは教えるものも持ってないってことだ。
じゃ、あの人は本物って訳か。
そうだ。
あの人は本物で座長は偽者って、どうやって区別するんだ。本物ってなんだ？元は俺達と一緒じゃないか。血だ家柄だってぇなら、歌舞伎役者も明治の頃は芸者や人の妾と一緒になってたじゃないか。それが今頃じゃ人間国宝だなんて、可笑しいや。結局は俺達と一緒な河原乞食の成れの果てじゃないか。親父はあの人に、気圧されたんだ。
座長は黙って聞いていた。そして、
でもなあ、芸は時が洗練させる。まっとうな芸は我流じゃ身につかない。きちんと芸を身に付けた人に付いて修行しなきゃ。俺はお前に汚れた芸しか見せてこなかった。真似事だけで、その場その場を、小器用にごまかしてきただけだ。芸でなんかありゃしねぇ。
貧乏一座でもいいじゃないか。親父、俺は親父の背中を見て、生きるすべを見習ってきたよ。綺麗事じゃなく、泥水啜っても生きてくって術をみてきたよ。
そうか、・・・。もって瞑すべし、か。でもなあ、吉之助、この一座、潰したっていいんだ。おまえのしたいことがあったら、お前のしたいようにやりゃいい。俺がいな

くなったら、若座長の下じゃ嫌だって奴も出てくる。苦労だよ。
そういった座長の体は一段しぼんで見えた。

菊子が休んでいる間、プロダクションは私に懐メロ物を続けて演じさせてきた。婦系図、明治一代女、風流深川唄、十三夜、などだが、元歌があるものはカバー曲として歌い、中間か後半に踊りのパートを入れて、それぞれに踊ってきた。だが、歌と踊りだけでは限界が見えていた。私は時折実家に帰り、今はあまり使われていない稽古場の舞台で、菊子と藤十郎の恋を練習した。お梶に言い寄る藤十郎の所作を、舞踊の形に整えようとするのだが、どうやっても上滑りしてしまう。ときおり見せる藤十郎の、じっとお梶を観察する冷たい目が踊りでは表現できない。それを直子を抱いた母が覗いて、

直人、それって藤十郎でしょ。藤十郎の恋って心理劇よ。踊るんじゃなくて、芝居のまんまにした方がいいんじゃない。踊りにこだわらない方がいいわ。

と言った。えっと振り返ると、

あんた達、藤十郎の恋は芥川の地獄変とおんなじ、芸術至上主義のテーマの物だって知ってた？美や芸のためなら人を犠牲にしてなんの呵責も感じない。これって、男の考えそうないい訳よ。芸術至上主義だなんて大げさな物言いだけど、芸のためなら女房も泣かす、て言うのとちっとも変らないんじゃない。主義だ思想だって考え出さないと、男って生きていけないのよね。男が女房を泣かせていいのなら、美や芸のために女も夫や家族を泣かせてもいいってことになるわよね。

とおしゃべりし出した。だが、そうしている内に母、遊穐はハッとなった。福寿の事が解ったような気がしたからだ。座長のいった通りの状況ならば、福寿は一瞬の間に奇跡のようにおこった一生の美を知ってしまったんだ、と今まで解釈してきた。だが、一瞬は一瞬だ。そんなものにずうっと殉じることなど出来るはずもない。世間体もある、迷いも出る。その後会いにもこない男に怨みも抱くだろう。それでも福寿は菊子を産んだ。そうだ、それは、一瞬の奇跡のためなんかじゃなく、自分のおなかに子供を宿して、女としてずうっと満たされたのだ。満たされた思いを体に抱いて、それが彼女を生かし続けた。そうなった女に、男はもう要らないのだから、遊穐はそう解った。

そうよ、芝居にしなさい。その方がいいわ。

遊穐は、ずしりと重くなった直子を抱いて奥に引っ込んだ。そうよ、この重さなのよ。

母に、芝居にしろと言われて、私は得心した。芸術至上主義かどうか知らないが、この原作には欠けているものがある。心理劇だというのなら、お梶の心内はどうなんだろう。藤十郎はそれを観察していたはずだし、それが目的だったはずだ。だが、藤十郎に取り残された後のお梶を、藤十郎は見ていない。作者もそれを語らない。女を下に見るのが当然の時代の作者だから、思いもそこに至らないのだろう。それを語ろう。そ

う思って、私は菊子と一緒に、母の部屋に行った。
　　お師匠さん
と菊子が声を掛ける。
　　オシサン
と直子が言っている。
　　あの子、私と一緒な言い方してる。私も小さいとき、継母のことをオシサンって呼んでたの。なんでそう呼ぶようになったんだろ。気がついたらそう呼んでて、もう大きいのだから、おししょうさん　と言いなさいって言われて直したから、解らないの。
私は頷きながら、
　　師匠
と声をかけた。みながそう呼んでるのに、母さんはまずいだろうと思ったからだ。
　　はい。
そう答えたわけではない。母は直子に扇を渡して、ハイと言ってただけだった。直子は小さい膝を折り、きちんと正座していた。そして、扇を受け取り、母のするように扇を扱った。扇を回し、ひらひらと波打たせ、手を正面に向けて顔と形を決める。それが遊びだった。いや、遊びでもなく、習い事でも修行でもなく、直子には毎日普通にすることだった。扇を膝の前に置き、手をついて頭を下げる。扇を前に差して膝に手を置き、すっと立てる。その形で足は摺り足、背筋を伸ばし、姿勢を崩してはいけない。足先は内にむけ、自然と膝も内を向く。すこし膝を曲げて、頭は上下してはいけない。膝の前に置いた手は、指先が少し内を向く。そんな基本を、直子は物心つく前からしてきた。
　　師匠、先ほどの事ですが、
そう言い出して、私は藤十郎の恋の演技次第を話した。
　　そうね、面白そう。そのお梶一人の場面は菊子さんひとりでするの？
　　いや、私が途中からライトの下で別に立ち、お梶が、藤十郎さまあ、と言いながら自刃するまで無言であれこれ指図する様子を演技してます。それから、お梶が倒れたら、女形に、女がその気になったらもっと大胆になるもんですから、そのように演技してください、と言い、舞台ねがいまーす、って掛け声を聞いて、さあ始まりだ、って言って舞台に上がるようにして下手にさがります。
　　ぱっと暗転でもいいわね。それから、そのあとなにか趣向があったほうが・・・。
という母の言う事に、私は思いつくことがあった。
　　たぶん、面白く出来るとおもいます。吉之介にいさんに協力して貰いますから。
そういいながら、私には最後の場面が見えていた。

小劇場で初めてこの藤十郎の恋を演じた。

藤十郎の恋
暗闇のラビリンス

すこし青臭いかとは思ったが、この題目とした。それが暗幕の上に白々と浮かぶ。

そして声だけが、右から左からと駆け巡るように響く。これはあらかじめ座長と吉之介兄さんに頼んで、一座で演じてもらい、収録してあった音源を流す。スポットライトが声の波になって駆け巡る。

さればこそ前代未聞の密夫の狂言じゃ。傾城買にかけては日本無類の藤十郎様を、今度はかっきりと気を更えて、密夫にしようとする工夫じゃ。傾城買の恋が春の夜の恋なら、これはきつい暑さの真夏の恋じゃ。身を焦がす程烈しい恋じゃ。

命がけの恋じゃとも。まかり違えば、粟田口で磔にかからねばならぬ恐ろしい命がけの恋じゃ

無音、暗転。

一番太鼓がかすかに鳴り始める。

ときおり太鼓が風音、波音に変り、音も波のように強弱する。これは古参の座員、岩根半次郎おじさんが絶妙に叩いてくれた。彼だけは吉之介兄さんを嫌って劇団を離れることなく、座長と共に後から入ったド素人同然の座員をよく指導してくれていた。そのうえ、特にその太鼓での音響効果は、何も知らない若手を驚かせた。元をただせば歌舞伎で太鼓を修行した人で、若手が請うと嬉しそうに教えた。高遠一座では殆ど無用だったからだ。さらに若手達は、昔のように座員が楽屋でざこねするというのを嫌い、それぞれ個別に就眠するようになっていたのだが、中で、若い小池英子が、面白そうだから半次郎と楽屋で寝ると言い出し、半次郎を困らせた。それでも何ヶ月か経って、皆がそれにあんまり関心を持たなくなった頃、二人が座長の前に座った。そして英子が口を切った。座長、私、岩根英子になる。孫と祖父ほどではないが、父と娘よりは年が離れていた。

一番太鼓が盛大になり、すとんと止む。

舞台左に文を手にした藤十郎。

座長の渋い声が近松の文を読む。

　独り御身様の不覚のみにてはこれなく、京歌舞伎の名折れにもなること、ゆめゆめご油断なきようご工夫専一に願いあげ候。

弱弱しく座り込み、文を懐に入れて横になる。

あれ、藤様で御座りましたか。いかい粗相をいたしました。御免下さりませ。
お梶が登場し、藤十郎に声をかける。
スポットライトが熱いのか、演じる藤十郎の心の高ぶりがあついのか、私には解らなかった。ここで私は、その高ぶる心を抑えながら心を決めてお梶に仕掛けることにした。

ちと、御意を得たいことがある程に、もう少し近く来てたもらぬか。

そなたに聞いて貰いたい仔細があるのじゃ。もう少し、近う進んでたもれ。

そなたが十六で、われらが二十の歳の秋じゃったが、祇園祭の折に、河原の掛小屋で、二人一緒に連舞を舞うたことがあるのを、よもや忘れはしやるまいなあ。

と、押さえに押さえた声音で語りだす。

寸時も己が心には、委せぬ身体じゃ。ただ心だけは、焼くように思い焦がれても、所詮は機を待つより外はないと、思い諦めている内に、二十の声を聞かずに、そなたはこの家の主人、清兵衛どのの思われ人となってしまわれた。

と、にじり寄り、震える手でお梶の手に触れる。菊華の手が、びくっと引っ込む。その手を私の手が追いかけ、上から押さえて握り締める。

手を握ったまま膝立ちになり、冷たい目でお梶を見る。お梶の横を向いた顔が震え、上

気してくるのを冷たく見やる。

　人妻になったそなたを、恋い慕うのは、人間の道ではないと心で強う制統しても、止まらぬは凡夫の思いじゃ。そなたの噂をきくに附け、面影を見るにつけ、二十年のその間、そなたのことを、忘れた日はただ一日もおじゃらぬのじゃ。（彼は舞台上の演技にも、打ち勝つ程の巧みな所作を見せながら、しかも人妻をかき口説く恐怖と不安を交えながら、小鳥のごとく竦んでいる女の方に詰めよせる）が、この藤十郎も、たとい色好みと云わるるとも、人妻に恋しかけるような非道なことはなすまじいと、明暮燃えさかる心を、じっと抑えて来たのじゃが、われらも今年四十五じゃ。人間の定命はもう近い。これ程の恋を・・・二十年来忍びに忍んだこれ程の恋を、この世で一言も打ち開けいで、何時の世誰にか語るべきと、思うに附けても、物狂おしゅうなるまでに、心が乱れ申してかくの有様じゃ。のう、お梶どの、藤十郎をあわれと思召さば、たった一言情ある言葉を。なあ！　お梶どの。

　と、ここで英子の篠笛が一声、鋭く響く。半次郎おじさんのお仕込みがよく、切り裂くように鳴る。いえ、私が半次郎おじさんの寝床に這いこんだんですと、けらけら笑いながら彼女は座長に言った。おじさん、かっこいいもん。半次郎おじは頭を掻くばかりで言葉もない。

　幾つ離れてるんだい。

　私が２８で、おじさんが５２だから・・・。

　もういい。

座長は呆れて放り出すように言った。

　で、いいんだな？

　いいんです、わたし、おじさんの老後をみてあげるの。

　もう知らねえや。

それで終わりだった。そしてその後直ぐに若手４人が入ってきて、

　おめでとう！

と囃したてた。

　もう解らねえ、何がなんだか全然解らねえ。おめえたち、何考えてるんだ。

座長の言葉も宙に消えだ。吉之介も笑った。一座は大笑いにわらった。

　彼らは演劇を真剣に志した、吉之助の仲間だった。その彼らに、次第に欠けて行く座員の代りにと、吉之助が声をかけた。すると彼らは、理屈じゃない、役者は毎日舞台

に立ってなきゃいけないんだ、脚本を読み合わせたり、リアリズムがなんて理屈を戦わせたりするんじゃなくて、毎日芝居をやってなきゃいけないんだと、一も二もなく飛んできた。大衆演劇は彼らの理想郷だった。そんな若手に、英子も混じっていたのだ。だが彼女も、演技ではなく、芸には敏感だった。それが彼女と半次郎を結びつけたのかもしれなかった。

　のうお梶どの。そなたは、藤十郎の嘘偽りのない本心を、聴かれて、藤十郎の恋を、あわれと思わぬか。二十年来、忍びに忍んで来た恋を、あわれとは思さぬか。さりとは、強いお人じゃのう。

私はお梶をかきくどく。菊華がおののきながら逃げる。

　それでは藤様、今仰しゃったことは皆本心かいな。

わたしは思わず逃げ腰になる。浮き足立つとはこのことだ。お梶の顔が怖い。菊子が今まで見せたことのない顔だ。えっ、そんな顔するのか、演技とはいえ、恐ろしいまでの顔つきだ。私はそろっと手を離す。少し下がる。

　何の、てんごうを云うてなるものか。人妻に言寄るからは命を投げ出しての恋じゃ。

　私は自分がなにを言っているのか、解らなくなった。
　お梶がふっと、行灯の火を吹き消す。
　闇だ。私は本気で逃げ出した。菊華は、女優になっていたと思った。
　菊華が手探りで藤十郎を探している。

　籐さま、籐さま。

　ああ、なんてざまだ。雁次郎さん、あんた、坂田藤十郎の大名席を復活させたと、胸を張ってたが、菊池寛のほうが偉大だよ。藤十郎と聞いたら誰だってこれを思い出すもの。雁次郎だけでよかったんじゃない。私は舞台袖でほっと息をつきながら、不遜にもそう思った。そしてやっと客席を見た。拍手もない、声もかからない、私は暗闇の客

席を怖いと思った。

菊華を照らしていた薄明かりが消える。

暗転。

汗を拭き、衣装を急いで変えて上手から舞台に出る。

楽屋裏のざわつきを、半次郎おじと若手の声で流す。

おめでとう御座んす。今日も明六つの鐘が鳴るか鳴らぬに、木戸へはいっぱいの客衆で御座りまする。

めでたいのう。ほんに藤十郎どのじゃ。密夫の身のこなしが、とんとたまらぬと京女郎たちの噂話じゃ。

若手リーダーの佐々木信吾が器用に頭取を演じている。いやあ、声だけってぇのは難しいねぇ。彼がそういうと半次郎おじが、おもしれえじゃないか、声優てのを、いっぺんやってみたかったのよと、言う。それに、台本てぇのがあるから、おめえも科白を忘れたりしないだろ。彼はよくとちった。しかしそこが彼のよさで、愛嬌のあるごまかし方をする。

あー、科白わすれたあ！

すると座長か半次郎おじが待ち構えていて、はりせんを持って登場し、信吾の頭を思いっきり叩く。

ばかやろう！ちゃあんとやれえ。

すると客席が大笑いする。時に忘れないでやってると、

しんごちゃあん、今日はわすれないの？

と声までかかる。途端に、

っとととと－！

と言いながら、六法を踏む。そしてこれもお定まりだ。誰かがはりせんを持ち出して引っぱたく。これが彼のギャグになった。だが、芯はまじめな演劇青年で、芝居がしたくてしたくてたまらない男だ。おい、休みにそんなに本を読んでて楽しいか、と半次郎おじが聞くと、人懐っこい顔で笑って、楽しいんですよと答える。吉之助が一座に帰って、座員の中から、俺は座長とやってきたんだ、若とはやれないと何人かやめていった。それは、座長が言ったとおりだった。その時、吉之助が一番に声をかけたのが彼だ。彼は半次郎によく芸談を聞いた。そんなに芸なんてないよと言う半次郎から、歌舞伎の鳴り物の芸を引き出したのも彼だった。その太鼓が鳴り出す。今回の音響効果を演出した

のも信吾だ。

片しゃぎり、竹笛。演目が始まる音がする。

上に私が左半身で立っている。お梶には背を向けた姿勢だ。下にお梶が正座している。お梶も斜めに座り、藤十郎には目を向けていない。私は舞台衣装を着て、忙しそうに指図する仕草をみせるが、声は出さない。お梶は少し間を置いて、俯きながら語りだす。

籐様が、わたしを試しにおかけになった。
わたしを試しの相手に選ばられて、いつわりの恋をお仕掛けになった。
籐様は、わたしの心を見抜いておいでになったのか。わたしの心を見透かしておられたというのか。
籐様、あなたの為されようは罪でありました。あなたさまのお言いだった、わたしが十六、籐様が二十の、祇園祭の掛け小屋で、共に舞った連舞がわたしの心を決めました。あの時以来お慕い申しておりました。
さりとて、女の身から言い出しもならず、ずうっと胸に秘めてまいりました。胸に秘め、あなた様を見守り続けてまいりました。

太鼓が、かすかな雪音に変わる。

日が経つにつれ、あなた様は一座の花形に。わたしは、しがない唄女、いかにこの身を焦がしても、所詮は叶わぬ思いでござります。そんな折、どこをどう見初めていただけたか、清兵衛どのが、わたしを女房にと望んでいただけました。わたしは、玉の輿よと喜ぶ親に逆らえません。かなう筈ない恋と知りながら、振り向いても頂けぬあなた様に、ただひたすらに思いを寄せて、それでもわたしは清兵衛さまのもとへ参りました。

一度顔を上げ、また悲しげに俯く。雪音は続いている。

そんなことなど、世間にはどこにでもあること、そう思い定め、でも断ち切れぬあなた様への思慕の念を、わたしはひたすら押し殺し、清兵衛様にも悟られぬよう、一心にお尽くしもうしあげました。それとも知らず清兵衛さまは、ただただわたしを慈しみ

可愛がってくだされました。それがわたしには苦しくて、なおさらあなた様への思いを募らせ、夫をたばかる業の深さに身の焼かれる日々でございました。

そんな折も折、あなた様がこの宗清を定宿とし、お芝居のある間、ここでお世話もうしあげることになりました。いままでの苦しさはどこへ行ってしまったのか、わたしは小娘のようにはなやぎ、こころ浮き立たせてあなた様をお世話申したのでございます。そんなわたしを見ても、清兵衛様はなにもおっしゃりませなんだ。きっとなにかをお気づきだったと思われます。時折遠くを見るように、私を見ている清兵衛さまに気が付きましたゆえ。その時は、身のすくむおもいでござりました。それでもわたしはあなた様をお世話する嬉しさに、身も世もあらず酔うほどの心持でありました。

雪音が単調に鳴り続ける。私は無音で、歩き回り、指示を出す演技を続けている。ああ、私がここに立っている必要があるのだろうか。ただただ菊子の長科白にはらはらしているだけだ。しかし、高遠一座の演目の殆どを諳んじてみせる異能さだから、大丈夫だと思っているが、万が一ってこともあるから・・・。

そんな日々の数年間、わたしは幸せでありました。清兵衛様との間に子はなせませんでしたが、ひと時心静かに暮らせました。ところが、泣く暇もなく突然に、清兵衛さまがお亡くなりになり、その後さえも宗清はどうする、跡取りはどうするのと、女の身には何も出来ないところを頭取様に救われ、身の立つようにお取り計らい頂き、無事今日を迎えられております。そしてあれは宗清の女主人よ、お内儀よと人にも言われ、清兵衛様のおん名を穢すまいと必死に勤めてまいりました。そして、ふと清兵衛様を思うとき、その懐かしむ心の中に籐様のお姿が浮かんでまいります。振り払い押しのけても、前より強く思い出されてまいります。罪深いことと払いのけ、世間様の目に留まらぬよう、籐様のもとへは人をやり、身を謹んでまいったのです。

もうやけくそだった。身を持て余し、私はお梶口説きの場を、声は出さず、一人演じて見始めた。お梶に背を向け、片膝をつき、振り返る。そして静かに踊りだし、遠くを見ながらそこにはいないお梶ににじり寄り、肩に手を置き、身をかがめ、顔を見詰める。そんな仕草とは関係なく、お梶は語る。

そんな折、籐様はわたしに試しをおかけになった。わたしの心を見透かすように、偽りの恋をおしかけになった。そして秘め事の首尾を成就せず、するりと身をかわして

しまわれた。どうぞそのまま、わたしのようなものを気に掛けず、踏みにじるようにされたがよかったのです。そうさえしておられれば、わたしはかほどにこころ惑わされず、心募らせず、それをこの身に抱いて生き続けられました。嘘でもよい、偽りでもよかった、事の成った秘め事がわたしの生きる証となりましたものを。

もはやわたしは清兵衛様の元へも参れませぬ。いやいや、わたしは初めから姦婦であったのかも知れませぬ。清兵衛様には申し訳ござりませぬが、この籐様のお部屋で、籐様のお衣装に包まれて、果ててまいりまする。お衣装を、わたしの血で穢すこと、お許しなされてくださりませ。

お梶だけを照らしていた照明の輪が広がり、周りの華麗な芝居衣装を照らし出す。お梶は膝を浮かせ、しごきを取り出し、膝上をそれで縛る。そして護身刀を手に持ち、和らいだ目で回りの衣装をみて、刀を逆手に持ちかえると一気に胸に突きたてる。

籐様、籐さま、とうさま・・・

私は身を斜やに構え、口説きの場の見栄を切っている。

暗転

黒の背景に、終、の字が無音で写される。場面が変り、

菊蝶
菊華

の名前が映し出され、次に

製作協力
演劇舞踏集団　　高遠組

声　　高遠　吉也
高遠　吉之介
岩根　半次郎
佐々木　信吾

と、高遠一座のものの名がながれ始めると、突然タンブラーがけたたましくなり始め、

シタールが響きだす。
　タイトルバックの最後には
　演出監督
　　高遠　吉也
　　竹原　遊穐
と並び、映画フィルムが映写機のリールから外れてパタパタ鳴って、真っ白な画面からフェードアウトして行く。
　観客席に照明が点き、どろどろと大太鼓がなりだす。打ち出し太鼓だ。半次郎おじが叩いてくれている。スタッフ全員が
　ありがとうございましたぁ
と叫ぶ。その時まで私は観客の反応が解らなかった。拍手も聞こえず、声も気付かなかった。無性に喉が渇き、ペットバトルを一本飲み干してしまった。急ぎ、お見送りに向かう。菊華はもう出口に立っていた。その横に並び、菊子の顔を見る。菊子は平然としている。母が初めて座長に会いに行った時、菊蝶の名の由来を座長に尋ねていた。
　なんで蝶でしたの？
　花ですから、蝶、と思っただけですが・・・、お気に召しませんでしたでしょうか。
　そうですねぇ。
そういうと、母は突然、
　二度と飛べまい、このちょうちょ、花から花へ
と歌いだした。訝っている座長と吉之介に、
　これって、フィガロの結婚の歌曲ですの。プレイボーイを歌った曲ですわ。まあ、直人はプレイボーイにはなれませんけど、菊子さんの回りを飛んでる蝶にはなれるでしょうね、
そういって笑った。いま、私は菊華の回りを飛ぶ蝶だった。
　ご贔屓のおばちゃんたちが出てきて、菊華を取り囲み、手を取って、
　かわいそう、菊華ちゃんかわいそう。
と言い出した。
　そうよぉ、恋に死ねるのは女だけよぉ、男なんてこずるいだけなんだから。
と口々に言い立てる。
　だめよぉ、菊蝶さん、菊華ちゃんを泣かしたら、承知しないんだから。
と、突然お鉢がこちらに回ってきた。いつもは女姿の私に気軽く抱きついてくる人たちが、私を遠巻きにして近付いてこない。そればかりか、上から下へ眺め回し、

　　ふーん
と品定めする。
　　でも、いい男ね。
菊華が笑う。
　　菊華ちゃんを大事にするのよ、わかったぁ！
そういって、私の二の腕をぴしゃりと叩いて回る。
　　ああ、痛い。ああ、有難い。
私は黙って頭を下げ続けた。

地方の小さな劇場を、この藤十郎の恋を持って演じていると３ヶ月目に座長から電話がかかってきた。

菊蝶さん、この前月刊演劇界のリポーターがきてね、高遠一座の取材かと思ったら、あんたたちの事でね。

面白い試みをやってますね、座長の演出だと言う事で取材にきました、てぇのさ。

いや、あれは菊華、菊蝶の二人が自分で考えて俺に見せたから、

おもしろいじゃあないか、って言っただけだよ。もっとも、うちの若い者も加わって、あれこれやってたみたいだが、・・・、後はちょっと手直ししただけさ、って言っておいた。

そしたら、演劇界の月間時評に記事が出てて、わりに好評の記事を書いてくれてたから、ちょっと知らせておこうとおもって。

とのことだった。しかし、月刊演劇界という雑誌のことも知らなかったし、業界の評価はそう気にならなかった。だが、菊華にそれを伝えると、菊華がその雑誌を買ってきた。

あの大衆演劇出身の女形菊蝶と菊華が、二人芝居という面白い試みをやっている。題材も藤十郎の恋を選び、そこに新しい解釈を加えて実験演劇を演じている。原作はお梶の自刃を事実として描いているだけだが、菊蝶菊華はそれをお梶の純愛を貫いた果ての自刃として演じた。これはあの長谷川一夫の藤十郎の恋でも同様だったが、舞台で二人芝居として演じるについて、歌舞伎の音響効果を効果的に導入して緊迫感を演出しているのは見事だ。だが、お梶のモノローグが少し冗長かと思う。その部分をもう少し整理すれば、もっと質が高まるのではないかと思う。

いや、実験演劇なんて素晴らしいものをやってるわけではございません。身軽く二人で営業に回れるよう工夫しただけでございます。それに、母も長谷川一夫氏の事はいっておりました。彼は銭形平次だけじゃないのよ。名優よ。良くは知りませんが、その通りだと思います。まさに足下のも及びません。引き合いに出されるこなんて、恐れ多い。私は記事を読みながら、そう思った。菊子はその記事を読んで泣いていた。よかった、彼女はぽつりとそういった。

私たちは歌謡ショーで踊り、芝居を演じて打ち出し太鼓で終わる内容で全国を回った。だが次の事も考えていた。紙屋治兵衛と遊女小春、心中天網島の、二人が追い詰められて死んでいく最後の場面を、義太夫に乗せて演じるという大それた試みだ。そして冥土の飛脚、恋飛脚大和往来、女殺油地獄。そう考えてみると近松門左衛門ばかりだ

ったが、冥土の飛脚、恋飛脚大和往来は、封印切りを私が演じ、最後の場面は二人でと演技プランが立てられた。だがどれも荷が重いものばかりで、実現には程遠かった。

そんななか、女殺油地獄は、油にまみれて逃げ惑い、追って転倒し、逃げても転んで逃げ切れない臨場感を、歌舞伎ではふのりを使うと座長に教えられた。女々しく、だらしのない放蕩息子がお金に不自由をしては不憫だと、父親が同業者の女房お吉に小遣いを渡してもらう役を頼んで渡してもらっていた。ところがさらにお金を女房お吉に無心して断わられる。どうしても金の必要な放蕩息子はお吉を殺し、金を奪う。ああ、どうなんだろう、と私は考えてしまった。ただ金に困っての理不尽な遣り様だと言ってしまってはそれまでだが、油にまみれて女を追う、そこに底知れぬエロスを感じた。そしてこんなもの、演じていいのだろうかとも思った。

そんなにのた打ち回ったら駄目。品が要るの。品が悪けりゃ、だあれも見ないわよ。

遊穐は手厳しかった。

むしろ抑え気味に動くことね。必死さは息遣いと顔の動きで考えなさい。ただの追いかけっこじゃないんだから。

稽古の状況を母に見せると、怒声とさえ言えそうな声で叱られた。

油まみれとかふのりもいいけど、危ないわよ。舞台で不測のことが起こったら、収拾がつかなくなるし、怪我することもある。だからもっと工夫しなさい。

遊穐はそういって、直子を連れて出て行った。それもそうだと私たちも思ったが、実際油まみれになったらどうなるかと考え、やってみることにした。シートを敷き、手足にオリーブオイルを塗ってみる、シートにも油を垂らす。いや、それだけで立っていられない。手を掴んでも、するりと抜ける。着物の裾は力が入るが、ぬれてしまうと一緒だ。これじゃ演技の前に、怪我をする。舞台を汚すから、跡片付けも苦情が出るかもしれない。そんなことを思い悩んでいると、ふいに元は人形浄瑠璃だったことを思い出し、半次郎おじの顔が浮かんだ。舞台袖に半板を置き、おじさんに拍子木を打ってもらって、その陰打ちに乗って演じるのはどうだ。

何分だい？

５分かそこらです。

長いねぇ、よっぽど体力がいるぜ。

そういって、渋ったが、

まっ、やってみようか。

と稽古に付き合ってくれた。

タタン、タンと軽快に拍子木が鳴る。時折ずれるが、その音に乗ると、人形浄瑠璃

の人形になったような気分になる。
　あら、面白い動きになってるわね。人形振り？
　いえ、陰打ちに合わせると、こんなことに・・・。
菊華が答える。
　この演目は、半次郎さんが主役ね。お世話になります。
母はそういって、半次郎おじに頭を下げた。
　しかし、その半次郎おじが音を上げた。
　きついよ、菊蝶さん、こりゃきつい。俺も若くないからね。
そこで、笛を入れ、太鼓を入れた。太棹も加えた。まるで、和楽器のジャムセッションの様相になった。

　演劇界の時評でこれを、実験舞踏劇と書いてもらえた。
　女殺油地獄
　　暴力のエロス
観客は先ずパンフレットを読んでおかねばならない。そうしないと、なぜ放蕩息子の与兵衛がお吉を殺すことになるのかわからない。歌舞伎でも人形浄瑠璃でも、この演目は臨場感を出すため、色々な工夫をするのだが、菊華菊蝶は舞踊とするため、陰打ちを使った。この老練な裏方が見事にこれを舞踊にした。
　また、この女殺しが、好意を見せてくれるお吉に、年上の女に甘えるようなつけ上がり方をした与兵衛の心理の結果だったことを、よくわからせた。お吉なら解ってくれる、お吉なら許してくれる、そんな甘ったれた根性が、思いもしない拒否に会って逆上し、金を求めて犯行に及ぶ。だがそれが表向きの理由と菊華菊蝶は言うのだ。　暴力のエロス、という副題がそれだ。金が目的なら、逃げるお吉を追う必要はない。無理心中ならこれもエロスだ。エロスはタナトスを制御して、生きようとする生の本能であることは、懸命な諸氏はご存知の事と思う。その発露が性的衝動でもあるが、自己破壊のタナトスを防ごうとして外部を攻撃してしまうと、フロイドは説く。菊蝶はなんとも厄介な副題を付けたものだ。
　まあ、こんなふうに勘ぐるのは筆者だけかもしれないが、筆者はかつてＳＦ小説かなにかで人類が滅びようとしている未来で、最後の男の子と女の子の話を読んだ記憶がある。二人は別々に成長し、若者になったとき出会う。彼らは全く自分とは違う、詰まり男と女の違いということだが、互いの存在に興味を持ち、共に好意も持つ。ところがそれをどう現せばいいのか解らず、男は女を獲物のように攻撃し、殺してしまう。筆者

は今回の菊華菊蝶の舞踏劇はこれだ！と思った。与兵衛は放蕩三昧だから男と女の事は熟知しているはずだ。だがそれはせいぜい傾城買いで、ストーリーの決まっているゲームでしかない。たぶん与兵衛は本当の恋なんかしたことがなかったのだ。その与兵衛がお吉に、自分では気付かぬうちに恋をしてしまった。そして、お吉に激しく拒否され、自分を受けいれてくれない事への反発からお吉を攻撃する。お吉を追いかけ、肩に手をやり、その体の柔らかさや体温を手に感じ、さらに身内から巻き起こる激しい本能の衝動から殺してしまう。それは与兵衛が自分に絶望して自己破壊を願っている裏返しだと、彼らは言うのである。また新しい切り口を菊華菊蝶は見せた。

　まあ、なんて買いかぶった時評だろうと私は思った。私たちはそんなに偉くはございません。しかし何となく思ってたことを言葉にしてくれて、私は感謝した。そして、演劇界はこの年、この女殺油地獄に、前衛舞踏賞を授与してくれた。それを電話で座長に報告すると、

　よかったなあ。

と弱弱しい声で喜んでくれた。

　でもなあ、菊蝶さん、あんまり偉くならないでくれよ。

座長がそう言い添えた。

私たちの公演の場が、それまでの芝居小屋から都市の劇場ホールにかわっていったのは、演目のせいだろうか。自然とそうなっていったので、忙しさにかまけていた私たちは気づかなかった。もっとも、芝居や舞踊をやれる芝居小屋自体少なくなっていたので、そんなもんだろうとも思っていた。だがそれは、高遠一座の活躍する場が減って行ってるということでもあった。

そんなある日、電話が菊子に入った。座長が脳梗塞で倒れたとの知らせだった。

大丈夫だ、軽い脳梗塞で、ちょっと麻痺が残っただけだ。だから見舞いになんかくるんじゃないぞ、俺達はなんも人様のお役に立つようなことは出来ないのに、お客さまからお金をいただいて身過ぎ世過ぎをさせてもらってる身だから、役者が舞台に穴をあけちゃならないと、親父は言うんだ。それが役者のせめてもの意地だってぇのは、俺にも解る。だけど親の死に目にも会えないってぇのはわからねえ。だから今のうち、こっちに来る用事を作って、寄ってやってくれ。
吉之助兄がそういった。私たちはその頃、曽根崎心中を題材に次の案をねっていたので、早速それを口実に高遠一座を訪ねることにした。

この世の名残り　夜も名残り　死に行く身をたとふれば
あだしが原の道の霜　一足づつに消えて行く
夢の夢こそ　あはれなれ
あれ　数ふれば暁の　七つの時が六つ鳴りて
残る一つが今生の
鐘の響きの聞き納め　　寂滅為楽と響くなり
鐘斗かは　草も木も空も名残りと見上ぐれば
雲心なき水の音
北斗は冴えて影映る
星の妹背の天の川
梅田の橋をかざざぎの橋と契りて　いつまでも

私たちはもう奇を衒うことはやめにしようと思っていた。こんな名文句は、そのまま三味に乗せて、それに合わせて踊りたいと思った。そしてこれは私たちだけでなく、演劇舞踏集団　高遠組　と一緒にやりたいと思っていたのだ。そして座長に、そのお許しをいただくために会いに行くと理由付けた。それを電話で伝えると、少し呂律の回らない

口調で、いいよ、来てくれ、俺も菊子と菊蝶さんに会いたいから、と言ってくれた。ただし、入院患者慰問ということにして、踊りの衣装を持ってきてくれ、病院には俺から断わっておくから、という話だった。そんなことが出来るのかと、多少いぶかしいところもあったが、一応用意だけはして行った。それも、座長の注文の通り、私も菊華も女の衣装をだ。

行くと、そこは長期リハビリを専門にする病院で、一階大ホールに高遠一座が小ステージを組んであった。そのステージの前には沢山の椅子が用意され、既に楽しみにしている患者さんたちが座って、楽しそうに喋っていた。

話は後だ。皆さんお待ちかねだから、なんとか頼む。
車椅子に座った座長が急いでやってきて、そういった。

菊華、菊蝶の二人が今到着いたしました。この二人はこれから用意をいたしまして舞台に上がります。それまでの間、我々高遠一座の演舞をお楽しみください。
信吾が、ステージで司会をしている。私たちは急いで化粧を始めた。

歌謡ショーでいいと座長に言われていた。菊華菊蝶でデビューした頃の曲を用意してあったので、それを踊ることにしていた。その最中も笑いが聞こえる。多少遠慮がちだが、掛け声もしていた。例の、しんごちゃん、きょうはまちがえないの、という声もかかった。半次郎おじの

ちゃあんと、やれ！

いてえ、すんません、しゅぎょうしなおしてきます
のやり取りと、ドッと笑う患者さんたちの声も聞こえた。

いけますか？
の声に、黙って頷く。舞台が狭いから、気をつけてと、新人の美緒が言う。黙って頷く。なぜか緊張していた。それは多分、見る人とほぼ同じ目の高さで踊ることに慣れてないからだろうと思った。

曲が始まる。両袖から二人が舞台に上がる。菊華がかがみ、私が立ち、前を見て決める。

きっかちゃーん

きくちょぉ
女の声と男の声がかかった。左右に回り、見詰めあい、手を取り、離れて踊りだす。狭い。ライトでなく、白日の下で踊る。冷や汗が吹きだすようだ。前を向くと、白髪のおばあちゃんが踊りに合わせて手を動かしている。楽しんでいてくれる、そう思うと体が軽くなった。

三曲が限度だった。低い舞台に手をついてお辞儀する。

　　きっかちゃーん
　　きくちょうさーん
と拍手が来た。舞台を下りて客席の間を握手して回る。
　　きくちょうさん、あんたきれい！
と、以前のようにおばあちゃんが抱きついてくる。椅子に座ったその背をなでると、涙を流しながら笑ってくれた。私は何をしていたのか、なにか小難しいことを気取っていたのではないだろうかと、泣いた。
　　そうかい、そう思ったか。
あとで座長がそういった。

なんだか、曽根崎心中の話が言い出しにくくなっていた。それを察してか、吉之介あにさんが座長に切り出してくれた。そして、座長は頷いた。

いいんだよ、俺がやってきたことだけをくりかえさなくったって。自分たちで考えて、これがいいって物をやりゃいいんだ。俺だってそうして来たんだから。要は、お客さまに喜んでいただけるように頑張ることさ。

しかし、俺は菊蝶さんは拾い物だったと、いまでも思ってるよ。とんでもない高みに登っていっちゃいるが、俺達を見に来てくれる人の事を、ちゃあんと覚えていてくれる。わすれちゃ、いけないよ。

曽根崎心中、面白いじゃないか。吉之介とやってみな。吉之介はなかなか異色の人材を集めてきてるぜ。今のご時勢に合ってるかもしれないね。

そういって、吉之介あにを見た。今までの座員のほかに、岩根半次郎おじは昔からいてくれたのだが、芝居の虫の信吾、半次郎おじに歌舞伎の楽器と音響を食らいついて仕込んでもらっている岩根英子、バレー出身の田辺美緒、器械体操をやっていた時澤忠彦など、新規入団の若者がいた。そのなかで、これといった特技を持たないのが当の吉之介だったが、舞台に立つと存在感が違っていた。半次郎おじが、若座長と呼ぶと、それまでの座員も、後からのものも自然と若座長と呼ぶようになっていった。

これも、演劇舞踏集団　高頭組　で別にやります。もちろん高遠一座は続けます。

と、吉之介あにが言うと、

二足の草鞋だが、その方がいいだろう。

と座長が言って笑った。

実験公演　　曽根崎心中

演劇舞踏集団

高遠　吉之介

菊蝶

菊華

とポスターを作り、会場には絵看板を出した。打ち入り太鼓も鳴らした。出太鼓も藤十郎の恋のときのように鳴らした。そして高遠一座のまま、出口でお客様の見送りもした。観客は若い女の子が目立った。女子大学生だろうか、

近松を卒論にしてるんですけど、こんな解釈があるとはおもいませんでした。ありがとうございました。握手してください。
と、吉之介あにに握手を求めてくる女の子もいた。吉之介あにが苦笑いしていた。
そんなことからだろうか、私たちは大学祭にまで呼ばれた。

演劇舞踏集団、　高頭組　　来る

そんな立て看板が、校門の前に立った。そのときはもう、なんでもありの公演になった。題材はシラノ　ド　ベルジュラック。羽織袴、白塗り、二本差の、タップダンスまである、ひっくりかえるような演劇になった。演出は信吾だった。
俺りゃ、ついてけねえ。
半次郎おじが音をあげた。シラノは吉之介、クリスチャンが私、ロウサーヌは菊華、悪役ギーシュ伯爵が半次郎おじなどと役を決め、稽古を始めたのだが、舞台で信吾が悩むと、
おい、またなんか思いついたのか。勘弁してくれよ。
と半次郎おじが泣くように言う。
クリスチャンがロクサーヌに恋心を打ち明けるバルコニーの場面では、佐藤たまきに、
ここでフルートだ。上に足場を組んで、ロメオとジュリエットをあまーく静かに吹いてくれ。
と言い出す。また、戦場の場面では鎧を着けてのタイ捨流の演武をしろと言い出す。その伴奏にごじんじょ太鼓だって？なんだ！誰がたたける？岩根英子、お前だ。だめよぉ、私習ってないもん。いいから、やれ！そういう信吾を見て、英子が夫の半次郎と吉之介に助けを求めるように目を向ける。ところが二人とも横を向く。私は気が気でなかった。だが、なんとかなるもんだ。半次郎おじが可愛い妻のためにと、ごじんじょ太鼓の打ち手を工面してきた。そして、二人でなんとか間に合わせた。
体育館の舞台に幕はない。暗い中でラップが響く。それに合わせてタップダンスのリズミカルな音が始まる。ライトがタップダンサー三人を照らし出す。黒の全身タイツに白い仮面を付け、手は白い手袋、足も白いタップシューズで、手と足と仮面だけが動いて見える。
と、突然助走をつけたタイツ姿の男が、側転からバック転と跳んで行く。
それと入れ替わり、バレリーナがジャンプし、回って上手に消える。タップダンスは続いている。

不良小侍達１，２，３

１、なんだなんだ、この踊りは。これでも踊りか。騒々しいだけではないか。

２、やめろやめろ。うるさくて叶わん！これじゃあまるで、軽業小屋じゃあないか。

３、やめろというが、聞こえないのか。

声１、２

１、いやはや、無粋な人たちだ。このすばらしいパーフォーマンスが、お解かりにならないと見える。

２、それとも、けちをつけて小遣い銭でもせしめようと企んでいるのか。やめとけ、やめとけ。

１、さあさあ、周りに迷惑だ。消えろ消えろ。

小侍１，２，３、

１、だれだ。

２、でてこい。

３、我らを侮ると、痛い目にあうぞ。

シラノとクリスチャンが上手より登場。上手二階桟敷にギーシュ、下手桟敷にロクサーヌ。

クリスチャン　　みなさま楽しみに見てらしゃっしゃるのだ。静かに帰った方が見のためだぞ。

小侍２、なにぃ！

と刀に手を掛ける。

小侍３、お、おい、やめとけ。相手が悪い。

シラノ　悪いのはお前たちだろ。ささ、消えろ。

小侍１、なに！

そういうと、刀の柄に手を掛ける。シラノ、素早く相手の柄を手で押さえ、もう片方の手で小侍の首筋に手刀を叩き込む。小侍１は悶絶して倒れこむ。あとの２，３が前に出ようとすると、クリスチャンが、居合い腰に構え、ずいっとシラノの前に出る。

わっと倒れこむようにして２，３は逃げ出す。

二階桟敷のギーシュが苦々しげに引っ込む。反対側のロクサーヌは、宝塚のような大げさな身振りでクリスチャンを見詰め、花を投げる。

落ちてきた花を見、クリスチャンが上のロクサーヌを見上げる。ロクサーヌ、名残惜しそうに引っ込む。

クリスチャン　　おい、シラノ、あの姫君は誰だ。
シラノ、無言。
舞台のタップダンサー達がダンとタップを決め、両手を差し上げてダンスを止める。
と、こうして芝居は始まった。やってみると、これは芝居か？と思ってしまう。いや、これはもうシラノの科白通り、パーフォーマンスだぞ、信吾！

ロクサーヌとクリスチャンは出会ってしまった。美しいロクサーヌと美貌のクリスチャンが、互いに一目ぼれしてしまった。
芝居は愛のささやきへ。
ロクサーヌの屋敷の庭。
シラノとクリスチャンの二人は潅木で共に隠れ、座敷を見る。
口ごもり、甘い言葉もいえないクリスチャンに、シラノが科白を教える。そこにイブニングドレスを着た宮部ゆきが、甘く切ないメロディを演奏し始める。クリスチャンは懸命にシラノの科白口移しに繰り返す。
おお、ロクサーヌ姫！
メロディが邪魔するほどに大きくなり、オーバーアクションで演奏しだす。シラノ、振り返り、それを手を振って追い払おうとする。
クリスチャンさま、お顔をお見せください。
その声にクリスチャンはシラノを見、頷くシラノに促され、駆け寄る。手を取り合う二人を見て顔をそむけ、シラノは宮部ゆきの肩を叩いて共に退場。
暗転。
悪役ギーシュとの罵りあいの果て、シラノとクリスチャンは戦場へ。そして、シラノの書いた恋文に酔うロクサーヌを見てクリスチャンは絶望し、自暴自棄で戦場場面の舞台奥に立つ。
そのクリスチャンの前に赤備えの鎧武者。武者は矢を払い、槍をいなす仕草をしながら闘っている。そこへ黒備えの武者が登場する。お互い剣を抜き放ち、一触即発となる。クリスチャンは後方で佇んでいる。二人の武者が数回切り結ぶと、いきなり、舞台が全体が明るくなり、場内アナウンスが流れる。
タイ捨流演武を始めます。一の太刀、打ち太刀、黒備え、仕太刀赤備え、始め。
その声にびっくりしながらも、二人は急に太刀を納め、お互いに礼をし、太刀を抜いてそんきょする。刃先を合わせ、立ち上がる。
ええい！

おう。
ごじんじょ太鼓が鳴り出す。二人は寸止めで別れ、アナウンスに従い、次の二の太刀へ。そして、六の太刀まで終え、殺し合いを忘れて左右に分かれ、立ち去る。ごじんじょ太鼓が最高潮になる。悄然と立っていたクリスチャンの胸に矢が刺さり、倒れる。太鼓はぴたりと止まる。

暗転

私のクリスチャンの役はおわった。走って楽屋に向かい、衣装をぬぎ、化粧を直す。今度は女形だ。時間がない。もう直ぐシラノが倒れる。その前に舞台に出なければ、と鬘を被り直し、真っ白な重ねの衣装を着る。頭には白いかんざしが何本か重たいほど差されている。

舞台中央、シラノは青ざめた顔をし、肩で息をしている。戦場から帰ったシラノが、狂歌をもってギーシュの賄賂政治を茶化し、批判するのをこころよく思わないギーシュが放った暗殺団に襲われ、材木で頭を打って重傷をおったのだ。

　舞台上手の袖に立つと、クリスチャンの戦死に絶望したロクサーヌが尼寺に入り、そこへシラノが毎月一回やってきて、町での色々な出来事を話して聞かせる場面が終わり、クリスチャンの恋文を闇の中でシラノが読んで聞かせているところまで進んでいた。間に合った。私は雪上臈だ。雪女郎ではなく、どうして雪上臈なんだ、と信吾に聞くと、上品さと豪華さが違うと言う。出所はなんだ、と聞くと、歌舞伎の闇梅百物語だという。そうか、だからこの芝居も、筋は度外視してパノラマ島のようなことをやらせるんだな、というと、ですから、最後は締めたいんです、綺麗に華麗に決めてください、と言う。困った。どうすればいいのか、悩みに悩み、白無垢、引き摺り振袖の打ち掛けと、なんと花嫁衣裳を豪華にしたようなことになってしまった。あと、角隠しを付ければ本当に花嫁衣裳だ。

　おもい・・・と袖で耐えていると、中央でシラノが、薄暗い中恋文を読んでいる。彼の書いた、しかしクリスチャンの文だ。ロクサーヌが怪訝そうな顔つきから、はっとなる。稀代の詩人にして、剣豪シラノが朗々と、読めるはずのないこの暗がりで、文面を見詰め、時に切なく恋の言葉を読み続けている。私を愛し、私に恋をしていたのは、そして私が愛したのはこの恋文を書いた人、そしてそれはこのシラノさま。思わず声が漏れる。

　シラノさま、これをお書きになったのはあなた様。そして、わたしが愛したのは　ー　。

それをシラノが手で制する。

　それ以上言ってはなりませぬぞ、ロクサーヌ殿。それではクリスチャンがうかばれませぬ。クリスチャンの本当に愛したのはあなたなのですから。彼はそれゆえこそ、その愛に死んだのですから。

　でも・・・。

　なりませぬ！

と、言ったシラノが前のめりに倒れる。

　シラノ様、どうなされました。

ロクサーヌ、シラノの側により、シラノを抱きかかえる。

　舞台上手に水色の照明、私が静かに出て、彼らを見詰める。真上からのスポットライトと横面の壁の水色が際立つ。静かに雪が降り始める。

　ご案じあるな。一介の素浪人、シラノでござる。何ほどのことがあり申そうか。

静かに私が舞い始める。無音だ。

　いえいえ、私のお慕い申し上げたのは、
シラノ、手で制する。
　それはクリスチャンでござる。
ロクサーヌ、首を横に振る。苦しい息の中、シラノが語る。
　先ほどお話し申したことの最後がまだ御座った。
　詩人にして物理学者、剣の天才と謳われた、彼の鼻のシラノ、本日暗殺さる。
　こうしてあなたの腕の中で死んでゆけることこそ、私の幸せ。私は果報者でござった、ロクサーヌ殿。
手を伸ばし、ロクサーヌの頬に触れようとして、手が力をなくし、落ちる。
引き摺り振り袖を蝶のように羽ばたかせ、風と雪を送る、雪が横殴りになる。
　シラノさまあー。
墨衣のロクサーヌ、シラノの顔を抱いてうつ伏せってしまう。
私は踊りをぴたりと止め、両の手に持った雪片をふっと吹き付ける。風が舞い起こり、中央の二人に雪が襲う。その中、ロクサーヌが顔をあげ、
　シラノさま、わたくしの心は今、二つに引き裂かれました。シラノさまはわたくしに、どうせよとおっしゃるのでございますか。
と言う。
　暗転。
　終わった。
　一瞬の沈黙があり、一声の拍手が起こった。
　シラノ、シラノ
のコールが響く。私と菊華、吉之介が舞台中央、演出の信吾が袖から出てくる。他の劇団員も前に並ぶ。フルート、バイオリンが演奏しながら出てくる。黒タイツが側転を繰り返す。ごじんじょ太鼓の扮装で半次郎おじと英子が出てきて、中央に押し出されてきた太鼓を叩く。我々も左右に別れ、横に居並ぶ。
　終わったとつくづく思った。
　この芝居をやると報告に行ったとき、
　ほう、赤毛物かい。俺が研究生だったところの幹部が、白野弁十郎でやってたが・・・。もっとも、あの人はメイキャップをしなくてもシラノだったけどなあ。
と言って、座長がさびしそうに笑った。それが何だったかは後でわかった。私たちが旅に出ているうちに、座長が急逝した。誰にも見取られぬ、あっけない逝き方だった。私たちは高遠一座の公演を続けながら、葬儀も済ませた。それでいいんだ、俺なんかのために穴を開けるんじゃないぞ、そういってた座長の言葉通りになった。そして、それで

何かが変ったわけでもなかった。
　追悼公演、やりましょう。
じっと耐えてる風が解る吉之介座長に、信吾が言い出した。座長とは２～３年しか一緒に芝居をしていない彼が、最初に口を開いたのは驚きだった。いまだ客分扱いの私は、どこかで一歩引いてたが、半次郎おじも昔気質で遠慮があったからだろう、しゃしゃりでてこなかった。だがその言葉を聞くと、若、やりましょうと言い出した。それも座長が始めて座長になり、後々もホームグラウンドとしていた地で、自主興行ででもやりましょうと言い出した。すみません差し出た口をききましてと、頭を下げながらそういった。吉之介は頷いた。自主興行なら小屋主さんにも迷惑をかけないだろうと思っていた。
　だが、話はとんとん拍子に進んだ。そして妙なところがそわそわし出した。
　私も踊ろうかしら。出してくれる？あなたからも頼んでよ。
母がそう言い出したのだ。
　お金を取って踊りを見てもらうって、どんなことか知りたいんです。菊子さんのお父さんの追悼でもあるし。
竹原遊穐は、お金を取って、舞台で踊ったことがない。それを言ってるのだ。確かにおさらい会だ、発表会だと踊っても、それは一門の中だけの事。いかに名手だ、お師匠さんだといわれても、自分の踊りを舞台にかけてお金で評価されたことがない。
　直子、あなたもじじ様のお弔いに踊るのよ。さっ、お願いしましょう。
そういって、二人して手を突き、頭を下げた。直子も形良くお辞儀している。母が厳しく教えたのだろうか。
　いいえ、私は何も教えたりしません。直子には、私の真似をしなさいとだけ、言ってあります。なんでそうするのかとか、どういう風にしたらいいかとか解らなくっても、兎に角何も訊かないで真似をしなさいと言ってあるの。そんなことを言わなくっても、子供にはほかに真似するものはないので、選びようがありませんけどね。でも、こうやって芸は継承されてゆくのよ。だからお師匠さんが大事なの。
母は、お師匠さんは大変なのよとも言って、直子を見ながら笑った。
　母が出してくれと言ってるというと、吉之介あにも半次郎おじもびっくりした。
　いいんですかい、菊蝶さん。
半次郎おじが真顔で訊く。吉之介あにも私を見る。
　お願いします。
と私は頭を下げた。それで、母の出演が決まった。

　　追悼公演の演目を決めようと吉之介新座長と半次郎おじ、菊華、私、信吾が色々と考えた。

　　親父は、ここで一番最初に何をやったんだろ。

吉之介新座長が誰と言うでもなく訊いた。といっても、半次郎おじぐらいしか解らないと思った。

　　はい、関東木遣り節って出し物でしたが、こいつは散々でした。

　　どうしてですか。

新座長が向き直って、訊いた。

　　ちょっと、克ち過ぎだったかと思います。

　　克ち過ぎ？

吉之介が聞き返す。

　　硬すぎたの。こちんこちんのカッチカチだったって座長が言ってました。

　　菊華が言った。

　　どんなんだい？

菊華が座りなおし、口立てで芝居全体を演じ始めた。それを聞いていた吉之介と半次郎おじがだんだんびっくりし、吉之介が

　　おい、全部できるのか、初めて聞いたぞ。

と言った。半次郎おじは呆然と見ていた。菊華は恥ずかしそうに頷いた。

　　知らなかった。これは良い！これで出来る。

新座長が手を叩いて喜んだ。信吾も、脚本らしきものを丸めて握り締め、菊華を見詰め直していた。じゃあ、あれは？これにするか、と話が飛ぶと、信吾がその口立てを聞きたがった。そして菊華がやってみせる。みながそれに聞き入ってたが、結局座長が若い頃、一番多く演じたのは？と菊華に訊いて、それに決まった。

　　菊華譲さん、座長が口立てで稽古を見てるとき、時々譲さんを呼んで、小さい声でなにか訊いてたのは、これですかい？

半次郎おじがいうと、菊華は、はにかみながらを縦に振った。

　　ほんの時たまでしたけど。でも、本当は父が芝居の忘れた箇所を私に訊いてたわけじゃあないんです。父は、小さい私が、芝居の四六時中全部をを覚えているのが嬉しくて、時々それを確かめようと訊いてきてたんです。そして、菊華、忘れるなよ、先々古臭いもんになるかもしれないが、それがお前の財産になるぞって言ってました。

と小さい声でいった。

そうだった、あの人は自分の芝居を忘れるような人ではなかった。病のあとのリハビリで、車椅子に乗りながら、病院の中で一人芝居を患者や職員に見せ、これが俺の一番のリハビリだと言ってたと聞いた。最初は少し呂律が回らず、そのうち動きにくい左手が上がりだし、ゆがんでた顔もきりっと締まって言葉も聞きやすくなり、仕舞いには自分で何役もこなして芝居を見せたと聞かされた。それを思うと、涙が流れた。

でも、おとうさん、いえ座長が、陰で独りでやってた芝居で、一座の演目には絶対かけなかった芝居があるんです。

えっ、それって何？

吉之介兄が聞くと

こいつはなあ、菊華、やれないんだよ、やりたくても出来ないんだ。そういいながら、時々独りで科白をつぶやいてました。

おう！やまがたや。　　これだろう？

吉之介あにが横から言った。菊華がはっとなって吉之介を見、頷いた。

国定忠治、山形屋の段。

半次郎おじも解っていた。

座長は、研究生で行ってた劇団の稽古で、劇団代表の小山先生の代役をよく勤めてたそうです。それを見て、小山先生から本番でも大丈夫だ、赤木の山は北野だが、山形屋はおまえでやれる、といわれたそうです。ところが、高遠一座の前座長が亡くなって、急遽かえらなくっちゃならなくなり、研究生をやめて帰ってこられたんです。残念だったと思います。小山先生が亡くなり、劇団も解散になって、そのあと北野、岡田両雄も亡くなって、もう演ってもいいかなあって座長言ってました。小山先生の間の取り方、台詞回し、息遣いを知ってるもんはもう俺しかいなくなったしなあ、あの芝居、なくなるぞ、でもこんな田舎の旅回りじゃ無理か、そういってました。

半次郎おじが、口惜しさを滲ませながら言った。

追悼公演です、最後にそれをやりましょう、忠治は若座長、山形屋を半次郎先生、かごやを体育屋、やっこは私、あねさんは・・・、菊蝶さん。

えっ、俺かい？出来るかなあ。

やってもらいます。こう、老け造りで。

おいおい、そいつは困る。芝居の後のお見送りで、老け造りの菊蝶さんを見たら、女のお客が納得しない。泣くぞ、客が。

半次郎おじが言った。

じゃあ、・・・、

と菊華を見たが、それも半次郎おじが手を振った。

そうかあ、・・・

と、結局ちょっと怖わめの顔をした、芸達者な新入りに決まった。期間は短い。旅をしながら、バスの中でも稽古した。菊華が前で科白を付ける。半次郎おじがそれを聞きながら、ああ、この言い回しだと涙ぐむ場面もあった。すいません、年取ると涙もろくなってと言うおじを、英子が慰めた。俺達は毎日が芝居だ、頑張ろうと信吾がわめく。吉之介あには、芝居の最後の立ち回り場面の仕草をしていた。

追悼公演の二日前、私たちは公演会場に入った。追悼公演だから失敗は出来ない、そう思うといつものように朝着いて、午前中に舞台の設営、昼から打ち合わせ、午後には第一回目の公演という訳にはいかない。準備はいつもより入念に、しかし手早く行われた。

舞台は三部で行うことになっていた。最初が座長の若い頃によく演じていた、恋時雨の闇太郎、二部は私と菊華の舞踊、そして竹原遊穐の舞、最後が国定忠治、山形屋の段だ。母が用意してきた舞台道具は、行灯一つだった。それに直子、久江さんの二人をつれてきた。ところが久江さんが琴を抱えていた。三弦、箏曲での舞い・・・。

菊華さん、

と母がいった。

三弦を用意して、雪を演奏してね、久江さんには箏をみっちり練習してきてもらったから、後で合わせてみましょう。・・・、私に出来るかどうかわからないけど、草柳福寿さんを見せてあげる。杵屋千登勢さんの三弦と福寿さんの地唄舞で、座長さんをしっかり見送ってあげましょう。

そういうと、久しぶりの母親にぴったりくっ付いていた直子に

直子、ちゃあんと見ときなさい。

と念を押した。直子は直ぐ座りなおし、

はい、おっしょうさん。

と返した。菊華の目に涙が浮かんだ。直子の仕草からか、千登勢さん、福寿さんへの、母の思いやりにか、菊子へのそれか、それとも、座長への追悼の気持ちからか、とにかくわからなかったが、嬉しい思いが満ちた。それを聞いてた吉之介も頭を下げた。

父には少々面映いかも知れませんが、それぐらいで丁度いいんです。見せ付けてやればいいんです。

そういって吉之助は笑った。息子吉之助、新座長吉之介、両方がそういわせた。

菊華菊蝶は、初めて出会ったときの曲を踊ることにしていた。座長が引き合わせ、一対の蝶が重なり合うように踊って今日があった。

母と菊華、その他舞台設営の者を残して、私たちは追悼公演宣伝のために街へ出た。そんなことは今までしなかったのだが、なんとしても沢山の人に来てもらいたかった。

高遠吉弥追悼公演を明後日、午後２時より朝比奈座にて行います。皆々様、多数のご来演をお待ち申しております。

商店街中央で吉之介が呼ばわった。扮装を凝らした横を、人が通って行く。私たちを珍しそうに見ては通るのだが、立ち止まったりもしない。私は通路中央に茣蓙を引いて、履物を脱いで明治一台女を踊ってみせた。女子高生が、ふあー、きれい、と言って騒いでいる。店先で鉢巻姿のおじさんが、腕組みをしながら見ている。

とざい東西、明後日演じまするは、故高遠吉弥ゆかりの、恋時雨闇太郎、菊華菊蝶、竹原遊穐の舞踊、国定忠治山形屋の段にござりまする。皆様多数の御来演ご来場をおん願い上げ奉りまするー。

信吾が声を嗄らして口上を述べる。その横を車が通り、人が行く。それでも私たちは歩き、車で移動し、口上を述べて回った。そして、その手ごたえのなさに打ちひしがれながら劇場に帰った。だがそれでも、公衆浴場の主人に、一日限りのポスターを頼むと、いいよ、貼っといてあげるからおいときな、と言ってくれた。八百屋のおじさんもポスターを手に取ってくれた。私たちは街の店々に頼んでまわった。ほう、きれいだね、これ、あんたかい、テレビで見たことあるよ、そういってポスターを広げ、店先に直ぐ貼ってくれた人もあった。車は郊外も山の中も回った。人気のない畑に信吾の声が響いた。

翌日、座員全体で通し稽古をした。照明と立ち位置を確認し、信吾が中心になって芝居をチェックする。闇太郎では、最初に演劇舞踏集団高頭組が出てくる。体育屋が仲間を連れてきて、派手なアクションの見せる。暗闇に呼子が鳴り、御用だ御用だの声が連呼される。その中、花道に盗人被りの黒装束が現れ、いきなり側転バック転を繰り返し、舞台上手に登場する。途端、仮花道を鉢巻にたすき姿の追っ手が走ってくる。御用だ！追っ手が舞台に達する前に、盗っ人は藪の陰に隠したトランポリンで家の屋根に飛び上がる。通り過ぎる追っ手、覗き見る盗っ人、それを見つけて引返す追っ手、途端に盗っ人は顔を引っ込め、隠れる。追っ手は家を囲むが、その後ろをそろりそろりと盗っ人は逃げてゆく。気付くと追っ手が追いかけようとするが、盗っ人は客席にまぎれてしまう。仮花道を走り抜ける追っ手たち。と、上手の袖から下手へ盗っ人が逃げる。花道を駆ける追っ手たち。が、盗っ人が反対側の仮花道の客席からそろそろと上がり、追っ手を振り返って悠々と引き上げる。焦る追っ手は息も絶え絶えで、脚をもつらせながら仮花道に回る。それを舞台の屋根から見ている盗っ人。右往左往する追っ手と、何人かの盗っ人役が、リズム良く、もぐらたたきの追いかけっこをやってみせた。それが信吾の新しく付け加えた演出だが、新座長の吉之介はそれを許した。いいんだよ、親父のやってた通りにやらなきゃ、追悼公演にならないってことはない。新しいものを付け加えて、初めて追悼になるってもんさ。屋根に上がったところから吉之介の芝居は始まるが、彼は信吾を認めていた。

　　舞台の家の壁がするすると抜かれ、中の親子の芝居がはじまる。
　　どうしたんだろうね。
と、母親。
　　何か捕り物があったみたい。
と娘が寄り添う。その科白の間に屋根の盗っ人は下へ降りようとするが、呼子が鳴ってまた身を隠す。
　　兄さん、大丈夫かしら。
　　どうしてるんだろうね。
そこへ半次郎おじ演ずるやくざの親分が手下を連れて乗り込んでくる。
　　留吉やぁ、帰っているかい。
そこからあくどい賭け場の借金の催促が始まり、なんならその娘さんの体で払ってもらってもいいんだぜ、と、これはありがちなパターンだ。だがこれで良い。決まりきったパターンだからよくわかる。それを、屋根の闇太郎が聞いている。そして当然それを闇太郎が助ける。やくざに借金の鐘を叩きつけ、なおごねるやつらをやっつけて追い返す。そして兄の留吉をたしなめ、もっとおっかさんに孝行しておやんなせい、と説教口調で言う。
　　なに言ってやがんでい、盗っ人崩れの闇太郎が、義賊気取りで俺に説教か。笑わせるんじゃねいやい。
　　そう聞こえたらごめんなさいよ。あっしは捨て子でござんした。それがもとでの、世をいつわった稼業でござんすから、人様に説教垂れるご身分じゃござんせんが、あっしは世間じゃ恋時雨の闇太郎と呼ばれておりやす。
　　それがどうした。
　　その闇太郎の二つ名は、・・・、本当は、母恋時雨の闇太郎でござんす。
これが極め台詞だ。吉之介あにさん、あんたはやっぱり貫禄が違う。
　　私たちの舞踊ショーの順番だが、信吾がシラノのときのごじんじょ太鼓を加えてきた。ごじんじょ太鼓の前で私たちに踊れというのではなく、別に、バレリーナあがりにあのボレロのように踊れというのだ。単調に繰り返されるテーマに乗って様々に体を回転させ、ジャンプし、着地と一緒にまた体を回転させる。その回りをまた体育屋の仲間が回り、跳ぶ。規則正しいリズムじゃないから難しいと、バレリーナあがりは気息をふるったが、できるはずだの一点張りで押し通した。体育屋」と仲間が跳んでみる。合わない。だが身をかがめて這いずり回り、おー、という半次郎おじの掛け声のとき、一斉に跳んでみる。また太鼓に合わせて回り、跳ぶ。まあ、ご愛嬌だよ、やってみて、と

信吾がバレリーナにいうと、輪の中心の一点で体を回していながら掛け声と共に高く跳ぶ。なんか、鬼の再来と見えた。

　その後を踊れなんて、ちょっと無理だよといったが、綺麗でいいんです、きれいに踊ってください、お客様はほっとします、と、ぬけぬけと言う。しかし私たちは必死だった。なんとか私たちの世界に客を引きこまなければならない、あくの強い前の出し物を越えて違う世界を見せなければならない。衣装を凝らし、振り付けと息を合わせ、懸命に踊る。それが信吾のねらいだったようだ。しかし、私は次の母の地唄舞が心配だった。たった一人で地味な舞をやって、大丈夫か。舞台には行灯一つだけだ。照明も全体をうすぼんやり照らしてくれれば良いという。別にスポットを当てたりしないでと言う。そのうえ、稽古でも母は取り立てて踊ったりしなかった。むしろ菊子の地唄と箏の演奏をあわせるようにと気を使った。時間がない。わたしははらはらするだけだった。

私、こわい。
と菊華が言った。今度の舞台がこわいというのだ。自分の方も、母の地唄舞の方も、今までどおりじゃいけないと思う、なにかがなければ自分を支えきれない、そういって顔を伏せた。そのことは私も感じていた。私は、男が女になる、女装する、そのことでかもしだされる女形の色気の凄み、女が滲ます色気とは違う凄みを解っていた。だが、それは違う、限界がある、とも思い始め、その迷いが菊華に不安を感じさせたのかと思った。そんなものは年とともに飽きられ、色褪せる。だが、と思う。歌舞伎の女形は、男が女を装うことで終わっていない。彼らは、その演目の女を演じ、その役が女だっただけだといわんばかりだ。自然、不自然を越えて、演じる役柄が舞台に立っている。それゆえ、常は立ち役でも、女の姿をした登場人物がそこにいる。私たちの踊りがたとえ一曲八分のものでも、そこには曲に込められた女が生きている。それを踊ろう。私は菊華にそういった。小器用に、小賢しく、見せ付けるような踊りをするのではなく、泣いてる女ならその悲しみを踊れたらと思う。そういうと、ふっと、菊華の肩の力が抜けた。衣装だ振り付けだってことじゃないですね、心ですよね、私、おっしょさんをみてるとそうおもうんです、若ければそれだけできれい、だから、年を取るのがこわい、でも、年を取ると、若さがそがれて、完成された女の美しさがでてくるんです、わたし、そんなおっしょさんがすき、そうなりたいと思うんです。えっ、と私は菊華を見直した。なにか、私には見えてないものが、菊華には見えているようだった。

吉之介座長も苦しんでいるようだった。そこはもっと軽く、そこはもっと軽妙に、肩の力を抜いてください。国定忠治は絶対の強さなんですから。山形屋なんか、屁の河童の屁なんですから。信吾が何回も駄目を出している。それでも力が抜けない。追悼公演だと思うから、余計なんだろうと思う。山形屋なんか見ないで、おう、やっこ、と鼻先で言やぁいいんです。忠治が舞台の真ん中で、煙管を仕舞いながら、上手の体育屋に、おい、体育屋と呼びかけてみる。いつもの語調が帰った。そうです、それで、やっこ、です。信吾が頷く。信吾さーん、俺りゃ、やっこですかあ、というのへ、座長が呑み込めたんだからとかえす。へーい、と体育屋。

あとの暗闇の立ち回りはさすがだ。そこは安心してみられた。信吾も、いいですねぇ、槍、もっと座長にタイミングを合わせて、後ろからの切り込みももっと早く、座長、いいです、おねがいします。ん？と、信吾を振り返り、袖で手を隠して旅の足取りで、花道を行く。

あとは明日だ。

さあ幕開けと意気込んだ気持ちで、劇場の入り口に立つ。不安な気持ちとは裏腹に、ご贔屓筋の花輪も並んだ。体育屋が、お客様がお並びですと声を張り上げた。木戸の向うに人の列が見えた。我々も木戸から客席入り口まで居並び、客を迎える準備は出来ていた。お客さま、はいりまーすの声が飛んだ。初老のご婦人方が入ってくる。一番に迎えた吉之介新座長に、ご婦人方が手に花束をもって頭をさげた。予期はしていたが、頭を下げたご婦人方がまごついた。吉弥座長の遺影はなかった。入り口から客席までの壁に、この地での過時のポスターは貼ってあった。若い座長が何葉ものポスターの中で見栄を切り、ほほえみ、笑いかけていた。俺達なんてこんなもんよ、と座長が言っているようだった。仕方なく、その前にご婦人方が花を置く。慌てた。ちょっと待ってと座員スタッフを奥に駆けさせ、テーブルを三体持って来させて急遽白い布を掛けた。私たちは座長をみくびっていた。自分たち自身もみくびっていた。花を持ち、悔んで見送ってくれる人などいないと思い込んでいた。

吉之介ちゃん、お父さん何時亡くなったの？ひどいじゃない。お葬式にだって参列したかったわ。
と言う人もいる。吉之介の手を握って涙する人もいる。遺影代わりのポスターに頭を下げる人もいた。数輪の花の束が山になった。涙が頬を伝わり、目が潤んで前が見えなかった。大変だ、どうしよう、今日の芝居、あれでいいんだろうか、と震えが来た。

お出迎えが終わり、幕を開けねばならない。吉之介もおなじ気持ちだったようで、座長、時間です、の声に、しばらく答えられなかった。が、ふいに自分の頬を張り、気持ちを固めて頷いた。木がちょーんと鳴り渡り、どろどろが響いた。闇太郎が花道を走っている。吉之介も舞台の家の屋根に隠れた。花道の闇太郎が隠してあるトランポリンを巧みに使って、屋根に跳び上がり、舞台に降りる。追っ手をからかって屋根に隠れると下手から現れた闇太郎が仮花道を全力で走って逃げる。会場は笑いが溢れた。タイミングよく上手が隠れ、下手から顔が突き出て、花道の出口で闇太郎がお尻ぺんぺんをする。追っ手が舞台中央でへとへとになって全員倒れこむと、あちこちから一辺に何人もの闇太郎の顔が突き出てくる。わっと驚き、追っ手はてんでんばらばらで一目散に逃げ出してしまう。すっぽんやせり上がり、空井戸があれば、もっと面白い趣向が出来たのにと信吾がぼやいていた。だが、その分、器械体操の技が光った。吉之介が屋根の上に立ち上がる。

きちのすけっ！

やみたろう！

掛け声がかかった。そして、最後の
　母恋時雨の闇太郎でござんす。
を決めて、終わった。
　きっちゃん！きちのすけー。かっこいー！
と声が飛んだ。
　大急ぎで口上を述べなくてはならない。

　舞台高こうはござりまするが、高遠吉弥追悼公演にお運びいただきました皆々様に、深く御礼を申しあげます。
　父、吉弥、昨年病を得、やむなく舞台を降りましたこと、ご存知の通りでございました。しかしながら、命取りとめ、懸命にリハビリに取り組み、今一度、もう一度皆々さまにお目にかかりたい、舞台に立ちたいの一心で不自由な体を立てなおし、動かぬ手を動かし，立たない足で立って一人芝居が出来るまでに一度は回復いたしました。ところが、その喜びも束の間、心筋梗塞が父を襲い、見取るものとてもなく、ひっそりとひとり逝ってしまいました。
　旅から旅のみ空の下、思うような葬儀も営んでやれず、心残りでありましたが、ご当地のご好意に甘えまして、今日吉弥追悼公演を行えますことは、残されたもの一同、喜びの極みでございます。
　どうかどうか、父吉弥をお忘れなきよう、おん願いもうしあげまして、みなさまへのお礼とさせていただきとうございまする。
本日は誠に有難うございました。
吉之介は深々と頭を下げ、口上を終えた。
　きっちゃん、きちやちゃーん　きちのすけー、きちやぁー
大向こうが飛んだ。そして、この大向こうは、後でもう一度波になって飛んだ。
　口上の者が引くと、ごじんじょ太鼓がなりだした。闇から鬼が二匹、踊り出た。半次郎おじと、今日は体育屋だ。その上手から、ボロにつつまれた体育屋の仲間が這い出てくる。バレリーナだけが白タイツ姿で円陣の中央を回る。跳ぶ。伏せては小刻みに跳び、一気に高く跳ぶ。おーっ！鬼が吠えた。そしてしばらくの沈黙、暗転。宝石をちりばめたような、しんとした静謐な舞踊をと、信吾は言っていた。私たちは震えていた。宝石だなんて。今までの私たちなら、ルビーやサファイヤなんかにはなれず、金紙銀紙のぺらぺらだ。そう思って、暗転の闇の中、舞台中央に立ち、二人で震えた。観客席のお客様の顔が見える。そこには先ほどの余韻がたなびき、次の事には思いがいってい

ない。闇に無表情な顔を向けているだけだ。この舞台に何かを作り出さなければならない。この暗転が変り、照らし出されると二人の繰り広げる舞踊で、伝えられるものは全て伝えなければならない。悲しみは悲しみとして、それを昇華し、美しく伝えなければならない。踊るとはそういったもの。そこには、うまいだろう、上手だろう、きれいだろうと見せ付け、見せびらかすなんて、在ってはならない。媚びもへつらいも無用のもの。ライトがきた、イントロが流れる、心がそよいだ。菊華を見る。客の顔が消えた。体で覚えたもので、体が踊る。曲の悲しみが私たちの悲しみとなり、指先からさわさわとそよぎ出る。体が波紋を起こし、波になる。舞台と菊華しか見えない。私たちは踊った。初めて踊れたと思った。ふと観客席を見ると、お客が泣いていた。そして一杯の拍手が沸き起こった。私たちは暗転の闇の中で崩れ落ちそうになった。

場内アナウンスが竹原遊穐の演目を告げた。

地唄舞　雪　　黒髪

箏　　竹原久恵　　三弦　　中川菊子

それだけを告げた。下手に、袴姿の男が二人して屏風を立てる。その前に箏、三弦。そしてその先に行灯ひとつを丁寧に置く、。明かりは蝋燭だけのよう。行灯の明かり程と言ってもいい。袴姿の男二人が舞台を下がると、入れ替わりに久恵、菊子が箏、三弦の後ろに座り、演奏の準備をする。それが整うと竹原遊穐が和傘を手に、行灯の脇に立つ。何がどうというのではない。それだけで芸の確かさがあった。見栄を張るのでもなく、虚勢を張るでなく、こびるのでもない。何かを見せようとか、見せ付けようとかでもない。そんなものを全てそぎ落として、日本舞踊の型の中にいながら無理なく自由自在に踊る、その芸の確かさがあった。陰影のなかに、薄桜のお引き摺り、黒の帯が溶け、黒髪の鼈甲のかんざしが、うす闇ににじむ。口元の紅が美しい。若い女の媚びる美から脱却した美しさがあった。ああっと、私は思った。おしさんの言ってたことが、今わかりました。おしさん、幼かった時のわたしは、母をおっしょうさんとも呼べず、おしさんと呼んでいた。それが思わず口に出た。抑えつけられ、いちいち直されて、また手の甲を叩かれた。足の送り方が違うといわれた。わたしはそれに反抗し、踊りをしなければならない家系を嫌った。それがいま、その身に付いたもので踊り、生きている。舞台にも立っている。菊華の言葉も解った。直子が今、かねての私のように教わっている。

踊り終わった母の元へ行き、

有難うございました、おしさん。

と思わず言ってしまった。母は不意を突かれたような顔を一瞬見せたが、

直人、あなたもいい踊りでしたよ。破れかぶれみたいでしたがね。

と言ってくれた。菊子は三弦を仕舞い、母の前に手をついた。だが言葉が出ない。頬を涙が伝い、泣いていた。その背を母が立って、なでてやった。そして、

　　私もお金をいただいているんだから、お見送りに出たほうがいいかしら。

と私に訊く。

　　おしさんのお考えで。

と答えた。

　　だが、お見送りのときの遊穐の人気は大変だった。

　　竹原せんせ、すばらしかったわ。わたしにも教えてください、地唄舞。

そういって色々な人が色紙を母にねだった。母はどう書いていいか迷っている風だったが、

　　福寿

　　千登勢

　　遊穐

　　　　の舞

竹原　遊穐

と書いた。

初手から矢倉の彦六で押し通そうと思ったが、
十手に恐れて名を隠したとあっ ちゃぁ
忠治の名が廃らぁ。
俺の名前を言うから、肝をつぶさねぇ用心と
耳の穴かっぽじいってよく聞けよ。
俺の名前を手のひらに書き、
三度いただいてペロリとなめれば、
ほこりが落ちる、熱病が治る、
男の護り本尊、関八州の赤城山上州は
西郷里国定村の住人、
上州縄張り国定の大親分長岡忠治とは
俺のこったぁ。よく面を見よ

と吉之介の小気味良い科白が舞台に響き渡った。半次郎おじの山形屋が震え上がって肝を潰す。へへいー、と山形屋がひれ伏し、子分が箒を取り落とす。それから先は忠治の独壇場だ。山形屋に年寄り爺さんと孫の路銀を出させ、

おう、やっこ

と子分を顎で使い、かご屋を呼ばせてふたりを送ると、いつでもいいから、だんびらかざしてやってきなと言い残して山形屋を出る。軽妙でありながら凄みがあり、有無を言わせぬ圧力をかける、やはりこの忠治の押し出しの強さを演じきれるのは、吉弥の芝居を見てきた吉之介だけだとおもった。忠治を持ち上げるかご屋の、虎の威を借る狐の軽さを、軽くは見せない演じ方で出来るのは信吾だ。体育屋がやっこの軽さを見せる。こわもての女房が、おまえさん、随分男をお下げだねぇとたき付ける。忠治も人の子だと思い立つ山形屋も山形屋だ、相手は忠治だ、やめといたら。

暗い舞台で、子分どもが槍をしごく、藪に隠れる。忠治を待ち伏せるなんて、おこがましい。

薄暗がりの仮花道を、忠治が提灯を下げてすたすたと歩いてくる。舞台下手にかかると、不意に槍が突き出される。それをさっと避け、もう一度繰り出された槍の穂先をむずっと掴んで、後ろから切りかかろうとする三下に突きつける。槍を引き外し、つんのめさせて提灯を横にし、炎で提灯を燃やして一瞬明るくして敵を確かめる。燃え尽きようとしている提灯をなげ、暗闇が襲ってくる中、三度笠の顎紐を解き、道中合羽を脱ぎ捨てる。後ろから来る三下を抜き打ちざまに切り払い、前の刀を払って切り下げ、後

は群がる奴らを薙いで行く。模擬刀とはいえ、腹に巻いた濡れ新聞を叩き、ピシッとつよい連続音が響く。構わないから本気で切ってくれとは言ってたが、痛いと思う。切られた三下どもが声もなく倒れてゆく。忠治は刀を納め、袖をはらって、何事もなかったかのように旅の足取りで花道を下がる。その花道に、

　　きちのすけっ！たかとう！

と大向こうがかかる。

　　きちのすけ

その掛け声に

　　きっちゃーん！きっちゃーん！

と女性の声があがった。

　　きちやさーん！きちやさーん、きっちゃーん！

　　きちや、きちや！

拍手が沸き、男の声も吉弥を呼ぶ。しゃりっと花道の幕が開き、すたすたと旅の足取りのまま忠治が消えた。

ヒーロー　後書き

　ちょっとおこがましいのですが、一言書き加えます。この文章は、始めはほんの思い付きでした。枚数も１０ページ行くかどうかの軽いもののつもりでした。それがのめり込むように深みにはまり、くどくどしく書き連ねてしまいました。こんなものを書くと、大学の文芸部の批評会では、自己陶酔　といわれたものです。なんかそんな声が聞こえてきます。あの時のままの顔々。友人たちは皆若いまんま。私だけ老けてる、そんな情景が見えてきています。

墓参の日

何年ぶりかは、指を折ってもわかる。この町を出て行ったときも、この駅から電車に乗った。見送ってくれる人もなく、この地に取り残された二人、妻と私は、故郷を追われるとか捨てるとかの感慨も無く、電車に乗った。行く先は娘のいる都会の郊外。そこに中古のマンションを買ってある。見かけこそ、そこそこの外観だったが、エントランスのガラスの扉の鍵は古びて開きにくく、扉を押しても年取ってでは重くて仕方がなかった。郵便受けには何やら紙切れが、整理もされず入れっぱなしで放置されている。これから毎日、新聞もここまで降りて取りにこなければならないと思うと、億劫さが先に来た。階段を上り下りするのは、私だってたまらないのだ。こんなことになるとは思いもしなかった。

妻は中年を過ぎると、急に太り、女性にありがちな膝の痛みを訴えだした。階段は登らない。あれほど清潔好きな人が、掃除を嫌がる。膝が痛いからだという言い訳を信じようとおもいながら、定年間近かの私は不安におののきながら仕事に通った。

ところが定年になった途端、母が倒れた。母は気丈な人だったからずうっと一人で暮らし続けてきていた。その母が、膝を悪くしているので手術が必要といわれ、病院に入院した。そして術前の検査で、もっと悪い病気が見つかった。皮肉なもんだと泣くほかなかった。もちろん、膝の手術には支障が無いとの医者の判断で、そちらの方は滞りなく行われた。だが、医者がもう一つの重大な病いの方の治療をするために説明をすると、それはどうしても手術を受けなければなりませんかと母は問うた。受けてくれよ、かあさん。六十も過ぎた男が母親に懇願した。もっと生きててくれよ。親孝行はこれからじゃないか。

しかしそれが余計だった。母の寿命を半年に縮めてしまった。だが、その半年が、私には地獄だった。母の手術の説明には私と妻も立ち会ったのだが、病名の宣告にも妻は殆ど無表情だった。妻が母を嫌っているからだと思いたかった。しかし母の主治医が、一度奥さんも診察されてはどうですか、余計なことですがと、私にそっと告げた。私は疑念が現実となることにおののいた。それでも私は妻をまるで騙すようにして診察してもらった。

それからの毎日は、二軒の家と入院した母の世話で、寝る暇もなかった。朝、出勤しなくなった私に朝食を作らなくてもよくなった妻は、もうそんなに早く起きなくてもいいじゃないと言って、パジャマのままで座敷に座り、動こうとしなくなった。母が入院していることを忘れていた。私は怒れなかった。とにかく早く朝食を作り、妻にも食べさせ、自分も飲み込むようにして済ませ、洗濯物を持って病院に向かった。今日は何

時からこんな検査、昨日の検査の結果は明後日わかる、隣のベッドの人は明日手術と朝食を済ませた母は、まるで屈託無くスケジュールを語るように話した。誰かに手術日、知らそうかと言うと、母は首を横に振った。早くに父を亡くした母は、父方とは疎遠になり、自身の兄妹も親が死んでからは縁遠くなっていた。しかし知らさないわけには行かないだろうというと、本家の弟にだけ言ったらいいと答えた。なんと言う皮肉だ。
私は、この病院での母との会話だけが安らげる時間だった。だから家に帰らなければならない時間になると、胃の腑からこみ上げてくるような苦渋が何時も襲ってきた。

家に帰ると、まず妻を捜す。まるで居ないことを願うように捜す。妻は一応着替えていることもあったが、怠惰にパジャマのまんまという事も往々にしてあった。台所に私が用意しておいた昼食は、それでも食べてなくなっている。その食器はいつでも置きっぱなしだった。いや、それでもまだいい方
だ、これぐらいの手間の掛かり方で済んでいるうちはまだいいんだと、自分で納得するしかなかった。助けてくれる人もなく、病院の母に本当の事を言うわけにも行かず、私は一人こんなことを続けるしかなかった。

母の手術の日、思っていたよりも多くの親戚が病院に集まった。術前処置を済ませて母は、ベッドに横になっている。はや少し朦朧となっている母の横で、私は対応に追われた。そのなかで、私の妻がいないことに誰かが気付き、＊＊さんは？と聞かれた。私は言葉を濁し、ほかの事を言った。

そんな人たちも、母が手術場にはいると、それぞれ帰って行った。出て来るまで待っててくれるんじゃぁないのか、帰る人の背中に私は無言でそう言った。跡取りの叔父夫婦と私が手術場の控え室で待っていた。話すことも途切れ、重苦しさに耐えて待った。手術は、聞いてた時間より長くかかった。手術場から移動車で出てきたとき、母の顔色は無かった。一緒に出てきた主治医は、全力を尽くしましたとだけ言った。私は聞き返せなかった。

母は手術のあとの痛みには、戦前の人らしく一言も泣き言を言わなかった。手術の翌日から早速トイレには歩いて行けと言われても、じっと腹部を押さえて歩いて言った。顔は痛みにゆがんでいる。それでもゆっくりと、倒れぬように歩いて行く。歩くことが明日の生を約束してくれると信じて歩いて行く。私は何もいえなかった。自分の頬を叩いて、それから笑顔を作り、快活をよそおって母の前に出てゆく。それしかなかった。

だが自宅では、妻の病に付いての私の認識の甘さが露呈していた。妻は次第に混乱し、もはや人の手を借らねばどうしようもない状態になった。私は病院のカウンセラーに相談し、役所にも頼みに行った。そして、そんな混乱の中、一時預かってくれると

ころをやっと確保し、母の看護に専念できるようになった。だが、思えばそれも誤りだった。そして、多分その時、何をしても正解は無かったのかもしれない。母に対しても、妻に対しても正解なんかなかったと、今も思う。

夜中に電話が鳴った。妻の徘徊を知らせてきた。自宅に帰ってはいませんか、心当たりを捜してくださいと、施設の人は言う。私は夜陰を泳ぐようにして、妻を捜した。そして、家からはるか遠くまで来たとき、今度は携帯が鳴った。母の様子が急変したといってきた。私に震えが来た。夜の闇の中、私は一人だった。

とにかく妻の施設の方に電話を入れ、母の病院にタクシーで向かった。行く先を告げると、運転手の声が怯えていた。私の何かがこの人を怯えさせた。私は母の死に目に会えなかった。

　　医師と看護師が、母の横で深々と頭を下げた。私は言葉も無かった。

　　＊＊時＊＊分、ご臨終です。

涙もでなかった。看護師が後の処置をいたしますので、別室でお待ちください、と言う。私は無言で部屋を出た。そしていま、母の顔を見てなかったと気付いた。思考が止まっていた。

　　部屋を出て、私は薄汚れた闇の中で、妻のいる施設と娘に電話した。

　　ばあさんが死んだ

　私はその後電話しなければならない所があった。先に調べておいた葬儀社だ。母の名前と年齢、病院名を聞かれた。一時間後に、お迎えに参ります。その声は、なぜか私を落ち着かせた。

　　一時間後に＊＊社が迎えに来るそうです

死亡診断書を持ってきた看護師に、私が言った。看護師はうすぼんやりと照らし出された闇を見回した。誰も居やしない。誰も呼んでないのだから。そのあと、私は一人で待っていた。

　　裏口からストレッチャーと男が二人入ってきた。

　　＊＊さまでしょうか

私が頷くと、

　　この度はご愁傷様でございます。ご母堂様をこれからお連れ申し上げますが、その前にご自宅へお連れ申し上げた方がよろしいでしょうか、私どもの会館へお連れしましょうか、お教え願いたいのですが

戸惑った。自宅へ帰るものと思っていた。だが、会館へ連れて行けるなら、なんの準備も出来ていない家よりはずうっといい。

　　会館へお願い致します

　　どなたか、ほかにおられるでしょうか

私は首を横に振った。

　　そうですか　　最近はこういうご事情の方も多いです　　おさびしいでしょうが、会館へお連れ申し上げます

そういっているうちに、母の乗ったストレッチャーが横に止まった。医師と看護師が付き添っていた。私は彼らに頭を下げ、ストレッチャーの行く方に付いていった。そしてストレッチャーが車に納められている間にもう一度、付いてきた医師たちにお辞儀をした。

動きだした車の中で、
すみません　＊＊園にちょっと寄ってほしいんですが
と言った。なにか怪訝そうに見返してきたが、少し事情を説明し、
園の人が心配して待っていてくれるらしいので
と付け加えた。
園の扉のインターホンを押すと、はい、という声が返ってきた。
＊＊ですが
と名乗り、自動でドアロックの開く音を確かめ、中に入った。ロックが後ろで閉まる音がした。
お悪かったんですか　お辛いことでした　　奥様は部屋でおいでます
そういって、男の職員が案内してくれた。部屋に入ると、妻はまだ椅子に座っていた。私の顔を見るその表情に感情がなかった。そして、突然、私の中で何かが爆発した。私は手を振って妻の頬を叩いた。
間に合わなかったじゃないか　なんでだ　なんでこうなんだ　なにか俺が悪いこと、したのか　いってみろ
私は羽交い絞めにされていた。顔を庇い、妻が部屋の隅で震えていた。
もう二日ほど、妻を預かってもらいように頼んで、私は会館に向かった。屋にのなかをライトが照らす。よく知った道なのに、なんだか全然知らないところのような気がした。
会館に着くと、男が二人でストレッチャーを降ろし、裏口から入っていった。無言であった。エレベーターで二階に向かう。遺体を納棺して安置するのかと思っていたが、控えの部屋のようなところで、母は布団に寝かされた。
お疲れのところを恐縮ですが、明日のことで打ち合わせをしておきたいのですがよろしいでしょうか
先ず死亡診断書をいただきます　それからご宗派をお教え願いますでしょうか
ご参列のお方の人数は・・・
ご改装のお方の、後のご会食などは・・・
本葬が終わった後　初七日も一緒に・・・
お棺の・・・
こまかいところまで聞かれたが、どうしてだろう、耳障りじゃなかった。その打ち合わせのあと、私は一人控え室に残された。この会館の人間も居なくなったらしい。部屋に隣にお風呂もあります。コーヒーも無料で飲んでいただけます。お布団もこのおしいれに・・・。なんだ、ここは旅館か！説明を終えて出てゆく職員の背中を見ながら、そ

う毒づいた。それでも私は母の側で一人取り残されたことには変わりなかった。母の枕元に渦巻いた線香がある。昔のようなわけではなく、それ一本で何時間も大丈夫らしい。わたしはそれに火を点け、蚊取り線香のように中心を棒の先にぶら下げる。これもたびたび付け替えることのないようになっている、太いろうそくにも火をつける。火の元には、お気をつけください。職員が言ってた。そう重いながら壁にもたれ、無音の中でひとり、時間の過ぎるのを待った。それしかなかった。

部屋の外に誰かの気配がして、私は半睡から戻りたくもない現実に引き戻された。肌寒さに震えそうだった。

おとうさん

今何時だ

娘と、孫を抱いた婿が部屋に入ってきた。

おかあさんは？

施設に預かってもらってる

なんで、こんなになるまで、一人で抱え込んでたの

・・・、葬式は１１時からららしい

お父さん、休んでください

孫を抱えた婿が言う。私はこくりと頷き、目をつぶった。意識が急に薄れて落ちて行く。死ぬってこんなふうなんかなあ・・・、そう思って、解らなくなった。

なにか話し声がすると気が付くと、母はもう納棺されていた。

着替えてね　　最後のごあいさつ、＊＊さんに頼もうか

娘が風呂敷包みを解きながら言った。私は首を横に振った。母の葬儀だ、私が送ってやらなくっちゃ、と思った。

葬儀の式次第は覚えていない。

さいごに　もしゅ＊＊から、ご参列いただきましたみなさまにご挨拶申し上げますなにをどういったか、これも覚えちゃいない。頭を下げ、位牌を下げて、それなりになんか言ったんだろう。

父も母も、この世に何も残せませんでした。名前も無く地位も無く、財産とも無縁の一生でございました　残せたのは、この不肖の息子ただ一人でございます　その子がひたすら平穏に過ごせるように、自分が我慢してうまく行くなら、じっと我慢しようと勤めて今日までいきてきた母でございました　その母に代って、みなさまに御礼申し上げます　お世話になりました　有難うございました

そんなことを言った覚えがある。

葬儀が終わって娘達も帰った。なにか言い置いて帰ったとは思うのだが、明日は妻を引き取に行かなければならないと思い込んでいた。母の家に祭壇を作り、自分の家を片付けて、近くのコンビニに弁当を買いに行く。悲しくっても食わなければならない。涙は父が亡くなったときに流しつくした。母に逝かれたといって、空虚な意識しか今はない。

　無理を言って、施設には妻を預かってもらっていたので、明日は妻を迎えにいかなければならない。私の意識の中でそのことだけが鮮明だった。この世で私は一人ぼっちだった。ぼっちと言う言い方は定年を迎えた年齢の男には、いかにも子供っぽいと思えたが、それしか思い浮かばない。自分が生まれた土地にも関わらず、私は見知らぬ土地を漂流しているようだった。その街角を曲がると、あの建物があるとは解っている。が、そこに誰が住み、どんな暮らしをしているかは知らない。今まで知る必要も無かったのでそうなんだといえば、それまでだ。定年のあと、私は何をしてきたのか。母が倒れ、妻の異変が顕在化し、それに押し流されて毎日をすごした。そんなことを考えながら歩いていると、体が横に倒れそうになった。たたらを踏んで踏みとどまる。背後で自転車の急ブレーキの音がする。

　おっさん　気い付けいやぁ

学生が私の横を自転車ですり抜ける。急に爆発しそうな怒りを感じ、顔を横に振り向けると、私はまた脚をもつらせ、倒れてしまった。突っ張った手が痛い。その痛みに、涙が流れた。年取った頬に涙が流れる。ああみっともない、見苦しい。そう思っても、声さえ漏れそうだ。私はのろのろと立つ。機敏になんか立てやしない。それでも、母の顔が思い出され、忘れていた涙を流した。

　家に帰り、一人になると涙も流れなかった。明日は妻を迎えにいかなければならない、そう繰り返しながら何時の間にかいぎたなく寝てしまっていた。

　朝、

　お父さん　大丈夫？今日はお母さん　迎えに行くんでしょ

電話口の娘の声が、からっぽの頭に反響をくりかえす。意味が解らない。

　大丈夫？お父さん

　大丈夫だ　母さん、迎えに行く

壁に縋り、ゆっくりと立つと体が浮き上がるようだ。足が船の上を歩いているように感じる。私は台所で水を飲み、ついでに顔を洗った。水の冷たさがこたえた。手に触った無精ひげを、電気剃刀でそり、髪を整える。撫で付けるほどもなくなった髪だが、見苦しくはない様にしておかねばと思ってきた。年相応に、

色々なものを失ってきた。歯であり、目であり、髪も、そして父と母、仕事、子は手元を飛び立ち、今また妻も。・・・、私は何をしてきたのか。そんなことを思いながら外に出て車に乗り込む。振り返ると、私の家だ。今までの一生をかけてローンを払い、やっと借金が無くなった私の家。人の、なぞとは言わない、私の一生なんてこんなもんだ

。しかし、これさえも何時取り上げられるかわからなかった。借金を返し終わった今でも、人のもののような気がする。この家の中で子供を育て、私も妻も年取ってきた。そして今、一人で見上げる私の家は、ぬけがらのように見えた。

施設に行くと、係りの人が

きのう　むすめさんがみえられました　　おまごさんを　とてもかわいがっておられました

と言う。そうか、会って帰ったのか。そう思いながら、いつもの妻を迎えに来たと思ってしまっていた。笑っているとか、何か話をしているとかの妻だ。

個室に入り、椅子に座った妻を見る。

＊＊さん　ごしゅじんが　むかえにきてくれましたよ

係りのものが声を懸ける。表情の消えた顔が振り返った。そこには感情のさざなみさえない。ただ大人しく、従順に言いつけを聞く無表情があった。

たった五日ですよ　それが　こんなですか

妻の前だと言う事情もあるのだろう、職員は黙って、何も言わなかった。

談話室に誘われて、私はその人から話を聞いた。

こういう施設に入ると、一時そうなることもありますが、お家に帰られると回復することが多いです　どうか、お気を長く

どういう意味だ？どうしろと言うのだ？それが解らず、私は混乱した。

なんでしたら　市に相談されて　つぎのこともお考えになった方がいいかもしれません

どこかに入れろという意味か？妻は回復の見込みがないのか。なんとかなるだろう！なおしてくれよぉ・・・。私はなにか信じていた。直せるのではないか、なんとかなる。努力すれば直せる。知識では、無理だとわかっていたが。

つれてかえります

私は妻のいる部屋に向かった。ちょうど食事時であったのだろう、入所者が一同に会して、会議机のような食卓の前に座り、プラスチックの容器をアルミの盆に載せた、学校給食のほうがまだましな昼食をとっていた。その最後列に、車椅子に括りつけられた男がいた。男は介助の女性職員が差し出すスプーンの、一口の食べ物も口に入れず、体をよじり、括られた腕をほどこうと、まるで雄たけびのような声でわめいていた。それは人間の声から程遠かった。耳をふたぎ、その横をすり抜ける。妻は先ほどと同じ姿勢で椅子にすわっていた。

妻との、家での介護の生活が始まった。施設から帰ってみると、妻はトレーニング・パンツを履かされていた。説明を受けてはいたが、いざ現実となるとどう始末すれば

いいものか解らなかった。だが解らないでは済まされない。私は妻を赤子のように寝かし、施設で聞いたとおり、横の２箇所を破って赤ちゃんのオムツのように外し、おおきなウエット・ティッシュで拭ってやって新しいものを履かせた。妻が顔をそむける。黙って下着を履かせ、見繕いをする。妻は両手で顔を被っている。この毎日が、これから続くと思った。

　ヘルパーさんと介護給食が頼りだった。だが、私の食事は自分で作らなければならない。ヘルパーさんが来ているうちに、近くのマーケットに走る。もう決まったものしか買えない。捜している暇がなかった。買った物を手に、走るようにしてかえる。しかし、週３回のこの時間が私の息抜きになっていた。酒の飲めない私は、それが苦痛ではなかったが、気を休めるときがなかった。夜も妻の手首に巻いた紐を、自分の手にも巻いて寝た。そして夜中のオムツ換えとトイレへ連れてゆくことの繰り返し。突然喚き、泣き出すこともあった。しかし、朝起きたとき、妻が寝床に居ないことに驚き、台所に走ると、妻が

　おはよう

と背中でいい、朝食を作っている。震えのくるような恐ろしさだった。

　その朝食は、昔のままであったので、余計に受け入れがたかった。だが、そんなことはそぶりにも見せないようにして朝食を済ませ、

　後片付けは私がするから

と流しの前に立ち、食器を洗った。

　おとうさん　おしごとにいくじかんでしょ　あとはわたしがやっておきますから

仕事？忘れ切っていた。私はどんな仕事をしていたんだろう。そう考えて手を動かしていると、後ろで妻が階段口から

　＊＊ちゃん　がっこうにおくれるわよ

と娘の名を呼んでいる。それがかつての毎日だった。

　妻を外に連れ出すことには、ためらいがあった。危険と人の目だ。しかし外に連れ出すと、なにか刺激になって少しはいい方に向かわないかという期待があった。私は、それが昨日もそうしたという風に騙して、嫌がる妻を外に連れ出した。

　あっちの家に昨日も行っただろう　今日も掃除の続きだ　行くぞ

　おかあさん　おこるから

母は妻を怒ったりしたことはなかった。だが妻の方には、いつもそんな受け止め方をするようなことがあったのかもしれない。

　じゃあ、散歩だ

そういって，いやいやをする妻の手を握り、外に連れ出した。髪は短髪にし、白髪が目立った。化粧もしてない。あの施設の老人達と一緒だ。妻は顔を伏せて歩く。私は構えて歩いて行く。知り合いに見られてもいい、気の毒そうに見下されてもいい、そう気持ちを構え、前を向いて歩く。だが日差しのきつさは眩しかった。・・・、だが矢張り、出会う人の眼差しは突き刺さるようだった。どこへも立ち寄れない。人目を避けてただ歩くだけだ。これでは何の効果もあるはずがないと思うのは、自暴自棄と言うものだろうか。そして、効果？　と疑問にさえ思う。私は妻の手首をきつく握り締めていたようだ。

　いたい

とかすかな声が聞こえた。そのこえにも、思わず腹が立ってくる。私は脚を早め、田舎道を突き進んだ。死のうかとも思った。焼け付く日差しだ。妻と二人、焼きつくしてくれればいいのにとも思っていた。

　おしっこ

妻が言う。なんなんだ、このざまは。そう思うと、涙が流れた。

　うん、うん

と頷き、向うに見える母の家を指差し、

　あそこまでかえったら大丈夫だから

と答える。かあさん、どうしたらいいんだ・・・、六十を過ぎた男が、死んだ母親にすがる。

　はやく　はやく

背中に訴えられる。早く、早く！私も声に出して歩く。早く早く。

無人の家の鍵を開け、妻と走りこむ。ドアを開け、ズボンを下ろしてやって便器に座らせ、もういいぞ、といってドアを閉める。振り返ると、父と母の遺影が掛かっている

。私は妻の排尿の音を聞きながら、泣いた。声を上げての号泣だった。

翌日は、一日妻を施設に預かって貰った。疲れきり、体も頭も動かなかった。予約を入れてはなかったけれど、施設のケア・マネージャーが無理を聞いてくれた。朝、妻を迎えに来た係が私の顔を覗き込むようにした。

大丈夫ですよ、へんなことはしませんから

そういって妻を送り出した。途端、私はへたり込んでしまった。掃除、洗濯、布団干し、買出し、とすることは山ほどあった。そして、そうだ、散髪に行こうと思った。この何ヶ月、ろくに散髪にもいってなく、鬱陶しくなってしまってた。自分のために時間を使うなんてなかった。顔を洗い、服を改めて、久しぶりの外出だ。そう思うと、見慣れた町も安らぐ思いだった。

久しぶりですねえ、おっ、大分のびてます。どうしますか。

いつも通りで。

それで会話が成り立つ。理容師も私があまり世間話をしないことを心得てる。だまって鋏を使い、櫛でとかしつける。私は何時の間にか寝入りこんでしまっていた。

体を起こされ、気が付く。剃刀で顔を当たり、洗髪、調整、そうこうしている間も眠気が襲ってくる。

相当お疲れのようですね。

私は黙って頷いた。そして金を払い、ありがとうございました、の声に送り出され、町に出る。一人だった。そのことに気付く。今、私は一人だ。あの空気のこもった家からも離れ、町を歩いている。

お仕事は？

無職です。

毎日何をなさってますか？

妻の介護に追われています。

今なににお困りですか？

寝られないことです。

そんな自問自答が頭の中に起こってくる。寝られないことですと繰り返す。四時には妻が帰ってくると解っていた。あと２時間、私は少し軽くなった体で家に帰った。することがありすぎた。

妻が車で帰ったとき、私はベッドを整え終わろうとしていた。

お家に帰りたい　帰りたい

って言い続けだったんですよ
と、連れてきた介護の人が言った。
よっぽど　ご主人がいいんでしょうね
いいのか？違うと思った。妻は寝ていても、旅をしていた。我が家が実家であったり、新婚時代の借家であったり、この家であったりする。だが、家にはこだわっているところがあった。だから、家は妻の帰るところなんだろうと思う。私の事は、よその人としか思っていなかった。しかし、娘はどうだろう。妻は自分の孫を抱いて、娘の名を呼んでいた。
＊＊ってママのことだよ。
妻に抱かれながら、孫が怪訝そうに言う。
いいんだよ。＊＊ちゃんがママにそっくりだから、そう呼ぶんだよ。
私がそういうと、孫はすこし得心して妻の膝で遊んでいた。その孫の髪を妻が編む。娘が幼稚園に行くとき、いつも整えていたように、孫の髪を編んでいる。
＊＊ちゃんは　きれいなかみだから
何年前か。妻の旅は、過去にだけ向かう。そのときが幸せだったんだろうか。＊＊ちゃんと娘の名を呼ぶ。
連れ帰られた妻の顔を見ると、仮面をかぶったようだった。また表情が消えていた。私に震えが来た。つい疲労に耐えかねて妻を施設にやったが、失敗だった。介護施設では、老人は食べさせて、風呂にいれ、その間逃げ出さないように建物のドアに鍵をかける。歩かせると転倒の危険がわずかでもあるものは、車椅子にのせて歩かせない。移動は、その車椅子を両手に一台ずつ握り手を持って、荷物を運ぶ台車のように動かす。ホールに来たがらない老人は、これ幸いにベッドに寝かせたままで放置する。解っていた。だが今朝はどうしようもなかった。そしてそれが妻の退行という結果になった。妻はオムツを履かされていた。
オムツ、もってこようか。
そう耳元で、歩きかねている連れ合いに老婆が言ってるのにでくわしたことがある。夫はよろぼいながら答えない。
もう濡らしたん？
ぬれた。
ああまでして生きなければならないのか。車椅子に夫を乗せて外を散歩させている人も見かけた。二人には男の子と女の子がいた。男の子は二十歳前に自殺し、女の子は病気で死んだ。貧しい葬式を二度出した夫婦は寡黙に耐え、夫は工員として働き、定年とな

った。妻は近所でパートの仕事をし続け、夫の定年と共に辞めた。その夫に脳腫瘍が見つかり、手術はしたものの取り切れず、病院をたらい回しにされて自宅療養を余儀なくされた。近所のものの見舞いも断わり、毎日妻は病院に通い続けた。そして何軒かの病院から今また自宅へ帰った。老いとはこうしたものなのか。私は妻を抱え、自宅に運び入れた。

　　大丈夫ですか

連れてきた係りの声が聞こえた。

　私は何の意思も示さない妻を見た。何をすればいいのか、解らなかった。食事も風呂も施設で済ませている。わたしは何もすることがなくて、へたりこむように妻の隣に座り込んだ。

　＊＊さん　くつをかいにいきたいんだけど

妻が私に、子供の出来る前に呼んでた言い方で話しかけてきた。それが素直に耳に入ってくる。おとうさん　ではなく、名前を呼ぶ昔の言い方が今の妻の口から出てきても、なんだろう、違和感がない。

　くつか。買いに行こうか。

そう答え、昔靴を買いに街に行った時のことを思い出した。あの時、妻は迷った。新しい靴なんて、そうそう買えるほど裕福ではなかったから。妻はあの店この店と覗いて回った。店員にあれこれ勧められながらも、まよい続けて店を出る。その繰り返しだ。それを思い出したとき、私は自分の身勝手さを思い知った思いがした。私は自分の運命ばかり見て、自分の不幸だけを嘆いていた。

　そうなんだよ　この人だって　こうなりたくてなったんじゃない

　それに　あんたにはこの人しかいないんだから

そう語りかけてくる母の白昼夢を見た気がした。

　これだって人生　あれも一生　二度はないんだから

更に、そう聞こえて、私は妻に、

　あした、靴、買いに行こうか。

といった。妻が頷く。

　明日だ、明日。

明日行こう、そう繰り返し、心が軽くなった気がした。

　その日から数日して、私は娘に電話をかけた。

　お前に迷惑かけてはいけないって思ってたから、意地でこっちにいたけど、母さんの事を考えると、そっちに行ったほうがいいように思うから、頼むよ。

　妻とこういう生活をするようになって、二年が過ぎていた。娘も心配して、お父さん、無理しなくていいのよ、こっちに来たらいいじゃないと早くから言ってくれていた。だが、私にも親の意地があった。子供に親はいくらしてやっていい、しかし、子供に負担をかけるのは辛い。わたしができるだけのことをすればいい。そう思っての二年間だった。

　娘は自分のマンションの前の賃貸マンションを見つけてくれていた。娘は早速そこ

を契約し、いつ来ていいようにしてくれた。しかし２ＬＤＫの狭いマンションだ。持っていけるものも限られている。自宅も母の家も、売れたら売りたいと不動産屋に依頼しておいた。もちろん、家の中の整理なんか出来てはいない。妻を連れて娘のところに行き、また引き返してこようとは思っていた。

　私は妻を連れて、ＪＲでこの町を離れた。車で行くことも考えたが、向うに行くと、都会では早やその車が邪魔になる。私は一人で妻を連れて、ＪＲで行くと娘に言った。これが私の妻だ、そう勢い込んで手を引き、旅立った。窓側に座った妻が、外を見詰めていた。妻には、もう帰ってくることはない、見ることもない景色だった。

　娘の手配で、予め送っておいた荷物は賃貸のマンションにほぼ片付けられていた。この新しい住処に入ると、妻の顔は引きつり、怯えが走った。知らない土地だ。私にも気の重い、何も知らないところだ。部屋は、空気のよどんだ重苦しさで、オシ粒さえそうだった。

　お母さんの事を考えて、一階にしてもらったの。
と娘が言う。

　それから施設も申し込んでおいたから、介護プランをもって、相談に行くわ。

　えっ、お父さんがこのままお母さんを見るつもりだったんだが・・・。

　無理よ。いくら私がいるからって、田舎じゃないのだから、お母さんをこんな部屋に閉じ込めとけないわ。いいとこよ。郊外の山の上の、景色もいいし。一緒に散歩だってできるわ。
私は黙って聞くほかなかった。もうきてしまったんだ。引き返せない。この部屋で妻と二人、息をひそめて暮らすことは無理だ。

　お父さんも自分の時間を持つこともできるし、時々はこの子の面倒も見てね。
ああそうか、いいよ・・・、私は頭の中でそう答えた。くるんじゃなかったかと、かすかに思った。妻を狭い風呂にいれ、一台だけのベッドに寝かし、コンビニ弁当を食べて寝た。コンクリートの寒々しさが体を冷やした。

　ちょうど一人欠員が出来ましたので、何時からでも結構です。
と施設の係りは言った。そのにこやかな笑顔はなんだ。欠員ってなんだ。そう思いながら、妻の入る部屋を見に行った。清潔と言えば清潔だった。それだけで充分と思わなければと、自分を納得させた。部屋の外には芝生が植わり、花壇もあった。山肌に日が差して明るい。なにか昔のサナトリウムのようだった。

　妻がそこで二十四時間、どんな暮らしをしているかは解らなくなった。だが、訪ねて行く度に、何時も意思を失った妻の顔を見なければならないことに落胆した。部屋に花を飾る。花屋で花を買う余裕はないので、来る途中の道端に咲いた花を摘み、一つだけの花瓶にそれを刺す。介護士」が、

　＊＊さん　何時もだんなさんが花をもってきてくれて　いいわね
と笑う。からかわれているような気にさせられる。妻を連れ出し、施設の回りを歩く。手を引かれているだけで反応もない。建物の中から喚き声が聞こえる。

　＊＊さん
妻にそう呼びかけられ、一瞬ぎくっとなった。

　　＊＊子　おもいでしょう
そうだ、私がベビーキャリヤーで子供を背負い、観光地のあそこへ行った時のことだと解った。ベビーキャリヤーなんてものが流行ったころの話だ。子供は大きく育っていたので、肩に食い込んだ。しかし妻に代って背負わせるわけにはいかない。
　　いいや、大丈夫だよ。でも、一度オムツを見といた方がいいかな。
　　そうね　でも・・・　横にさせるところがないわ
　　いいんだ、向うのベンチで見てやればいい。
　　いやよ　ひとめがある
　　ぼくが立てって隠したら大丈夫だよ。
妻の手を引きながら、あの時と同じ会話をする。春だった。施設の向うの山に桜が見える。子供のオムツを手早く代えてやったときも、桜の花が散っていた。
　　そんなことがあって、私は時々、妻に子供の小さいときの事を話しかけることにした。
　　ピアノの発表会の服、できた？
そういうと、妻はじっと考え、
　　まだレースが縫いつけられてないの
と答えることもあった。
　　青いふくだったかねぇ。
　　みどりいろよ
　　じゃあ、ビデオの用意、しおかなくっちゃ。
そんな会話が成り立つこともあった。妻の夢の中の話だ。

　じいじ、今日もばあばとデイト？
　そうだよ。
孫に聞かれて、そう答えた。朝、軽く朝食を済ませると、娘のマンションに顔を出し、孫を保育園に連れて行く。そのあと私は妻のいる施設へ行くのが日課となっていた。山辺の道をバスが走り、施設のはるか手前の停車場で降り、ゆるゆると坂を登っていく。春もない、夏もない、晴れも雨もない、毎日の事だった。坂の途中で花を摘む。季節はそれだけだった。最近妻との会話が成り立たなくなっていた。病気が進行してきたのだろうか。膝も痛むようになってきた。父や母の法事も忘れている。私が忘れたら、娘が気付くはずもない。妻の苦しそうな顔が目立った。この坂を登っていると、時に、違った人生があったかもしれないという思いに襲われることがある。私は白髪頭を振って、その考えを振り払う。あったかもしれないが、これしか私は知らない。世界に人は何人いようと、一緒に生きてきたのはこの妻とだから。それが幸福かと疑う気持ちがあるから、否定的な疑問を思い浮かべる。幸不幸はわからない。だがこれしかなかったんだ。
　その妻が不意に逝ってしまった。誤嚥性肺炎で一週間寝付いて逝ってしまった。あけなかった。
　お父さん、寝たら？
　大丈夫よ、また元気になるから。
　だけど・・・、夫婦ってこんなになるのかしら、お父さんがお母さんをこんなに・・・、愛してたって言っていいのかしら、わかんないけど、・・・、大事に思っていたなんて、わかんなかった。
看病で付き添ってた私に、娘が言った。愛とか持たれあうとかじゃなくて、いつもそばにいて、身を寄せ合って生きてきた存在が妻だと私はおもった。

　妻の骨箱を手に持ち、町を歩く。帰る家もないかつての地は、見知っていても空々しい迷路のようだ。誰かが声を懸けてくるでなく、迎えてくれる人もいない。暗くなった町を歩き、微視ネスホテルへ向かった。この私が生まれ育った地で、家を持ち、親と暮らし、子を育てた。その故郷といえる地で、私は旅人として宿に泊まる。帰る家は、自分の手で他人に売り払った。自分の家だけでなく、親の家も売り払った。今は誰か他人が我が物としている。私はもうその家に入れない。帰ることもできない。私の腕の中で骨箱がことこと鳴った。この道で、かつてこんな骨箱を、白い布を巻いて首から下げ

て帰る人を見たことがある。通りかかった人は横に避け、頭を垂れた。

英霊に、頭右！

と敬礼をする人もあった。何時の事か。これは私の幻想かもしれない。狭い扉を押し、二回のフロントに上がる。部屋で一人、明日朝十時からの納骨の段取りを確かめる。部屋からの夜の眺めは、全く知らない町だった。

翌日、早めに墓地には着いていた。墓地の高みから、山が見えた。明るい早春の、かすんだ景色だった。墓地の端で箒を使う音がする。ちょうど妻と同じ年頃の夫人が掃除をしていた。遠めにその人と目が会い、目礼をする。向うも手を止め、腰を折って挨拶してくれた。私は、腕の中に骨箱を抱えていた。誰も来なくていい、わたしひとりでいいんだと頑強に言い張って、帰ってきた。そうおもっていると、石屋が来た。住職さんも、もうそこまでおいでてましたと言う。墓地の坂道を僧侶が上がってきた。

チンと手に持ったりんがなり、読経が終わった。石屋が沈黙のまま二人で墓石を動かし、骨室の開けた。骨壷は二つ、一つは父、もう一つは母。そしてそこに今日妻が納まる。僧侶に促され、私は妻の骨壷を納めた。低い読経の声が続いていた。石が戻され、読経の声もやみ、僧侶と石屋二人が深々と私に頭を下げた。

有難うございました。

と礼をいい、二三歩いく僧侶に、礼を渡す。それから石屋二人にも同じ様に渡す。そして帰りかける石屋二人の隣に、先ほどの夫人を見かけた。遠慮がちに少し離れて手を合わせ、膝に手を置いて目礼し、場を離れて行った。私はその背に深々と頭を下げた。そしてその時大粒の涙が頬を流れた。抑えようとしても声が漏れた。私はハンカチで口を押さえ、坂を下った。

　あの人の顔をここで見ようとは思ってもいなかった。彼の前に出てゆくことに、ためらいがあった。静かな中を机の向かい側に座る。彼の前には、何か資料とテキストが広げられ、彼は一心に読み耽っていた。私は机にバッグを置き、書架へ立った。適当な本を手に取り、机に帰る。彼は一向に気がつかない。わざと音を立てて本を置いた。ふっと彼が顔を上げた。それは、無作法をとがめだてするとかでもなく、まるで海で風を見るふうだった。しかしそれでも彼は私に気付かない。仕方ないか、こっちも大いに年取ったんだから。私だってあなたの事を、その白髪交じりの中から面影を見つけ出して、やっとわかったんだし、とも思う。

　小さな声で、わざと他人行儀に、

　失礼しました。

と言ってみる。彼は、それもまるで聞こえなかったように俯いてしまう。市立図書館で私語はルール違反だと、体現しているみたいだ。ちょっとむかっ腹が立ってきた。無視しないで！そう思って、

　お勉強ですか？

とわざと聞いてみる。彼は顔も上げず、ノートに鉛筆を走らせながら、

　はい。

と小さく答えた。

　私もお付き合いでお勉強しましょうか。

かつてそんな会話を彼と交わした。それも昔の古い市立図書館で。んっ！と彼が顔を上げた。その目にはまるで、なに言ってんだ、このおばさんは、という表情が浮かんでいた。でも私だとは気付いていない。だからそのまま、また何も言葉を返さず、うつむいてしまった。ショックだった。私って、そんなに変った？

　どうなのよぉ、直人くん！

ふわぁっと顔が上がり、目が泳いだ。鼻先に・・・、言いにくいが老眼鏡が掛かっていた。そして、ありえないことが起こったように目を見開き、身を乗り出して、それでも小声で、

　どなたさまでしたっけ、美緒ちゃん。

と返した。そうだ、そんな洒落っ気で返してくる人だった。だから、結婚できなかったんだ、この初代草食男子！

　あなたって、いつもお勉強しているのね。

　えっ、そうですか。

そうよ。何時もそんなふう！

・・・、声が・・・。

・・・、ごめんなさい・・・。で、幾つになったの？

と言ってしまって、口をふさいだ。同い年だった。この人とは何年一緒にいただろう。彼は小学校のとき、転校生だった。ところがどうだ、三日目から馴染んでしまい、クラスに溶け込んで違和感がなくなった。というより、そんなふうに存在感が元々希薄な男の子だった。体育の時間に走らせても、一番にはならない。でもビリでもない。先生の質問にも差されれば答えられる。が、自分から手を挙げて答えようとはしない。こう挙げて行くともどかしい気持ちにさせられる。だから、何時の間にか、私が何かを指図して、いろんなことをさせていた。なにをどう関わって、そうなったのか解らない。家が近くで同じ方向だったから、帰り道で一緒になることが多かったからかもしれないと思う。かといって、かばんを持てとか後ろを歩けと言ったことはない。並んで歩いて、私一人が喋っていた。それを嫌がる風もなく聞いて、ふわふわっと相槌を打ち、自分家の前に来ると、さよならと言って入ってしまう。朝も、待ってたというわけでもないのだろうが、私が誘いに寄るとすっと出てくる。帰りは一緒に帰れないときは待ったりしない。それが毎日になっていた。今考えてもどうしてそうなったのか解らない。だがそんなものだろう、子供時分というものは。

だから当然、二人はからかいの的になった。直人と美緒は、できてる、相合傘だ、と囃された。しかし、こいつはどうだろう、かえるの面にしょんべん、そのものだった。私が、デキテナイ、アイアイガサなんかじゃない！と怒鳴り返しても一人自分の帰り道を帰っていった。そして翌日も朝私が通りかかると、何時も通りすっと出てきて並んで歩く。そんなやつだった。こう考えてみると、これはこれで強烈な個性だったのかもしれない。

　ここじゃご迷惑になるから、外に出ましょうか。
私はそういうと、いま持ってきた本をまた書架に返しに立った。彼はこくりと頷き、机の上のものを片付け始めた。そんな仕草も変わらない。一体幾つになったんだ、この人は、と思ってしまう。この老けた姿の向うに、小学生や中学生のときの彼の姿が透けて見える。・・・、いつ、この人が私の側からいなくなったんだったか、聞いてみよう、そう思った。
　行く先は、すぐさま決めた。市立図書館直ぐ前の喫茶店。昔からある、懐かしいといえば懐かしい喫茶店だ。入ると内装も変ってなかった。カウンターの向うで、この店のオーナー親子が私達と同じ年限を過ごしていた。若くてきびきびしていた娘さんが中年になり、母親が老年になっている。昼下がりで客らしい人は途切れていた。
　コーヒーを。
と頼む。私も、と頷くのは彼だ。なんか、いらっとする。
　自分の分は、自分で決めたら？
　いや、コーヒーでいいんだ。
　そう。じゃ、コーヒー二つ。
お運びさんに回っている娘さんに頼む。はい、かしこまりましたと向うへ行く背を見ながら、
　いつ、こっちに帰ったの？
と聞く。
　つい最近さ。
　仕事は？
　退職した。
　じゃあ・・・。
　そう、いまは無職。
そういって、持ってこられたコーヒーに砂糖を二杯入れ、私に砂糖壷を回してくる。
　じゃ、今は奥さんとこちらで。
　妻は逝ってしまった。
　そうなの。でっ、今は一人でこっちで暮らしてるの？
　まるで尋問だなあ。
そうよ、尋問して、問い詰め、追い詰める権利が私にはある、と思う。
　もうこっちには帰らないとおもってたもんだから、家もなんも処分してね。し

かし、妻に死なれてみると、都会じゃ居場所がなくって、今度はあっちの家を売って、こっちの中古物件を買い、いまそこに住んでる。

結婚してたのなら、子供さんもいるでしょう？

男と女、二人。どっちも、お父さん、こっちへ来たら、といってくれるが、毎日孫だけ見てるほど年取っちゃいない。

ああ、年寄りの身の上話だ。そんなことじゃなくて・・・。

美緒ちゃん・・・、ナニ美緒ちゃんですか？

佐藤美緒、から斉藤美緒、そして、佐藤美緒に戻ったの。佐藤斉藤、馬のくそ。一番ありふれたなまえを、あっちからこっちに移り、また戻ったの。

じゃあ、・・・、

そう、離婚したの。ちゃっと波乱万丈ね。

あなたの性よ、とは思わない。そんなことあるはずもない。私達の人生は、そこまで重なり合ってはいなかった。

それで子供さんは？

いない、出来なかったの。たぶんそれが離婚の原因ね。

暗い話になってしまい、訊きたい事も訊けなくなった。直人が話し出した。

こっちは妻に逝かれてからは、身の置き所がないほど身軽になって、あっちこっちふらふらしてたんだが、舞い降りてみると、ここしか帰るところがなくって帰ってきました。いま、もとの家の近くにまた一軒家を買って、一人住いで住んでます。晴耕雨読というと聞こえはいいが、一人じゃ耕す甲斐もなく、本も読めず、家にはとてもおられません。ふらふら外を出歩いてます。

それで図書館？

そっ。

あなたらしいわねぇ、子供の時とちっとも変んない。それで今はなんのべんきょう、　してたの？

資格試験の勉強。弁理士。

ベンリシ？なんか、何でもできます、便利ですって資格？

ちがうよお、いわば理系の弁護士ってとこかな。

むつかしいの？

むつかしい！

で、それを取るの？

取る！つもりだ・・・けど、・・・むつかしい。でもね、ご職業は？と訊かれて、無職ですって、かっこ悪いだろ？だからいまは、受験生ですって名乗ってる。で、な

んの、と訊かれたら、弁理士って答える。すると、相手からは、美緒ちゃんみたいなリアクションがあって、へーってのがお定まりさ。
そういって笑う。ちょっと間が開いた。きかないの？何時結婚したのかとか、どんな人だったか、どんないきさつでとか。
　しってる？今から８０年ほど前、八ップルさんが電波望遠鏡で宇宙を見てると、遠くの銀河が離れて行くのがわかった。ということは、宇宙は広がっていると言う事だ。で、広がっていると言う事は、縮んでいたところから宇宙は爆発して広がり始めたということだ。それがビッグバンさ。ところが、物理学者はさらに考えを進める。始まりがあれば終わりがある。それが当然だと考えた。その一つがビッグクランチ、それとビッグフリーズ、ビッグリップ。ビッグリップはビッグバンの時の勢いで、爆発的に膨張し始めた宇宙が、宇宙の物質の重力でだんだん膨張する勢いを失って、あるところから縮み始め、ついには始まりのときと同じ一点になり、消えるというシナリオなんだね。ところがこれは今、ほとんど考えられてない。ビッグフリーズとビッグリップが有力な仮説なんだが、それにはダークマターとダークエネルギーが関わっていて、これはまだ見つかってないんだが、ブラックホールが・・・。
こういう人だった。こちらが何の興味もない話を突然始める。そして、こっちが聞いてようときいてまいと、話は次第に熱を帯び、こっちが止めるまで続く。止めたらとめたで、不満そうな表情がありありと浮かぶ。こんなとき、男って十七才で精神年齢の成長が止まるというけど、本当だと思う。女はねぇ、年は年相応に年取ってゆくのよ。成長のない人ね。しかし今回はなにかのごまかしで、話題を作ったんだと解っていた。

　いつものように、いやかつてそうしたように、さっと手を突き出し、話声が止まった途端こっの話をさっと切り出す。だからと言って、相手を怒らすような話題は極力避けるようにして止める。

　あの時、なんで　月光　だったの？

　？？？、えっ。　月光仮面？

　もう！解ってるくせに。中学の音楽部入部テストで、あなた　月光　をピアノで弾いたでしょう。もっと、なんか華麗で煌びやかなのがあったんじゃないの。。
あの時も、私が引っ張っていって音楽部に入れたんだった。

　この人、ピアノが弾けます。私はフルートがやりたいです。でも出来ません。しかしフルートは買ってありますのでお願いします。
そういうと、顧問の先生が直人をしげしげと見て、

　男のピアノが欲しかったんだ。なんか弾いてみてくれ。
と直人を促した。直人が向かったピアノには、まだ女の子が座っていた。そうか、さっき　シューベルトの鱒　を弾いていたのはこの子か。上手かった。聞きなれた曲を弾いて、上手いと思わすのは大変なんだ。でもこの子は上手かった。直人のライバルだ。
そう思うと、キッと睨みたくなる。

　楽譜は要らないのか？
顧問が訊く。

　大丈夫です。暗譜してるのを弾きますから。
そういってひきだしたのが　月光　だった。違うでしょ、いつもはピラピラっと華麗な指捌きでチャイコフスキーとか弾いてたでしょう。・・・、そうか、私に引っ張られてきたから、音楽部なんて入りたくないんだ、私はフルートが吹けるようになりたいの、だから音楽部には絶対入るんだからね、そう思って聞いていた。だが顧問の先生は急に熱心に聴きだした。地味で練習曲並みのテクニックでよい曲に聴き入った。その理由が私には解らなかったが、曲が終わると、君、名前は？と聞いた。

　桜井　直人です。
ちょっと沈黙があって、桜井先生の子供さん？と小声で訊ねた。その意味が解ったのだろう、直人は頷いた。私の知らないことが、そこでやり取りされていると、私は取り残されている思いだった。

　直人がピアノに決定した。ピアノのタッチが違ってたというのが理由だった。解らない。そこまで私は聞く耳を持っていなかった。先に引いた女の子は口惜しそうに直人

を見ていた。きれいな子だった。
　明日からガーシュウインをやるから、頑張ってきて。
と顧問が楽譜を直人に渡した。顧問はミニオーケストラを作ろうと企んでいた。私は急に腹が立って直人の手を引っ張り、
　かえろ
と音楽室を出た。フルート、どうしょ、買ってあるし、・・・、音出ないし・・・、直人、音楽部するの？と聞いてみた。
　The Man I loveなら弾いたことあるから。
なんだ、こいつ。中坊なりたてか？私はフルート、吹けないんだぞぉ・・・、そう思うと、また急に腹が立って、帰るよ、と直人の手をしゃくった。
　なんだよぉ、The Man I love は姉と連弾しただけで、僕はベースを弾いてたんだよ。
　いいの、そんなことじゃないの。かえろ、私、フルート吹けなくてもいいから。

　あれから、フルート吹けるようになった？
私は首を横に振った。直人はあれから１、２度演奏会に引っ張りだされて、なんか私の知らない曲を弾いてた。私は父にフルートの事で、なんだ、三日坊主か、とからかわれた。そんなことから音楽のクラブ活動がある直人とは一緒に帰る事がだんだん少なくなっていった。
　やめろよ、やめちまえ。
朝一緒に行くとき、私は直人にいった。なんてわがままなことだったか。どうしてこんな風に言えたのか。まるで直人は自分のもののように思っている。子供の錯覚だったと・・・、いえるのだろうか。それにしても直人もそれに、表立って逆らわなかった。
　先生に頼まれてるから・・・。
小さくそういって、練習があって私とは一緒に帰らないことが増えた。それを不満そうに私が言うと、
　美緒ちゃんもフルート、やればいいのに。
と言ってくる。
　やだ、わたし、音楽の才能ないもん。
ふてくされて言い返すしかなかった。

　直人の家では、母親の出身校である音大に直人の姉が行き、外国にも留学していた。直人は姉よりも音楽的才能に恵まれていたようで、母親は、姉同様に音大へ行くことを望んでいた。だが直人は親に黙って高等専門学校を受験した。もちろん彼は合格した。そして彼は高専の寮にさっさと入ってしまった。そんな行動力が彼にあるとは、わたしにも解ってなかった。

　ぼく、高専、行くから。

　そっか、いっちゃうんだ。会えないね。

私が先生に、地元の進学校合格を報告に来たとき直人に会い、彼から聞かされた。私には直人がまぶしかった。

　美緒ちゃんもあそこに合格したんだろ。すごい。

　高校よ、ただの高校。

そういいながら、私はわたしの前から消えてゆく直人が憎らしかった。

　こいよ、ちょっとこっちに来いよ。

そういって、わたしはわざと乱暴に直人の手を引っ張り、音楽室に連れて行った。直人はなにか解っているらしく、されるがままに付いてきた。

　なんか弾いて。

ピアノを指差し、そういうと、直人はピアノの椅子に座り、ピアノの蓋を開けた。そして　別れの曲　を弾き出した。それぐらい私にだって解る。私は鍵盤をばーんと叩き、

　ふざけないで、もっといいのを弾いて。

と言った。すると、澄んだ高い山の風のような曲を弾き出した。のちにそれがパッヘルベルのカノンだと知った。

　その音を聞きながら佇んでいると、

　やっぱりおまえか。

と音楽部の顧問が入ってきた。

　どうして高専に行くんだ。てっきりお母さんの跡を継ぐと思ってたんだが。

と続けた。

　跡は、姉がいますし、僕にはやりたいことがありますから。

　そうか、・・・・、しかしなあ、わたしにお前ほどの才能があれば、こんなところにくすぼっちゃいないのになあ。

そういって、顧問は教室から出て行った。

　ねえ、やりたいことって、なあに？

家からでてゆくこと。
それじゃ答えになってない。
だって、それしか考えてなかったから・・・。
こいつにもそれなりの悩みがあったんだとおもった。そしてこいつがわたしの前からいなくなると思った。
しかしそれがそうは行かなかった。今度はお母さんが私を訪ねてきた。
ねえ美緒ちゃん、直人から何か聞いてなかった？
その問いに私は首を横に振った。本当にしらなかったんだから。
ほんとう？あんなに仲がよかったんで、てっきり何か聞いてると思ったんだけど・・・。
と念を押すように聞いてくる。私はまた首を横に振った。そして、あのことを言っちゃいけないと思った。つまり直人のしたかったことは家を出ること。
ねえ、こんどの土曜日、私と一緒に直人を迎えに行ってくれない？いや、直人を連れ戻そうって訳じゃないの。高専はもう入ったんだから仕方ないとして、あそこって５年制だけど３年で大学受験できるでしょ？そしたら３年で音大だって受験できるのよね。
えっ、そこまで立ち入ったことに私を巻き込むの？じゃ、私ってなに？そんな反発する気持ちが湧き起こってきた。
無理だと思います。失礼します。
私はそういって、後も振り返らず走って逃げた。なにか背中で声がしていた。知ったことじゃなかった。
そんな彼も、日曜日なんかには帰ることもあった。
美緒ちゃん、あそびましょ！
だれ！？
電話口でわざと邪険に叫んだこともあった。
ほかにいないの？遊んでくれる人。わたしだっていそがしいんだから。
今度文化祭があるから、来ない？面白いよ。
わかった、行ったげる。
直人にだけではなく、学校にも好奇心があった。普通化の子供じみた教育ではなく、より実践的な授業をしている学校に興味があったからだ。しかし気は重かった。それに、なんとなく気恥ずかしい気持ちも湧いていた。そして、しばらく顔を見てない彼にどんな態度をとればいいのか解らず、戸惑っていた。
校門を入り、校舎の裏に回ると野外ステージが開設されていた。軽音楽部としてロ

ックをやるんだと直人は言ってたが、このステージで演奏するんだろうか。そう思いながら、彼を目で捜した。アンプにスピーカー、マイクスタンドが設営されていた。

　ちょっと信じられなかった。軽音楽部とはいえ、県立校ではロックなんかもってのほかといった雰囲気なのに、高専では学校の費用でステージが作られ、アンプのボリュームもその日は一杯に上げられると聞いた。まあ、山の中だから少々のお祭騒ぎは大目に見てくれるのだろう。十二時からだということだった。ステージのスピーカーからは小さくロックのメロディが流れていた。

　高専って来てみると凄いんだ。東大京大出の、博士号取得者の先生ばっかりなんだ。担任なんか、アメリカ留学までしてるんだ。

　で、なんでそんな人が、こんな片田舎の高専に埋もれてるんだ？

これがいけなかったらしい。直人はすねて頑なに黙り込んでしまった。

　高専でなにをやるんだ？家はもう出たんだろ。次に何をやるかが大事なんじゃないか。

かつてそんな風に問い詰めたことがあった。自由で、生活態度は学生の意志に任せ、専門分野の勉強を自主的にさせる、そんな校風を直人は自慢したかったらしい。しかしこっちはそんなことは知らないし解らない。毎日毎日受験のための、点取り虫の学習だ。

　来て、きてみりゃ解るよ。

そういわれたから来たんだ。おまけにこっちは一人だ。どこをどう見ればいいのか解らなかった。模擬店を見ても、外国人留学生が鍋をしゃもじでかき回しているのがあったり、大声でおでんやらたこ焼きを売っているところもあった。変ったのでは女の子がキャピキャピいいながら、厚く切ったジャガイモを先ず低温の油で揚げ、ちゃっと冷ましてから今度は高温の油で二度揚げしている模擬店があった。二度揚げしたジャガイモは食べ応えがありそうなポテトチップになっていた。女の子だけでやってる店の気楽さから、私はそれを買った。

　美緒ちゃん？山科美緒ちゃんでしょ？

　はい、・・・。

と見ると、生徒会の書記をしていた先輩だった。

　今日は直人君？

　はい、・・・、いや、それだけじゃないんですけど。

　解ってるわよ、二人は有名だったから。

　・・・・・。

黙ってるしかなかった。

　でも、直人君は意外だったわね。彼は別の意味で有名だったから。

そういいながら、先輩は両手の指先をパタパタさせた。

　今日もなんかやるらしいわよ。

そういって、野外ステージを指差した。

　有難うございます。

私は揚げたてのポテトチップをもって、先輩に頭を下げるとステージの方へ小走りに走った。逃げることなんかなかったのに、わたしは一刻も早くそこを離れたかった。じゃあ、帰ればよかっ

たのにと、後で思ったが、直人の顔をまだ見てなかったのでかえるなんて、その時は思い浮かばなかった。

　十二時になり、ステージが始まった。最初から何の予告もなかったが、始まった曲はあの長髪のグループのものだとは私にも解った。しかし演奏している中に、直人はいなかった。もういい、かえろ、と思い始めたとき、先ほどの先輩が何時の間にか横に立っていて、

　かえるの？帰らないできいてやったら？つぎよ。

といった。

　いいです、うるさいばっかりだから。

　いいから、聞きなさい。彼のこれは本物だから。

そういって、また指をパタパタさせた。私は少しむっとなった・そのパタパタで直人は家を出たがり、お母さんはいえに連れ戻そうとしているのだから。

　うるさいばっかりの演奏が終わった。

　次はちょっと毛色の変った演奏をお届けしましょう。

　　ワルツ　フォー　デイビー　　枯葉

　　ビル　エヴァンス風　二曲です。　　なおとー！

　だれ？なにがはじまるの？　ビル　エヴァンス風ってなに？わたしは混乱してしまった。誰か、知らない男がきっちりしたスーツに短い蝶ネクタイをして、ステージのピアノの前に座った。懸けてる眼鏡を外せば直人になると、やっとわかった。彼は椅子を調節し、きちんとすわり、鍵盤だけ見てなにか硬いものをじきはじめた。硬質で洗練されていて隙のない、粒立った音のながれだ。それは彼のお母さんの望む音ではないことが直ぐにわかった。

　それ？それをやりたかったの？

そう思っていると、

　音は随分こぼしてるけど、いいわよね。

と先輩が言う。

　わかるんですか？

　わかるわよ、ばかにしないで。

先輩の眉に怒りが乗っていた。

　すいません。

そう詫びながら、わからない自分に腹が立った。そして、反発しながら家を出てでも、結局ピアノなの？と怒りが湧き立ってきた。

　わたしが彼にこれを教えたの。あのスタイルも、ピアノが下手ならピエロだけど、最初の滑稽さを打ち消すだけのテクニックが、彼にはあるわ。まっ、受け狙いね。

私の知らないところで、直人が先輩の言う事に従っていること、それからわたしの知らないことを、この先輩から教えられていること、そんなことが渦巻いてわたしは腹が立って仕方なくなった。

　帰ります。

そういったとき、演奏が終わった。直人がピアノの脇に立って、頭を下げていた。なんかよくわ

からないといった、ぱらぱらの拍手がしていた。ステージの横の階段を、直人があの格好で降りてくる。私は逃げた。

美緒ちゃん！

と呼んでいる。呼ぶな、そんな格好で私を呼ぶな。私は振り向かないで走った。しかし直人の手が私の肩にかかった。

何で帰るんだよ。

なに？その格好！

先輩が　受ける　からって・・・。

私の知らないことばっかり！嫌いよ。

きっちりと固めたオールバックが奇妙だった。その下で目がびっくりしている。自分の顔がどんなか、直人はわかっていないのだろう。そして私も・・・。

その日から、二人には少しの隙間が出来てしまった。二人ともそれを知りながら、見ないようにしてた。

　それが大人になって行くということなのか、次第に二人の間を風が吹くようになってきた。
　私はわたしで自分の将来を見つめなければならなくなり、ともすると自分のことだけでいっぱいになった。たとえ言葉を交わさなくとも、顔を見るだけでそんな思いは違っていたのかもしれないが、お互いがともに心弱く、幼かった。つまりは、離れてしまえば気持ちも遠くなるということか。

　わたしも受験勉強でいっぱいになってき始めた時、図書館で直人に出くわしたことがあった。というより、目の前の数式で頭をなやませていると、不意に肩を叩かれた。直人だった。幼さが消え、大人になりかけた顔が覗いていた。そして直人もなんだか眩しそうな顔をしていた。

　直人、虚数ってなに？

　それね。

そういって直人は問題文を指さした。あまりのわからなさに、わたしは腹立たしさを直人にぶっつけた。

　こんなことってあるの？　ｉの二乗が　－１　って　なに？

　・・・。こけは西洋の偉い人が頭で考えた、偉ぁい概念で、・・・。

　ってことは、一種の妄想なわけ？

　いや、そういうことではなくって、何かを説明するとき、こういう数学があると便利だからそう考えたんで・・・。

　じゃ、これってなんかの便利で都合のいい道具かなにかってこと？

　そう、だから最近は、　虚数　　って別な数学が出てきたから、あんまり使われなくなってるようで。。。

　もういい！わかんないから。

わたしは日ごろのうっぷんを晴らすように、思いっきり直人にかみついた。見上げると一人、直人だけがおろおろして、その向こうで図書館司書が目を吊り上げていた。

　でましょ。

そうだった。あの時もわたしが、でましょ、っていったんだった。

　外に出たは、いいが座るところもなかった。私たちは仕方なく、歩きながら話した。

　私はもうすぐ受験なの。

　どこ、受けるの？

　京都の大学。東京は受けさせてくれないから。

　そうなんだ・・・。

　直人はいいわね、大学受験がないから。

そうだった、高専は五年間通って卒業すれば、短大卒の資格が得られる。もちろん、三年で高卒だから大学受験の資格はある。高専生の中には三年で大学受験する学生もいたが、大方はそのまま卒業し、就職していく。直人は曖昧に頷いた。

　どうすんの、これから先。家を出たかったんでしょ。高専に入って、寮に入って、それで小

さな反乱は成功したしたでしょうけど、ちょくちょく家には帰ってるらしいし、お母さんに、学校やめろって言われてるみたいだし。
そういっても、直人はうつむいてばかりだった。そして、
　京都か・・・、僕も付いて行こうかなあ。
と遠くを見るようにしていった。
　いやよ、もう面倒見ないから。付いてこないで。
というと、直人は風を見るような目で、遠くをながめた。そうだった、そんな目をする人だった。そして、ふっと立ち止まり、ゆっくり手を伸ばして私の肩を引き寄せ、私を抱きしめた。なにが起こったのか、解らなかった。だが私はわたしの中に、思わず直人に縋り付き、抱きしめ返しそうになる心の揺らぎがまきおこるのを感じた。私はわたしの弱さを認めたくなかった。わたしは自分の胸の前で縮こめていた腕を突っ張り、
　離しなさいよぉ。
といった。直人は腕を解き、うつむいて向きをかえ、何も言わず帰っていった。
　私は見事に受験に失敗し、親が行かさないといってた東京の大学へ行った。私がその大学への入学準備から帰ってくると、直人も大学を受験し、合格したと聞いた。京都の、直人のお母さんも文句のいえない大学に合格していた。
　それからだった、私たちがかおもになくなったのは。去る者日々に疎しだ。直人は大学を、奨学金とアルバイトで卒業したと聞いた。わたしは親の仕送りで大学に通い、３年生の時にはそれだけでは飽き足らずドイツに留学した。ドイツは日本でイメージしていたような国ではなかった。表面はいざ知らず、白人の意識の底には根強い差別観があった。それでも日本人はまだましだった。かつての枢軸国だったというのがその理由らしい。戦後生まれの私にはちょっと理解できなかったことだった。そしてその人種差別意識は、フランスに行ったとき、特に感じた。フランス人は決して有色人種と仕事をしようとはしなかった。ドイツ人もそうだ。わたしは夢破れて東京に帰って復学した。
　卒業して、私はまた外資系の会社を就職先に選んだ。こんどはアメリカだ。わたしは懸命に・・・、なにをしていたんだろう。社会に出て、働くってことはこんな風なことだとおもってたことが、外資系の会社では全く違ってた。入社した途端、とにかく実績を上げなければ評価されない。仕事の中身とかやり方を指導してくれることなんて皆無だ。まず自分の仕事内容はずべて把握しているのがあたりまえで、解らないなんてありえない。だから、単に外国語が喋れるなんて能力の内に入らないのだ。私は日本の社会システムなんてあまりにも生ぬるいものなんだと思い知らされた。まず、日本では海のものとも山のものとも分からぬ新卒者を採用し、自社で教育訓練して一人前に育てて行く。ところが海のものではなく、山のものだったと解ってもまず解雇はしない。望んでない山のものなら山のもので、それなりに働かそうとする。ところが採用した人材は即戦力でなければならないのが外資だ。そして実績を積めば、たとえライバル社であっても、そのキャリヤでハンチングされてゆく。ひ弱い日本人にはついてゆけない部分が多々あった。いやそれは私だけだったのかもしれない。わたしは次々と会社を移ってゆかざるを得なかった。居辛くなったり、さらっと解雇を言い渡されたりして、次第に格下の会社に移らざるを得

なかったのが実情だった。そんな時、過去のことなど思い出すこともなかった。もう昔々のおとぎ話だった。わたしはとうとう外資系の会社から普通の日本企業に移り、やっと学歴に見合った、それなりの職についた。こんなものよ、そしてこんなものかと、鏡に映った自分を見る思いだった。

　そんなみじめな思いの時、わたしは夫と出会った。年下の幼く見える、職場の同僚だった。あとからの中途採用で入ってきた私を、彼はすこし煙たがっていた。その彼が、外資との取引でミスを犯した。外資は些細な契約ミスも許さない。彼はただおろおろするばかりで、対処の仕方がわからなかった。そんなとき、少しは外資にいたことのある私には、もっとタフな交渉の仕方がわかっていた。わたしは彼を引き連れ、相手方に行って交渉し、日本の企業となら決してできない怒鳴りあいをして、契約内容を改定させ、それをまとめた。彼はその怒鳴りあいを見てるだけだった。いや、そのときの英語での会話が理解できなかったのかもしれない。最後に相手と握手しての帰り道、彼は私を、教官　と呼んだ。なによ、わたしが年上だって言いたいの？というと、いえ、尊敬しての呼び方ですよとかわいい顔して笑った。それから１年に満たない間に、彼は私のマンションに住んでいた。さらに３年経つと彼は私の上司になった。私は呑み込めない矛盾が二つ、胸によどんだ。だがそれを言葉にして認識するのが怖かった。彼はおなかの中の子供の父親。私は女ゆえに子供をやどし、生まなければならない。彼は私の指示でキャリアを得た。そして、私はその下にいなければならない。

　ねえ、結婚しよ。

子供が出来たことを告げると、彼ははしゃぐように言った。

　そうね、それもいいかもしれないわね。

それで私たちの結婚は決まり、会社でも私たちの中があもてだったものになった。ところが、意外という評価はなかった。二人とも落ち着くところに落ち着いたよねと同僚に言われた今なら年下婚とでも言われるのだろうか。。

　私は結婚式の後７か月で産休に入った。陰で月数を指折って数えているのが容易に分かった。だからこれも出来ちゃった婚の先駆けだった。私は相当無理をした。その無理を無理とは思わなかった。身重になってもつわりになっても、わたしは働いた。勝つの負けるのという意識はなかったが、女ならだれしもが通過することで弱音を吐きたくなかっただけだ。夫を私の実家に連れて行ったとき、

　やっぱりこういう人を選ぶのよね。

と母に言われた。

　あなたの性格だから、仕方ないか。

これが母の感想だった。同意も反対もない、承認でもなかった。頑張ってねと付け加えられた。何を？結婚生活、仕事？私は遮二無二前進するしかなかった。だが、こういう人　って言葉に、私の脳裏に直人が浮かばなかったわけじゃない。こうして実家に帰っても、ただなんとなく避けてしまっていた。彼が結婚したとうわさに聞いたからだ。その噂を聞いた時、私は大きなものを失ったように感じた。まるで当然の終着駅が、不意になくなったような気がした。そこにあって当然の、私の行き場所が消えた。そんな風に思たけれど、その喪失感も、遠い思い出のような

ものとないまぜになり、消えてゆき、忘れた。

私にも子供が出来てそれなりの喜びと感慨はあった。ああ、どうしてこんな言い方しかできないのだろう。体の底から打ち震えるような喜びや、子供の顔を見てるだけで全身が満たされるような、そんな幸福感を私も感じていた。それは女として生まれたものの本源的な喜びなんだと思う。一日中子供の顔を見てるだけで幸せだった。子供は毎日変化してゆく。育ってゆく、その過程が目の前でわかるのだ。私の生きてきた今までの中で、こんなにも達成感に満ち溢れた日々はなかった。自分の一生をこの子を育てることに費やしても何も惜しいとは思わなかった。

そうよ、女は母親になるとみんなそう思うの。

母に言われた。

親はみんなそんな思いをして、子供を育ててきたの。親の気持ちが少しは分かった？

つい、当たり前のことを言われた。だがそれを深く納得した。

そんな日々の後のことは思い出したくもない。気持ちのいい午後を公園で過ごした後の帰り道、私は宙に舞った。その一瞬あと車がバギーを破壊する音を聞いた。いや聞いたと思っただけかもしれない。私は痛いとも思わず、気を失った。意識を取り戻したのは四日後だった。ベッドの上で私は母に手を取られていた。美緒、みお、と呼ばれた。ナースコールが押され、気が付きましたと母が叫んだ。すぐいきます、とスピーカーが答える。私はまたまどろみそうになった。それを母が呼び返す。

・・・・、・・・・

と声にならない言葉を私はさけんだ。母は私の唇の形で、子供の名を呼んでると分かったらしい。母はうそをついた。

私が意識を取り戻したときには、子供の葬儀は終わっていた。昼間は誰もいないマンションで、子供の骨壺は一人ぽつんと安置されていたらしい。退院してきて、私は遺影と骨箱の前で泣きもできなかった。夫は私を見、顔をそむけた。それがこの後のすべてだった。

重い虚脱感のなかで、　私は一人マンションで過ごした。夫は、口では気にしなくていいよ、自分のことは自分でするからとかやさしくいってくれた。彼はその言葉通り、朝も起きられない私を置いて一人そおっと出て行った。そして夜も静かに帰ってきた。彼はもう子供の話も会社の話もしなくなった。遺影と骨箱の前で、彼は私に知られないように声を忍ばせて泣いた。私は背を向けているしかなかった。自分を支えることさえできなかった。空白の時間が続きすぎた。ある日彼は出てゆき、もう帰らなかった。

そして私も、彼の帰らないことに悲しみはなかった。
　それからのことはあまり記憶にない。母が来て、マンションを売り払い、一時実家に帰った。周りが私を押し流してくれた。私は言われるままに外に出て働き始め、人事異動でまた故郷を離れた。そんな私に何が残っただろう。知らぬ間に母が亡くなり、父も逝った。いや確かに親に対しては懸命に何かをしたはずだ。あの病院で父も母も看護をした。泣きもしたのだ。だが今でもそれは絵空事のような気がする。あのマンションで一人子供の遺影の前に座ってた時に比べたら、その悲しみなんかちっぽけで嘘みたいなもんだった。そんな、生きてるといった実感のないまま、ただ流されながら私はいつの間にか今日まで生きてきた。こんなもんよ、人生なんて、と思う。

　不意に、
　今から２億５０００万年前に、超大陸パンゲヤ大陸があって、それが大陸プレートに乗って今の形に分裂したんだけど、それがまた、一つの超大陸パンゲヤ、ウルティマ大陸に戻ってしまうんだ。
という声が聞こえてきた。ちょっと言葉が途切れた一瞬、もう一度聞いてみた。
　どうして結婚しなかったんかなあ、わたしたち・・・。
　えっ、それは・・・、僕がふられたんだろ？
　そお・・・、わたし、ふったんかあ・・・。
　そうだよお、手から離れた風船みたいに、風に乗ってふわふわ、ふらふら飛んでいってしまった。僕や、故郷のことは眼中にないって感じだった。
　そんなつもりなかったんだけど。
そのあと黙ってしまった私に、直人は出ようかと促した。そとは焼けつくような夏だった。
　最近、こうして歩いてると妙に居心地が悪くてね。
と直人が言う。私は顔を上げ、次の言葉を促した。直人はまた海の風を見るような眼をして、
　こうして歩いてると、町の変わったところも変わってないところも全部見えて、建物の無くなったところにも昔の建物が見えて、なんか夢の中みたいな気分になってしまうんだ。ここにはこんな建物があり、こんなことがあった、この場所でこんなことがあった、・・・、それが毎回おんなじことを思い出してしまう。フラッシュバックっていうのかなあ。それが最近苦痛になってきてね。
　そうよね、ましてやこんな田舎町、無くなるものはあっても新しいもんなんて出てきやしないもんね。

俺、昔母に言われた。
直人は昔からその話の気分で自分のことを　俺　とか　僕、私　と無意識に使い分ける。私はそんなことを思い出し、急におかしくなった。
なんか可笑しい？
くすくす笑う私に、直人が言った。
いいや。つづけて。
あんた、それでいいの？と母に言われた。今日とか明日、そうでなかったら１０年先とか、あんたと美緒ちゃんは必ず結婚するって思ってたって。僕もいつか突然僕の前に表れて、直人お、結婚するぞお、これ書け！って有無も言わさず婚姻届に判を押させられると思ってた。
あんた、私をなんだと思ってるの、わたしは化け物か！
・・・、いや、だから、僕はふられた。
そうじゃなくて、いつの間にか私の前からあなたがいなくなってた
と、声には出さなかったが、私はそう思った。
だから最近、帰ってきたのは失敗だったかなあって思うようになってきてた。あちらを見てもこちらを見ても昔にあったことが白日夢になって浮かんでくる。昔のことって確定していて変えられないから。
そうだ、かえられやしない
と思った。そして、わたしの中でまた、乗り越えられなかった悲しみがのしかかってきた。一人取り残されてぽつねんとその前に座っていた、子供の遺影と骨ツボのこと。それからの私を抜け殻にしてしまったこと。生きることを忘れさせてしまったこと。私は歩道に崩れ落ちてしまった。直人が私の肩を抱く。私は震えていたらしい。
帰ろうか、帰ろ、帰ったほうがいい。
直人が言う。
どこへ？どこへ、どうやって帰るの！帰るところなんか、ありゃしない。人生だって、やり直せるなんて嘘ばっかり。一度しかない人生を、いつでもどこからでもやり直せるなんて、誰かがついた大嘘よ。
直人が私を助け起こす。
私だって、なにかになれると思ってた。それだけのものを、私も持って生まれてきてると思ってた。若い時の、誰しもの勘違いだったかもしれないけど、平凡なんて大っ嫌いだった。私は精一杯の生き方をするんだって決めてたの。でも、私が女だってことが私の足を引っ張った。
肩を抱いて、直人は私を支えてなおしくれていた。

世の中、男社会だから。

違うわよ。そんなことじゃあない！子供を失ってから、私は自分が女だって気が付いたの。子供がいれば平凡でよかった。世に埋もれてもよかった。自分のものなんか、全部捨ててよかったのよ。そんな単純なことに、あとから気が付いた。子供を失くした女は、母になり損ねたおんなは・・・

もういいよ、もういい。

直人は私と自分自身に言い聞かせるように言った。

ああ、まるで銀河鉄道の夜みたいだ。宮沢賢治、かなあ。あの人の作品には何時も悲しみがある。生きてる悲しみと、生きてかなきゃいけない悲しみ、生かされている悲しみ、かなあ。

僕たちは同じ時代に生きた。だから美緒ちゃんの悲しみはわからないけど、少しは共有できると思う。きっと、解ったふりぐらいはできるさ。

なんなの、お坊さんにでもなったの。

過去ってもう変えられないけど、あの時　が夢になってくれたらって思う。

直人はまた風を見るように目を細めた。

家を建てようと思う　1

仕事を引退した今、長年考えていた新居を建てようかと思うようになった。何をいまさらとは思うのだが、親の立てた家に戻ってきて、そこで親と暮らし、自分の子供も育ててきた古家に今、夫婦二人が取り残されている。そのうえさらに厄介なことに、時間が持てあますほどある。仕事を辞めるとこんなことになるとは確かに想像はしていたし、覚悟はしていた。だが、何とも、もて余す。そのうえ、こうもだらだらと過ごしていると、ああなんて無為の時間を過ごしていることかと、ついわが身を叱ってしまいそうになる。自分の人生がもったいない限りだ。確かに、引退前からああもしよう、こうすれば一日生き延びられるんじゃないかと考えてはいた。少々大げさな物言いだが、退屈ほど始末に悪いものはない。精神衛生上なら、もっと悪い。貧乏性ねと妻が笑う。その妻は、あそこでヨガしてるからとか、なんとかダンスしてるからと、一日中出歩いている。それも生き生きしてだ。時折あなたも出かけたら、と取ってつけたように言い放つ。あなた、声いいんだから合唱団に行ったら、将棋はどう？碁もやってるわよ。放っといて。碁も将棋も、負けるのは嫌なんだ。ましてや若造に負けたり、気心の知れないやつにやっつけられるなんて、まっぴらだ、と内心は思っているのだが、それはおくびにも出さない。ぼけちゃうわよぉ、と言い放つ。その顔の面憎さ。それをぐっと堪えて、俺にもやりたいことぐらいあるんだ、と言い返した。それが運のつきだった。なによお、と小ばかにしたように聞く妻に、内緒だとはいったが、何か言い訳しなければならない。だからつい思い付きで、この家もふるくなったから新しく家をたてようと思ってるんだと言ってしまった。もっとも、自分の懐具合は自分が一番知っている。アーラ、そんなお金なんかどこにあるのと小馬鹿にされて終わりだと思っていた。ところがどっこい、おいおい、そんな金なんかないぞ、と言い返さなければならないほど、妻は大乗り気に乗ってきた。そうよ、私もそう思ってた、これからの生活は倹約すればなんとかなる、だから今持ってるお金で心機一転、建てましょうよ。ああ仕舞ったとおもったが、これが一大目標になり、生活の糧になってしまい、私の　静かな老後　はふっとんでいった。

しかし女というものは常に前を向いて暮らしているのか、この家で過ごした時間の思い出に浸るってことなんかないみたいで、その話し合いの後、妻はすっくと立って、ぐるりと見回し、やっぱり古びたわよね、もう合わないわ、と言い出した。おい、いいのかというと、なにが、と答える。ここで俺たちは子供も育てたし、親も見送った、ずうっと生活してきたんだぞ、というと、もう子供も巣立ったし、これからは自分の生活のほうが大事でしょ、という。畳は膝に堪えるし、段差があると躓きそうになる、第一、二階まで洗濯物を干しに行くのは大変なのよ。そういうと、くるっと向き直り、それに、私たち後何年生きると思ってんの、やっと自分たちの生活ができるようになったんだから、もっと自由に楽しく暮らしたって罰は当たらないと思うわよ、と言い放った。そうかあ、あんたは見事に子離れしてるんだ、と言いそうになって、それを飲み込んだ。あたりまえでしょう、と帰ってくることはわかっていたからだ。そしてそのあと、険しいことになる…。退職した今、私のほうが分が悪い。子育ても親の面倒も、みーんな私に押し付けて、仕事だ仕事だって言って済ませてきたのはあんたじゃない、とか言い続けられてきたからわかっていた。全く色褪せたホームドラマだとおもう。

しかし女はデリカシーなんて無縁なんじゃないかと思う。この家の家族の歴史さえ捨てても何ともないのだから当然か。私は退職前の何か月間、やめたらここととここに行こうと密かに考えていた。自分がどこでどう暮らしてきたのか、その時どんな気持ちで生きていたのかを振り返ってみたいと思ったからだ。いわば過去の自分探しみたいなもんだ。そして、自分の中ではもうその旅行は決まったことのように思い込んでしまってた。つまり妻も当然賛成するものと決め込んでいたからだ。私の行くことに決めていた土地の中には、結婚してすぐに赴任した場所も入っていたし、二人で新婚旅行に行った所や赴任場所で尋ねた観光地も考えてあった。だから妻も当然懐かしがって行きたがると思い、むしろ喜ばそうと内緒にまでしてきていた。ところがだ、退職一か月前、おもむろにその計画を話すと、にべもなかった。いかにも興味なさそうに、行きたくない、と言い放った。なんだあ？！私の中でびっくりマークとクエスチョンマークが走りまくった。なんでぇ？知ってるところなんか行きたくない！知らないところに行きたいのよ。もう二の句がなかった。知ってるとこに行って何が面白いの？旅行って知らないところへ行くから面白いのよ、第一、昔暮らしたとこなんかに行ったら、がっかりするばっかりよ、何年前だと思ってるの。ああ、女は現実的だ、郷愁もノスタルジーもあったもんではない。長い間温めてきた人生締めくくりのための旅も、一言で打ち砕かれてしまった。いや、初めからなかったもののようになくなった。もはや言葉もなく、私の中で自分の来し方すべてが否定されたような気分だった。私はそれからしばらく妻と口を聞かなかった。そんな私の態度に、妻は怪訝そうな顔をする。私が何に怒っているか解らないらしい。私はそれでなお怒りを増した。といってもそんなことは、妻の前では抗議の意味も持たないらしい。妻は旅行の広告を読みあさっている。外国あり、温泉地あり、東京ディズニーランドありで、妻の中では、まだ見ぬ地への旅行計画が渦巻いているようだ。あの人、だれだったっけ、あの有名作家のお母さん、南極まで行ってきたそうよ。あぐりさんだろ。そう、吉行淳之介のお母さん。そんな会話が突然飛び出す。こいつなら、南極にだって行ってきそうだと、小面憎かった。

家を建てようと思う　２

そうこうしているうちに、私は本当に退職の日を迎えた。退職２か月前など、ほとんど仕事はしていなかった。むしろ仕事の整理と引き継ぎのための新人教育がほとんどで、それはそれで忙しがしくて気が紛れた。だが新人を見ていると、つい頼りなく、上司に大丈夫ですかねぇ、と言ってしまった。まっ、退職しても時々頼むよ、と上司は気安く言う。それも長年の付き合いからのお世辞だってことはわかっていた。やめた人間は不要の長物だ。私より先に退職していった人が帰ってきたためしがない。そんな自分をみじめと思うことから救ってくれていたのが、かつて自分が暮らした土地をもう一度訪ねてみようと思った旅の計画だった。

私は鉄道路線の地図を繰り返し眺めた。こっちから回って、ここで２日、そのあと移動に半日かかるから、この線を通ってこっちに行き、ここであれやこれを見てあそこに行って、と頭の中でシミュレーションする。そうだ、あれこれ計画を立てても予定通り旅が行くはずがないから、路線を調べるのにノートパソコンを持っていくのはどうだろうとも考えた。しかしあれは重い。じゃ今はやりのスマートフォンはどうだろ。あれなら一台で何役にも使えるし・・・。でも操作を覚えるのがたいへんそう。そう思うと億劫さが先に立った。今の携帯でさえはたして十分に使いこなしているか疑問なのに、この上新しいものを覚えるのは苦痛に近かった。妻はスマートフォンの話をすると、あらいいじゃない、あれって便利なんですてねえ、使い方覚えて、私にも教えて、といつものパターンで言い放つ。今の携帯さえ、あれやこれやと結局私に聞き、それでも自分が電話する以外は、着信があっても聞こうともしない。なんで出ないんだと問い詰めると、あらかけてきてたの、気が付かなかったと平気の平左だ。スマートフォンを持っても、それを操作し、あれこれ調べたりするのは結局私だ。そのうえ調べるのにちょっとでももたついたりすると、もう、いつまでかかってるの、早くして、と全く容赦ない。そうこう思案してスマートフォンは却下した。大体やねえ、あのスマートフォンの画面の大きさで、字が読めると思うか、と妻に言ったが、言い訳がましいと自分でもいやになった。それならもっと大きいのがあるはずよ、と妻は食い下がる。自分じゃ何にもしないくせに、とブツブツ言ってしまった。いいわよ、私、自分でできるようにするわよ、それでその日は何故か平穏に終わった。

翌日、何やら応接間で電話している声がする。そのあとカルチャースクールの何とかダンスに出かけて行った。いつもと違って、妻の口からタブレットの話がちっとも出てこない。こうと思ったら人の迷惑など顧みず、必ずこうと押し付けてくるのに何か不気味だ。と思っていたら、案の定、テレビを見ている私の前に７インチのアンドロイドタブレットとマニュアルが置かれ、私にだってできるみたいだけど、忙しいから、あなた、勉強しておいてね、と言われてしまった。おい、これはなんだよ、お前が自分でするんじゃないのか、俺は知らないぞ、と言っても無駄なことはわかっていた。いまいったでしょ、私はいそがしいの、あなた、そんなの得意じゃない、またおしえてね、で終わりだ。アァア、それで終わりだ。渡井も、つい好奇心でタブレットを手に取ってみる。しかし電源の入れ方もわからない。あら、＊＊ちゃんがこうすればいいって、いってたわよ、とどこかに触った。画面が出てくる。何やら妻の津日が画面をこする。と、画面がするすると動く。ね、簡単でしょ、だから、あとはお願いね。そういって妻は風呂に入

りに行った。なんなんだ、俺は触ったこともないんだぞ、電源のオンオフさえしらないんだぞ、それを誰に聞いたか知らないがサッと電源をオンにして、後どうしろっていうんだ、自分でやれ、と思う。思うだけだ。好奇心に火がついた。またうまうまと乗せられているんだとわかっていたが、マニュアルをもうめくっていた。

これが後で本当に役立った。もちろん旅行にもだが、家さがしで車を走らせていても、周辺近くになるとカーナビは無責任だ。近くに来たから後は勝手に探せ、お疲れ様でしたで案内は終わる。ましてや、車を置いて歩いて探すことになると、ナビの地図をよおく確認したつもりでもわけがわからなくなる。そんなときこれを持って歩くとウオーキングナビとして目的地まで確実に行けた。旅先でもそうだ。路線検索で乗り換えもわかる。次どうするの、と聞かれても＊＊線、＊＊駅で降りて１０分歩くと＊＊ホテルだと胸を張って言えた。すると妻が、いいでしょ、これ、便利よねぇと自分の手柄のように言う。それはそうだが、ここまで使えるようになるのに、どれだけかかったと思ってるんだ、と言いたい。しかし、言っても聞いちゃいなかった。こっちでいいの、と地下鉄の会談を先に上がってゆく。私は後を追うばかりだ。

旅行の事はそれでいい。家と建てようと考えたことだ。柱の傷はおととしのという感慨などどこ吹く風の妻の勢いに巻き込まれ、賛否を横に置いて、物事を一つずつ組み上げてゆくことについ夢中になってしまう私の悪い癖に、またしてもつけこまれた。

家を建てようと思う　３

まさに物事の賛否ではなく、妻の方針で家の中のことが決まっていく現実へのあきらめから、私の頭は前へ動き出した。この、まるで優秀な秘書のような思考の仕方を自分嫌悪していたが、もう仕方ない。決まったことだ。家を建てる、では予算は？とまず考えるものだが、それはあまりに漠然として見当もつかない。そこで、地元の不動産屋をまわってみる、という手段を考えてみた。なにか雲をつかむような話だ。考えてみると。人生で一番高い買い物だ。たぶん大方の人は、一生のうち一回こっきりの買い物だろう。私は買ったことがない。未経験もいいところだ。だからまず不動産屋を回る、と思ったのだが、不動産屋と聞くとその上に悪徳という冠が思い浮かぶ。弁護士というのも一緒だ。思い込みとは思うのだが、そんな職種には身構えてしまう。後で取り返しのつかない買い物だと慎重になってしまい、不動産屋の窓の物件紹介ビラをこそこそ見て、中へは入れなかった。入るとだまされる。そんなはずもないのだが、口上手に勧められ、納得しないまま気に入らない物件を交わされることだってある。そう思うと余計、中へは入れなかった。

妻が、どうして入らないの、と突っつく。地元の不動産屋さんに相談するのが一番手っ取り早いわよ。私はビラを見るふりをして、じゃあ、どんな家がいいのか、考えてあるか、３ＬＤＫがいいか４ＬＤＫか、土地の広さは。それよりどこがいいか、考えてるのか？妻が言う。そんなの、・・・、出会いよ、出会い。場所も家もこちの思った通りのものなんてあるはずがないわ。だから、家や土地を見て、ああこれだとおもう、出会いよ。私は肩の力が一度に抜けた。こいつ、、例によって、なあんも考えてないんだ。だから、これはどう？、というと、いやだって好き嫌いだけで答えるんだ。おい、もっとこちらの条件を考えてからにしようよ。ということで、家を建てる作業の第一日は終わった。ああ、なんてことだと思う。

私自身は買うかどうかを考えると、三分買ってもいい、七分買わないという思いだった。だからこのままいっても、妻もたぶん買わないとなんとなく、漠然と思っていた。だが、買うならばと思考実験してみる。今土地は安い。たぶんこれからも安くなり続ける。都会はいざ知らず、田舎は土地がバウルのように高くなることはない。あのお坊ちゃま総理がデフレ脱却、インフレにするぞ、物価２％上昇と唱えても、それは無理だ。経済といえば生産力の向上によってとお題目のように唱える政治家ばかりだが、生産力を向上させたり改善すると、製品の価格は安くなる。昨日よりいいものを、昨日より安くするからものが売れる。そのはずだが、今私たちはほしいものがない。だから安くていいものも買わない。そこで、利益率を上げようと、生産力のアップに見切りをつけ、人件費の安い、労働力の豊富な国へ進出してゆく。いまお隣の厄介な国は、世界の工場だ。世界の　　組み立て工場　だ。だがそれだけにしか過ぎない。誰かが作ったものを誰かが集めてラインに流し、せっせと組み立てる。集めた部品もとことん安価なものであり、くみ上げる人手も安いからそこへ行く。そこがダメになればまた次へ行ってまた次へ行く。これって、いつか終わりがあることを知りながら、今じゃないだろうと眼をつぶる、まるで　ねずみ講　だ。今まで日本は流されながら、そうして経済的発展を成し遂げてきた。適切な賃金で高品質のものを、適切な利潤を乗せて、と怖い顔の女性経済学者は言う。それって、あの松下幸之助

氏が言ってたことだよね。安価なものを容易く作り、企業間だけで競争する時代は終わり、作る過程では供給しあいながら、お互いの完成品のレベルでは鎬を削る競争をする。できるだけ安く、時には自社の何か、たとえば液晶テレビを赤字にしてまで市場に浸透し、今一番利潤を得られる携帯、スマートフォンを売る。こんな時代にインフレ率何パーセントなんてできるはずもなく、またもしインフレにでもなったら、ほくそ笑むのは　いつもの人たち　で、付けを払わされるのはいつも庶民だ。

　そして、この少子化、高齢化の時代、土地の値段なんて上がるはずがない。見せかけの好景気に踊って見せる人たちが、都市部の土地を高くするかもしれない。だが需要のない時代だ、それも一時のもの。また待てば、下がってしまう。そう考えて、私はちょっと途方に暮れた。漂流する資本主義ー今はその末期なんだろうか。なにいってんのよ、あんたに考えられることなら、ほかの人もとうに考えてるわよ、と妻はあざわらう。要するに、これからは土地の値段も上がらないし、年金は削られるし、年寄りにはろくなことがないって事でしょ。そんなことを仰々しく上から目線で教えてくれなくっても、わかってるわよ。なんだ、これは、とわたしは眼をむく。教えているつもりなんかない。じゃあ、どうすんの？家を建てるの、建てないの？いつ立てればいいの？そいつは・・・、と口ごもってしまう。大所高所から見てたって、家は建たないわよ、と逆に問い詰められる。そうじゃあないだろ、もっと具体的なプランをかんがえろって言ってんだよ。これが反撃の糸口になると思ってた。だが、妻もさる者、そんなの、急にじゃわかんないわよ、もっと具体的なものがここにあればわかるけど、当り前じゃない！あんた、考えてよ。と、こちらに振ってくる。いつも通りだ。ああ、いつも通りだ。決めるのは妻で、汗を流すのは私。いや、嫌い、・・・、うーんん、ちょっといい感じ、でも嫌い、って、じゃあ、何がいいんだ？それに、大体俺は家を建てることに賛成した覚えはないぞ、と言ってやりたい。だが、決めるのは妻。いつものことで、これはうちだけの事と思っていたが、コマーシャルにさえ、こんなのがあった。海に行こうか、いや、山がいい、全部君が決めたけど、一つだけ僕が決めていい？ズーウと一緒にいようね、ってどうだ？これがコマーシャルか？これが今の日本か？男はどこへ行った？

　とにかく私は、住宅展示場に行くことに決めた。

家を建てようと思う　４

住宅展示場が国道沿いにあることは知っていた。仕事で走っていて眼の端で見ていたのだが、縁のない所だと気に留めていなかった。だが最近の住宅事情からいえば、行かざるを得まいと思ったから、行くことにした。・・・、しかし、行けば付きまとわれると容易に想像がついた。だが今の時代、家をたてようとすればのならハウスメーカーと付き合わないわけには行かないだろうと思ったからだ。私がそういうと

私は嫌だからね。そんな人たちとの交渉は、あんた、してよね。

と来た。もう何を言ってもしょうがないから、黙った。俺は賛成してないんだと言ってやりたかった。

目的の住宅展示場にゆく前に、別な展示場を妻が見つけた。あそこ、あそこと指差す。知らなかった住宅展示場があった。そこへ車を、そっと入れる。向こうに事務所は見えるが、家の見本に入ってみる。家の見本といったのは妻だ。私もその通りと思う。私たちはそっと車を降り、展示場の家のドアを開けようとした。鍵がかかっている。

すいませーん

と事務所から若い男が鍵をもって走ってくる。とにかくこれが私たちの　家の見本　をみた始めだった。ちょっと緊張してセールスマンの後に続く。妻は珍しそうに見て回り、私は壁を指でたたいてみる。展示場のモデルハウスだから、精一杯作ってあるのだろう、安さが売りのハウスメーカーだから期待はしてなかった。しかし見かけの内装とか、トイレ、それからバスルームは見栄えよく作ってあった。浴室エアコンもさりげなく説明する。

お年を召されると、脱衣所、浴室で体調を崩される場合が多々ありますから、トイレ、浴室にはエアコンの取り付けをお勧めいたしております。そうすると、浴室に洗濯物を干されても、しっかり乾きますし、便利です。

そう聞いて、妻は初めて聞いたことの素晴らしさに目がくらみ、しきりと頷いている。　おいおい、一番最初から納得するなよ、と思う。壁を指でたたくと、軽い音がする。十把一絡げでいうと、断熱材の上にはった石膏ボードの音がする。その上に壁紙で、ハウスメーカーの中には、壁紙の代わりにごく薄く珪藻土とか漆喰を吹き付けて、環境に配慮しましたと胸を張る。ああもう、土壁の家なんてないんだろうかと思う。あるのはあるが、高いんだよね、これが…、と聞かされた。和風注文建築なんて、今立ててるところを見たことがない。みーんな外張り断熱だ。施主さん、外張り断熱の工事現場、見たことがありますか。防水シートの上に接着剤を塗り、それを均一に塗り拡げて外張りの壁を貼り付けるだけですよ。壁材と壁材の間には１センチほどもあいてないが、壁の色に合わせた隙間を作り、そこにはシリコンコーキングを押し込んで終わり。爪でそれを押すと固い弾力があり、たぶんドライバーの先を突きたてて押し下げると、簡単にえぐれそう。そう思うと今の家には疑問だらけだ。

どのような家をお考えでしょうか。

セールストークが続く。これは私も十分に考えてきた。

年を取ると体を動かすのが億劫になるしね、それを思うと、平谷がいいと思ってます。洗濯

物を干しに、二階のベランダに上がってゆくなんて、もう大変なんだから。
　お父さんったら、まるで自分が毎日やってるみたいに。
と妻が言う。それを無視して、
　それと、スーパーが歩いて行ける距離にあること、いい病院がちかいこと、それに、
といいながらセールスの男を見ると、いかにも訳知り顔で頷いている。
　それに、駅にも近いこと。
そこまで言い切って、私は思った。この男、そのうえ学校が近かったら、そんなとこ、自分が住みたいわ、と思ってるんだろうなあ。・・・、何はともあれ、口いっぱいに言いたいことは言ってしまった。行ってしまうと、頭の中で思っていた時より、数段傲慢なことを言ってると気が付いた。だから、そんな好条件のところがあるはずもなく、セールスの男も、受け流すように微笑んで、みなさんそうおっしゃいますとさりげなく言った。年寄りのたわごとぐらいにしか思ってないんだろうと思う。しかし、これは年寄りの願望だ、口いっぱいに言って何が悪いと反発したくなる。終の住処にこれぐらいの贅沢言ってどうだってんだ、と腹の底で思ってしまう。だが、これを実現するには相当の幸運と、思いのほかのお金が必要なんだともわかっていた。
　ご予算は？
と問いかけてくるセールスをしり目に、有難うと言い捨ててモデルハウスを出ていった。
　ああちょっとお待ちください。
といって事務所のほうに走り、手に一杯のカタログとなにか景品を持って帰ってきた。
　お名前とか、いただいていいでしょうか。
すると、妻がアンケート用紙に名前とか住所を書き込んだ。それを車に乗って、つよくとがめた。
　あんなもの書いたら、あとから買え買えって大変なんだから、うかうか書くもんじゃないんだ。
　でもこんなにくれたんだから…。
とカタログと景品の箱を手にもって妻が言う。ああ、何とか商法に簡単にだまされるって、わかるわあ、と思った。

家を建てようと思う　５

　その日はもうそれだけで疲れてしまって、帰ることにした。だが、私が並べた、家の条件をセールスの男性がしたり顔で対処したことに鼻白むおもいでいまいましかった。誰しもそうおっしゃいますよお、ご予算は？の言葉が聞こえる思いだった。

　そうこう思って家に帰る途中、不動産情報誌があったことを思い出した。土地、新規中古住宅、マンションの情報を集めた雑誌で、写真も満載の、２００円の雑誌だ。まだあるだろうかと思い返し、本屋によることにした。そうだ、まず勉強だと思った。その雑誌を見ることが勉強かどうかはわからないが、まず情報だ。そして、情報ならインターネットだと思い、検索をかけるキーワードを考えてみた。土地、建物、売ります、＊＊＊市の新築住宅、などと単語を頭の中で思い浮かべた。不動産情報という単語は一番先に思いついていたのだが、あまりに網が大きすぎて自分の探している不動産情報にたどり着けないかもしれないと思った。まあいい、時間はあるのだし、真に自分の希望する家を建てるためには、まず勉強、まず情報と思った。そして本屋によると妻は文庫本のほうへ行く。なんか自分の読みたい本を探しているみたいだ。私は依然このあたりにおいてたはずだと、平積みになってる台のほうを探す。案外早く見つかった。以前と比べても大判になり、見かけも立派になっていた。だが値段は一緒の２００円。それをもってレジに向かう。そしてそれを差し出すと、女店員の表情に思ってもみなかった影が差した。憐れむような、同情するような、本を差し出す私を決して見ようとはせず、早く済ませてしまおうという感じだ。ここではいつも本屋雑誌を買っているのに、こんな表情は見たことがなかった。えっ、なんで？と思う。不動産の情報誌だよ、私はこれから大枚のお金をはたいて家を建てるんだよ・・・、と心の中でつぶやく。私は首をひねりながら本屋を出た。

　車に乗って、妻にその話をすると、妻は、

　あなた、その年で自分の家も持ってないと思われたのよ。

と言い出した。えっ？と問い返す。

　そうよ、いい年して、自分の家も持ってない貧乏年寄りに思われたのよ。だから、こんな雑誌、買うんだって思ったってこと。

私は急にバカにされた、と思った。まさに哀れな年寄りと思われたのだ。爆発しそうな腹立たしさだ。だが、近所のアパートの庭にステテコ姿の年寄りが出てきてぼんやり立っているのを見たとき、私も同じ気持ちになったと思い返した。あの老人は、私が犬の散歩をさせているのを目で追って見てた。借家住まいのアパート暮しは、あの年じゃたよりなくて、侘しいもんだろうとおもう。知らない店員が私をそう思ったのは仕方ないが、年取るとおんなじわびしさが付きまとっているのだろうか。

　そうよ、年取ったらみんな汚くて侘しくなるの。だから、持ってなくても待ってるぞって見せかけなくっちゃいけないの。みんな汚くなるんだから。

なんだ、それは、と思う。持ってるみたいに見せかけてたら、狙われてころされるぞ、というと、でも見栄は張らないと、という。女の考えはわからない。しかし、そんな会話の後でも、あの店員の私を憐れむような顔がちらついて剛が煮える思いだ。買った雑誌を叩き付けたい気分だ

った。
　もう買わない、あの本屋からはなんも買わん。
そういって助手席を見ると、妻が当の雑誌を熱心に見てる。
　なんだ？
と目を向いて言うと、
　フーン、こんな風になってるんだ。
とページを見ては感心する。
　ねえ、これなんかいいんじゃない。
と運転している私の目の前に、開いたページを指差して見せてくる。
　危ないじゃないか、運転してるんだぞ。
と言っても、一人で納得してまたページをめくる。
　でも高いわね。わたし、家なんか買ったことないから、こんなにするなんて知らなかった。
ああっと頭を抱えそうになった。
　いいか、人生で一番高い買い物が家なんだ。先の事なんかちっとも考えずにするのが結婚。いくら金を使っても惜しくないのが子育て。だから一番高い家を買うときは一番慎重にならなくっちゃいけないんだ。
　わかってるわよ。だから、スーパーと病院が近くて、駅には歩いて行けるとこ、なんでしょ。ついでに散歩が出来る、車の通りの少ないところで、庭仕事ができる日当りのいい、広いお庭があれば言うことなしだわ。
それを聞いてて、今度はハウスメーカーのセールス君の顔が浮かんだ。ああっ、なんて贅沢なんだと思う。
　とにかくかえってからだ。
ちょっと腹を立てて妻にあたってしまった。まず情報、まず勉強、と思い返した。
　家に帰りつくと、雑誌は妻に任せておもむろにコンピュータの前に座る。こう見えてもＰＣはマイコンと言われてた時からの付き合いだ。と言っても、先だってのwindows8のセッティングには手を焼いた。もう老眼鏡をかけてのコンピュータは苦痛だ。ましてや負うた子に教えられての無線ランの設定は、自分だけでやったとはいえ、頭に血がのぼる思いだった。だから肝心なパスワードを控えずに設定したりして、余計に頭を混乱させた。そんな必死の作業を妻は横から、
　まだできないの
とせっつく。その一言が余計にいらだたせるのが解らないのかと、またイラッとなる。設定が終わったのは、パソコンの箱を開けてから６時間たっていた。もう周りは薄暗くなっていて、すわり机の上のノートパソコンのディスプレイが眼に染むほど明るく見えた。だが、初めてネットにつながると、私は得意満面だった。負うた子に教えられ、無線ランのルーターを購入し、簡単だよという息子の言葉通りにマウスをクリックしたのだが、何が簡単だ！ああも設定し、こうもやって、繋がらないじゃないかとマニュアルをひっくり返してこれかと思う数字の列を入力し、頭の固いパソコンに間違っていますと言い続けられ、闇雲にキーボードを叩いてやっと繋いだんだ。
　あら、出来たのね。

それなのに、この一言だ。だが、熱くなった頭もやっと冷えてきて、もう起る気にもならなかった。

　でもタブレットなんか、もっと簡単よって子供が言ってたわよ。

と妻が言う。そうだ、タブレットにすればよかった。

　ネットだけなら、それでもよかったんじゃない？

その妻の言葉に、どっと疲れを覚えた。そして、肩がパンパンなのに気づいた。

とにかく、何か検索ワードを考えないとと思う。しかし、私は自分が建築のことなど何も知らないことに気付いた。今の家も親父が建てたものだし、木造の土壁作りで、土台は、基礎は、と建築の専門用語が浮かんでこない。ましてやどんな建築方式が最良なのかなんて、解るわけがない。しかし、知らなければ建てられない。知らずに建てるなんてあまりに無謀だ、と当時に私は思い込んだ。そこで検索ワードの入力欄に、むやみやたらに打ち込んだ。日本家屋の建築方式と入力すると、googleでは日本家屋に集中するのか、外国に注目される日本家屋とか外国で注目される日本家屋などが出てくる。そうじゃないんだ、建て方を知りたいんだとそう入力する。すると家の建て方　工法ど出てくる。これこれと思い、読んでみる。ああ、字が小さい。老眼鏡をかけ、画面を拡大し、字を追いかける。字だけじゃ解らん。ここで、癇癪をおこし、youtubeにつないでみる。出てくる出てくる、メーカーの宣伝動画に、２＊４工法、外断熱、軽量鉄骨、木造在来工法、耐震、制震、免震。確かに地震対策は重要だ。梁を入れろ？免震ダンパー？・・・、素人の悲しさだ、よくわからない。やはり本屋に行くことにした。アナログが一番。しかし、あの本屋でかうのは・・・と、ちょっとためらった。しかし行くしかない、近くの本屋はあそこしかないんだから。

そうこうして一応の基礎知識は手に入れた・・・、はずだ。妻にも、実物の家の各部分を指差しながら、ここはこうだと素人のうんちくを語れるようになった。そしてその知識が生かされる事件が起こった。というより、生兵法を駆使して、懸命に考えてやらなければならないことが出来てしまった。息子が家を建てるというのだ。なんだぁ？親より先に家をたてるって？とは思ったが、息子はこっちが家を建て直そうと思ってる事なんか知らない。

息子は地方の県都に住んでいるのだが、年も年だし、子供も２人いるし、いつまでアパート代を払ってても何にもならないから、家を建てようと思うと相談してきた。そうでなくても、分不相応な高級マンションに住んで、家計を圧迫するような家賃を払い、なにが家を建てたいだと、口ではののしる。しかし建てたいというのなら建ててやりたい。バカの顔を見たかったら、親の顔を見たらいいを地でゆくようなもんだと思う。しかし親ばかでいいじゃないかと、妻に言った。あいつも金がないし、世間も知らん。行ってどんなところか、見て置こうじゃないか。一世一代の買い物だから。そういって、パソコンを立ち上げる。息子が建築会社のＵＲＬを知らせてきていた。老眼鏡でアドレスを打ち込むのはつらい。が、何とかなった。息子が、建築屋は地元の工務店だと言っていた。ふむ、大手ハウスメーカーよりはいいかもしれない、と思った。大手のハウスメーカーは、一応の基準は保ってくれるが、それ以上のものではなく、むしろ建築基準法のすれすれで、コスト重視と思っていたほうがいい。大体家自身も、まるでプラモデルのように工場で組み立て材料を作り、現場はそれを組んでゆくだけ。それも、元地元の工務店とか大工がマニュアルに従い、研修通りに組み立てる。だから、実際作業をする大工の力量は一様ではなくて、同じ家でも出来上がりは違ってくることもある。あまり変わらないのは外観だけだと思ったほうがいい。内装だって、腕の良し悪しが如実に表れる。だが何より坪単価が問題だ。お金をかければいいものができる。当たり前の話だが、これが納得いくまで長いことかかった。こん

な話はこれぐらいでいいとして、息子に家を建てる工務店のサイトを眺めまわした。地方の大きな市のあちこちに土地造成をし、この市では２番目の受注率だと書いてある。＊＊タウン＊＊とか色々手広くやっているみたいだ。最初に見たところは、もう完売していると表示してある。こんな所なら確かにいいと思う。場所も、土地の広さもまずまずだ。だが価格はそれなりのものだ。あちこち見て回って、これが子供の言ってたところかと想うところに行き当たった。山のすそ野を少し上がったところで、景色はいいと、うたい文句はそうだろう。しかし、もう何軒か家も建っており、あと二戸前分、土地が開いていた。金額と状況も息子の言ってたことと一致するので、ここだと確信した。

と、妻が来る。

わかった？

私は椅子を少しずらし、画面を見やすくして、

ここだと思うよ。

と見せてやった。

あら、よさそうじゃない？

と簡単に言う。

ん〜ん。

と考え込んでしまう。家はかんたんじゃあ、ない。兎に角そこで長いこと住むのだから。そして、ひょっとすると一生そこで暮らすのだから。といって、今の時代そうなるものでもない。わたしだって今の家を出て行こうとしている。だから一概にきめこんっでしまうものではないが、それでも大変な買い物であることに変わりはない。そう思って画面を睨み付けるが、そうそう全部が解るわけもなく、

行ってみるか。

と妻に言った。というのも、ネット上で気になることがあったからだ。

新幹線で２時間半、やっとの思いでたどり着き、迎えに来ていた息子の車で、すぐ現場に向かった。車は繁華街を離れ、次第に郊外から山裾へ向かう。と言っても、そう高いところへ上がるわ明けでもなく、むしろ日当りのいい、まずまずの環境だ。家は平野部ではなく、少し高台にあったほうがいいと、知識として詰め込んできていた。当の家を建てる土地につくと、私は妻と息子を置いて周りを歩き回った。なだらかな坂を上がり、ぐるっと回って歩き、下に下って見上げてみる。ゆるゆると坂が上がり、元に戻る。土地は造成地の端っこで、５０坪ほどだから、このあたりでは手ごろには違いない。帰ってみると工務店のセールスも来ていた。私は彼と話し込んでいる妻や息子を置いて、今度は周りの家と造成地全体を見て回った。もうすでに完成している家もあり、まだ造作しているものもある。基礎はベタ基礎、土台との間には基礎パッキンをはさみ、基礎からアンカーボルトが立っている。外装は外張り断熱で、まさに今風の立て方そのものだ。床下を除くと、ゆかつかが立っている。セールスは鋼製だと胸を張る。しかし、この広さならもっと太い木を使い、鋼製床塚も下の鉄筋に結び付けて固定するものだろうと思う。わが家の近くのＤＩＹ店で、基礎パッキン一枚３５０円、鋼製床塚一本６００円、それで２５〜３０年

持つのだろうか。断熱材は９ｃｍ厚を入れております、とセールスは言う。一枚９００円。１５ｃｍ厚で１５００円。

　できつつある家を見て回る。いかにベタ基礎とはいえ、最近は真ん中に排水升を付け、隅に排水口も設けることが標準になっている。それを見ようとみて回るのだが、ない。

建物の基礎は、布基礎とベタ基礎がある。もちろん他にもあるのだろうが、一般的なものはこの二つだ。そして一見、頑丈そうに見えるのはベタ基礎だ。確かに十分計算されて作られたベタ基礎は丈夫だと思う。しかし、地質検査をして弱い地盤であれば、頑丈そうなベタ基礎が案外脆いこともある。なぜなら、砕石を施した地盤の上に捨コンを流し、さらに鉄筋を組んで、真っ平らな面を作る。その平らな面の要所要所に立ち上がりのための鉄筋が立っており、ここに外枠を組んでもう一度コンクリートを施工する。つまり二度に分けてコンクリートは流される。下のコンクリと立ち上がりのコンクリをつないでいるのは立ち上がりの鉄筋だけ。コンクリートは一体で流されないと、必ず剥がれる。水平な面と立ち上がりの面は、接着しているだけだ。その危うさを知らないと、怖いことになる。

じゃあ、布基礎がいいかというと、これは某ハウスメーカーの施行令だが、この会社のやり方は、まず地面を、まるで地下室を作るのかと思うほど掘り返す。そこに砂利を敷き詰め、水平を出し、まるで壁のような立ち上がりを作る。基礎の下端はかまぼこをくっつけたような形状だ。しかも、一体でいちどきに流す。これなら、ベタ基礎より丈夫だと思う。しかしこんなに計算された布基礎を、ほかで見たことがない。

息子とその嫁は、今にも契約しそうな勢いで話していた。顔が華やぎ、期待で輝いていた。私はその横で、施工中の家の基礎部分を見ていた。そこは、明らかに流しそこない、空気が抜けないでコンクリートのいきわたっていないところが出来てしまい、それを上からコンクリを塗って補修してあった。ああ、この家の主になる人は不幸だ。欠陥を最初から背負った家を買わされてしまう。

ここで即答しないで、帰って相談してお返事しよ。
もう決まっているのにといった顔つきで、妻が私を見る。息子は迷っているみたいだ。

じゃ、そういうことで。
と、わたしはさっさと車に乗り込んだ。セールスが平雲のように頭を下げる。

息子は車を走らせながら、後ろの私に聞いてくる。

どう？

あの家でいいんか？

安いし・・・。

何年暮らすことになる？少なくとも２５年は暮らすだろう。だったら、危ういと思うよ。

そういって、何カ所か、私が気付いたことを話した。

そんなこと言ったって、お父さん、素人の癖に。
と妻が言う。

あっちはプロなんだから、ちゃーんとしてくれるわよ。
妻がかばう。

その素人が見ても、やすっぽいて安直すぎるとみえたんだよ。だから言ってるんだ。

どうしょ？

そういう息子に、私は、

あれでいいんだったら、それでいいが、断ったほうがいいと思うよ。

そういうと息子は迷った。嫁が私を見る。なんか嫌な目つきだ。

結局息子は断った。まだ手付けも打ってなかったので、損害は私たちの旅費だけで済んだ。だが、それから先は、息子のところへ行くと、なにか険悪な雰囲気に包まれることになった。嫁の顔に険があった。私が家を建てることに反対しているか、お金を出し渋っていると思い込んだらしい。私はどうしたらいいのか解らなかったが、うっちゃっておくしかなかった。

家を建てようと思う　８

帰ると、少しの間自分の家にかまう気力が萎えた。妻は、
そうよね、私たちもあと何年生きるかわからないし、新築でなくてもいいよね。
と、不動産情報誌を熱心に見ながら、言い出した。

それに、私たちが死んじゃったら、中古なら惜しげがないから、息子が潰して、立て直すんじゃない？

そりゃそうだ。新築なら、私達の手垢がついてても潰しにくいし、かといって、あいつの年を考えると建て替えるには中途半端で迷うだろうな。また自分の思った家じゃないから、いやいや住むことになるかもしれん。

そうよ、可哀そうよ。だから、この家、見に行ってみない？
と情報誌の１ページを指差す。なんか、若い人が好みそうな、可愛い喫茶店みたいな家だった。それを見た途端、私の結論は決まっていたが、顔には出さず、行ってみるか、と同意した。もちろん、行くからには、一軒だけじゃなく、何軒か検討して候補を探しておくことにした。そのリサーチ中、ふっと気になる家が見つかった。平屋のコンクリート造りの家だった。

喫茶店のような家を見て、妻は若やいで、はしゃいだ。

カワイイ！

そうか？

・・・。
私の不機嫌そうな声に、妻は沈黙した。そして、

あら、いいじゃない、孫が喜ぶわよ。ほら、あの屋根の上の出窓みたいのなんか、かわいいじゃない。

ドーマが二つ、屋根に突き出ていた。洋風の造りで、採光のための屋根窓の事だ。中を見せてもらうと、そのドーマのある部屋は案の条、子供部屋だった。

いいわ、あの子らが喜びそうよ、。ね、そうおもうでしょ。

思う。今なら大喜びすると思うよ。もう帰らない、ここで暮らすって言いそうだ。でもね、一緒に暮らしてるわけでもないし、あの子らだって、いつまでも今の年で居るわけじゃない。この家はかわいい。でもこの家の玄関から出てくるのが、あんたと私の年寄り夫婦だけだったら、どう見られる？ちょっと二の足を踏んじゃうんだけど。

若いセールスが居づらそうに立っていた。

次、行ってみよう。

私は悔しそうな妻を伴って、セールスに礼を言い、車に乗った。あの気になった中古の家を見に行くのだ。

カーナビでもその家はわかりにくかった。

目的地の周辺に来ました。あとは地図を見て・・・

待てよ、こっから先が解らないんじゃないか。

何時ものカーナビのアナウンスに、いつものように毒づきながらあたりを見回し、結局わからないで車をスーパーの駐車場に止めた。県都に近いベッドタウンのはずなのに、そのスーパーはひどく寂れて見えた。中をのぞいても同じだ。買い物客もまばらで、なにか薄汚れて見えた。とりあえず飲み物を買い、車に帰って一休みした。

ちょっと歩いて探してみる。

ジュースを飲んでる妻にそう言って、私はカーナビの地図を見直し、見当をつけて歩き出した。途端、道が下がってゆく。平らな所だと思っていたのに、なんで下にさがるんだろうと、ちょっと嫌な気がした。道路より下がった土地は水害に会いやすい。水は天災のみなもとだ。風より嵐より、とにかく水が出ると壊滅的だ。そう思い、沈鬱な気分になった。

と、見つけた。下がってゆく道に、コンクリ壁で地を上げ、何段か石段を上がるようにし、引き戸の檜皮葺の門がしつらえられている。たしか・・・、まだ人が住んでいたはずだと思った。字を上げたコンクリ壁は屋敷の敷地いっぱいに作られており、途中で車庫を設けてあった。その中をつい、ちらりとのぞいてしまった。ジャガーだ。私は急に腹立たしくなった。ジャガーほどの車に乗る人が、家を売るのか。そう思いながら、そうっと、門の中をのぞいてみた。咎められたら俺はその時だ。そう思って見ると、重厚な飛び石が玄関まで敷かれ、その横をサツキの灌木が並ぶ。その先によく手入れされた松がえだを張って、塀の上まで伸びあがっている。ああ、植木屋さんに随分掛かりそうだと思った。玄関も、大きく張りだした軒先が、雨の日も不自由しないだろうと思わせた。門を離れ、裏に回ってみる。広い敷地にコンクリート打ちっぱなしの壁が威圧的だ。その壁が切れ、ブロック壁になって普通の門扉が見えた。裏口にしては車も入る大きさで、贅沢な造りに見えた。その門柱に（株）＊＊四国代理店の看板が、目立たない程度の大きさでかかっていた。しかし、不幸にも私は＊＊を知らなかった。しかしだ、この奥には普通の二階建てに民家が立っているはずだと思って、つま先立ちで奥を覗いた。やはり、気に囲まれてはいるが、モルタル造りの家屋が見えた。この家も築年は古いようだ。情報誌にはかいてなかったので、推測するしかない。もっとも、この家含みであの価格なら、とてつもなくいい買い物だとくらくらした。土地は１８０坪あまり、家は二軒、そして、古びてはいるが品のいい平屋だ。そのうえ、皐月の灌木が並んだ飛び石、そう思うと急いで車に帰った。

すごいよ、すごい。

ジュースを飲んでた妻に、すこし興奮気味に言った。

遅いんで、トイレに行きたくなったんだけど、場所がわかんなくて、しょうがないからジュース買って、それで聞いたの。あなたのもあるわよ。飲む？

ペットボトルを渡され、運転席に座りながら、

ちょっとふるいけど、いい家だった。

見つかったの？じゃ、見に行くわ。

そういって、もう降りている。私も少し尿意に襲われたがジュースも飲まずに車を降りた。

どっち？

歩き始めている妻が訊く。あっちと指差し、あとを付いてゆく。道を渡って少し下り、道の曲がった先を、示した。

え？あの松のとこ？

そう。

三本もあるじゃない。植木屋さんにたくさん掛かるわね。

コンクリート壁を越えた背の高い松は、景観だった。だが、私達には贅沢な持ち物になる。妻はそれだけで、この家は却下の意向らしいと分かった。だが粘った。

裏に二階建ての普通の家もあるんだぞ。

これも逆効果だった。

そんなにあって、どうするの？わたし、お掃除できないわよ。

平屋だぞ？

それはいいけど、コンクリート造りなんでしょ。寒いって言ってたじゃない。わたし、さむいのは嫌。

もう門につき、中をのぞき込んでいた。

かっこいいけど、壁も薄汚れているし、第一庭が広すぎ。

そういってるうちに、下のジャガーの入っている駐車場に、古いマークⅡがバックで入ろうとし始めた。私は妻をつつき、急いで門を離れた。

あれって、建てるのにすごく掛かってるでしょうね。

すごいと思うよ。

そういいながら、ちょっと振り返ると銀髪を撫でつけ、品のいいチョッキの老人が私たちを見ていた。私にはそれが、口惜しそうに見えた。きゅうに、私は興奮が冷めた。もう買えないと思った。あの口惜しそうな顔が、私たちを、若造が、と言っているように思った。気おくれした。あの老人の、人生をかけた悔しさが私には感じられた。

あの家は、買えないなあ。

と独り言のように呟いてしまった。

　女の子だから、絶対喜ぶわよ。
孫の事を言ってるらしい。妻はあのドーマのある家にこだわっているようだ。
　屋根にドーマなんか作ると、そのどっかから雨漏りがしだして大変なんだぞ。だいたい住宅産業はクレーム産業といって、何かしらにどこか、文句が出るもんなんだ。雨漏りって一番質が悪い不具合なんだから、最初っからしないことだ。
といった途端、妻がむくれた。
　かわいいのに～。孫が喜ぶとこ、見たくないの？
　そうだな、ずうっと一緒に暮らしてくれるなら、惜しくないな。
そういって、二人黙った。
　それから何日も気が抜けたようになって、あまり家を見に行こうという気にならなくなった。それは妻も同様で、ネットにいい家はなかったかとか以前はよく聞いてきたが、それもなくなり、同時に無口になってしまった。
　引退してから、健康のためにとウオーキングを始めていたが、毎日同じところを歩いて飽きが来るばかりになってきた。で、ひょいとまがってみる。元々が地元だから、知らないところなんてあるわけがないなんて自然と思い込んでいたが、町角を曲がるとそこは知らない世界、そこから旅が始まるという言葉を思い出すほど、私はこの町を知ってはいなかった。これまで見知っていた町の風景は車から見た景色だった。それが歩くと全然違って見える。町中を流れる川も、子供時分から知ってたはずなのに、車で通ると見過ごしていた。それを、歩くと、改修されてこんなにも変わっている。町屋も人が住まなくなって、戸が建てられたまんまになっている。ああ、この店はあの時子供の誕生に赤飯を仕立ててもらったとこだ。もう誰も住んでいないのかと、そんな感慨にふけってしまう。そして、町中と言わず、郊外でも空き家がたくさんあることに気付いた。それも相当立派な家がそうであり、軒先が垂れ、草生して明らかに無人とわかる家もあった。そのくせ、郊外では土地開発が行われ、何か重機が動いてるなと思うと、土が入れられ、区切られて分譲される。モデルハウスが立って、場所さえ良ければ数か月で家が建ち始める。田舎でさえこうだ。わたしはめったやたらに歩き回った。そして昔の記憶を呼び戻してみる。ここは昔、学校マラソンのコースだったところで、この建物までは途方もなく遠くて、来てみる機会もなかった。それが今はどうだ。折り返し地点の目印になってた建物こそまだあるが、その間家が立ち並んでいるじゃあないか。しかもその真新しい家の中にさえ、無人の廃墟がある。いつの間に・・・と思ってしまう。知らん顔してよそ見してた間に、時はここでも確実に流れていたんだと、見知った町の知らない地での旅に、そんな感傷もわいてくる。わたしは無人の家を見て歩くようにもなった。そしてその類の家を見ると、庭先軒先に残されたものから、その家のドラマを見るようになった。
　あそこにはこんなものがあって、
と話すと、妻は、
　悪趣味ねぇ。

と顔をしかめる。しかし、

　そんな家があるのなら、売りに出てないのかしら。

ということもある。ネットで見るとそれらしき売物権の情報を見ることもあり、また妻と見にゆくようになった。

　かつてそこに新しい道が作られた。畑と言わず、田んぼも川も切り開いて、メインストリートに劣らぬ道が出来た。その時立ち退いた家があった。道が出来た時に建った家はこの一軒だけだった。ネットで見ると、土地の広さは２２０坪。家は１０ＳＬＤＫ。家自体、３棟に分かれていて、間を廊下で繋いである。建った時のことも知っている。そんな家が今売りに出されていた。隔世の感だ。あの御殿がと思う。今見ても門さえ威圧的で、目を背けそうだ。

　この家？やーだ。潰すのにお金がかかるから、このまま売ってんのよ。なんか出そうじゃない？きっとなんか住んでるわよ。それに、広すぎて、部屋数も多いし、買っても、一度も入ったことのない部屋が出来そう。

そういう妻の言葉に、

　お母さん、あの部屋ってどうなってるの？

　えっ。

そういって、

　入ったこと、ないの。

　なんで？

　なんかでそうじゃない？

と話している妻と娘の顔が思い浮かんだ。そのあと、たぶん、いや必ず、

　お父さん、入ってみて。

というんだ。わたしだって嫌なものは嫌なんだ。しかし、

　お父さんが買ったんでしょ。だったら、入ってみてよ。

と娘が急き立てるんだ。そういわれるまでもない、何かいるはずもないんだから、平気だ、と空威張りして懐中電灯をもって踏み込む。そのあとは・・・、何もいないはずだし、いてもねずみぐらいのはずだ。しかし、そんな思いをするなら、買わない。昔の因縁があっても、買わないと私は思った。その家は結局売り止めになり、誰も買わず、雨戸が立ったままだ。私は思う。きっとあの家には、なんかいる。

不動産屋が立ち会えなくて、二人でまじまじと見た家があった。横の通路のドアが開いてますから、自由に見学してくださいと言われてた。中こそ入れなかったが、外観だけで威圧された。コンクリート造りで、平屋から二階建ての棟が続き、さらに奥にもう一棟、平屋が建ってそれらがコの字型になっていた。平屋は陸棟で二階建ては中二階のクラッシクな洋館造りに見えた。ところがその家の前に驚かされた。築山があり、置かれた岩の横に松が枝を張っている。その岩の下に池があって、石橋がかかっていた。その池に今も水が流れ込んで、チョロチョロと水音していた。私はその築山に上がって、家を眺めた。なにか、その家を征服したような気分になった。これは・・・とおもう。これは私の父の世代の人たちの趣味だ。父も家の前に屏風岩を立てた池を作り、鯉を二匹泳がせていた。もっとも、父はその池に孫が落ちてずぶぬれになったのを見て、さっさと池を壊してしまった。そんなことのできる父だった。

　コの字型の家の中庭を見て、またもびっくりさせられた。ここにも、池こそないが、前の造りより大きな築山があった。石の段が十ほどあって、さらに登る。天辺に上がると、平屋の屋根が見渡せた。

　危ないから、降りてらっしゃい。

と妻が言う。高い。なんだ、これは。この家には電動シャッターの車庫があり、車も二台、ゆうゆうと止められた。これで、＊＊＊万？なんかあったのだろうか。いーや、キットなんかあったに違いない、と私は見当をつけた。不動産屋が、絶対お買い得ですというのも怪しい。どうも売り急いでいる節がある。絶対なにか・・・、ぎょっとするようなことがあるんだ。以前も、えらく安い土地があった。そこは元建ってた家の主人が、子連れの女の人と結婚し、しばらくは平穏に言ってたのだが、自身の子が生まれてからおかしくなったらしい、自分の子ばかり可愛がり、連れ子を疎んじ始め、とうとう親譲りの酒癖の悪さが出て、連れ子に手を挙げ始めた。男の方の親も露骨な態度に出、嫁も連れ子もないがしろにした。そんなことから母親が新興宗教に救いを求め、連れ子ともども宗教団体の道場に逃げて、ありったけの財産を寄進してしまった。それを怒った夫は、暴力とねこっかぶりで騙して連れ戻し、夫の側の親は弁護士を使って、寄進した財貨のいくばくかを教団から取り戻したのだが、取り戻した途端、男の暴力が再開し、酒を呑んで暴れまわる音が近所にも響き渡った。そしてついに、ある夜男は酔った勢いで自宅に火をつけた。妻が気付いてキッチンに来た時、気の小さい夫は、火はつけたものの燃え上がる炎で正気に返り、懸命に消そうとしていたらしいが、火は燃え上がるばかりで手のつけようがなくなると、男は二階の自身の子だけ抱えて家をとびだし、あとは傍観するばっかりだったとか。妻は必死に三階の寝室に飛び込んで連れ子を救出して、あげく肺を痛め、救急車で連れていかれた。男は自分の子を抱きかかえ、携帯で自分の親を呼んだ。１時間ほどで親が来て、男は自分の子とともに実家に避難した。連れ子は、男もその親もちらっと見ただけでほったらかされた。仕方ないので、隣人が母親の側の親を呼び、その子を引き取ってもらったとか。こんなおぞましい話など逐一聞きたくもなかったが、その母親側の親に電話した隣人からここまで詳しく聞かされた。後日、母親側の両親から丁寧なお礼を受けたらしく、むしろ男より女のほうに同情的な口ぶりだ

った。そして、その時詳しい話も聞いたという。母親側の親も、誰か第三者に解らせたかったんだろうと思う。いやな話だ。夫はその後、半年も入院し、警察の事情聴取逃れをしていたようだが、退院とともに逮捕され、結局は四年の実刑判決を受けて今どこかの刑務所に入っているらしい。だがここで、夫の側の親も大変な目にあったとか。将来、親が退職した後には焼けた家に同居するつもりで、家の代金の大半を払ってやっていた。だが、それも燃えてなくなり、土地は残ったが、慰謝料を請求され、この土地を売っても足りないほどだとか。これも男の側の親が、この隣人にしゃべっていったことだ。だから安いんですよ。目の前のお喋りおばさんはぺらぺらという。知らなきゃ買ってたかもしれない。そういえば木や灯油が燃えた臭いがするような気がした。礼を言ってそこを立ち去るとき、振り返ると父親が違う兄弟が手をつないで立っているような気がして、妻とじっと前ばかり見て車に帰った。二人とも言葉もなかった。

目の前の豪邸は、そんな因縁話こそ無いのだろうが、二人だけになった私達にはふさわしくなかった。車二台止められる車庫に、貧乏くさい軽一台止めて何になる。あとはあなたの作業場になるじゃないと、妻は軽口を言うが、同じ気持ちのようだ。のちにネットで室内の画像が見られた。やはり豪勢な家具と、巨大な液晶テレビ、立派な漆塗りの座敷机、床の間には掛け軸があった。分厚い扉の応接間、その奥に十二畳の客間、台所は少し狭く、六畳ほどで、瞬間湯沸かし器が見えた。風呂がよかった。タイル張りの、孫二人と浸かってもまだ余るほどの浴槽だった。しかし、そんなときって年に何回ある？まして孫は女の子ばかりだから、すぐ一緒に入れなくなる。奥の部屋は廊下続きの六畳二間だった。洋館づくりの中二階と思ったところは画像がなかった。たぶんロフトのような物置かもしれない。それでも、孫の冒険にはかっこうの場所になるだろう。中庭の高い築山は走り回るのに最適だ。と、思ってみるが、食指は動かなかった。こんな家に後何年住む？ここに住み暮らした人も、住めなくなって売るんだ。私も、もうすぐそうなるはずだから。

だいぶ時間が経った。もう焦る気持ちはなくなった。一つには、今住んでいるところがあまりにも便利だからだ。ＪＲ駅も歩いて三分、スーパーは車で五分、地域の中核病院はあるし、市役所、銀行、郵便局もすぐ近所だ。便利すぎた。他を見てもこれでは見劣りする。家は建て替えができるが、土地は取り換えられない。ちょっと悟ったように言うと、妻もストンとがってんしたのか、反論せずに頷いた。それはそれでいいのだが、じゃあ他の地に家を建てるという目的は何だったのかということになる。それを妻に訊いてみると、

ちょっと知らない土地に住んでみたかったのよ。

と、さらりと言う。

なーんも知らないところで、一つ一つが発見、みたいな生活をしてみたかったの。

こわいこと、ないのか。そんなところで。

でもね、そう思っても、慣れてしまえばみんな一緒。それはわかってるのよ、この年になると日本中どこへ行ってもみんな一緒ってことは。

子供たちのところへ行っても旅行にはならない。旅行って、知らないからびっくりして楽しいのよ。でも、知らない土地で暮らしてる子供たちのところには、子供の暮らしがそこにはあるの。それが見えてしまうと、我を忘れられない。日常生活が見えてしまうと、全部一緒になってしまうわ。だからいっそ、自分の生活全部を知らないところに持って行ってみたかったの。

こいつがこんなことを考えていたとは思いもよらなかった。なにか解らないが、とんでもないものをつつき出してしまったかもとおもった。

じゃ、全然知らないところへ行きたいのか？

そうも、思った。でも、なんか、出会いがあればと思ってるの。

出会い？・・・、もうそんな年じゃないんじゃないか？

そうも思う。でも、なんかいい出会いがあるかもしれない。それを半分、期待したりしなかったり。

なにか知らない人の話を聞いているような、遠いところからの声を聴いているような・・・。だから私は、賛成してなかったんだと、そのことを思い出していた。

その日から、私は不意に白日夢のようなものに取りつかれることがあった。それは、妻が徘徊老人になって、家のすぐ隣で　　お父さーん

と私を呼んでいるという妄想だった。逆に、そうなるのは私かもしれない。

時々、私は妻の顔を見、様子をうかがうようになった。しかし、先日の話は、振り返ってみてもそんなことを連想させるような内容はなかったと思う。しかし、この年になると、ありえない話ではなかった。そんなことで、私はつい、

おまえ、大丈夫か？

と言ってしまったことがあった。なんということもない時だったので、自分でもおかしかったが

、

　　あら、なにが？

と妻は平気な顔で答える。そして反対に、

　　お父さん、ボケないでよ、ボケたらわたし、面倒みられませんから、施設に放り込んじゃいますよ。

とのたまう始末だ。

　　いいよ、ボケたらなんも解らないんだから、そうして。

と答える。もう家の話どころじゃなくなった。

家を建てようと思う　１２

もともと家を建てようと思い始めた時から。ま私達にはマンションという選択肢はなかった。都会じゃそれしかないという事情もあるとは思うが、この過疎地の、土地も中古住宅も余りまくっているところで、何が悲しくてマンションなんかと最初っから考えもしなかった。しかし、ネットでみると、県都の一番の繁華街でワンルームマンションがなんと２００万ほどで売りに出ていた。そこからなら、ひょいと出ていくと老舗のデパートがあり、市電の駅もある。足を延ばせば県立と私立の美術館、県内で最大の本屋、そして、イタリアン、和食などの有名店も目白押しだ。だが、スーパーマーケットはなかった。

毎日外食というわけにもいかんだろう。

妻にそう言うと

そうよね、でも毎日食事を作っているものにしたら、大変なのよ。

と、半分本気でいう。

マンションはなあ、空中権といって、その土地の空中にこれだけのボリュームの空間を占有する権利があるって、わけわからん権利があるだけなんだぞ。それに、３０年くらいたったら建て替えの話が出てくるし、その費用も毎月積み立てなきゃいかんし、維持管理費もバカにできないんだぞ。隣近所に気を使って、テレビのボリュームは小さくして、歩く時だってドタドタ歩いてたら怒鳴り込まれるし、子供たちが帰っても泊まるとこもないぞ。

難しいことなんかわかんない。でも、子供も孫も、帰ってくるなんて、あと何年だと思う？孫が中学生にでもなったら、帰れと言っても帰ってなんか来やしないわよ。私は便利なほうがいい！コンサートもあるし、催しものもあるし、夏の花火も見られるかもしれないし。

花火、なあ。有名だよなあ。じゃあ、そこがいいのか？

いいや、田舎がいい。

しらっという。なんか、バカにされたようで、無性に腹が立ってきた。

あら、気が短くなるって、老化だって言ってるわよ。ボケないでね。

ボケたら施設に厄介払いができて、いいだろう。

そうね、ボケたら施設に入れちゃうわよ。

その一言で夫婦げんかになった。しかし、県都では名園とうたわれた庭園の横に立てられたマンションもある。温泉ホテルのリゾートマンションも安い。一戸１５０万ほどだ。

温泉入り放題だぞ。

週末だけの別荘がわりならいいわよ。住むわけにはいかないわ。

それに、庭いじりもできないし。

と言う。そうだった、庭いじりが妻の希望だった。できたら、少しの農園も。そうなると・・・、と考える。町中では無理。かといって、山やど田舎は暮らしにくくてだめ。じゃあ、郊外

だと…。いや、私は家を建てるのに反対だったんだ。少なくとも消極的だったはずだ。だったら、なんでこんなに一生懸命調べたり考えたりしてるんだろうと思い返してみる。まあ、暇だから、たぶん、そんなとこだ。

そんなことを思いながら、朝の新聞を見てみると、新聞の別紙に特集が組まれていた。

終の棲家を考えておこう

そうだなあ、今度新築したりすると、終の棲家ってことになるよなあ、よその特集を開いてみると、介護付きマンションだとか老人ホームの記事が詳しく書かれていた。費用は安いが、公的老人施設は３年待ち、私立のホームマンションは入居の初期費用が何千万で、毎月夫婦二人で何十万。とても年金では賄えない額だった。わたしはその特集記事を放り出した。自分じゃ昨日の続きで、すこし膝も痛いから、階段を上がらなくてもいいように平屋にして、なんて安易なことを考え、それを疑いもしなかった。だが、あと五年もしたらどうなるんだろう。じゃあ１０年だったら？・・・、その頃なら、もうこの世にいないかもしれない。あいつも五十五でしんじゃったし、私ももうすぐ親父の逝ってしまった年になるんだ。そう思い返すと、手に持っいる特集記事がひどくおぞましいもののような気がして、投げ捨ててしまった。

あら、こんなこと書いてるのね。

妻がそれを拾い上げ、じっくり読みだした。そして、

これはこうと、考えとかなくっちゃいけないことね。でも、まだ大丈夫よ、病気をしないように、足腰鍛えて元気でいて、きれいな家に住みましょう。

と、しらっという。

なんかいい物件、あった？

ああ負けそう、いや、もう負けてる。だが、そういってる間にも時間は過ぎてる。せっかくの新居がもったいないじゃないか。早く立てて、ちょっとでも長く、そこに住もうじゃないかと思う。

後日談

温泉に行くついでに、山の中の別荘と思われる物件を見に行った。不動産情報誌で見つけた時、土地の坪数を３００坪と見誤った。

おい、大変な家が売りに出されているぞ。

どんな～。

土地が３００坪で、家が二件、その一つには屋根付きの露天風呂があって、３０畳のリビン

グに薪ストーブ、８畳の洋間が３部屋、各トイレ付、二階は６部屋で同じく各部屋トイレ付。もう一軒、家があって、こっちはお添え物みたいな扱いだけど、これだって、でかいぞ。６ＬＤＫの二階建てだ。私達なら、これでも大きすぎるぐらいだ。

と、記事の内容を読み上げながら、土地の坪数を見間違えていたことに気が付いた。

３００坪って思ったけど、３８２１坪って書いてるぞ。裏山も一緒の物権みたいだぞ。

いやだあ。そんなの山ん中でしょ。蛇が出るじゃない。

蛇どころか、熊が出るかもしれないぞ。

でも、炭焼きができるかも。

突然突拍子もないことを、妻が言いだした。

でも、私は手伝わないけどね。

わたしだって、陶器は焼いても、炭は焼かない。それに、熊はいないけど、猪は確実にいるよ。夜は、家を出ないことにしとかないと、自分の家の庭先で、猪に襲われるぞ。

と、こうなると宝くじが当たったらどうしようと妄想を広げる世界だ。それはわかってる。だが、二人で面白おかしく話ができ、つい、見に行ってみようということになった。

道はわかっていた。その先の温泉には、よく車で出かけていたからだ。

行く道中、話題は尽きなかった。水道は自家水源となっているから、たぶん井戸水を自分で処理して飲料水にしてるんだろうと、これは私の知ったかぶりだ。妻も情報誌の記事に追っている家の写真を見て、

山ん中ね。

と繰り返す。その言葉通り、目的地に近づいてくると、山をあがり、濃い木々の緑が迫ってくる。見慣れた景色だが、もしこれを毎日の日常にするとしたらと考えると、うすら寒い孤立感を覚えた。

でも、毎日、温泉に入れるぞ。

と、これは私の軽口だ。

目的地へ行くために、本道から山影へ脇道に入った。道は深い川に沿って走っている。以外に整備されたルートだった。だが、曲がって、また曲がってゆくと、何か見える。川の向こうに、離れていても大きな家の構えが解った。確かに家は二軒ある。大きな家の右手側に、屋根付き露天風呂も確認できる。私は日沿いの神社前に車を止めた。

家を建てようと思う　ー後日談　続きー

車を止めた神社は、この地の山奥ならこうだろうと当然思うような趣きだった。おやしろの向こうに杉の巨木が立ち並び、神栄な雰囲気を醸し出している。ところが、やしろの横にコンクリートの平屋があって、無人のようだ。扉を押すと軽く開く。これ幸いと、わたしはトイレに入った。やはり誰もいない。こんなことをしようと思って来たわけではないのに、勝手なことをする。自分でそう思いながら、トイレを済ませると、妻が睨んでいた。何か文句を言ってるが、さっさと道路を横切り、向こう岸へ橋も渡った。近づくと確かめるまでもない。情報誌にあった建物だ。川べりの平らな所に悠々と二軒の家が建っている。それらへ向かうのも、やはり小さな橋を渡らねばならない。ところが雨降りの翌日だからか、家の入口の橋の下には山から吹き出すように水がほとばしっていて、怖いぐらいだった。そして、橋の向こう側にはチェーンがかかり、無断侵入お断り、監視カメラ作動中という看板がかかっていた。入ってもよかったのだが、面白半分だから、もめごとは困ると思い、そのチェーンの前まで行って、奥を眺めるだけにしておいた。振り返ると、妻は橋げたと握って動こうとせず、下を流れる水の多さを見ていた。

流されるわよ、この橋。

そうだな、でも買うわけじゃなし、いいじゃない？

そういって引き返した。妻も車に帰ると、やっと冷静になって家を見られたようだ。

大きい！山も一緒だったら、一生見ないで終わるとこがあちこち在りそう。川も怖い。あの橋、いつか流されるわよ。山の木もずり落ちそうだし、もういいから帰りましょ。

と、もう逃げ腰だ。

毎日木を切って、夏の間に一冬分の薪を作って、秋には松茸と取りに自分の山に入って、自然を満喫できるぞ。それも自分の持ち物の山でだぞ。

と、ちょっと脅かす。

あなたに木を切るなんて、出来ないわよ。

いいや、できるよ、いまはチェインソーも、薪割り機もある時代だから。

実際、数万円から十数万円で薪を簡単に割れる機械がある。もう鉞で薪割りなんて時代じゃないんだと、ちょっと心強い。だが、それはそれだ。薪ストーブなんて、煙突の掃除や灰の始末を考えると、普通の暮らしに適してるとは思えない。しかし、山奥の老人夫婦が冬に、家ではなく、トタンで囲った隙間だらけの小屋に達磨ストーブを置いて、一日そこで過ごしているといったテレビ番組を見た覚えがある。暖かいから家に帰れないと言ってた。ストーブで茶を沸かし、飯を焚き、一日座りっぱなしで過ごす、そんなことのできる役立たずに、私たちもなってしまった。昔なら、それは囲炉裏端だったはずだ。いまは薪ストーブ、達磨ストーブ・・・。ほかに何かあるだろうと、突き上げるように思う。電気こたつでもなく、床暖房でもなく、と考える。しかし、何をあせって考えているのだ。家に閉じこもってるのが嫌なのか。じっとしてるのが嫌なのか。まあ、とにかくわからないが、残り僅かの人生を、じっと家に座っては過ごしたくない。

　でも、大きかったわね。

と妻が言う。七曲がりの山道をまた帰っていく。

　たぶんバブルの時にたてた社員寮か、ペンションだと思うよ。

　そうかしら、つい最近まで使われてたんでしょ。どこかのお金持ちが持ってた別荘かもしれないわよ。
　とにかく、趣味の家だと思う。
焦る気持ちが落ち着いた。
　ところが、一年近く経ったころ、その家の記事に、商談中の文字が張り付いた。あの家がまだ売りに出されてたこともびっくりだが、それを買おうという人が現れたことのほうがもっとびっくりだった。そして、しまったあ！という気になるのは何故か。元々買おうとも思ってもなかったのに、つり落とした魚はでかいといった心境だ。妻にそのことをいうと、
　どんな人が買うんでしょうね。
という。
　まだ商談中だからね、売れるかどうかわかんないよ。
こんなことを言ってる先から、一か月後に、
　お買い上げ有難うございました。
の文章が上書きされた。うれたんだあ、とびっくりする。しかし、売れない家もある。何年も前から、いかにも古民家然とした、県の文化財に指定されたというのが歌い文句の旧家の大邸宅が情報誌に乗り続けている。嗚呼たぶん、相続税に困って売りたいんだろうなあと思う。最初は至極高値がついていた。確かに土地も広いし、茶室もある。広い平屋に何故か風呂が二つ。ところが、トイレは一カ所。ネットに乗った室内の画像は、寿楽の壁が、流れた時間相応に荒れ煤けてみじめに見えた。だが、日本間の入口の上がアーチを描き、床の間にはいまだ置物と掛け軸が見える。置いてある座卓の贅沢なこと。しかし、庭は雑草が生え、荒れ果てている。竹も伸び放題だ。そして、アレェ、この家、まえは・・・、と首をひねった。
　おい、この家、前は３５００万ってあったはずだぞ。それが今は２５００万から２３００万に下がってる。
　えっ、そんなことあるの？
と聞き返してくる。こっちも半信半疑だ。それが、先日発売の情報誌ではなんと、キュッパの値段がついていた。１９８０万。いくらの値下がり？と、うすら寒い思いがする。売れないのに売りたいんだ。もう売れないと、普通ならあきらめるのにと思う。情報誌だって、追いかけていると、こんなことに出会う。同じ茶室付きの家でも、西の方の、これはお茶のお師匠さんのものと思える家はすぐ売れた。どこが違うのかはわからない。土地は２３０坪、平屋で茶室が３部屋。一間は狭く、あとは１０畳ほどが二間だ。水屋も風呂もあるが、台所らしいものはなく、トイ

レも水仙ではない。庭が凄くて、松が並んでいる。表に出た情報は価格と間取りと、この程度の情報だけだ。だが、売れた。そして、この家よりすごい家が売れない。価格も安いのにである。同じ茶室付でもだ。

　大きすぎて古過ぎだからよ。時代に合わないのよ。わたしだって、こんな家に住んだら、どうだ！って言えるけど、その一瞬だけね。あとはトイレと台所と、玄関わきの一間だけで暮らすわよ。それで終わり。そんなもんよ、家って。

解らん、解らない。解りませんでした。どうしたらいいんでしょうと、いまも解答を求めています。正解ってあるのかなあ。

夜明けへと急ぐ夜

体は綿のようになっていた。車を予約しているいつものホテルの玄関に止めた。仕事に疲れ，家にも仮住まいのマンションにも帰りたくないとき、由依はこのホテルに泊まる。車のエンジンを止めると、ドアボーイが車のドアを開けた。由依はキーを、折りたたんだ紙幣と一緒にそっと彼に渡す。

「お願いします」

「いらっしゃいませ。有難うございます、秋吉様。」

と声がする。離婚してから姓は元に戻したが、それを伝えるのも面倒なので、ここでは旧姓のままにしておいてあるのだが、常連なので支障はなかった。フロントへ行くと

「いらっしゃいませ、秋吉様。お部屋はいつもの通りにご用意いたしております」と、宿泊カードに記入している間にキーが渡された。

「これって面倒くさいわね。磁気カードか何か渡せば、宿泊カードなんか書かなくてもいいようにできそうなのに。」

と文句を言ってみる。

「申し訳ございません。決まりなもんでございますから」

宿泊カードを受け取りながらフロント係が言う。一応ルームナンバーを確かめて、

「ありがとう、お世話になります。」

とエレベーターへ向かった。案内のボーイはついて来ない。いつも断っているからだ。荷物もないから運んでもらう必要もない。しかし一応ブライダルショップには立ち寄る。ブランド物の女性下着がここには売っている。何も用意してない私は、ここで真新しい下着を買う。時にはその横のブティックで、間に合わせのスーツも買ったことがあった。ホテルは泊まるだけではない。

買い物を済ませ、エレベーターの乗る。降りる階を指定するボタンの下のカード差込口にカードを差す。すると通常は止まらない階のボタンが指定できるようになる。十二階を押した。たまたま同乗者がいたのだが、その視線から奇妙な反感を感じる。それを後目に、開いたドアからさっさと降りる。

「いらっしゃいませ、秋吉様」

とスーツ姿の女性ルーム係が、下から私が到着するまで、いつも待っていてくれる。

「ありがとう」

そういってルームキーを渡すと、彼女が鍵を開け、ドアを押し開いて、私をいざなう。私が中に入ると、

「おやすみなさいませ。」

と、ドアを閉めて行った。明日の朝の朝食と新聞のリクエストは、もういつも通りとわかっているので改めては訊いてこない。その気楽さが、このホテルへ来る私の理由だった。ベッドに買い物した品を投げる。床からの背の高いスタンドが柔らかな照明になっている。もうわたしは無遠慮に上着を脱ぎ、靴を投げ捨てる。分厚いカーテンは外に明かりさえ漏らさないのだから、わた

しはそのままバスルームへ向かう。あたたかく暖房された廊下を行き、大きなガラスの扉を押し開いて、全部脱いで浴室に入る。湯はもう十分な量が張られていて、すぐに入れる。大きなバスタブに手足を伸ばし、ボタンをおすと気泡が噴き出す。少しのぼせそうだが、肩の張りと腰の辛さが一時に溶けてゆくようだ。目をつぶり、明日の事を思う。チームに報告することがたくさんあった。外資の依頼でM&Aを仕掛ける今回の企業は、問題が多すぎた。株価の時価総額も、表向きの評価はそれ相当ではあったが、内実を調べるとキナ臭いものが散見された。その下調べをするのが私の仕事だった。法科大学院を出て弁護士になってもイソ弁にもなれず、国選さえ順番待ちということだが、私たちのチームは弁護士資格を法廷ではなく、M&Aとか企業紛争、著作権、特許訴訟に特化して活動することによって寝る暇もないほど働かされていた。
M&A、企業買収というと、ハゲタカファンドが獲物を狙ってなんておどろおどろしき聞こえるが、そんな敵対的買収ばかりがM&Aではない。結局は高齢化、少子化、景気の後退等様々な問題が今の中小企業を取り巻いて、後継者がいない、経理内容が改善しない、帳簿上は黒字なのに現金がない、職種が時代遅れになった、採算がとれる見込みが立たないなどの諸事情で会社を手放そうとしている経営者と、それらを買収し、もしくは出資しようという人たちを結び付ける仕事だ。とはいえ、不採算が見込まれる企業の買収だから信用調査が大変だった。帳簿上は黒字でも、実状は解らない。会社と銀行だけを調査しただけでは決して十分ではない。だから、我々が声をかける前に、隠密に調査する。それは買取側、出資側も同様だ。一度＊＊データバンクの資料だけで信用して大失敗を招きそうになったことがあった。金を出すほうだから金さえあれば大丈夫とはいかない。特にアジア系の出資者は怖い。輸出してはいけないものを輸出することを目論む輩もいるのだ。こんなものが禁輸商品になっているとは思わないものまで、禁輸と指定されていることもあった。たとえば、プレイステイションなんて単なるゲーム機だと思うのだが、このなかには１２８ビットの最速CPUが組み込まれていて、これを何台も使うとスーパーコンピューターが出来てしまう。だからこれは共産圏には輸出できない品目に指定されていた時期があった。おもちゃが軍事目的に転用できるとは思いもつかなかいが、世界はこうした情報であふれている。それゆえにこそ、私たちの出番もある。

　チームには元銀行マン、私立探偵、中小企業診断士、弁理士そして弁護士が入り乱れて加わっていた。といっても、どちらかというと、おてんとさまの下を顔を上げて立ち回れる仕事じゃないから、後ろめたさもあった。さらに、そのチームの中で一番使い物にならないのが、弁護士だった。もちろん、法廷となれば弁護士がいなければ話にならない。だからお飾りにでも弁護士は必要だった。しかし帳簿の裏も読み取れない、銀行の金の流れも解らない。特許内容は弁理士の範囲だ。じゃ弁護士は、となるとチームのリーダーとしてそれらを統括し、法律的に適法か否かを判断し、といえば表向き綺麗な話に聞こえるが、時として法律を使って恫喝をかけること

も弁護士の仕事だった。言わば、総会屋が弁護士のバッチを付けているといったことも、やらなければならないということだ。

円満な企業買収として成功したと言える事例も多々あるが、依頼を受けて調査にかかり、内心びっくりすることがあった。ヒゲゼンマイときいても最初は何に使われているのか、想像もできなかったのだが、かつて日本はスイスを抜いて機械式腕時計で世界を席巻した。その正確さは、１カ月で１秒の狂いに抑えるところまで行ったし、日にちを表示し、月の表示も加え、曜日もわかるようにしたのも日本だった。そしてそこまで技術を磨きながら、自分でクオーツを作り出し、機械式を駆逐してしまった。腕時計は実用品に成り果てた。それでもまだ日本の腕時計製造会社は進化し続けてはいるが、機械式腕時計の部品を作っている下請け会社が生き残っていた。＊＊発条という会社だった。ここは大手の下請けとしてヒゲゼンマイと自動巻の部品を作り続けていた。さらに今も高級腕時計を工芸品として、ほとんど手作りのようにして作っているスイスの有名ブランドの少数単品の発注に応えて生き残ってきた。だからローレックスとかオメガとかの、高級ブランドではあるが大量生産しているところではなく、一個数百万とか１千万を超える手作りの単品生産と言っていい腕時計の部品として発注される、数個から数十個の部品を作っているのだ。それゆえ部品の単価も高いが、納期もきちっと守ってきた。さらに製品の納品前品質検査も厳重だった。それがこの会社を生き残らせてきたと言えるが、あまりにも特殊だ。それゆえ技術者が高齢化し、後継者もいなかった。では買収側はなんのメリットがあったのか。それは特許だった。それも検査技術と検査機械の特許だ。その価値などこちらには解らないが、検査方法とその精度を上げるための技術は、表にこそ出ないが、会社を支える大切なものだ。部品を作る技術は大手にもある。だができてきた部品の品質を確かな一定のものにするのは検査だからだ。そこで後継者がいないとなると、それまで部品を納入していた会社が買収に乗り出してきた。特許があると買わなければならない。だが買収評価額が問題だった。

買収側の会社は、膨大な特許料を言われると警戒し、我々コンサルタントと一緒に＊＊発条に乗り込んだ。さすが精密部品を作る会社だけあって、建物自体は古びていたが、中は清潔に整えられていた。もちろんコンピューター関連の部品を作るクリーンルームのようなことではなかったが、整理整頓されているとかのレベルではなく、清潔のレベルまで行っていた。

そこに働く人たちは一様に制服を着ている。男も女も同じ制服だ。そして皆年取っていた。工場の隅で作業をしていた老人が立って私たちを迎えてくれた。会長だった。彼が別室の案内して、また出て行った。今度は少し若い男性を連れてきた。品質検査の＊＊だと紹介した。彼が実質全製品の品質管理をしているといった。検査技術の特許も彼が考案した。その男は会長の息子だった。

しかし、なぜ会社買収に応じることにしたのですか。

私が訊くと、

　　もう、これの時間がないのですわ。

と会長が息子を指差し、言った。それ以上は言わなかったが、私にはわかった。

　　ですから、買収金額はほどほどでいいんです。これの嫁さんや子供が先で困らないほどでいいんです。しかし、売るからには責任を持ちたい。それで、条件があります。私はこれの作った技術を残したい。だから、買収側から優秀な人材を派遣してもらいたい。できる限り長く教えたいとおもっとるんです。

それを通訳すると、買収側の責任者である副社長が、目を見張った。何を言ってるのか理解できないという風だった。買収はビジネスだからだ。

結局その会社の買収は＊＊発条の出した条件通りで妥結した。社長、会長は技術伝達が済み次第退任する、従業人はそのまま解雇しない。そして買収金額はそちらの予算内で、といった内容だった。買収側の人間は、いくら友好的買収だと言っても、こうも容易くいくとは、日本人は何を考えているんだと詰め寄った。自分の技術を残す、そのためには自分の持っているものを何の見返りも求めず、惜しみなく教える、それが日本人気質だと説明した。それが解らない。外人には到底理解できないことだった。日本人はビジネスだけのために仕事をしてはいない。特に職人はそうだ。それゆえ、わざを伝えることにはこだわりがあり、ときには敵にまですべてを教えてしまうこともある。しかし近代的な意味での技術となると、近年、日本でも権利意識が根付き、特許という言葉が、金を生むという常識が出来た。そう話すと、ますます解らないといった顔つきになった。

しかし、今回の買収は敵対的であるから、調査も綿密に行わなければならなかった。それも、隠密にだ。それゆえ代理人としての私たちの事務所が使われた。相手方の企業は一時期音響の業界では一二を争うトップメーカーだった。しかしオーディオがすたれ、映像の時代になると時流に乗れず、ライバル社は台湾に身売りし、そのあと消えていった。当の会社は真空管からトランジスタに乗り換え、それも高級アンプへ向かい、ブランドを確立する方向を選んだ。中でも、オーディオパーツの中で手探りでしか作れないスピーカーの部門で、録音スタジオのマスタースピーカの地位を獲得するまでになった。つまり世界標準ということだ。といってもそれがいい音だというわけではない。どの音域もひずまず、フラットに表現されるということである。能率も高いので、どんなオーディオセットでも普通に鳴る音源が作れるということでもある。

だが米国の買収会社が目を付けたのは、そんなことではなかった。もう忘れられた技術としての真空管アンプの最重要部品である出力トランスのなかにそれはあった。トランスの中の誘導コイルを巻いている鉄芯は、繰り返される誘導コイルの磁化で磁性を帯びてしまうが、この会社の芯材はたとえ磁性を帯びても、鉄の結晶体が通常の場合のように、単一方向には並ばず、全く思い思いの方向に向き、磁性がランダムになって、結局磁石化してないのと同じことになるという特殊無磁性化鉄であった。この鉄材の製法が日本で3番目の製鉄会社とこの会社で開発された特許で、これはアメリカ、欧州、その他で認められていた。オーディオ会社としては、今の時代になって、それがどんな価値をもっているかなんて、考えもしなかっただろう。だが、米国企業は見逃さなかった。というより、その米国企業の後ろにいる、日本の原発を作っているT社が見逃さなかった。この会社は日本でも控えめで、けっして派手なCMも打たないが、家電の仮面をかぶって日本企業が撤退するパソコンも自社で作り続け、その仮面の下で大手重電気工業としてミサイルから原発まで作っていた。なかでも独自技術の原発は、世界で一番安全といわれ、韓国が落札した某国の原発の、真の製作者はこの会社だった。いや、それが解っていたから、某国も韓国に落札させたのだ。そしてこのT社は米国のGEの原発部門も買い取っていた。さらに、日本のもう一つのH社も、違う米国原発会社を買っている。それゆえ、米国には自国の原発会社はもうない。あのスリーマイル島以来、原発は米国の重荷になってしまい、属国たる日本の企業に引き受け

させたんだと由依の会社のものが言っていた。世界で最先端の原発を作っているのは実質フランスと日本のみで、中国、ロシアは一周遅れの、よれよれのランナーだ。ましてや韓国の原発は自国製の原発は一基も作れていない。今ある原発も、いつとまるか、いつ事故を起こすか解らない代物で、福島の惨状がいつ起こっても不思議はないのが現状だ。それでも韓国は原発を動かし続けねばならない。そうしなければ、首都ソウルさえ頻繁に大停電を起こしているほど、電力が間に合っていない。まるで北朝鮮の話かと思うが、これが現実で、政府は財閥系の工場に優先的に電気を回し、一般は停電慣れして気にも留めない。さらに、韓国テレビのニュースでは、ソウル市内の舗装された道路で、3マイクロシーベルトの放射線量を観測したと報じている。これは東京の平均の1000倍以上でチェルノブイリより数等高い値であるし、福島の平均値を大きく上回っている。なぜか？韓国で廃炉にした原子炉の建屋その他のコンクリートをソウル市内の道路の骨材にして敷き詰めたからだ。それゆえか、韓国の甲状腺がんの発生率も恐ろしいほど高くて、全がん発生人口の23パーセントをこえている。これは国際的にも類を見ないほど高く、チェルノブイリをも上回る。しかしこれに対して蓬莱大学の教授が、もう甲状腺がんの検診を受けるのをやめようと言い出した。甲状腺がんは症状が出てから治療しても90パーセントは完治するからというのだ。国家の財政を圧迫するから、そんな検査をするなとは学問の徒のいうことか、と思う。由依は、あの国は放射能で心まで汚されているとおもう。

そして、こんどの買収劇はT社の技術のためだった。まさに原発の次の物理の火、核融合炉のためのトライダル超伝導コイルとその収容器4個、470億円をEUから請け負ったからだ。しかし、日本の核融合炉の技術はそれだけではない。この核融合炉の計画と研究のための立地場所こそフランスに譲ったが、トカマク型の実験炉で世界最長のプラズマ発生時間を達成したのは日本であり、もう少し低圧でプラズマ発生を達成したのも九州大学だ。その意味で。日本は最先端を行っていると言える。この分野での米国は、日本やEUとは違った形の実験炉を模索していたが、思い通りの結果を出せず、結局国際機構に加わってきている。

そんな中、日本は国内で独自の動きをしていて、2013年からJAEAが実験炉を建設中で、2019年から実用化の方針だ。由依はそんな話を聞かされて、鳥肌が立った。一般の人が何の関心も持たないでいるうちに、1億５０００万度のプラズマなる物理の火がともり、それを磁場で空中に固定、維持してエネルギー、すなわち電気に変える、そんなことがいまどこかで行われようとしている。あの原発事故によってどれほどの事がおこったのかと思うと身震いしてしまうのに、いままた全く新しいテクノロジーが人類の前に現れたのだ。原発は人類史上最も汚いごみを残した。このごみの処理は先の科学の発達にまかせて見切り発車し、美味しいとこ取りだけして、後は野となれ山となれが現状だ。核融合炉も、何が起こるかわからない。もしビッグバンが神の手によるものなら、極最微粒子を融合して水素を作り、ヘリュームを作って星々を作った手が太陽を作った。今我々は地上に神の手をもって、太陽を作ろうとしている。それが何を生み、何をもたらすか、解らないままに未知の領域に進んでいる。人々の前に描かれるのは輝かしい未来だ。夢のエネルギーとあの時も言われた。無限のエネルギーを手に入れたと聞かされた。それなのに米国では電力発電の４５％が石炭で作られている。原発は２０％に過ぎない。この現状はなにを物語っているのか。原発は夢のエネルギーではなかったのか。無尽蔵のエネルギーならそこか

ら汲み続ければいいじゃないか、米国は何かを隠していると、聞かされた。だからGEをはじめ、原発製造会社を日本に押し付け、自らの手は綺麗にしたのだ。

なにかとんでもないことに首を突っ込んだと思った。由依の文系の頭では到底理解できない内容だ。炉の中に小さな太陽が出現するさまを思い浮かべるが、青い空に輝いている太陽しか見えてこない。眼を焼く光の熱球だ。由依はベッドの上で寝かかっていた。しかし、あの粘りつくような眼の光が、自分の体をなめつけてくる気持ち悪さを必死に耐えて、早口に抗弁した。だが、この人たちは誰、と思った。そのイントネーションと早口ながら聞き取れる言葉から、中国人、と直感した。なんでこの会社に中国人がいるの、とも思った。

総会屋か、情報屋か。なに、嗅ぎまわってる？

奇妙な発音の日本語と、暗い残忍さで鈍く濡れている目がやみのようだった。逃げないと殺される、闇に葬られると感じた。しかし、なにをこの人たちは知りたいのか、逆になにを隠しているのか、由依は部屋の出口の様子を見ながらも、考えていた。しかしそれは由依が調査に来た対象とはかけ離れていると思った。

気を付けたほうがいいかもしれませんよ、何か軍事技術に応用できるGPSを使った位置情報システムと、3次元位置情報確定システムを結び付けて、あの自国の人工衛星を撃ち落してみせた技術は、こんどの音響メーカーの開発したものらしいですよ。

えっ、日本のあんなちっぽけな会社に、そんな技術があるの？

いや、カーナビを作ったのもこの会社ですし、その延長でGPSの応用技術を開発している間に、平面から立体の三次元的位置確定が必要になって頑張ってたらしいんですよ。それを某国の軍事スパイが目を付けて、高度に精密化させ、レーダーシステムと連動させることに成功したらしいんです。

なんか、おもちゃから武器ができたって感じね。

そうです。T芝がパトリオットの防空システムの心臓部である三次元位置確定システムを開発してますから、同じようなことをたまたまやってるわけですが、等速運動をしている衛星と加減速しているミサイルとははるかに難易度が違いますから、某国の技術の方はあまり気にするほどの事ではありません。しかし軍事スパイがすでに入り込んでるみたいですから、危ないですよ。こんなふうに聞いてはいたのだ。だが公然と役員を名乗り、面会に応じてくるとは思ってもみなかった。由依は脱出を図るため、自分が弁護士であることを名乗ることにした。そして、個人がクレームによる賠償を求めているということにして、その依頼で来たのだと告げた。すると、まだ疑わしいといった目つきで由依を見ていたが、秘書さんがなにか勘違いをされたんじゃないですか、と弁護士の名刺を見せると、ぷいっと男は出て行った。由依は一息おいてそっとドアを開け、すべるようにろうかにでてエレベーターに乗り、一階のロビーに降りた。ガラス張りのフロアの明るさに、助かったと思った。先ほど顔を合わせた受付嬢が由依を見ていた。由依はそれ

も無視して外に出た。あとは地下鉄を三度乗り換えた。それも、閉まる寸前のドアからすり抜けてホームに乗り、自分が最後に降りたことを確認し、別な路線の地下鉄に乗り換えて、不審な尾行がないことを確認した。考えすぎかもしれないが、あの男のねめつける目の光はそこまで由依を怯えさせた。都会の群集の中では、何が起こるか解らない。アイスピックで腹を刺されて、刺された本人が気付かず想到距離をあるき、少量の出血に周りが気が付いて声をかけ、途端に気を失って倒れたなんて、仕事人のような事件もあった。由依はレンタカー店で車を借り、もう一度尾行者のいないことを確かめて、自分の車の置いてある駐車場に乗り込んだ。そして、レンタカー店に車を置いた駐車場の住所を告げ、自分の車に乗り換え、このホテルに予約を入れてやってきたのだ。その間に、所長には連絡は入れておいた。

　そうですか。それじゃ、私たちの事前の調査が不十分だったのですね。そんな現状は思いもよりませんでした。知財部門のユー君の情報が的を射てたわけです。これは・・・、よほど注意してかからないと。

と所長は電話口でいった。

翌朝、由依はフロントで支払を済ませると、そのまま出口に向かった。

おはようございます。秋吉様。

とドアボーイが声をかけてくる。その向こうに、充分温まった由依の車が待っていた。さっと車のドアが開けられた。一瞬車内を点検する。確かめて運転席に座った。ドアがゆっくりと、確実に閉じられた。安全ベルトを締め、右手を挙げて挨拶をし、静かに車を発進させた。カーナビをテレビに変える。音声だけが今朝のニュースを告げてきた。なんということもなく、変わらぬ朝の繰り返しに見えた。

公園通りを走ってゆくと、後ろからパッシングが来た。携帯もなった。その先に車を止めて、とユー君が言った。ゆっくりと車を公園の入り口に停めた。ユー君が車から降りてきて、耳にイヤホンを差した機械で由依の車の周りを探った。そして、下周りから目を上げ、トランクリッドを開けてなかを覗いた。奥に何やら発信機が付けられていた。ユー君はそれを外し、耳からイヤホンを抜いた。

GPS機能の付いた、盗聴器ですね。念の入ったことだ。

だれ？こんなことするの。

誰かはわかりませんが、この車のトランクを鍵なしで開けようとするのは無理だ。とすると、仕掛けたのはホテルマンかもしれませんね。フロントは鍵を預かってくれてるはずですから。

えっ、そんなことまでするの？

しかねません、あいつらは。

じゃあ、私の事はもう筒抜けってこと？

でも、名前以外は全部うそでしょ？

そうよ。

だから、情報集めのために、こんなことをするんですよ。しかし、まいったなあ、なんか、すごくやばいことに手を突っ込んでしまったみたいですね。

ユー君は理系の知財に詳しいが、同時にボディガードとしても信頼がおけた。要するに理系オタクで格闘技好きの、一風変わった同僚だった。他に公安上がりのルパンさんもいる。彼は元の職業柄からゲシュタポ棒と拳銃の名手だった。といっても、警察をやめたら拳銃は持てないから役に立たないが、私たちの事務所では異色だ。しかし、なぜ彼らがこの事務所に居るのか、きょうやっとわかった気がした。そして、そのルパンさんがあの会社は危険だとその情報網から聞き出し、ユー君をこっちに回してくれたのだった。

遅いわよお、先に言っといてよ。何されるかわかんないじゃない。殺されるかと思ったわよ。

そんなにやばかったんですか。

・・・そうでもなかったけど。

そういいながら、あの中国人の舐めまわすような眼を思い出し、身震いする思いだった。

事務所に来てくれって言ってました。T芝と、・・・なんか、＊＊省のお偉いさんが来るらし

いんで。

　　えっ、なんで＊＊省がでてくるの。文部科学省ならわかるけど。

　　なんででしょうね。なんででしょうか。

ユー君も首をひねって見せたが、本当はわかっているみたいだった。

　　知らないのは私だけ？

　　いやいや。

そういって、ユー君は手を振って否定して見せた。

事務所の会議室には、もう防衛省の国内技術管理班を名乗る者が来ていた。その横に依頼人のT芝の係員とT芝海外経済研究所所員が同席していた。

こまりますねえ、T芝さん。ちゃあんと全部話しておいてくれなかったら、こっちはどんな目にあわされるかわかんないんだから。

さすがに所長も防衛省の人間とは初対面で、いきなり文句をぶつけるわけにはいかなかったのだろう。所長がそういうと、防衛省の係官が、

そのことは私が説明致します。

と、どこか硬い口調で話し出した。たぶん、この人は制服組なんだろうと由依は思った。

今回貴社にご依頼いたしました核融合炉の特許の件は、これはこれで大変な事案で、必ず解決しなければならないのは言うまでもありません。ですからこの案件については、正面から貴社に解決をしていただくよう、お願いいたします。

正面から、というのは、公然と、という意味でしょうか。

そうです。きちんと法にのっとった商取引で解決してください。しかし、実はあの音響メーカーには、我が社と競合するもう一つの技術が今、それもとてもダーティな方法で開発されようとしていることも、解っています。

とT芝の研究委員が切り出した。

それがソナー探知機です。

由依は何を言っているのか解らなかったが、ユー君が実を身を乗り出して、

潜水艦の、ですか？

と早口で言った。

この、軍事オタク！男ってみんなそうなんだから。

と由依は思った。防衛省の係官は平然と頷いた。

そうです。それも、超低音域ソナーと高音域ソナーの組み合わせは通常よくあるのですが、そのデーターの解析システムとデジタル表示装置の開発をやっているようなんです。それも他社の技術を盗用して陰でこそこそ開発し、それを民生品として第三国に
バラバラに分割して輸出し、そこから中国に持ち出すという巧妙さです。しかしそれも大した性能ではないので、見逃してはいるのですが。

えっ、それでいいんですか。そんなことしたら、日本の防衛が危ういんじゃないでしょうか。

いいんです、それはそれで手を打ってあります。

いいんかなあ。

ユー君が首をひねる。

しかし、あの会社はもう乗っ取られていましてね、GPSコンパスの精度を必死にあげ、潜水した潜水艦の位置を確認できるような位置コンパスも作ったみたいです。

あの、トンネルなんかでGPS電波の入らないところでも地図上の自分の車の位置を確認できるようにする、あれですか。

はい、まあほぼ同じ原理です。これを搭載すると、海面に受信アンテナを上げなくてもほぼ完全に海図上の自艦の位置を把握できますから、海底地形図に従って自艦を潜水航行させることが出来ます。

あの国の潜水艦って、あのど素人の音響会社の技術でそんな大事なものを開発させなければならない程度のものなんですか。

いやあ、なかなかのもんですよ、あの会社も。特にジャイロセンサーの技術はカーナビで鍛えてますから、精度も相当のもんです。それに、いかに原潜といえども、自動車ほどのスピードは出ませんし、車が道をくねくね曲がって走るのを追従してカーナビに表示できれば、鈍重な潜水艦の航跡を追いかけるぐらいはできます。

じゃ、大変だ。

そう、大変です。が、自艦の位置を捕まえられても、地図がなければなんの役にも立ちません。彼らにはその海図がない。海底図もない。ですから、彼らがどんなにハードを焦って手に入れようとしても無駄なんです。彼らにはそれが解ってない。もっとも、その海図を作るためにも、ジャイロセンサーがいると言えばいるのですが。

それに、海図自身も、いろんな市販の地図に書かれてますよね。

そうなんです。しかし、潜水艦の航行用海図は秘中の秘で、国家機密です。

いきなり小娘のように、わかんなーいといってやろうかと由依は思った。だって戦争映画じゃ潜水艦は普通の船と同じように、取り舵何度とか深度〜と艦長が命令して進んで行ってたはずだと思ったからだ。しかし話は、そんなことすっ飛ばして進行していってた。

で、あなた方は私どもに、何をせよとおっしゃるのですか。

所長が核心と思われる話をいきなり切り出した。

これからの政策として、政府は武器輸出３原則を大幅に見直そうとしております。もちろん無節操な武器輸出を国民が許すはずはないので、これまでのように政治的価値観を共有する国とかには、これからは兵器も技術もある程度の輸出を認めてゆこうという考えです。

そんな、輸出出来るような兵器とか技術って日本にあるんですか。

潜水艦がどうやって潜航出来るのか、考えてみたこともない由依が防衛省の係官に訊いた。

いままでは、戦争が最先端軍事技術を生み出し、それを民間に降ろしてゆくという流れでしたが、どんな技術が兵器に使え、軍事技術に転用できるかって境界は今はもうありません。それは民間の技術が進んだということではなく、なにが軍事に必要かというニーズが大きく変化してきているからなんです。たとえば、日本の従業員１３０人ほどの中小企業が超音波センサーを作って、空港に売り込もうと見本市に出しました。そのセンサーは、上空１５０メートル程までの乱気流を感知できるんです。これは飛行機の発着の安全にはとても有効な機械と言えます。ところがこの企業のブースに、一番にやってきて熱心に話をしていったのは、空母の発着艦や戦闘機の離発着に使いたいという各国の軍関係の人間でした。それからHALというロボットスーツは、リハビリ関係が見向きもしない開発当初にあって、一番に飛びついて来て共同研究しようと申し出てきたのは米陸軍関係者でした。HALの方は肝をつぶして断ったようですが、米国はこれに発想のヒントを得て、HALのような筋力補強システムの開発に今とりくんでいるようです。また、これはよく知られていることですが、ステルス機にも電波吸収塗料を日本のメーカーが供給しておりますし、他にも挙げればきりないほど、日本の技術は軍事転用が可能なものがたくさんあります。

日本の防衛省が九州大学と共同開発を申し入れ、今開発中なのが臭いセンサーです。これは犬の１０倍の能力だそうで、これを使って例えばテロリストによって仕掛けられた爆薬を探し出すのに使おうというものです。他にも地雷探査にも使えますし、麻薬犬の何倍もの精度と確実さで、密輸されてくる麻薬の捜査にも使えます。これを軍事技術への転用と言い切って、目に角たてて反対反対というのはいかがなものかとは思いますが、かつて戦闘機に到達距離を延ばすための燃料補助タンクを付けると、北朝鮮とか中国まで行けるようになり、専守防衛の憲法に反すると激しく攻め立てて、日本向けの戦闘機に補助タンクを付けられないような仕様に追い込んだ政党がありました。あの党には、中国から資金が流れ込んでいたという噂が絶えませんでしたが、どうだったんでしょう。ところがいまでは空中補給ができるようになりましたので、無意味な議論です。

かくのごとく、今日本のセンサー技術と通信技術、光学機械、他にも思いもよらぬものが軍事技術として欲しがられています。

と、そこまで話していいのかと。聞いているほうがハラハラするような話が展開されてきた。そこへ軍事オタクが熱っぽく口をはさんだ。

あの北朝鮮の無人偵察機もそうですよね。あれにはキャノンとニコンのデジタル一眼レフが乗ってましたし、プロペラエンジンも日本製の模型用ガソリンエンジンが使われてましたね。

しかし当局の発表は随分おかしいと思ったんですが。

　　いやあ、そのことに気が付きましたか。

防衛省の係官が笑って答えた。

　　気が付きますよ。あのデジカメはそれだけでインターネットに画像をアップできますから、機体を回収しなくてもデータは取れます。それにコントローラで操縦していただろうということは、機体の先端に短いロッドアンテナが立っていましたから、そうなんだろうとは思いますが、カメラのGPS情報はリアルタイムで確認できますから、機体のすぐ近くから操縦していたとはおもえません。それと、機体自身金属じゃなかったから、爆弾を工夫すればミサイルより安価で、確実に攻撃できる、・・まるで無人の神風特攻隊みたいだと、思えました。貧乏人の誘導爆弾攻撃機とでもいうのでしょうか。

由依がユー君をたしなめた。今目の前にいる人たちを、そこまで信じて気を許していいのだろうかと思ったからだ。それと、信用するにたる人間だったとしたら、この人達は私たちをどこへ連れてゆこうとしているのか。そうおもうと急に怖くなった。

　　こちらのお嬢さんがなにかお疑いのようですが、

と係官が私をぴたっと見つめ、所長に話し始めた。

　　じつは、私たちのほうがあなた方を調べさせていただきました。

　　身元調査ですか。

　　そうです。で、一番高いところから、思想、諜報活動の専門まで動員して、外務省の対テロ情報室も協力を頼み、すべての点でシロという結論を得て、今回の案件をT芝から依頼する形を取らせていただきました。そのあたりはルパンさん、あなたならお分かりかと思いますが。

　　そうだよ、俺もここのメンバーの資料は一応目を通しちゃあいるから。

　　なによぉ、それ。なにをしってるっていうの。

由依が眼を剥いておこった。

　　それに、あなたはもう公安とは関係ないんでしょ。

　　まあ、そうだな。

そういって、横を向いた。

　　えっ、本当に何かあるの？

そういうとユー君まで分かりやすい反応を示した。

　　そうですか、知らなかったのは私と、由依さん、会計君だけですか。

　　私も関係ないですよ。

弁理士の理系君が片手をあげて言った。

　　ただ、心配なのは由依さん、あなたの分かれたご主人です。所在地がつかめません。私たちの調査範囲で解らないのは、むしろ不可解なんですが。

私は、離婚してのち一度もあっておりませんので、そのあたりは・・・。

そうですね、実はあなたが一番問題で、携帯の通信記録、行動パターン一切、調べさせてもらいました。

そう聞いた途端、頭の血が一気に沸騰した。

なによ、どうだっていうの。

それには答えが返ってこず、

それだから、昨日の危機も回避できたんです。本当に危なかったんですから。

そういった防衛省係官の言葉が終わらないうちに、所長が、

解りました。お国のためなら、なんでもしましょう。

と、古めかしい言い方を構えて言い放った。

国は表立っては動けない。輸出入の管理は税関で一応できるが、ざるのように抜け落ちてゆく。日本の管理機構など大したもんじゃないのは目に見えている。かといって、その野放し状態を放置するわけにはいかず、その技術内容を検討しながら大手軍需産業の下に組み込んでゆき、間接的に管理支配しようというにが眼目であり、その表の機関が私たちということだった。

まあ、それなりの実績と手堅い手法で、業界の信頼も得ておられるので選ばせていただきました。今回は弁護士さんが先走りましたが。由依さんとおっしゃったか、ちょっと控えめにお願いします。まあ、今回は我々が見ておりましたので、事なきを得ましたが。

由依をちらっと見て、ユー君に目を移し、防衛省係官がそういった。じゃあ、何なんだと由依は反発しそうになったが、ユー君が眼で抑えた。

とにかく、こんかいの依頼は企業買収ということではなく、特許使用料を払うということに方針転換をして、話を進めてください。よろしいでしょうか。

とT芝が所長に言った。

解りました。そういうことなら、由依君、理系君、話を進めてください。

所長、私は昨日の今日で、追跡装置まで振り切ってますから、向こうも警戒して話どころじゃないんじゃないでしょうか。

いいんです。いけしゃしゃと顔を出せば、腹の探り合いで、無暗に荒っぽいことは出来ないもんです。ですから多分むこうは法外な金額を提示して、様子を探ろうとしてくると思いますよ。で、こっちは何かを匂わすようなことは一切しないで、ビジネスライクに、どかんと安い金額を言い張るんですねえ。そして金額面しか話をしないで、まとめようとすればいいんです。知らん顔して。いざとなったら、ユー君がいますし、理系君もついてますからお願いします。

所長にはどこか窺い知れないものがあった。それは日本刀の刃の光り方に似ていた。

わかりました。

そういい、由依は女の特技を使うことにした。先ず前髪を上げ、髪を後ろで束ねる。次に口紅をもっと明るい色に変え、通常より大き目に塗る。眉も太く長く書く。濃い目のアイラインを引き、付けまつげをして、細い縁の眼鏡を掛け、スーツを着る。それだけで見た目の年齢まで変わって見えた。

へえ、それって変装術ですか。

残っていたT芝の社員が首を傾げて言った。

そんなつもりはありませんが、時に顔認識センサーも誤魔化せることがあります。人は難しいですが。

そうでしょうね、なんとなくわかります。しかし、女は化けますねえ。

そういって同年齢らしい所長の方を見て、同意を求めた。

化けます。しかし、それも特技。

化粧を終えて戻ってきた由依を見て、所長が言った。そんな声を尻目に、ユー君、理系君、行くわよ、と声をかけた。

由依は車の中で、先に渡されていた資料をもう一度読み直していた。由依は行を目で追いながら、ユー君に訊いた。

私、わかんないんだけど、戦争映画じゃ、潜水艦って海の中でも普通にすすんでるじゃない？潜水艦が進んでゆくのに、何か前が見えるような窓みたいなものがあって、そこから見ながらすすんでるんでしょ？

もう！だから素人ってばかにされるんです。潜水艦に前を見るような窓なんかありません。周りを見ることのできるのは、潜望鏡だけです。それに、いったん潜水してしまえば、たとえ窓があっても深い海底では光が届かず、真っ暗闇です。

じゃ、どうやってぶつからないようにすすむの？　むやみやたらに、めくらめっぽうで進んでいるとでもいうの？

第二次世界大戦の時は、いったん潜水してしまうと殆どめくらめっぽうで潜航していました。一応海図らしきものはありましたが、スピードと方向だけを頼りに、計算でここいら辺りを進んでいるんだろうと見当をつけてただけです。で、現在位置を知るために潜望鏡を上げ、島影を見て、天測も併用で自艦の位置を特定していたんです。今はそうじゃなくて、慣性航行装置と加速度センサーで自艦の位置を、綿密に調査されている海図上に特定してゆきますから、より確実に解るようになりました。

ユー君、自衛隊だったの？もうとぼけなくてもいいんじゃない？

そうですね。確かに自衛隊でした。

防大卒の？

そうです。

で、潜水艦乗り？

違います。

じゃ、何？

言えません。言ってはならないことになってます。既存の任務ではないとだけは言えますが。

日頃の声音とは違った、きっぱりとしたものいいで見返しそうになった。

慣性航法装置といっても、要は独楽です。

こま？あの、回すコマ？

そうです。由依さんは関心ないから見たりしなかったと思うのですが、日本の観測衛星、だいち２号　のジャイロを作ったハイテク集団と東京青梅の町工場の熟練工さんたちが究極のこま作りで対戦するってテレビ番組がありました。

目的地まで時間、ユー君は日頃のちゃらんぽらんさに似合わず、目を輝かせて話しだした。

その番組の冒頭で、何時までも動かずじっと回り続けている独楽があれば、あらゆる技術分野で飛躍的な進歩が約束される、と言います。その通りなんです。こまは回っている限り芯の向きを常に一定方向に向けて立っていようとする力が働きます。その自立性があるからこそ、いか

なる空間でも軸になれるんです。　だいち　には独楽が３次元のため３個入ってます。これが基本です。これで空間のXYZ軸が決まり、あとはXならXのこまを回してX軸を中心に　だいち　自身を回し、姿勢制御をおこないます。この姿勢制御装置としてのジャイロは日本の作るものが世界一小さくて、完成度も高いと言われてます。しかし、そのジャイロも元は独楽ですから、テクノ集団が負けるわけにはいかないんです。一方のローテク熟練工集団は平均年齢が７２才で、最高齢は７８才、最年少でも６４才という超アナログ集団で、携帯も持ってない、コンピュータも使ってない年寄りの集団です。ハイテク集団はこまを作ってもデータだ解析だと言いたがるし、それに頼らないと自分じゃ何も判断できないんですよね。回転数を計測し、知識の枠内でしか考えられない。数値とか数式の形になってないものは、未だそこまで認識できる能力のない人間には、ない　ものなんです。熟練工軍団の人の持っているものは１/１０００mmまで測れる計測器ひとつなのに、彼らは１/１００００mmの誤差を修正できます。それを可能にしているのは、彼らの手の感覚なんです。目で見て、音を聞いて、旋盤のハンドルから伝わてくる手ごたえ、それらが彼らの言葉になってないデータで、彼らはそこから作り出すんです。だからハイテク集団は始めから勝ち目がなかったんです。

ユー君は一人熱く語った。

　そうなの。結局熟練工さんたちが勝ったの。で、結局、なに？

　日本が世界の列強と肩を並べて行けるのは、こうした日本人の職人技があるからだと思ってます。ミサイルだ、爆弾だ、戦闘機に戦車を作るばかりが軍事技術じゃありません。そんなもん、日本の技術にとっては当たり前に直ぐ作れます。現にオーストラリアは日本の潜水艦の技術をほしがってます。

　潜水艦って、原潜が一番なんでしょ？

由依はもう聞きたくもなかったが、軍事マニアに合わせて、なまかじりの知識で訊いてみた。

　いつまでも浮上せずに潜っていられるという意味では、原潜は優れていますが、駆動力が違うというだけで、後は通常の潜水艦とかわりません。ですが、原潜と肩を並べる通常艦を作る技術は日本が一番なんです。特にエンジンの静粛性と、プロペラの静音性はの本の技術あればこそです。

昨日、由依を追いかけまわした会社についた。今日はユー君が受付を通してくれた。

T芝代理のコンサルティング会社の弁理士、佐藤と申します。と名乗り、特許担当の方に会いたい旨を告げた。。手慣れたもんだと思う。受付嬢も昨日の様には怪しまず、関係部署に連絡し、通路奥に立って案内してビジネス用の応接室に通された。といっても、ソファーとかテーブルがあるのではなく、資料を置いて対面して話せる机が置いてあるという設えだった。さらに、客にお茶のいっぱいも出されなかった。ユー君が目を走らせている。部屋の壁、コーナー、かけられている絵画、由依には分らぬものがユー君には見えるらしい。ふっと体を由依のほうに向け、由依さんはこっちから見たほうがカメラ写りがいいと思いますよと言い出した。つまり、彼の背中の方向に、監視カメラがあるのだ。由依は、手元の資料を前腕で囲い、ズームされても読めないように覆った。ユー君もビジネスバッグを机の上に置き、カメラの目から資料を遮った。ノックがされ、上に作業着を着た中年の男とスーツ姿の男が入ってきた。

知財部の**です。弁理士の::です。

と各々が名乗り、名刺が交換される。言わば、開戦前に名乗りを上げるお決まりのシーンだ。こちらも名乗ろうとすると、知財部課長の手には受付嬢に渡していた名刺があった。

天下のT芝さんの代理とお聞きしましたので、ちょっと当惑しております。

と少々素直すぎる感想から応酬は始まった。

褒め殺しでしょうか。私共、上島コンサルティングがT芝の代理でこの度こちらにお伺いしましたのは、貴社の特殊無磁性化鉄心の技術の特許を、ぜひとも使用させていただきたく、お伺いしました。

ああ、そのことではもうお電話でお聞きしておりましたので、それなりの調査はしておきました。しかし、T芝様にはもう当社とは違った形の同機能を持った鉄心材を開発されておられるのではありませんか。

新日本鉄鋼との共同開発で、今言われた鉄材の開発は終わっておりますが、さらに性能をアップさせるため、同様の技術をお持ちの会社様に特許使用の許諾を得ておかなくてはとご相談に挙がったわけです。

内心は隠して、一部は本当のことを言い、その上にはったりを乗せる。由依が所長から教わったやり方だ。実際には新日本鉄鋼との共同開発は、形こそ整ったが成功とはいいがたい代物にしかならなかった。鉄とさまざまのレアアースをさまざまの量で混入してゆき、製品にしてみる、まさに実験と試みの繰り返しだったと聞いている。そのうち、勘のようなものが働くようになりはじめ、これは行けそうと思う段階までは行けたのだが、あと一歩がつきつめられなかったと口惜しそうではあった。

そうしますと、当社の特殊無磁性化鉄を使った製品を、T芝様に供給いたせばよろしいのでしょうか。それとも無磁性化鉄材を。

いや、材料ではなく、技術の内容をT芝に公開していただき、それについて使用料をお支払するという契約にさせていただきたいのです。

えっ、・・・。それはまるで特許の買取りと同じではありませんか。

お売りいただけるものなら、お売りいただきたい。

・・・、そういったご用件であれば、もう一度社内で見当させていただいてご返事申し上げたいのですが。

このやり取りで、今日は終わった。だが不意にユー君が

こちらさまでは、微弱超音波の高指向性音源と、受信マイクを開発されているとか、お聞きしましたが・・・。

と言い出した。この一言が相手の二人をあわてさせた。

いや、そのようなものは。

そうですか。なにか、こう、複数の音源から出た微弱な超音波が、重なったところでは明確なエコーが発生するとか聞きまして、ちょっと興味をもちましたものですから。

さっと顔色が変わった。

当社では、そのようなものは開発いたしておりません。

では、本日はこれで。

とあいさつされ、そうそうに追い出された。どういうことか解らなかったが、なにか虎の尾を踏んだような気がした。

何言ってんのよ、無事平穏にビジネスを済ませたらそれでいいのよ。なんか、とんでもないことをいったんじゃないの？

いやあ、つい。

そういいながら、計算通りと言いたげな顔をしていた。視線を感じ、振り返ると昨日の中国人取締役と目が合ってしまった。だが、何事もないような顔で立ち去る術ぐらいは知っていた。

ユー君によれば、現代の海軍は一見華やかで見栄えがするから空母がメインのような顔をしているが、実際空母のように隠しようのない存在の軍事行動はもはや現代戦のスピードについてゆけず、張子の虎ていどでしかない。では何が戦争をするのか。イージス艦と潜水艦である。第二次世界大戦で大艦巨砲主義をまず崩壊させたのがゼロ戦であったにもかかわらず、日露戦争の成功体験を忘れられないで大和に固執し、敗戦まで引きずった。そのあと、戦況を決めるのは戦闘機などの飛行機だと認識が改まって空母が海軍の中心になったが、トマホーク等のロケットミサイルが出現し、人間が直接戦う戦闘機は後退してゆく方向が決められた。飛行機の攻撃はいまや無人偵察機でも可能になった。

分かったわよ。

そういわなければ、ユー君の薀蓄は止まりそうにない。全く、男っていつまで戦争ごっこがすきなんだか、と由依はあきれた。

一週間まって、改めて音響会社を訪れた。それまでの間、私たちは自分たちでも防衛省の挙げたリストを点検してみた。ミサイル、爆弾、戦闘機、軍艦などを作ることだけが軍事産業ではない。H2Aロケットの連続１３回打ち上げ成功とか、はやぶさを誘導する技術はもちろん、もっと地味な技術にも防衛省は注目していた。そんな中、あの音響会社とは別な音響会社で、自動車のフロントガラスにさまざまな情報を表示させる技術が開発されていた。そんなものと軍事技術がどう結びつくのかか、なかなか想像が付かなかったのだが、その技術は車の走行安全性を高める目的で、前方の車や人をカメラでとらえ、衝突の危険性を判断して警告することを可能にするものだった。今これは、さらに進歩して、車それぞれを連携させ、例えばブロックの影にいる車が飛び出てきそうになると、直進方向を行く車に危険を知らせるというシステムである。これに米陸海軍が関心をしめしているという情報もあった。理系君によれば、戦闘行為中の全員に前方監視カメラと情報表示ディスプレイを装着させるだけで、敵の発見と襲われる危険性の回避につながっると考えているようなのだ。この複数の監視カメラからの情報を高速に処理すれば、敵兵の人数、配置などが解り、それによってどう攻撃してくるか予測が付くようになる。いまはこれを後方の指揮官が判断し、指揮してきたが、ランダムな映像とＧＰＳ情報を処理し、的確に判断するなんて、とても間に合わない。そこでそれを瞬時にマッピングし、敵の位置と人数、火器の種類、さらにその敵がどう攻撃してくるかまで予測するシステムを開発しようとして考えているらしい。

今はもう兵の優秀さとかではなく、探知能力と処理速度の競争なんです。

ユー君がいう。ルパンさんも所長もまるで取り残された思いだ。ところが、理系君はあまり関心がなさそうだった。

公安の捜査は一に張り込み、二に歩き、といった具合で地道なもんだ。情報の糸づるを手繰ってじっと待つ。それ以外は何もできない。

そうですよね。自由の国日本は、スパイも情報員もやり放題で、法的規制はありませんから。

ユー君んとルパンさんは意見が合う。由依とはそこが合わない。

　しかし、この今の時代の日本で、昔の特高や憲兵並みの強引なやり方の捜査や拷問、自白強要をやって、尚且つすべてを闇に葬れる組織があるそうじゃないですか。

理系君が言う。公安だったルパンさんがうろたえた。

　そんな組織が、今の日本で許されるはずがないじゃないか。

　それが、あるんです。いや、あるそうなんです。

　どこに？

　ルパンさん、知ってるんでしょ？公安と内閣調査室の下部組織が一緒になって構成している・・・、なんて言ったかなあ、

　いいよ、そんなこと知らなくても。

そのやりとりで、由依はそんな恐ろしい組織が日本にもあるんだと思った。

気になったので、由依はユー君に先日の事を聞いてみた。

その話ですか。また潜水艦の話を蒸し返さなければなりませんが、潜水艦は一端潜航すると何も見えませんから、周りの状況を知るために、ソナーを使います。それにはアクティブソナーとパッシブソナーがあって、じっと耳をすませて周りの音を聞く場合と、積極的に高周波音を短く発して、反射音で周りの状況を探査する場合の二通りをいいます。しかし、この水中で通り良い超音波を発射すると、敵にも自分の位置を知らせることになります。そこで、非常に微弱な超音波を複数の音源から音響レンズを通して発し、光の焦点をあわすようにして音を集中して重ねあわせ、その焦点の合った点の探査をするという技術です。これは発した単独の超音波自身は非常に微弱で、敵に感知されにくいという利点があります。また集結した超音波の反射音は、まるで重ね合わさった場所が音源のような錯覚を起こさせます。それが非常に先進的なアクティブソナーの開発につながると言えます。

いわば、レンズで太陽光を集めるとじりじりと紙を焼くって、あれのこと？

そうです。

なんか、すごい技術ってこと？

すごいです。音の焦点の合った場所が超音波の音源のように見えますから、そこにピンを打った艦がいるという錯覚を起こさせます。まるでゴーストです。

そんな技術が今の日本にあるの？

あります。

ユー君は断言した。

あります。それだけじゃなくて、今声高には言われていませんが、Ｆ１５戦闘機にＳＥというステルス戦闘機があります。このＦ１５ＳＥをとらえることのできるレーダーも日本は開発してしまいました。。現在現役のステルス機は見えます。

よくわからない、と由依は思った。

ステルス戦闘機って見えない戦闘機ってことでしょ。それが見えるの？

見えるんです。もっともＦ１５ＳＥは古い機体ですから、次の第五世代のステルス機についてのレーダーは未だ開発途上ですが、このことだけで十分中国やロシヤを充分驚かせましたし、米国を大慌てさせました。ですから逆に、心神のステルス性の優秀さと操縦性の高さは・・・

それって何？

日本国産の第６世代ステルス戦闘機です。

もういい。頭痛い。文系の頭にはもう一杯いっぱいだわ。

そういいながら、あの音響会社のビルを見た。危険かもしれないと思った。ルパンさんが来てるはずと思った。

ところが交渉は思った以上にスムースに進んだ。特許使用料は、この特許を使っている他社

と同様の金額が提示され、殆ど計算してきた内容通りで、気が抜ける思いだった。

　　分かりました。それではクライアントにこの条件を伝え、合意を得てのち、契約させていただきます。

由依は相手方の提示してきた契約書をつぶさに点検して、そう返事した。

　　よろしく。

相手方の代表が頭を下げた。すると、上着の胸元が開き、ピンマイクがのぞいた。頭上でも監視カメラが睨んでおり、その先の監視モニターを見つめる目まで想像できた。危険かもしれないと改めて思った。三階の会議室から外に出ると、人影はなかった。二人でエレベーターに向かう。すると階段の所で腕を掴まれた。一瞬声が出そうになったが、ルパンさんとすぐ分かったので由依は声を飲み込んだ。

　　こっちだ。

という。ユー君と由依はルパンさんの先導で階段を駆け下りた。そして二階では廊下の反対の方向に走り、非常口を開けて、外の階段を降りた。下に車がエンジンをかけて待っていた。ドアを開け、三人が乗り込んだ。ハイブリッドの車は殆ど無音で走り始め、隠密に裏口から滑り出た。

　　ルパンさん、そんなに危なかったんですか？

ユー君が訊いた。

　　そうだな、公安が常時監視するぐらい、あぶなかった。この前の事もあるしな。

そういって由依を見た。

今回の案件は、この後所長とルパンさんが引き受けてくれることになった。由依が弁護士として契約書を見るまでもなく、定型的な処理で済むからだ。もうユー君は行かないほうがいいし、由依を危ない目に合わせるわけにはいかないという判断でもあった。しかし、由依は現実に危険な目にあったわけでもないので、なにがどう危険なのか解らなかった。

危険な目に合わなかったからといって、危険が存在しなかったとは思わないでください。
そういったユー君の耳元には、警察官がいつも耳に差しているトランシーバのイヤホンが、目立たぬようにではあるがささっていた。

この仕事から、由依たちの事務所は、より目立たなくするために場所も移転し、田舎に移った。その分、気持ちの方も少しゆるみが出てきた。

由依さんはあの、風たちぬってアニメ映画、見たって言ってましたよね。
と理系君が固い口調で話し出した。彼はいつも緊張しているのだ。

ええ、去年見たわ。・・・、こんなことなら、もっとよく見とくんだった。

あれは、ゼロ戦の話でしたが、あのゼロ戦、プロペラはアメリカの特許技術を使ってたんです。
由依が頷くと、更に、

アメリカの特許技術を使ってたんですから、当然特許使用料を払わなければなりません。それで、日本は戦争中もずうっとその特許料を払い続けていたそうです。
ああ、なんてエピソードなんだと由依は思った。日本人の律義さはこんな風にも発揮されるのかと。

こちらに事務所を移したのは、前の事務所が常に監視されていることが分かったからだ。それは当方が新たに設けた監視カメラに頻回によく似た人物が映るようになったこと、それからルパンさんにしか解らない手口で事務所に誰かが侵入し、盗聴マイクが仕掛けられていた事などではっきりした。
ルパンさんは言う。

中国系は、あいつらだけの理由でいきなり理不尽な凶暴さを発揮するんだ。これは、日本人には想像もつかないところがある。それも、凶器は蛮刀なんか振り回すから。
それらを勘案しての事務所移転だった。

　新しい事務所に移転したからと言って、仕事は待ってくれない。私たちに次の指示があった。Ｍ＆Ａを仕掛けろとの指示だった。相手は思いもよらない、小さな同族会社だ。その会社はマグネシウム加工に特異な技術を持っていた。そしてその会社を吸収したがっているのは、経営のカリスマが率いていた、戦後の日本を代表する巨大家電メーカーだった。

　なんで？

理系君に訊くと、

　電池です。

とそっけなく返してきた。

今リチウム電池が主流ですが、その次はマグネシウム電池か水素電池のどちらかが主流になると思われています。たぶん日本は水素燃料電池の方が優勢になると思われますが、それには、電極にニッケルと希土類元素、マグネシウムが使われています。マグネシウム電池はもちろん電極に二酸化マグネシウムとマグネシウムが使われます。電池と言うからには、外から電気を与えて、電気をためておくのが本来ですが、水素燃料電池は全く違っていて、電池と言うよりは発電装置と言ったほうがいいです。ですから、これが完成すると、エネルギー革命がおこります。自動車は給油口から水素を注入してもらい、マフラーから水をこぼして走ります。各一般家庭は今のガス管のような配送設備で水素を受け取り、一家に一台の燃料電池で必要なだけ発電して、今の電化住宅での生活のように暮れしてゆけるようになります。もう二酸化排出量がとか、地球温暖化とか大気汚染とも縁が切れます。原子力なんかもってのほかになります。そんな技術革命の動きに逆らっているのが、小さくは電力会社であり、重電機製造と原子炉に長けてる月立、Ｔ芝であり、石油会社と言うことになります。しかしそれだけに終わらず、世界はひっくり返ります。原産国、天然ガスのロシア、シェールガスの米国などの資源輸出国は皆悲鳴を挙げます。
何が起こっているのだろうか。二次か三次か知らないが、とんでもない技術革新が起こり、世界は飛躍するのだろうか。由依は理系君の説明など解らなかったが、とんでもない未来図を見た思いだった。

　で、なぜそれが今度の軍事技術関係のＭ＆Ａにつながるの？

　わかりません。竹下は傘下の四洋を元の組織に戻して吸収しましたが、その三洋電機は燃料電池の電極技術をほぼ実用段階にまで持って行ってるはずです。ですから、豊田自動車と竹下は来年燃料電池車を一般に売り出しますし、政府もそれの後押しで、水素ステーションの建設を認めてます。２０２０年には都内のタクシーを燃料電池車のみにするという方針を打ち出しました。くわえて、７００万と、あまりにも高すぎる燃料電池車に価格の半分近くの３００万の補助金を出すとまで言ってます。これは、iPS細胞の比ではありません。これからほんの数年後には、燃

料電池車は今のハイブリッド車並みになるそうですから、社会構造自身が変わってしまいます。

しかしどっちにしても、マグネシウムの加工はとても困難なところがあって、柔らかいので切削加工は容易なのですが、すぐ目詰まりしてしまいます。同時に切り子がとても不安定で、ちょっとのことで激しく燃えます。時には爆発的燃焼さえ引き起こし、大事故にさえなりかねません。そのあたりに何か特殊な技術があるようで、それが今回のＭ＆Ａの理由じゃないかと思っています。

わからんわ、何が軍事技術なのか、何が兼用可能な民間技術なのか、何を防衛すればいいのか、チンプンカンプンよ。

そうですね。自動掃除機のルンバが地雷探査ロボットになり、ゲーム機のコントローラーが無人偵察機を操りますから。

しかし現実に、もう戦争は起こってます。

えっ？中東のイスラム過激派なんかのこと？

それもありますが、中国と西側のアメリカとか日本の軍事産業に仕掛けられるサイバー空間でのハッキングは、まさに国益を根こそぎ奪って行く戦争です。しかし本当の軍事技術は、その国に蓄えられている基礎的な工業技術です。人の手で作り出されるものがガタガタでは、ろくなものが出来ません。設計図は盗めても、人の身に着けた技術は持ってゆけません。

マグネシウム加工に特殊技術を持った会社は、平穏にM&Aに応じた。自分たちがあまりに特殊すぎることを知っていたからだ。それが次世代の技術として大きく飛躍するとはわかっていても、会社自身がそれを待てなかったというのが本当だった。それゆえ、生き残りをかけて大樹に身を寄せることを選んだ。彼らも竹下の傘下に収まれば、自分たちに未来があると理解したのだ。

だが危険といつまでも無縁でいられるわけではなかった。この国の国営放送局が開発した技術が、遠くて近い国の標的となっていた。

その技術がなぜそれほど大変なものか、由依には理解不能だった。3D眼鏡を使わなくとも立体映像が見られるということのどこが重要なのか。だが現実に、中国はこれを開発した人物を取り込もうと躍起になっていたという事実があった。

3D映像技術と言っても、画面がより迫力をもってみえるってだけでしょう？

そうです。テレビという媒体に画像を映すだけなら、それを楽しめば終わりです。ですからNHKははこの技術をもとに、２０２０年東京五輪で３Ｄ眼鏡なしで見られる次世代の立体テレビ試験放送を目指しています。あれやこれやといった技術面での説明ははぶきますが、この技術、超臨場感立体映像システムと言いますが、これを使えば標的を瞬時に探り当て、距離を寸分狂わず測定できるため、例えば無人偵察機や中距離ミサイル、空母キラーといわれる対艦誘導ミサイルの目にできるんです。ましてこの技術はレーダー波を使いませんから、電波錯乱によるミサイル防衛網など、やすやすと突破できます。

この技術への中国の謀略戦は生易しいものではなかった。防衛省が把握したところでは、上海の国際学会に出席していたK氏に対して中国科学院上海光学精密機械研究所（ＳＩＯＭ）室主任が直接接触してきて、厚待遇で迎える用意があることを伝え、必死に誘ったが断わったそうだ。

この科学院というのは、中国人民解放軍と直結しており、ＳＩＯＭ、ＳＩＭＩＴとも軍事技術開発の中核で、両研究機関は衛星やレーザーを使った地上攻撃、対立国の衛星破壊技術開発に全力を挙げており、サイバー戦の頭脳でもある。衛星を使った中国の軍事技術開発のキーマンであり、３Ｄ画像技術開発の先駆者であるＫ氏の取り込み説得工作を依頼したのだった。 この科学院が衛星を使った中国の軍事技術開発のキーマンであり、３Ｄ画像技術開発の先駆者であるＫ氏の取り込み説得工作を依頼したのだった。そして

「われわれには３Ｄ画像技術に２０億元（約３４０億円）の研究資金がある。我々中国の対日優位は揺るがない」と懸命に説得しようとした。そしてさらにK氏の両親が南京市出身であることを念頭に、

「あなたの親は南京事件を忘れちゃいないだろう。」

「日本なんか見限って我々に協力しろ」
とまで迫った。しかしK氏は
「私は米国人だ。そのつもりはない。」
と席を立った。
 そのあと、FPGA集積回路チップの盗難が起こった。これにはK氏の開発した立体映像技術のプログラムが書き込まれるはずのもので、実際はまだ書き込まれておらず、技術の流出はここで食い止められた。いわば不幸中の幸いであった。しかし中国の説得の言葉に中は
「日本には2000人の中国からのスパイがいる。」
という脅し文句があった。FPGAチップの盗難事件もこの言葉の証拠だろうと思われた。

　（註）この３ｄ立体画像技術の部分の記述は、実際に起こった事件の報道に基づいており、内容は殆どそれについての記事を整理したもので、引用と同程度の文章です。このようなことが現実にこの日本で起こっていると知り、書き加えました。

多視点型の３Ｄ立体映像技術は、他にホークアイシステムと呼ばれている技術がある。これはいまゴルフの打球やサッカーのボールの軌跡を再現するのに応用されて、審判の判断に使われている。これを開発したのはアメリカのホークアイイノベーションズで、２０１１年ソニーがこれを買収した。今このような技術を深化させてゆくのに、日本の技術が使われている。アイデアはアメリカ、それを磨き上げるのは日本という構図がここでも生きている。それゆえにこそ、こんな技術を持った会社の買収をアメリカは容認した。所長がそんな話を何気なく話した。日本は官民一体となって、直接的な武器ではなく、ハイテク装備の技術を開発している。もう武器輸出３原則は、今の内閣で骨抜きにされた。

もう家電の時代じゃなくなってるからね、日本は。ホンダだって小型ジェット機を作って生き残ろうとしているしね。

じゃどこかで日本は結局死の商人に成り果てるのですか。

おやまあ、またえらく古めかしい言い回しが出てきたもんだ。言葉でどんな理屈付けをしても、日本は欧米が武器を作って売りまくっている中へ割り込んで、独自の足場を作ろうとしているのは間違いないと思うよ。冷蔵庫からロボットへ、デジカメからミサイル探知機へ、旅客機からステルス戦闘機へと向かってゆき、無人探査機を開けてみると中は殆どメイド・イン・ジャパンと言う時代が来ると思うよ。いやもう来てるかもしれないな。あの遠い国、北朝鮮の寄せ集め無人偵察機がそうであったようにね。エンジンは日本のラジコン飛行機のエンジン、カメラはキャノンやニコンの一眼レフ、コントローラもラジコンの流用、機体だけが北の手作りってことが、アメリカでも行われているのさ。だからって、直接の武器弾薬やミサイルではなく、民生品であり、技術は同盟国への防衛のための技術協力と言うことになる。オーストラリアへの潜水艦技術協力がそれだ。

そんな所長の講義を聞いていると、ユー君が飛び込んできた。

あのマグネシウム加工会社、燃えました。今テレビのニュースでやっています。

声が引きつっていた。

マグネシウムの引火性には充分熟知している会社が燃えた？

そうです。それについては警察とは別に、公安調査庁が動いているようです。

破防法関係か？

それもありますが、韓国系のキリスト教団体の手引きで、北か中国の工作員が、あの会社に潜り込んで技術を盗もうとしていたらしく、それが暴露されそうになって逃げるために火を点けたということのようです。

違うよ。

後から入ってきたルパンさんがいった。

工作員が技術を盗もうとしていたのは本当だが、それは中国系で、中国科学院の下にあった

部門と東部人民解放軍の部門の内部対立があんなことを引き起こしたらしい。

なかで対立してるんですか。

殺しあいしてるよ。警察の公安はずうっと監視していたからそのあたりの事情は分かってたんだ。

北、じゃないんですか。

北はそんな技術、盗んだってどうすることもできない。せいぜいがデジカメを買って第三国経由で送るぐらいだ。

そうですよね。それに中国って内部の権力闘争が激しいようですから。

公安は韓国と中国の裏での結びつきを監視し続けてる。韓国の財閥系で、中国の権力と手を結んでないところなんかない。それを表立って行動できないから、韓国内部の新興キリスト教系オカルト宗教団体にやらせている。日本人信者を利用して日本への潜入させるだけでなく、米国やほかの国への潜入も手引きしてる。最近はＪＲにも入り込んでるらしい。

それって何ですか。

リニアモーターカーだよ。

高速鉄道の技術を盗みにですか。高鉄外交で中国はアジアを支配しようともくろんでますから。

それもあるが、電磁式カタパルトと電磁加速砲への応用を目指して、世界で一番完成度の高いＪＲの技術を狙ってる。あの中国のポンコツ空母を何とか使えるようにするには、電磁式カタパルトしかないから。電磁式カタパルトは、米国は２０１６年就航の空母に搭載したいと考えているので、あの人はオバマに日本のリニア技術の無償提供を申し出た。もちろん米国からの、たっての要請に応えたんだが。それと引き換えに、日本はアメリカのリニア新幹線を手に入れるわけだ。

レールガンってなんですか？

超電磁砲は、火薬を使わない、リニアで電磁体の砲弾を発射する兵器だ。今は火薬での発射初速度と同じ程度に到達した程度だが、将来は音速を超える速さで、それも連続して発射できるようになるという予測がある。リニアは兵器になる。

今はもう

　いまはもうわけのわからん時代さ。
不意に現れた元夫が、由依にいった。
　なんか、危ない仕事をしてるんだって？
　誰に聞いたの。
　由依の所の所長。というか、由依を推薦したのは私なんだが。
訳が分からなかった。司法修習生から就職した弁護士事務所が、所長の引退で解散になり、次の事務所を捜していると、声をかけてくれたのが今の所長だった。もう法廷に立てないのはさみしかったが、実務の方で頑張るのもこの職の在り方と割り切った。それが前の夫の目論見に乗ってたとは思いもしなかった。
　　もともと今のチームは防衛省の肝いりで結成されたんで、所長はその責任者だったんだ。その所長がルパンさんや理系君、ユー君を防衛省の調査したリストに基づいてヘッドハンティングして回ったんだ。その中に由依も入ってた。
由依の頭の中には？マークが点滅していた。朝会社に出て行き、夕方定刻に帰る、時折外国へ出張することもある平凡なサラリーマンと思っていたのだ。それがあるとき、長期出張で帰らない日が続いた。少なくとも由依はそう思っていた。由依も自分の仕事が結構忙しかった。それで、時折携帯に連絡が入ることで安心していたのだが、ある時からプツリと連絡が来なくなった。そんなときだった、自宅マンションに泥棒が入った。部屋は一面荒らされ、あらゆるものがひっくり返されていた。しかし、現金も通帳も無くなってはいなかった。そして、その部屋で呆然としていた時、携帯が鳴り、由依、逃げろと夫から架かってきた。訳が分からず、由依はあのホテルに逃げた。
　　あなたって誰？
離婚届を送るからサインしろ、命に係わるから僕と別れたことにしろと電話で言われ、一方的に別れることを強要された。
　　本当は、僕は妻帯なんかしちゃいけなかったんだ。
という。
　　だから由依に危ない目に合わせた。
　　今君はターゲットになっている。あの音響会社とマグネシウムの会社にかかわって、中国の奴らに目標にされた。今回は中国の内部闘争で先延ばしになったが、次は危ない。ユー君でも守れない。3D映像技術の事を覚えてるか？
と聞く。
　　覚えてるわ。
と答えた。
　　あの盗難事件をＫ氏に通報してきたのは米国の捜査陣だった。彼らはスノーデンの告発の後も、世界中の通信を傍受し続けている。沖縄と横須賀の象の柵は、今も聞き耳を立てている。それだけではなく、中国以上の人数が活動している。

じゃあ、あなたはなんなの？

防衛省情報本部電波部、陸上自衛隊情報探査部。

じゃあ私は？

女スパイ

笑った。二人して大笑いした。テーブルの目覚まし時計が急に鳴り出し、かすかにプラスティックの燃える臭いとともに止まった。夫の目の色が変わった。

バスルームに逃げろ！電波だ。

何を言ってるのか解らなかった。

とにかく窓から離れて、コンクリートに囲まれているところに逃げろ。

彼は由依の手を引っ張って逃げた。

頭が痛くないか？

と訊く。

大丈夫よ。

というが、少し手足が痙攣する。

何これ？

強力なミリ波を照射されたんだ。頭部に集中すると、てんかんのような容態になる。小脳に焦点が合ってしまうと、呼吸中枢が焼かれて、一瞬で自発呼吸が止まり、窒息死する。人レーダーという人間を追跡できるレーダーの出力レベルを大幅にアップした暗殺兵器だ。イージス艦のレーダーの前に立つと電子レンジに入ったようになって、焼かれてしまうのと一緒だ。防衛省電波部も研究している。

じゃあ、実際に使ったりするの？

それは知らないほうがいい。多分もういいだろう。ここを脱出しよう。まだ、カーボンナノチューブとか自動運転装置、遠隔充電技術なんかの日本独自の防衛技術はたくさんある。外務省情報部も加わっての諜報防衛は今急務なんだ。

由依は逃げた。元夫とともに逃げだした。日本の中なのに、どうして逃げなきゃいけないのか解らないまま、逃げた。

凍える日

　自転車を踏みながら、自分の吐く息の白さにびっくりする。坂を上がると息がはずんで眼鏡も曇る。上がりきれば、ほっとする。毎朝の事だから、もう慣れてるはずなのに、冬でも汗びっしょりになり、息が上がる。額の汗を手の甲で拭い、少しの下り坂を自転車に任せて下ってゆく。それでも、春になれば道沿い全体に桜が咲き、その向こうに見える海の青さと少し暖かい風に心が和む。花びらが散れば、道路一面、淡いピンクにおおわれる。それに気を緩めてはいけない。桜の花びらでタイヤが滑るからだ。だが、はらはらと舞い、さらに、強風に会えば雪のように散る花びらに、心踊る思いで満たされる。しかしその影に隠れて、桜の花びらの春の狂気には狂おしい思いがあると思うのは私だけだろうかと、悠紀はふいにおもった。

　　いつの間にか悠紀は和人と昼を一緒にするようになっていた。

「お前の名前って書き難いよな。」

と、平気で言う。悠紀は黙って学生食堂の昼のメニューを食べていた。と、和人がすいっと箸を伸ばし、ハムエッグのハムをさらっていく。その箸を押さえ、

「だめ！後で食べようと思って、残してたんだから」

と取り返す。

「けち！」

そんなことが平気になっていた。クラスが別だから授業も別、でも、帰ろうとすると、前か後ろに和人がいた。だからといって、何か特別な話をするわけでもない。時々クラブ活動の事を和人が一人話していたり、悠紀が授業の中でわからなかったことを聞いたりとたわいもなかった。しかし休日までわざわざ一緒にいることはない。そんな時、悠紀も和人の事を特別考えたりしなかった。

体育の授業に、悠紀が体育館シューズを忘れたことがあった。走って、和人の教室へ行った。

「 体育館シューズ、貸して。」

というと、黙って差し出した。和人のシューズは女の子のように小さかったから、悠紀に少し大きいだけで間に合った。帰り道、和人がそのことを言うかと思っていたが、靴を忘れてきたことではなく、

「返せよ。」

の一言だった。そうだった、返すのを忘れていた。

　　入学式の時、たまたま隣り合わせに並んだ、だからと言って、横を見たわけでもない。新入生退場と号令がかかり、後ろを和人がついてきた。そして、その和人から風が吹いてきているような気がした。そのことを覚えているのは何故だろうと悠紀は思う。なにか風が自分を包み込んでいるような、それだからといって、それが不快ではなく、身を任せていたいような、そんな風が悠紀を包んでいた。しかしそれもすぐに忘れた。

　　新入生だから慣れない事ばかりで学校生活に追われ、周りを見る余裕もなかった。通学はバスにした。学校が郊外にあり、しかも山坂が急だったからだ。しかし実際バスで通ってみると、沢山の学生が自転車通学をしていた。悠紀はバスの窓から学校へ上がっていく最後の坂を見て、

無理、と思った。それをあえて自転車通学に変えたのは、やはり仕送りの事を考えてのことだった。いくら学割があるとはいえ、バス代も馬鹿にならない。駅前の自転車屋さんで、赤いフレームの通学自転車を買った。前かごを付け、ギアは３段の簡単なものを選んだ。これに乗って明日から学校に通うと思うと、少しうきうきした。実際自転車だと、どれぐらいかかるか解らなかったが、多分と見当をつけた。翌朝、教科書などをかごに入れ、力を込めてペダルを踏んだ。５月も終わりの暖かい日だった。

　ペダルを踏んではいるのだが、思ったほどには進まない。道も慣れてなく、すこしうろうろする。いつもバスの窓から見ていた自転車通学の集団も見えなかった。遅れると必死だった。

「あとはこの坂だけだから。」

と、後ろからの自転車が、悠紀に声をかけて通り過ぎてゆく。立ちこぎで踏んで、スピードもあった。やはり男の子だと思った。悠紀の息がはずんだ。

お昼を学食で済まそうと、はじめて列に並んだ。お盆を持ち、セルフで副食を選び、味噌汁とご飯を頼む。それをもって振り返ると、席がなかった。少し離れたところに、男子学生の横がひとつ空いていた。迷ってはいられなかった。悠紀はそこへ向かい、座った。そして水を忘れたと、取りに行こうとすると、

「いいよ、とってくる。」

と和人が言った。

「水だろ、ぼくも欲しかったから一緒に汲んで来てやるよ。」

と言ってくれた。しかし、なんで水の事が解ったんだろう。そう思って首をかしげ、

「なんで解ったんですか？」

と訊いた。和人はコップを置きながら、

「だって、あ、水！って言ってたから。」

と笑い出した。そうだ、水！って叫んだんだった。そう思うと可笑しくて、お腹が痛くなるほど笑ってしまった。その涙目になった視界に、和人がいた。

夏に

　自転車通学に変えてから、悠紀は比較的余裕のあるキャンバスライフを送れるようになった。バスだと、相当早い時間で最終便になってしまう。最終便に乗っていると、自転車通学の学生を追い越してゆく。みんな一生懸命なんだと思う。自分で帰れるからと言って、悠紀に学校でることがあるわけではなかった。まだ明るいうちは、キャンパスのあちこちで楽器の音やテニスの打球音が響いていた。あの子たちはどうやって帰るんだろうと思った。

　バスが終わった後、まだ明るさの残る道を自転車で帰っていると、後ろから来た自転車が悠紀を抜いていった。そして悠紀の少し先を悠紀と同じスピードで走る。まるで前後に並んで帰っているみたいだと悠紀は思った。まえを走っているのは和人だとは分かっていた。しばらく走って、和人が振り向き、

「本屋に寄らないか。」

といった。

「急いでるの。」

と突き放した。

「そっか。」

和人はまた同じ距離を保って前を走り、

「じゃ。」

と、ついと横に曲がって帰っていった。悠紀の級友が、戸田和人と名前を教えてくれていた。Ｓ１の戸田和人、私はＪ１の篠原悠紀。あっちは理系で、こっちは文系。だから講義も一緒になることはなかった。もっとも一般教養は共通だから、その可能性はある。しかし今のところ、いっしょになった記憶はない。和人は地元出身で、しかも案外有名人だった。地元と言っても市は違っていて、ＪＲの駅まで自転車で帰り、電車でさらに家に帰っていた。そんな情報を級友が、ちょっと憧れのまなざしで語ってくれた。もっといい大学に行けたはずなのに地元でいいと、この大学一本で受験したらしいとの事だった。あんまり欲のない子でね、父子家庭らしいわよ、お父さんは県庁の課長さん、上にお姉さんがいて、この人が強烈なの、伝説の人よ。名門大学に行ったんだけど、お姉さん、お腹すいたって和人さんが言ったら、米と炊飯器の中釜を渡されて、自分で炊けって言ったらしいわよ。どこからそんな話きいたの？と聞くと、お姉さんが高校でクラスメイトにそう言って、からからと笑ってたらしいわと言う。そうかと、なにか解った気がした。

　暑い西日が校舎を照らしていた。こんな日はこっそり、防音で冷房の効いた音楽室に忍び込むといいと、クラスメイトが教えてくれていた。帰るには暑すぎると、悠紀は忍びこむ決心をした。そこまで大げさに思い込むことはなかったのだが、熱気のこもった廊下を歩き、音楽室の扉に手をかけた。すると、いくら防音でも扉越しにピアノが聞こえた。まずい、先生がいると、扉から手を一度は離したが、曲が悠紀の大好きなシューベルトだったので、覗いて見ることにした。それは相当難解で、音楽担当の教員もいないこの大学で、これを弾ける人がいるなんて誰だろうと思ったからだ。扉を開くと、冷風と数等倍の音圧のピアノが悠紀をおそった。視界の

先に、ジーンズと上の袖をまくりあげた和人がいた。斜めから見る和人は、悠紀がドアを開けたのも気付いていない風だった。正確なタッチでピアノは暗譜で奏でられてゆく。悠紀は、他に誰もいない教室に入り、腰かけて聞いた。ピアノは最終楽章に進み、ついに余韻を残して終わった。由依は圧倒されていた。和人がピアノの蓋を閉めながら、悠紀に話しかけてきた。

「言うなよ。」

それで我に帰り、

「なにを？」

と言うと、ピ・ア・ノと区切っていう。

「いいじゃない。素晴らしいわ。どうしてピアノの方に進まなかったの？」

「ピアノじゃ食えないって、姉貴が言うから。」

と、くぐもった声でいった。あの伝説のお姉さんだ。

「帰ろ。」

と、カバンをもって和人は帰りかけた。そうね、と悠紀も続いた。それからだった、二人が一生続くことになったのは。

風が吹いていた

　卒論を書くころ、もう和人は進路が決まっていた。ちょっとマニアックな大学院だった。悠紀はそれでも置いていかれるとは思わなかった。和人は待ってろとも言わない。何か涼しい顔をしている。悠紀も、待ってるとは言わない。

「あっちへ行って、生きてみるわ」

と、わけのわからないことを言って、和人は行った。悠紀は地元の公立図書館の司書になった。和人は初めて地元と家を離れた。たぶんそれを言ってたのだろうと思った。彼がいない二年間は風を感じなかった。だが、和人の姉が図書館へきて、悠紀に訊ねた。

あなた、あんなんでいいの？待ってることないわよ。あいつは何にもできないんだから。

。悠紀は、ここに風が吹いていますからと、胸に手を置いてみせた。伝説の人は、ふうんと言って、理解出来ないようだった。この人も後に結婚はしたが、国費留学の機会を得ると、それに反対する年下の夫とは離婚し、さっさと米国へ行った。悠紀が和人となんとなく結婚した後、この人はアメリカから黒い肌の男の子二人を連れて帰ってきた。アメリカでの夫とは、また離婚しての帰国だった。彼女は京都の出身校に帰って、准教授となった。この人の専門の事など、聞いても解らない。アメリカから帰って三日実家にいた。おめでとうと手を握ってくれた。そして、身をひるがえして、

　いくよ。

と子供たちに言って京都に行ってしまった。子供も母の後を必死に付いて行った。

　おねえさんって、すごいの？

　すごい。残念ながらすごくて、追いつけない。

和人はそういって見送った。そういいながら、彼も出身校の助手に納まり、２年で准教授になった。悠紀は和人の専門のこともよくわからなかった。だが地元では兄弟が大学の先生になったと噂になった。

　彼の作ろうとしているもののことはなんとなくわかった。紐の両端に石をくくりつけ、ぶんぶん振り回して投げると物に絡みつく。メキシコかどっかで動物の足を絡めて捕まえる道具と一緒だ。彼は宇宙に漂っている人工衛星をそれでもって捕まえ、大気に突入させて燃やしてしまおうと考えたのだ。そのためには、両端の小さな人工衛星は、目標となる宇宙ゴミを捉えて距離と位置を探知し、常に対象となるごみを捕捉できなければならない。そんなことをなんとなく話してくれたが、悠紀にはなんとなくイメージできただけだった。

　和人は大学で小型の人工衛星を作って、夜も大学に泊まり込むことがあった。次に、クリーンルームを求めて県境の半導体工場に作業場を移した。悠紀は休みの日、そこへ着替えと２～３日分の食料を持って通った。大学へ行くときは、そこは二人が通った学校だったからか、悠紀は昔の通り、二人で大学に通っているような気がした。そんな時、悠紀は妊娠した。

悠紀は義理の姉になった人の助言に従って、仕事も続け、通勤も歩く距離を増やした。司書としての仕事も、全く新しい分野に立ち向かった。医学論文とかではもう確立されたサービスだが、依頼を受けて理系、文系にかかわらず論文検索を行うのだ。それには依頼を受けた内容をきちんと理解しなければならない。それも極めて短時間に理解し、検索をかけるキーワードを的確につかむ必要がある。こんなことまで司書の仕事かと思うのだが、文字情報のプロであるなら、本だけの世界でとどまらず、学術雑誌も発行されている以上、司書の仕事の範囲だと思った。と言っても、道具はノートパソコン一台だけだ。そのキーボードにキーワードを入力する。しかし一般的な論文は大半が公開されているが、喫緊の学術雑誌の物は有料で、しかも検索時間で課金され、長く掛かれば掛かるほど肝心な文献を手に入れるまでに相当な料金を支払わなければならなくなる。まるで高価なパズルゲームだ。そんなとき、悠紀は和人や義理の姉に訊くことにしていた。だが、和人には、義理の姉にまで助けてもらっていることは黙ってた。それでも二人のアドバイスが的確だったので、悠紀の文献検索は評判がよかった。

悠紀の悪阻もこの新しい試みに打ち込むことと、ひたすら歩くことで、はるかに緩和された。産休に入り、身の重たさに耐えながら一人で過ごしていると、あのようにして頑張ったこれまでのことが遠い思い出のようだった。これから生もうと言うのに、もう済んでしまったことみたいと、ちょっとおかしかった。

生まれてくる子は女の子と解っていた。和人はちょっと残念そうに見えた。男の人は矢張り男の子が欲しいんだとおもった。母になる悠紀には、子供がどちらであろうと無事生まれてくれさえすればよかった。

予定日より十日早い朝、何かお腹が変だった。下から突き上げてくるような重い痛みが時間をおいて繰り返されてきた。これが陣痛とは思わなかった。義理の姉に、なにか痛いんですと電話すると、そうよね、まだ予定日より十日あるから違うんじゃないという。あとから思うと、この人も豪傑だった。二度お産を経験してはいたが、全部自分で用意し、自分で車を運転して病院まで行き、初産は六時間、二度目は三時間で生んだ人だ。特に二度目は離婚が成立しており、しかもアメリカで一人子供を抱えての出産だった。さらに、アメリカと言うお国柄だからだろうか、病院は出産から一週間で退院し、あとは自宅療養を二週間、そのあとは子供二人を預けて仕事の復帰した。大変だったでしょうと言うと、そりゃたいへんだったわよ、病院に長男を預けての出産だったし、下の子を養育してもらうのだから、とんでもない出費だったわよと、しらっというそれに比べ、私には家族の助けがあるのだから、それに頼っていいんだと思う。悠紀は実家の母を呼んだ。母はちょっとのんびりした人で、義理の姉と同様、どうしたの、まだ早いわよ、と悠紀のそばに座った。しかし、顔のゆがむ娘を見て、一応病院に電話してみると少し慌てて立ち上がった。婦長さんが、診察に来てくださいって言ってるわよ、という。その時は、一定のリズムで陣痛が来ていた。

病院に到着後、診察を受けると即入院となった。母は慌てて家にとって返し、入院のために用意していたものを持ってきた。それから２時間後、悠紀は安産で無事女の子を出産した。

悠紀はその後、もう一人、男の子を生んだ。和人が、

私達二人が生きてた証しに、男の子と女の子を一人ずつほしい。

といってたが、その通りに子供を授かった。和人は二人の子を溺愛した。それも、とても不器用なやり方で愛した。由依は、たぶん和人はそんな風にしか遊んでもらったことがないのだろうと思った。義理の父を見ればそれが解る。義父の恐る恐る赤子を抱き、壊れ物を扱うようにあやす様子に、経験のなさがにじんでいた。だが、二人目の男の子には、嬉しさをさらけ出して喜んだ。義父にそんな一面があるのかと、悠紀は思った。

その義父も、七十の年を迎える前に逝ってしまった。

お義父さん、直人の事が心配なんですか？

病院のベッドの義父にそういうと、モルヒネに酔った意識の中でも、二人目の孫の先由依を案じて頷いた。直人は父親の和人や義理の姉のような聡明さがなかった。夫はそれについては何も言わなかった。直人に比べて長女の方は、

お前は、あの＊＊の姪か。

と、父親ではなく、義理の姉の名前を出され、それならかくあらんといった風に妙な得心顔で頷かれてしまっていた。

その義理の姉が義父の葬儀には、子供たちと一緒に帰ってきた。義姉は常とは違い、言葉少なで顔色も悪かった。葬儀一式が終わると、義姉は悠希に手をついて礼を言った。悠希は急に張りつめたものが解けて、涙が噴き出した。声も漏れた。和人が肩を抱いた。悠希の子供と義姉の子供がともに不安そうに見ていた。

翌日、義姉は急に、和人と悠希に頭を下げて頼み事をした。義姉の子供二人を預かってくれないかというのだ。それも、三年。本当はそれ以上になるかもしれないとも言った。今度はイギリスに行くというのだ。養育費も満足には送れないかもしれないという。でも、一生懸命頑張るからと、和人夫婦に頭を深々と下げた。父の遺産は要らないからとも言った。姉さん、お父さんの遺産っていったって、この家と少しの貯金しかなくて、相続税も払わなくていいぐらいなんだよ、と和人がいった。義姉は少し黙っていたが、お願い、と頭をさげるばっかりだ。その横で悠希は、この義姉の、肌の色の違う子供二人を育てる難しさを考えていた。傍ら、和人が声を荒げた。

勝手すぎるんだよ。姉さんは何でも思い通りにやってきたじゃあないか。今度は親として一番やってはいけないことまでやるのか。

何を？

子を捨てるってことだ！

和人が怒っていた。

だったら作るな！

分かってる。でもどうしようもないことってあるじゃない？今度がそれなの。私、このチャンスを逃したくないの。

そうやって、自分の野心のために人を切り捨て、今度は自分の子供まで切り捨てるのか。

そうよ。そういわれても言い訳しないわ。言い訳しても、結局することは同じなんだから。

それが、この子たちをここに置いてゆくって事か。

そうよ、私はスイスに行くの。

何なんだ、それは！

和人が手を振り上げそうだった。

いいじゃないの。私、この子たちも育てるわ。だって、子供をそだてるって、人生で一番面白くて楽しいことなんですもの。

悠希が口を挟まないと、和人の手が義姉の頬を打ってたところだった。皆が悠希を見た。悠希は義姉の子たちと自分の子供二人を見渡した。子供が四人かあと、悠希は急に心強い気になった。

しばらくして、義姉は本当にスイスに旅立った。京都の大学に職も投げ打った。子供二人も置き去りにした。あの時、カルガモの親子のように義姉の後をヨチヨチ歩きで必死に追いかけていた二人が悠希の元にやってきていた。子供たちは幼少期からいつも一緒に遊んでいたからか、違和感はないらしかった。娘の和希が一番年上で、彩文と志文の間が直人だった。といっても、和希と男の子たちが2年離れているだけで、直人、彩文は同学年、志文がもう一年下だった。悠希が子供たちの事で手一杯な時、和人は義姉がどこを目指したかを悠希に説明してくれた。ハーバード大学物理学教授のリサ・ランドール博士が異次元空間の実証実験をスイスでやろうとしていた。義姉はその実験に呼ばれて参加しに行ったのだ。

今スイスにLHC、大型ハドロン衝突型加速器って途轍もない加速器で、水素の原子核を構成している陽子を複数加速してぶっつけるんだ。すると、陽子は壊れて粒子に分解するんだけど、それがある一定の割合で、ふっと消えてゆく。その消えてゆく粒子の破片は三次元の世界から五次元の世界にワープしたと考えられるのさ。つまり三次元の世界は五次元の世界に接していて、重力はこの次元間を行き来しているというのがランドール博士の理論なんだ。

日常の果て

四次元も五次元も、悠希にはどっちでもよかった。毎朝急に増えた二人を含めて4人の子供のお弁当を作り、自分と和人もそれぞれ同じお弁当をもって家を出る。家の鍵を閉めるのは和人だ。だが和人はそれを時々忘れる。自分の仕事に熱中するあまり、注意が散漫になっているのだろうとは思うが、お父さん、また鍵がかかってなかったよと、クラブ活動をしない直人によく言われた。和人は苦笑いするしかなかった。

和人は学生時代と一緒で、徒歩で駅へ行き、着いた駅から自転車に乗って大学へ向かう。春になると大学への最後の急坂に桜が咲く。和人はそれを嬉しそうに話す。直人はそれを黙って聞いていた。和希は、私はお父さんの大学には行かない、おばさんの行ってた大学にゆくと、きつい調子で宣言する。彩文も詩紋もこの時は黙っていた。自分たちが居候だと感じているのだろうと悠希は思った。

あなたたちはどうするの？ママみたいにアメリカの大学へ行く？
振り返った顔に、かすむような笑みが張り付いていた。

おじさんやおばさんが、どこへでも行かせてあげる。
悠希がそういっても仮面のような笑みは消えなかった。悠希はその時、子育てに本気になった。カワイイ、子育ては楽しい、そんな気分は吹っ飛んだ。

本当に行かせてあげるんだから！わかった？
悠希の声に少し怒気が乗っていた。二人が急に真顔になった。

わかった？
悠希が子供たちの反応に気づかないまま強く言うと、二人も真顔で頷いた。

二人が来て間もなく、案の定、想定されたいざこざが起こっていた。子供は残酷だ。彩文と志文の肌の色への偏見はこんな田舎ではまだ残っているのだ。地元の子供たちには、彼らの肌の色は異質なものだった。ところが、彩文も詩文もこれまでそんなことを言われたことがなかった。やはり田舎は田舎だということか。しかし彼らは二人だけでそれに耐えた。母に老いていかれた孤立感が、だれかに頼ろうという考えを起こさせなかった。

それに気づいたのが、直人だった。彩文、詩文と一緒に帰っていたからだ。彩文たちをいじめる子らは、もっと弱弱しい直人も恰好の標的にした。

おまえ、こいつらの兄弟か？お前もこいつらと一緒なんだ。ごしごしこすったら、マックロクロスケなんだ。
彩文たちと直人はじっと下を向いて足を速めるしかなかった。

こんな露骨なからかいといじめは、そうは長く続かなかった。だが、もっと陰湿な拒絶が直人も含めて３人に襲い掛かってきた。無視し、もっと底意地の悪く拒絶した。彩文と詩文、直人はそれぞれ別なクラスだったが、それぞれ、話しかけるものも居なくなった。クラスでの共同作業等で、彼達と一緒なグループになることがあると、周りの物は露骨に嫌な顔をした。中には、それを口に出して言うものもあった。

だが、それを解決したのは、以外にも直人だった。体操実技に剣道の時間があった。彩文と

詩文、直人の３人のクラスが合同で共同授業となった時、手順をわざと間違えて彩文と詩文は思い切り打たれた。その傍らで直人は思わぬ速さで小手を打ち、面を打ってすり抜けた。直人は学校で剣道部だったのではない。祖父が気弱な直人を気遣って、居合を小さい時から教えていたからだ。木刀や摸造刀を振って型を繰り返すだけの地味な練習が、思わぬ速さを身にさせていた。
それを見ていた剣道の教官が、
　直人君の動きは、＊＊流の居合みたいだけど、誰にならったの？
と訊いてきた。
　祖父です。
　おじいさんって、・・・。ああ、あの＊＊さん？
と、直人の姓から教官は気が付いた。
　＊＊さんは、＊＊流の師範だったから。先生も演武会で＊＊さんの演武はよく見せてもらってた。＊＊さんの演武は、演武のための演武じゃなくて本当に人を切る型だった。
直人は黙って聞いていた。
　直人君、剣道部でやらんか？
そういわれて、直人は面の中で笑った。

その日から、陰湿な拒絶の壁が変わった。直人の周りでさざなみが起こるようになった。彩文たちの方もそうだった。もっとも、彩文たちの場合は、彼らの母親の性だった。彼らの母が誰か、周りが知るようになったからだ。それゆえ、彩文が教室の中を通っても、露骨に鼻を押さえ、横を向いて、　くせえ　、と吐き捨てていたのに、それが無くなった。彩文が悠希に笑った。

おばさん、ぼく、もうお風呂であんまり洗わなくてもよくなったみたい。
そういって、屈託ない笑顔になった。

子供たちの学校の成績は、彩文も詩文も最初は慣れないせいで付いて行けなかった所もあったのか、芳しくなかったが、次の学期では飛躍的によくなった。だからといって、誰かが教えたとかではない。また、自分たちもさほど努力したのでもなかった。では、以前の学校での成績がよかったのかと言うと、そうでもなかった。なにかが変わったというしかなかった。

直人は依然、目立つところがなかった。それゆえか、前から嫌がらせをしていた同級生が、また仕掛けて来るようになった。直人はそれに何もし返さなかった。剣道の共同授業の時も、もうあまり目立つ動きはしなかった。だが、一度だけ二人が合い対峙したとき、直人が竹刀を、目付けの形に構えた。通常の正眼ではなく、剣先を横にし、ぴたりと相手の喉に突きつけるのだ。相手はそれだけでのけぞった。思わず、竹刀を振りかぶり、大きく面を打ちに来た。直人は竹刀を返し、鮮やかに相手の肩を打った。祖父の教えた組太刀の、一番初めに教えられた型通りだった。竹刀の物打ちの部分が厳しく肩を打った。相手は竹刀を取り落とし、倒れ込んだ。

おいおい、あんまり本気になるなよ。
そういう剣道の教官を、肩を押さえながら相手は仰ぎ見た。その日から直人は恐れられた。

悠希は、子供たちがそんな風なことになっていたなんて知らなかった。ただ、スーパーでの買い物途中に、

直人君て、剣道がつよいんですってね。
と言う言葉を、同級生の母親から聞いただけだった。悠希は、それが何のことか解らなかった。

いやぁ、そんなことないですよ。
と、むしろ訝りながら答えたぐらいだ。悠希は、祖父が居合を直人に教えていたことも覚えていなかった。そして、子供たちの闘いもこれで終わった。

　和人は淡々と自分の仕事にまい進していた。
　おじさん、お勉強っておもしろい？
詩文が或る時聞いてきた。
　面白くて、大変で、何時投げ出そうかって考えてる。
　ふーん、だったらやめたらいいのに。
と言う。
　でも、いつも頭の中を一杯にして考えてられるから、やめられない。
　そうなんだ。
詩文は、母には聞くこともできなかったを叔父に答えてもらって納得した。
　ぼくも、いつも頭を一杯にしてかんがえよ。
　そうか、そうしたいか。
そういって、和人は詩文の頭をゴリゴリ撫でた。そんなことを、和人は直人にしたことがなかった。直人はいつも祖父のそばにいた。そして、祖父の性格を、直人は一番受け継いでいた。地味で、寡黙で、目立たなく、しかし、いつもすっと背筋が伸びていた。だから和人は、直人の事を心配したことがなかった。たとえ危なっかしくてたよりなく見えても、破天荒な長女より安心していた。
 和人が普通の時間によく帰ってくるようになった。といっても、７時近くではあったが、それでも早い方だった。帰ると、軽く夕食をすませ、狭いリビングに子供たちを集めて勉強を教える。彩文と詩文はかしこまって教わった。直人と和希はその横で一応すわっているといった風だったが、和希は
　自分で勉強したほうがいい！
といって、早い時期に自分の部屋に退散し、もう出てこなかった。和人が直人を見ると、一度目を合わせはしたが、一人でペンを走らせ、黙って勉強した。彩文は勉強が苦手だった。日本へ帰って来てそう長くなかったから、年相応の日本語の文章がよく読めなかったのだ。だから夕方の片付けが終わった悠希が彩文を教えた。その教えている最中に、日本語を英語に直して説明するのが聞こえた。しかしその英語がまた難しくて彩文には理解できないことがあった。和人は楽しそうだった。悠希の教えているのにも口を挟んだ。そして詩文を教えるのに和希を巻き込んだ。和希もしぶしぶこれに応じた。
　たのしそうね。
と、悠希が和人にいった。
　たのしい、たのしいさ、子供を育てるのはたのしい。一番楽しいことだと思うよ。
そして、そんなことが２年続き、和希が義姉の学校に進学していなくなり、さらに１年して彩文がスイスの義姉の元へ行って、そちらの学校に入学して寄宿舎にはいることになり、いなくなった。リビングの勉強時間が淋しくなった。もう、家が広くなってしまった。それでも詩文と直人は肩を寄せて勉強した。

　　ぼく、お父さんの学校に行く。
直人が言った。詩文も、
　　おばさん、僕もここからおじさんの学校にかよっていい？
と言った。だが、詩文は東京の学校に受かってしまった。一年後、直人も姉に続いた。家は空っぽになった。

　そうなって始めて、二人は自分の歳に気が付いた。この家に殆ど足を踏み入れない部屋ができた。時間が出来て手入れもできるはずなのに、庭も荒れて殺風景になった。直人が悠希を、
　おばさん
と呼ぶ。彩文と詩文の口真似だ。だから悠希も直人を、
　おじさん
と呼ぶ。庭はリトルガーデン。これは彩文の口真似だった。彼らが去って間もなくは、よくメールも来た。それが二人の夕食の嬉しい話題だった。しかしそれも間遠くなり、二人は沈黙のまま、夕食を済ませることが多くなった。
　その何とも言えない重苦しさを、悠希が破ろうと試みた。
　東京と京都に行ってみない？
　また行くのか？
　そうよ、なんか心配じゃない？
　そうだな。
直人はそういったが、そんなに実行されなかった。地方大学の給料では仕送りで精いっぱいだったからだ。しかし、日曜日に着くようにと、思いつくままに色々なものを詰めた荷物を送りだした。それも、頻繁にだ。あの子は甘いものが好きだったからとか、こっちはお米が要るって言ってたからと、買出しに行っては詰め込んだ。それがちょっとした幸せだった。
　今は未だこんなことで済んでるけど、先はもっと大変だぞ。
直人が言う。
　そんなことないわよ。嬉しいことばっかりよ。
そう言って荷物を作っている悠希に、少し白髪が見えた。そういえば、直人も自分の頭が最近淋しくなってきているのに気が付いていた。直人は朝、鏡を見ると、自分でも父親に似てきたとおもうようになった。なんかしなきゃあと思う。だが、脱力感がどこかに巣食ったまんまだった。
　何年かぶりに、姉が帰ってきた。髪も構わず、少し老けた顔のまんま、声だけは以前どおり大きくて斬り込むようだった。そして最初の一言が、
　あんた達、老けたわねえ。
だった。
　お互い様だよ。何年たっていると思ってるんだ。
と直人が言い返す。
　仕事は？
と、直人が聞くと、
　あんまり進展なし。まだ七年だもの。データが少なすぎるのよ。一回の実験に三か月かかって、その解析にまた三か月。コンピューターが遅すぎるのよ。それに、実験出来るようになるまでに四年かかったし。でも手がかりはあったわ。あのピークは多分そうだと思う。
　で、今度は何しに帰ったの。
　人材募集。
　えっ、まだ人手が足らないのか。
　そうよ、人は何人いてもいいの。特に日本人は。日本人は食えなくても頑張るから。
　なんだよ、それは。人に犠牲を強いるなよ。

　　いいえ、それだから基礎研究に向いているのよ。
その会話に悠希が割って入った。
　　彩文ちゃんは元気ですか。
　　元気なんじゃない？休みの度に帰省の旅費を請求してきて、帰るとセンターの実験室に立てこもるから。この前も、実験のセンサーに日本製のこんな部品があるから、かんがえてみたら、っていうから、大学に問い合わせてみると、これがいいのよ。助かったわ。精度が十倍上がって、京の単位でデータを拾えるようになったの。
　　それじゃ、一人は確実に人材確保が出来たってことだ。詩文君だって数学の方を勉強してるし、いいんじゃない？
　　そうね、二人の事はほったらかしで、あなた方夫婦には大変お世話になりました。まともに育ってくれて、喜んでおります。

帰っても、ふっと疲れを感じることが多くなった。悠紀は誰もいない家のドアを開けると、中の空気のよどみを感じた。明かりを点け、洗濯物を取り込む。直人と自分の物だけだから、ほんの少ししかない。テーブルの上のものも、今朝おいたままでなんも変わっていない。そんなことに疲れを感じるのも、ひょっとしたら更年期かと考えてしまう。同僚の世間話の話題として、そんな話を最近よく聞く。かあっと熱くなるのよ、冷や汗も、それから動悸が激しくなって目がまわるの。まだ早い、と悠希は頭を振る。前は疲れたなんて、考える暇もなかった。帰るとすぐに夕食の支度、洗濯物の取り込み、お風呂の用意、子供たちの学校の用事。それこそ、そっちの方が目が回るようだった。だから、実家の母がよく手伝いに来てくれて大助かりだった。洗濯物の取り込みと片づけをしてくれてる傍らで、自分は夕食の準備をすればいい。お風呂の用意は子供たちの当番に任せていた。しかし、よく和人がお風呂場から出てきていた。リビングでテレビを見ているもの、自分の部屋でなにかしてるもの。あなたたち、宿題は大丈夫なの？ご飯ですよ。そんなことを考えていると、直人が帰ってきた。

悠紀さん、大丈夫か？

えっ、大丈夫よ。ちょっと疲れただけ。

そうか、じゃどこか、食事に行こうか。

そう言われて、夕食の準備をしてなかったことに気付く.

すいません、お願いします。

そういって、直人の運転する車の乗った。もうくたびれた車だった。対向車が急速に近づき、横を通りすぎていくのを見ながら悠紀は、

最近、私、家の帰っても何をしたらいいのか、解らないことがあるの。

と言った。

なんか、とってもさびしい。

ね、どうして私と結婚したの？

和人はポツリと言った。

あの時、出会っちまったからさ。その前から悠紀さんは私の嫁さんになることになっていたんだ。だから、あそこで出会った。ぼくはそう思ってる。

悠紀は笑ってしまった。私たち、何年一緒に暮らしているのだろうと思う。最初、なかなか子供が出来なくて、出来てしまうと続けてもう一人生まれて、最初が女の子、次が男の子、だから、上の子は君の、下の子は僕の、と和人が言った。僕たちがこの世にいたという証し、と笑う。僕たちなんか、世に残すものなどありはしない。僕たちの命の続きが子供たち、だから男の子と女の子でちょうどいいんだと直人が生まれた時、笑った。

でもね、私たちって、お姉さんの子供まで育てたわ。

と言ってみる。なにか辻褄の合わない会話だが、直人は、以前言ってたように、

子育てほど面白いことはない。

と答えた。そうだった、子育てほど面白いことはなかった、と悠希は反芻する。本当におもし

ろかった、だから、あんなに大きくなった直人を、もう一度おんぶしてみたくなる。和希をお風呂にいれて洗ってやりたいとおもう。彩文だって詩文だって、頭をなでて抱きしめたいと思ってしまう。

　　ああ、もう一人子供をつくるか。

直人が突然言い出して、自分で吹き出した。

　　今度、東京か京都に行って、子供たちの顔を見てこようか。それで卒業。あんな面白いことはもうないから、自分でなにか探すさ。何かあるよ、きっと。

悠紀はそっと頷いた。なにか探そう。もうそれほど時間は残ってないのだから。

友よ

ふいに突き付けられたような気がした。すっかり忘れてしまっていた。それが急に目の前に現れ、どうするんだと問うてくる。もう私には時間がない。そう思うと息苦しくて絶え入りそうだ。私は何を選択してきたのか。それが今の私を作っている。そして、し残し、捨ててきた物は背後に累々とある。なにも、全部なんかできゃしないんだから、と思う。そう思ってきたから、置き去りにできたんだとも思う。私も老いた、戦友よ。

戦争が終わって、私が南方からかえったのは終戦の年の末だった。そのあたりは敵だったとはいえ、相手がアメリカ軍だったからかもしれない。よりスムーズに、より寛大に我々は帰ってこられた。さらに、捕虜として収容されたところで、私は背中に砲弾の破片をうけた傷の手当までしてもらった。と言っても、野戦病院よりは少しましと言うだけの施設で、なにやら米軍の軍医がニヤニヤ笑いながら消毒をして体に包帯をしてくれただけだったが、それでも自軍での扱いよりは数等上だった。私はその時、ああ負けたと思った。俺たちは負けたんだ、戦友(とも）よ。

昭和１９年春、私の元に紅紙が届いた。陸軍の赤紙ではなく、同郷の者のなかでは珍しく、海軍からの召集令状だった。母も泣いた。兄弟たちも泣いた。父の早逝以来、私は母を助け、一家を支え続けてきた。叔父を頼って大阪の機械部品の製造工場の下働きもした。九州の炭鉱へも行った。炭鉱では９０日間連続で坑道にもぐり続け、石炭を掘った。その代償は表彰状一枚だった。

甲種合格のあと、たった２か月での召集令状だった。農家の長男で、しかも戸主に死なれた家は召集も後回しだと、村役は訳知り顔に言っていたが、私は引っさらわれるように召集された。私は本籍地の陸軍へではなく、本州の海軍鎮守府へ遠く出かけてゆかなければならなかった。田舎者で旅慣れない私は、駅を降りても不安だった。右へ行けばいいのか左なのかとキョロキョロいていると、巡邏中の警官が私を見咎めた。

貴様は何をしておるか！

と声が飛んできた。私は返答が出来ず、黙って紅紙を差し出した。すると警官は直立し、敬礼してご苦労様でありますと言った。そして鎮守府はこうと、道を丁寧に教えてくれた。そのあと、おめでとうございます、武運長久を祈っております、と敬礼して見送ってくれた。私は徴兵されたことより、今は道に迷う方が不安だった。

それらしい建物を見つけ、すこし安心していると、横を同じように歩いていくもの、後ろをついてくるものが数名いた。すると歩哨が叫んだ。

駆け足、進め！

自然に走った。下駄が足元でガラガラなった。

本日入隊のものが揃ったところで、もう一度身体検査が行われた。と言っても本の形だけで、両手両足が普通に動いて心臓が動いていればそれでよかった。その検査のあと、全員に軍服が配られた。夏服冬服一式と皮靴であった。そしてそれ全部に兵籍番号を付けるように言われた。私は横徴機＊＊＊＊だった。これは横須賀海兵団、志願兵ではなく徴兵、機関部門、そして番号であった。海軍は陸軍と違い、徴兵する人員の数は陸軍１万人に対して海軍２～３人といった割

合だった。それは海軍が全員技術を身に着けた技能集団でなければ艦は動かないからだ。それゆえ徴兵するのも、ほとんどが充員徴兵であった。

　そのあと、私たちはそれぞれ班の部屋に分かれた。私の階級は四等水兵であった。そして徴兵されたものは皆同等の初年兵教育を三カ月受けた。

軍隊は殴られるものと思って来た。しかし、初日は手をかけられることはなかった。だが、夕食のとき、号令とともに食事をしていると、古参の教育係がふいに、おそい！と叫んだ。

いつまで娑婆にいる気分なんだ、敵は飯を食ってるからと言って、待ってはくれないぞ、もっとさっさと食え。

と竹刀を振り回した。そして、全員立て！と立たされた。さらに古参兵は、

俺が良いというまで、全員で机を持ち上げろ、今日のめしは今机にあるだけだ、一人でも崩れたらそれで終わりだと思え。

と息巻いた。机はそれだけでも重かった。それを、息を合わせて持ち上げる。だがその時に早や、中身の入った食器は転がった。

拾え！食器を拾うんだ。

と竹刀が舞う。向こうで気の弱そうな男が、味噌汁をかぶった顔をぬぐいもせず、食器を拾ってた。

お前らもぼおっと見てるんじゃない、もちあげろ！

と言われ、誰かが声をかけた。セエーノッ！それで机は上がった。だが身長の差があり、机が傾いた。あわせろ！と、号令をかけた者が指示を飛ばした。私は横を見、身長に合わせて手を縮めた。だが、それがつらかった。次第に手が震えだし、息があがってきた。と、斜め向こうの者が急に倒れた。机が一度に傾き、食器類が流れるように落ちて行った。そしてその時、おろせえ、の号令がかかった。多分掛け声をかけた者だろう、その男がたおれた男の頬を軽くたたき、おい、しっかりしろ、と声をかけた。倒れた男は目を開いたが、周りは転げ落ちた食器と内容物が散乱していた。

就眠の前に、配られていた軍人手帳を出すように言われた。そして、全員が立ち、軍人勅諭の奉読が始まった。

我が国の軍隊は世々天皇の統率し給うところにぞある

さすがに古参兵は全文を暗唱できた。そして、翌日からこの軍人勅諭の奉読の時、海軍魂注入棒が踊った。だが今日はこれだけでは終わらなかった。海軍は吊床を吊って、それに寝る。

総員、吊床つれ！

と号令が掛かると、各班２名ほどが二階部分に駆け上がり、吊床を下に待ち受けるものへ次々と投げ下ろす。それを受け止めたものはそれぞれに手渡し、次に各々が梁のフックに環を掛けて吊るしてゆく。しかし一つ一つが人間一人分ほどの重さで、広げてゆくだけでも容易ではない。だがそれを各班が競争で展開してゆくのだ。そして遅れをとると、もう一度、と号令され、吊った吊床をくくり直し、階上にあげ、収納し直す。その時、吊床は決まったところを五ヶ所きちっと短いロープで括らなければならない。それが容易ではなかった。そして、それに戸惑っていると、教官役の古参兵から罵倒の声と竹刀の先が飛んできた。それでも形ができると、また二階の収納場所に全部をもどす。

吊床おろせぇ。

と号令が掛かる。待機していた当番兵がはしごを駆けのぼり、二人してまた吊床を下へ降ろす。それを順に手渡し、末端のものからフックに環をかけ、吊床を張ってゆく。

まて、佐藤四等水兵、おまえ、頭を切っているぞ。

えっ、そうですか、班長。

構わないから、手当してもらえ。

はい、解りました。行ってまいります。

そんな会話が遠く聞こえた。海軍では、陸軍と違い、自分の事を、自分はとは言わない。わたくしは、でいいのだ。そして、＊＊班長殿と殿は付けない。大隊長でも大隊長と呼べばいい。ただし、敬礼は報告の間中していなければならない。それがどんなに長くても、手を下すことは出来ない。そのあたりは、ドイツ陸軍を見習った陸軍と、英国海軍を手本にした海軍の違いだった。

そんな事故があったからか、初日の吊床訓練はそこで終わった。だが、翌朝の、総員おこし、吊床おろし、はより過酷なものになった。

総員おこしは先ず総員おこし一五分前、の号令がスピーカーからながれる。すると、ここで用便を済ませておかないと、後で困ることになる。また、つぎの総員おこし五分前の号令までに自分の吊床の整理と準備をしておかなければならない。五分前の号令からは、吊床を離れてはいけないのだ。そして、総員おこし、吊床おさめ、となるのだが、その号令とともに各自吊床から飛び降り、着衣し、吊床を紐で括り、一斉に運び上げて元に収納する。たったそれだけと言っても、これを六〇秒で行えなければ罰直であった。即ち、すべてが連帯責任となり、全員に海軍魂注入棒が見舞われた。

それが終わると直ちに事業服に帽子をかぶり、靴を履いて練兵場に整列していなければならない。整列の後、員数確認の番号を掛け、副直将校に報告する。副直将校からその班の課業が告げられ、一日の訓練が始まる。その時は、ここは娑婆じゃない、地獄の一丁目だと思った。

だが、ここは地獄ですらなかった。あのフィリピン戦のジャングルこそ地獄で、人は亡者になり、餓鬼になりはてた。レイテ島、日本兵１０万人戦死、そのうち８万人が餓死、病死。そして終戦まで生き残っていた兵は定かならず。約５０００とも２５００とも、そして最悪の数字は５００人。

太平洋戦争での戦死者数、２３０万人。その中で最多戦死者数を数えたのはフィリピン戦だった。その数、５１万人、うち餓死者、線傷病者４８万人、残約１８０００人戦死。生存者約２５００人。

中国戦線については多々記述もあり、かの国に対して明白な謝罪もなされているが、まるで被い隠すように政府もマスコミも、そして日本社会全体が沈黙をし続けてきたのが、フィリピン戦であった。この戦いは戦争の悲惨さをすべて描いていた。私は出征前、叔父に訊かされていた。今度の闘いはどうもいけない。たぶん負けるぞ。だからお前もなんとかして生き残れ。叔父がそんな情報をどこから仕入れてきたのか解らなかったが、軍関係の機械部品を作って納めていたことからの情報だと思った。中国にやられるより南方のほうがまだましかもしれないが、どっちみち良いことはない。そういって叔父は、私の丸坊主に刈った髪を、どうする、置いておくかと言った。私はとっさに頷いた。だが、この叔父の工場で働いた経験が、少しでも私の命を救ってくれるきっかけになった。

３か月の初年兵教育が終わると、私たち新兵も３等水兵に昇格した。そして、この後志望する教練科目を書き込む用紙を渡された。。その時教官将校から特別に、お前たちの中で自動車運転の経験のあるやつはいないか、免許を持ってなくてもいい、運転助手をしたことがあるとか、エンジンをいじったことがあるとか、そういうことがある奴は前に出ろ、と口頭で訊かれた。だが、２００余名のうち、すぐに申し出るものはほんの数名しかいなかった。大体自動車なんて、田舎者は見たこともない時代だ。まして一般人が自動車に乗ったり運転したりなどしたことがあるはずない。だが、私は叔父の工場で品物を届けるための助手として、自動車に乗って機械部品を下す補助をした経験があった。かといって、実際に運転したかとがあるかと言えば、そんなことさせてもらえるはずがなかったが、ちょっと真似事はしたことがあった。。それだけだったが、私は、もう一度声を上げる将校の声に即座に手を挙げた。将校は手を挙げた者の数を数え、まだ足りない、では機関兵志望から指名する。＊＊、＊＊、と全部で４０名になるように名前を読み上げた。私は、昭和１９年９月から初めて始まった海軍自動車講習学校の講習生となった。教練期間は２か月。そして後にフィリピン戦独立トラック部隊に参入されることになる。

自動車学校は日本軍全体でも初めての教練で、それだけに教官の方も試行錯誤であったことが、後からなら解った。しかしそれだからこそ座学も実地訓練も厳しかった。その後、私は徴収兵としては異例の扱いで砲術学校へも行くことになったのだが、自動車学校も砲術学校も厳しさは同じだった。まず座学では教科書は毎回授業初めに配られ、終わると回収される。ノートも同様に回収され、夜の自由時間にこのノートだけはみることができるが、自由時間が終わるとまた回収される。教科書もノートも軍事機密扱いで決して手元には置けなかった。そして講義も、解ろうとわかるまいと、教えたぞ、覚えておけと言い渡され、二度と繰り返されることはなかった。これが二か月続いた。その二か月の間、午後は実習があり、手に棒を握った教官が助手席にいて、ハンドルを持つ手、ペダルを踏む足を棒の先でつつかれて教えられ、へまでもしようものなら容赦なくたたかれた。車に傷でも付けようものなら直心棒が思い切り振り下ろされた。そ

して週に三度から四度の試験があって、一〇問の問題に答えるのであったが、解答用紙は帰ってこない。点数も解らない。すべて副直将校の手元にとどめられた。

その実習は運転だけではなかった。戦地では自分の手で故障も直さなければならないので、自動車の構造とエンジンの故障修理も叩き込まれた。講義で構造自体は叩き込まれたのだが、私は容易に呑み込めた。叔父の工場で作っていたものが、その一部の部品だったのだ。そして叔父の工場の一室に古いエンジンもあった。それはもうスクラップに回される寸前のものだったが、研究用にと叔父が大枚の金を叩いて購入した。しかし、基礎知識のない物ばかりだったから、だれもそれには触らなかった。それを私は誰にも内緒でいじくっていたことがあった。それだからといって、エンジンを分解したりしたわけではない。だが、その部品類の名称も知らない私でも、実際触ったことのある物は、これがプラグとプラグコード、ヘッドカバーを外して見えるのがヘッドカムとシリンダーヘッド、シリンダーブロックと横文字は頭が痛かったが、構造自体は理解できた。それゆえか、教官が簡単なエンジンを分解して見せた後、これを組み立てろといきなり私を指名した時も、困惑はしたがやってみる気にはなった。とはいっても、できませんとは決して言えないことでもあったのは事実だ。もしそういったとすれば、次に来ることはわかっていた。私は教官がどの手順でボルトを外し、ヘッドカバーをどの向きに置いたかまで見取っていた。だが、それも自信はなく、前に出て私は震えた。といっても、今思えばエンジンは最後まで分解されていたわけではなく、ヘッドカバーを乗せ、タイミングベルトを張って、ヘッドカバーをとめ付けさえすればよかった。まあいいだろう、ところで、お前は何処かでエンジンをいじったことがあるのか、と聞かれた。はっ、叔父のこうばで、とこたえると、そうか、ならお前は航空隊の整備兵に行ったほうがよかったかもしれないな、と言われた。

最終試験は広い講習場を、トラックを運転して行われた。試験コースはそう難しいものではなく、唯一坂道発進が失敗しやすい個所であった。私は早々に試技を済ませていた。だが、何人かがその坂道発進で失敗した。バックで失敗するものもあった。そのたびに講習性の間からため息が漏れた。結局４２人中２０人しか合格しなかった。
た。

昭和１９年の後半から、海軍も階級が陸軍と同様になり、通常は新兵教育が終わると三等水兵になり、海軍兵学校を終えて技能章を付ければ二等水兵となるところだが、一等兵と言うことになった。しかし合格しなければ二等兵のままだ。私は無事海軍運転免許証を手に入れた。すると副直将校から呼ばれ、明日から乗用車を練習するように言い渡された。そして三日間の練習の後、県の運転免許証をもらってくるように言われた。私は何もわからず、県へおもむき、申請書を書き、免許証を受け取った。その翌日から私は師団長を自動車で送迎することになった。しかし、この送迎は大変だった。まだ毎日の吊床訓練のほうが増しかと思ってしまった。私は朝の朝礼と海軍体操のあと、教班の当直将校に、師団長のお迎えに行ってまいります、と報告し、許可を受けて迎えに出る。そのため、毎日車を洗車し、中を糸くず一本ないように掃除した。まずエンジンをかけ、車の周囲を巡って点検し、ブレーキの具合等の始業点検を済ませる。それから師団長旗を前方のポールになびかせ、日頃とは違って鎮守府の門を徐行ではあるが一時停止しないで走り出る。後方に歩哨二名がささげ銃をしているのがバックミラーに見える。師団長の寄宿舎は１０分ほど離れたところであるからそれほど距離もあるわけではない。それに、師団長もこれまでは馬で出向いていたのだ。

師団長をお迎えに参りました。

と玄関先で呼ばわると、女中と思しき女性が出てきて、

ごくろうさまです。

と挨拶される。その後。師団長が出てこられ、長靴をはいて指揮刀を腰に携え、車に乗り込んでくる。その間、私は敬礼をしたまま、

お迎えに参りました。

大声でいい、手を下すと走って車のドアを開け、師団長の乗り込まれるのを確認して、ドアを半ドアにならないように確実に閉め、駆け足で車の後方を回って運転席に乗り込む。その朝は師団長の方から話しかけられた。

以前、陸軍省へ行くときは連隊から車に乗って行ったもんだが、この車はそれより広くて乗り心地がいいね。

はっ、これはフランス車であります。

このころ陸軍はくろがね四起という四輪駆動車をつかっていたが、海軍はその泥臭さをきらって、あえて外車を徴収し、使っていた。私は横文字は解らなかったので、士官に車名を教えてもらった。

そうかね。

と、その日の会話はそれで終わりだった。

そのころ、私の所属する部隊は、行く先は告げられていなかったが、乗る艦がまだ帰ってこないので待たされていた。そのせいで私に師団長送迎が回ってきたのだろうと思っていた。何回か送迎をした後、教育士官から急に呼び出しを掛けられた。

おまえは、師団長の送迎の時、拳銃を携行しているか。

と聞かれた。もちろん、持って出ているはずがなかった。いいえ、持って行っておりません、と答えると、

　そうか、ならば師団長警護に必要だから、拳銃の教練を受けて、師団長をお迎えに行くときは必ず携行して行け。

と命じられた。私に渡されたのは南部式自動拳銃だった。これはあとで、海軍陸戦隊としてもう一度使うことになった。

　射撃訓練は半日だった。古参兵が私につき、

　いいよな、おまえは。

と腕の技能章をつつき、愚痴るように言った。階級こそ今は同じだが、古参兵には善行章が二本付いていた。

　それから少したって、私は副直将校からまた呼び出され、

　お前には関東の砲術学校付属の戦車学校に行ってもらうことになった。と告げられた。海軍陸戦隊に戦車操縦士が圧倒的に足りなくなってきたらしい。自動車学校は中国地方のこの学校と、関東の学校の２校だけだったが、戦車の操縦士はまず自動車運転免許が必要だった。それゆえ、自動車学校で免許を取得したものの中からまた選抜して戦車学校へ行かせることになったらしかった。それも全部で約２０名だったことは、学校には行って解った。

関東の砲術学校へ行くことを承知した段階で、私は徴収兵から志願兵に変更になった。それゆえ、兵籍は＊志機＊＊＊＊と変わり、兵役は３年延びることになった。今の自動車学校も元の海兵団から移動してきたのだが、今度も中国地方の兵学校から関東への移動だった。この＊山砲術学校は古くからの兵学校で、その厳しさは鬼の＊砲と鳴り響いていた。だが、付属戦車学校は実習用の戦車が３台しかなく、それも陸軍から譲り受けたもので九五式と呼ばれる軽戦車だった。

だが、操縦士講習は過酷を極めた。戦車の操縦は、殆ど盲目で行わなければならない。操縦士は先ず防音用ヘッドホンとゴーグルをつけて戦車の右前方に乗り込む。すると、股の間に中央操縦桿があり、左右の内外にも操縦桿が二本ずつ立っている。その外側の操縦桿で右折左折を行う。それぞれの内側の操縦桿は超信地旋回を行わなければならない時に操作する。足元のペダルは自動車と同じだ。クラッチ、ブレーキ、アクセルが自動車と同じ配置で並んでおり、中央の操縦桿でロウからトップまでの四段にギアを切り替えてゆく。その際必須の技術がダブルクラッチだ。この操作を行わなければギアチェンジはスムースに行えず、チェンジレバーは弾き返され、手首を痛めかねない。エンジンはディーゼルであったので騒音がひどかった。また、エンジンの起動には注意が必要だった。一端起動に失敗すれば、燃料噴射装置に軽油を満たし直さねばならず、エンジンの起動レバーをもって外からエンジンを手動で回し、起動せねばならなくなる。これもまた手をはじかれて捻挫しかねない操作だった。

さらに操縦席に座ると、非戦闘時は展望窓を開けて一応視界を確保して操縦できるが、戦闘時には覗視窓に変える。これは１２cm×２ｍｍのスリットでしかなかった。以前はここに何も防備されていなかったが、訓練時には防弾ガラスが入っていた。戦闘時は操縦士のこのスリットが先ず狙われる。ここを撃たれると、戦車は操縦士を失い、動けなくなるのだ。また被弾しなくとも、土ぼこりを被っただけで簡単に視界は失われる。それゆえ操縦士は車長に両肩を足で押されて操縦する。左なら左肩を、右なら右肩を押される。直進は背中中央を押される。そういった操作を行う速さも、車長の足の蹴り方で察知しなければならない。

だが、操縦士講習を受けているものは、この覗視窓での視野訓練を自主的に行った。箱眼鏡を作るのだ。木箱にスリットと同じ隙間を開け、それを掛けて、長い廊下を歩く。すると、なにか筋や点が走り、自分自身もそれぞれの癖が出て、右や左に向かって行ってしまう。私の場合は左へ走った。それを窓ガラスにぶつかりそうになる寸前で、同期の者に抱き留められる。この訓練の目的は、スリットからでも外が見えるようになることと、目隠し状態になっても確実に直進できるように体に覚えさせることだった。そういった闇の中を手探りで進むような訓練でも、一週間続けるとなにやら見えてくるのだ。この箱眼鏡を付けて階段の昇降もできるようになる。練兵場を最初は駆け足程度だが、そのうち転倒せずに長い距離を走れるようになり、また速さも増して走れるようになっていった。

学科においてはほぼ自動車学校と同じ内容だったが、教官は何を思っていたのか米軍の戦車砲から発射される砲弾の種類を盛んに教えてくれた。装甲を貫通してくる砲弾、装甲に到達する

と激しく発火し内部を焼く砲弾、貫通して内部で爆発する砲弾。これらはまだ日本にはなかった。そして、解るな、といって我々を見た。

砲術学校であるこの学校は、海軍陸戦隊を養成する唯一つの特殊な兵学校であったが、私はそんなことなど知らなかった。それゆえか、ここでの訓練は陸軍の歩兵訓練と同じ内容もあった。というより、陸軍のそれより厳しかったかもしれない。以前の自動車学校でも同様であったが、陸軍歩兵と同等か更に重装備を身に着けて、走行訓練、匍匐訓練、そして最後の突撃訓練等は常に行われた。戦車学校に海はなかったので短艇訓練こそなかったが、練兵場よりはるかに広い戦車操縦の教習場を這いずり回り、時に戦車の後方を追従して走らなければならなかった。戦車は壕を渡り、土塁を乗り越え、叢を走る。時には立木もなぎ倒してゆく。それに遅れてはいけないのだ。背中には２０キロを超える雑嚢を背負っている。銃は三八銃ではなかった。三十五年式海軍小銃を殆どの者が手に持っていたが、やはり砲術学校である。機関短銃を持ったものもあったし、私は自動拳銃も持たされていた。勿論他にも拳銃を装備したものがいた。操縦士は実戦の際拳銃孔から接近者を射るので携行して当然の物なのだが、実際にはほんの少数しか持たされておらず、また、持っていた者たちは後に陸戦隊ではなく、独立トラック隊に配属された。

戦車操縦訓練は相当早い時期から行われた。速習で戦車操縦士を養成しなければならないほど、戦局は切迫していたのだろう。それまでに講義で戦車操典を暗唱できるまでに覚えさせられた。つぎに石灰でコースをかかれた教習場を、時速十五キロでトラックを走らせる訓練があった。それが軽戦車の標準速度だからだ。まず車長役の教官が助手席に乗り込み、戦車講習性が運転席に座る。その際の号令は、乗車、である。車のエンジンの始動は乗車車長からの、運転始め、の号令で操縦士が行う。他に銃士も同乗するのだが、トラックによる訓練の時は省かれた。エンジン始動完了の後、車長は私が持って入った属品箱を確認する。これにはエンジン始動クランク他、戦車砲が詰まった時の砲弾引抜とか信管引抜、その他戦車一切の工具が一式入っている。その確認の後、車長は外部の視察を行う。地形、目標物とその数、距離、一切の観察を一瞬で行わなければならない。また、車長は、この軽戦車の場合、砲手、装填手の役割まで果たさなければならないので過酷であった。その後、操縦士に、前へ、と号令する。

トラックによる戦車模擬操縦の訓練が私の番になった時、運転席で車長が、佐伯上等兵、こんな運転の仕方をどこで覚えた、と前方を注視しながら訊いてきた。

はっ、私はここへ来るまで先の待機地で師団長の送迎をしておりましたので、自動車学校の教官にきつく指導されました。

と答えると、

戦車操縦には、この運転の仕方が最善だから忘れるな。

と言われた。車は、発進の時はスムースに動かすことは慣れればそう難しいことではない。だがギアを上げてゆくとき、ダブルクラッチを使わなければギアチェインジも出来ないが、それよりもギアを下げる時の方がもっとむつかしい。エンジンを空ぶかしして、ギアの回転を合わさなければシフトダウンできない。そしてシフトダウンできても、そのままアクセルを車の速度に合わせて或る程度開けてエンジンの回転数を上げておかないと、クラッチを繋いだ時、車体がつんのめったりのけぞる不快な変速ショックが起こる。前の自動車学校の教官に、これを厳しく叩き

込まれた。それゆえか、私が＊山砲術学校に行くことになり、明日よりお迎えには来られなくなったと師団長に報告すると、師団長から、ご苦労でした、と言ってもらえた。それが今生きてきた。

いざ実際に戦車に搭乗しての操縦訓練となるところで、＊山砲術学校付属戦車学校は同じ関東の＊須賀兵学校に統合され、戦車操縦の講習も＊須賀砲術学校＊堂演習場で行われるようになった。考えてみると、私は四国の山奥から大阪に出て、そこで海軍の召集を知らされ、九州の先の海兵団に入隊し、そこからまた思わぬ偶然を自分の手で掴んで中国地方の＊の兵学校に新設された自動車学校へ行き、そして鬼の＊山砲術学校で戦車操縦士としての教育を受けることになった。ところが今度は＊須賀砲術学校＊堂演習場だ。海軍陸戦隊は、他とは違い、唯一開襟平襟式の軍装を整え、陸軍のような詰襟は着なかった。これがまた、後に私が生還できた訳のひとつになった。

＊堂演習場からは富士山が見えた。藤沢市から辻堂市までの沿岸砂丘地で、横須賀からは直通列車が運行されていた。私たち戦車操縦講習生は別途トラックに分乗し、操縦訓練に早朝から通った。そして、その最初の朝、横に並んだ同期生に肘で教えられ、富士の美しさに見とれてしまった。

用意してきた軍装品は兵舎に残し、まず教官による戦車操縦を見た。エンジンの掛かってない操縦席は教官の声もよく聞こえたが、一端エンジンが掛かるとその騒音で、怒鳴り声も聞き取れないことがあった。

運転始め！

の号令で、抜け落ちにくく加工されたエンジンキーを差し込み、そっと一瞬回す。そして、アクセルを二三度あおって、一気に踏み込み、キーを強く回す。すると、エンジンがグルッと回り、一瞬息をしてから煽られるように始動する。と同時にアクセルを離す。そうしないと潤滑油の回っていないエンジンは、鉄を叩くような金属音をたて、猛烈に白煙を噴き出す。

いいか、戦車は動く城ではない、動くトーチカでもない。つまり、無敵ではないということだ。また、戦車はどこでも走れると思ったら、大間違いだ。平坦な道ならどこまでも走れる。しかし、壕があり、土塁があれば、そこを走破するのは操縦士の腕に架かっている。そのことをよおく自覚して操縦を体得するように。

教官の訓示にしては、ここまでいっていいのだろうかという内容だった。だが、実際乗ってみると、それが本当の事だと解った。戦車は弱い。

講習に使われる９５式軽戦車は起動輪が前で、かつ前方が持ち上がった様に履帯が掛かっている。これは谷から上がるとき、この履帯が谷の壁に掛かり、容易に上がっていけるように考えられているのだ。また、誘導輪それぞれが独立懸架になっていて、走破性は優秀なはずだった。今は戦車砲も時代遅れになり、取り残された遺物のようなものに成り果てている。そのことは戦車操縦士講習生の中では、よくわかっていた。ノモンハンをみろ。動く棺桶かもしれないぞ。そんな噂が講習生の中で囁かれていた。だが、戦車兵は航空兵と並んで憧憬されていた。

しかし、それは実際とはかけ離れたものだ。戦車帽に防塵眼鏡、遮音用ヘッドホンを身に付け、車長の乗車の号令に際して、戦車に一番に乗り込むのは操縦士だ。まず属品箱を背に持ち、履帯の上の泥除けに登る。９５式の場合は、前面の射手席の扉を開け、これも操縦士が一番に乗り込んで、そののち銃士つまり射手が続く。車長は最後に天蓋を開け、砲塔台に乗り込む。車長は砲手も兼ねねばならず、激務だった。戦車兵は戦車帽のほかに、防塵マスクも用意している。自砲を発射すると、その消炎だけで砲塔台は煙った。それに対する換気設備はない。あればそこを狙われるからだ。それゆえ、砲を撃つと、中は消炎と熱気で地獄の暑さになる。それでも砲塔内はまだいい方だ。敵がいなければ、天蓋を開けられる。操縦席は砲塔からも射手席からも隔絶されて、エンジンの騒音と熱気に満ちる。そして、操縦中は背もたれに寝っ転がった姿勢のままで、起きあがれもしない。さらに、暑くても寒くても着ているもので調節するしかなく、もっと悲惨なことは排泄もそのままということだ。それゆえ、どんなに汗をかいても水は飲めなかった。操縦士が下車してくると、その体臭は汗と尿臭と、ときに脱糞臭で近寄れなかった。

講習生が戦車操縦の実地訓練に移ると、他の講習生はその戦車の横と後方を行軍装備を付けて走らなければならなかった。歩兵を伴わない戦車は殆ど無防備と言っていいからだ。私はフィリピンの山岳地戦で、斬り込み隊の一人として出撃し、山を登ってくる戦車にその死角から爆薬を詰めた長い竹筒を履帯に差し込み、爆発させて走行不能にしたことがあった。戦車は死角だらけだ。それゆえ、その死角から火炎瓶一本投げつけられるだけで走行不能になり、機関室から火を噴いて爆発炎上してしまう。それを知っている私は、雑嚢に爆薬を入れ、戦車の下に飛び込んで自爆するなどといった攻撃を、いかに強要されてもする気にならなかった。陸軍の歩兵たちは戦車の前に飛び出し、身を投げ出して履帯の下で身をつぶされながら、爆薬の発火紐を引いた。それでも、紐を引くのが早いと爆炎が上がるだけで、アメリカの戦車はびくともしなかった。上手くいけば、戦車の車体を揺るがし、履帯を切り、時に機関室の装甲を剥いで進行を止められた。だが、それも敵戦車に、歩兵が伴走していれば無理だ。だが、解っていて飛び出すと、カリバリンが特攻兵を刈り倒した。軽い音で銃弾を発射する短機関銃を、カリバリンと音がするといって、私たちはそう呼んだ。パリパリと短機関銃を撃たれて、背中の雑嚢にあたると、背負っていた兵の体は飛び散って骨も残さなかった。フィリピンの島には、非日常が日常だった。死は直ぐ横にあった。次は自分だと解っていた。銃弾でか、火炎放射器でか、砲撃、戦闘機の機銃掃射か。さらに米軍は、日本兵の塹壕の前に重機をもってきて、大量の土を押して塹壕を埋め、日本兵を生き埋めにした。抵抗できぬ兵は埋められながら軍歌を歌っていた。火炎放射を浴びた兵は、身を火と燃やしながら走り、倒れて行った。だが、戦場での日常は、それで終わらない。

辻堂演習場の戦車操縦講習は苛烈を極めた。平地での操縦は館山砲術学校でのトラックによる模擬講習とそう変わらなかったので、２～３時間で戦車はほぼ自在に動かせるようになった。だが覗視窓だけでの操縦は、そうはいかなかった。激しい振動と操縦席の不自然な姿勢、騒音が操縦士を盲目にした。そのための箱眼鏡での訓練は、役に立たなかった。だがここに、プリズムを使った潜望鏡が出てきた。といっても、それを使って視野を確保するのは車長で、操縦士ではない。車長は極めて狭い視界ではあったが、このペリスコープを使って操縦士に指示を出した。だが、その声が聞こえない。すると車長は操縦士の背中に両足を乗せ、まるで自分がアクセルと操縦桿を扱うように自在に踏み込んで操縦の仕方を伝えた。操縦士はその足の具合に合わせて走らせる。右へ向かうなら右足を踏み込んでくる。それに合わせて操縦士はアクセルを踏み、右の操縦桿を引く。車長の声が聞こえる時は、射手も装填手も機敏に動かなければならない。特に操縦士の技量が問われるのが、戦車砲の射撃の際だ。車長に命令に、行進射、とあるか、跳躍射、停止射とあるかで、戦車の走行条件のあらゆる状況を一時に判断し、一番有利な地点で一時停止するか、一瞬止まって直ぐ走り出すか、などのことと、その次の措置を判断しておかなければならない。しかし一端点射することがあれば、通常２～３発の発射があると判断するのだが、単発で即座に発進しなければならないこともある。それが出来なければ、逆に自分が相手の餌食になる。また、操縦士と言えども、装填士、射手、銃士、時には車長の役割を果たさなければならない事態も勃発する。

操縦士席は戦車の中で一番奥深い所に置かれていた。それだけ重要であるから、防御されたところに囲われていると言えばその通りだ。しかし、一端被弾したり爆撃されると、脱出は一番困難でもあった。だから殆ど命を戦車と共にすることになるのは操縦士だった。

訓練の最中、視察窓を開けて操縦していると、車長が堆土と叫んだ。大きく盛り上がった土手が眼前に現れた。前へ！と車長が号令する。急ぎ、ギアをロウに落とし、中速で土手に向かう。砲塔が後方に向け直された。相当な角度の法面であった。土手の手前で中速から強くアクセルを踏み、速度を上げる。履帯が土手面にかかり、戦車の車体が上向き始める。履帯が地面を噛み、滑っていないことを体に感じつつアクセルを一杯に踏む。大きく持ち上がってゆく車体を更に前へ押し出すと、不意に前方が軽くなるのを感じる。堆土の頂点を車体が通過しているのだ。操縦席からの狭い視界では土手の先がどう下がっているか解らないが、車体の中ほどが頂点を通ると、車体の前方は宙に浮く。その時、頂点の向こう側がどれほどの谷になっているかを見極めなければならない。谷が深く、下り斜面の角度が急峻であれば、戦車の車体前方は激しく下り斜面に叩きつけられ、大きく損傷することもある。また谷が深ければ、下がりきってから登ってこれないことも出現する。最悪はいかに砲塔を回し、砲身を後方に向けてあっても車体の重心が不安定になり、亀の甲をひっくり返したように前転さえしかねない。私は一瞬覗窓に目をぶつけるようにして、前面の視界を見えるだけ見ようとした。スリットの前で顔を動かし、可能な範囲すべてを見る。斜面は登りと同等なぐらいの角度で、距離は短い。下がりきった向こうに谷はなく、下がりきってもう一度登らなければならないなんてことはなさそうだ。その間にも車体は前に動いており、私は堆度の頂点でブレーキを踏み、スピードをゼロにする。それでも車体は前方に傾き始め、下がってゆく。その方が順調なのだ。ゆっくりと下がらず、車体が後退するなどと言うことになれば、登坂をやり直さなければならなくなって、さらに難しい操作をしなければならない。そして、これが戦場であれば、恰好の餌食にされる状況を自分で作り出してしまうことになる。今回のようにうまく乗り越えられそうであっても、車体は強く下り斜面に叩きつけられ、履帯と誘導輪が悲鳴を上げる。それでも無事着地すれば、後は低速で下るのみだ。だが、谷であれば、こうはいかない。下り坂の始まりの角面を車体が越え始めると、やはり車体前方は宙に浮く。砲身を後方に回してあることによって、重心が後方にあるので余計だ。スピードを落とし、ゆっくりと前進すると、車体が下がり始め、下り斜面に接地する。そのとき、地面が緩ければ、戦車はズルズルと滑って谷底に落ち、そこから反転して登りきるのに、相当エンジンを吹かさなければならなくなる。それでも掻きついてくれればいいが、履帯が滑れば蟻地獄だ。あとはバックするしかない。バックであれば、車体下の履帯が前面より長くあるので、登る確率は高かった。だがそれでも危険は増大する。こちらは動きもできず、砲も撃てず、ドンガメそのものだ。それでも地上戦では歩兵を連れて、戦線の一番前を行かねばならない。

砲塔銃
一時の方向
堆土の右五十の機関銃
行進射
撃て

と号令が掛かった。行進射であるから、操縦士はスピードを変えない。遮音耳被いを掛け、覗窓から前方の障害物を確かめながら行進してゆく。

　速度伸ばせ

スピードを上げる。砲塔銃が短連続に発射されている。

　射撃用意

の号令がかかる。戦車砲の用意をしている。

　弾薬を込め

そのあと、

　戦車砲、二時の方向

　前方右三十の機関銃

　跳躍射

　撃て

この号令の後、射手が

　宜し

と操縦士に返してきた。覗窓から前方の地形を判断する。先にわずかな平坦地があった。あとは一瞬の呼吸だ。ポンとブレーキを踏み、宜しと返す。標準を合わせてあった砲が発射される。同時にアクセルを全開にする。それでも唸りを上げるエンジンのわりにスピードは緩慢にしか上がらない。

　戦車砲、射撃用意

　前方 家屋右、五十

　行進射

　弾薬込め

砲塔の中で薬莢の熱気がこもる。

　宜し

再度、スピードを標準速度から緩める。途端、

　撃て

と号令がかかり、車体が揺れる。すぐにスピードを上げる。戦車の講習はこの繰り返しだ。だが、渡河行進は一番の難関だった。河原の石はまだ走れる。少々の岩など踏み越えて行ける。だが最も怖いのが、並行して走っている味方の戦車の跳ね上げる小ぶりの岩だ。これが履帯の内側にはさむと履帯が切れたり、履帯が外れたりする。フィリピンの山中、斬り込み帯が募られた。斬り込み隊は下士官と兵が４～６名ということになっていた。その中に私もくみこまれてしまった。それゆえ、私も死を決した。しかし、どこかで生きて帰ってやるとも思っていた。そのためには何かしらの戦火を上げねばならない。そして、その生還が許されるための戦火を上げることが出来なければ敵前逃亡を疑われて、軍法会議にもかけられずに銃殺される。

フィリピンの市街戦に敗北し、敗走して峠に陣地を構えた時、私には乗るべき戦車がなかった。そこで、私の任務は奥の密林の中に備えられた兵站地から兵糧と弾薬その他を、戦闘を避けながら各陣地にトラックで運ぶことに変えられた。このことは当初から予想されたことであったらしく、大発で海岸線に上陸した時から、物資の輸送に専従した。民間から徴収した輸送船三隻で運ばれてきた兵員と物資を大発で運んだ。この日のために、フィリピンまでの40日間、大発動艇にディーゼルエンジンを取り付け、起動出来るように確認する訓練をしてきた。そして、上陸のために大発を操縦するのも私たち戦車操縦士の役割だった。まずトラックを一台、クレーンで降ろし、その後兵を乗せる。そして一気に海岸まで走らせ、前方の船体甲板を降ろし、すぐに物資と将兵を上陸させ、また船に戻るピストン輸送をこなした。トラック約１９０台、野戦砲数十門、弾薬、兵糧と言ったものを、大発が横並びで運んだ。私の乗ってきた船の上陸作業がほぼ終わろうとしていた時、遅れてきた最後の船が見えた。船は灯火を消し、暗闇の中をこちらに向かってくる。雲の切れ間の月明かりにその船体が見えた時、右舷に水柱が立ち、一瞬遅れて爆発音が聞こえた。魚雷が命中したのだ。それと気付いて大隊長を見ると、

＊＊丸の物資の揚陸に全力をあげよ

と号令があった。魚雷二本を受けて沈む船は見殺しにされた。

我々の上陸が終わった二日後、沖に米艦隊がずらりと並んだ。私たち輸送兵員は、それまで夜も日もなかった。海岸からわずか離れたところに置かれた物資を、さらに奥地に輸送し続けていた。私の乗っていたシボレーのトラックは馬力も強く、積載量も多かった。それを駆って密林の道を奥に走る。兵がその横を行軍してゆく。

海軍さんはいいよなあ。ああやって、トラックに乗って走れるんだから。

腕の特技章が物を言うんだよ。

そんな声が聞こえた。私はそれどころではなかった。激しく揺れる座席で、目まいさえしていた。そうやって運んでも、物資は陸揚げされた量の半分も運べなかった。その日から、艦砲射撃が始まった。

何台か陸揚げした、私の乗るはずだった８５式軽戦車は、その艦砲射撃で吹き飛んだ。もうトラックの搬送どころではなくなった。砲弾の落ちないところはないと思うほど、弾は打ち込まれた。海岸線から奥は、姿かたちが変わった。そして、我が方の物資の積まれたところには早々に着弾し、すべて吹き飛んだ。誘発した弾薬による爆発はすさまじかった。この乗るべき戦車が無くなったことで、私は生き延びたのかもしれなかった。そして、敗走に敗走を重ね、武器と言えば小銃に付けた銃剣と一人２～３個の手りゅう弾しかなくなった時、こちらに残された戦い方は切り込みしかなかった。その切り込み隊に選ばれた時、私は何としても生きて帰ってやると思っていた。

薄闇の中、新米中尉は頭に巻いた鉢巻が目立って危険だった。

中尉殿、

と呼びかけた。相手は陸軍中尉だからだ。

　　その鉢巻は夜目に目立ちます。外してください。お願いします。
そういうと、中尉はキッと私を睨んだが、納得したのか、それをを外そうとした。だが、手が震えているのか、結び目が解けない。
　　だめだ、兵長、悪いが外してくれ。
と私に頼んできた。顔色も土気色をしている。私が黙って鉢巻を解いてはずすと、
　　兵長、貴様は腹が据わっているのか、、随分落ち着いているようだ、済まないが、私に代わって指揮を執ってくれ。
と言い出した。私には腹案があった。
　　中尉殿、鴨がきます。
と言った。私は、山を登ってくる戦車を見ていた。

峠を越えてくる一台の戦車は、歩兵を随伴させているようになかった。薄暮から更に闇を増してくる中、陣地に向かって急いでいるのだとわかった。

中尉殿、歩兵を連れていない戦車は、飛車角落ちの王将が一人で敵陣に突っ込んでくるのと一緒です。あれを撃破しましょう。

戦車だぞ、そんなことが出来るはずがない。
と中尉は尻込みした。

大丈夫です。私は陸戦隊の戦車操縦士です。戦車の弱点は知り尽くしています。あれを屠れば、生きて帰っても咎められたりはしないでしょう。みんな、生きて帰るぞ。
そういうと、私は他の４人にそれぞれの配置と役割を伝えた。戦車の登ってくる道の傍の岩の下に、背嚢に入れて持ってきた爆薬を埋めた。それの発火紐に長い紐を繋いで、戦車が横をとおったら紐を引けと教えた。さらにもう１名には、それとは反対側に潜ませて爆薬が爆発してもしなくても、丸太を履帯と後方の誘導輪の間に突っ込めと言っておいた。私は砲塔に身を乗り出している戦車長を小銃で撃つ。他の二人には、動きの止まった戦車の後方から砲塔めがけて手榴弾を投げる役割を振った。中尉には操縦士の視察窓を乱射してくださいと頼んでおいた。

この戦闘は運がよかった。大体、歩兵を連れない戦車に出会うこと自体、幸運だったのだ。歩兵は戦車を随伴させて行きたがるが、戦車に乗ろうなんて思わない。戦車は動くトーチカだが、動く棺桶でもある。動かなくなったら、只の棺桶だということを歩兵は知っている。

戦車は轟々と音を立てて登ってくる。夜襲などあるはずがないと思い込んでいるようだ。私は灌木の中から伏せ撃ちに銃を構え、出来るだけひきつけた。ここで死ぬか、後で死ぬか、どうせ一緒だと思った。照準が合った。一息を入れ、静かに息を吐きながらそっと引き金を、まさに引いた。軽い音がして、肩に銃床が応えた。私の手が焦った。遊底柄を引き、もう一発撃とうと構え、その照準器の先に弾かれたようにのけぞる戦車長を見た。私の指はその倒れた体に向かってもう一発、撃っていた。

爆薬、引けえ。
と怒鳴った。爆発しない。

死にたいのか、引けえ。
ともう一度怒鳴った。ドンと腹に響く爆発音がした。地雷代わりの、岩の下の爆薬が爆発した。同時に吹き飛んだ岩が戦車のどこかにあたったのだろう、戦車がみじろいだ。

丸太だ！
のわたしの声の前に、戦車の前の機銃が狂ったように吠えだした。銃弾の飛ぶ火線が戦車の前方を扇型に広がる。見ると、操縦席の視察窓は閉じられていた。エンジンの咆哮が轟いた。

丸太だ！
と叫んだ。だがその前に、戦車は急速に左に回り出した。見ると爆薬の仕掛けた側の履帯が回っていなかった。誤算だった。方向を変えられると、後ろから手榴弾を投げかけられない。だが、まだ天蓋に乗っている戦車長の遺体はそのままだ。私は戦車砲が横を向いたのを確認して戦車の

脇腹に肉薄した。戦車操典にある、肉薄戦の要領だ。戦車砲の向こうにある同軸機銃はもう私を撃てない。砲塔の銃眼からの射撃の可能性はあったが、後方ハッチをめがけて走った。その時、丸太が動いている履帯に突っ込まれた。戦車が唸りをあげたまま止まった。機銃が火を噴き続けている。横から戦車に取りつき、死体の脇から手榴弾を投げ込んで飛び降り、逃げるに逃げた。悲鳴が聞こえたように思った。その途端爆発があって、更に天蓋から火が噴いた。

途端に身を隠していた私の上方の幹に、銃弾が突き刺さった。歩兵だ。戦車に遅れた歩兵が、居所のわかっている私を一斉射撃しだした。軽い発射音が連続して響いた。幹の後ろへ這いずって逃げる。炎に１０人ほどの人数が散開して迫って来ているのが見えた。すると、今まで出番がなくて、後方に伏せていただけの兵が手榴弾を投げた。いかに人数が多くとも、挟み撃ちにあえばもろいものだ。爆発とともに数人が吹き飛んだ。同時に私と中尉が手榴弾を投げた。これもほぼ同時に爆発し、残った兵を吹き飛ばした。だが数発の射撃音が続いていた。銃口からの硝煙で、まだ数人が生き残っているとわかる。だがそれは動かない。動けないのであれば、負傷している可能性が高いと判断した。私は眼前の木に登った。ほんの二三度手を伸ばしただけで、戦車の全貌と、米兵の散開している様子を上からみられた。銃口が火を噴いているのは二カ所だった。

中尉殿、敵兵の生存者は二名。

よし。

ここから狙撃します。

頼む。

そう言っている先に、もう照準は合わせてあった。引き金を引く。一カ所の発砲が止まった。すると、もう一カ所の兵が武器を捨て、手をあげて立ち上がった。降伏の意思表示だと思った。

手をあげています。どうしますか。

容赦するな。撃て！

そう言われたが、ためらわれた。

どうした、撃て！

と怒号が飛んできた。しかし撃てなかった。すると、中尉が拳銃を構えて敵兵の前に進んだ。敵兵の眼前に構えられた中尉の拳銃が火を噴いた。敵兵は手を挙げたまま、後方に倒れた。私に言葉はなかった。

中尉殿、早く引き上げましょう。敵の救援が来ます。

そう言いながら、私はその場に転がっている自動小銃２丁、敵の指揮者らしい死体の横の短機関銃、兵の雑嚢、その他目に付くものを拾い集めた。

皆も拾えるだけ拾って持って帰れ。

そういいながら、私は指揮者の腰から自動拳銃を抜き、腹にねじ込んだ。

いそげ！

そういうと、

中尉殿、帰隊しましょう。

と振り返った。中尉は声もなく震えて、拳銃を握った指を一本づつ懸命に伸ばしていた。声が漏

れていた。おめき声が絞るようにもれていた。

　　兵長、俺は初めて人を殺した。

　　私も初めて人を撃ちました。

ひ弱なインテリ中尉の神経は、穂のように震えた。死が日常だった。他人の死も自分の死も、そこにあった。

　そのような夜襲が功を奏したのも、この戦いが始まったばかりで、切り込み隊の夜襲を米軍が経験してなかったからだ。後にはどんな陣地でも、鉄条網がすぐに張り巡らされ、サーチライトが終夜煌々と照らされるようになった。

　だが、それは後の話だ。私たちはひたすら逃げた。密林であればより深い所を選び、崖を越え、迂回して川を渡ってやっと帰隊した。

　貴様らあ、生きて帰ってくるとはなにごとだあ！
が我々の聞いた、大隊長の第一声だった。

　報告します。峠にて、戦車一台と歩兵２０名の一個小隊に遭遇、我々はこれを、戦車大破、敵歩兵を撃滅することに成功致しました。
中尉がそう報告すると、

　なにい、戦車を大破させた？特攻もせずにそんなことが出来たのか。
というので、私が進み出て、

　自分は海軍陸戦隊の戦車操縦士でありますから、戦車との戦い方は一番心得ております。
そういい、背中の短機関銃と自動小銃２丁、雑嚢から取り出しておいた携行食、とりわけラッキーストライクを他の物の上に載せて大隊長の前に差し出した。

　戦利品であります！
他の者も続々と戦利品を差し出した。それを見ながら、

　そうか、貴様は海軍の戦車操縦士だったなあ。
と言う声に怒気が失せていた。

　武器と携行食その他を置いて大隊長の前を下がろうとすると、私だけが止められた。そして戦車と遭遇した時のことを詳しく報告させられた。それが後に　戦車狩り隊　を作ることに繋がった。兵５～６名で隊を編成して、戦術は私がとっさに考えた配置を基本にし、前後左右２名ずつを配って、まず両側方から攻撃する。長い竹筒の先に爆薬を詰めたものを履帯に突っ込み、爆破を図るのだ。同時に視察窓に集中射撃を浴びせ、出来ればこれでもって戦車を止める。同時に戦車後方の、エンジンの吸気口を狙って手榴弾を爆発させる。上手く行けばこれだけで、ガソリンエンジンでもディーゼルエンジンでも焼失炎上させることが出来る。戦車長が身を乗り出していれば、これを一番に攻撃、射殺する。それに失敗しても固く締められたハッチをバール等でこじ開け、手榴弾を放り込む。それが適わなければ、戦車砲の砲口に手榴弾を投げ込む。そんな作戦で攻撃を組み立てた。これは、私が進言した、戦車の死角を突くやり方だ。歩兵が付いていれば、戦闘は激烈なものになる。しかし、私はもう二度と切り込み隊には選ばれなかった。私が海軍であると、はっきり解ったからだと思った。

　辻堂演習場での講習はほぼ終わり、戦車操縦の免許試験も無事突破することができた。ここまでくると、さすがに免許試験で不合格になるものはほとんどいなかった。だが、合格発表の日、事前に居なくなっていたものが数名いたのは事実だ。私たちは、その者たちの事をあえて話題にしなかった。受かった者だって、それでいい方向に運命が転ぶわけじゃないことなど解っていた

からだ。もう戦局は、個々の名誉不名誉などに関わりなくなっていた。
　戦車学校の講習の終わりに、辻堂演習場で横須賀鎮守府と横須賀兵学校全体の合同演習が行われた。これに参加する兵は、横須賀からの臨時列車でやってくる。そして、武器も戦車も全て実戦通りに動員し、空砲ではあったが山野砲から戦車砲も実際に発砲して、紅白に分かれて攻めあった。演習は三日間に及び、私たち兵は野に伏せ、土砂にまみれて戦った。指揮官は、
　いいか、これが本物だと思うな。実戦はもっとつらいぞ。ここで精いっぱい喘いでおけ。一人一殺で終わるな。相手を敵と思って一人で十人を倒せ。
と命令した。
　野砲が放たれ、戦車が先頭を行く。斥候が戦場を観察し、その報告をもって、遭遇戦を戦い、攻め込んでゆく。三日目に最後の突撃を敢行 し、銃剣を付けた歩兵銃を、敵味方で会わせて演習は終わる。だがそれで終わりではない。最後に全員が装備を身に付け、辻堂から鎌倉を経て横須賀まで一気に駆け通すのだ。脱落は許されない。ほぼ丸一日をかけて、江の島から鎌倉、途中休憩所で握り飯を頬張り、水を流し込んで、また走る。もう足ももつれ、転倒するものが続出した。すると背負っていた背嚢こそ伴走車に乗せてくれるが、走らなければならないことには変わりがない。倒れればビンタと注心棒が待っていた。

作戦名は捷一号作戦である。捷号作戦は四号まであり、実際には比島での作戦のみで、あとは発動されることはなく、天号作戦として再編成された。だが、こんなことは後に知ったことで、実際戦っているときはどんな作戦意図のもとで戦っているのか、わからなかった。

私たちは辻堂の合同演習を終えると、海外に派兵されることとなった。出発地はこの横須賀であった。それゆえ、親にも会えるとは思わなかった。貧しくて、ここまでくる旅費も宿賃もあるはずがなかったからだ。私は叔父に遺髪を預けておいて良かったと思った。帰れるはずのない旅立ちである。そう思って、写真を親に送った。一枚は陸戦隊の背広服型の制服、もう一枚はトラックの前で事業服に略帽をかぶった姿を写したものだ。しかし、背景には何も写っていない。そこに富士山が写っていれば、それだけで場所が特定される。それゆえ、私のようなものの写真でさえ、軍の機密だった。

学校の講習が終わって、私は上等兵に上がった。背広式の襟に、真新しい階級章が付いた。腕には特技章が上下に二個付いた。それでも新兵は新兵だ。寄宿する兵舎こそ横須賀海兵団に移りはしたが、毎日の訓練はあまり変わる所がなかった。ただ、少し指導的な立場にはなった。それゆえか、修正　と称する制裁はあまり受けなくなった。また、私も、階級の下の者にビンタしたりはしなかった。そんな中、近隣の兵団から兵が集まってきた。外地に出征する日が近づいていたのを感じた。そして、その日が一週間前となった日、私に面会者があると、立哨に立っていたものが言ってきた。

佐伯上等兵、面会であります。
一等兵が敬礼をしながら、告げてくれた。

面会室に行くと、叔父と弟であった。もう一年近く会っていなかった。

あにやん、写真、おかやんが喜んでたよ。毎日、仏壇の前に飾って、拝んどる。無事でありますように、そればっかり。

そうか、ありがとな。
会話は途切れた。言葉が押し寄せて、のどに詰まって吐き出せなかった。

頼む、たのむ。
それだけを繰り返した。

お前は佐伯の家に残された、たった一人男なんやから、たのむ、頼む。

おかやんが、あんにゃの仕送りを、いつも押し頂いとった。だいじょぶだ、おれも一生懸命働く。姉やんたちも頑張っとる。心配せんでええ。
そういう弟の横で、すこし年を寄せた叔父が、視線を横に外した。その顔が死んだ親父そっくりで、最後に親父が会いに来てくれた、と思った。そして、叔父が顔を近づけ、

フィリピンだろ？死ぬなよ、必ず生きて帰れ。
と小声で言った。叔父は解ってるんだと思った。なにかを尚言いたくとも、言葉はもう出てこなかった。非国民でもいい、私は叔父の囁く声に頷いた。

一週間後、私は輸送船に乗った。あと各港を回り、兵も船も数を増やし、輸送船は５隻にな

ったが、護衛は駆逐艦一隻だけだった。本土を離れると台湾に立ち寄り、なおシンガポールを経て航行は続いた。

目的地まで四十日余りの航行だった。横須賀を出ると呉に回り、更に下関で上海から陸軍の兵員を乗せた輸送船団と合流し、総勢五隻の輸送船団となってフィリピンに向かった。私はその間、乗船していた船の機関室に配属され、一日そこでエンジンの調整とかオイルの補充に駆け回っていた。呉を出たあたりで交代になって自分の寝台に戻り、休もうとしていると、佐伯さんと声を掛けられた。私はその声を掛けてきた者が誰だったか、一瞬解らなかった。声を掛けてきた兵は私の襟元を見て、

失礼しました、佐伯上等兵殿

と、海軍では言い習わさない言い方で私を呼び、小さく敬礼した。彼は新兵教育の期間一緒だった今西一等兵だった。たとえ新兵教育の期間を共にしたとはいっても、一つ釜の飯を食った仲などと言ってはいられないほどの過密な訓練と緊張の期間であったから、誰かと親しくなるなんて余裕はなかったのだが、彼とは時折言葉を交わしていた。それと言うのも、彼が吊床訓練の時、吊床の金の輪を頭に当て、相当な出血をしたことがあった。ところがその翌日、教育係が、お前らのようなたるみきった奴らは見たことがない、もう俺の手で海軍魂を叩き込むのは無駄だ、お互い、向かい合って頬を張れ、俺が良いというまでお互いに海軍魂を注入しろ、と竹刀を振り回して命じてきた。やれ！そういわれて、私の前に立ったのが今西だった。彼の頭には包帯が巻かれている。上等兵どの、今西も同じでありますか、と私が訪ねると、少々怪我をしたからと言って、戦地じゃそんなこと言ってられん、お前が遠慮すると倍にして俺がお前に海軍魂を注入してやるぞ、とわめいた。そして、一、二、と数えるように号令をかけだした。一で私の頬が鳴った。二で今西の頬を叩いた。私は手のひらを当てないで、指先だけを当てた。指先はしなって、派手に頬が鳴るが、打撃そのものは軽くなる。手加減という奴だ。また、今西もどこでそんな小技を覚えたのか、当たる瞬間、首を振る。すると力が逃げて、ダメージは少なくて済む。それに、首を振れば見かけは強くたたかれたように見える。だがそれも十を数える頃には、頭の包帯が崩れ、外れてしまった。すると、耳の上の傷からまた出血が始まり、私の手も濡らした。

上等兵どの、今西が再出血しました。

そう言っていいほど、血が飛び散る。すると、教務上等兵が慌てたのが解った。このころになると、出血を見るほど修正を、つまりビンタ等を加えたりしてはいけないという通達が海軍省から来ていたのだ。今西の出血は顔半分を濡らした。

佐伯、お前が今西を医務室に連れて行け。今日はこれで終わりだ。

そういうと教務上等兵はそそくさと出て行った。このことがきっかけで、私たちはお互いを語り合った。いま、この船に乗り合わせて、同じ戦地へ赴くことになろうとは思わなかった。そして、彼とは付かず離れず、終戦の時まで縁があった。この人のいい男を私は見捨てたのだ。

今西上等機関兵も船のどこかで、その任務を果たしていた。陸軍の兵も乗り合わせているのだが、やはり甲板でそれなりの訓練をしてはいるのだが、並列行進が出来るわけだもなく、どことなく手持無沙汰に見えた。その横で海軍のも酔わなかった者がのが動き回っていて、彼らの事を、

お客さんだよ、おきゃくさん。

と呼んでいた。そのお客さんもそうだったが、海軍と言っても外洋に出た途端、激しい船酔いに悩まされるものが続出した。日本近海の小さなローリングの揺れには海軍はほとんどが酔わなかった。だが外洋の大きなうねりの、高い所から低い所へふわあっと落ちてゆく感覚には、海軍と言えども耐えられない者が続出し、あちこち寝っ転がって動けなくなっていた。

それにも平気な私を見て、機関長が、

お前は元船乗りか？

とさえ言った。

違います。四国の山猿であります。しかし、吉野川の筏流しもやっておりました。

と答えると、ああっと納得したような顔をした。

一応、機関室の作業一般に慣れると、機関長は私に、大発にエンジンを乗せる作業訓練を課した。甲板上の大発には、航行中はエンジンが乗っておらず、上陸寸前にこれを乗せるのだ。艇の横にエンジンを運び、ウインチでこれを巻き上げ、所定の位置に降ろす。これをボルトで組み付け、更にスクリューシャフトを止めつける。舵一切も組み立て、海面に降ろすまでの作業をできるだけ短時間に行わなければならない。私はこれを何度も繰り返して叩き込まれた。わたしと機関長他２名が、この大発による物資および兵員輸送を担うわけだ。その際、ヒラ兵士では命令を聞かせられないからと、私は兵長に昇進することになった。だがこの後、階級などどうでもいい混乱が待っていた。

フィリピンに近づくにつれ、船団はまるで息をひそめるように灯火も消し、島影に隠れては進発を繰り返した。しかし周りに敵艦は見えず、攻撃されることはなかった。だが一番警戒したのは潜水艦だった。艦は常に監視を怠らなかったが、遠い潜望鏡が発見できるとは思えなかった。事実アメリカの潜水艦はわれわれの艦を見張っていたのだ。味方の艦と艦の距離を離して航行していた我々に向かって、フィリピンの＊＊湾目前で魚雷が二本向かってきた。私の乗る艦からも、監視兵の魚雷と言う叫びで月夜の海を見ると、金色に砕け散る波間にその航跡が見えた。すると、私たちに乗った艦はエンジンが咆哮をあげ、全力で湾内に向かって前進をはじめた。潜水艦に対する攻撃手段をもたない輸送船はただ逃げるしかなかったのだ。船団の先頭だった私の乗った艦が湾の入り口に差し掛かった時、魚雷に狙われた輸送船が火を噴いた。その後ろに駆逐艦が見える。駆逐艦はジグザグ運動を繰り返しながら突進し、ある海域に来ると爆雷を投下し始めた。その水柱が列をなして海面にそそり立つ。魚雷にやられた輸送船が早くも沈み始めた。しかし残った二隻の輸送船は救助には向かわなかった。行けば自分たちがやられる、そうすれば任務を全うできないというのが、指揮官たちの判断だった。

そんなことを考える暇はなかった。大発による輸送が待っていた。私たちは準備を終えた大発を海面におろし、混乱のさなか、最重要の物から物資を乗せ、海岸に向かって全速力で走らせた。切っ先が海岸の砂をかむと、甲板おろせと号令し、同乗してきた兵たちに物資を降ろさせる。そしてまた艦に引き返し、物資と兵を乗せ、海岸へ突進する。あとから来た輸送船も同じ作業にかかっている。艦に戻ると、主計兵が積み込む物資を支持する。クレーンが荷物を降ろしてきて、大発に乗せる。その荷物に掴まって降りてきた兵たちがロープを外し、次の荷物が乗ってくる。大発のエンジンは掛かりっぱなしだ。大発を操縦している機関長が、出発と号令する。エンジンは悲鳴のように唸り出し、切っ先で波を切って走り出す。沖の潜水艦と駆逐艦のことなど忘れていた。夜が白み始めた時、陸揚げは終わった。輸送船は
大発を回収せず、沖に向かって帰っていった。軍属の機関長は私に敬礼すると、帰って来いよと小声で言い置いて行った。

海岸からそう遠くないところに一時置き場を構え、 夜を徹して船から物資を運びあげた。兵たちも海岸に達すると、物資の見下ろしに加わった。大発から荷を担いでゆく様はまるで蟻の行進だ。だがそれによって、物資と兵の搬送は二日半で終わった。その間に、海岸より少し離れた丘に監視塔が作られ、常に海上を見張った。米軍は敗残兵であると、指揮官たちは意気揚々に言ってのけていた。＊＊沖の海戦で日本軍が赫々たる戦果を挙げたと思い込んでいたからだ。敗残兵なら戦意は衰え、武器装備も満足に備えていないはずであるから、何としても守らねばならないフィリピンであっても、かくもやすやすと上陸占拠出来たのだと豪語して憚らなかった。我々が上陸して十日後、そんな思い込みは打ち砕かれた。日本軍の司令本部を市街地郊外に設け、海岸近くの一時置き場から更に奥へ物資を運び続けていた時、沖に米軍艦船が並んだ。その数およそ一七〇隻。朝日が上がり、太陽光が斜めにさす時刻を選んで艦載砲の口火は切られた。さまざまな砲撃が一斉に始まった。始めは着弾点を観測するための白煙があちこちに上がった。それを上空で待ち受けていた　赤とんぼ　が確認する。もはや制空権のない日本軍に、観測機を撃ち落す力はない。だが次第に着弾点が正確になってきた。すると、誰かが水にぬらしたドンゴロスを持って、壕から走り出た。いままさに着弾して白煙を吹きあげようとしているのに、そのドンゴロスをかぶせた。その間中も砲撃は続いているのだが、それをものともせずと言えば勇ましい。だが、そんな無謀なことを強いられても、そうしろと命令されれば兵は飛び出さなければならないのだ。

対空砲火もできない軍がそんな防御策を演じている間も、砲撃はさらに激しくなった。私はそんな中、一回でも多く物資を輸送しようと車を走らせた。だがもともと酷使されていたトラックだ、積載制限を無視して過積載し、激しい凸凹を猛スピードで走らせた結果、集積地に後少しと言うところで何かがボンと音を立てた。慌ててブレーキを踏むのだが、スカッと抜けてしまう。スピードは落ちるどころか、どんどん増してゆく。と、車の底で何かが引っかかり、車体が激しく揺れた。車は勝手に右に曲がり、ジャングルの灌木に突っ込んで止まった。車を降りて調べてみると、後輪のドライブシャフトが折れて垂れ下がり、それが地面に引っかかって減速し、やっと止まることが出来たのだ。だが、わが身の無事を振り返っている暇はない。荷台に上がって物資を下に投げ下ろす。同乗していた助手を集積地に走らせ、荷物を運ぶための援軍を呼ばせた。その間も私は荷物を投げ下ろし続けた。そして、手助けに来た兵たちにそれを運ばせ、私は今まで乗っていたトラックに爆薬を仕掛けた。そんなことをしなくても艦砲射撃でいずれ破壊されるとは思うが、これが決まりだ。私は車に頭を下げ、爆薬に火を点けた。そのあと、走って逃げる私の背中で、車は爆発炎上した。私はこの後、＊＊市街戦で乗った８９式中戦車でも同じことをしなければならなかった。

結局、船から海岸線に運び上げた兵糧等は艦砲射撃で失ってしまった。そして輸送班であった私もトラックを失い、主計局から言われるまま物資の見張りをすることになった。だがそのころ、司令部では陸軍と海軍が激しく対立し、海軍は港を死守、陸軍は＊＊市を守るが様子を見てすぐに撤退し、＊＊峠で米軍を叩くということを主張し合ってゆずらず、結局それぞれの主張通りに作戦を決行することになった。我々海軍陸戦隊および特別陸戦隊は、上陸した海岸線から少し離れた港とその周辺に展開して米軍を待った。私はもともとフィリピンにあった戦車に乗ることになり、歩兵１０人と市街地の最前線に待機した。港に侵入してくるであろう道路は兵が伏せられ、機銃および榴弾砲、野砲が配された。だが我が方が想定した戦闘など、米軍からの艦砲射撃で吹き飛ばされた。米軍は港など欲しがってはいなかった。ましてここには民間人は殆どおらず、後の＊＊市の市街戦の際の民間人を巻き添えにすることに配慮した攻撃とは全く違っていた。砲撃の第一陣こそさほどではなかったものの、着弾を確かめると約４時間の砲撃が行われ、港に突き出た岸壁と建物すべてが破壊された。我々は逃げ惑うしかなかった。私の乗った戦車は一時後退して林の影に隠れて息をひそめた。運よくその林には砲弾が散発的にしか飛んでこず、歩兵と戦車は無傷ですんだ。

米軍はまず道路の方から侵入してき始めた。それに向かって野砲が放たれた。すると、その野砲に向かって船から砲撃がなされる。それにはひとたまりもなかった。こちらの野砲は沈黙してしまった。と同時に、海から上陸用舟艇が何十杯も並んで港を目指してやってくる。その先頭を小型艦が何隻か先導してやってくる。小型艦から砲撃が始まり、上陸用舟艇はその後ろからついてくる。まるで海が埋め尽くされたようだ。すると偵察機が頭上を飛んだ。見られた、と思う間もなく、戦闘機から爆弾が私たちにではなく、１キロ先に投下された。そしてまた戦闘機が頭上を飛ぶ。まさに物量作戦だ。戦車長は砲塔の天蓋を開け、林を回り込んで道路側の敵の側面を付くと説明した。声はしっかりしていたが、顔がこわばり、体もがちがちに固まっていた。フィリピンに着いてすぐに戦闘が始まったのだが、我々も初陣であったように、准尉もそうであるようだった。指揮命令が身についておらず、ちぐはぐな感じがした。だが命令は絶対である。私は操縦席につき、視察窓を開けてエンジンをかけた。その時、私は自分が妙に落ち着いていることに気が付いた。辻堂の指導教官が、実戦はこんなもんじゃないぞ、訓練で音をあげるような奴はここで死ね、と鉄拳をもって叩き込まれた訓練が、自然と手足を動かし、戦車を操縦させた。いいか、無駄死にしたくなかったら、いま死んでおけ、死ぬほど訓練をして体に覚え込ませろ、それが一騎当千の海軍魂だ。その言葉を今も思い出す。そうだ、無駄死にはしない、戦って勝って、生き続けてやると思った。狭い林の中で戦車を１８０度旋回させる。超新地信地旋回、と戦車長が命令する。左右の履帯を逆方向に回し、転身させる。微速前進、と命令が来て、ギアを前進一速にいれ、アクセルを踏む。歩兵が戦車の後方を付いてくる。戦車の前には、ここへ侵入してきた道が続く。すると、戦車のエンジン音とは違うかすかな爆音がした。

前方２００に敵戦車、兵２０、主砲、用意。

兵は散開して銃撃戦に備えよ。微速前進。

この命令に、私は視察窓をふさいだ。そして前方の覗窓に目を凝らし、エンジン音を絞って前進させた。その狭い視界には樹木と戦車の通り抜けることのできるだけの道しか見えなかった。

機銃、射撃用意

そういうと車長も天蓋を閉めたらしい。

前方距離５０、主砲、うて。

私が記憶にあるのはここまでだ。あとはどうなったか解らない。車長の命通り戦車を動かし、砲手が戦車砲を放って、機銃が連射された。こちらも砲撃される。装甲版に銃弾が当たる音がする。私は出来るだけ頭を寝かせ、視察窓や覗窓から飛び込んでくるかもしれない銃弾を避けた。もう前なんか見ていない。車長の命令通り動かすだけだ。と、今まで聞いたこともない衝撃音がした。砲弾が誘導輪か履帯に命中したようだ。戦車の動きがおかしい。

右履帯不調、指示願います。

そういうと、後退は出来るかと問うてきた。できます、と言うと、後方の窪地まで後退、と指示が来た。そこまで動くか、と思ったが、何とか辿り着けた。

すると、その途端、砲弾が砲塔にあたった。だがそのあたった角度がよかったのか、貫通せず跳ねていった。こちらの戦車は窪地に入り込み、機銃と砲塔のみ上に出したトーチカになった。覗窓を見ると、向こうに敵戦車が見えた。砲塔から、撃て、と声が聞こえた。すると敵戦車の車体につながる砲塔下部に命中し、戦車が大きく揺れた。戦車の急所だ。そこにあたれば、砲塔内が破壊され、金属片がなかで飛び散って乗員は無事では済まない。案の定、戦車は後退を始めた。主砲は横を向いたままだ。

撃て

続いてまた、

撃て

と命令している。敵戦車が大きく揺れ、主砲が真横を向いた。どこに着弾したかはわからない。こちらの砲では、敵戦車の装甲板を貫通することはまず不可能だからだ。だが敵戦車は止まってしまった。そして、ゆっくりと砲塔が宙に浮き、火と白煙をあげて吹っ飛んだ。そのあげく、随伴兵もその爆発に巻き込まれ、横にとんだ。嵩にかかって、こちらの機銃が火を噴き、のこった歩兵を薙ぎ払った。それでもこちらの砲塔に銃弾が飛んでくる。だがもうこちらの勝利は決まっていた。むこうの銃撃が沈黙すると、こちらの兵たちが、

突撃

の命令で突進していった。この局地戦は勝った。

我々は動けなくなった戦車に爆薬を仕掛け、爆破した。あちらに米軍の戦車、こちらに日本軍の戦車と、二台が離れて並んでいた。

この＊＊港の防衛戦は３日もたなかった。我々海軍陸戦隊の孤立した闘いは始めから勝敗が決まっていた。３日目の日も未だ昇らぬころ、転身が始まった。音を立てず、密やかに退くよう命令されていた。陸軍が今闘っている＊＊市のはるか後方を回り、＊＊峠へ向かってゆくのだ。陸軍も早々にその峠に向かうことになっているらしい。陸軍司令部は、＊＊市の市街戦をそこそこで切り上げ、海軍が今向かっている＊＊峠で、米軍の進撃を食い止めるのを作戦の本丸と考えていた。陸軍に比べ、格段に兵力の少ない海軍陸戦隊は粛々と＊＊峠へ向かった。＊＊港での兵の損耗は案外少なかったようだ。それに各自が装備している武器弾薬も十分とはいえないがまだ戦える、押し返せると、神風が吹くという確信と同程度の思い込みで皆が信じていた。

案に相違して、陸軍の＊＊市の市街戦は１カ月も続いた。我々海軍が戦っていた＊＊港の局地戦が終結したあと、米軍は＊＊市に集中して攻撃を始めた。それでも初期の頃は、米軍の砲撃も＊＊市に取り残された市民を配慮して、ごく局所的に行われるだけだった。しかしフィリピン人ゲリラの通報からか、的確に兵の集結しているところや陣地を狙って砲弾は飛んできた。だがそれでは埒が明かないと解ったのか、各拠点に向かって砲撃は容赦なく行われるようになった。そこに市民がいようが居まいが、日本兵を殺せればいいいというやり方に変わってきたのだ。それゆえか、市街戦でアメリカ兵はガソリンを地下隧道に大量に流し込み、火を点けた。そんなところに日本兵はいない。そこに逃げて込んでいるのは＊＊市市民だけだ。だが、米兵にはそんなことは解らない。東洋人は皆同じ顔に見えると、捕虜収容所で話していた。そして火に追われて外に逃げ出してきたものを軽機関銃で容赦なく薙ぎ払った。まるで鼠狩りだった。下隧道に逃げ込んでいた市民は、火に包まれて踊るように逃げ出して射殺されるか、下水に頭を突っ込んで死ぬか、そんな事しか残されていなかった。後に、フィリピンでの戦犯裁判では、＊＊市民大虐殺はすべて日本兵の仕業にされてしまい、総司令官だった＊下大将は軍服も着せてもらえず、下着姿で銃殺された。

海軍と陸軍に意志疎通がないとはいえど、もうこうなってはそれどころではなくなってきた。陸軍の方から申し出でにより、一端は峠に陣を構えた海軍も＊＊市市街戦に加わった。私も再度トラックに乗り、各陣地を回って兵糧弾薬等を配送した。だが昨日あった陣へ今日行くと、どこに何があったかも解らないほど壊滅していることが多々あった。＊＊市市街戦は絶望の闘いだった。

米軍は＊＊市を三方から押し包んで攻めてきていた。海軍が先に陣を敷いた＊＊峠の方向だけ開けて、網を絞るように圧迫してきたのだ。完全に包囲すれば、逃げ場のない軍が死に物狂いで反撃することを知っているようだった。わが軍は日増しに後退し、戦死者も増え続けた。そんな中、米軍の奇妙な行動に気が付いた。昨日そこで激しい戦闘が行われ、当方だけでなく米兵にも多数の戦死者が出ていたはずなのに、遺体が放置されているのは日本兵だけなのだ。米軍は戦死した兵を全員つれて帰っていた。草生す屍は日本兵だけだった。

米軍と戦闘らしい戦闘を行えたのは、ここまでだった。米軍の物量作戦と圧倒的な火器、そして陸海空すべてを駆使しての攻撃は、我が軍をしだいに蹴散らしていった。それでも必死に抵

抗したのは、沖縄沖海戦での我が方完全勝利という誤報が、陸軍の判断を誤らせていたからだった。我が方に向かってくるのは士気もくじかれた敗残兵で、装備も不十分な軍であると思い込んでいた。だが現実を本土の参謀本部も知る所となって、現地からの救援要請に対して彼等がいってきたのは　自給自足、永久交戦　であった。兵だけを送り込み、物資兵糧、兵の補給を考えず、現地にすべて投げてよこしたのが、この自給自足永久交戦であった。我々は＊峠に敗走した。いや、転身したのだった。

＊＊峠の戦闘は、歩兵とわずかな火器を装備しているだけの当方には勝てるはずのない絶望の闘いを強いた。こちら側が戦闘準備で出来ることといえば塹壕をほるだけだった。日露戦争の２０３高地を見ても、戦闘は高い位置にいる方が有利ではある。だがそれだけの優位しか持たない我が方に、米軍はまたも山の形が変わるほど砲撃してきた。砲弾の唸りを聞くと身が縮んだ。着弾すれば炸薬により砲弾が破裂し、無残に死体が転がった。我々は皆、首を縮めて壕に隠れるしかなかった。だが、榴散弾を使われると壕に伏せていても空中で散弾が飛び散った。非日常が日常になった。銃を抱え、横を向くと、いま隣の兵が死んでいった。

動けなかった。逃げようと動いたからと言って、移動したところに着弾するかもしれない。ただひたすら、砲撃の終わるのを待つしかなかった。私は塹壕の中で横穴を掘った。縦に長く掘るのではなく、山の下の側の土壁を、体が隠れるほどの幅で掘って身を隠した。そんなことをしているのは私だけだった。そしてそんなことで身を守れるかと言うと、解らない。だが何もしないで、受け身だけでいたのでは死の側に転げ落ちる。自分で考え、行動するしかないと横穴を掘った。それを横で見ていた兵が、やはり同じように穴を掘り始めた。その横もその横もと、同じ壕に居た者は皆、横穴を掘った。銃剣がゆがんだ。頭の上を砲弾の唸りが通過する。そのうち、臼砲の砲弾が飛び始めた。上をみると、放物線を描いて砲弾がゆっくり落ちてくるのが見えて、それと解る。地上戦が始まる前兆だ。米兵が攻めてくる。そうっと横穴から出て、壕の淵から下を見た。砲撃音が聞こえた。野砲ではない、軽い音だ。私にはそれが戦車砲だと解った。米軍の砲撃が静まった間隙を突いて、怒号が聞こえた。

山麓に戦車来襲、＊＊一等兵以下三名、あれを止めてこい。
どうやって？誰がそんな命令をだしてるんだ？陸海軍の生き残りを集めた混成軍では指揮命令系統がはっきりしない。ましてや陸軍の指揮官など、顔も知らない。だが誰かが斬り込みを命じられていることは解った。何人か山を下ってゆく。と、肉眼でも峠の端に敵戦車が見えた。峠の道幅は狭く、戦車一台で精一杯だ、それに向かって這うように背を屈め、兵が峠を降りてゆく。米軍からの砲撃は、山頂の辺りに集中して行われている。下からくる大型戦車の後に、１４～５名の米軍兵が追従しているのも見えた。駄目だ、やられると思った。こちらからの援護射撃もない。米軍の戦車からの砲撃もない。突然、当方の機銃が発射され始めた。射程距離に入っているとは思えないのだが、一応援護のつもりなんだろう。すると、日本兵の姿が見えなくなった。峠道の上と下の崖に分かれて、姿を隠したのだ。戦車からこちらへ機銃が撃ち返される。その戦車の後にも戦車が連なり、それが一列でこちらに向かってくるようだ。砲塔が旋回した。二台の戦車の砲が白い煙硝を噴く。発射音が後からついてくる。機銃を発射し始めたあたりに着弾する。だが機銃は沈黙しない。続けて戦車から砲撃してくる。その間隔の短さは、こちらの戦車の比ではなかった。＊市市街戦でも、こちらが一発撃ち、次を撃とうとする間に、あちらは５発撃ってきた。装甲弾に貫通され、即座に火を噴く日本の戦車を何台も見た。私の場合は、装甲弾が斜めに当たり、水切りの石のように跳ねていったのだった。

日本兵が、崖の上から戦車の横へ滑り降りた。路面に降りるまでに、爆発があった。滑り落

ちてくる日本兵に向かって、米兵の軽機関銃が放たれ、背中の爆薬に当たったのだろう。と、道の下から物が２個、投げられた。それが、キャタピラーの横で爆発した。戦車が、ガクンと止まった。米兵が崖下に向かって銃を撃つ。止まった戦車の砲塔と操縦席から人が下りるのが見える。歩兵と戦車兵が前方および峠に向かって銃を乱射しながら、後続の戦車とともに後退してゆく。何名かの斬り込みで、一応急場を凌ぐことが出来たらしい。ところが、野砲、臼砲などの砲撃が度を増して再度始まった。

その米軍の弾幕に下で、何か途轍もなく大きな車体のものが上がってきた。前に土を押し削る鉄の金具を付けた重戦車のように見えた。それがいきなり動かなくなった自軍の戦車を後ろから押しはじめる。すると戦車はずるずると動き出し、簡単に谷底へ落とされた。今思えばブルドーザーであったわけだが、それが一端下がり、横の壁を削り出す。そしてあっという間に道幅を広げ、後続の戦車を通過させた。日本軍の工兵や輜重兵では一日がかりでもできないことを、米軍は１時間ほどでやってのけた。こちらは戦車一台に４名が命を捨てた。向こうは壊れた戦車を惜しげなく谷底に捨てる。勝てるはずもなかった。

すると、砲兵が前に出始めた。それまで沈黙していた野砲も、洞窟から引き出された。決戦だった。不意を突いて、野砲が火を噴く。敵戦車後方に着弾。こちらの砲が続いて火を噴く。敵戦車が後退しながら主砲を放つ。こちらの砲兵が前進し、さらに何門かの山砲、迫撃砲を放ち始める。曲射砲も麓の米兵に向かって放たれ始めた。はるか下まで砲弾が飛んだ。こちらが高い位置にいる事の優位性が米軍を圧倒した。これで速射砲があれば、敵戦車なぞ、簡単に屠ることが出来るのにとおもった。だが、今の私は３８式を一挺抱えているだけの歩兵に過ぎなかった。

半日は戦えた。だが、向こうの途轍もない弾幕に動けなかった我々は弾薬も付き始めた。私は壕の中を横に走り、さらに上に上がっていった。だが、それを咎める者はいない。私の軍服が袖に特技章を２つ付けた海軍のものであり、かつ兵長の階級章を付けていたからだ。私は＊峠の頂上に向かって這って行った。目的などなかった。生き延びたいとか、逃げようとかの意識もなかった。急に、より高い所に上がって、より遠くまで見渡してみたい、そん意識であった。超高音の短い唸りが耳元を過ぎる。それが断続音になって、土煙をあげる。機銃の弾丸が私を通り越して、前方の土にのめり込む。砲弾の飛ぶ音が聞こえる。私は振り返らなかった。前方に撃つ兵のいない機銃があった。その横に何名かが倒れている。その者たちを気遣っている暇はない。弾がまだあることを確認し、転がっているものを蹴落として引き金を引いた。はるか下に、おぞましい光景があった。火炎放射の炎が日本兵を焼いていた。戦車が壕を踏みつぶし、日本兵を生き埋めにしていた。私は、当たれえ、弾が当たれえ、と叫びながら機銃を掃射した。途端にこの銃座に、敵からの銃撃が集中してきた。私の放った銃弾が、敵まで届いたかどうか解らない。だが、照準器を修正し、なお撃ち続けた。その背後で誰かの声が、後退しろ、転身だと聞こえた。そして耳元で、海軍さん、転身だ、もうここに居ちゃ全滅だ、大隊長が転身を命令された、と大声で叫ばれた。機銃を握りしめた手が外れなくなっていた。それを指一本一本外してくれて、行くぞと、陸軍兵が言った。私は壕の中をほふく前進で進み、脱出した。先を這って行く陸軍兵士の体の下に、死んで横たわる朋輩の体がいくつも転がっていた。それでも夕闇に包まれると戦闘は下火になり、やがて砲弾も弾丸も飛ばなくなった。

闇にまぎれて山を登り、灌木に身を隠して銃声を避けた。前を陸軍兵が行く。彼は相当戦場を潜り抜けてきたようで、身のこなしが違っていた。その後をひたすら付いて行く。月明かりが人の影を映し出すことに、はじめて気づいた。前を行く兵が顔を上げ、後方を見回し、始めて屈めていた背を伸ばして歩き出した。見ると、前にも後ろにも人影があった。生き残った兵たちだった。＊＊市市街戦では海軍一万人陸軍四千三百人の兵が戦った。そして、そこでの戦死者は一万二千人。しかし、この峠での戦闘で、私は何がどうなるのかなんて思いもしなかった。私と前を行く兵は動いてるから生きている。後に残されて動かない兵は死んでいる。それだけのことだと思い、前に付いて行った。

すこし平地になったところの向こうに、屏風のように立っている崖があり、そこに洞窟があった。洞窟は、入口の狭さに反して中はとても広く、この方面の総司令部と、負傷兵を収容する野戦病院も構えられていた。私は少しの食料をもらい、水を飲んで生き返った。

眠ってもいいんでしょうか？

所属部隊に合流しなくてもいいのか？

部隊がどこにいるのか、解らないんです。

所属と階級氏名は？

海軍陸戦隊＊＊方面部隊所属、佐伯機関兵長であります。

そうか、司令部に訊いてやる。それまで休んでろ。

その声を聞くか聞かないかの内に、私は眠りに落ちていた。

翌日、私は自分の所属部隊が全滅、玉砕していることを聞かされた。と言っても、２～３名は生き残っていた。私は彼らと合流し、陸軍部隊と一緒に行動するように言われた。そして、この峠の攻防戦は一ヵ月続いた。しかし、その戦いは、砲と銃でするのではなく、ひたすら無謀な突撃だけで行われた。銃には弾なく、着剣してじっと耐えているのだ。そうしている間に被弾して物も言わずに死んでいくものもいた。突撃の号令がかかっても、立ち上がって走り出そうとする前に米軍の攻撃で薙ぎ払われ、物言わぬ者に成り果てるものもいた。これはもう戦争ではなかった。

その日の夜、私は同輩と陣地に引き上げると、上で怒声が聞こえた。

貴様ア、それでも帝国軍人かあ！そこでなぜ死ななかった、死んで皇国の守護神となり七生報国、なお、お国に尽くすのが帝国軍人である。それをおめおめと引上げて来るとは何事だ！大和魂はどこに行った！

先に帰っていたものに聞くと、＊＊方面の陸軍小隊が、米軍との圧倒的な戦力の差に、犬死してはならないと隊長の独断で退去してきたらしい。

貴様ア、敵前逃亡だぞ、これは！

決して、そんなことではありません。兵を無駄死にさせたくはなかったのであります。

それが言い訳だというんだ。賢くも大君に対して、そんな言い訳が通るとでも思っているのか。明日、貴様の部隊は全員、敵前逃亡で処刑されると思え！

怒声が響いた。陸大出の、あの参謀将校だと解った。

　待ってください。私の部下に、そんな不名誉を背負わせて死なせるわけにはいきません。今から私一人で、斬り込みをかけます。ですから、部下にはこれ以上のおとがめはないよう、お願いいたします。

　・・・、よし、わかった、貴様の覚悟を見届けてやる。

それで、その会話は終わった。遠目に、一人の士官が参謀室から出て、待機している小隊の方に歩いてゆくのを見た。そして、その小隊に何事か訓示し、小隊のものが引き止めるのを振り切って陣地を出て行った。その後、米軍陣地と思われる方向から激しい銃声を聞いた。

　翌日朝、残された小隊に、参謀室から出てきた参謀将校が＊＊方面への斬り込み攻撃を命じた。それは全員死ねと言うことだった。

　貴様らあ、隊長一人死なせて申し訳が立つか。貴様らの隊長に続け。

兵らは、うなだれて聞くしかなかった。

翌日、その小隊は指揮官もなしで出撃していった。出てゆく彼らに、表情はなかった。その幽鬼のような顔を、私はまともに見られなかった。しかし、この戦場にいるものは皆同じ事だと思った。

この＊＊峠の攻防戦が、いつどうなったかなんて解らなかった。直接の指揮官の命にしたがって、出撃してみたり待機したり、また後方に移動してみたりを繰り返すばかりで、一兵卒に状況など解るはずもなかった。だが確実に食は尽き、撃つべき弾薬も持たされなくなった。もはや戦いではなかった。

後方に移動して施設部隊の真似事をしていると、部隊が移動してきた。その中に、負傷兵の一団もあった。彼らは皆、自力で歩いてきた。その姿はまるで青白い少将面をつけて彷徨う幽鬼の集団だった。そして、やっとここまでたどり着いて気が抜けたのか、そのまま前のめりで倒れ込むものが幾人もいた。それを放っても置けず、抱え起こして肩を貸すと、

何をやっておるかァ！帝国軍人らしく、しっかり歩け！

と士官が怒鳴った。私も最後にこの声を聴くことになった。

とにかく設営の終わった野戦病院に、倒れこんだ兵を連れてゆくと、

おい、聞いてくれ、あいつは負傷兵の中で、足手まといになる重傷者に昇こう水を注射して回ったんだ。その後、おい、そっちはどうだ、まだですと、看護婦と一緒に死んだかどうか確かめて回ってやがった。注射されたものは、声も出ず、のどをかきむしって死んでいった。半数、いやもっと殺しやがったんだ、あの軍医は。

そう小さな声で、その兵士は私に言った。すると、看護婦が私たちに寄って来て、

有難うございました。後は私共でやりますので。

と兵をベッドに横にさせた。私は何も聞かなかったように出て行った。

翌日、何人かが死んだ。そのなかに、あの兵士もいたのじゃなかっただろうか。

戦闘はもはや消耗戦でしかなかった。軍は、いつの間にか＊＊峠を撤退していた。後に捕虜収容所で聞いたことだが、米軍の方では、その頃の日本軍の攻撃を、バンザイ・アタックと呼んでいたそうだ。昼間はバンザイ・アタック、夜は斬りこみ隊。手にしているのは弾の装填されていない銃、軍刀、手りゅう弾ぐらいのものだ。だがそれも、指揮官が戦死していなくなり、遊兵になった小隊の兵らが行かされた。そんな時に、私も斬り込み隊に行かされたが、幸運にも戦車を屠って帰ってこられたのだった。その後の者もそれに習って戦利品を持って帰り、戦果を証明して生き延びることがあった。

だがそれも米軍には通じなくなった。日が落ち始めると、彼らの陣地にはこれ見よがしに煌々と明かりが点った。大きな探照灯が辺り一面を照らし、昼間のようになった。また、鉄線が張り巡らされ、わずかでも触れようものなら、機関銃の弾が降り注いだ。こちらは決して音を立てないように、足元は軍靴ではなく、裸足になったり布きれをまいて靴代わりにした。そして、時に１５キロ爆弾を背中に背負い、一気に陣地内へ走り込むこともやった。しかしそれが功を奏することは皆無に近かった。それを命じた士官たちは、一銭五厘より爆弾を惜しんだ。

日本軍全体がフィリピンのジャングルを逃避するようになった。もはや食料も武器も弾薬もなかった。それでも島内に、現地人の集落を見つけることがあった。私たちの小隊が、そこへ食料の調達に行くのを命じられた。７名が向かったのだが、うかつには近づけなかった。フィリピン人のゲリラの拠点かもしれなかったからだ。

フィリピンの現地人は、やはりそこに住んでいるだけあって、我々にはとても太刀打ちできなかった。新月の夜は星だけが夜空を飾り、密林は闇だった。そこを彼らは、音も立てずに近づいてくる。彼らの手にするものは、銃ではなく、手槍だった。それに対して、蛮刀一本で立ち向かえたのが、高砂族の兵士だった。かれらは、夜の豹のように闇を歩けた。そして闇の中で太刀の打ち合う音がしたと思うと、しばらくして血塗られた太刀を下げて帰ってきた。彼らは日本統治下で、自分は日本人であると、それを誇りにして日本軍の中で戦っていた。だが、フィリピン人のゲリラが我々の居場所を通報するのか、米軍の砲撃は非常に正確に行われ、沢山の兵が死んでいった。

我々は、見つけた集落の外で様子を見ていた。その村の外に畑がある。我々は、その畑の見える所にひそんでいた。畑には何か植えられているようだった。

おい、あれはとうもろこしだぜ。

と同行してきた兵がいう。その向こうに鶏が歩いていた。

そう言やァ、こっちじゃ米も作っているはずだ。

米と聞いて、目が眩んだ。それでも様子を見ていたが、特に男どもがひそんでいるするわけでもなさそうなので、そっと近づいてみた。家は隙間だらけの板張りで、中の様子がすぐわかった。他の家も探ってみても、あまり人の気配がしなかった。我々は腰だめに銃を構え、住居に押し込んだ。子供と女が、昼寝をしていた。他の兵士も同様に、集落全部の家に押し込み、住民たち全員を広場に集めた。彼らは、銃剣のきらめきにおびえきっていた。村民の殆どが女子供で、後二～三人の男の年寄りがいるばかりだった。彼らは戦争を知ってはいたが、ほかに行くところがなくてとどまっていたのだ。しかし、他に若い男もいるはずだ。そう思って、一応指揮官としてやってきている准尉が、盛んに男はどこだと日本語で問い詰めていた。司令部からは、男がいれば、全員射殺せよと命令されていた。フィリピンでは反日感情が強く、若い男はゲリラとして戦っていたからだ。その横で、私はあたりを見ていた。

准尉殿、豚です。

いきり立っている准尉に、そういった。鶏が歩き回っていたのは知っていたが、豚までいるとは思っていなかった。それを聞くと、准尉は通じない詰問をやめ、兵士に食料の調達を命じた。見張りを残して、兵士たちは家々に走り込み、中を物色し始めた。私も豚のいる横の家に入り込み、屋内を探して回った。すると、暗い中に誰かがいた。若い男だった。その男が、見つかったと観念して手槍を取ろうとした。私はいち早く壁際の槍を見つけ、横に蹴った。そして銃を向け、危うく引き金を引きそうになった。すると、男は膝を折り、手を差し伸べ、平伏した。たぶん、私に命乞いをしているのだと思った。私は銃口を外し、口の前に指を立て、シーッと言って、沈黙するように促した。男もそれがわかったのか、頷いた。だが、それでも私は男を信じたわけではない。肩を銃剣でつつき、後ろを向かせて両手を後ろ手に縛った。次いで脚も縛り上げた。それから男に、手まねで食料はどこだといった。男は答える代わりに、視線を部屋の隅に向けた。私はそのあたりを調べ、トウモロコシの乾燥した粒と少量のコメを見つけ、雑嚢に入

れた。そしてもう一度、男に向かって口の前で指を立て、黙っているように合図した。男は頷いた。私は雑嚢をかざし、頭を下げて侘びた。そして外に出ると、一緒に来た兵が女の手をつかんで横の住居に連れ込んでいった。私は准尉のもとへ、雑嚢いっぱいのコメとトウモロコシを手に入れたことを報告に行き、豚を連れに帰った。すると、女の苦悶する声が聞こえた。女を殴りつけでもしているのかと思い、ひょいと覗くと、兵が尻を出し、女にのしかかろうとしていた。何故か、それを無視できなかった。私は部屋に入っていき、兵の腰を蹴った。そして、出ていけ、と叫んだ。兵はその剣幕に恐れをなしたのか、ズボンをずり上げながら出て行った。私はまだ怯えている女に手を合わせた。そして、何も物色せず、出て行った。豚はもう他のものが連れて行ってた。

結局、我々は、その村では一発も銃を撃たなかった。帰る途中、最初に見つけた畑のトウモロコシの若い実も、全部腕いで持って帰った。だが、その帰る途上で、私は尻を切り上げた兵の前を歩かなかった。その後でも、必ずそうした。後ろから撃たれることなど茶飯事だったからだ。

海軍さんよぉ、月夜ばかりじゃあねえぜ。
と、私に尻を蹴られた兵は小声で凄んだ。私はそっと腹に隠していた米軍軍用拳銃を見せた。
弾は十分にある。
そうだ、拳銃に弾は全弾装填されていた。
いつでも始末できる。
私はそう言い切った。奴は一瞬ひるんだ。そして、黙ったまま後ずさりして逃げた。それでも私は、その日の寝床を変えた。戦況の混沌としているこの時期に、士官たちでさえ背側を撃たれて死んだものが何人かいた。もはや、指揮命令の秩序も無くなりつつあった。

翌日、米軍戦闘機による爆撃と機銃掃射が襲ってきた。その攻撃の位置は正確だった。昨日助けた男が、我々の位置を米軍に通報したのかもしれなかった。命令通り殺しておけば良かったと後悔した。

その攻撃に合わせて砲撃もあった。戦闘機による偵察攻撃で、より正確な位置を確認したのだ。我々はただ逃げ惑うしかなかった。皆一斉に逃げる中、私は所属部隊を離れて横に走った。ジャングルが繁茂し、空さえ見えなかった。走れば走るほど、砲弾の爆発音から離れた。その私の後を付いてくるものがいた。あの今西一等兵だった。後で聞くと、今西は、佐伯兵長は時々命令に従っているようで変なことをする、それが結局生き延びられる道を選んでいるようなので、付いて行くことにしたと言った。おいおい、それじゃまるで俺が軍紀違反をしてるみたいじゃないかと言い返すと、それがそうならないように、避けて行くんですよね、という。私は命令されるままに、自分の命を捨てに行くことなどしないだけだ。

その夜から私は、今西一等兵と行動を共にするようになった。散り散りだった軍も一応体制を整えて、ジャングルの先へ進むことになった。この＊＊島の反対側に進み、海峡を越えて向こう側の島に渡ることになったらしかった。だがもう配給される食も弾薬もなかった。それでも米軍の攻撃は執拗だった。彼らはジャングルの中までは入ってこなかったが、火砲による攻撃と戦闘機の攻撃が続いた。そんな攻撃に怯えながら、水は足元のたまり水をすすり、木の芽や葉を噛んで飢えをしのいだ。だが、それが原因か、兵の多くがアメーバー赤痢でバタバタと倒れて行った。他に、デング熱やマラリヤに罹り、置いて行かれる者もあった。もうおいて行かれる者の末路など、気に掛ける者もいなかった。食わなければ死んだ。倒れ込んだ場所に蛇やトカゲがいれば無言で捕まえ、皮を剥いで貪った。虫もそうだ。だが、火を使えば周りに解ってしまう。周りの日本兵と米軍の両方にだ。それゆえ生のまま食うしかなく、それの出来ないものは死んでいった。

そんななか、小隊の二人が水汲みに行かされた。桶を棒で担ぎ、川に出向いた。その川で何があったかは知らない。川だから魚がいるだろうと、入っていったらしいことだけは解った。一人はその横で、桶に水を汲んでいた。そして、激しい水音を聞いた。その後、水に入っていった者の姿が見えなくなり、いくら呼んでも帰ってこなかった。暫くして、川の水面に腕が一本浮かんだ。一緒に行った兵は恐怖に襲われ、走って逃げた。入江鰐という、クロコダイルより巨大な

人食い鰐がフィリピンには居るのだ。現地人は、入江鰐は力の強い尾を使って立ち上がり、覆いかぶさるようにして人間を襲うと恐れていた。日本人はそんなことなど知りはしない。鰐が立ち上がるとは思わないが、入江鰐の敏捷な動きを、全長７mほどもある巨大な体躯からは想像できなかった。だが、水面に浮かぶ水鳥や、川を渡る小動物など、狙えば必ず仕留めた。それ故、現地人も入江鰐を恐れて近寄らなかった。

　ともに水汲みに行った兵は、水面に浮いていた腕を拾い上げ、小指を切って持ち帰ることにした。それが務めだった。しかし、遺品はいつの間にかぶんどられて無くなっていた。なかには、あいつはまだ穴の開いてない靴を履いていたから、あれがほしかったと言うものさえいた。
私は、以前徴収してきて隠しておいた米を背嚢の中に持っている。私が死ねば、これを見つけて狂喜乱舞する奴もいるだろうと思った。

日本兵の数こそ１２万人と大量の人員ではあるが、敗残の兵と言うのもおこがましい有様で、ただ生き延びることだけを目的に、＊＊島を北へ登って行っているだけだった。補給など一切ない。人員さえ送り込めば事は足りると、中央は思い込んでいた。我々は日々を生き延びるためにだけ前進した。しかし、一度フィリピンを追われたマッカーサーの執念は、すさまじかった。まるで皆殺しにせねばおさまらないと言った風の、執拗な追跡と攻撃であった。それも、白人の人種差別的感情によって、残酷な攻撃が繰り返された。そして更に、新兵器の実験場にもなっていった。米軍はそれらを日本の本土決戦に用いるべく、威力や破壊力を試していたのだ。それらが常に我々を襲う。ロケット弾が登場し、多弾頭爆弾つまり集束焼夷弾も落とされた。後の本土空襲の際使われた焼夷弾がこれだ。時限信管を用いた砲弾も使われた。戦車を攻撃する徹甲弾は、当初戦車の装甲をつらぬくことだけを目的としたものだったが、新しい砲弾はつらぬいた後爆発し、中を焼夷弾のように高温でかつ長く焼いた。これは、装甲に張り付いて、外から中を高温で焼く榴弾とは違って、一発で戦車を殲滅した。地獄の炎のような砲弾だった。戦闘機の機銃掃射も、弾丸が大きくなり、砲弾のように信管を持って、命中したところで爆発した。我々は逃げ惑うだけだ。そんなことをしなくとも、飢えと病魔で野垂れ死にするばかりの我らを、米軍は兵器の殺傷能力の人体実験に使った。のちに、ベトナム戦争でそうしたように。火炎放射器がそうだ。彼らは、ヨーロッパ戦線では、こんなものを使わなかった。

私と今西は飢えてこそいたが、それでも動けた。もうこの時期にあっては、敬礼も階級もなかった。私たちはお互い、今西、佐伯さんと呼び合った。他の者たちに対しても、同じことだった。それがたとえ小隊長であっても、ちらっと見るだけで、立って敬礼することも無くなっていた。

我々はそれでも＊＊島を縦断して、もう一歩で狭い海峡を渡り、向こう側の島にたどり着けそうなところまでやってきていた。しかし、そこまで行って何をするというのか。補給もなく、増兵もなく、武器も食料も現地調達、そして、徹底抗戦。フィリピンに派遣された五十数万人の兵は、本土防衛の人柱とされるためにやってきたのだ。それがもたらした結果は、闘って死んでいったもの１万８千人、後の５０万人近くの兵は飢えと、半飢餓状態からくる免疫不全での病死であった。彼らは、国家に殺された。特攻も、斬りこみ隊も、飢餓も病死も、日本と言う国家に殺された。散華、玉砕はなんぞや。フィリピンで死んでいった友たちは、骨も拾われず、名も残っていない。私は生きたいと思った。

その矢先、私は今西と、森のはずれでサトウキビ畑を見つけた。上を見ると木々が切り払われ、青い空が見えた。それが誰の物とも考えなかった。原隊を離れて、二人だけで行動していたから見つけられたのかもしれない。私たちは銃剣でサトウキビを刈り払い、夢中でかじった。喉を降りて行く甘味と汁が、体全体に染み渡った。どれほど食べたか知れない。だが、それでも足りなかった。と、遠くで爆発音が聞こえた。爆撃機の飛来する音が聞こえた。そして、木々を切り取って開けた空に、二十機ほどの爆撃機を見た。米軍の圧倒的な攻撃が始まろうとしていた。

佐伯さん、どうしよう。

ここを余り動かない方がいいんじゃないか。海岸線に近い方が、攻撃されてるようだから。そう言って、私たちはサトウキビをできるだけ刈り取り、森の中に隠れた。爆撃機の去った後は、砲弾が降り注ぐ。海岸線は艦砲射撃、内陸は野砲による砲撃が一斉に行われるのを知っていた。私たちのいる所は、砲撃されている場所から離れているようだった。だが、じっとしてはいられなかった。私は何かに追い立てられて、闇雲に進んだ。すると森が終わった。砲撃は、私たちも見逃さなかった。砲弾の飛来が始まった。私たちは森に引き返した。それでも木々を吹き飛ばして、着弾する。身を伏せて、凌ぐしかない。時限信管を使った砲弾であろう、空中でいくつかの砲弾が破裂した。それも何とか凌いだと思ったとき、耳元で鼓膜の破れそうな爆発音が襲った。

炸裂弾が私たちを襲って来たと知ったのは、今西を見た時だった。

佐伯さん、やられた。

その声を聞きながら、私も動けなかった。背中の背嚢を背負った辺りに、角材で殴りつけられたような衝撃が続いていた。それでも今西を見ると、膝下が大きく抉られていた。血も噴き出している。私は自分のベルト代わりにしていた紐を外し、這い寄って今西の膝の上を括った。更にガーゼ代わりに背嚢から取り出した布きれを傷口に当て、強く縛った。すると、

佐伯さん、あんたも背中を負傷しているよ。

と今西が言う。そうと聞くと、私は急に動けなくなった。それから何があったかを、私は知らない。私は洞窟の中に寝かされていた。野戦病院だった。と言っても、何か手当らしいことをして貰える筈もない。布きれを当て、幅広の晒が巻かれているだけだ。私はうつ伏せに寝かされていた。ともすれば意識が遠のきそうだったが、いま気を失えば死んでしまうと思った。だが目を開けていられなかった。私は目をつぶり、周りの音を聞いていた。そして、私が寝かされているのは、直る当てのない者たちを収容しているところだと解った。私はその後、三日眠り続けたらしい。その間、幸運にも米軍の攻撃を受けなかった故に、放っておかれただけの私も少し回復出来たようだった。傷口は開いたままだが、出血は止まっていた。私は体を捻って、周りを見た。今西を探したのだ。だが見えなかった。

衛生兵殿、私と一緒にいた今西上等兵はどこにいるんでしょうか。

と、回ってきた衛生兵に訊いた。

別な棟にいるよ。あいつは傷口から破傷風を起こす危険があったから、ひざ下で切断した。

生きているんですか。

生きてるよ。・・・、ああ駄目だったか。

そう言って衛生兵は、わたしと雑談を交わしながら脈を取っていた隣の者の手を離した。そして、

あんたは大丈夫だよ。それぐらいじゃ死なない。

と言い、次の者のところへ移っていった。何人いたろうか、周りは、時折低いうなり声が聞こえるだけだった。

翌々日、私は変な噂を聞いた。日本が負けたらしい。米軍が突然攻撃をやめたのも、そういうことからしいというのだ。私は体を起こし、立ってみた。それだけで、体は崩れ落ちそうになる。それを、かろうじて杖で支え、ふらつく足で歩いてみる。少し行くと、外に出られた。そこには横文字の書かれた箱がいくつか、放り出されていた。ビラと食料が落下傘を付けてばらまかれたと言ってた。ビラは情報攪乱かもしれない。だがそれには、戦争は終わった、日本はポツダム宣言を受け入れ、降伏したと書かれていた。しかし、食糧までとなると、ひょっとしたら敗北は本当かもしれない。第一、周りは静かだ。砲撃も爆撃もない。思わず手を伸ばして、箱の中の四角な包みの物を取り出し、開けて中身をむさぼった。厚く焼いたクリームビスケットだった。それを周りは見てた。食べたものが喉に詰まり、水を煽った。一息つくと、

　　おい、大丈夫か、毒でも入ってないか。
と訊く。
　　今のところ、大丈夫です。
と言うと、箱の中身は、一斉に伸びた手で空になった。絵に描いたような喜劇だった。

私はふらつく足で、今西が収容されている棟に入っていった。汚れた顔に大粒の汗を浮かべ、今西は熱にうなされていた。私は、今西に、戦争が終わったらしいぞと、小さな声で囁いた。ほかに聞こえるようになんか言えなかった。誰かに聞かれれば、私も銃殺されるかもしれないと思ったからだ。戦況も半ば、米軍の空挺部隊が小隊の後方に舞い降り、前方の戦車部隊と共に挟み撃ちとなって、その小隊は白旗をあげ、降伏して捕虜となったことがあった。だが、その後、すぐの戦闘で捕虜になった四十名は奪回された。その捕虜となった兵に対しての司令部からの命令は、銃殺であった。何故？と思った。折角奪還された兵ではないか。生きて帰った兵ではないか。それでも、彼らは銃殺された。よかったと肩を叩いた翌日、彼らは日本軍によって殺された。

本当ですか。

と今西が囁いた。私が頷くと、

帰れる。

と小さく言った。その後また熱に浮かされて、眠ってしまった。

ようやく今日が九月であることを知った日に、負傷兵もすべて表に整列させられた。その兵たちの前に将校たちが並び、連隊長が訓示を始めた。

米軍からの通達にある通り、我々は、恐れ多くも天皇陛下の玉音をもって八月一五日、大日本帝国が敗戦を受け入れたことを、帝国陸軍総司令部より確認した。しかし、我々はおめおめと敵の軍門に下ることを潔しとしない。だが、それでもなお、

大日本は皇国なり。万世一系の天皇上に在しまし、肇国の皇謨を紹継して無窮に君臨し給ふ。皇恩万民に遍く、聖徳八紘に光被す。臣民亦忠孝勇武祖孫相承け、皇国の道義を宣揚して天業を翼賛し奉り、君民一体以て克く国運の隆昌を致せり。

戦陣の将兵、宜しく我が国体の本義を体得し、牢固不抜の信念を堅持し、誓つて皇国守護の大任を完遂せんことを期すべし。恥を知る者は強し。常に郷党家門の面目を思ひ、愈々奮励して其の期待に答ふべし。

である。よって、我々は大元帥陛下の御前で、死して皇国の礎にならんと欲すれど、大元帥陛下のご命令である。なお生きて、陛下の股肱として七生報国の意を強く持って、国体を護持せんがため、臥薪嘗胆、米軍の武装解除の要求に応ずることとした。

なれど、皇軍の偉容を決して崩してはならぬ。恥を知らぬものは、死して罪過を残すことなかれ。皇軍の神髄を今こそ発揮し、堂々の行軍をなして、武装解除の場に向かわなければならない。よって、貴様らの行進の姿を検分する。それすら出来ぬやつは、死をもって護国の鬼となれ。

今西はどうなるんだ？戦争は終わったんじゃないか、あいつも私も、もう生きていいんじゃないか、私はそう思った。しかし、それが声にならなかった。

死すべき場所で死せずして、なお生き恥をさらすは、使命を果たすべく、身を鴻毛の淵に

置き、皇国の守護神たらんとすることを忘れたものである。今こそここで、死をもって生き恥をそそげ。

私も、殺されるかもしれないと感じた。背中の傷は、出血こそしてはいないが、口を開いて膿を排出し続けていた。私は、もう今西の事もすべてことを忘れた。体幹に巻いた晒を確かめて、号令に従った。各自、手渡された歩兵銃を肩に担ぎ、一斉に並ぶ。

縦隊　せいれつ、

になえ銃

歩調を取れ

縦隊　まえへすすめ

貧血で薄れゆきそうな意識と、岩をくくりつけたような脚、そして激しく脈打つ砲弾破片創の痛みで、私の脚は何度かもつれそうになった。数歩先を行く兵が、歩兵銃を取り落した。急いでそれを拾おうとして、兵はつんのめって倒れた。その襟足を掴み、監視役の兵がズルズルと引き摺って隊列から引き離し、頬を打った。倒れた兵は、もうそれ以上動かなかった。それでも我々は行進を続けた。

死すべき時に死せずして、なお生き恥をさらすものは、大日本帝国未曽有の危機の今、死して罪過をそそげ。
狂気だ。やつら、狂っている。崩れ落ちるように座り込んで、私は思った。国家が我らを殺す。今西や動けないものは、どうなるんだ。この狂気した者たちは、彼らをどうするというのか。いや、私をも、殺そうというのか。
よし。
今、貴様らの大和魂を見せてもらった。
これより進軍し、会見の場へ赴くこととする。
これを聞いて、わたしは崩れ落ちそうになりながら、言えば殺されるとわかっている言葉を飲み込んだ。言わなければ、私も今西を殺す側に回ってしまう。権力の狂気の側にいるものと、それに従って見捨てるものが、今西や動けないものを殺す。今西を殺すものと、それを止めないものは同罪だ。私がどれほど国家の狂気を憎もうとも、彼らを裁けはしない。奴らのやることはわかっていた。見捨てられるものに渡されるものは、自決のための銃か、手榴弾か、それともその場で殺されることを選ぶか。いずれにしても、死ぬしかないのだ。奴らは狂っている。置いて行かれるものが、自決のために手榴弾の安全ピンを、どんな思いをしながら抜くか、奴らは解りはしないだろう。いつか解らせてやる。そのために、今は生きてやる。そう思いながら、しかし、それすら自分が生き残るためのいいわけだとも思った。
私は歩兵銃を撫でてみた。やはり、弾は入ってなかった。彼らは、実に用心深かった。本当に弾を込めているのは、将校どもの親衛隊だけだろうと思った。しかし、敗戦となった今、なぜ私たちは彼らの指揮下にあらねばならないのか。敗戦処理の事務管理を行うものとして、軍は形態だけを残しているにすぎず、もはや奴らに指揮権はないはずだ。それにもかかわらず、昨日の続きで今日も奴らが指揮している。そして更に、親衛隊まがいの奴らの銃にだけは、弾が込められている。わたしは、火を噴くような荒い呼吸で行進していた。不意に遠のきそうになる意識を、自分で奮い起こし、歩いた。降りてきた途中の広場に圧倒的な数の戦車が並び、米兵のピリピリとした神経と殺意を感じた。
それでも我々は整然と行進してはいたが、米兵が両側に並ぶ広場に入ると、
歩調を取れ
縦隊、前へ進め
と号令が掛かった。喉がやけそうだった。
縦隊、とまれ
で、やっと止まった。だが今回は、へたり込むわけにはいかなかった。敵がまさにこんな間近にいるのだ。撃てばいいのだ、と思った。神経が逆立つ思いだった。今日まで、このフィリピンで、どれほどの日本兵が死んでいったか。私は、申し訳なくもこうして生き残ってしまった。私は不動の姿勢で立ちつくした。あの野戦病院の前を耳をふたぎ、しかし、ひりひりと痛いような神経を背中に集中して離れて行くと、不意に、手榴弾の爆発音がした。最初の一発目までは長かっ

たが、後は立て続けだった。彼らは今死んだ。私はそこから逃れていく。後は思考がとまったまま、ここまで来た。

体だけが動いて、示される所に銃を置き、銃剣を差し出し、背嚢を渡した。現地兵が、背嚢の中を物色する。目ぼしいものがあれば、略奪された。私は戦車狩りの時に手に入れた米軍軍用拳銃を、捨ててきていた。あんなものを持っていると、大変なことになると解っていたからだ。

武装解除が終わると、私たちは３０名ずつに分けてトラックに乗せられ、捕虜収容所に向かった。運転するのは米軍兵士、監視兵は現地兵であった。着いたところは、鉄条網に囲われた捕虜収容所だった。施設の半分はテントで覆われたキャンプで、あとは木造の建物だった。

捕虜収容所に入るとすぐ、私たちに食器類と寝具が各自に渡された。ほかに、石鹸の入った石鹸箱と髭剃り歯ブラシ一式。食器はアルミ製のボールと皿、フォークにナイフ、スプーン。さらに缶切りの付いた小型のナイフ。さらに、服まで用意され、洗いざらしではあったが、私はSサイズの上下一組を支給された。私は認識票その他、今まで着ていた軍服に入っていたものを全てだし、せかされるまま急いで着替えた。蚤、虱のたぐいを嫌ってか、それらは掻き集められて全部焼却処分された。だが、その時私が常に持っていた自動車運転免許証が、のちに私を救った。

負傷していた私は、米軍の兵站病院で傷の手当てを受けた。麻酔をしたうえで傷口を洗い、充分廓清したのち、幾針か縫合された。麻酔が切れると、折角治まっていた痛みがぶり返した。だが、翌日から私は熱が下がり、食欲も戻ってきた。食事は、一般兵には一日二食のようだったが、負傷兵は体力回復のためか、一日三食与えられた。食べ物は、米軍の携帯食だった。しかし、それがたまらなく旨かった。それを食べながら、私は日ごとに日常を取り戻していった。死が何時も当前に隣にいて、私は一時間と纏まって眠ったことがなかった。収容所のベッドでも同じことだったが、それが次第に深く眠るようになり、そのうち自然と伸びて一晩続けて眠るようになった。

傷口は、砲弾の破片が体内に残ったままなので、なかなか癒えなかった。そうして私が治療を受けている間でも、米軍の尋問は行われた。氏名、年齢、所属部隊等を詳しく訊かれた。そして、私が海軍陸戦隊であることを言うと、＊＊市市街戦の際、＊＊ホテルを陣地とした部隊にいたかと言うことを、しつこく尋問された。わたしも＊＊ホテルの事は聞いていた。だが、私はトラック部隊として兵糧弾薬等を運んでいて、実際の戦闘には加わっていなかったし、＊＊ホテルにもいなかったと答えた。それを証明するものとして、私が認識票代わりに持っていた自動車免許証が役立った。

他に、ジャングルを彷徨している際に、現地人を殺さなかったか、略奪行為を働かなかったかと聞かれた。そして、実際、外に整列させられ、現地人に首実検までされた。そこで指摘されると、B級かC級か解らないが、戦犯として処刑されるのだ。

何度か首実検に並ばされたとき、それまでも何名か列から引きずり出され、別棟の収容棟に連れて行かれる場面に遭遇した。その日は小太りの女と痩せた男が、私の前に立ち止まった。米兵が私の腕を掴んで、前に引きずり出した。わたしは観念した。どう抗弁しても、どうせ無駄だと思っていた。だが、女が米兵を押しのけ、私の手を取って、押し頂くようにして何かを言った。すると、米軍の、変なイントネーションで日本語を話す情報将校が、

この人は、私が強姦されそうになった時、助けてくれた。その上、ゲリラとして殺されたかもしれない夫まで、隠して助けてくれた。この人は、命の恩人です、と言っています。

と通訳してくれた。将校の言葉が終わると、また女は私の手を額に押し頂きながら、何か言った。

確かに、豚を持って行かれたけれど、そんなもの惜しくはありません。この人は命の恩人なんですから。

情報将校の通訳が終わると、今度は私が女の手を握りしめ直し、申し訳なかった、申し訳なかったと謝った。

彼女らが帰った後、米軍の衛生兵が私にバナナと果物を持ってきた。それは彼女らの感謝の印だと、伝言を告げてくれた。

戦犯として連れて行かれた兵たちは、別な収容所へ移された。彼らが行った先の収容所には、フィリピン戦の総司令官として途中からやってきた＊＊大将も収容されていた。違う収容所にいても、大将が銃殺されたときの様子は伝わってきた。この人は、赴任する前の日本軍の犯罪行為まで、抗弁することなく引き受けて処刑されたそうだ。銃殺となったそのとき、彼には軍服を着ることさえ許されず、下着姿で立たされた。米軍は、そこまで軍人としての名誉を踏みにじった。

我々の降伏と武装解除を指揮した連隊長の事も聞こえてきた。あれも上からの命令で行ったこと、これも同じ、と声を震わせ、頭を振り立て、言い逃れするのだと、現地の人の差し入れを持ってきてくれた情報将校が教えてくれた。変な日本語で、彼について何か知ってますか、と問いかけて来るが、答えられなかった。彼奴は命令するだけで、自分では何もしなかったからだ。そして、彼奴が足手まといの部下に死を強要したとも言えなかった。それを裁くのは戦勝国ではなく、我々日本人でなければならないと私は思ったからだ。その私の思いとは違っていたかもしれないが、同じ部隊の他の者も同様に言わなかったようだ。ただ、でてきやがれ、ぶっ殺してやる、という独り言は聞いた。あんな奴は、俺たちの死体を踏み付けて行ってでも、しらっと生きてゆくんだ、と私は同意を求められた。あの堂々と皇国史観を述べ立てた軍人が、そうするだろうか。あの美言はどうだ。まるで、あいつ自身が大日本帝国みたいだった。そして、その美言をあやつって、責任は取らない。だが、米軍は責任ありとして、彼奴も処刑してしまった。

彼奴の処刑が終わったことを聞いた後も、私は考え続けた。彼奴は処刑されたが、彼奴のような所業をなしたやつでも、どこかでのうのうと生き延びる者もいるだろう。そいつらはどうして同胞たる日本人に死を強要できたのか。このフィリピン戦は、死んでいった兵士のほとんどが、餓死、病死で、彼奴等のような人間に殺された。その犠牲者を踏みつけて生き延びるやつらは、戦後どういう神経で生きてゆけるのか。奴らが、兵に死んで来いと言って、自分は生き延びることに、何の躊躇いも感じずにいられたのは何故か。これから生きてゆくのに、何の罪悪感も感じずにいられるのか。

騙したやつも悪いが、騙された奴も罪があるんだよ。俺たちは、あいつらの共犯者なんだ。

違う！

そう叫びたかった。だが、今西を助けられなかった。親衛隊のように立って、銃を構えて私たちを見張っていた奴らに殺される、今生き延びられるのに、逆らえばころされる、その思いで黙った。確かにそうだ。

だから、俺たちも共犯者なんだよ。

違う！

あいつらは国民を殺して、国家を守ろうとしたんだ。国体とはそうしたものだろう？あいつらは国民を殺す側の人間で、我々は殺される側なのだ。そのことに、奴らは国家と言う権力の美名を使った。国家はまるで人間を超越した絶対であるかのように思わせて、自分をその国家から委託された絶対権力者のごとく振る舞い、国民を殺した。明治以来、自分たちの都合ででっち上げ

た皇国史観を、自分でででっち上げたことを忘れて、まるで本当のように信じ込んだ勘違いどもじゃないか。この戦争で、殺される側にいて死を免れたものは、殺す側にいたものを裁かねばならない。私はその時、そう思った。

だが、戦後、占領軍は戦犯を逮捕し、裁判にかけた。戦争が罪ならば、敵国も味方も、戦争をしたものは皆、有罪である。平和に対する罪は、戦争をしたものすべてが負わねばなるまい。人道上の罪も問うのなら、かつて国家に対する反逆の罪を問うた者たちに、国民を殺した国家の罪も問わねばならない。しかし、それはならなかった。

　ほーら見ろ、お前だって戦争犯罪人だ。共犯者なんだよ。
そういって、そいつは皮肉そうに笑った。
　じゃあ、おまえはどうなんだ。
　俺も同罪、りっぱな犯罪人さ。
そいつは監視兵からせしめたラッキーストライクをくゆらせた。鼻から紫煙がなびく。
　俺は略奪もやった。お前さんとは違って、女もやった。今のところ、こいつだって指差されていないから、助かっちゃいるがね。
そういって、皮肉そうにそいつは笑った。
　そいつのいったことを、私は身をもって感じた。捕虜たちが使役に出されたときの事だ。ぎゅうぎゅう詰めのトラックに乗せられて、わたしたちはフィリピン人の村を二つ、通り越した。そのとき、私たちを乗せたトラックを見つけた村人たちに、口々に、二ホン、ボロドー、シネー、コロセーと叫ばれた。ボロドーはドロボーの事だった。石が飛んできた。車に並走してきて、大声でののしられた。日本兵はすべて侵略者だった。
　そんな中、不意に銃を構えた男が我々に向かって発砲してきた。殺してやる、殺してやる、死ねと、激しい憎悪がぶつけられた。すると、後方にいた米兵のジープがスピードを上げて走り込み、大声でトラックに早く行けと支持し、発砲した男に銃を向けて銃を離せと怒鳴りつけた。
　なんでだ、あいつら、日本兵じゃないか。俺たちを殺して回った日本兵を殺して、何が悪い。仕返ししてやるんだ。
と男は叫んだ。ジープの米兵の拳銃が空に向かって放たれた。
　戦争は終わったんだ。今捕虜たちを殺せば、殺人罪になる。お前は、罰せられることになる。
　なんでだ、何故あいつらは罰せられなくて、俺が罰せられることになるんだ。
　戦争での戦闘行為は罰せられない。だが、戦争はもう終わったんだ。そうなれば、殺人だ。だから、銃を捨てろ。
そういって、米兵は拳銃を、銃を持ったフィリピン人の男に向けた。男は銃を捨てた。私は後続のトラックの中から、それを一部始終見ていた。
　ああ勝てない、こんな連中と戦争をしても、勝てるはずがなかったんだ。
私はそう思った。そして、私も、戦争犯罪者であることを思い知った。

　私の戦争が終わったのは、復員し、故郷の家にたどり着いた後のマラリヤの再発から立ち直った時からだった。悪寒に震えながら眠っていると、妹たちが自分の布団を上にかけてくれるのが解った。眠りの中で、夏なのに、なんでこんなに寒いのかと思っていた。戦地なんかではなかった。出征さえしておらず、私は自分の家で、母と農作業をしていると思い込んでいた。
　おっかあ、俺、どうしてこんなに寒いんだろ？なんか悪い病気にやられたんかなあ。

どうも、マラリヤの再発らしい・・・、以前もこんな感じだったから、解るんだ。
そう独り言をいいながら、何もかもが綯い交ぜになった眠りの中で、私は横たわっていた。私は長男として、沢山の兄弟たちを養ってゆかねばならないんだ。大阪の叔父を頼って、工場で働かせてもらおう。どうだろ、おっかあ、と召集される前に、母親と相談したことを悪寒に震えながら、また繰り返していた。母親が悲しそうな顔をする。口に鶏のスープの味がする。弟が私を抱え、母がつぶした家の鶏でつくったスープを飲ませ続けていたらしい。一週間、ずうっと眠っていたようだ。目を開けると、あにさん、兄さんと妹が泣いた。呼ばれて帰ってきた母が、もう大丈夫、もう大丈夫と、まるでそうなることを祈るように繰り返した。

私は、帰ってきた。

友よ、私にはもう時間がない。あれから、どれだけの時間が過ぎたというのか。あんなことがあったのかも解らぬ時代になってしまった。忘れたふりして生きてきた。これも裏切り、死にぞこないの裏切りだ。しかし、忘れてなかったことだけで、許してくれ。お前は靖国か？そんなはずはないだろう。フィリピンの野に眠っているのか。私は、もう行けなくなってしまった。

すまない。

東風吹かば

　山門をくぐって、白い息を弾ませながら女性が石段を上がってくる。山頂の神社本殿までの参道に、沢山の祠が祭られてあって、最初の石の鳥居をくぐると直ぐあるのが、船魂神社の祠だ。これは、小さいとは言えども石祠で、他の木祠造りと違うのは、この町が港で栄え、交易と漁業が中心で発展してきたからだろう。玉垣に刻まれた名前が、＊＊屋と屋号が多くあることからも、それと知れる。とはいっても、今はもうどちらとも衰退してしまって、見る影もない。

　この神社は、祭神として、応神天皇、神功皇后、玉依姫命が祀られていて歴史こそ古いが、県社であって社格はさほど高くない。しかし、ここは義経が平家討伐の戦勝祈願をし、頼朝が参道途中に今もある中門を寄進し、それなりに由緒は深いのだ。また、石段の続く参道途中には多くの摂社が祭られており、船玉神社のほかに、風の神様の志那都比古神、火の神様の火之迦具土神とかの八百万の神々をお立て申している。これを全て参ろうとすると相当な時間がかかると思われるのだが、先ほどの女性は息を切らして、一心にこの私の前にやってきた。少し冷たい風が吹き抜けて、汗ばんだ体にはむしろ心地よい。しかし、この人の顔には悲壮感さえ感じられる。

　なになに、息子さんの受験？

　受からせろ？

　それは、無理。

　無理ですよ、お母さん。

　よく言うでしょ、神は自らを助くるものを助く、です。

　・・・・、おやまあ、お賽銭、はずみましたねえ。

　またまた、鈴祓いの鈴を鳴らすんですか。聞こえてますよ、そんなに焦らなくとも。

　お賽銭を沢山もらっても、袖の下じゃあないんですから、息子さんの受験には効きはしませんよ。

　　はい、ご苦労様でした。なんのお力にもなれませんが、気休めぐらいにはなりましたか。見てると、ご婦人はまた石段を急いで下がって行った。どうも、朝の出勤前の願掛けであったらしい。私も、この時期になると、気が重くなるんですよ。誰それをどこそこに受からせろ、とか、成績を上げてくれとか、資格試験を通してくれとか。そういわれても、試験は通らせるためにするんやないですから。通る人は通らせるが、落ちる人は落とすためにやってるんですよ。それを、何時の間にか、私を学問の神様に祭り上げて、試験を通らせろとは虫のいい。学問を成就させるのは、学問の神様におまいりすればいいです。だから、学問の神様は、試験を通す請負人じゃないんですって、参拝者をならべて、お説教してやりたい。本当に、この時期はそんな気になります。自分の息子を受からせたかったら、勉強させなさい。参拝に来る人だけ通すことなどしたら、そりゃ、神様のえこひいきってもんです。そんな不公平、神様のすることじゃありません。もっての外です。もっとも、出来ないんですから、しょうがないんですけどね。

　しかし、朝、ゆっくり寝てもいられません。この時期、日本全国の天満宮はうるさいほどの参拝者です。頭の中は、全国の参拝者の柏手と願い事を祈る言葉が飛び交って、大反響してます。神様になっちゃうと、それが全部聞こえるのですから、余計にうるさいんです。聞こえるって言っても、ただ聞こえるのじゃなくて、明瞭に、まさに、全部の祈願が明瞭に聞こえちゃうんですよ。私は聖徳太子様ではないのですが、、１０人どころか、いまはその上を行く、いちどきに１０００人だって明瞭に聞こえます。これは自慢じゃなくて、こっちは神様にされちゃったんですから。

　ほら、朝のしじまを抜けて、また参拝者がきます。今度はなんですか。今日はお出かけせねばならないんで、簡単に済ませてくださいね。今日から神無月で、会議にでなくちゃならないです。旧暦の１０月１１日から１７日まで、出雲まで行きます。あちらでは神在月というそうですが、まあ、宴会ついでの会議みたいなもんです。そうなったのも、会議主催者の、出雲大社のご祭神がスサノオノ命から大国主命に変わってからだと聞いてます。国譲りの後、スサノオさんは黄泉の国にお帰りになり、その代りに息子さんの大国主さんがご祭紳になったということらしいです。私が仲間入りさせていただいたころにはもう代替わりしてお出でしたから、よう解りません。

　会議？はい、会議です。議題は、誰と誰をくっつけるか。人々の幸せの御縁を結ぶための　かみはかり　神議　を一週間かけて行います。八百万の神々が一堂に会して、ああだこうだと一斉に言い立てて行いますから、そのかまびすしいこと！しかしそこは　かみつどい　神集　ですから、まとまらないなんてことはありません。そうでなきゃ、わざわざ稲佐の浜まで　かみむかえ　神迎の神事を行って、神楽殿までの御神幸のお供をしてくれる人々に悪いじゃありませんか。しかし、本当のことをいいますと、私より上の位の神様は御神力がおありになって、確かに御縁を結んでいらっしゃるのだとは思いますが、どうなんでしょう。それに、そこまでのご神威のない私たちは、ちょっと別グループですから。

　と言いますのも、私が神に祭り上げられた当初は、荒ぶる神、祟り神でありました。それ故、ちょっと別なところに居て、会議は横から見てます。私が初めてこの会議に出た時は、何をどうすればいいのかさっぱり解らず、発言してもいいのかどうかさえ解らない有様でした。そこへ声を掛けてくれたのが、平の将門さんでした。

　菅公どの、菅公どの。

と呼ぶ声があります。振り替えりますと、いかにも凛々しく、武家らしい衣冠束帯に身を包んだお方がおられました。それに対して自然に、

　おお、将門どの。

と声が出ました。初対面でありましたのに、そこは神となった者の当然の振舞いと言えましょう、この神が将門殿とわかっておりました。

　菅公どの、まずはこちらへおいで下さりましょう。

というので、私は彼に付いて行きました。

　そこは十九の御宿社のはずれの方の一つでした。中に案内されてはいると、荒御霊として非業の最期を迎えられた八所御霊の方々が鎮座されておりました。ほかに、祟り神といえば、途方もない有り様の八岐大蛇さまがおられますが、これはさすがに大神スサノオの命さまの手前、また御霊ではあられぬゆえ、お出ましはありえません。そういえば他にも、かみはかり　の場におられなかった御方がおいででした。諏訪大神さまと鍵取大神さまは知られたことでございますが、恐れ多くも、お伊勢さま御一統はおられませぬのです。

　ささ、こちらへ。

と将門公が、第一の上座をお示しになったのですが、それはまことに恐れ多い事。

　いやいや、文章博士にして太政大臣であらせられたのですから、まずはこれへ。ましてや天満（そらみつ）大自在天神の神号を送られた別格の御方でらっしゃり、我らの遠く及ばぬ御方。いざ先ずこれへ。

と他の方々まですすめてこられます。しかし、私にはその座におつきになる貴きお方がこの先に現れますことが解っておりますゆえ、それは固く辞退申し上げ、下の座につきました。

　そのような御方が今に現れなさるのか。

と将門公が訊かれました。

　まことに御いたわしいことでござりますが、皆様方、心してお待ち申し上げるよう。

そういうと、

　やはり、英明な博士であらしゃりますなあ。

　もはや霊威の足らぬ我々には、遠くおばぬところでござります。

と八所御霊の方々が仰せになります。しかし、実際、私には見えておりました。その方のお姿も、また、お言葉として、日本一の大魔縁となり、皇を取って民となし、民を皇となさん、と経文におんみずからの血で認められることも。

　傍らに鎮座し奉る将門公に、
　公は今も、首塚におられるのですか。
とそっと聞くと、将門公は一瞬はにかんで、
　左様でござる。身どもはかの地が大好きで御座って、関東の地での闘いにやぶれ、首を京に運ばれて東の市の都大路に晒された申したが、それはそれ、致し方なしとは思えども、ついあきらめきれず彼の地に飛んで舞い戻ったのでござった。由来、関東の彼の地に祀られてござる。
　お体の方はまた別に葬られているようですが・・・。
と、また訊くと、
　体の方は、延命院という寺に葬られ申したが、こちらは懇ろに供養されて成仏致しました。それゆえ、もう帰らぬのでござるよ。
と、なにやら弱々しくも寂しそうでありました。胴と繋いで、もう一いくさせんと関東の地を、将門公の生首は飛んで捜し廻っていたのを、私はまじまじと見ておりました。神様になると、不自由なく見てしまえるのです。それが不自由でありますが。
　しかし、あの僧はいかなる力で、将門公を江戸幕府の守り神にできたのでございましょうや。
と首を傾げると、将門公は、
　天海のことでありますか。天海は家康のために、身どもを江戸の表鬼門の守りにつかせ、裏旗門を頼朝の首塚で守らせたのでありました。そして。その家康の死後は、家康にまで江戸を守護させようと、日光東照宮を建てたのでした。しかしでござる、彼の者など、何の力がありましょうや。それぞれに首塚を立て、家康を称える豪華な社を立てたにすぎませぬ。ましてや彼の者が頼った風水などという中国の占いに、この日の下の地が支配されましょうか。かの占いには精緻な文言が書き連なれておりますので、さも霊力がありそうに見えもうそうが、そもそもが何のもとい　基　もないものに、どう屁理屈を並べても、それは飾りと言うべきものでござるよ。
といって、将門公は笑いました。天海の所業はそんなものだとは解っていました。それゆえ私は遣唐使を配するように、お上に言上し奉ったのでした。
　左様でござるな。菅公のご推察はその通りでござった。
と将門公は、私の一人思いをうなずいた。
　遣唐使の件は、亡者であればなお語らねばならないことが多々あります。しかし、もはや権力争いの一幕でしかないことを、くどくどしく述べなくてもいいようなことになりました。どこをどう間違えたか、権力闘争に敗れたことを恨んで、私は祟り神になったと思い込まれ、神さまに祀り上げられたのでした。生きて一生、もはや今生でありますことよ。祠に祀られ、２拍手をもって拝まれると、ついその気になって私も神様になりました。神さまになると、今生きている人の上に進行している時の流れの上にありながら、過去も未来も我が身を置くところになってしまいます。それ故、神さまにとっては過去も未来も、現在なのです。いや、今在る時が、過去の時であり未来の時でもあります。人は今しか解りません。永遠に流れる時の今しか生きていません。過去は一日一日遠のき、未来は一日一日近づいてきます。一跳びに来はしません。しかし、神さまはどこにでもいるし、どの時にでもいるのです。それゆえ、神さまにさせられた私にはすべての事が理解できるのです。
　しかし将門公、御身はついこの前、帝都東京の守り神ともされておったのでは？
こう訊くと、

　先の話ですなあ。日本にとって未曽有の厄災であったあの戦争になると、帝都東京だけではなく、大日本帝国の守り神にまでされるのでござる。
　それならば、　あのお方　とともに、あなたさまと一緒になって、元寇から二度までこの国を守ることになりますが。
　それでござるよ、我々三柱と八百万の神々とで、風を吹かし、船を沈め申すのでござるが、あのおどろおどろしい原爆の火は消し申せなんだ。風を吹かせたことが、盲信をもたらせたのでござろうか。
　そのように思われてござりますか。神風などと、我が民をたぶらかしたのは、また為政の者の詐術でござりまするよ。
とポロリと本音が出てしまった。

　それから後、私はいつの間にか学問の神さまになり、日本全国に天満宮が造営されました。巷間、一万社とも言っているようですが、私にさほどの霊威がありましょうか。実際には三千五百ほどでござります。

　そも、天満宮は天神さまをお祀りする神社のことでございまして、これは、

　　通りゃんせ　通りゃんせ
　　ここはどこの　細道じゃ
　　天神さまの　細道じゃ
　　ちっと通して　下しゃんせ
　　御用のないもの　通しゃせぬ
　　この子の七つの　お祝いに
　　お札を納めに　まいります
　　行きはよいよい　帰りはこわい
　　こわいながらも
　　通りゃんせ　通りゃんせ

というわらべうたに歌われている天神さまでございます。私が天神さまとは、恐れ多いことでございますが、この歌にある通り、天神さまはちょっと怖いところでございました。といいますのも、天神さまは天津神にして、雷神でおわします。それゆえか、私が身罷りました後、清涼殿に雷が落ち、多くの人が巻き込まれてお亡くなりになりました。また、疫病がはやり、日照りが続いて民を困らせたり、醍醐天皇の皇子が相次いで病死されました。これらが私の祟りと恐れた朝廷は私の罪を赦され、さらに贈位を賜りました。日本太政威徳天、天満大自在天神という神号がそれでござります。なんと大慌てなことよ、祟れるものなら祟ってみたいものよと思ったことでした。なぜなら、たとえ朝廷から神号を贈られたからといって、すぐさま神に成れるわけではないからでございます。荒ぶる神を慰撫せんと祀り、祈ってくれても無駄なこと。しかして時は移り、雷神が雨をもたらす慈悲の神として信仰されるようになり、また私が学問をもってお上にお仕え申したこと、そして、歌もすこし詠んで歌人と言われたこともあり、学問の神さまという風に民の信仰が移って、素直に祈られるようになりました。それでやっと昨今、神らしくなれたのでござります。しかし、神は祟りもできず、願いも叶えられません。それが神さまなんでござります。

　そうそう、通りゃんせの話でござりました。わが身の名誉のためにお断りしておきますが、大変怖い話でござります。怖いからこそ、哀れと心が震えます。昔は子供はよく育ちませんでした。ゆえをもって、人型のお札を自宅に供え、悪いものに、それが子供だと勘違いさせて取りつかせ、七つまで育つとそれを天神さまへ納めて悪霊封じにしたのでござりました。いわば、七つまで育てば一安心というお祝いであったのでしたが、それは表向きのこと。行きはよいよい、帰りはこわい、のは、帰る時には、子がいなくなるのでござります。こけしは子消し、でありました。それを神隠しとも言いました。口減らしには、親をも捨てるし、子は消すのでした。そ

れを、通りゃんせ　の遊びでつかまえられた子が、帰りには神隠しに合うという伝承に乗っかって、子がいなくなったことの言い訳にしてきたのでござります。雷さま、天神さまといえども、子をさらい、神隠しするなんて出来はしないのです。なんてひどい言いがかりでしょう。神の性にしないで、仏の、それも地蔵さまにおすがりなさい。仏は許すもの、神は願い事を聴くものでござります。

　そういえば、子供たちが何気なく歌って遊ぶわらべ歌には、本当は怖い意味が隠されたものが多々ございます。その一つに、かごめかごめがございます。このわらべ歌には、歌詞にはや不気味さが漂っております。

　かごめかごめ
　かごのなかのとりは
　いついつでやる
　よあけのばんに
　つるとかめがすべった
　うしろのしょうめん　だあれ

人の世に伝わることでございますから、そこにどんな意味が込められたか、神にして真相は理解できませんが、こどもの遊びにしては怖いことよとおもっておりました。

　大正の御代に作られた動揺にさえ、その歌詞の裏を思うと、耳を覆いたくなるものもございます。赤い靴なぞ、その悲惨さを何故童謡にしたのかと思います。シャボン玉も、子を失った親の心を歌ったもののようでございますが、知らなければそうと気付きませぬ。大正にしてこれですから、古い時代のものは、それなりにその時代を込めたわらべ歌ができたのでございましょう。文章博士のこの身、雷神さまと語らった折には、

　とおりゃんせなぞ、わが身の性にして言い訳につかわれるとは、
　ども、かなわん！

とご立腹でございました。しかし、人の世は・・・と、おもてを伏せてしまうことの多いことでございます。

　えっ、かごめの意味をお知りではない？かごめは籠目でございまして、囚人を移送するときに乗せて行くものでございます。その囚人が解き放たれて牢から出ることのできるのは、よあけのばんに、つまり夜が明けて、その囚人の番になって、つるとかめがすべるような不吉なことがその身を襲い、うしろのしょうめんに首切り役人が立った後ですよ、だから後ろに立った人を知ることは出来ずにおわるのですよ、と歌っているのです。これが一番怖い謂れでございますが、ほかに苦海に沈められた女郎が籠の鳥で、何時いつ出られるのかと心待ちにしていても、腹に誰の子ともわからぬ子を孕み、それを流そうと、女郎屋の誰かに階段の上から突き落とされて・・・、といった意味が込められているとも言われたりします。

　赤い靴は、大正のある時期では有名な話でございました。北海道で食い詰めた夫婦の子供を宣教師が連れて行き、夫婦はそれを彼らが養女にしてアメリカに連れて行ってくれたのだと思い込んだのでしたが、白人が黄色い猿を養女などにするはずもなく、女の子は孤児院に放り込まれ、そこで病気になって９歳で死んでしまいました。それを後に知った夫婦が我が子の運命を嘆き悲しんだ話を知って、詩人が歌にしたのがこの歌でありました。シャボン玉の話はもうよろしゅうございましょう？

それにしても、日本には神さまのおおいこと。ちなみに、かみさまと書いて、神様と漢字に表記するのは不敬に当たるのでございます。神さまとお書きくださいましょう。神は人ではありませぬ。人は様、神はさまなのでございます。おっと、口はばったいことをもうしあげました。神となった身で、人に指図がましい物言いでございました。

いつぞやの神在月で出雲に参った折り、つくづくと感じ入ったのがこのことでございました。八百万のと称しますが、記紀にあらわされた神々の正統から離れて、この日本には多くの神が在らせられます。たとえば付喪神なる神があらせますが、これは　つくもかみ　と称します。これについて、室町の御代に付喪神絵巻なるものが表されております。そして、絵巻の冒頭に、

陰陽雑記に云ふ。 器物百年を経て、化して精霊を得てより、人の心を誑かす、これを付喪神と号すと云へり

とあります。だが、これが神さまであるかどうか・・・。また、陰陽雑記なる書物についても、実は文章博士のこの身も、とんと知り申しませぬ。

では、付喪神が神かどうか疑わしいとなると、何者なのか。それは、物の怪、妖怪のたぐいではとおもわれます。しかし、それだからといって何故、妖怪とは区別して神号を称するのでしょうか。それは、ふるさびた道具でも100年という年月を経ると精霊を得て付喪神に変化し、狐や狸にも神が宿り、精霊が籠って神なる身になると信じられたのでござりましょう。人の身に帰れば、古いもの、１００年を経た物を粗末には思えず、畏怖する心持が働いて神とあがめたのかとおもわれます。勿体ないの、日本人の精神が産んだ神かもしれませぬ。勿体とは仏教用語で、本来あるべき姿の事を意味します。この勿体が十分生かされておらず無駄に待っているのを残念におもう気持ちをあらわしたのが、勿体ないということでありました。仏教の事とて、充分には解りませぬが。

さりながら、狸の妖怪の頭に五徳が乗り、一本足の傘に一つ目が光っておれば、まさに物の怪でございます。しかし、日の本の民は、折れたり錆びた針も針供養し、書き古した筆は筆供養してまいりました。暮れの大掃除も、この習慣の流れの上のことでございました。物を大事にし、もったいないと思う心が産んだ神であったと思っております。そも、妖怪などと、面白おかしく語り出したのは、江戸の事。参勤交代で出府した大名たちが城詰めで城内にあっても常は何もすることがなく、退屈まぎれに、当地には斯様な妖怪がござってな、とほら話をして楽しんだのが大元で、そのような話題を持ち合わせぬ殿様が負けてはならじと家臣どもに探させ、時にはでっち上げさせてお披露目したのが、後の世の妖怪話のもとでありました。その先の世の、ゆるキャラなるものの走りでござりましょう。

ときに民は、わざの優れた人まで、＊＊の神さまとたたえます。大工の神さま、和食の神さま、漫画の神さまもおりました。２１世紀ではこの表し方が、鉄人と変わっているようでございますが、昔は達人と言ったのでした。しかし、生きた人を神にする前に、料理の神さまも大工の神さまの、お菓子の神さまさえ、本来の神さまがおわします。記紀には屋根の神さま、戸口の神さま、井戸の神さまも、お生まれになったとしるされております。もっとも、今ではトイレの神さまさえ歌われております。これとて本来の神さまがおられるのが、この日の本でござります。

おおっと、鴉が飛びました。熊野大神さまからの使いでしょうか。そういえば、私も牛を連れております。昔は、遠くへ赴くとき、牛殿に乗せて行ってもらい居り申した。他に神使と言えば、先ほど文を届けてまいった熊野三山の八咫烏殿、鼠は大黒天、海蛇の出雲大社、そして、金比羅宮の蟹、稲荷大社の狐と大方の動物は祭られております。しかし、これはあくまで神使であって、ご祭紳としてお祀りしているわけではございませぬ。そうそう、そういえば神宮は・・・、伊勢神宮とお呼び申すのは不敬であります、神宮と称されるのは伊勢だけでござって、唯一例外は明治政府が作りました明治神宮であります、しかし、それでも神宮というのは伊勢のみなのでございます。その神宮の神使は鶏でございます。といえば、早やご想像がつきましたでしょう。古事記にある、天岩戸にお隠れになった皇祖、天照大神を鳴き声をあげてお迎え申した謂れのゆえに、鶏がいまも神使であるのでございます。よって、20年毎に行われる「神宮」の式年遷宮（シキネンゼングウ）の際に、「鶏鳴三声（ケイメイサンセイ）」という､遷宮を象徴する儀式があり、「カケコー」という鶏の鳴き声が三回唱えられ､つづく勅使の「出御（シュツギョ）」の声とともに､神が新宮に遷(移）られるのでございます。

しかし、金比羅宮が蟹であるとは・・・。若き日の仁和）2年から寛平2年までの4年間、国司、讃岐守として讃岐で時を過ごしておりました。にもかかわらず、そうとは知しりませんだのは不覚と言うもの。しかし、この讃岐に、崇徳院様が流刑とされ申されるとは、なんの因果でございましょう。院ご自身には何の企むところもござなく、ただ一方の頭と担がれ申したにすぎませぬのに、保元の乱にお敗れ申され、悲惨な運命に流され申された。そして最後には鬼神となられてご崩御されました。ことに慌てた国司どもは、京に急ぎの使者をたて、朝廷のご意向を伺ったのでございます。そのあいだ、ご遺体を放置できず、腐乱せぬよう沈めておいたのが、八十場でございました。今の世も、冷水が泉に溢れんほど豊かに湧きい出ておりますが、その透明な水の中にご安置申し上げていたとは、その不敬さに身の毛もよだつ思いでござります。そして、そのことについての朝廷のお達しは、この地に葬るようとのことでありました。それが崇徳天皇白峰御陵でございます。それにしても、お隠れ遊ばされた後まで、都にお帰りになることをお許しにならなかった朝廷の仕打ちは、いかがなものかと思い偲ばれます。よってでしょうか、左記の通り、都は大異変におそわれました。その様子は保元物語に詳しく書き残されております。そしてついに、あの崇徳院流刑のもとになった保元の乱で台頭してきた武士たちへ、世は次第に移ってまいることとなったのでございました。

　それかこれか、以来、我らが首座は崇徳院さまと相成り申したのでございます。しかし、院、最初に出御遊ばされた折には、思いのほか落ち着いておられ、ご崩御の折とは違って髪形、ご装束も整えられてあそばされました。それもこれも西行のお手柄かとおもわれます。そのことについては雨月物語に詳しく書き残されておりますが、西行の働きは誠に殊勝なことでありました。

　この西行、讃岐の国は善通寺、吉原の山麓に庵を結び、五岳の山を巡って仏道修行と歌作に励みました。と申しますのも、かつての主上、崇徳院の菩提を弔おうと讃岐の国へ旅してまいったのでした。そして善通寺に落ち着くと、白峯に参ります。そして御陵の前で、まずは読経し、歌を詠みました。

　松山の浪のけしきはかはらじをかたなく君はなりまさりけり

すると、圓位、圓位と呼ぶ声がし、

　松山の浪にながれてこし船のやがてむなしくなりにけるかなと返歌がありました。それによって、西行はその声が崇徳院のものと気づきます。

　崇徳院は、

　瀬をはやみ　岩にせかるる　滝川の　われても末に　あはむとぞ思ふ

というお歌が百人一首にも残されておられます通り、希代の歌詠みであらせられました。それ故か、武士でありながら歌の才に恵まれた佐藤 義清とは歌の友として親交をふかめました。この佐藤某は、二十一の歳にして仏門に入り、法名を西行と改め、漂泊の歌人として諸国を遍歴して廻っておりましたが、崇徳院がご崩御遊ばされた4年後に、讃岐の国へ参ったのでした。。その時西行、51才。当時としては最古老ともいうべき年齢でありました。それでも西行を讃岐の国に向かわせたのは、院への敬愛の思いからであったのでござります。

　朝廷は、院、ご崩御のあと、京に異変が多々続きましたので、最初、讃岐院と贈名申し上げたのでしたが、これでは治まらないと思ったのか、崇徳院と改められたのでございました。それでも院の御霊を京にお迎えになりませんでした。そのような朝廷のご意向にかまうことなく、西行は讃岐に参ったのでございます。それは、敬愛する崇徳院の荒ぶる御霊をお慰めしたかったからでもありました。そのくだりについて、雨月物語では、

　　仁安三年の秋は
　　葭がちる難波を経て
　　須磨明石の浦ふく風を身にしめつも
　　行く行く讃岐の真尾坂の林といふに
　　しばらく笻を植む
　　草枕はるけき旅路の労にもあらで
　　観念修行の便せし庵なりけり

と書かれてございます。

　　願はくは花の下にて春死なむ　その如月の望月のころ

と謳った歌人の姿が奥ゆかしく偲ばれることでございます。西行は、

　　この里ちかき白峰といふ所にこそ
　　新院の陵ありと聞きて
　　拝みたてまつらばやと
　　十月はじめつかたかの山に登る

と、五色台に登ります。そして、その御陵の粗末さに涙いたします。

　　木立わづかに間たる所に
　　土墩く積みたるが上に
　　石を三かさねに畳みなしたるが
　　荊蕀薜蘿にうづもれてうらがなしきを
　　これなん御墓にやと心もかきくらまされて
　　さらに夢現をもわきがたし

そして、そこで読経し、歌を詠んで、供養いたします。その西行の前に、院がお姿をお現しあそばされ、西行に語り掛けるのでございました。

　圓位、圓位

と呼ばれたのがこのあとでござります。

西行はそのお墓の粗末さに涙します。
木立わづかに間たる所に
土墩く積みたるが上に
石を三かさねに畳みなしたるが
荊蘇薜蘿にうづもれてうらがなしきを
これなん御墓にやと心もかきくらまされて
さらに夢現をもわきがたし

紫宸清涼の御座に
朝政きこしめさせ給ふを

つかふる人もなき深山の荊の下に神隠れ給はんとは
万乗の君にてわたらせ給ふさへ
宿世の業といふもののおそろしくもそひたてまつりて
罪をのがれさせ給はざりしよと
世のはかなきに思ひつづけて涙わき出るが如し

紫宸殿清涼殿にて、百官のかしこみておつかえもうしあげる御身であらせられましたものを、かくもはかなきことになりおおせたまい、と西行は涙いたします。そこへ声を掛けられ、西行は背高く痩せ衰えた姿はわかるが、顔のかたち着たる衣の衣紋も見えない異形の者がこなたにむかって立ってるのを、闇の中に見出します。
彼の人がいいます。
前によみつる言の葉の
かへりを聞えんとて見えつるなりとて
喜しくもまうでつるよ
それが新院であらせられることに気付き、西行は
地にぬかづき
涙を流していふ

さりとていかに迷はせ給ふや
ああ、何故お迷いになってここにお出ましになられたのか。お姿をお見せ頂いたことは、いかにも有難いおんことではありますが、悲しいお心でありまする。そして今はもう、ひたすら隔生即忘して仏果円満の位に昇らせ給えと心をつくして諫め奉ります。しかし、
新院呵々と笑はせ給ひ
汝しらずや近来の世の乱は朕がなす事なりし

と仰せられます。この呵々と笑はせ給ひという書き方は、江戸期に流行った勧善懲悪の読み物に見られる、唐風かと思われます。上田秋成と同時代人の滝沢馬琴にも同様の言い回しが見られます。それは別にして、この後、院と西行は、怨霊と歌人の論争とも思えない激しさで論じ合います。かたや西行は、日本書紀の仁徳紀にある大鷦鷯の王、菟道稚郎子の皇位相譲の話を例に出して王道の観点から論じます。それに対して院は、易姓革命論の観点から論じます。

　　汝聞け
　　帝位は人の極なり
　　若し人道上より乱す時は天の命に応じ
　　民の望に順うて是を伐つ

さりながら、院の申し条は西行に言い負かされ、結局は院の私怨であるとの本音を引き出します。しかし、このあと、院は、経沈めの一件の後、保元の乱でで敵方に回った者たちを深く恨み、平治の乱がおこるように操ったと言います。そのとき、、大風がおき、ここで初めて院の、異形の姿が顕わになります。さらにまた、配下の天狗、相模もやってまいります。そして、院は、恨みの重なる平氏の滅亡も予言します。西行は、この院の浅ましい姿を嘆き、一首の歌を詠むのです。

　　よしや君昔の玉の床（とこ）とてもかからんのちは何にかはせん

それを聞し召した院の玉顔がわずか穏やかになられ、御姿も次第に薄くなり、ついには消えておしまいになられたのでございます。

　朝を迎え、西行は西行は金剛経一巻を供養し、山を下ります。その後、西行は、このできごとを誰にも話すことはありませんでした。それでも世の中は、院の仰せの通りになっていったのでございます。

　まこと、戯作者のおつむりには、時として神がやどるのでございます。院こそ、なにも仰せにはなりませんが、われとて神の身、実状を察するに支障はございません。

　　いまも、

　臣下、道真、おそれながらもうしあげます。

とお仕えもうしております。

さりながら、院の大御心を拝し奉ることなど、臣下の身で出来るはずもなく、その後の院の式年祭前後の大変を窺い知ることなどできは致しません。百年祭の折には元が国交樹立を求めてまいり、後の元寇の乱という大動乱に見舞われ、二百年祭には南北朝の乱、三百年債では応仁の乱、四百年さいにあっては室町幕府の滅亡、五百年祭は明暦の大火と禁裏御所炎上、六百年祭の明和事件、そして七百年祭では明治維新が勃発することになります。こう数え上げても、あな恐ろしきことしきりではございますが、これとて、みな院の崇りでございましょうか。思うだにおそれおおく、僭越のきわみでございます。

しかし、明治天皇は、自らの即位の礼を執り行うに際して勅使を讃岐に遣わし、崇徳院の御霊を京都へ帰還させて白峯神宮を創建され、御霊を御慰め申されたのでございます。さらに昭和天皇は、東京オリンピック開催に際して、今の香川県坂出市の崇徳天皇陵に勅使を遣わし、崇徳天皇式年祭を執り行わせ、今上天皇も、未だ皇太子であらせられた時、崇徳院御陵に参られております。常陸宮正仁親王も同じでございました。

どうか西行の歌を思い出されて下されて、お心をお沈め参らせて下さりませと思うだけでございます。

では、院の出御以来、平将門公はいかがしていたかと言うと、彼の人はずうっと下にさがってこうべを垂れ、控えているだけでございました。それも致し方のないことでございます。将門公は昇殿を許されない　しもひと、地下でありましたから。さらに、かつて公は東国の天皇を名乗ったのですからなおさらのことでございます。

しかし、それについて、院がどのようにご思慮あそばされておられるかなどとお尋ねもうすことなど出来ようはずもありません。臣下のみで、貴き御方に、先にお声をおかけ申したり、新院さま　とお呼びかけ申し上げることなど不遜のきわみでございます。ひたすらご下問を待ち、それについてのみお応え申し上げるのが作法。それも、二重に敬語を用いてお応え申し上げ、新院さまにもうしあげるとか、主上と、新院さまを指していることがはっきりと分かる呼び方などしてはなりません。かしこきあたり　とか　たっときおんかた　、上御一人と婉曲的に申し上げるのが本当でございます。明治以来、何かの折に、軍隊がいつも　天皇陛下　万歳　と三唱するような馬鹿なことを当たり前に行うようになりましたが、あれこそ南北朝の悪侍さえしなかった不作法でございます。

時すぎて、かようにご下問をお待ち申し上げ、目を伏せておりますと、ふっとお上の影が揺らぐことがございました。それも、端正なお姿の影が、髪ふり乱した大天狗の影に変わるのでございます。ほんの一瞬のこととて、ただ恐ろしく、じっと目を伏せていなければならないのでございました。

その将門公が青筋立てて怒っておいでのことがありました。どのようなことでお怒りかというと、相手は稲荷と七福神でございました。

稲荷神と申しますと、ああ狐かとお思いでしょうが、だからと言って、それを一概に否定するわけにもいかない事情がございます。と申しますのも、稲荷神は元々は京都一帯の豪族、秦氏の氏神でございまして、この秦氏というのが東漢氏などと並び有力な渡来系氏族であったのです。故にか、秦氏は秦の始皇帝の末裔などと大げさな氏族伝承もございますが、本当は日本書紀にある通り、百済系渡来氏族にして、弓月君が百済の120県の人民を率いて帰化したのだと言われております。つまり、あの白村江の戦いに敗れ、この大和の国に亡命してきた氏族であったのです。これは大きな声では申せませんが、あの戦いで高句麗と本当に戦ったのは我が方だけであって、この人たちは戦意のかけらもなく、我が方の後方に、這う這うの体で逃げてしまってたのでした。ゆえに多勢に無勢、敗北を喫してしまいました。だからといってそのあと、この者たちを見捨てるわけにもいかず、少ない軍戦に乗せてこちらに連れ帰り、それなりの待遇を与えました。それで恩を売ったということでもなかったのですが、秦氏はその後、摂津豊嶋郡など各地に土着し、土木や養蚕、機織りなどの技術をもって大いに栄えたのでございました。そして時を経て更に各地に渡り住み、各地で産業を興し、なかには朝廷の財務官僚に登り詰めたものもおります。平安遷都には彼の者たちの財力、技術力が大きく寄与致しました。東儀氏もその流れでございます。

その秦氏がこの国に持ち込んだのが、稲荷神社であったことは申し上げました。その稲荷神社には、貴狐天皇つまりダキニ天、また　ミケツ　野狐　狐　飯綱ともよばれる三狐が祭られていることもあるのでございますから、半ば、稲荷は狐で間違いはないといわなければなりません。さらに、稲荷系の神社では、玉藻の前つまり九尾の狐が化身した絶世の美女の玉藻御前を祀ったところさえございます。

さて、この玉藻の前とは、平安の世の末、鳥羽上皇に仕えた絶世の美女のことで、この美女が実は二尾あるいは九尾の狐が化けたものだったという伝説がございます。その伝説の初出は史書の神明鏡の鳥羽院の条に見られます。次いで能の殺生石、御伽草子の玉藻の草子と、次々と語られます。こうもしげく語られるところを見ると、一概に絵空事、伝説上の事と言い捨てられぬものがありそうです。

それによると、世のまつりごとに倦んだ上皇さまが、一八歳にして宮中に使えるようになった女官、玉藻の前に魅かれ、その美貌と博識にのめり込んでゆかれます。ところがそれと軌を一にして、上皇さまは次第に病で床に伏せるようになるのですが、朝廷の医師にもその原因が分かりません。しかし陰陽師安倍清明が玉藻前の仕業と見抜き、安倍が真言を唱えると、玉藻前は変身を解かれ、白面金毛九尾の狐の姿で宮中を脱走し、行方を眩まします。

その九尾の狐、那須野の方で婦女子をさらったりの悪戯が宮中にも伝わり、上皇さまは、陰陽師安倍清明を軍師として討伐の軍勢八万余を派遣いたします。ところが狐の術に惑わされ、兵の大半を失います。しかし、これではならじと様々な手立てを講じて再度討伐に向かい、狐を追い

詰めます。そして命乞いする狐を撃ち果たすのですが、途端に狐は毒の石に変身し、多くの人や動物の命を奪うようになります。それを村人たちは殺生石とよんでおりましたが、これを和尚が破壊してしまいます。石は粉々に砕け、各地に飛散してゆきます。

実はこの話は版下がありまして、古代中国王朝殷にまでさかのぼります。その殷の最後の王である紂王の后、妲己の正体は齢千年を経た九尾の狐で、王の妾であった寿羊という娘を食い殺し、その身体を乗っ取って王を惑わせました。王と妲己は、暴君ネロもかくばかりかというほどの暴政を敷き、酒池肉林の果てを尽くします。ところが殷は、周の武王によって滅ぼされ、紂王も妲己も捕縛され、処刑されることになります。ところが妲己だけは妖術をもって処刑人たちをたぶらかし、首をうてなくしてしまいます。そこに現れるのが太公望でありまして、この太公望が照魔境をかざして妲己に向けると、正体が現れ、妲己は九尾の狐となって逃げようとします。それに向かって太公望が宝剣を投げつけると、九尾の狐の体は三つに斬られ、別々に飛んでゆきます。

しかし、話はまだ終わりません。その後、天竺、周に表れ、暴虐の限りを尽くします。、天竺の耶竭陀（まがだ）国の王子、班足太子（はんぞくたいし）の妃・華陽夫人として再び現れ、王子へ千人の首をはねるようにそそのかすなど暴虐の限りを尽くすのです。また周の第十二代の王、幽王の后褒姒も九尾の狐と言われます。

更に、本邦には妲己のお百と二名　ふたな　された悪女が河竹黙阿弥の手によって登場します。このお百京都九条通りの貧しい家で生まれたのですが、大変な美貌で、14歳で祇園中村屋の遊女となり、それによって鴻池善右衛門に身請けされます。ところが、これに飽き足らず、江戸役者津打友蔵と姦通し、江戸に下りまして、友蔵が悲運の死を向かえると、新吉原の尾張屋清十郎の女房に居直ります。そこからさらに、佐竹家の臣である那河忠左衛門の妾となり、秋田藩の御家騒動に加担します。しかし、那河は処刑されますが、名を「りつ」と改めていたお百は妾、つまりは奉公人であるとしておとがめなく、間もなく江戸に出ます。そして更に高間騒動の高間磯座衛門の妾となり、世間をにぎわすことになるのです。その間男性を殺害すること五度にわたり、まさに悪女として、妲己のお百と二つ名で呼ばれて名を残すことになります。

このように九尾の狐は、中国、古代インド、日本と三国をまたにかけ、三千年にわたって転生を繰り返しながら男を惑わす美女となり、国を滅亡させようとしたのでした。

しかし、何か違和感を覚えるのでございます。将門公のお怒りもそこにあるようです。確かに、それゆえに妖怪、悪霊かはしれませんが、九尾の狐が何故そこまでして人に祟り、国を滅ぼそうとするのか、解せません。妲己は、そこにこれといった理由もなく、ただ自分が歓楽を貪ろう、自分の享楽を満たそうとしていただけのようです。自分の欲望を実現しようと、そのためには他を犠牲にして何も憚らない、まさに鬼畜、妖怪の仕業と見えてきます。そこに本邦とは入れ合えない、大陸のかの国の精神が見えてくるのです。

つい、ながながと語ってしまいましたが、将門公の抱く違和感は、後の牡丹灯籠とか白蛇伝などの、中国伝来の説話に依るものにも通じるのでございます。文章博士であったものの性でありましょうか、この違和感は気になります。また、将門公の潔癖なご気性も、口に出して語れぬもどかしさから、稲荷大明神に角突き合わそうといたすのでございます。将門公も神田明神、稲荷も明神、しかし彼の神は本地を奪って狐が御神体になるという不思議さ。そのうえ、三大稲荷の一つ、最上稲荷は正式名最上稲荷山妙教寺という日蓮宗のお寺であります。にもかかわらず、そこから受けたお札は門前の神棚を贖っているところで神棚を買い求めて、そこに納めるのです。神なのか仏なのか、はっきりしろ、と将門公は言いたいようです。さにあらず、さにあらず、将門公よ、神は仏、仏は神、聖徳太子さまの時代から、我々は左程気にせず拝んできたではないか、と語ってお聞かせ申したのでありました。

ただ、お気を付けあそばされ。稲荷は怖い神であります。戦国を終わらせた信長も稲荷を信仰致したのでありました。すると、秀吉も家康も稲荷に頼ったのです。稲荷はそれほどに霊力を持っておりました。しかしながら、稲荷は見返りを求めます。まるで、悪魔との契約のように、何かを差し出さねばならなくなります。信長は本能寺の変、秀吉は朝鮮の役の愚行の果て、家康はてんぷらを食べ過ぎての頓死でありました。本尊、荼枳尼天を乗っ取って、狐が御神体になりおおせた神であります。詳しく申せば、荼枳尼天とは、仏教の鬼神であり、、密教では、胎蔵界曼陀羅外院にあって、大黒天に所属する夜叉神の一体であります。この夜叉は、自在の通力をもって6か月前に人の死を知り、その心臓を食うといわれております。それが日本では狐の精とされ、いつの間にか稲荷信仰と混同されて行きます。さらに混同はいや増して、妲己の九尾の狐さえ御神体と仰ぐのですから、将門公のお怒りはごもっともなことです。

同じく狐と言えば、

恋しくば尋ね来て見よ 和泉なる信太の森のうらみ葛の葉

の葛の葉の伝承ならば、なお我らの心にしみるものがあります。こちらがたの信太森葛葉稲荷神社は、今の大阪府和泉市葛の葉町の市街地に鎮座する神社で、ご祭紳は同じく狐であります。ここにも物語があって、村上天皇の御代に河内の国の石川悪右衛門衛門衛門が、妻の病を治そうと兄の芦屋道満の占いによって、信太の森の野狐の生き胆を手に入れようと狩をします。そこへ安倍保名が通りがかり、白狐を助けます。しかしその時保名はけがをしてしまいます。そこに葛の葉という女性がやってきて、保名を介抱して家まで送りとどけるのです。それを機縁に、葛の葉が幾度か保名を見舞っているうち、いつしか二人は恋仲となり、結婚して童子丸という子供をもうけます。その幼名童子丸が5歳のとき、葛の葉の正体が保名に助けられた白狐であることが知れてしまいます。それで葛の葉は先の一首を残して次の一首を残して信太の森へと帰ってゆきます。

恋しくば尋ね来て見よ 和泉なる信太の森のうらみ葛の葉

この童子丸が、陰陽師として知られるのちの安倍清明です。

父、保名は書き置きから、恩返しのために葛の葉が人間世界に来たことを知り、童子丸とともに信太の森に行き、葛の葉と再会いたします。しかし姿をあらわしはしたが、もはやともには暮らせぬと葛の葉は告げ、水晶の玉と黄金の箱を童子丸に渡します。

数年後、童子丸は晴明と改名し、天文道を修め、母親の遺宝の力で天皇の病気を治し、陰陽頭に任ぜられることになります。しかし、芦屋道満に讒奏され、占いの力くらべをすることになりります。しかし、結局これを討ち負かし、道満に殺された父の保名も生き返らせて朝廷に訴え、道満は首をはねられて、晴明は天文博士となったのでございます。

安部清明の母は狐と言われるのは、このことからでございます。さりながら、おなじ狐を祭紳とするにしても、妲己、九尾の狐とはちがって、すっと腑に落ちる思いのする縁起であります。

などと、日本三大祟り神と言われた私どもが、九尾の狐を訴追するわけにもいきますまい。悪霊もお鎮まり願ってお祀りすると、心強い守護神とおなりいただけるとするのがこの国の在りようでございますから。

そうそう、この安部清明もほかに讃岐の国の出身であるという説もあります、また、九尾の狐ならぬ荼枳尼天を時の帝の要請で召喚致したのは、空海であったともいいます。さらに崇徳院さまの流刑地が讃岐であり、私の先の赴任地も讃岐で在りました。讃岐は１２００年前、大霊地でありました。

将門公が怒っておられるもう一つの神々が、七福神でありました。

七福神とは、大黒天、毘沙門天、恵比寿天、寿老人、福禄寿、弁財天、布袋尊の、七方の神の総称でございます。なぜ将門公が、この方々においかりなのでしょうか。将門公は、この福々しい神々を似非物じゃと断じます。

なにが商売繁盛じゃ、なにが七難即滅、七福即生じゃ。この神の中で、日の本の神は恵比寿天だけではないか。

と口角泡を飛ばして両断いたします。その通り、恵比寿天だけは、日の本の神であらせられます。しかも、この御柱は、伊弉諾、伊邪那美命の第三子でございます。この貴き由縁をお持ちの恵比寿天さまは、その出自は悲惨でありました。お生まれになって三年、歩くこともならず、口もきけない御身でありました。伊弉諾、伊邪那美の命はこれを悲観し、お子を足の船に乗せて海へ流されたのでございました。

その船が流れ着いたのが摂津の国西宮で、お子はそこで大事に育てられ、手厚く祀られました。これが恵比寿天の由来でございます。それゆえ、恵比寿天は漁業の神さまであり、航海の神さまで、後に商売繁盛の神として信仰されるようになったのでございます。

しかし、古事記の時代に、口もきけない足萎えのお子が生まれることもあると解っていたことがおどろきでありました。いや、昔々はそのようなことが多々あって、そんなお子は船で流して、海に返したのやもしれません。おえべっさん、えべっさんと呼ばれ、ほとほとに笑う顔を恵比須顔といって親しんでおります恵比寿天さまに、そんなご事情があったとは、解らぬものでございます。

布袋さまには尊とついております。布袋さまは人間であったからです。元は中国の僧侶で、そのお姿は大きなおなかの布袋腹に、大きな袋をかついでおり、よく画題として好んで描かれてまいりました。いかにも福々しく、親しみやすい神さまであります。よく禅宗の僧侶と言われますが、そうでもなさそうで、その出自は解っておりません。ただ

布袋が死の間際に残した偈文が、

弥勒真弥勒　分身千百億
時時示時分　時人自不識

弥勒は真に弥勒の分身千百億なり
時時に時人に示すも時人は自ら識らず

と死の間際に偈文を残したので、布袋尊は弥勒菩薩の化身と言われるようになったのでございます。ただ、あの大きな袋は腹袋といわれますが、堪忍袋であるともいわれます。

　このように七福神さまをご紹介いたしても、退屈になるだけでございます。ただ七福神さまの大半がインドからの外来神であることは言わねばなりますまい。布袋さまは中国の僧侶であることは申し上げました。他の大黒天、毘沙門天、弁財天の方々は、元はインド、ヒンズー教の神さまであります。寿老人さまは布袋さまと同じ中国、道教の神さまでござります。将門公はこの神々さまに、

　姿を見せろ！本性を現わせ！

と怒っておるのでございます。七福神信仰は室町から江戸期になって確立した信心でありました。それはまさに金運、商売繁盛、名利栄達などの現世利益を願う信心でした。されど、それを卑しんではなりませぬ。庶民の願いは切実でありましたから。

　一向に取り合わぬ七福神さまたちに、苛立った将門公はついに栗毛の馬に乗り、大得物のなぎなたを掻い込んで立ちいでたのでありました。

　やい、大黒天、毘沙門天、いざ一合交わさん！

すると、いままでの悪口雑言を腹に据えかねていたのか、大黒天の姿が揺らめき、大国天の姿が消えて大暗黒天があらわれいでました。毘沙門天も同様に、戦いの姿でいでたのであります。宝棒を持つのは毘沙門天。大黒天は七宝のはいる袋から、剣をとりいだしました。この大黒天は元、あの荼枳尼天を大日如来の命で取り押さえ、屈服させたほどの勇猛にして必勝の戦闘神であります。

　さて、将門公の出で立ちはと見てやれば、赤地の錦の直垂に萌黄威の鎧着て、鍬形打ったる甲の緒を締め、金作りの太刀を帯き、二十四差したる切斑の矢を負い、滋藤の弓もって連銭葦毛なる馬に金覆輪の鞍おいて乗ったりける。

　かたや大黒天、錦もあやな唐服に白銀の宝冠をかぶり、同じく白銀の鎧着て、手に海老名小手をきりりと巻き、宝剣をもって将門公の前に立つ。毘沙門天はとみれば、宝棒を斜に構え、今まさに撃って出でんと身構える。

　将門公の天馬地を蹴り、怒涛のごとく宙を駆け、二神の元へ撃ち出でたり。公の長刀、刃風を巻いて打ち下ろされ、大黒天を襲ったり。大黒天はひらりとかわし、宙を舞って剣をもって長刀をはらう。打ち合う撃鉄の火花は飛び、暗雲風を巻いて空を舞う。火花は雷鳴を呼んで鳴り響き、稲妻どうと地に落ちる。その傍らの毘沙門天の宝棒、将門公を撃ち据えんと襲い掛かる。天馬これを避け、宝棒、公に届かず。代りて公の長刀、毘沙門天の胴をかすめる。その刃風、嵐を巻いて地を払う。毘沙門天、これを宝棒で受けたりけれど、長刀の力に負けて宙に舞う。そこへすかさず大黒天、公の頭上に剣を打ち下ろしたり。公は長刀をもってこれをはらい、天馬とともに一跳す。

　と、迦陵頻伽の響き在り。あらわれでたるは吉祥天に弁財天。暗雲一気に晴れて、雷鳴も止む。

　おん神々、もはや戦いは無用と心得召されて、お引き下されたく存じ候。

その声に、空は五色の雲が棚引いて、花さえも舞う。

　今まさに戦いの真っ最中。ここで引いてなるものか。
将門公が大音声でのたまった。天馬は今にも宙を駆け、大黒天は憤怒の炎で地を走らんとする。毘沙門天は地を蹴って、宙に舞わんと身を構える。
　じゃらん
弁財天の琵琶が鳴った。その奏法の華麗なこと。掻撥、割撥、スクイ、ハライ、打撥と、琵琶から出でる色とりどりの音色の、宙を舞うかの心地さえする。弁財天の唇からは、嫋々と平家の公達の最期を語る音曲が語られる。おもわず神々も誘われ、聞き入ったり。
　おん神々、地をご覧くださりましょう。神々の戦いで地は割れ、山は崩れ、海は荒れ狂っておりまする。人々の逃げまどうさまが見えませぬか。もはやこれまで。得物をお納めくださりませ。
吉祥天の声が響いた。
　なおお聞き入れ賜らん時は、大日如来さまにお出ましいただきまする。
暗黒天、毘沙門天が思わず引いた。天部の神将たれば、それも当然。
　将門さま、もう気がお済みでしょう。
　管公か、そうさな、もはやこれまで。
そういうと将門公も長刀の刃先を下した。

　のちに、なぜ吉祥天さまがおでましになったのか、おたずねいたしましたところ、吉祥天さまは、
　弁財天に頼まれました。
とお答えでした。
　七福神は、その始まりに私が唯一女紳として加わっておりましたが、庶衆が迷い、弁財天に代わったのでした。
そうでした、弁財天は庶衆を惑わしました。いまもひょっとすると、胸もあらわに、一糸まとわぬ裸弁財天が安置されている神社もございます。もっとも、女人の裸を禁忌とするは、近世の事。天宇受売命の昔から、さほどの事とはおもわず、暮らしてまいっておりました。いまの世でも、女性の裸は禁忌としている西洋諸国で、サウナなる風呂では男女とも素裸が普通であり、さほど意識もしないようなお国も多くあるようでございます。
　おっと、横道にそれ申した。弁財天さまは、神々の戦いを止めるのに、自分一人では心もとなく、同じ女紳にして上の神で在らせられる吉祥天さまを頼られたとか。さもありなん。吉祥天さまが去られる際、弁財天さまに一言、
　ますこし、慎まれよ。
と言い残されました。吉祥天さまは先ほどの裸弁財天の事を嗜められたとおもわれます。その一言に、弁財天さまは、ただ俯くだけでありました。
　しかしそれでも解せぬのは、なぜまたあのように将門公は七福神さまに突っかかってまいったのかということです。
　なあに、久しぶりに血が騒いだだけでござるよ。
そういってからからとお笑いになりましたが、どうもそれだけではなかったように思われます。公は常日頃、大日如来、釈迦如来の守護神たちが、曼荼羅会天部の四天王、十二神将として、神ながら仏に使えることに疑問を抱いておられたようなのです。仏教勃興以前のヒンドゥー教の神々が、仏に屈服して仏を守護する神になるーそれが体系化されて天部となったことに、将門公は頷けないものをかんじていたのでしょう。たしかに、大黒天などは、宇宙の破壊神にして軍神、必勝の神であり、時、または暗黒を司る神でありました。ところが青黒い身体に憤怒相をした護法善神にかわるのであります。しかしてこの日のもとでは、大国主ノ命と名前が似通っているというだけで、まさに意図的に混同され、大国天としてふくよかな体形に福袋をかついだ福の神に成りおおせてしまいます。このあたりのいい加減さが。将門公には我慢ならなかったのではないでしょうか。因幡の白兎さえ、福袋から取り出した品々で救われます。神仏習合とは、かくもおおらかでありました。しかし、それもこれも、神道に確立された教義がないからでありました。
　それにしても、将門公はお強い！人馬一体となって、大黒天、毘沙門天の一撃必殺の攻撃をさらと躱し、なお二神を追い詰める業前は見事と言うほかはありませなんだ。地を走る大黒天の疾風の速さやいかに。宙を舞う毘沙門天の飛天の技もいかに。さりながら、それを上回る将門公と天馬の果敢さこそいかに！神々のいくさは、勝絶にして華麗な舞いをみるごとくでありました。

記紀の中に、悲劇の皇子さまがいらっしゃいます。日本武尊さまです。この表記の仕方が一般的ではありますが、古事記では倭建命と表されております。この倭建命さまはまこと武勇に優れ、それゆえおん名に武、建の文字を用いていると思われ、そのことを疑いもしないようでありますが、武、建を共にタケルとお読みするのはいかがなものかと思われます。武、建はともに野蛮を意味する卑語であり、それを尊号に用いることなどあってはならない事であります。されど、古事記、日本書紀共に、あえて武、建を用いております。この事一つをもってしても、この皇子さまが悲劇のおん方であることに間違いはありません。

おん父君、景行天皇はなぜそこまで倭建命さまをお嫌いになったのでございましょうか。この皇子様は、双子の兄弟の弟君だったと言われております。兄君は大碓命、弟君は小碓命と申されました。幼き頃は兄弟ともに仲良く致されておりましたが、成長するにしたがって大碓命さまは聡明にして気高くお育ちになりました。一方、小碓命さまは武勇に秀でておられましたが、少し気性も激しくおなりでした。

ある時景行天皇が、兄大碓命に美濃の国にいる兄比売（えひめ）と弟比売（おとひめ）の姉妹を召しつれてくるように申しつけました。そこで、兵を連れて美濃に出かけた大碓命は，二人があまりに美しい娘たちだったので自分の手元に置くことと決め，父の前には別の娘を差し出して素知らぬ振りをいたしました。しかし，これが父に知られるところとなり，大碓命は父の前に出にくくなくなります。さらに、朝夕の食事にも同席せず，大事な儀式に出なくなって父の怒りをかいます。そこで，父は弟の小碓命（ヤマトタケル）に食事の席に出るように諭してくるように命じました。小碓命は早々に兄に会い，教え諭します。しかし，それでも大碓命が顔を出さないので，父が小碓命にどのように諭したのかをたずねたところ，「朝，兄はどうしても言うことを聞かないので、手足をもぎとり、こもに包んで投げ捨てました。」とお答えになりました。このことが父君の心に何を宿したかは、恐れ多いことでございますが、臣下道真にも察することができるところでございます。

小碓命さまが１６才におなりになると、父君は九州の熊襲を平定するようにお命じになります。父より与えられた手勢はわずか。熊襲は武勇の鳴り響いたつわもの兄弟と聞こえておりました。それを討てとは、死にに行けと言わんばかりと、小碓命さまは叔母、倭比売さまに訴えます。すると、倭比売さまは小碓命さまに小袖をお与えになりました。

九州につくと、熊襲建は居城を新しくしたお祝いをにぎやかに取り行っておりました。そこで小碓命さまは倭比売さまに賜った小袖をきて宴席に舞い出ます。男とはいえ、いまだ童顔で色白な小碓命さまをそこいらにはべる小女と思ったか、兄の熊襲建は膝に抱き上げようといたします。そこを狙って小碓命さまは剣を振るって斬り殺してしまいます。それを見た弟熊襲建は、背を向けて逃げ出そうとしますが、小碓命さまはこれも倒します。小碓命さまに敗れた熊襲建は、その武勇を称え、建の名をもらってほしいと願います。小碓命をこれより倭建命と称えんと言い残したのです。由来、小碓命さまは倭建命とお名乗りになるようになられました。

倭建命となられた小碓命さまは帰路、山の神、川の神、川口の神、そして出雲建も征伐し、大

和にお帰りになります。

　こうして西征からお帰りになった倭健命さまは、そのご報告の後、体を休める暇もなく、直ぐに東伐へ向かうように命じられました。
　東の方の十二の国の荒ぶる神を倒し従わせてまいれ
と命令を下しになったというのです。そして八尋矛をお授けになりはしましたが、手勢はお与え下さらず、自ら集めなければなりませんでした。
　倭建命は東に向って旅立つ途中、伊勢の大御神宮に立ち寄って神に戦勝祈願をし、斎宮をしていた叔母の倭比売命＝やまとひめのみことに謁見してはらはらと涙をこぼしながらこう 訴えます。
　父天皇は私が死ねば良いと思っておられるに違いない。西征から戻ったばかりだというのに、もう東の悪しきまつろわぬ者どもを討ち果たせと申される。その姿を哀れと感じた倭比売命は、倭建命に、
　これを持って行き、貴方が本当に困ったときに開きなさい。
と小さな袋と神剣の草薙剣を手渡されます。
　こうして旅立たれた倭建命は途中、尾張の国にさしかかった時に尾張国造の祖、美夜受比売の屋敷に立ち寄ります。ここで倭建命は美夜受比売とは婚姻する予定でありましたが、 戦いの前でありましたので帰りに立ち寄った時に必ず婚姻しようと約束して再び旅立たれます。
　さて、無事東の荒ぶる神々、まつろわぬ人々を平定した倭建命は、さらに北上して相武の国にさしかかります。すると、その国の長から、この国の大沼に棲む悪い神を退治して欲しいと泣いて、懇願されます。倭建命は快く承知したのでしたが、これが御子を亡き者にする為の罠でありました。
　倭建命はその沼があるという草原に分け入って行きます。すると、相武の国の長は草原の端から火を放ちます。 枯れかけていた草原に火はなにしょうか、瞬く間に燃え広がり、ようやく倭建命も欺かれた事に気付かれます。
しかし火の周りは大変早く、逃げるにはもはや遅すぎました。その時倭建命は倭比売にもらった袋のことを思いだし、それを開けてみます。中には火打石が一組入っておりました。倭建命は早速剣を抜き、周りの草を刈ると自分の周りに安全地帯を作って、こちらからも火を放ち、迎え火をします。
　こうして危機を脱した倭建命は、このあと御子をたばかった相武の国の長を切り殺し、この辺一帯に火を放って焼き尽くしてしまいます。
　そして、このことから、神剣、雨叢雲剣は草薙剣と名をかえることになるのでございます。

草薙剣と倭建命さまは、このように数奇な関わりを持っております。草薙剣といえば、三種の神器の一つであります。ところが、この剣、倭建命さまの、うかとした振舞いで、とんでもないことになります。しかしながら、そのことを物語る前に、弟橘比売さまのことをお話しせねばなりません。

弟橘比売さまは倭建命さまの御后であらせられます。倭建命さまの軍勢は焼津から走水の海にさしかかります。ここで一行は船旅となりましたが、海が荒れて一向に進めもせず、それどころがあまりの嵐に船が危なくなりました。その時、倭建命の后である、弟橘比売さまが

これは海の神のお怒りに違いありません。私が人柱となって海に入りましょう。
といって、畳を八重に敷き、その上に皮を八重に敷き、またその上に絹を八重に敷き、それを波に浮かべると その上に乗って波間に消えてゆきます。

その時に弟橘比売が読んだ歌が
　さねさし　相模の小野に　燃ゆる火の　火中にたちて　問いし君はも
でありました。

こうして、后の姿がすっかり見えなくなると不思議な事に、あれだけ荒れていた海は瞬く間に静かになり、一行は無事に海を渡りきることが出来たのであります。

それから七日の後、海岸に弟橘比売の櫛が流れつきます。倭建命さまはその地に立派な御陵をつくり、比売の形見であるこの櫛をお治めになられました。

その後、倭建命さまの軍勢は荒ぶる蝦夷を平らげ、甲斐の国、科野国を巡って尾張国へと戻ってまいります。そして倭建命さまは早速約束を果たす為に美夜受比売の元に向います。しかしこの時比売には月のものが来ておりました。
そこで倭建命が読んだ歌
ひさかたの　天の香具山　利鎌に　さ渡る鵠（くぐい）　弱細　手弱腕を
枕かむとは　我はすれど　さ寝むとは　我は思へど　汝が著せる
襲の裾に　月立ちにけり
まま、すこしご辛抱を。これもなにかしらの意味あることでございます。

　さように眉をひそめずお聞きいただきたくぞんじます。なんと倭健命さまはここで草薙の剣をお忘れになってしまわれるのです。

　先ほどの倭建命さまのお歌に対して、美夜受比売はこうお歌をお返しになられます。

　高光る　日の御子　やすみしし　我が大君　あらたまの　年が来経れば　あらたまの　月は来経往く　諾な諾な諾な　君待ち難に　我が著せる　襲の裾に　月立たむなよ

　しかし、結局お二人は一緒に一夜を過ごされます。これが隠された暗示となって倭建命さまの身に起こる不吉事を予言します。こうなっては、もはや血で汚されては、のがれるすべもなかったのかと思われます。

　さて次の朝、倭建命さまは伊吹山の神を平らげに行く事になりました。この時倭建命さまは、

　この山の神は素手で殺して見せるよ

と豪語して、草薙剣を美夜受比売のもとにおいて出かけてまいります。その上、建さまは山に入るなり、出てきた白い猪に向って、

　お前はこの神の使いだな！後できっと殺してくれるぞ！

と言挙げをしてしまいます。しかし実はこの白猪こそ、この山の神であった為、大氷雨を降らせ、霧、霞などで散々建さまとその手勢を惑わし続けます。ついにたまらず、建さま達はその場で気を失ってしまいます。

　しばらくして意識を取り戻した一行は、ふらふらと玉倉部の清水にたどりつき、その時になってやっと意識をとりなおされます。そして、建さまとその手勢は、この地を逃げるように離れてゆくこととなります。

　倭建命さまは、どこか気が緩んでおいでたのでしょうか。ついうかうかと、真贋を見間違え、言上げしてしまわれました。言霊の木霊のようなはね返りを受け、身も心も千々に砕けるほどの痛手を負われてしまいました。

斯様なことがあって、倭建命さまのお忘れになった草薙剣は、尾張の熱田神宮に祭られております。そして、その熱田神宮を今もって守っておられるのは、美夜受比売のご子孫で在らせられます。

さて、すっかり体を弱らせた倭建命さまが、足をもつれさせてよろぼいながら歩んだ地が當藝であり、杖をおつきになって杖衝坂と名付けられ、私の脚が見えに曲がって歩けないと嘆かれた故、その地は三重と名付けられ、いまもそう呼ばれることとなり申したのでございます。

そして、もう一歩も動けなくなって倭建命さまの詠んだ歌が、

倭は　国のまほろば　たたなづく　青垣　山隠れる　倭しうるわし

でありました。父君にここまでの過酷な戦いの地に追いやられ、それでもなお

倭しうるわし

と詠んでおられたのでございます。

命の　全けむ人は　畳薦　平群の山の
熊白樫が葉を　鬘華に挿せ　その子

と、更に詠み、

愛しけやし　吾家の方よ　雲居起ち来も

と詠みかけ、容態が悪化し、それ以上はもう詠めなくなってしまいました。
しかし、心に残っていたのが、草薙剣のことでありました。

嬢子（おとめ）の床の邊に　我が置きし　剣の太刀　その太刀はや

と、しかし、これ以上詠みおおせませなんだ。そして、ここで倭建命さまは薨去されました。その知らせを受けて、ご家族たちは、この地に御陵を作り、その御陵の廻りの田んぼに這いつくばり、大声で嘆き悲しまれたのでした。
この時彼等が詠んだ歌、四首、

なづきの田の　稲幹に　稲幹に　匍い廻ろふ　野老蔓

浅小竹原　腰なづむ　空は行かず　足よ行くな

海處行けば　腰なづむ　大河原の　植え草　海處はいさよふ

濱つ千鳥　濱よは行かず　磯傳ふ

この四つの歌は、今においても天皇の大御葬の時に読み上げられる歌でございます。

この時、倭建命の魂は、八尋白智鳥に変化し、御陵を抜けて浜の方へむけ、天高く飛び立ってまいります。驚いた家族達は、木の切りかぶや小枝に足を切り裂かれるのもかまわず、痛いのも忘れて白智鳥を追います。白智鳥は大和の国をでて、河内の国の志畿（かわちのくにのしき）＊７に降り立ちます。それゆえ、この地には白鳥御陵が築かれます。しかし、白智鳥は更にこの地をも飛び立ち、遠く天の果てに飛んでいってしまいます。

長々と語り過ぎるほど語りました。おんみこの魂はどちらへ参ったのでしょう。いま、全国に白鳥神社が散在いたします。そのどれも、ご祭紳は倭建命さまです。記紀の中でも、このおんみこの物語は、このように長々と語られております。

気性の激しいおんみこは父に嫌われました。そのおんみこをお助けになられたのは叔母の倭比売命であり、后の弟橘比売で在らせられました。いかに荒くれとみえても、自分を頼って、父に嫌われていることを嘆く甥は不憫におもわれたのかもしれません。そして、夫を救おうと、荒れ狂う海に身を捧げたのも后でありました。倭建命さまほどの強い男も、女性に庇われておりました。日ノ本は、女性が歴史の影で主役を務めていたのです。

さらに、素戔嗚尊さまと倭建命さまは、よく似た運命のもとにあった様に思われます。その激しい気性のゆえに高天原から放逐され、流浪の果て出雲に向かう素戔嗚尊さま。おなじく父君に嫌われ、西伐東征の果てに崩御される倭建命さま。しかしながら、記紀の歴史の中では、このお二人はともに皇統の流れの中で、極めて重要な方々で在らせられました。三種の神器のうちの草薙剣に深い関わりをおもちでした。

これについてはまた後ほど。

日本書紀、古事記は、実は本居宣長によって再発掘されなければ、室町以来そのまま打ち捨てられ、世に出てこない運命にありました。ところがその宣長の国学を更に先鋭化したのが、平田篤胤でありました。明治維新につながる一連の動きの中で合言葉のように唱えられた尊王攘夷の尊王は、この平田国学によって正当化されました。本居、平田らの神道を、復古神道と申します。他に、垂加神道と言われるものもあります。しかし、明治政府の中に多くの平田派が加わったことによって、神道が国教化され、廃仏毀釈が進み、天皇の現人神への道が押し進められたのでした。それが顕在化したのが明治憲法であり、教育勅語でありました。

西欧列強を視察して回った伊藤博文は、西欧各国の精神的支柱としてのキリスト教を見て、これに代わるものの必要性を感じ、神道を国家の支柱とすることを画策いたしました。そして、

第１条大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス

第２条皇位ハ皇室典範ノ定ムル所ニ依リ皇男子孫之ヲ継承ス

第３条天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス

と規定されたのでした。今、平成の御代になっても尚これを唱え続ける人々がおられます。それを一番迷惑にお思いなのは、天皇さまご自身ではないかとお察しいたしております。

そういえば、軍部なるものが最初から所管してきた神社がありました。この神社、１８６３年に奇兵隊隊士の例を弔うために高杉晋作が招魂社造営を発議致したことからはじまりました。よって、一名、長州神社といわれるこの神社には、幕末から明治維新にかけて功のあった志士などが当初祭られました。しかし、明治維新最大の功労者、西郷隆盛と西南戦争に加わった薩摩人、ほかに江藤新平、前原一誠は対象外とされています。ところが、あの禁門の変で賊軍とされた久坂玄瑞は合祀されております。外国領事館・外国人襲撃者さえも祀られているというのにです。では乃木希典、東郷平八郎はどうでしょうか。彼らは戦没者ではないため、祀られておりません。しかし、吉田松陰、高杉晋作は獄死、病死でも祀られているのです。これが長州神社と陰口される由縁であります。

ご祭神について、当初は忠魂、忠霊と呼んでおりました。それを藤田東湖の漢詩の一文、英霊いまだかつて泯（ほろ）びず、とこしえに天地の間にあり　を幕末の志士たちが愛唱していたことから、英霊と呼ぶようになりました。この英霊を祭神合祀するにあたって、神社は遺族への連絡はするが事前の合意は取らない、としており、本人・遺族の意向は基本的に考慮されずに神社側の判断のみで行われております。このため、遺族が不満を抱き裁判に至っているものもあるが、靖国神社による遺族に対する同意なき合祀によって、原告遺族らの法的利益が侵害されたと認めらる判決は下されていないのであります。

と、まあ、生臭い、権力の都合だけで出来た神社ではありますが、これをいにしえからの信仰を集めた神道の一環とおもってはなりません。これは長州藩と明治政府が起こした国家神道という新興宗教の総本山で在ります。でなければ、修猷館になぜ人間魚雷、回天と特攻兵器桜花などを飾っておくのでしょうか。そして、入り口には誇らしげにゼロ戦がおかれております。あの特攻の悲しみの籠った戦闘機だというのにです。

敷島のやまとごころを人とはば朝日ににほふやまざくら花

海行かば水（み）づくかばね、山行かば草むすかばね、大君の辺（へ）にこそ死なめ、かへりみはせじ

修猷館の館内入り口すぐに、この歌が掲げられております。民に死を強要する神はおりません。民を救ってこその神であります。

いやはや神たる身で、人の世を叱ってしまいました。

さて、そも天照大神さまとはどのような神さまでありましょうか。ついにここまで申し述べねば治まらぬことに立ち至ったようでございます。

あの紅毛の人たちは、近代化された宗教は一神教なるものであって、多神教は未だそこに至っておらぬ、遅れた宗教であると、さもさもさげすむように申し立てます。確かに、彼の者たちの歴史では多神教の後に一神教が出てまいりました。では、古いものはもはや価値を失い、うち捨てるべきとでも申すのでしょうか。彼の人たちの歴史ではそのように進んで参ったのかはしれませぬが、進歩なるものが一直線に進むものか、また多が一点に収斂することが進歩なのか、そして進歩したことが貴く、正しいことなのか、いささか疑問に思う次第でござります。自然崇拝だのシャーマニズムと、原始宗教を言葉付けし、それで解った気になって澄ましておりますが、多分に認識の甘さを指弾したいところでもあります。なにせ、神代の時代からのものさえも残しておくのが、わが民たちでありますから。おかげをもって、我らも神と呼ばれております。

さて、文章博士として、天照大神さまのことを申し上げなければなりませぬ。ところが、この大御神さまについての古事記でのべられておることは、素戔嗚尊様程にもありませぬ。天照大神さまと素戔嗚尊さまは、伊弉諾尊さまからお生まれになりましたご兄弟で在らせられます。古事記の序文とでもいうべきところに、天地が成ってそこに貴き三柱の大御神さまがお現われになり、のちにさらにもう二柱の大御神さまがあらわれいでまし、お鎮まりになります。そして、男と女が明らかになってのちに伊弉諾、伊邪那美命さまが万物を産む親となられました。さはさりながら、万物をお産みになるのは伊邪那美命さまばかりがお産みになるのではなく、天照大神さま、素戔嗚尊さまのように、伊弉諾命さまからもお生まれになるのでございます。三貴子と申されて、お二方のほかに月夜見尊さまも同時にお生まれになっておられます。

さて、天照大神さまは女でありましょうか、男でありましょうか。もっとも貴い大御神さまでいらせられますので、あまりに恐れ多いのではございますが、諸氏色々にご推察申し上げて、結句、にょしょうで在らせられるでござろうと拝察いたした次第でございます。仏はこのような区別はございません。男でもなくおんなでもない、そして、男であり、おんなでもある、これが仏でござるようで。ゆえに、観音が人間の男に寄り添うて子をなし、天に帰る逸話が日本霊威記にもあるようでござります。

さらに、みなさま神宮にお参りになられた居り、拝礼は二礼二拍手をもってなされることとおもわれますが、神官どもが拝礼をなすときは八度拝と申し、八礼八拍手をおこのうのでございます。これは持統天皇さまが即位されました折りの儀礼を受け継いでいるとか。まるでチベット仏教の礼拝様式のごと、五体投地のようにも見えますが、似て非なるものでございます。されど東大寺春のお水取りでの僧侶による拝礼は、その流れの上にあるものと言えましょう。

さてさて大変なことを口にのぼせてしまいしました。持統天皇さまにまで言の葉をのばして申し上げるつもりはなかったのでござりまするが、一端言の葉に乗せてしまいましたので、恐れ多き極みなれど、申し上げることといたしましょう。

持統天皇さまのおん父君は天智天皇さまの第二皇女であらせられます。おん名を鵜野讃良皇女ともうされ、のちに大海人皇子の皇后となられます。おお、お気付きでしたか。今の世では、あってはならぬこととされておることではありますが、叔父姪の婚姻で在りました。されど、それが禁忌となったのはもっと後の世。権力の正統性のことわりのため、万世一系、男系男子の直流を守るのためには往々にあったことでござりまする。

天智天皇さま、天武天皇さまとなりますと、古代史の中で一番面白い時代であります。このころ天皇さまは未だ天皇と称号されておらず、大王と呼ばれておりました。これを天皇と改められたのは、先ほどの天武帝でありました。では大王とはなんぞや。世に号令し、権力を確立せんために武を持って戦場にも立たれ、世に覇を唱えて絶対的な権力を振るう君主こそ、大王で在り帝王で在りました。ところが大王で在れば、他の王に取って代わられることもありえます。その顕われが、大化の改新に繋がる一連の動きでありました。その以前、都にあっては、蘇我氏は稲目、馬子、蝦夷、入鹿の四代にわたり政権を掌握してはなしませんでした。中臣鎌足は、その蘇我氏による専横に憤り、大王家へ権力を取り戻すため、まず軽皇子と接触するも、その器ではないとあきらめます。そこで鎌足は、中大兄皇子に近づき、共に蘇我氏打倒の計画を練ります。そうして中大兄皇子は、蝦夷・入鹿に批判的な蘇我石川麻呂の娘と結婚し、石川麻呂を味方につけます。加えて、佐伯子麻呂、葛城稚犬養網田らも味方に引き入れます。

そして、皇極天皇4年６月１２日、飛鳥板蓋宮において中大兄皇子や中臣鎌足らが実行犯となり、蘇我入鹿を暗殺します。それを知った蘇我蝦夷は、翌日自らの手で邸宅に火を放ち自殺しはてます。これにより、蘇我体制は打倒され、その権力体制は終止符を打つことになります。そしてこれを乙巳の変といいます。

この事変の後、ときの皇極天皇は退位をし、後を中大兄皇子に譲ろうと致しますが、中大兄は皇弟・軽皇子を即位させ、孝徳天皇といたします。そして自らは皇太子となり、政治の実権を握ります。のちに中大兄と孝徳天皇の間が不和となり、孝徳天皇が難波京で憤死するということがありましたが、乙巳の変とそれに続く大化の改新は大王と王の権力闘争で在ったのでした。

もし、このとき中大兄が破れ、これから述べる後の改革が行われていなければ、どうなっていたでしょう。天皇は存在せず、日の本は様々な王権の出現と混乱の歴史を綴っていたかもしれませぬ。

さてこれからは天照大神をアマテラスとお呼びすることと致しましょう。なぜなら、日本書紀を考察する場合は、こうお呼びするのが学問の上では通例でございますから。

日本書紀は、奈良時代に成立した、日本に伝存する最古の正史にして、六国史の第一にあたります。奈良時代と申しますのは、西暦で申しますと７１０年、和銅３年に元明天皇によって平城京に遷都してのち、７９４年、延暦１３年に桓武天皇によって平安京に都が遷されるまでの84年間のことでございます。また六国史とは、日本書紀、続日本紀、日本後記、続日本後記、日本文徳天皇実録、日本三代実録をいいます。そして、正史とは主に国家によって公式に編纂された王朝の歴史書をもうします。こういったことが、日本書紀を学問的に考証する場合の基本的な知識でございます。

日本書紀は正史でございました。つまり国家によって公式に編纂された歴史が記述されております。では、古事記はどこへ行ったのでしょう。繰り返しになりますが、日本で初の正史として、日本書紀は古事記が完成したわずか８年の後に編纂されました。そして古事記は正史から除外されました。まずこの事実のみ書いておきます。

日本書紀は全部で３０巻からなっております。それとは別に系図一巻がありましたが、現存しておりません。また古事記とは異なる点が多々存在します。それはそれとして、日本書紀がその時代の第一級の資料であることは間違いありません。それは、文章博士として言明できます。

しかしながら、日本書紀をつぶさに検証いたしますと、古代中国語をいささか納めた私としては、腑に落ちない文章の巻と滞りなく漢文として読める巻があることに気付きました。その語彙や文体、文法の分析から、ひとつの推測が成り立ちます。正確に申しますれば、巻１４から２１と２４から２７の一群と巻１から１３、２２から２３、２８から２９の一群、巻３０の３群に分けることが出来ます。そして巻中ほどの一群は持統朝に渡来した中国人が正音により正格漢文で述作したもの。巻１を含む一群は文武朝になって古代中国語を学んだ日本人、つまり当時の官僚たちが倭音により和化漢文で撰述したものと推測されるのでございます。残る巻三十は元明朝に紀朝臣清人が著述したことが解っております。そしてアマテラスが出てまいるのは日本人が撰述した部分でございます。

日本書紀は正史でありますから、その体裁も漢書、後漢書のように中国史書にならって整えられております。またその歴史観、世界観も当時の中国のひそみに倣うところが多々見受けられます。たとえば古事記にあっては、まず高天原があって、そこに現れた神々のご意思によって地上である芦原中国ができるのでございますが、日本書紀では何もない混沌のなかに神々が現れます。そしてこの世界は陰陽の動きにより、おのずと出来てきます。このあたり、まことにもって中国的と言わざるを得ませぬ。では古事記はというと、伝統的すなわち縄文的といわれております。無理もございますまい。皆様方、縄文時代なるものはどれほど続いたか、ご存知でしょうか。あの旧石器時代の未開の時代と思われている縄文時代でありますが、そこはまさに芦原瑞穂の国でありました。縄文人はこの豊かな列島でその文明をもって、一万年を過ごしたのでございます。それにくらぶれば、今の時代など短い短い。瞬きの程の時間しか過ごしてはおりませぬ

。しかすれば、いまだ日本人はその縄文の精神をもって生きているかもしれないのでございます。

日本の古代には弥生時代があったではないかと申されますか。左様でございますなあ。弥生の時代は縄文時代に続き、紀元前３世紀から紀元後３世紀までの約６００年間を申すようでございます。この時代のあとに、古墳時代が続きますから、縄文の１万年からすればたかが６００年とは申せますまい。

弥生時代について、歴史学者たちは、それをさまざまに特徴づけようと腐心いたしており申す。たとえば弥生式土器、水稲栽培技術、旧石器から新石器への変化、さらに銅器鉄器の存在をさまざまに申し立てます。されど縄文の時代にも陸稲はすでに栽培されており申したし、縄文後期には水稲も作られておりました。また土器にしても、東日本では弥生式土器と縄文式土器の区分も不明確であり、編年の基準とはいいがたいものでございます。

では弥生時代とはなにか。何やかやの反論もござろうが、水稲栽培の技術をもった集団が、列島の外から北九州に移住してきたことからはじまったとしておきましょう。ただ歴史の区分など、しかとしたものなどないものでございます。されど、北九州に列島外から移住してきた異なる民たちがいたのはたしかでございます。そして、こののち和国は戦乱の時代となってゆきます。そのことから天孫降臨をこれと結びつけては早計というものでござります。しかしながら水稲農耕は、全般的にはかなりの速さでこの国をを縦断伝播の後、波及してまいります。これもまた神武天皇の東征に符合するものではございます。しかながら、神武天皇さまは現に実在されたのでしょうか。神にして文章博士の身にも、確たることは申せませぬ。あやしきかな、あやしきかな。めもあやに、いみじき天人のあまくだれるを、したり顔に物申すまいと存ずるしだいでございます。

　ここで、崇徳院さまからお声がかかりました。わが身につながることとて、そば近く参って物語せよとの仰せでござります。院よりの御呼び出しでござれば、かしこまって参らなければなりませぬ。
　院のおそば近くに参りますと、お声がかかり申した。
　なにやら、皇祖皇宗について物語っておるそうな。もそっと、そば近く参って物語れ。
　畏れ多いことにござりまする。お耳汚しかとはぞんじたてまつりまするが、臣道真、もうしあげます。
そう申し上げて平伏し、神武天皇さま以来の事をお話しいたすこととなりました。ともうしましても、神武天皇さまの東征から即位についてお話し申すわけではなく、神武さまの出自と天皇即位についてを申し上げたのでございます。
　もうしあげます。これから語り、お聞かせすることに確たる実証はござりませぬ。さりながら、弥生時代なる時に、この国に大乱が起こりました。
こう口火を切ってお話を始めさせていただいたのでしたが、まず弥生時代と言う言葉に院は首をかしげておいであそばされました。されど、それをお聞き咎めになられなかったので、話を次にすすめることができたのでございます。
　それが九州より始まって和国全体に広がったとは、はきと申せませぬ。即ち、神武さまの東征と軌を一にするとはもうせないのでございます。
　さりながら、順次申し上げますと、その時代に九州に入ってきた外来の民たちがおりました。さて、その者たちは、それまでの暮らしようとは違った文化をもっておりました。その外来の者たちが、それまで暮らしてきたものたちと争いをおこしたということもあったやもしれず、また仲良くくらしたかもしれませぬ。さりながら、縄文の土器とは違う弥生の土器を作り、環濠住宅を山の上に作り、水稲裁出で得たコメを高床式倉庫に蓄えて堀立柱住居にすみ、、武器を持ち、大陸でも見られぬ甕棺をもって遺体を葬る者たちが、時に争い、しかながら、新しい石器を広く伝播して水稲の栽培を広めてまいったのでございます。そして、その者たちを弥生人と申すようになりました。そして、大変乱暴な言い方をすると、縄文人と弥生人、そして、その者たちが混じったものたち、そのすべてが、この国の祖先となったのでございます。
　お話はいきなり跳びますが、神宮のことでござります。さきほど申し上げた高床式倉庫と住居の建て方は掘立柱方式ともうします。実は、神宮はこれにならっております。神宮が建立されました時代には、もう法隆寺は建っておりました。ゆえをもって、基礎石と土台をもつ、千年を保つ社殿の建立は既に可能だったのでございます。されどそうはぜず、それまでの伝統的な建築方式を踏襲なされて、神宮は建立されました。そしてその千年を保てないやしろの故か、神宮では最大の儀式が２０年ごとに行われることとなりました。式年遷宮でございます。
　神宮のご祭紳は多々祀られております。しかし、ご主神は天照大神で在らせられます。その天照大神さまの御娘さまが祀られ、いまもってもっとも聖なる地とされておりますのが、玄界灘に浮かぶ沖ノ島でございます。この島に入るためのは、先ず禊ぎを行わなければなりません。また

、女人禁制であります。さらに、この島からは一木一草といえど、一切のものを持ちだしてはならないことになっております。

沖ノ島は、島全体がご神体とされており、4世紀後半～10世紀初頭の大和王権による祭祀遺跡がございます。遺物としては鏡や玉類、武器、馬具、装身具など8万点に及ぶ数のものが手つかずでのこされております。そのうえ、朝鮮半島製の金の指輪や中国製の金銅製竜頭なども発見されています。かように、沖ノ島は古代大和の国の、神への祈りの変遷をそのまま残しておるのでございます。

宗像大社沖津宮社殿周辺の巨石には、寄り添う23の古代祭祀跡から約8万点の祭祀遺物が出土し、そのほか約2万点の縄文時代、弥生時代の遺物が出土してまいります。まず、4世紀後半から5世紀にかけての巨石の上で祭祀を行った岩上祭祀では、三角縁神獣鏡などの銅鏡が数多く見つかっております。これは日ノ神への捧げものとして、またそれ自体が神を写す御神体であったのかとおもわれます。しかしながら、この時はまだ日ノ神がアマテラスとはなっておらなかったのではないかと思われるのでございます。

5世紀後半から7世紀にかけておこのわれるようになってまいりました岩陰祭祀では、新羅の都慶州の大陵苑王墓から出土したものと同じ金製指輪など、朝鮮半島由来の遺物が数多く出土してまいります。ただここで、祈りの場所が岩上から岩陰へおりてまいったこと、また神の姿が鏡に映す日の光から、金製の指輪など装飾品を身に付ける姿に変わってきております。

さらに時代が進みますと、7世紀後半から8世紀前半にかけては、半岩陰、半露天祭祀など、岩陰に接する平場で祭祀を行ったことをうかがわせるよになり、そこには唐三彩など中国由来の遺物がのこされております。そして、8世紀から9世紀末にかけては、岩場から離れた平地で露天祭祀を行って、遺物は滑石製形代類と呼ばれる人や馬に似せた祭祀専用の石製品になります。

ふむ、それはわかったが、その変遷は何を意味するのか。
院さまからご下問があった。

そのことが意味するところは諸説ございますが、そのはじめは、出来るだけ太陽に近づこうとして岩上へあがっての自然神への崇拝でありました。その神が、太陽そのものの姿からしだいに人の姿に変わってゆき、衣裳もまとい、飲食に供する食器類も必要になるところまでに達します。これはすなわち、王の先祖、天皇の先祖としての神になってきたとかんがえられます。つまりは、自然の神から、天皇家の神へと変わってゆき、王も王から天皇へ変わっていったのでございます。

このことは記紀にもそれとわかるところがございます。記紀ではまず、神代のことから始まります。天孫、邇邇藝命さまが、天照大神様の命をうけて、天上から芦原中つ国に天下られます。このとき、邇邇藝命さまは天照大神さまから授かった三種の神器をたずさえ、天児屋命などの神々を引き連れて、高天原から地上へと向かったのでございました。そして、猿田毘古神が案内をし、邇邇藝命さまは筑紫の日向の高千穂に降り立たれます。

この天孫降臨にこそ、多くの意味が含まれております。

　天孫降臨にこそ、多くの意味が隠されております。それをいま、さらに事細かく紐説いてお話いたしましょう。
　天照大御神と高御産巣日神は、天照大御神の子である正勝吾勝勝速日天忍穂耳命に、
　葦原中国平定が終わったので、以前に委任した通り天降って葦原中つ国を治めなさい。
ともうされます。天忍穂耳命は命に従い、準備に余念がなかったのでありましたが、その間に日子番能邇邇芸命がおうまれになります。そこで、天忍穂耳命は天照大御神と高御産巣日神に、
　我が子にして天照大御神と高御産巣日神の孫である邇邇芸命が生まれましたので、この子を天下らせるべきでございましょう。
と申し出ます。それで二神は、邇邇藝命に葦原の中つ国の統治を委任し、天降りをお命じになられます。
　この部分の古事記の伝承は、三つの事柄が重要であります。まず、高天原と言う天上界の統治をされていた最高神は、アマテラスであること。加えて、アマテラスが女性神であることであります。すなわち、女性神が最高神であるなどということは、世界中を見渡しても、皆無なことなのでございます。最後に、邇邇芸命さまは神代の事から人代へ下られたアマテラスさまの孫であらせられることです。
　如何なることであるか。
院がご下問になられた。その横から、
　なにやら難しゅうござるよな。
と将門公が言う。そうでございました。将門公には、武家のこともものちに説いてきかせねばと思って居ったのでござりました。しかし、それは後の話。いまは皇統の由来でございます。
　はてさて、国譲りで葦原の中つ国は平穏に治まっておったのでござりましたが、中つ国の国つ神たちが次第に跋扈致し始め、国が荒れようとしておりました。それを見かねた天照大神さまが葦原千五百秋瑞穂の国は、是、吾が子孫の王たるべき地なり、爾皇孫、就でまして治らせ地上を平定し、これを治めよと、おん孫に当たらせられる邇邇芸命さまをおくだしになられたのでございます。これは邇邇芸命さまご自身が絶対の神であることを意味するのでございます。側聞ながら、紅毛碧眼の国では、王は王権神授説なるものを唱え、その正統性を主張致したようでございます。すなわち、王は神によって選ばれるのであり、選ばれた王は神のご神託によって王権を授かるのであるとするのでございます。しかしながら、王は神ではありません。王は人の身であり、一代で終わるやも知れず、また後継も血筋の者ではなく終わるやもしれないのでございます。ましてや他に力ある者があれば、その者に命奪われ、果てることもありえるのでございます。
　しかしながら、我が国は邇邇芸命さまの曾孫である磐余彦さまが初代の天皇、神武天皇として即位され、のちは万世一系の皇統によって統治されることになり、皇統はもはや侵しがたい神聖なものとなったのでございます。
すなわち、神なる身の皇統にあらせられる天皇がここに定まりました。天皇は神にして侵しえ

ない、現人神に成らせられたということでござります。これをよく間違えて、王政復古をなした明治期からとする誤解がございますが、国家神道に目を奪われた誤謬というべきことです。この芦原瑞穂国に初代神武天皇さまが即位なされるまで、皇統にあった大王は王の中の王、オオキミでありました。そして、即位の後、アキツミカミたるスメラミコトとおなりあそばされたのであって、明治ほどの事からではありませなんだ。

なにやら、身の内にふくむところのあるような申しじょうではあるのう。

いえいえ、決してそのような。

かまわぬ。皇を取って民となし、民を皇となさん、とまで祟った身じゃ。そちの申しようが何を言わんとするかはおよそ察しが付く。我が祟りは、昭和天皇によって達せられた。時の果つるところは恐ろしいのう。

まことにそのようでござりまする。はてさて、今この時も、千年を過ぎれば千年の昔。しかしながら、千年の余を過ぎてなお皇統は続いております。まことに持統天皇さまは諡のごとく、高天原廣野姫天皇、たかまのはらひろのひめのすめらみこと、であらしゃりました。

さようでございます。持統天皇さまのお望みになったこと、それを達成せんがために神宮も建てられました。記紀の編纂も行われたのでございました。

実際の政治の中では、乙巳の変と大化の改新への時期、天皇の地位はいまだ確立せず、その継承は兄弟相承で行われておりました。天智天皇から天武天皇への継承さえ兄弟相承でありました。そしてその後を襲った持統天皇さまは様々に心を砕かれ、ついには孫である軽皇子に譲位を果たされます。それは古事記の天孫降臨にそのまま符合いたします。

そしてまた、天皇の神聖を確立せんがため、柿本人麻呂に天皇賛仰の歌を作らせ、天武天皇の権威を借りようと吉野幸をくりかえしました。オオキミは神にしませば、の枕詞は持統天皇さまの御代をたたえる慣用句となったのでございます。その結果、軽皇子への譲位を果たし、幼帝文武天皇を擁立できたのでございました。ここに万世一系、男系男子の継承が確立いたしました。そして、それを正当化致したのが天孫降臨でありました。

さらに天孫降臨は続きます。邇邇芸命が天降りをしようといたしておりますと、天の八衢　やちまた　に、高天原から芦原中つ国までを照らし出しておる神がおりました。それを訝られた天照大神と高木神は、天宇受売命に誰がそのようにいたしているのか尋ねさせました。すると、その神は国つ神の猿田毘古命でありました。そして天津神の御子が天降りすると聞き、先導せんと迎えにきたのでした。

その邇邇芸命の天降りには天児屋命、布刀命、天宇受売命、天宇受売命、伊斯許理度売命、玉祖命の五伴緒が従ってゆきました。ここに天孫のスメラミコトとしてのあり方が定まり、加えてそれに従う神々は貴族として定まって、なおかつ、その則を越えないことが定めとして規されたのでございます。

　では、天皇と言う称号はどういうことか。
と院の仰せである。
　臣道真、もうしあげます。初めて天皇と称されましたのは、唐の高宗さまでありました。そして、さらに、高宗さまがお亡くなりになると、皇后の則天武后さまが天皇大帝と諡したされました。この天皇大帝と申しますのは、天帝のことでありまして、道教にあって天帝は北辰、即ち天にある不動の星、北極星を指します。これをもって、天武帝が日本の皇帝の称号を天皇と定められたのでございます。こうして天皇は諸王の王からこののち絶対神聖となり、嫡子相承へとなってゆきます。しかしこのことが、天皇の権力継承からの乖離を生じさせます。つまり天皇は神祇官と太政官の頂点に立つのですが、天皇ご自身は神祇官の頂点にあって、政治は太政官が代行するようになってゆきます。こうしてこの国の現実の政治は、官僚貴族がおこなうようになってゆきます。もはや昭和憲法で象徴天皇制を明文化されるのを待つまでもなく、天皇はその始まりから、そのような萌芽を抱えていたのでございます。
　そうよのう。清盛の時代から、鎌倉は院宣の取り合いであった。信長も秀吉も少なからず天皇を利用しおった。明治維新の折りの薩長は、いとわしいほどの手口で天皇を使い、幕府を逆賊にしおったわ。錦の御旗の前にひたすら恭順の意をあらわした徳川はあわれであった。
　それもこれも、天皇は神であらせられたからでございます。
　天皇に権力なぞなかった。
　いえ、天皇陛下はそこにあらせられるだけで絶対でありました。そして、あの終戦の最後のご聖断こそ、天皇陛下にのみ成し得ることでございました。
院は静かに頷かれた。
　呪詛する声が流れた。

呪詛する声が流れてきた。

かけまくもあやにかしこきすめらみことに
伏して奏（まさ）おく
今、四海必ずしも波穏やかならねど、
日の本のやまとの国は鼓腹撃壌の世をば現じ
御仁徳の下、平和は世にみちみち
人ら奉平のゆるき微笑みに顔見交わし
　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
かかる日に、などてすめろぎは人間となりたまいし。
もし過ぎし世が架空であり、今の世が現実であるならば、
死したる者のため
何ゆえ陛下ただ御一人は、辛く苦しき架空を護らせ玉わざりしか
陛下がただ人間と仰せ出されしとき、
神のために死したる霊は名を剥奪せられ、
祭らるべき社もなく、
今もなおうつろなる胸より血潮を流し、
神界にありながら安らいはあらず。
　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
日本の敗れたるはよし
農地の改革せられたるはよし
社会主義的改革も行わるるがよし
わが祖国は敗れたれば
敗れたる負ひ目を悉く肩に荷うはよし
わが国民はよく負荷に耐え
試練をくぐりてなほ力あり屈辱を嘗めしはよし
抗すべからざる要求を潔く受け容れしはよし
されど、ただ一つ、ただ一つ
いかなる強制、いかなる弾圧、いかなる死の脅迫ありとも
陛下は人間なりと仰せらるべからざりし
世のそしり、人の侮りを受けつつ、ただ陛下御一人、
神として御身を保たせたまひ
そを架空、そをいつわりとはゆめ宣はず
（たとひみ心の裡深く、さなりと思すとも）
祭服に玉体を包み、夜昼おぼろげに、宮中賢所のなほ奥深く

　皇祖皇宗のおんみたまの前にぬかづき、
　神のおんために死したる者らの霊を祭りてただ斎き
　ただ祈りてましまさば
　何ほどか尊かりしならん
　などてすめろぎは人となりたまひし
　などてすめろぎは人となりたまひし
　などてすめろぎは人となりたまひし
（三島由紀夫　英霊の声）
始めは静かな声であったが、次第に声が幾重にも重なり、嘯子が始まり、ついには声を絞って泣くほどに謳いだした。
　そして、
　などてすめろぎは人となりたまひし
と、取り返しのつかぬ事態を取り戻さんがためのように、なお繰り返された。だがもう、それも繰り言。一端人間と宣言してしまうと、民はもう天皇を神に戻すことはできないと知ってしまった。
　院と私、将門公に沈黙があった。
　今この時も、千年経てば千年の昔、とさきほど申しておったのう。
と院が仰せられた。
　さようでございます。
　まこと、さようでございます。
と将門公も頷いた。
　千年の先を待つことといたそうぞ。
院が仰せられた。

東風吹かば　後書き

浅慮薄識、浅学菲才を絵に描いたような文章を綴ってしまいました。

先日、天皇陛下と皇后陛下がフィリピンに赴かれ、深く頭を垂れておられる姿をみると、自然涙が流れました。よくお行きいただけたと思います。しかし、それでも天皇制を腑に落ちるまで考えねばと、こういった文章を書き散らしました。どなたか、ご批判をお寄せください。

菅公の独り言

　観音寺の琴弾公園の中の　琴弾神社　奥の院に上がっていく参道にはたくさんの小社が並んで祭られてります。その中に、他とは違って一段大きく作られた　菅原天満宮　の社があります。つい昔、私の子供二人がそれぞれ受験であったとき、私は機会あるごとに参道の石段を、息を切らして上がって行き、他のときとは違ってお賽銭もはずみ、子供の合格を祈願しました。勿論　滝宮天満宮　へは毎年成人の日に行き、それぞれの時の試験合格をお願いしてきました。その琴弾神社の中の天満宮へ立ち寄るときは、大抵が朝早くで、霧が出ていたこともありましたし、私のように子供さんの合格祈願に来たと思われる人にも出会いました。それがきっかけで、ちょっと不謹慎にも小説の種をおもいついたことがあります。

　朝まだき、霧の中人が息を切らして上がってくる。石段の途中で立ち止まり石段の上を見上げてハアハアとあえぎ、また上がりだす。湿った霧の寒さが手と顔を凍らせ、苦しい息を白くする。鳥居をくぐり、強張ってガチガチの脚を持ち上げて、もう少しと気を振り絞り、上がって行くと緋色の社が道の脇にあり、お賽銭を取り出しながら息を静めようとするが、なかなかおさまらない。とにかくなんとか社殿の前に立ち、お賽銭を投げて鈴の尾を取りすがるように掴み、カラカラと鳴らす。静まっている朝の空気の中を鈴の音が思わぬ大きさで響いた。

　またか　この時期は大繁盛なんだ

　思えば確かに私は、自分の悲運を嘆きながら都とは遠くかけ離れた大宰府で死んじゃったよ

　でも人が思うほど、憤死とかじゃなかったんだけどねぇ

　自分で言うのもなんだけど、私ほど才能と知識のある清廉潔白な人格者が、ただ摂関家に生まれたてぇだけの　ぼんくら　陰険　陰謀　陰湿　無能男の悪口告げ口で地方に飛ばされ、失脚させられるなんて馬鹿な話があってたまるもんかと、そりゃ最初のうちは思ったよ

　それと、私が中央政界から追い落とされた後の政治の下らなさ、まさに失政と言っていい状況を見ると腹が立ってしょうがなかったよ、それでも民は程ほどに生きていけてるし、こうして地方に来てみると、これはこれでまあいいんじゃないのって感じだったんだけどねぇ

　ところが死んじまって、心安らかに眠ってるのに、その眠りから揺り起こすように

してこんな社に鎮座させられ、気が付くと今度は人が勝手に鈴を鳴らし、二礼二拍手一礼して自分の子供を試験に合格させろって、まるで神様に言うようにどいつもこいつも言うじゃない？そりゃ無理だよって言ってるのに、賽銭投げて無理じいして帰っちまう

　なんて奴らだと思っていると、なにやら私は学問の神様なんて物にされちまってるらしい

　それもまあいいよ　いいことにしよう　ところが最初はなにやら私はとんでもない祟り神だって思われてたらしい　そんなことしないよ、わたしは　するわけがない　どんな非道な人でも私は許しちゃう　それぐらい心優しく、慈悲深いひとなんだから、私は

　だけど　天満宮　ってぇのはなんなっだ？わたしのことか？火雷天神で天神社　皇族と同等扱いで　天満　宮　か？破格の扱いだねぇ　でも死んでからこの世の位、人が作った位階、そんなもので太政大臣にしてもらっても、ちっとも嬉しくなんかない　それより上の神様にされちまってるんだから　人がその場所を清め、手を合わせて祈れば、そこに神が宿る　そのとき私の名を呼べば、私が神になってしまう　それで私が神か？

　この讃岐に国司としてやってくる前は、私は従五位の上に上がった一官僚にすぎなかった　ところがそのころの讃岐の疲弊振りは大変で、たまたま主上の目にとまった私に、行って立て直して来いと、本来なら謁見などかなわぬ身にお声までかけていただき、そうなったら行かないわけにはいかんだろうとやってきた　そのときでさえ、この人事が主上と摂関家の　パワーバランス　によってだとはわかってましたよ　パワーバランス　眠りから覚めさせられてからは、私　勉強し続けてましたから、今風の言葉もわかるんです　唯一これが私の救い　元は私、文章博士ですから　それだけでよかったんです　官僚になり、実務に付くなんて、したくなかった　文章生に講話をし、詩歌をつくる、そんな人生でよかったんです

　そりゃ勿論、公家の癖して弓は引く、国府役人達が輿を用意してくれていても馬に乗る、そんな公家らしからぬところはありましたよ　だからわたしはこの讃岐を馬で隅から隅まで見て回りました　すると行く先々、国府役人たちが冷や汗かいて接待し、夜は女まで用意してくる　都では武家と遊女遊びもしたけれど、これはまずいだろうと、はねつけましたが、謹厳実直、精錬潔白を絵に描いたようないい人を演じるのはつらかった　ついふらふらと、となりそうでしたが、主上　と妻の顔がうかんできて、ぐっと堪えた　いかに讃岐が　上国　であろうと、早く都に帰りたかった　すると何時の間にか行く先々で、子供を連れた母親達が国府出張所にやってきて、子供の頭をなでろと言う　なんで？と訊くと、今度の国司様は大学者様だから、頭をなでてもらうと子供が利

口になると言い出します　仕舞いには、夜泣きが直るなんてことまで言ってくる　ああっ、あれがよくなかったと、思い当たることはありました　雨乞いの祈祷をして、雨をふらせたことです　この讃岐は雨が少ない国だから旱魃になる　日照りの日にはふらふら歩き　といってすましてるわけには行かない　私はそっちの専門じゃないけれど、空にこんな予兆があれば、雨が降る　だからその時は、こんな祈祷をすればよい、という知識はありました　そこで何度かご祈祷を・・・それもかなりいい加減な祈祷をしたことです　私がご祈祷をした　滝宮にはいまでも　雨乞い踊りが残ってます　そして何度も成功しました　空海さんと一緒です　この人も雨乞いが得意でしたが、こんなことから私には霊力があると思われたみたい　ええ、小汚い頭をなでましたよ　幾つも幾つも

　そうこうしているうちに、国府役人の態度が変化しはじめ、帳簿、書類も見せるようになり、黙っていても国政は正されて行き、順調にまつりごとも動き出しました　そして私は都に戻ることができたのです　讃岐がいかに　上国　大国　と位置づけられていても、やはり都は恋しかった

　ところが都に帰るとまた私を誰かが　パワーポリティクス　に利用しようとします　異例の昇進をするかと思えば、遣唐使にして海外へ飛ばそうとする事態が惹起されたりしました　唐？あの国はもう亡ぶよ　それにもう、唐には学ばなければならない物なんて何一つないじゃない　ー　この高明な私にはそう見えたし、国の瓦解する音も聞こえた　あの衰えた国はそれから十年ほどで、本当に亡んだ　あいつは海が怖いんだ、命が惜しいんだと言われもしたけど、唐の崩壊の後は何もいわれなくなった

　その唐からもたらされた　仏教　を今の人は信仰とだけ捉えているけれど、このときの仏教は江戸時代の葬式仏教とは訳が違う　　この国にとって、そして私達にとって仏教は　哲学の範疇を飛び越した　大世界観　であり、学ぶべき総合科学でありました　それゆえ聖武天皇は東大寺に大仏を建立し、国家鎮護の礎としました　なぜか？大仏に祈ることが国家の安泰を得る法だとしんじたからです　同時に仏教がもたらした仏像のきらきらしさに目を奪われました　かくもリアルな造形物を我らは見たことがなかったからです　そしてこれらからその意味を学び、自分達の知らなかった世界の有様を知るところとなったのでした　仏教は今まで我らの知らなかった世界の様相を教える総合科学でありました

　そして次の空海君たちが持ち帰った　密教　はまた、それまでの仏教を飛び越えた、曼荼羅という　宇宙　という世界の知をもたらしました　そして　真言　を唱えると雨が降り、病気が平癒し、願い事が叶うというじゃありませんか　そして時には、憎っ

くき相手まで呪詛することができる、恐るべきテクノロジーだというじゃありませんか
　我らはそれらを学び、地獄もあれば極楽もある、祈れば叶う、そんな世界観をいだくようになったのです
　　私は神にされて大迷惑をこうむったけれど、一つだけ良いことがありました　眠りっぱなしではなく、起きて学び続けることが出来ることです　　私は文章博士に立ち返り、ずうっと勉強し続けてきました　　今の人はとんでもない　夢　を見るのですね　宇宙は１３７億年前に生まれた　そして　宇宙　が生じることによって、３次元が生じ、存在する　という現象が出来上がり、時も始まった　だから　宇宙　が生じる前は　ない　のです　　無　　すらもなく　始まり　もない　　存在と時が　ないから　　そして３次元が生じたので　次元が更に分かれて生まれ、９次元　が出来たとも　厳密には　１１次元　　が生じたともいいます　　ああっ、なんなんでしょう
　　六道輪廻　と言われ、今の世界とは別に　六つ　の世と生きる道があるなんてと仰天し、地獄極楽と言われて地蔵尊を拝んで暮らしてきたのに、西洋ではいきなりコペルニクス的転換を果たして、世界への認識が変わり、宗教はいなくなってしまった　難解な仏教が繰り広げる世界観に出合った驚愕を今の人に理解できるとはおもわないが、
　地球儀　　を初めて見た日本人の驚きを想像すれば、少しは解るかもしれない　　まず我らは　星　に住んでいるってことに肝をつぶす　大地は丸く　一周すれば元に戻る
　この星はどこに浮かんでいるんだ？　落ちはしないのか　そんな疑問を抱いた人がいただろうか　そこまで気が付かず、それより先に日本のちいささの目を奪われたことだろう　　だがその驚愕だけで充分である　　世界　が一変する
　　しかし人類は今何を　夢　見ているのか　　宇宙創成から１０億年後に出来た、地球から１２７億光年先の原始銀河団を　すばる天文台が見つけたそうだ　宇宙では一度発せられた光は決して消えないから、必ず見えると言ってたが、それがこれか　ビッグバンさえ見えると言った　そうすると・・・　いつか我々はビッグバンをみることになる　そして今、死んだら星になるなって、誰も思わなくなった
　　その上、今度は陽粒子を加速させてぶつけ、物質と反物質を作り出しすと、物質と反物質が結びついてなくなる　ところが反物質の方が多く出来て残ってしまう　ところがこれが　ふっと消える　その現象を確かめると異次元の存在を証明できる　　ハーバード大学の女性教授が日本にその研究への協力を要請しに来てたが、宇宙の枠を越え、次は異次元か・・・　なんて　夢　を見るんだろう　理論的には　存在する　これが物理学らしい　そして、彼らの魔法の杖は　数学　・・・　神をやってても、もう人間様に追いつけない
　　ああっ、うるさいほどに鈴が鳴る　　ここに座っていても、全国の天満宮にやって

きて手を叩く、願い事をする声が耳鳴りのようにさんざめく　　神様　とはやっかいなものだ　しかし何時から人は神に願い事をするようになったのか　　お賽銭を上げれば、神は言う事を聞き届けてくれるとでも思ってるの？　その極め付けが　善行を積めば極楽へ行ける　という、実にお気楽にして単純、人間の側からの得手勝手な思い込みだ
　　大体　善行　って本当に善行か？　あの　仏の行い　の極みと言われている　玉虫厨子　に描かれた　捨身飼虎図　は、飢えた虎の親子に、谷に身を投げて我が身を与えた釈迦の前世のおこないを、自己犠牲、布施の姿だと描いているが、これって　善行？
　飢えた虎に我が身を与えて救っても、そんなことで死なれちまったら親は泣くぞ　ましてや虎に食われたなんて、親不孝の極み、悪行の極みだ　その行いで後世に釈迦になられても、親の悲しみは消えないよ
　　大体善行をこれだけ積んだんだから、極楽へ当然いけるんでしょって、神仏に指図するとはおこがましいと思わないの？
人間の価値基準で神仏の意志を決めることなんか出来ゃしない　　西洋の絶対神はもっと高みにいらっしゃる　かの神学の大家アウグスチヌスさんもこういってるんだから　果たしてこの国の人は、神は姿こそ見えないけれど直ぐ横にいるようにおもい込んでいるし、電話をかけるように願い事をして、また聞きとどけてくれるものと思ってる　そうじゃないよ　あんたの息子が受かろうと落ちようと、それは　神意　である　　まさに　神意　である　　大体、試験の合否にまぐれはない！　受ける前から受かる人は受かる　すべる人はすべっているんだ　だ・か・ら・　受からせたかったら、もっと勉強させなさい

　　石段を降りてゆくと、息を切らせた受験生の母親らしき人とすれ違った。すこし立って鈴の音を聞き、やっぱりと思う。声が聞こえたような気がした。落ちる人は落ちる、受かる人はうかる、これが　神意　だ。

天の羽衣

京都四条河原町は京都一の繁華街ではあるが、どの店も観光地を意識して、土産物店か飲食店が立ち並び、その前を人が何時もひしめいていた。四条河原町の交差点に立つと高島屋、阪急が競い合って立ち並び、四条通りは阪急電車が地下を走っている。そんな表通りの裏に、四条から三条までの短い距離を埋めて、観光客のそぞろ歩く繁華街がある。新京極通りである。かつては劇場やら演芸場、映画館も軒を並べていたが、時代の流れだ。その多くが閉館してしまい、一軒を残すのみになってしまった。

里恵が河原町を急いで歩いていると、道の反対側に黒塗りの大きなセダンが停まっていた。午後のこの時間は車の数が一番多いときだ。案の定、その車のうしろで沢山の車が停車を余儀なくされ、大渋滞が起こっていた。しかし、その車には運転席に制帽を被った運転手が生まじめそうに前を向いて座っていて、じっと誰かを待つ風だ。そんなことが気になって、里恵は立ち止まってそれを見た。車が停まっている店は、アーケードの向こうに美しく店内を照らし出し、明るく輝くようだった。そこはディスプレイといっても、三体ほどのマネキンが思い思いに立ってポーズし、それぞれに優雅な衣装をまとっていた。里恵はその店が憧れだった。いつかはあの店で服を縫ってもらい、まとってみたいと思っていた。四条河原町には少し異質なオートクチュールの店だった。しかし、そんな違和感を忘れさせるほどマネキンの着たドレスは、店の中で飾られているのに風に舞っているような軽やかさと明るさだった。

ふいに里恵は、黒塗りの車の後ろにパトカーを見た。パトカーは車の後方に停まった。助手席の若い警官が降りて、前の車の運転席のウインドウを指で叩いた。若い警官は体をかがめ、片手で後方を示し、何か言ってた。多分、渋滞を起こしているから移動せよと言ってるのだと分かった。車の運転手は律儀に降りてきて、警官に頭を下げて詫びてる風だった。しかしそれでもなにか揉めている。駐車禁止の場所だから違反で切符を切ろうというのだろう。と、二人の横にスーツ姿の男が二人立った。男が胸の内ポケットから何かを出して見せた。後方のパトカーから古参の警官が慌てて降りてくる。若い警官がスーツ姿の男に敬礼する。里恵に、

失礼しました。

という古参の警官の声が聞こえた。警官二人は急ぎパトカーに戻った。スーツ姿の男たちも車から離れた。

誰ですか？

と若い警官が古参の警官に尋ねている声が聞こえた。

誰かはわからない。しかし、触らぬ神に祟りなしだ。俺達には手を出せない、法律の埒外にいるお方がいるんだよ。だから、もういいから車を出して。

そう聞こえた。パトカーが去ったあと、店から一人の女性が出てきた。店の人が洋服箱を持って続く。運転手が出てきて、箱を受け取り、助手席に乗せると、後方のドアを開ける。女性は店員に軽く会釈をして車に乗った。たくさんの車が走る向こうで、まるで静寂の中の景色のようだった。里恵はそれを見送ると、夢から覚めた思いで我に返り、急ぎ仕事場に走った。

天の羽衣 **-2-**

新京極通りの中ほどの映画館が、里恵の仕事場だった。その建物の前の広場で、絵看板師の久保田が、来週からの映画の絵看板を描いていた。京都都座は本来封切館であったが、来週は名画上映祭りと銘打って三本一挙上映を予定していた。しかし取り合わせが妙だと、里恵は思っていた。一本は高倉健の鉄道員、ぽっぽや、それからオードリーヘップバーンのティファニーで朝食をと夕日のガンマンだという。どういう選択なんだと思った。館主が里恵に、どう思うと訊いてきた。変です、と即座に答えた。わたしもそう思うと館主が答えた。

でもなあ、今フィルムがそれしか空いてないっていうんだ。

里恵は館主の手元のリストを覗いた。

名画というなら今の時期、もっとレトロでもいいんじゃありませんか。いっそのこと、無声映画に弁士をいれて上映するとか。

そりゃ無理だよ。フィルムがないし、弁士もいない。

そうですねぇ。でもうちの劇団で、弁士にとっても興味をもってる役者さんがいますよ。女の子ですけど。

なんか面白そうだけど、今回は無理だからよしとこう。

館主はそういって奥に引っ込んだ。絵師の久保田が、

無声映画のころはよかった。トーキーになって、映画も情緒がなくなった。そのあとカラー映画が総天然色なんて仰々しく出てきて、そのあとシネマスコープだろ。今のテレビやパソコンだって、みんな後追いだ。つまんねえもんさ。俺りゃ、もっと古くてつまんねえが。

久保田さんはつまんなくないですよ。筆一本で、こおんなデカい絵看板を描けるんですから。

つまんなくなかったら、最後の看板絵師なんていわれたりしないよ。

そうだった。この新京極も、歓楽街として映画館や演芸場が立ち並んでいたそうだが、いまではここだけだ。大久保さんが昔あった西陣東映劇場、千本日活、東宝公楽、京都松竹座、そして京都初の映画常設館の京都八千代館などが、一番にぎわいだころの話をしてくれたことがあった。

そりゃあ、浅草もすごかったらしいが、京都はもっとはなやかだった。なにせ、京都は映画発祥の地だからな。

えっ、そうなんですか。なんか、神戸がア、とか、大阪がア、ってのも聞いたんですが。

そうさな。人は色々言うわさ。俺りゃ、もとが江戸っ子だから、どこでもいいんだ。

えっ、京都じゃないんですか。

そうだよ、俺りゃお江戸の生まれよ。絵看板の修行も東京さ。

非常口のきざはしに腰かけて、時間を忘れたように話す大久保の話の裏に、里恵は天然の美のジンタが聞こえるような気がした。それは里恵の思い込みかもしれないが、活動写真の伴奏として聞こえてくる。

空にさえずる　鳥の声
峯(ﾐﾈ)より落つる　滝の音
大波小波　とうとうと
響き絶やせぬ　海の音
聞けや人々　面白き
この天然の　音楽を
調べ自在に　弾きたもう
神の御手(ｵﾝﾃ)の　尊しや

春は桜の　あや衣(ｺﾞﾛﾓ)
秋はもみじの　唐錦(ｶﾗﾆｼｷ)
夏は涼しき　月の絹
冬は真白き　雪の布
見よや人々　美しき
この天然の　織物(ｵﾘﾓﾉ)を
手際(ﾃｷﾞﾜ)見事に　織りたもう
神のたくみの　尊しや

いやいや、これは古いでしょうと里恵は思う。大久保の話を聞くほかに、里恵の耳は、脳裏に浮かんだ東京キッドを聞いていた。

歌も楽しいや 東京キッド
いきでおしゃれで ほがらかで
右のポッケにゃ夢がある
左のポッケにゃチューインガム

ちょっと可愛い笑顔のこまっしゃくれ女の子が、黒のタキシードを着て、手にステッキを持ち、タップを踏む。今の映画は、ハリウッドならパニックものか戦争もの。邦画も任侠ものといえば聞こえはいいが、やくざ映画が全盛で、衰退は目に見えている。大久保の話を聞きながら、若い里恵の頭の中はいろんなことが駆け巡っていた。

昔は、この映画館も色々な歌手が来て、実演をやってた。だから、今でも舞台があるだろ。舞台の前のオーケストラ・ボックスはトーキーになってからこわしちまったが、楽団がはいって無声映画の伴奏をやってたんだ。言ってみりゃ、ここは映画と劇場を兼ねた娯楽の殿堂ってことか。ふっとたばこの煙を吹き出して吸殻を地面でもみ消すと。大久保は立ち上がった。

ひばりも来たの？

きたさ。江利チエミも雪村いづみもきた。笠木千鶴子は落ち目になってやってきた。日劇を埋め尽くした大スターだったが、いけなくなるとみじめなもんさ。

そういいながら、大久保は一間半に二間の絵看板に下地塗料を塗りだした。杉材で枠組みした上に耐水ベニヤを張り、幅広の刷毛で白色塗料を手早く塗りこんでゆく。その手際を、里恵は何回見ても飽きない。今回は三本立てだから、看板は二枚だ。白く塗られた看板のまえに、大久保はポスターを三枚置いて腕組みをした。

洋画なら洋画で統一されてりゃ、ごまかしようもあるんだが、こうもばらばらじゃ絵の描きようがねえ・・・。まっ、なんとかするか！

そういうと、デッサン用の竹炭をもって、なにか線を描き始めた。その後ろを、修学旅行生が物珍しそうに眺めながら通っていく。大久保の手が動いて、線が引かれ、作業が始まった。

俺たちは職人だ。芸術のように見事に描くんじゃなくて、似せて描くことが大事なんだ。上映期間が終われば、絵看板も終わり、あっという間に消えちまう。だからこそ、人目を引くように一生懸命描いてるんだ。

一番最初挨拶したとき、大久保は里恵にそういった。

絵看板も映画も絵空事さ。

そんなことないです。ここの絵看板、私はすてきだって、いつも思ってました。この前のマイ・フェア、レディーのオードリはとってもきれいでした。

ありがとよ。まっ、よろしく頼まア。

京都でこんな伝法な言い方を聞こうとは思ってもみなかったが、里恵には初老の大久保のものの言い方が好きになった。

まあ、一応モギリ嬢として来てもらうことになったから、よろしく頼みます。

館主の田中がそう紹介してくれた。とはいっても、里恵はアルバイトだった。だから、ある程度時間は自由を許された。所属している劇団の公演があったりするときは、休むことも可能だった。それが里恵には好都合だった。

今日の映画の開始時間を十分ほど過ぎると、切符売り場から少し離れられた。売店には館主の奥さんが立って対応していた。里恵が来る前は、この奥さんが両方を兼ねてたんだからたいへんだったと思う。だから、時折大久保も切符売り場に座っていたらしい。今は奥さんと大久保が売店の中で椅子に座り、世間話をしていた。

里恵は今日の事を二人に尋ねてみようと思った。やはりどう考えても不思議な出来事だと思ったからだ。里恵はことをかいつまんで話した。二人は最初、普通の表情で、世間話と思って聞いていた。ところが、奥さんが、

それって、河原町の・・・店の事 ？

そうです。

でも、あそこは、二年前に店、閉めはってるはずやけど・・・。

大久保が相槌をいれる。

そうですよね。京都市電が廃線になるのと一緒に、店、閉めちゃいましたよね

いや、あの出来事を見てる最中に、黒い車の横を市電の電車が走っていった。あのチンチンという警鐘の鳴る音もまだ耳に残っている。そして、電車が通るゆえに、よけいに車が渋滞したんだ。と、思ったとたん、里恵はいま市電が廃止されていることを思い出した。いまはもう、市電なんか走っていない。でもさっきは市電は走り、路面に上り下りの線路があった。その線路の通っているところも石畳になっていた。それを里恵は鮮明に覚えていた。だが、と里恵は思う。里恵が学生の頃からあこがれていたあのお店は、確かに二年前、市電がなくなった時に一緒に無くなった。お気に入りだっただけに、それもはっきりとおぼえている。ぞわぞわっと、里恵は現実に引き戻された。

どうしたの？だいじょうぶ？

と奥さんが訊いてきた。おもわず座り込みそうだったが、里恵は ショーケースに手をついて、かろうじて立っていた。

あんた、なにかやったかい？

大久保が顔を覗き込むようにして訊いてきた。里恵はなにを訊かれているのか、わからなかった。

奥さん、この子、結界を踏み越えちまったみたいです。

そういうと、奥さんもうなづいた。

里ちゃん、いいかい、京都は千二百年の都だ。だから、どこかに踏み越えちゃいけない領域があるんだ。そいつを間違えなきゃ、なあんも起こらない。あの鴨川の河原だって、アベックで楽しく歩いてる分には、大丈夫なんだ。だけどね、あの河原は、保元平治の乱の後だって、何百人もの人がなで斬りに切り殺された。清盛も源氏方を処刑したし、関白秀次の側室たちと子供まで打ち首にされた。時の権力者の、見せしめのための処刑場だったんだ。つまり、たくさんの血が流されている、恨みのこもった場所ってことだ。京都は全部そんなところだと思ったほうがいい。いいかい、京都は魔界ってことさ。

里恵はそんな、特別に立ち入った覚えはなかった。しかし、向こうから何かやってきたことはあったと思う。

里恵が、叔母を見舞ったときのことだ。 大きな病院の通路を奥へ行くと、、向こうから背筋の伸びた老人が歩いてきた。里恵はその老人とすれ違いかけた。その時、突然、その老人は虚空に支えを求めるように手を伸ばし、そのまま顔面から倒れた。頭が床に打ちつけられたと思う。それまで、どこか具合の悪そうな様子も見えなかったとおもう。それなのに突然意識を失い、倒れた。里恵は声も出ず、立ちすくんだ。通路の前の各科の受付カウンターにいた看護師が飛ぶようにしてやってきた。その人をよく知っているのだろうか、看護師は**さん、**さんと大きく呼びかけた。返事はない。看護師はさっと頸動脈に手をやった。つぎに首にかけた聴診器を耳に当て、老人の胸を開いて心音を聞いた。看護師は後から駆け付けた看護師に、CPA、と叫んだ。そういう際のマニュアルがあるのだろう、後から来た看護師は受付カウンターにもどり、

緊急コール、 F2でCPA、F2でCPA

と館内放送を流した。少し離れた治療室の戸が開き、看護師二名とストレッチャーが急ぎ出てきた。その間、最初の看護師は横向きに倒れた老人の鼻腔と口腔内を見、鼻出血、嘔吐なしと確認した。そしてはじめて老人を仰向けに寝かせた。額と鼻筋に裂傷が見られた。ストレッチャーが脇に届いた。しかし、その時駆けつけた医師二名はすぐにそれに乗せようとはしない。声かけをして意識レベルを確認し、心音をもう一度確かめ、老人の上着を切り離し、硬いフロアの上で心臓マッサージを始めた。看護師が、

先生、用意できました。

と声をかけた。看護師はストレッチャーの上に心臓マッサージ盤を置き、頸部にあてる枕も用意して手に持っていた。

あげます！

医師と看護師四名で老人を抱え、ストレッチャーに乗せる。その瞬間に、看護師が頸部へ枕を差し込む。老人は首をのけぞらせるような姿勢になった。

気道確保！

もう一人の医師が下顎を持ち上げて固定している。

救急治療室へ！

医師がいうと、ストレッチャーは走り出した。廊下に野次馬なんていない。みな横によけて、それを見送った。里恵はその場に立ちすくんだまま、今見たことを反芻していた。里恵は老人が倒れるとき、その老人の顔が空気の揺らめきの中で陽炎の燃え立つように変化したのを見た。里恵の知りもしないものが見えた。翁面が現れ、中将に変わり、童子になって、元の老人の顔が鼻筋から血を流していた。

 その話をすると、
 奥さん、この子は よりわら かもしれませんね。
と大久保が言った。
 依り童・・・。
そういって奥さんは黙り込んだ。里恵は二人を見ているだけだった。
 でも、なにかあったわけじゃないんでしょ？だったらそう心配しないで、普通にしてれば？
話はここで終わった。今日の最終映写が終わったからだ。里恵は出口で客に、ありがとうございましたと何度も頭を下げた。最後の客がでてゆくと、里恵は館内へ入って掃除を始める。大久保がゴミ袋をもって客席の間を、大きなごみとか缶飲料の缶をひろう。あとは館主も一緒になって、四人で黙々と箒を動かすだけだ。
 明日土曜日はオールナイトだ。だから夜になっても観客は入ってくる。むしろ入場料も少し安くしてあるので、多いくらいだ。そんなこともあって、人手を増やして対応しないと大変だった。その応援の一人が、里恵と同じ劇団の文子だった。それと映写機が使える館主の甥の正樹だ。正樹は京都の高校生で、オールナイトの日以外にも、小遣い稼ぎに映画を映しに来る。館主の家は神主だった。だから正樹も将来は神主になることが決まっていた。にもかかわらず、正樹は演劇に興味があるようで、里恵に次回の公演のこととか、稽古のことを聞きたがった。そんな正樹が可愛いのか、里恵をおいて文子がよく相手をしてやってた。
 正樹の話では、館主が長男で、将来神主なって家を継ぐのは彼のはずだったらしい。ところが、館主は家と神主の生活のかたぐるしさが嫌で、家を飛び出したとか。東京に行き、いろいろ好き勝手をやって、たどり着いたのが映画と言う幻想空間だったということだ。戦前のことだから、日本の映画の黎明期で、映画の何もかもが目新しかったとは想像がつく。いまは斜陽産業になって、苦し紛れにあがいているのが現実だ。演劇だって同じことだと里恵は思った。
 でもね、そんなところはおじさんの方がすごかったらしいよ。おじいさんが褒めてたってお父さんが言ってた。それに比べてお前はだめだと言われてたといってたから。
正樹のそんな話が聞こえたので、里恵は振り返り、
 何のこと？
と問い直した。
 あの館主さん、陰陽道はすごかったらしいよ。

京都は、天皇陛下が東京に去ってからただの観光地になり下がった。
天子さまはいずれまたお戻りになる。
大久保の間借りしている家の主はいつもこういった。主と言っても、七十近いか、それを超えているか、どちらにしても年取った老女だった。
京都は東京と違って、やっぱり都だねぇ。
大久保がそういうと、
いやいや、あのいくさでええもんが仰山焼けてしもうて・・・。
と言う。いくさというから、第二次大戦のことだと大久保は思い込んでいた。しかし、京都は空襲も受けていない。
京都は、だいじょうぶだったんじゃないの？
そんなこと、おへん。十年以上いくさが続き、人は死ぬわ、大事なもんはやけるわ、地獄でございました。
と、真顔で答える。で、大久保が、いつの話？と聞くと、応仁の乱だという。千二百年の都の住人は、いくさと言えば応仁の乱なんだと、大久保はその常識のずれがおかしかった。だが、その常識の裏側に、京都の闇があった。 京都を文化と伝統の街と、表面だけなぞるように観光客気分で住んでさえいれば、ただ毎日が観光旅行しているようなものだった。だが、どこかに凄みを感じてしまうのはなぜだろうとおもう。このあたりを新撰組が走り、刀槍の日々があったと、つい思うからだろうか。信長がここで焼け死んだ。木曽義仲が平家討伐になだれ込み、それを義経が追討する。敗れたものは三条河原で処刑される。京都盆地は怨念の吹き溜まりだ。だから、そこに鬼が住む。

オールナイトの夜は、里恵も文子も帰るのに苦労する。だから、ちょっと大変だが自転車で都座にやってきていて、帰りもそれで帰るといった工夫をしていた。オールナイトといっても、映画の上映時間で終了する時刻が乗り物の始発の時刻に合わないことも多々あったからだ。観客も外へ出て、よく時計を見ていた。そして、仕方なさそうに歩いて帰る。

ところが、その日はあいにくと寒い雨が降りつのっていた。こうなると帰るに帰れない。そんな二人に大久保が声をかけてきた。

どうだ、のってくか？

そういって、そのまま自分の車へ歩いて行った。二人は大久保の事だから、安心して乗せてもらうことにした。といって、それぞれのアパートまでとなると方向が違うから無理だ。車に乗ったとき、大久保に、送ってもらうのは悪いので京都駅近くの深夜営業をしている喫茶店でいいです、といった。

そいつぁいけねえ、お嬢さん二人をおくるって言っちまったんだから、ちゃあんとお送りできるようにしなくちゃいけねえ、・・・。

と、ちょっと思案していたが、

だったら、おれっちへ寄っていきな。腹もすいてるだろ。家主さんがなんか作って待っててくれてるはずだから。

という。そんな御迷惑はかけられません、と言う前に車は走り出していた。

だけど、そんな、二人して押しかけて・・・。

というと、

だいじょうぶだって。家主さんは俺っちが帰る時間をちゃあんと見抜いていて、出来立てのあったかい飯をつくってだしてくれるんだ。若いお嬢さん二人を連れてかえるといっとかなくても、不思議なくらい察してて、ちゃあんと用意してくれてるとおもうよ。

えっ、そうなんですか。

いっつもそうさ。外食して帰ると、それも見抜いてて、そんなときは作っちゃあいない。ところが、家主さんの作る飯はうまいんだ。だからめったに外食なんかしやしない。

そうなんですかぁ。

そう言うしかなかった。そんなことってあるのだろうか・・・。そう思っていると、大久保が少しずつ話をし始めた。

俺りゃ、食い詰めもんの次男に生まれて、義務教育を済ませたら直ぐに奉公に出された。まあ口減らしってやつだ。その奉公先が、今成金の映画の絵看板屋さ。そりゃ景気が良かった。だから食いもんには不自由しなかった。ところが給金なんてもんは、ちっとも呉れなかった。食わして着せて雨露凌げるところで寝られるだけで恩の字と思えって、よく言われたよ。俺りゃ、そこで七年修行したよ。ところがそこで徴兵さ。

いや、戦争の話はもういいんだ。結局なんとか生き延びて、復員して一番先に行ったのは、親元なんかじゃなくて、修行先の看板屋だった。親方にはどんなに厳しくされてても、おかみさんが親方に隠れて実の息子みたいに大事にしてくれた。親方も、怒鳴りつけられはしたけど、実の親のように手は上げられなかった。俺りゃ、それだけでも感謝してた。だけど帰ってみると、なんにも無くなってた。周りも全部焼けちまって、焼け野原だ。道を通る人に何を聞いても、なんにもわからなかった。俺りゃ、泣いたよ。自分のことや実の親のことで泣いたことがなかった俺が、戦地から帰ってはじめて泣いた。親方たちの身の上のことと、自分が本当に天涯孤独になったとわかってな。

その晩、俺はそこから離れられなくて、というより行くところがなくて、拾い集めた焚き木を燃やしてそのそばで寝ちまった。そこで、俺は見ちまったんだよ。青白い月明かりの下を、大勢の人がぞろぞろと群れて歩いてゆくのを。人じゃなかった。幽鬼の群れだとわかってた。幽鬼は顔も、男か女かも分からない。小さな影の手を引いてるのもいた。この人たちは、なぜ死んだのかも分からない。なぜ殺されたのかも分からない。死んでいるのか、生きているのかも分かっていないんだ。都大路には、百鬼夜行があるというけど、百鬼夜行もおんなじじゃないかと思ってるよ。自分が死んでいるのか生きているのか分からない、なぜ殺されたのかも分からない人たちが、ああしてさまよっているんだ。俺はまた自然と涙が流れて、泣いたよ。すると、その人の群れの中から二人の影が、俺のほうを振り返って見たように思った。それも直ぐ行っちまったがね。俺は、おかみさあん、親方ア、と泣いて呼んだんだ。

東京空襲の時、 表の通りに何百もの焼死体がならべられていたそうだ。親方の家もその時焼けたと聞いた。以来、二人の姿を見てないそうだから、あのなかにいたのかもしれない。

表通りに転がされた人たちを、誰が殺したのかねぇ。爆弾落としたのは米軍だけど、あいつらだけがあの人たちを殺したんじゃねえと、俺りゃ思ってる。それにしても、戦地じゃ幽鬼の群れなんか見やしなかったのはどうしてだろう。もっともっと殺しあってたというのになあ。そいつぁ多分、俺自身がもう幽鬼になってたからじゃないのかなぁ。

大久保さんの車の中での話は、そこで終わった。車は大きな京町屋の前で停まった。
ちょっと待っててくんな。車ぁ置いてくるから。
そういうと、大久保さんは車を回して行った。大きな京町屋作りの家構えだった。犬矢来も見える。大久保さんは帰ってくると、
どうしたぃ、入ってくれてりゃよかったのに。
といって、引き戸を開けた。玄関から置くまで通り庭が走っていた。高い天井の下に水屋と嫁隠しが見え、この時代にまだ井戸があって、はしりとおくどさんが並んでいた。里絵も文子もそれが珍しかった。
あがんな。
と言われ、二人は上に上がった。すると、和服をきた女の人が現れた。
おかえりやす。
と、膝に手を置いて挨拶をする。
ただいま帰りました。
と、大久保も生真面目に答える。
この人が大家さんだ。
と紹介した。
お食事になさいますか？
と大家さんが聞くと、大久保さんも口の中でううっとか言って答える。
お嬢さんたちもどうぞ。
と、まるで分かっていたことのようにいざなう。つい誘われ、二人は奥へ付いて行った。
そこにはもう三人分の料理が用意されていた。これは夜食だろうか朝食だろうかと里恵たちは迷ったのだが、さほどお腹にこたえない、ちょうどよい量の料理が用意されていた。いってみれば喫茶店のモーニングといったところか。里恵にはサラダと好物のパンケーキにメイプルシロップ、ベーコンエッグ、文子にはこれも大好きなピザトーストと、むせかえるほど振りかけたがるタバスコ、それにウインナーと目玉焼き、レタスサラダ、大久保にはおかゆに鮭と味噌汁、香の物、そして卵焼きと、京都と関東が入り混じったメニューになっていた。大久保は、どうだ、と言わんばかりの顔つきだ。大久保はどうぞと促した。
だから、俺はずうっとここに居座っちまったんだ。
という。大久保は食事をしながら、続きを話し出した。
それだからっといって、俺には行く宛なんかなかった。だから、親方の家のあったところで暮らすことにした。ひょっとして親方夫婦が帰ってくるかもしれないとも思ったからだ。しかし、元からもうなんにも無くなってた。それでも焼け焦げた地面を掘り返し、欠けた茶碗やら火鉢や、何とか使えるものを掘り出して、それと食いもんを闇市で交換した。それからその闇市で仕事を見つけ、それで食いつないだ。結構危ない仕事にも手を染めたよ。だけど結局俺にできることいやぁ、看板屋さ。だからそのうち看板屋に戻って、ペンキ塗りも看板つくりも風呂屋の壁絵も

描いたよ。それと一緒に、親方の土地に掘っ立て小屋も建てた。
　そうしたころはもう日本も、だいぶ落ち着いてきてたんだろうな。焼け跡が目立たなくなって、憧れのハワイ航路なんて歌も流行りだした。そうして本業の映画の看板も描くようになった。ジャングルブギや新愛染かつら、酔いどれ天使なんて描いたもんだ。

文子も必死に堪えていたんだろうが、熱いピザトーストにたっぷりかけたタバスコにむせだした。
またあ。そんなにかけるから。
だって、こうすると、美味しいんだもん。
そういって、
話の腰を折ってすいません。
と、謝った。
でも、これって、どうして私たちの好みが分かったんでしょう。私はこれ、全部お気に入りなんだけど。里恵のだって、そうでしょ？
ふん。
里恵もちょっと首をひねりながら頷いた。
まあ、そのことはこれから話すさ。
・・・・、で、俺は一人で看板屋兼ペンキ屋兼風呂絵師と、塗りたくるものはなんでもやって食いつないでた。
あのぅ・・・、風呂絵師ってなんですか。
銭湯の富士山の絵を描く専門の人を風呂絵師っていうんだ。風呂の絵ってえのは、二年に一度は描き替えなくっちゃならねえんだ。そうしないと、カビは生えるわ、黒ずんでくるわ、で見られたもんじゃなくなる。だから、風呂がお仕舞いになるとすぐにかかって、男湯女湯二面を半日で描き上げる。壁一枚で共通になってるところもあるけど、本当はそっちのほうが大変なんだ。両方から見ても、ちゃあんと富士山になってなくちゃならねえ。それでいて、白砂清松、一幅の絵にならなきゃ風呂絵じゃねえ。でも、こっちはやっつけ仕事さ。それでもなんとか収まって食っていけた。
そんな中、突然、親方の甥ってえのがやってきて、ここでなにやってるんだ、人の土地に家なんか建てやがって、出てけって言いやがった。こっちは親方が帰るまでここを預かってるって気持ちだったから、ことを分けて話して、親方さんたちの消息を改めて聞き、後はわかりましたって出てきちまった。そしたら、甥ってえのが少し気がとがめたのか、ちいっとばかりの金を握らせてきた。そんなのはいらねえって返したんだが、何度も押し付けてくるんで、結句、もらっちまった。
それから俺は御贔屓筋の映画館に住みこませてもらって、絵を描いてた。するってえと、まだろくに食えねえ時代なのに、わけの分からねえドタバタ洋画で観客は涙を流して笑ってるじゃねえか。俺は情けなかった。笑ってる客も客だが、その片棒を担いで食ってる自分も情けねえと思った。ついこの前まで三八銃を担いで、戦場を逃げ回ってたというのによう。しかしなあ、明日をもしれぬ身の上から、やっと解放されて、お国のために死んで来いとも言われなくなって、昨日のことはみんな呑み込んで笑ってみたくなることもあるわなあって思うようになった。
そんなときさ、ここの館主さんに俺は拾われたんだ。東京は焼け野原になって何にも無くなっ

たが、京都は空襲をまぬがれ、映画館も全部残った。そこへもってきて今は映画が大流行で、絵看板師も引き抜き合戦だっていうんだ。それで、俺の看板の腕を見込んで、ぜひ京都に来てくれっていうんだ。

でもよう、いかに無理筋で今の映画館に居候させてもらってるとはいえ、渡りに船とばかりにホイホイ行っちまっちゃ義理がたたねえ。で、いままでお世話になった館主さんに相談をかけた。そしたら、即座にいいよ、京都に行きな、って言われちまった。やっぱり、居候一人抱えて厄介かけちまってたらしい。俺りゃ、懇ろに頭ぁさげて礼を言い、今の館主さんにもおせわになりますって頭を下げた。そうやって、翌日には鉄道に乗ってた。特急へいわ、なんて名前は知らないだろう。翌年の昭和二十五年には改名して特急つばめ になったんだ。俺はその前の へいわ に乗った。八時間かかった。はやかったねぇ。これが特急というものかと思った。京都駅までは混みに混んだ。そんな話はどっちでもいいからはしょることにして、京都駅について、俺りゃ、はじめて輪タクに乗せてもらった。駅前には何台も輪タクが停まって、客を待ってる。館主さんがその中の一台に声をかけ、なんか交渉してた。たぶん、運賃を値切ってたんだと思う。それがまとまったのか、館主さんが手招きするんでそばに行くと、乗れという。俺りゃ肝がつぶれた。人に漕いでもらって運んでもらうなんて、恐れ多くて申し訳なかったからさ。

いやあ、これがこの人たちの商いですから、値切っても乗ってあげるほうが、この人たちにはありがたいんです。

へえ、毎度ありがとうございます。

輪タク屋もそういった。

そうやって運んできてもらったのが、この家だ。

ごめんやす。

館主さんがそういって入っていくと、すっとでてきたのが今の家主さんだった。で、すっと、

おかえりやす。お食事も用意できとります。どうぞ。

というじゃないか。俺りゃ、それにもびっくりしたねぇ。待ち受けてても出来ねえような塩梅にすんなり出迎え、すっと座敷に通されてすとんと座るとさっと料理が出てくる。食糧難も一応落ち着いてきちゃいたが、それでもまだ大変な時代だ。持たされた盃に、下りものの灘の生一本が継がれた日にゃ、肝をつぶすぜ。俺りゃ家主さんの顔をまじまじと見ちまった。

まま、遠慮せず。

と、館主さんはしらっというじゃねえか。で、館主さんに言われて盃をほすと、また注がれる。家主さんが、下にも置かないもてなしをしてくれる。料理もどこでこんな材料を手に入れたのかって首ぃひねった。京都じゃこんな時、仕出し屋さんを使うんだってな。大門跡さんから大店旧家御用達の仕出し屋があって、それぞれの節句の日には決まった料理を持って来てもらうらしい。さすが京都、と感心したねえ。しかし、俺っちみたいなチンケな野郎にこんなことをしてくれるたぁ、思ってもみなかった。それもあって、ついすごした盃にすっかり酔い、酔いつぶれて眠り込んじまった。そして、夜中、目を覚ますと、俺りゃみちまったんだよ。館主さんがすっくと立ち、座敷に張り付くように平服している家主さんに、

よいか、あの御仁は私の大事な客人である。けっして慰労なきように。粗相があってもならぬ。意に逆らってもならぬ。じゅうじゅう心得てお仕え申すように。よいな。

と言い渡してた。
　心得ましてございます。
家主さんのそう答えた声が遠く反響して、姿も鬼に変わっていた。俺も知らないんだが、あれは館主さんの使っている式神って奴かもしれないと、後で思った。そう思った時はぶるっと来たが、東京で幽鬼の群れを見てきた俺だ。式神であろうと使い鬼であろうと怖気づくもんじゃない。そう腹ぁくくって、酔いに任せてまた寝ちまったんだ。

今日だって俺りゃ、なんにも言っちゃぁいないぜ。何時に帰る、二人を連れて来るなんて、一言も言ってねえ。でもこの通りだ。でもよう、俺りゃ、これでいいんだ。満足してる。俺りゃ、これで十分さ。だから、俺りゃ嫁も貰わず、一生ここの間借り人で終わる気でいるのさ。
ここで大久保さんの独白は一段落した。里恵と文子は顔を見合わせた。言葉はなかった。これも異界京都の一面かもしれないと思った。また、そのなかで平気な顔で安住している大久保も、二人には異次元の住人に見えた。
怖がらせたかい？なあに、心配するこたぁねえ。お二人さんには何にも怖いことなんか起こりゃしねえ。もし取って食われるとしたら、俺だけよ。
怖くはないんですか。
なあんの、怖いもんか。むしろ楽しいぐらいさ。
そういって大久保は声なく笑った。

夜も白み、始発のバスも動き出したようだ。二人は大久保と家主さんに礼を言い、早々に帰ることにした。すると、きちんと梳かしつけた髪に瀟洒な和服姿で、家主さんが送ってくれた。
またお越しやしてください。大久保はんも、お若いお方とお話しするのが楽しそうでございましたから。
そういって柔らかに頭を下げてくれた。

文子、どう思う？ほんとの話だとおもう？
里恵が訊くと、文子はぶるっと震えた。
あるとおもう。
あるって？
ありうると思う。だって、二人のメニュー、ちゃあんと好み通りだったじゃない？諸多面の人に、あれは無理だと思う。
そうね、そうだよね。
そういった後、二人は黙り込み、速足で歩いた。二人とも、なんとか早くここから離れたかったからだった。
翌日、思い立って奥さんにその話をしようと思ったが、出来なかった。そしてその日は大久保に昨日の礼を言うだけで、世間話も出来なかった。だが、どうしても黙ってられず、翌々日、里恵は奥さんに話した。もう抱え込むには、それが限界だったからだ。

あらまし聞くと、奥さんはたまたま横を通る大久保さんに、
おおくぼはん、また いけず しはったん？こんな おぼこい お嬢さん方に、わるさ しはったら、あきまへんえ。
と、やんわり声をかけた。大久保さんはちょっと首をすくめ、手を項にあてて、そそくさと去っていった。
そうどすなあ、あの頃は京都にアパートやらマンションなんてない時代どしたよって、丁度知り合いに下宿人を捜してたひとがおいやして、渡りに船で、大久保さんをお頼もうしたんどす。ほんまは学生さんなんかがよろしゅうおしたんやろけど、時期が時期どしたから、入学式もおわってしもとりましたんで、学生さんは皆下宿先はとうに決まってしもとりました。で、大久保はんは独身どしたから、お願いしたんどす。確かにそれ以来、大久保はんは、綾乃はんのお家の離れにずうっと住んどりはります。
うちの旦那様が大久保はんをおつれもうしたときには、東京から電話がありましてなあ、ええ職人さんをお連れするから、それにふさわしいもてなしを用意しとくようにとお言やして、うちと綾乃はんであちこちに掛け合うて、いろいろ用意したんどす。それがほんまのとこどした。そやよって、そないにびっくりするようなことではおへんのどす。
そういって、まるで手品師のように鮮やかに種明かしをして見せた。そして、あんさんがたに用意されてた朝食って、フランソワ喫茶室のモーニングセットと違います？という。あっと声が出た。
あんたがた、大久保はんと何度かあそこで、朝ごはん食べて帰りなはったやろ？その時のこと覚えていたんとちがいます？
そうだった。フランソワで文子と里恵が頼んだのが、あのメニューだった。
フランソワさんは、朝まだ開店してのうても、取りに行けばセットは用意してくれはるんどす。それも、大久保はんのたくらみどしたんやねぇ。まあ、罪のない悪戯、わるさ と思うて、わろてゆるしてあげなはれ。そうやって若いお人を怖がらせるのが、あの人のたのしみなんどすよって。
それと、実は綾乃はんは戦争未亡人どした。出征前の御主人と婚礼してからたった一週間で、旦那さんは入隊しはりました。そのあと、気づようあの家を守って、残っておいやしたお姑さんも戦中戦後、ずうっとお世話してはったんどす。そやけど、息子さんの戦死公報を見てすぐ、おしゅうとさんは、気を落としはったんか、亡うなってしまはりました。
亡くなって二年、いや、三年たっとりましたやろか。うちの旦那様がある見込みをもって、大久保はんをお願いしたんどす。ほれ、東男に京女、京女に江戸男、ちゅうていいますやろ。それどすがな。そやけど、ちょっと見込み違いどした。かといって、違うとも言い切れまへん。ふたりは確かに籍をいれた夫婦ではござりまへんけど。夫婦ではないかというとそうでもおへん。伴侶とか連れ合いというよりも、丁度いい距離をおいた、人生のパートナーいうんどっしゃろか、そういう関係なんどす。そやさかい、大久保はんは今でも最初から住んでる離れに、ずうっと住ん

ではりますし、綾乃はんは母屋で暮らしてはります。それから、大久保はんは月々ちゃあんと間借り賃をはろとります。それと食事代も。つまり、ぜえんぶ二人の生活費どすなあ。たぶん、大久保はんの手元には、お小遣いほどしか残りまへんやろ。でも、それでええんどすやろなあ。ふたりとも幸せそうどすよってに。

でも、大久保さんは、家主さんは館主さんの使い鬼だっていってました。

はは。

と奥さんは笑った。

旦那さんが、元は陰陽道を良くする神主さんだったいうても、鬼道までは、ようしはりません。それは大久保はんの てんご どっしゃろ。

それはそうだと、その日はそれで納得して終わった。

だが、里恵は寝ながら考えて、どうも納得がいかない部分があると思った。私たちを驚かすために、夜明けにフランソワまでモーニングセットを取りに行くだろうか。行くとして、誰が行くのか。大久保さん？家主さん？どっちも可能ではあるが、何を好きこのんでそんなことまでするだろうか。大久保さんならあり得る。私たちを怖がらせるための舞台装置として、あらかじめ、そんな演出もやりかねない。いや、奥さんの言った通りではなく、大久保さんが家主さんにあらかじめモーニングセットの内容を伝えておけば、あれぐらいのもの、作るのはわけない。それにしても、何が面白くて、そんな手の込んだことをしたのだろう・・・、と考えているうちに寝付いてしまった。そして、その寝入りばなに、館主さんに聞いてみようとも思った。・・・、何を訊くんだっけ。綾乃さんて家主さんは、鬼女ですか？・・・。そうきくんだった・・・。

翌日、都座のホールで大久保さんとすれ違った。すると、

一昨日のことは、本当だからな。奥さんがどう言ったかは知らないが、うちの家主さんは、鬼だからな。俺りゃ、鬼さんに世話ぁされて生きてるんだ。

すこし怒った顔で、そういうと、外へ出て行った。

週末、またオールナイトに、文子が応援アルバイトでやってきた。

そうよねえ、私たちをたぶらかすためにだったら、そんなに大仕掛けな企みなんか、しないよね。普通に夜話をして、実は、と言ったって十分なんだから。

だけど、じゃあ、単なる誑かしだったら、あのモーニングセットなんかどうなるの？

そりゃ、里恵が言った通り、大久保さんが予め電話でもしといたんじゃなあい？

そうだよね。

他愛もないそんな会話でふたりは納得したのだったが、それでもまだ何か引っかかるものが残っていた。

里恵ちゃん、館主さんに夜食、持っていって。

奥さんが言った。館主さんは、オールナイトの時は一晩中映写室にこもって、映画を映し続けていた。ホール横の狭い階段を上がり、古びた木製のドアを開けると、そこは準備室で、映写機用や営繕のための道具、フィルムを入れていた缶なんかが積まれていた。ほかに、映画館が大繁盛してたころの従業員用のロッカーが並んでいる。一体何人いたんだろうと思う。

次の部屋のドアを開けると、途端に騒音が噴き出すように聞こえてくる。映写機はわりとうるさいので、映写室は一応防音になっているのだ。

おっ、里ちゃんか。

館主さんは顔だけ振り返った。手はフィルムを映写機にかけている。もう一台の映写機がつぎの巻を映してる。その間に次のフィルムを用意しておかなければならない。次の巻のフィルムを巻いたリールを、二台あるもう一方の映写機にかけ、フィルムのリードを引き出して映写機の上部スプロケットのフィルムガイドに差し込み、つまみを押してガイドを開いてフィルムを通す。次にスプロケットの爪にパーフォレーション(フィルムの両脇に設けられた一連の送り穴)をきちんと

はめ込んで、ガイドを閉じる。そしてレンズの後側にあるレバーを上げ、プレッシャープレートをアパーチュアプレートから離し、フィルムを通す。このとき、上部スプロケットとプレッシャープレートの間のフィルムが十分にたるむようにしなければならない。そうしないと、フィルムが送られたとき強く張りすぎて破断する。さらに、中央ののスプロケットにフィルムを架ける。このときも同様の理由で、スプロケットとの間のフィルムがたるんでいなければならない。次にフィルムをスタビライザーの下を通し、音声ヘッドに巻き付け経由、下部のスプロケットにかける。この時は、スタビライザーを少し傾けてフィルムがたるみのないようにかける。そしてこれがさいごだ。巻きとりにテンションをかける二つのスタビライザーを経由して、フィルムのリードをリールに先端を巻きつける。この一連の操作は、フィルムを人差し指と中指で挟んで映写機の各部に差し込むようにして行う。館主さんはこれをほんの三十秒ほどでやってのける。フィルムをかけ終わると、映写機を数秒起動し、直ぐ映写できるようにじゅんびしておく。その間に、映写し終わった前のフィルムのまき直しが終わっている。それを缶に入れなおして、次回に備える。里恵のくるタイミングが悪かった。

お夜食です。
作業を終えた館主に声をかけた。館主は手についたフィルムの油をぬぐいながら振り向いた。
おっ、ありがたい。
そういって、汚れた指のまま、おにぎりに手をのばす。里恵はためらったが、館主に、
おおくぼさんのこと、奥さんにも訊いたんですけど・・・。
と話し始めた。
ああ、訊いてる。笑ってたよ。大久保さんが てんご したって。でもね、私はあいつみたいに、ただの てんご だとは思わないよ。大久保さんは、京都の闇に気が付いているんだ。
じゃあ、やぬしさんって・・・、式神とか使い鬼なんですか。
そんなわけないだろ。大久保さんは、私が何かしたと思ってるらしいが、嫁さんが言った通りだ。私には鬼道は使えない。陰陽道では呪 しゅ ともいうけどね。
その時になって、里恵はあまりに直裁に訊きすぎたことに気が付いた。奥さんが言ってた。館主さんの家は、古くからに神社の禰宜の家系で、館主さんは長男だったから当然家を継ぐはずのものだった。それを館主さんはなぜか嫌って、東京に出て行った。
もともとの原因はね、幻灯機だったみたいやの。
奥さんも、平生はそんなに京都弁が出ない。お父さんが子供のおもちゃにって買ってきてくれた幻灯機の、あまりの妖しさに魅入られたらしいのよ。そういってたわ。
幻灯機と言っても、当時はもう流行は終わっており、子供の喜ぶような内容のものは無くなっていた。しかし、紙製のロールフィルムに印刷された種板は、闇の中で映されると子供を驚かすに十分だった。動かない映像が今にも動き出しそうに見え、場面が変わるとストーリーが次に展開する。それが闇一面に拡大されているのだ。子供の心には幻想の用に見えた。こまっしゃくれた白人の男の子が犬を追いかけ、犬に逆襲されてにげまわる。女の子が手を振って家の中に招く。犬に追いつかれてお尻に噛みつかれながら、開いたドアの中に逃げ込もうとする。ドアが閉まって、窓から男の子と女の子が外を覗いている。犬はドアに向かって吠えている。たったそれだけの画像が面白くて仕方なかった。それに比べ、中国の景勝地のスライドとか満州国建国の画像などは退屈でしかなかった。百年戦争、国民防聴、狭い職場も笑顔で広い、戦に勝つのだ、増産だ、といった国威発揚を描いた種フィルムも見ることができたが、子供には面白いものではなかった。しかし、もう娯楽らしい娯楽のなくなっていた時だ。幻燈するぞと言えば、子供たちは集まってきた。もう映画の時代になっていたのだが、目玉の松ちゃんよりいぬにお尻を噛まれる男の子の方が大人気だった。

お江戸もそうだが、京都は風水でいう四神に守られた都なのだと館主さんは話し始めた。京都は、北の丹波高地を玄武、東の大文字山を青龍砂、西の嵐山を白虎砂、南の巨椋池を朱雀と見做すことが可能で、背山臨水を左右から砂で守るという風水の観点から言って、正しく京都は四神相応の地であった。これを東京でいえば、東の太川、隅田川が清龍、南は東海道を白虎、北の麹町台地が玄武と見做し、江戸城の鬼門の上野に寛永寺を建立して四神相応とした。そして、そのような配置を家康に懸案したのが天海であった。

そのうえ、江戸は将門はんのおるとこでっしゃろ。この京都に送られてきた将門はんの首が、都大路に晒されて三日目に江戸の大手町まで飛びましたわなあ。あれほどの怨霊はおりません。そこに目をつけて、江戸の守り神に据えましたわなあ。さすがです。

館主さんはそういって、笑い話にしてしまった。

でもなあ、この京都は、なんぼ四神に守られておっても、天子さんがおらんようになって抜け殻になってしまいました.あのお方が祈っていてくれたからこそ、京都は安泰だったんです。いんようになったとたん、物の怪やら祟り神やら生霊怨念が渦巻くようになってしまいました。なにせ、京都は源氏物語、平家物語の都だすさかい。

六条御息所のことかぁと里恵は思った。

京都はいたるところに地蔵さんが埋まっています。それもこれも、いつも戦火に焼かれて、庶民やらが殺されまくった供養のためです。ほんまに、人間ぐらいですなあ。同類をこうも大量惨殺するのは。

そして、館主さんはさらに、

気をつけなはれ。大久保さんは腹に覚悟があるさかい、ああして平気で生きてはるけどおなごはんのあんさんは、そうはいかんかもしれまへん。変によそ見せんとおいなはれ。
真顔で里恵に言った。大久保さんは、この京都で続いてきた虐殺の歴史と同様のことを戦地で見てきている。館主さんのいう大久保さんの覚悟とは、そんなことを言ってるのだろうと思った。

そんなことがあって以来、里恵はよく館主さんのいる映写室に行き、陰陽道とか京都の話を聞かせてもらった。館主さんはいつも慣れた手つきで映写機を扱いながら、淡々と、まるで講義をす

るように、里恵に話して聞かせた。大久保さんの件で出てきた、式神というのと使い鬼と鬼女はすべてことなったものだと館主さんは言った。

そも日本は極東にある世界の果ての地で、世界のあらゆるものの吹き溜まりの地だと館主さんは言う。あらゆるものとは、文化であったり、宗教であったり、建築様式や仏像様式、そしてそれらとともにこっそり伝えられた呪術であったりもする。陰陽道に限れば、陰陽道は神道（古神道）に道教の陰陽五行思想や、チベット仏教、密教などの思想が執り入れられて習合したものであって、その思想は神社神道にも儀式として残っている。たとえば神楽は神降ろしによって神を呼び出し憑依させる儀式で、祈祷も同様のことだ。さらに、際立って世界とつながっていることを意識させるのが、なにあろう、清明さんの桔梗紋ですと館主さんは、紙に一筆書きで五芒星を描いて見せた。

これは清明神社へ行くと、あっちにもこっちにもかざってあります。清明さんの紋ですから、当然といえば当然ですが、これとほかに、九字紋というて格子状の紋があります。この両方を合わせて、ドーマン・セーマンといい、魔除けの呪符としてつかわれておりました。そのなかで、五芒星は魔除けは多弾除けであるとして、帝国陸軍の将校から兵卒まで、軍帽につけておりました。

その五芒星、もとは古代イスラエルの王、ソロモンが七十二柱の悪魔を自在に使役したときの呪符に描かれていたと伝えられています。それゆえか、五芒星はソロモンの星、六芒星はダビデの星と言われており、この六芒星は現在のイスラエルの国旗に描かれています。

呪は闇のものだから、密かに伝えられ、明らかな記録は残されていないのですが、古代イスラエルとその時代に起こった魔術がこの極東の地に流れてきて、桔梗紋となって残されているのだと言えます。そして、ドーマンは九字護身法の守り札として身に着け、臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前 と唱えて魔を退けたのでした。九字はこのほかにもあり、清明さんの子孫である土御門家では 朱雀・玄武・白虎・勾陣（陳）・帝久（帝公、帝正、帝台、帝后、帝禹）・文王・三台・玉女・青龍 の九字を用います。

そういって、館主さんはポケットからひょいと朱の房の付いた鈴を出した。それにはまさに、ドーマン・セーマンが刻まれていた。そして、

こんなものが必要かどうかわかりませんが、持っててください。
と言って、それをひょいと里恵の手に乗せた。

では、大久保さんのところの家主さんは何なんだろうか。館主さんはそれをあいまいなままにしてしまった。
日が過ぎた。映画館の斜陽は増すばかりだった。そんな中、ある時から映写に男のアルバイトが入るようになり、館主さんの姿を見ない日が続いた。大久保さんも、映画館の横の工房に、看板工房という看板を掲げた。そして、御近所の店の看板や店内の壁の塗り替え、時には本当に銭湯の壁絵を描く銭湯絵師も始めた。

いいじゃねえか、都座のためだ、俺はなんでもやるよ。館主さんに拾われた身だ。出来るこたぁ、なんでもやるさ。芸は身を助けるってね。

そして、館主さんは、これまで依頼があっても断ってきた占を受けるようになった。陰陽道の占術である六壬神課は、およそ2000年前の中国で成立した占術で、時刻を元に天文と干支術を組み合わせて占う。その時、簡略的に式盤と言うものを使い、その盤上に配された十二神将、十二天将、さらには十干十二支から吉凶を占う。この六壬式は、平安時代から鎌倉時代にかけての陰陽師にとっては必須の占術であり、陰陽師として名高い安倍晴明は子孫のために 占事略決 を残している。館主さんは、この難解な占術を行う時は嵯峨野の庵にこもって出てこなかった。

大変なのよ、命削るみたいで。

ふっと、奥さんはそう漏らした。そんな中から私のバイト代が出ているのなら、私、やめようか、と里絵は大久保に相談した。

やめるこたぁねえよ。やめられちゃ都座が困る。里ちゃんも立派なスタッフの一員だから、いてもらわないと困るんだ。

大久保さんはそういうが、里絵はそうは思えなかった。

天の羽衣 ―20―

春の花冷えの夜、文子と里恵は都座から二人で帰ろうとしていた。途中で、文子が情報誌を見せ、

この近くで、こんなこと、してるみたいよ。ちょっと寄ってみない？

と言った。

春、観桜の宴、新企画のパーフォーマンス。
屋台も出てます。露店、模擬店も出ています。
ぜひお立ち寄りください。

情報誌にはこう書いてあった。確かに、場所はこの近くのようだった。

でも、もう遅いし…。

里恵が渋ると、

近くだから、詰まんなかったらすぐ帰ればいいのよ。

というので、立ち寄るだけ寄ってみることになった。少し行くと、建物の板壁挟まれた石畳の道が続く。京の細い路地を抜け、アスファルトの道に出ても辺りは暗かった。この細さなら、車も通らないだろうと思った。もう帰ろうと文子に言おうとすると、ほら と文子が白壁に貼られた表示物を見つけた。矢印ともうすぐそこ と書いてあった。そして、その紙の向こうに、白壁の崩れたところがあった。そこからまばゆい光が見え、安っぽい音楽も聞こえてきた。本当は回り込んで、門とかなりから入るべきなのだろうが、文子が、いいからいいから とその崩れた白壁の一角をまたいで、中に入っていった。里恵もそれに続いたのだが、遠くだからか、人影もさほど見えなかった。屋台が一軒、二軒。舞台があって、花道も見える。その前に折り畳みの椅子が並べられ、舞台の照明越しに、椅子に座っている人の黒い頭が何名か見止められた。いらっしゃい！と屋台の男しゅが声をかけてきた。舞台の上の、大きな蝶ネクタイをした司会者がなにかのパーフォーマンスを紹介していた。ふたりは後方の椅子に腰かけた。

花寒の夜ではございますが、今宵、観桜の宴にお越しくださいまして、まことに、まことにありがとうございます。さて、われら、観桜集団が御高覧に興しまするは、御伽草子、祇王と仏御前でございます。

祇王と仏御前といえば、都に並びなき名花でありました。されど、なにゆえか、こんにち静御前ほどには知られておらぬ白拍子でございます。ゆえもってここに、その悲しき運命のほどをごらんにいれる所存にございまーす。

さて、その前に、いまはもう余り知られていない白拍子の芸とパーフォーマンスをご覧にいれます。加えて、今この会場におられますお客様の中に、お美しいお嬢様がいらっしゃいますので、そのお方を、白拍子に仕立ててごらんに入れたいと存じます。

そういいながら、司会者が私たちの方へ歩きてきた。そして、文子の手を取り、

御協力、お願いします。

と、マイクを外して、そっと私たちに目顔で懇願した。

ただ化粧して衣装を着けて舞台に上がっていただければ結構ですから。あとで、お礼もいたします。

と言う。その司会者は、そうとは知らぬことだが文子も弱小演劇団の一員だ。名もないパーフォーマンス集団に協力するのにためらいはあったが、否応はなかった。

里恵、行ってくるね。

司会者に手を取られ、文子はそういって付いて行った。

ありがとうございます、ありがとうございます。お客様がご協力していただけるそうです。のちほど、舞台におあがりいただきますので、みなさま、乞うご期待。

そういって、二人は舞台のそでに入っていった。

舞台が暗転した。照明も消えてしまったため、暗闇の中で里恵はあたりが見えなくなった。すると、舞台の奥のスクリーンに、火がともるように一幅の画像が浮かんだ。それはスクリーンの裏側からプロジェクターで投影されていた。大きな桜の木の映像だった。里恵はそれをどこかで見たと思った。円山公園の祇園しだれ桜とわかった。映像は次々と変わる。京都は神社仏閣ばかりが有名だが、そこに沢山の桜が咲き乱れ、まさに春は花繚乱の姿をあらわす。平野神社の数千本の桜は、その中に魁桜、平野妹背桜、白雲桜、胡蝶桜、朱雀桜と、名だたる桜が数え切れないほど咲き乱れる。雨宝院、歓喜桜。千本釈迦堂、阿亀桜。そして醍醐寺、枝垂れさくら。ほかにも里恵の知らない桜が映されて、それに見入っているうちに三か所スポットライトがともされ、舞台に三人の白拍子が立っていた。龍笛が鳴り、扇拍子、鼓拍子が打たれ、三人が舞い始めた。三弦も鳴る。歌が始まった。

春の弥生の あけぼのに
四方の山辺を 見わたせば
花ざかりかも 白雲の
かからぬ峯こそ なかりけれ

花橘も 匂うなり
軒のあやめも かおるなり
夕ぐれさまの 五月雨に
山ほととぎす 名のるなり

秋のはじめに なりぬれば
今年も半ばは 過ぎにけり
わが夜ふけゆく 月かげの
傾く見るこそ あわれなれ

冬の夜寒の 朝ぼらけ
契りし山路は 雪深し
心のあとは つかねども
思いやるこそ あわれなれ

そんな今様が終わろうとしているときに、もう一人、白拍子に扮した文子があらわれた。

先ほどのお嬢様の登場でーす。

まばらな拍手が起こった。先に登場していた白拍子は白の水干、立烏帽子 、紅の袴、 蝙蝠扇を手に持って、錦包藤巻を佩びていた。文子の水干は桜色であった。その文子が公達に扮した司会者に手を引かれ、花道を長袴を踏んで進んできた。闇をライトが照らしかけ、文子の白作りが映えた。花道の先端で、手を引かれるままぐるりと回り、全身の作りを見せた。観客から、ふうっとため息が漏れる。司会者が手を放し、文子一人が立っていた。すると、ふいに文子の左手が太刀を押さえ、扇を高く構えた。足が拍子を踏み始める。鼓拍子が続き、三弦が鳴った。扇拍子に合わせて文子が舞う。

君を初めて見る折は
千代も経ぬべし姫小松
御前の池なる亀岡に
鶴こそ群れ居て遊ぶめれ

続けて、

君を思えばこの胸に
たちまち桜咲き満ちて
ふわりふわりと舞いながら
伝えておくれ我が恋を

ひめた心をときはなち
ふりそそぐ愛あたたかく
光のようにつつまれて
私は舞えるきらきらと

この時、正気だったのは里恵だけかもしれなかった。文子は花道の先端で、腰を構え、扇を開いて、澄んだ声を響かせて今様を歌い、緋の長袴の裾を捌き、桜色の袖をひるがえして舞った。舞台の照明は消え、すべてが消えて、醍醐しだれ桜が圧倒的な姿で現出した。文子はその下で舞い続ける。周りは闇であった。

チリーン

と鈴が鳴った。里恵の足元に、ドーマンセーマンの文様の刻まれた鈴が転がった、結界が張られた。すべてが消えた。鈴祓いがなされた。里恵と文子だけが、花明かりの下に立っていた。文子も元の姿だ。足元には濃ゆいピンクの桜の花びらが積もっている。その桜の花の色が、二人に狂いだしそうなおののきをもたらした。里恵は足元の鈴を拾うと、文子の手をつかんで一気に駆け出した。新月の闇を踏み分け、わずかな光を頼りにかけ続けた。後ろで文子の激しい息遣いが聞こえる。今振り返れば、その文子が何かに変わっていそうで振り返れなかった。板塀と石畳を走ると通りに抜け、目の前を車が一斉に走り出していた。

里恵、手を放して、いたい・・・。

振り返ると、文子が膝に手をつき、肩を揺らせて喘いでいた。

なんだったの、あれは。

文子が訊く。

わかんない。

誰かのいたずらかしら。

わかんない。

里恵は繰り返すしかなかった。

二人はじっとしていられなかった。でも、どうしていいか分からない。とにかく歩き出した。そして里恵は、自分が何か握っていることに気付いた。ドーマンセーマンの鈴。里恵はそれを握り直し、文子の手をもう一度握り、小走りに走り出した。文子が何か言ってるのを無視し、館主さん、館主さん、そう呪文のように唱え、都座に急いだ。

新月の夜に桜の宴、ですか・・・。これはもう、私の力の及ばぬところのようですね。新月の夜は、陰と陽が最も満ち満ちております。しかし、陰が凶で陽が善というのではありません。陰があっての陽であり、陽が満ち満ちると、これも凶になります。
また、桜は人を狂わせます。ましてや千年の桜は、人を惑わせ、狂い死にさえさせることさえあります。その桜の下で、何かが二人に幻影をみせた・・・。

そういうと、館主さんは眉を曇らせた。ふっと、文子が口を開いた。

わたし、今日の事がまがまがしいことだったとは到底思えないんです。

そういって、文子は里恵の方へ振り返った。

わたし、いま胸のそこから仏御前の悲しみが湧いてくるんです。祇王御前も祇女も泣いています。わたし、これを脚本に書いて、次の舞台にかけてもらおうと思います。
里ちゃん、いつもはあなたが本を書くけど、今度は私に書かせて。私、初めてだから分からないことだらけだけど、教えて。

そう言っている文子を、館主さんは見つめていたが、次には目がなごんだ。そして、

これ、もってなさい。

そういって、里恵に渡したのとおなじ、ドーマンセーマンの紋を刻んだ鈴を渡した。そして、帰っていく二人の背に向かって印を結び、不動明王の大呪、火界呪を唱えた。

何日かして、里恵は文子のアパートを訪ねた。文子に呼ばれたからだ。文子は学生時代と同じアパートに今も住み続けていた。四畳半に流しのついた木造アパートだ。裸足で会談を上がると、所々でぎしぎしと音がする。建物の反対側の非常階段はもっと悲惨だ。踊り場の板が抜け、階段も何段かとんでいる。里恵は入口の戸をノックした。文子はもうわかっていたのだろう、はいって、と声が返ってきた。引っかかって空きにくい戸を、無理に開けて中を見た。もう春も盛りというのに、炬燵と布団が出しっぱなしだ。文子はその炬燵に座り、原稿用紙に書きつけていた。里恵は、文子に言われるままに文子の横に座り、原稿を読みだした。

十四歳から白拍子の修行を始めた仏御前は、その若さと美しさから都の幾多の貴人から召され、舞を披露してきた。されど何故か入道相国、清盛様からは何の音沙汰もない。それは相国様のおそばに祇王御前がいたからだ。仏は、

何の、われとて今都一の舞上手と評判された身、どこ臆することのあろうか。かくなれば都の白拍子のならいに従って、こちらから参ろうぞ。

と清盛の屋敷に押しかけた。家人は、あの名高き仏御前が参ったと、気を高ぶらせて清盛に取り次いだ。しかし、なんと無礼な、とっとと追い返せと、取りつく島さえみえないやむなく仏の一行は、その日はしおしお引き上げた。されど、幾日かすると、その追い返されたことに腹が煮えてたまらなくなった仏は、もう一度叔父に、清盛の屋敷へ行こうと言いつのった。その剣幕に叔父もけおされ、また清盛の屋敷の前に立ち、家人に取り次ぎを頼んだ。しかし、先の清盛の怒りようをおもえば、家人も、とても取り次ぐ勇気は持てなかった。されど、そこは叔父、伊達に年は取っていない。そっと家人の袖に銭をしのばせた。それをもって、家人は、相国様がなんとおっしゃるかは分からんが、取り次ぐだけは取り次いでやると奥へおもむき、清盛に、仏御前が相国様に是非我がわざまえをご照覧いただきたくとまいっておりますと伝えた。それを聞いた清盛は、

一度ならず二度まで我が屋敷に押しかけるとは。かまわぬ、蹴散らして追い返せ。

と怒鳴りつけた。それを祇王が聞き、
若い白拍子でございます。私には仏御前の気持ちが痛いほどにわかります。二度まで門前払いとなったなら、仏御前がどれほどの恥をかくことか。わが身も彼の者も同じこと。先のことは、ひとごととは思えませなんだ。遊び女が自分から参上するのは世の慣わし。しかもまだ年端もいかない者のことゆえ、たとえ舞や歌を所望せずとも、せめて目通りだけでもおゆるしあそばされては。

と清盛に必死にとりなした。
　わごぜがそこまで申すのならば、目通りだけはゆるすとしよう。
と、清盛は仏御前を屋敷に入れた。だが、一目仏御前を見た途端、清盛は仏御前を気に入った。

里恵はここまで読んで、

文ちゃん、随分力が入ってるけどここまで書き込むと、くどくなるよ。演劇なんだから、演技で分からせたほうがいいよ。
例えば、ここまでのことは、清盛に、

清盛: 一度ならず二度までも押しかけてきおって。わごぜが取りなすゆえ、目通りは許した。表をあげて、顔を見せい。
すると、仏御前の叔父がしたり顔で、
叔父: これなるは仏とあざなする白拍子にござりまする。本日は、相国様にお目通りをゆるされ、恐悦至極にござりまする。これ、仏、相国様にご挨拶致さぬか。
仏:本日は相国様にお目通りいただき、まことに有難うござりまする。
と、顔をあげる。すると、清盛、まじまじと仏御前をみつめ、ふむ、と鼻を鳴らし、なにか品定めをするような仕草を見せ、
清盛:かように見参するほどにては、声を聞かないわけにもいかぬであろう。今様の一つも歌ってみよ。
仏:うけたまわってそうろう。
と、少し思案するしぐさをみせ、
仏:君を初めて見る折は
　千代も経ぬべし姫小松
　御前の池なる亀岡に
　鶴こそ群れ居て遊ぶめれ
と三度歌う。
清盛:おおこれは見事じゃ。ならば、舞もさぞかし見事なものであろう。舞うてみよ。一番みようぞ。鼓を打ち召せ。ささ、舞うてみせい。

私、あの時の舞の感覚が残ってるの。今だって、あの時のように舞える。こう立って、左手で太刀を持ち、扇をかざして舞える。

文子が右手をかざして里恵に言った。

文ちゃん、だいじょうぶ？

大丈夫、だいじょうぶ。私、白拍子のことなんかちっとも知らないのに、体の内から湧いてくるの。動くのよ。こう舞って、こう納めてって。
それから、清盛の前で舞った後の、私の体を嘗め回す清盛の視線も感じる。なにかこう、ナメクジが這うような感じがわかるの。

盗み見をしていた家人たちが、小声でささやき合う。

家人A:おお見事じゃ。

家人B:髪かたちも美しく、見目姿も麗しい。

家人A:されど、祇王様は仏御前よりもつややかにしてたおやかなるぞ。

家人B:さにあらず。仏御前こそ随一じゃ。

言い争う家人たち、消える。

清盛:舞も上々であった。仏、こののちはこの殿に移り、我が下で暮らせ。

仏御前と叔父は顔を驚き、見合わせる。

仏:相国様にもうしあげます。わが身は祇王様のお口添えにて、初めてお目通りがかないました。今また、相国様のお召しおかれるままに留まれば、祇王様の思いは如何ばかりか。わが身は恥ずかしゅうございます。いまはもう、ただこのままお返しくださいませ。

叔父:これ仏、おぬしは何を申しておる。こなたさまは相国様ぞ。相国様の意に従わぬは、あまりにも恐れ多いことであるぞ。

清盛:さまで祇王をはばかるか。ならば、祇王を館から去らせようぞ。だれかある。

家人A:おまえに。

清盛:祇王に、とくこの館から出ずるように伝えい。

仏:いかで、さようなことがござりましょうか。祇王様とともに召しおかれることさえ心苦しゅうございまするに、祇王様を出せたまいて我をここに置かれましては、祇王様のお心持を思うと、あまりにいたたまれない心地でございます。こののち我をお忘れなくおられたなら、お召しいただければ又まいりましょう。どうぞ、こんにちはこのままお返しくださいましょう。

清盛:なによう、かようなことのあることか。祇王、とくとく罷りいでよ。

と三度まで催促の使いを出す。

祇王：いつしか、かようなことが、こうもあろうと思い越しておりましたが、今日明日のこととは思いませなんだ。とく出でることでございます。相国様に、そののようにお伝えくださりませ。

そういって、筆を持ち、

萌え出づるも 枯るるも同じ 野辺の草
いづれか秋に あはではつべし

と障子に書き付ける。

祇王と祇女が帰ったのは、嵯峨野にある刀自の住む家であった。その帰る道すがら、聞こえてくるのは牛車の車軸のきしむ音だけだった。牛車には清盛から贈られたものなど、何も乗っていない。姉様、これだけは持って帰りましょうと、祇女が懇願したものまで祇王は置いてきた。それを持って帰ってなにしょうぞと思う。牛車の中では耐えられた涙も、祇王は家に入ると、とめておくことができなかった。

母、刀自が、帰ってきても何も言わない娘たちに、一言二言泣く訳を尋ねた。しかし、刀自も元は白拍子、聞かずとも察しはついた

所詮白拍子とはそんなもの。泣くでない。頼みなき世の身の上じゃ。こののちは、親子ともども、仏にすがって生きようぞ。

そういって、これだけは清盛に懇願して贈ってもらった大日如来をともに拝した。

噂は瞬く間だった。あの都一の白拍子祇王が清盛から暇を賜り、嵯峨野に住まいしていると知れ渡った。すると、京都中の上下の者たちから、文をつかわすもの、人を立てるものありと引きも切らなかった。さりとて、祇王は今さら人に対面し、遊びたわむれる思いもなく、ただ悲しんで暮らした。

半年も経った折。相国ともなれば人の思いもわからぬか、清盛から使いが来て、仏御前が退屈しておるゆえ、舞って歌ってお心を慰めよと言ってきた。これには祇王も返事のしようがなかった。すると、清盛からは、なぜ返事をせぬ、ならばこちらにも考えがあると言ってきた。刀自は震えた。

天が下に生きようと思うなら、相国様のご意向に逆らうことはできませぬ。母を助けると思って、相国様の意に従ってくだされ。

と、泣いて祇王を説いた。祇王と祇女は泣く泣く清盛の館に向かった。その心もちはあまりにも無残であった。

西八条の館に着くと、以前とは打って変わって格下の部屋で待たされた。広間での饗宴は今たけなわであった。手を打ち、足を鳴らして声を上げ、笑いさんざめく様子が伺いしれた。平家一門の公達、殿上人、諸太夫、侍達が集まって、いとも楽し気に立ち騒いでいた。それに比べて、わが身はここまでないがしろにされるのかと、祇王は袖で顔を隠しながら流れる涙を押さえた。
祇女と友連れの白拍子二人のかげで顔を隠す祇王を見つけ、仏御前は清盛に、

あれ、どうしたことでしょう。あのような席に祇王御前様がいらっしゃる。どうかこちらにお呼びください。でなくば、私の方からお目にかかりにまいります。

と懇願した。

全てその義あるまじ。

と、清盛は退けた。

あれは白拍子どもじゃ。あれにあるは当然のこと。いまだ待たせておけ。

と言い捨て、隣席にある殿上人らとなお語らい、笑いさんざめた。そして、ふと思い出したように、祇王たちに向かって、

興もたけなわじゃ。仏御前が退屈しておる。今様一つも歌えかし。

と祇王たちに声をかけた。祇王もこの場に来た限りは、相国様の仰せに逆らうまいと思い定めていたので下座に付いて、

仏も昔は凡夫なり 我等も終には仏なり
いづれも仏性具せる身を
へだつるのみこそ悲しけれ

と二度歌った。それを聞いた座の者たちは、心うたれて感涙にむせんだ。清盛も気の咎めるところがあったのか、

今の歌は神妙であった。舞も見たいところだが、今日は多忙であるゆえ、そうもゆかぬ。こののちは、こちらから召さぬとも参って、今様も歌い、舞を舞って仏御前を慰めよ。

と言い残して中座した。

と

祇王と祇女は声を殺し、涙を押しとどめて広間を退出した。その時、仏御前の姿がちらと見えた。仏御前は泣いていた。そして祇王の視線を感じると、手を合わせ、祇王を拝んだ。祇王の目から、こらえきれず涙が流れ落ちた。
清盛邸から帰った祇王は、

親の命に背かないようにと、つらい道を赴いたけれど、生きてあればまた同じ道をまいらねばなりますまい。ならば、この見を投げて世を果てよう。

と泣き悲しんだ。そして、祇女もまた、

姉様が身を投げるならば、私もともに。

と手を取った。刀自が言う。

さほどのことがあろうは、思いもよらぬことでした。そうとは知らず、教え諭してあなたたちを西八条に行かせたのは、母の罪でありました。そしてそのことで娘二人が身を投げるのなら、私もともに投身し、果てましょう。されど、いまだ寿命ののこる親を死に果てさせるのは、五逆の罪ではありますまいか。この世は仮の宿ゆえ、そこでの恥も面目の、何ほどのことがありましょうか。されど、五逆の罪を犯してあなたたちが次の世で闇の闇に迷うのは、親としては耐え難い悲しみです。

と説いて聞かせた。それゆえに二人は自害を思いとどまり、

なおここに在れば、憂き目に会いましょう。ならば遠く離れて髪を下ろし、仏を念じて往生を願いましょう。

と、都から遠く離れた嵯峨野の奥山に庵を編み、身を捨てて念仏三昧で暮らしはじめた。
夏が過ぎ、秋になって冬の寒さが襲ってきた。おとなう人もない庵の戸を、誰かが叩いた。

あれ、もはや誰も訪ねて参らぬこの庵に、たれぞ戸を叩くものがある。

祇王が入口の方を伺うと

さてこそ、魔の訪いか。命に惜しみはないけれど、若い二人が哀れなことよ。私が見て参りましょう。

と刀自が立った。すると、

こちらは祇王様のお住まいでしょうか。

と女のか細いおとないが聞こえた。

母様、わたくしが。

と、祇王が母に代わって戸を開けた。そこには、艶を失い、色もない顔色の、やつれた女が立っていた。よおく見ると、仏御前と、ようやくわかった。

これは仏御前様とお見受け申しまするが、夢かうつつでござりましょうか。

よろめく仏御前の肩を抱き、祇王は中へ連れて入った。
仏御前は祇王と祇女、刀自に、清盛には断らず、逃げてきたと話した。元いた叔父のところへ行くと必ず連れ戻されるであろうし、連れ戻されれば、いかなる仕打ち待っているかは容易に想像がつくことだったから、もう他に頼れるところがなくて、祇王を頼ってきたのだと埃にまみれた顔を下げた。

あなたさまには仇を成したこの身、今さら頼れるはずもありませぬが、どうぞお助けくださりませ。

と、話しはじめた。

元を話せば、わたくしは祇王様のお取り成しで清盛様にお目通りできた身でござりました。それを、相国様の気まぐれで、御手元に置かれることになりました。それもあなた様をい出され参らせての仕置きでござりました。さりとてこち方は儚き女の身、わが身を心のままにすることができませず、清盛様の意のままに押しとどめられたのでございます。

されど、いつぞや祇王様が召され、今様などお歌いになられたおりの、あなた様のお心もちはつくづくと思い知られるところでござりました。そして、いづれか秋にあはではつべき、と書き残された墨の跡、いづれはわが身の上もおなじことと知ったのでございます。娑婆の栄華は夢のまた夢、楽しみ栄えてどれほどのことでございましょう。

仏御前はそういって、被り物を取った。仏御前はもはや髪を下ろし、法体となっていた。

かように髪もおろしてまいりました。先の罪はお許しくだされ。もしお許しいただけるのなら、ともに念仏し、おなじ蓮の上に生まれましょう。それでも気が済まぬのなら、いずれへとなり参り、苔の上、松の根の上に倒れ伏して念仏し、往生を遂げようと思います。

そういって、仏は涙を押さえた。

わごぜがそのようにお思いとは、夢にも知りませなんだ。憂き世のさがなれば、わが身の不幸と思い知るべきなれど、それをあなた様のせいと恨みに思っておりました。されどかくも姿をお変えになられて、わが身を頼っておいでになり、もはやなんの恨みがありましょうか。ましてや、われは世に恨みがあってこそ世を捨て、姿を変えました。されど、わごぜはなんの恨みもなく髪を下ろされた。これこそ、大道心でございます。われらに恨みは微塵もござりませぬ。いまだ十七歳でしかないあなた様こそ、われらのお導きでございます。

そういって、祇王は仏御前に合掌した。

というところまで、里恵と文子は平家物語に基づいて脚本をここまで書き上げた。これから先についても、平家物語ではそれぞれ後先は会ったが、祇王祇女、刀自、仏はともに往生し、後白河法皇の過去帳に、四人一緒に、
祇王、祇女、仏、刀自らの尊霊

と一緒にかかれたとあり、それを有難いことだと言っている。だが、文子にはそんなことなど目に入らなかった。

仏はねえ、祇王たちと一緒に暮らし始めるんだけど、ほんの何か月かで体に異変が起こるの。つわりよ。それを刀自が、一番初めに気がついたわ。経産婦は刀自だけだから、無理はないわ。仏御前は、じぶんの体に何が起こっているか解らなくて、おそれおののくの。こう、刀自にすがって、震えるの。

そういって文子は里恵につかまり、肩を震わせた。

こわい、こわい、母さま、お助けくださりませ。

痩せて幼い体が、里恵の手の下でおののいていた。剃髪していたはずの黒髪が仏の背中に流れ、里恵の指にひんやりと絡まった。

大丈夫ですよ。女の体は子を産むように出来ているのですから、大丈夫です。

泣きぬれた顔をあげて、仏は刀自を見上げた。

ただ、ここは女だけの僧院。ここで、子供を産むことは、はばかられます。ですから、なにかよい思案をせねばなりますまい。

それを仏は、押し黙って聞いていた。いかに嵯峨野の奥の寺とはいえ、往生院、祇王寺と称している以上、仏に使える尼寺で、尼が子を身ごもって出産するなど、あってはならないことだった .
刀自様、申し訳ございませぬ。申し訳・・・

そういって、文子は里恵をみて泣いた。文子の中で、千年昔の仏御前が、小動物のように泣いていた。仏御前の望まぬ、女の体のなまなましい出来事が仏御前を押しつぶした。つわりに悩まされる辛さを隠し、報音尼として祇王寺の作務を必死に務めた。しかし、次第に目立つようになり、寺を訪れる者にも隠しようがなくなってきた。尼寺でお腹の大きくなった尼がいるなど、思いもよらぬことと噂し、寄進に訪れる者も次第に減ってきた。尼寺といえど、元は白拍子だった者たちの寺ゆえ、このようなものよ、とささやいた。仏御前はもう祇王には甘えられないと悟った。
ほどをみて、仏御前は往生院を一人抜け出した。頭を頭巾で包み、墨衣を脱いで小袖に細帯をつけていた。仏は故郷の加賀の国へ向かった。そこにはまだ父がいた。もう頼れるのは、いま手にしている杖のみだった。

京からひたすら身重の体で歩き続けた仏御前だったが、峠を越えて木滑まで辿りついたところで産気付いてしまった。体を絞るような痛みに耐えながら、仏御前は一歩ずつ歩いた。どこへ行けばいいのか解らなかったが、歩くしかなかった。人里離れた杣道を、間隔をおいて襲ってくる痛みに耐えて進んだ。だからといって、なにか助けてくれる当てがあるわけでもない。仏御前の体がおののいた。手の杖に縋って痛みに耐える。そして少し弱まるとまた歩き出す。さきに祠があった。林の中をゆき、地表から突き出た岩の前で寝ころんだ。もうそこまでしか歩けなかった。腰から下を踏み潰すような痛みが来る。声が漏れた。泣くしかなかった。そして少し意識を失った。
と、いとしげなことよ、という声が聞こえた。老婆が仏御前の顔を拭いてくれていた。

子を産むか。婆がみてやるぞ。腰が痛いか。帯をゆるめようぞ。

そういう老婆に仏御前はしがみついた。仏御滅の指が、老婆の腕に食い込んだ。老婆もそれに耐える。そして、力が緩んだ時、

もはや、あのお社までも歩けまい。この岩にすがりつけ。

そういって、仏御前を中腰にし、岩を抱えさせた。とたん、御前の口から悲鳴がもれた。
どれほどの時が過ぎたか。我に返った御前の脇に、老婆はまだいた。そして、少し離れてなにか物体が横たえられていた。それは何にも包まれていない。老婆はそれを怖そうに見ていた。

どうなったの？

文子が里恵に訊く。里恵の演じる老婆は首を振る。文子は這いずって、生まれたはずの赤子のそばに寄ってゆく。

見るでない、見ることはない。横になっておれ。

そういって、文子の肩をおさえる。すると、里恵の手に、仏御前の震える体が感じられた。芝居の最中なのに、演出とは違って、思わず手を離してしまった。急いでもう一度仏御前の体を押さえる。それを振り切って、御前が赤子のそばに這ってゆく。そして、御前が産み落としたに違いない赤子を見ると、

いやあ、いやあ！

と声を振り絞った。首を激しく横に振り、自分の着ている小袖の袖を引きちぎり、へその緒の付いたままの赤子を抱き上げ、それで包んだ。赤子は声も上げない。文子は包んだ袖で赤子の体をこすり、顔を拭き、頭を撫でた。もう冷たかった。文子は赤子を抱き上げ、胸に抱いた。体をゆすり、あやしてみる。背中をなでる。それはそのまんまだった。文子はどうすればいいか解らず、腕の中の赤子を横に抱き、胸をくつろげ、乳房をふくませようとする。そうしながら、文子は泣いた。嗚咽を漏らして泣いた。

死産で生まれた赤子の横で泣く仏御前の肩を抱き、里恵はそれが文子か仏御前かわからなかった。文子は演じているのではない、千年繰り返してきた仏御前の悲しみをいまここで文子が繰り返している。ここは舞台ではなく、仏御前が陣痛に耐えて歩んできた、山里の神社社殿であった。

おお、いたいけなことよ。ささ、横になれ。人を呼ぼう。そなたを家に運ぼうぞ。

しかし、文子は赤子を離さない。

おおい、良いところに来やった。この者を運ぶのじゃ、手伝うておくれでないか。

と舞台そでに向かって、手を振る。
暗転。

数日が過ぎていた。粗末な掘っ立て小屋で眠りこける文子。その横の赤子のむくろを里恵は取り上げ、その場をそっと抜け出す。そして、すぐ戻り、赤子が包まれていた布きれに人形を包む。仏御前はあの時から狂乱し、赤子のむくろを離そうとしなかった。

これで安堵した。・・・、おお、目が覚めたかや。

婆が声を掛ける間もなく、仏御前はすぐに赤子を抱く。

お子はそこにおるぞ。抱いておやり。
さて、昼餉の支度をしようかの。

婆はそういうと、奥へひっこむ。
仏御前は愛おしそうに赤子を抱き直し、立って外に出る。すると、村の悪童たちが、

おおいみんな、婆のとこの狂い女が出てきたぞお。

と、はやし立てる。仏御前は赤子をかばいながら桜の木の下に逃げる。そしてそこに座り、胸元をはだけ、赤子に乳を与えようとする。

たくさん吸って、おおきくなって。

風が舞い、花弁が散る。ふいに、仏御前は正気に戻る。

そうでした、あなたには名前がありませんでした。名前がなければ、この世には生まれてこなかったこととおなじこと。生きて生まれてこなかったあなたに母が名前をつけて、生まれたことのあかしといたしましょう。
名は寿王、といたしましょう。

と、そこへ、桜の花びらが舞いかかる。右手をちゅうにかざすと、手のひらにひとひらの桜の花びらが乗る。

さ、は稲の神様、くらは座であるとか。稲の神様が宿った桜の木の花弁を、ちゅうに舞ってるうちに手で受けとめると、何か一つ願い事が叶うとか。
どうか神様、み仏様、来世では、この世に生きて産めなかった母を寿王に許してもらえますように。そしてこの子をまたこの胸に抱けますように。抱いて、乳を与え、むつきを替え、大きく育てて、思う存分生きられるように育てさせてくださりませ。この世では産声ひとつあげられなかったこの子の、どうか笑う声を聞かせてくださりませ。どうかどうか、来世でもこの子をもう一度抱けますように。

言い終わると、ことりと首をうなだれる。婆が家の外へさがしにきて、桜の木の下の仏御前を見つけ、

おお、はかのうなったか。・・・、いつの世もおなごは哀れじゃ。好きでもない男にもてあそばれ、おまけに孕まされて子を産む羽目になる。産めばその子が恋しゅうて、こうも狂うて、ついには儚うなって終わる。あわれなことよ。
これ、そなたは誰じゃ。名は何ともうす。親でもあれば、知らせてやるものを。

劇は終わった。小劇場の公演だったが、二日の講演のあと日のほうが観客は多かった。

今日で終わりですか。再演はないんですか。

と訊いてくる観客もいた。そして、そのあと日に、館主さん夫婦も見に来てくれていた。

よかったよ。よかった。ふたりとも綺麗だった。

と言ってくれたが、里恵は老け役だったから、ちょっと引っかかった。そう話している後ろで、館主は又も火炎呪をひそかに唱え、九字を切った。文子は体が軽くなったような気がした。

私には分っていた。事はならない。同期の野中四郎中尉にもそういった。野中も淋しそうに笑った。野中自身も分ってはいたのだろう。野中はその人柄ゆえ職務に忠実で、寡黙に邁進し、確実に務めた。そして、派閥抗争や革新運動にはさほど意識を持たず、ただ同期の友に熱心に説かれ、自身も納得するところがあったから事に加わった。そして、野中四郎がこの事件の中で成し遂げた役割の大きさは、他に負けるものではなかった。それにもかかわらず、彼はあまり目立たない人柄だった。北一輝とともに事件を軍の外から引っ張った西田税さえ、何回か会合で出会っているはずなのだが、首をひねって、面識はないと証言したほどの人物だった。

その彼が事件で担った役割は、約500名の下士官兵を率いて警視庁及び桜田門付近を占拠することだった。彼は、事を起こす前に、部下に格別な理由を説明はしなかった。だがこの真面目一本やりの指揮官のすることだからと、どの部下も疑問を持ったり、途中で任務を放棄したりせず、野中の命令を遂行した。彼の指示は的確だった。彼の部隊の武器装備が警察の比ではなかったこともあったが、深夜、三方に重機関銃の台座を据えて、銃剣を装着した兵が一気に突入してくるのには誰も抵抗できなかった。わずか１時間足らずで、警視庁と桜田門一帯が制圧された。

だが、やはり事はならなかった。二月二十九日、野中四郎は、山下奉文少将の直接の説得に、陸相官邸で拳銃自決した。二・二六事件で、先頭だって事を進めたわけでもなかった彼が、一番早く、潔い死に方をした。その野中四郎と私は計画を取り決めていた。それゆえ、私は野中からの連絡通り、京都府近衛師団で事変の最中は息を潜めていた。野中は私に、

東京の同志は、昭和維新を成功に導くために各地で東京と同時に決起し、各師団本部など要所を制圧することを構想しているが、貴公の京都府近衛師団だけは焦って事を起こさないほうがいいと提言しておいた。

と、その構想を話した。

我々の決起趣旨を陛下がお聞き入れになり、昭和維新・尊皇討奸がなったとしても、我々はなお少数派である。陛下の親政を真の意味で実現させるには、なお残る君側の奸の残党どもから陛下を隔離し、切り離さなければならない。それには、もう一度陛下に京都へ御遷座願うのが一番の方策だと考える。それを実現するためには、貴君が我々と同時に決起し、力を少しでも損なうことがあってはならない。力を溜めて、我々の成功のあと、一気に事を運ぶのが大事だ。これさえなれば、昭和維新は成功する。

そう、野中は日頃に似合わず、私に熱く語った。

そのために貴君は京都府近衛師団の中で中核となって、事を遂行する同志を糾合し、意志統一をしておいてほしい。貴君の役割は、維新の成功を確実なものにする鍵だ。

そういって、なかば淋しそうに笑った。そうだ、私が彼らに続いて行動を起こせれば、事はなっているのだ。こうして、私という時限爆弾は仕掛けられた。

連絡通り、二月二十六日、彼らは決起した。我らは刮目して彼らを見ていた。だが、近衛師団本部に出仕したところを、私は拘束された。他の同志として連携していた者たちも、たぶん同様だったのだろう。私は隔離され、幽閉された。理由は告げられなかった。

相沢中尉、貴様は御父君を泣かせてはいけない。また、許嫁のおん方をないがしろにしてはいけない。加えて、貴様は天皇陛下の股肱であることを忘れてはいけない。

事が起こってのち、二日目に、師団長が私に言った。父は地方出身の公爵であった。さらに許嫁は、世間立ってはいないが、先帝がお一人身のおり、権典侍とか典侍に産ませた内親王であった。先帝にはこのような者はいないことになっていたので余計に伏せられ、典侍が妊娠したと解った時点で京都に帰され、こちらで出産したのだ。それゆえ、この婚約を知っているのは、身内のごくわずかの者たちだけだった。もちろん、野中も知らない。だが、事がなれば、我々は不忠にはあたらない。よって、私はこの事に加担した。
しかし、いいなずけのことをどうして師団長が知っているんだ。私は眼前の師団長に、突然殺意を抱いた。統制派の奴らは憲兵を使って、我々を見張り、あらゆる事を探っている。

なんだ、その顔はァ！文句があるのか。

まなじりを決し、拳を握りしめて耐える私に、師団長は罵声を浴びせた。

病院の廊下で、私は倒れたようだ。突然廊下の床がなくなり、私は支えを失って宙に浮いたと感じた。どんと倒れても、私は手をついて衝撃を避けることさえせず、倒れるままの姿勢で床に体を打ちつけた。一瞬意識がとんだ。そしてもう解らなかった。

CPA、CPA発生！救護班は・・・。

後は知らない。そして、私は佳子内親王と会っていた。
内親王といっても、表向きは元女官、内藤貞子の私生児と戸籍ではなっている。であるから、父の身うちは当初、私の許婚者が私生児であることに怒っていた。父はそれに一言も反論しなかった。そして、その父の恐ろしいほどの沈黙によって、親戚たちの抗議の声はおさまった。母の、恐れ多いことです、の一言が、それを治めたのかもしれない。
宮様、の呼びかけに、佳子さまは眉を曇らせた

以前より、申し上げようと思っておりました。私は宮ではありません。号をいただけない身でございますから。
そういって、涙を見せた。

そうですか。では、佳子様、私は満州へ参らねばならなくなりました

お聞きいたしております

私は、国賊に成り果てました。

私は国賊になった。事件二日目で、私は同志を見捨てねばならなくなった。陛下の、

私が最も頼みとする大臣達を悉く倒すとは、真綿で我が首を締めるに等しい行為だ。

というお言葉を漏れ聞き、私は愕然となった。まさに打ちのめされた。ついで、

陸軍が躊躇するなら、私自身が直接近衛師団を率いて叛乱部隊の鎮圧に当たる。

という強い意志表明を聞き、私は近衛の兵として陛下の命令に従って叛乱部隊の鎮圧を行うことを使命と決意した。私は天皇陛下の軍である。皇軍合い打つことはなかったが、本当に出動すれば、陛下のご命令に従って私は同志に銃を向け、発砲することにためらいはしなかっただろう。そしてのち、野中四郎のごとく自決しただろう。

だが、それもならなかった。二二六事件の結末は、決起将校と北一輝、大川周明の銃殺で幕が引かれた。私はその最後の様子を、立ち会った同期の将校から聞いた。彼らはコの字に作られた土嚢の中の低いはりつけ柱に脚を投げ出した格好で胴と両腕を括りつけられ、目隠しをされて座らされた。処刑されるもの一名に兵二名が割り当てられていた。銃は、その兵がし存じないように照準を合わせて台に括り付けられていた。兵は撃ての命令で引き金を機械的に引く。弾は確実に心臓を貫く。そしてさらに、照準を頭部に合わせ、同様に銃を括り付け、命令と共に撃つ。国家はこうして確実に彼らを抹殺した。

処刑のあった日以降数日して、私は野中のご妻女から手紙を受け取った。それには淡々と野中の亡くなったことが記され、ついで私宛の野中の遺書を同封すると書かれていた。野中の遺書には、

貴君は決起に同してさえいなければ、生き残っていることだろう。私は貴君を温存した。いいか、決して軽はずみに妄動するな。何としても生き残れ。泥水をすすり、血を吐いても生き残って、我々の成そうとしたことの後のことを見守ってくれ。日本がこれからどうなってゆくのかを見守ってくれ。それが生き残る貴君の使命だ。死んではならない。

そう書いてあった。私は死ねなくなった。私は佳子様との婚約を破棄し、満州へ向かった。そののちのことは風聞で知るのみだった。

どの赴任地に赴いても、 私には汚名が付いて回った。だが、私は死地にあっても、生き恥をさらすような闘い方はしなかったつもりだ。にもかかわらず、生きて終戦を迎えた。その間、私は軍中枢での統制派の妄動をつぶさに見た。フィリピンの兵士を見殺しにしたのも同様の闘い、関東軍の民間人をおいての逃亡、レイテ島の万歳クリフの悲劇、硫黄島の玉砕、沖縄戦の悲惨な結末、これらは皆、軍中枢と参謀本部の無能に依った。そして、広島、長崎の原爆での一瞬の大量虐殺。これはアメリカのやったことだが、これを招いたのも、なお国体の護持なる大義を声高に言い、戦争継続を叫び続けた統制派の誤謬からだった。そして、結末は、終戦の勅語のレコードを奪おうと宮城に乱入した兵が陛下の寝所に砲口を向けるという、自分たちの正体を露呈する狂気で結ばれた。彼らこそ敗北しなければならない。大日本帝国は終わった。

彼らの言う国体護持とはなんだったのか。大東亜共栄圏、神州不滅、五族協和、八紘一宇、東洋の新秩序と、彼らは次々と偶像を作っていった。大日本帝国最後の日、彼らがつくった最後の偶像が国体護持であった。国体護持が確約されぬのであれば、戦争は継続されなければならない、いまだわが国には陸海軍合わせて１万の戦闘機が、本土決戦のために温存されている。これをもって神風特攻を行えば、形勢を盛り返し、我が方に有利な講和条件を引き出せる、と主張した。広島、長崎の後でさえ、彼らはこう言い放った。彼らはまだ一万の兵を殺すつもりだったのだ、彼らの言う国体とは何だったのか。天皇があって、その外側に天皇をお守りする軍隊がいる、これが彼らの国体だ。ここに臣民はいない。いると彼らが認識していたとしても、臣民は彼らと天皇の作る国体を守るために命を捨てて闘い、死んでゆけばいいという程度のものでしかなかったのだ。

京都の実家に帰ってみると、母しか残っていなかった。母は私が生きて帰っても喜ばなかった。

あなたは生きて帰ったのですか。あなたの父と兄は、あなたの代わりに死んでゆきました。

以来、母は三度の食事も共にせず、数年してひっそりと逝ってしまった。父は南方で福師団長として闘い、中将から大将に格上げされて遺骨になって帰ってきた。兄は関東軍参謀として数々の戦歴を残し、戦死した。たぶん母は二人の遺骨を受け取っても、泣かなかっただろう。母が早くに亡くなったのは、むしろよかったのかもしれない。敗戦の後変貌してゆく日本に、母は絶望しただろうから。そうでなければ、涙一つこぼさず、二人の遺骨を受け取った事の意味がなくなる。ある時、夜遅く帰宅した私の前に立ち、母は突然、私の胸を両手で叩き、

あなたが死ねばよかったんだ、あなたが死ねば。

と繰り返した。私は立っていられず、畳に崩れ落ちて平伏してしまった。私は何もいえなかった。私が死ねばよかったんだ…。だが私は死ねなかった。敗戦後も死なずにすべてをつぶさに見続

けた。天皇の人間宣言も、私は受け止めた。
　そんなことがあってから、母は急速に衰え、消えるように逝ってしまった。そのあとでも、私は見なくていいものまで見続けねばならなかった。
　私が外地に赴いた後、佳子様は京都の某茶道家元に嫁がれた。もう太平洋戦争は始まっていたので、挙式はひっそりと行われ、新聞にも報道されることはなかった。そして二年後、女児をご出産になり、ついで結核を発症されて亡くなった。あっという間だったと、母を看病してくれている合間に、兄嫁が話してくれた。

私が外地に赴任した後、佳子様は私を待つと強くおっしゃっていたらしい。一度嫁ぐと決まったお方ですから、そのあとどう変わろうと、私はあの方の妻ですと強くお述べになったと聞いた。私はそんなことなど少しも知らず、外地を転々として回った。そこで見たものは、日本の中にいたのでは決して解らぬ戦争の実態だった。その前では皇道派だの統制派だのと言うのは吹き飛んだ。彼らが作った神話も何の意味も持たなかった。敵と戦って華々しく戦死するなんて稀有だった。兵士は飢えと伝染病と、放置による野垂れ死にで死んでいった。神州不滅、、神国日本、神風が吹く、そんな神話が、戦場に捨てさられた。私はこの絶望的な戦地で、佳子様が嫁いだこと、出産され、その後亡くなったことを聞いた。だが、内地のことはこの戦場では幻でしかなく、ただ頭の片隅に置いておくだけの出来事だった。わが身のことでもなく、悲しくもなく、なんの感慨も起こらない。まるで他人事の絵空事だった。私は聞いたことを、粘土細工の人形のようにこね回し、また投げ出すことを繰り返して次第に忘れた。人の死なぞ、そこらじゅうにごろごろ転がっていた。 内地に帰還してのち、わたしは戦後の日本が一番よく見えるところにいたいと思い、無理やり新聞社に職を求めた。そして地方新聞の記者になりおおせた。

銃をペンに持ち替えて、今度は自由と民主主義ですか。変わり身の早いこと。

そういって、母は私を嘲笑った。私は自由も民主主義も知らない。私の知っているのは、自分が天皇陛下の兵士であることと、陛下のご馬前で死すことこそ自分の使命ということだけだった。自由と民主主義なんて、そんな空文と同じ程度だった。それから四半世紀を私は日本と共に生きてみた。私は知らない日本を見続けた。日本は次第に空虚になっていった。時が私を追い越し、置き去りにしっていた。だが、次第に分かってきたことがあった。日本に我々はと語るのではなく、私はという人間が出現し、それが増えてどこにでもいるようになったことだ。彼らが日本の中心になってきた。かつて臣民は、ほんの少しずつ帝国とその神話を支えた。それが集まり、総体として大日本帝国の狂気になった。その臣民がいなくなり、時代が変わるうちに、次第に国民となった。わたしはそう理解した。

もういいだろう、と私は野中四郎に語り掛けた。もう見るべきものはみた。私の理解できない日本が出現してきた。もういいだろう。もう日本はあの時代にはもどらない。そう思った時、ふいに佳子様が現れた。

四条河原町の表通りに、佳子様行きつけの洋装店があった。市電が走っているにもかかわらず、その洋装店の前に黒塗りの車がとめられていた。車の外に運転手とおぼしき人が立って待っている。店のガラスの扉が開かれ、店主が出て、客を見送った。客が会釈をして店を出ると、店員が洋服箱を抱えて後に付き従い、運転手に箱を渡す。運転手は助手席にその箱を置き、

おかえりなさいませ

とあいさつしながら、女主人のために後部ドアを開ける。深く頭を下げる店員に声を掛け、女主人は車中の人になった。亡くなったと聞いた佳子様だと思った。いや、亡くなっていることは解っていた。菩提寺の墓に享年２6歳と刻まれているのもみた。いかに世間の目にさらさぬよう隠されていることとはいえ、ひっそりと、ごくありきたりなしつらえの墓であった。まして、茶道家元の家の墓とも分けてある。つらいお立場にあったのだろうかと思われた。それが今、生きてあるがごとく、私の前を横切り、車中の人になっていってしまった。他人の空似ではないと確信していた。ふっと、通りの向こうを見ると、若い女の子が立っていた。そして、その子も私と同じ幻影を見ていたようだった。そちらに気を取られているうちに、車も何もかもが消えていた。

そんな夢の中を漂いながら、私はこの世に引きずり戻された。私は大声で名前を呼ばれていたが、気づいて答えようにも、喉に何か挿入されていて声が出なかった。だが目を開けたことで意識が戻ったと解ったのか、私の周りが慌ただしくなった。

意識が戻りました。どなたか、家族に人は？

いません！

・・・・。

こんな時、私には側に付いてくれる家族はいない。母を看取ってくれた元兄嫁も、母がいなくなった今、実家に帰り、そちらで暮らしている。戦後、外地から帰ってきて以来、私はあまり意識せず、自然と家族を持つことを避けてきたようだ。天涯孤独といえばその通り。以来、何年になるか。私は周りの騒音を聴きながら、今度は意識を失うのではなく、眠ってしまった。

昔はねえ、と館主さんは語りだした。昔の映画は面白かったよ。そのなかでもトリック撮影には魅せられた。たとえば、あるとき、撮影の途中でフィルムを止め、みんなで、昼飯だったのかなあ、休憩したんだ。そのあと撮影を再開したんだが、そのとき、役者の一人が立ち位置を間違えて、もといた場所にいなかった。それを映してみると、まるで忍術のように人が消えた。それから、撮影の時、フィルムを出来るだけ早く回すと、スローモーションになる。反対のことをするとコマ落としになり、人がとんでもない早さで走り出す。フィルムを反対に回すと動きが逆になって、落ちて割れたものまで手に戻ってなおってしまう。雲に乗って飛ぶことだってできる。人の手がどんなに加わっていようと、スクリーンに映る映像はまごうかたない現実だ。だから、映像は幻なんだ。悲恋秘話も虚構の映像を映して現実になる。クラッシックの人はオペラが最高の芸術だというけど、映画こそ虚構の現実を映した最高の芸術だと思うよ。
里恵は、虚構の現実は変な言い方だと思う。しかし、目で見る映像は何かを写したものだ。だから、そこに何かはあるんだ。何かがあって、それを写すなら現実があるように見えて当然だ。そしてそれは、時間の経過と共に、時代と同じく古びてゆく。しかも一度写せば、同じ映像しか映せない。逆に、ずうっと変わらぬままの映像で記録できているといえるかもしれない。しかし、今見た阪妻の雄呂血はどうだ！里恵の脳裏には、取り囲んで右往左往する大量の捕り方を、走り回って切り伏せる阪妻が今だ躍動していた。

館主さん、これって、もとはサイレントだったんでしょ？

そうだよ、いまはちょっとした小細工がしてあって、サウンド版になってたけど、もともとは無声映画だったんだ。

じゃあ、これに弁士をつけて、オリジナルな形で上映したら面白いんじゃないでしょうか。

そうだね、そうできたら面白いと思うよ。でも、それのできる弁士がいない。楽隊がない。封切り当時でさえ、この映画のクライマックスを満足に語れる弁士はいなかったんだから。

そっか、そうですね。無理だと思います、あの最後のシーンは。

でも、

と文子が口を挿んだ。

都座の前でチンドン屋さんを入れて、映画館新装開館記念映画祭とかいって宣伝してもらうと、にぎやかでいいと思うんだけど。

それより、スクリーンを前に出して、そこにあらかじめ撮っておいた映像を映して、その映像と動きをあわせて演技をするってのはどうかな。大久保さんに道具方を頼んでなにやら舞台装置を作ってもらってるらしいけど、いっそ、都座で芝居をかけて、その舞台で映画の画像を舞台装置の一部にしてしまうんだ。

館長さんは色々とアイデアを出してくれる。しかし、どうすればいいのか、全体が見通せない。だが、ふいに、里恵の脳裏に、雪の中を陸軍の部隊が行進してゆくのがみえた。そして、アドバルーンに釣り上げられた幕の「勅命下る軍旗に手向かふな」の文字も見えてしまった。

突然心肺停止になったものは、ほぼ20%しか延命できないと聞いた。しかし、私は生き延びた。長く音信不通だった兄嫁が、気が付いた私の枕元にいた。

ああ、義姉さん・・・。

それだけしか声がでなかった。

まるで命はいらないみたいな暮らし方をしてるから、こんなことになるんですよ。もと軍人だったものの一員として、体をいたわって生きてください。そうしないと、夫やお義父君がうかばれません。それに、お義母様の意志も踏みにじることになりますよ。

そういわれても、母の意志なるものが解らなかった。兄嫁はそれに気づいたのか、

お義母様は、家を継ぐ者として最後に残ったあなたをとても大事に思っておられました。華族令で廃止されはしましたが、相沢は、昭和天皇さまが最後までご希望になった堂上華族のお家柄です。これを次の世にまで伝えなければなりません。直系としての自覚をおもちになっていただけますよう。

まるで母に言われているようだ。しかし、もと義姉であっても、兄亡き後は実家に帰り、他家に縁付いていったのだから、もう縁は切れた人ではあった。しかし、その再婚相手も亡くなった今、兄との間に子供もいないのに、元の婚家がどうしても気がかりらしい。それも、母を最期に見取ってくれたことからかと思う。母はこの人に何かを託したようだ。だから、私はこの人の子供を養子にしてもいいと思っていた。だが、残念なことに、養子にと望んだ子は、生まれてみると女児であった。それでもいいのだが、女児は他家に嫁げば相沢の家は無くなる。その可能性もあるので、私はその話を持っていってはなかった。

二週間から 一月の入院が必要と医師は申しておりました。その間のお世話は私がいたしますので、十分療養を尽くされますように。

そう言い残して、義姉は帰っていった。

ローカル新聞ではあったが、 私はもう主筆にまでなっていた。そして親の残した家は大きすぎて持て余していた。同様にその家に付いている元堂上華族の経歴も持て余した。もっとも、それがあったから今の職も得られたのだが、終戦後こうも日が経ってしまうと、重荷でしかなくなった。なのに、今もって色眼鏡で見られてしまうのは、今だ自分の身に付きまとう何かがそうさせているのかもしれない。また、この京都という地の風土がそうさせるのかもしれない。だが、垣間見える、消したはずのわが身の色は、世間の見るところとは違い、近衛の兵士の色だと解っていた。きらりとひらめく刃の光が、いつも私には見えていた。三十有余年が過ぎてしまった。この間、私は何度も同じ光景を見ていた。

とうとうやったか。全く私の不徳のいたすところだ。

そして、拝謁した 川島陸相の読み上げる蹶起趣意書に対して、昭和天皇は一喝される。

なにゆえそのようなものを読み聞かせるのか！

朕自ら近衛師団を率いて、此れが鎮定に当たらん！

悔やんでもも悔やみきれない、慙愧の念がいつも胸の内にあった。そして、戦後がやってきて、我々帝国軍人はと名乗りを上げるのではなく、私は自分の幸福のために生きると言い切れる時代が展開された。我々帝国軍人はと言上げするは間違っていると思うが、かといって、私は自分の幸福のためにと言い切る今に対しても違和感を強く感じる。我々が望んだのは、こんな日本の姿だったのだろうか。野中四郎はあの時敗れた。私は今敗れた。時代とおのが身の上に押し流されたお方、佳子様たった一人を、お救い出来ずに終わったわが身だ。救命措置で命を救われはしたが、その死線をさまよっている間の幽明の狭間で、私はもう自分の使命の終わりを知った。私は遺書を残さない。残しても誰に見せるというのか。私の手には野坂四郎の軍刀を直した短刀があった。これも野坂四郎のご妻女が、形見にと渡してくれた物だった。私をこうさせるのは、絶望か。戦前の日本と戦後の日本の両方に敗北したからだろうか。私は野中四郎に詫びた。そして、もういいだろうと語り掛けて、刃をひらめかせた。佳子様の墓の前でこうするのは、女々しいと思う。しかし、これがわたしの敗北の結果だった。

翌日の新聞には、京都新聞主筆、相沢氏、割腹自殺、の文字が躍った。このことについて、テレビも新聞、週刊誌も様々な憶測を流した。相沢は京都新聞の主筆として、戦前の思想を国民自身がはっきりと自覚し、対象化しなければ、その残像がいつの間にか現代の裏側にするりと入り込み、いきのびて行くと主張してきた。最も保守的と思われている京都は、実は最も革新的でもあったゆえ、彼の主張は受け入れられた。だが、日本全体でみれば、きちんと対象化されてこなかった戦前の思想と、それを担ってきた者の末裔が、今の日本を牛耳っている。心せよ、自由と民主主義は国民自身の日々の努力がなければ、いつの間にか後ずさりし、なくなってしまうと、相沢は言い続けた。さらに、戦前の思想を国民一人一人が臣民として、わずかずつ容認したからこそ、大日本帝国になったのだとも言った。それを彼は、中傷ともいえる手段で否定された。彼が元軍人であること、家が堂上華族であること、これらをもってうわべだけの民主主義思想とののしられた。また、冷戦のさなかであったため、東からの脅威に対する防衛問題と平和主義のありようをわざと混同し、近代主義の超克を叫ぶ者たちからは自虐史観だと言われ、マルクス主義者からは保守反動のラベルを貼り付けられた。

だが、かねてから彼は現行憲法に疑義を抱いていた。9条がというのではない。この憲法の根幹である基本的人権というものに、どこかうさん臭さを感じたのだ。例えば職業選択の自由、居住移転の自由、信教の自由、思想信条の自由、学問の自由、言論の自由などが憲法には列挙されているが、職業選択の自由と居住移転の自由は、封建時代の土地に縛り付ける強制からの脱却でもあったが、実は、産業革命によって大量生産を行う労働力の確保のために、人は生産地に移動し、集約されねばならず、職業も選択自由でなければならなかった。そして、多数の人の集まるところでの宗教争いはあってはならないことであり、思想信条も、実際の行動に移されなければ無害だから自由が保障された。他も同様である。資本主義経済は、すべての精神的タブーをなくし、自己の欲望をどこまでも開放して追求できる経済制度である。基本的人権といえども、そのために障害となることはすべて排除したに過ぎなかった。欲望をどこまでも野放図に追求できるこの体制と規律規範は、いつか人間の凛と生きる姿勢をも崩してしまう。相沢はそう危惧していた。

戦後日本に入り込んできたものは、米軍とアメリカ文化と資本主義経済であった。それらが野放しに日本中を闊歩し、勤勉な国民を追い立てて、大量生産大量消費に駆り立てた。国民は生活を豊かにするのは物であると思い込み、物を買うためにお金を求めて故郷を捨てた。彼らは勤勉に働き、お金を稼ぎ、物を買った。そして自分の手でさらに物を生産し、海外へ輸出して、ついには日本を世界第二位の経済大国に押し上げた。だが、彼らは幸せになっただろうか。

このような趣旨で、時流にいつも批判的な論説を展開する相沢に対して、世の中は戸惑うような対応をした。これが国家社会主義の論調ですかと、まったく的外れな批判をしてくるものもあった。彼は、大塚久雄と丸山真男を学んだ。彼らによって、相沢は目を開かされる思いだった。戦後民主主義も彼らから学んだ。だが、どうしても腑に落ちない思いもあった。これは日本ではない。彼はいつもその思いを抱いていた。なんだか、末期の目で世を見てる人のお言葉のような気がします。新聞の読者欄にそのような投稿もあった。私には、そんなところがにじみ出ていたのかもしれないと相沢は思った。この墓の前で割腹自殺をするのは、死に場所を求めた情死である。20年前だろうか、30年前だろうか、それほど前にあるべき情死であった。

里恵は新聞でこの事件を知った。里恵は、その記事の中の相沢の写真が、一気に翁面から中将、少将に変わり、童子に変化するのを見た。彼女は相沢が、府立医大病院でCPAを起こした人とわかった。途端に、千年の時が彼女の中に、流れ込んできた。里恵は足を止め、河原町表通りの洋装店の扉を押した。

いらっしゃいませ、お待ち申し上げておりました。

女店主が恭しく頭を下げ、中に導いた。里恵は試着室に入り、女店員に手伝われて、オートクチュールのドレスを試着した。今日で完成のこのドレスは、まるで天の羽衣であった。天の羽衣を身にまとったものは、それまでのことを全て忘れると言われている。その通り、里恵は何もかもを忘れた。自分が誰であるかさえ、忘れ去った。

いかがでございましょうか。

ありがとう、満足しております。

そういうと、女店主はその言葉に感謝の意を込めて頭を下げた。

女店員が開けてくれた扉を出ると、店主がドレスの入った箱をもって、里恵の後に続く。黒塗りの車のドアが開いて、運転手が急ぎ降りてきて、

おかえりなさいませ。

と里恵を迎えた。

　待たせました。

そう答え、里恵は車中の人となった。車の後ろで警官の警笛が響いている。それを相沢が見ていた。いくつもの時がここで交錯していた。

私が泣いた日

糖尿病と言われ、夫はその日から歩き始めた。はじめは一人でただ歩くだけだったが、それも淋しいと思ったのか、家の前に捨てられていた犬の子を抱いてきて、その日から飼いだした。捨て犬だから多分雑種だと思うのだが、それでもまるで純粋の日本犬のような顔をしていた。

「こいつは柴犬の雑種だろ。」

と夫は随分と気に入った様子だった。

「私は世話しませんからね。」

と始めっから宣言しておいた。そうしないと、結局私が、散歩から餌やり、体を洗うのまでやらなければならなくなることは目に見えていたからだ。夫は黙って、返事をしなかった。たぶん、犬を飼うことに自信がなかったのだろう。だから、翌日から朝早く起きるのも大変そうだった。夜勤もあるし、帰ってくるのも不規則なのだから仕方がないといえばその通りだった。しかし翌日、何がそうさせるのか、午前五時になると、無理して起き出し、そおーっと抜け出して行った。私も夫が出かけるのを待って、寝床を抜け出して早くから朝食を作るようになった。

私が泣いた日 ―2―

子犬の名前は夫が付けた。チビである。
「今は子犬でも、先には大きくなるのだからチビは止めといたら。」
とは言ったのだが、夫は聞かなかった。そんなときの夫の癖はわかっている。じっと黙って、こっちを見ないのである。こう強情さを募らせると、もうどうにもならないとわかっていた。それで、我が家にやってきた子犬は、チビになった。
夫が拾って、連れて帰った夜、チビは淋しがって鳴いた。くんくんと鼻を鳴らし、きゅうきゅう鳴き続けるのである。チビは外につないであったのだが、その鳴き声が耳について仕方がない。しかし、それをどうすればいいのかわからずにいると、夫が起きだしていった。そして、チビは夫の腕に抱かれて入ってきた。そんな時、犬にも表情があることを私は知った。チビは怯え、怖がり、震えていた。
チビはもう鳴くのを止め、夫の腕の中から身を伸ばして、夫の口元を舐めまくっていた。夫はそれをさほど嫌がりもせず、チビを抱いたまま布団にもぐりこんだ。
「あら、抱いて寝るの？」
ちょっと怒気を含んだ言い方であることに、自分も気付いて驚いた。
「おしっこしたら、どうすんの」
「バスタオルで巻いてるから、大丈夫。」
と夫は言う。私は少し混乱した思いがいろいろと湧いてきていた。夫はわが子にさえ、そんな風にしたことがなかった。チビは夫の腕から逃れて、布団の外を徘徊し始めた。何もないのに、においを嗅いで回る。目を離せないほど落ち着かず歩き、においを嗅ぐ。それが習性だろうかと思うが、寝られやしない。いつもは明かりを消して寝るのだが、今日はそうもいくまいと、豆球だけは点けたままにして、私は朝早いからと夫に断って寝てしまった。
翌日の朝、私は起きて見ると、ひとりだった。チビと夫は早々に起き出しているらしい。夫の布団はたたまれ、周りも片づけてある。そんなことはしたことのない人だったのに、どんな心境の変化かと、半ば可笑しくなる。そして、私がそんな気持ちになるのも久しぶりであった。というか、もう忘れ果てていた。

私が泣いた日 ―3―

首輪とか追い綱などの犬を飼う七つ道具を、夫はその日に買ってきた。それらを余程吟味したらしく、夫は上機嫌で帰ってきた。帰ってくるなり、夫はクインクインと鼻を鳴らすチビの前にしゃがみ込み、間に合わせの紐を外して首輪をつけ、地面に何やら金物を立て、首輪とその金物の間を留置紐でつないで止めた。それから黙ってものも言わずに板切れを組み立て始めた。しばらくして出来上がったのは、小ぶりの犬小屋であった。夫はその前に食器と水入れを並べる。それに缶詰のドッグフードを入れ、水を汲んでおいた。チビは目の前に食い物が出現したことをいち早く理解し、紐に引っ張られながら前足を浮かして食器にとびかかろうとする。夫は鼻先に手のひらを差し出し、マテ、マテと叫ぶ。そんな制止の声など、聞くものではない。紐につりさげられたようになりながら、浮いた前足でバタバタと空中を引っ掻く。紐がもう少し長ければ、とっくの昔に食器に食らいついていただろう。夫はチビの鼻先をなでながら、ヨシと声をかけ、食器をチビの届くところにおいてやった。チビはもう物も言わずに、一心不乱にドッグフードを食べた。ドッグフードの乾いた粒がカラカラと食器の中で鳴った。食べ終わるのは、あっという間だった。そのあいだ、チビを見ている夫は、こんな顔ができるのかと思わせるような優しい顔をしていた。

私がこの人と出会ったのは二六歳も過ぎようとしているころだった。家が貧しくて、私は中学を出るとすぐ個人病院の看護婦見習いになって働き始めた。当時は准看養成所が各地にがあって、開業医の集まりである医師会の作った専門学校に午後から通い、働きながら勉強して国家試験を受け、合格すれば准看護婦になれた。といっても三年の実務経験が必要なので、そのあと二年の通学を経てやっと国家試験を受けられることになる。そんなことから准看護婦になるには五年かかった。もっとも、高校さえ出てればもっと期間は短くなる。私はその高校にも行けなかった。結局、高校を出ても出なくても、准看学校には二年通わねばならないから、おんなじことだと、高校を出ていないコンプレックスを跳ね返して思い込もうと働いた。だが、現実はそうはいかない。私たちにはお礼奉公というのが付いて回った。無駄飯を食わせて、学校まで通わせてやったのだから、それまで通りの安月給でもう二年働くのが当たり前とされていたのだ。

私が泣いた日 ―4―

私が働きだしたのは、まだ開業して二年の外科医院だった。そこには正看護婦が一人、准看護婦が三人いた。そこへ、新しく生徒さんと呼ばれる私たちが採用された。先に採用されていた生徒が二人で、同期は三人だった。同期のものは誰も看護婦の仕事など、何も知らなかった。それどころか、医院の中の掃除の仕方さえ知らなかった。考えてみれば、たかが十五歳の中学出たての子供が、何を知っているというのか。家事もほとんど教えられたことがないのだから、知らなくて当たり前の話だ。私たち生徒は、病院に設置されていた寮で生活した。寮といっても、六畳の部屋が二つ、ひとつながりに続いていて、壁に向かって一人に一つずつの座机が与えられた。寝具は座敷の押し入れに、それぞれ親が用意してくれたものを仕舞っておき、夜、九時に一斉に延べて就眠するのが日課だった。しかし、医院だから入院患者もいる。入院室には看護婦詰め所があって、そこに准看護婦が一人夜勤する。それに生徒も助手として付かなければならない。その助手につける生徒は、先輩方だけで、私たち初年度のものがつくわけではなかった。だが、助手についた先輩の生徒は、朝の清掃と配膳は免れる。朝七時に、夜勤の准看護婦は帰り、助手を務めた生徒は、そのまま詰所のベッドで寝てもいいし、寮で寝てもよかった。だが、ほとんどが、詰所奥のベッドで、カーテンを引いて眠った。

私たち初年度の生徒は、朝六時に起きなければならない。起きてすぐに身支度をし、病院の内外の掃除をする。当番のものは調理室に入り、住み込みの女中さんと栄養士、通いの調理員さんに交じって、食事つくりの手伝いをする。といっても、生徒の私たちの食事も入院患者さんと同じものを食べるので、その分も数に入っている。夜勤明けの准看護婦もその朝食を食べて帰る。だからと言って、食事室があるわけでもなく、調理室から医院へ通じる廊下の壁に、カウンターのように打ち付けられた板の上に盆にのせた朝食をおいて丸椅子に座り、壁に向かって並んで食べるのだ。それが七時半から八時までのこと。それがすむと、入院患者さんの食器を回収に行く。最大で二十一名だから、同期の三人で済ませる。先輩方はこれを二人でやっていたのだ。だから、人が増えて楽になったと喜んでいた。これが昼も夜も繰り返される。

二時になれば、准看養成所に私たちは通っていく。人手の必要な急患の診察の時でも、婦長さんはちゃんと時計をみていて、それを院長にことわって、生徒さんは学校へ行ってくださいと指示してくれた。だから気兼ねなく学校へ行くべく、診察室を離れることができた。もっとも、診察室にいたところで、私たちには何もできはしないのだったが。

それでも、最初のころの六時起きは辛かった。すぐに慣れはしたが、先輩方が起き出していくのに気付いても起き上がれなかった。それを、寮長が起こす。

「起きなさい、起きられなかったら、帰されるわよ。」

この言葉が一番つらかった。私の下に妹と弟が一人ずつの三人兄弟だった。家は貧しく、この医院へやってくるのに、布団一流れがまともに用意できなかった。親たちと兄弟たちの寝ている家じゅうの布団で、一番まともな布団を組み合わせ、持たせてくれた。着るものも一緒だ。私は学校の制服を着て、この医院にやってきた。だから、准看養成所もその学生服で通った。家がそんなだから、まともに勉強なんかしたことがない。それゆえ、養成所で習うことを、どうやれば覚えることができるのか、わからなかった。ようするに、勉強の仕方など、知らなかったということだ。さらに悪いことに、医学用語は難しい漢字が多く、またその読み方が普通じゃないこともある。悪心は おしん と読み、会陰は かいいん ではなく、えいん である。もう挙げればきりがない。私は漢字に振り仮名を打って、何度も声に出して読んだ。すると、診察の際に院長と看護婦の話していることがわかるようになった。そんな中、急に院長から私に指示が飛ぶこともあった。しかし、それも右脚を押さえろとか、鋏を持って来いとか程度のことだったが、急に言われると戸惑ってしまい、体が動かない。すると、婦長さんから、窓際右三番目の引き出しから、ギプス鋏を取ってと具体的な指示が来る。それで体が動いた。三番目の引き出しの前板に、入っている物品の名前が書いてある。それを一瞬で確かめ、引き出しを引き、先日も使ったギプス鋏を掴んで、手を出している婦長さんに渡す。婦長さんは院長に渡してくれる。ふっと緊張が解ける。それが毎日だった。

医院の受付の横に薬品棚が並んだ薬局がある。今でこそ飲み薬は錠剤がほとんどで、それも包装シートに納まっているので、数さえ間違えなければいようになってきたが、私たちの頃はそうはいかなかった。カルテが受付に帰ってくると、薬の処方箋が薬局にわたる。しかし、そこに薬剤師がいるわけではない。慣れた准看がそれを見て、薬を整えるのだ。処方箋を見ると、まず薬包紙を取って少しだけ重ねて必要な日数分並べる。そのあと精密天秤棒秤の片方の皿に必要な重りを乗せ、濃い茶色の薬瓶から粉薬をもう片方の皿にいれる。こうして次々薬を測って乳鉢に投入し、軽く乳棒で混ぜ、薬匙で先ほどの薬包紙に等量ずつ分けていく。これが上手なのも矢張り婦長さんだった。

私が泣いた日 ―6―

婦長さんは粉薬を乳鉢に入れると、乳棒を動かすのではなく、乳鉢を回すように動かし、粉薬を混ぜた。反対に、乳棒を動かすと粉薬が飛び散ることがあった。婦長さんの手にかかると、粉薬がさらさらと乳鉢を回り、偏ることなく混ざっていく。即座に薬匙で均等に散薬が配られてゆくのだが、一度で一服の量が決まり、多い少ないがなかった。それを手に取って、薬包紙を折りたたんで包んでゆく。そしてその全部を重なるようにまとめ、薬袋に納める。その薬包紙を折るのが難しかった。同じように折っているつもりなのに、泥団子をまるめたようでバランスよく包めない。重ねてまとめると、それこそ串を刺した団子のように見えた。しょうがないわねと婦長さんは笑う。こんな薬を貰う患者さんが迷惑だと私も思った。

しかし、私が初めて看護婦という職業について実感したのは、手術の準備しているときだった。その頃はまだ全身麻酔もガスを使うのではなく、患者にさせたマスクにエーテルを滴下し、患者の状態を見ながら行うのであって、ごく荒っぽいものだった。それも、医師が行うのではなく、ここでは婦長さんが麻酔をかけていた。だからと言って、それが良いのか悪いのかなんて、わかりはしなかった。

手術場には、盛夏でなければ暖房を入れていた。麻酔をすると患者の体温が下がるからだ。手術場に患者が入ってくると、准看護婦がまず手術部位とその周辺の消毒を行う。そのあと、この医院では虫垂炎の手術がよく行われていたが、その場合は右の下腹部に穴の開いたドレープという布を被せる。あとは院長が入ってくるのを待つばかりだ。

しかし、私も院長がメスを使い始め、出血が見られた時は、急に生あくびが出始め、目の前が突然真っ暗になり、転倒した。手術を初めて見る者は誰しもがくぐる関門だった。あとは慣れるしかない。生徒が倒れると、先輩の生徒が連れ出した。私も先輩が二人掛かりで運び出された。そのショックで止めて帰る生徒もいたらしい。だが大かたは笑い話で終わる。私も三度目には平気になった。だが、今でも血の匂いは嫌だ。

私が泣いた日 ―7―

私たち生徒の仕事は医院内のことだけでなく、ペットの犬の散歩から院長の子供さんたちの幼稚園への送り迎えまで含まれていた。今ではそんなこと、考えられないことだが、当時はごく当然のこととしてしなければならなかったことだった。そして、させられる自分たちも、疑問にも思わなかった。

なかでも、自分がまだ子供で、世間知らずだということを思い知らされたのが、帰郷した際親の保険証を持ってくるように言われ、諾々とそれに従ったことだ。私の親は二人とも社会保険の本人だった。だから当時は医療費の自己負担はなかった。私が帰った時、先生が保険証を借りて来いと言ってると告げると、親は眉をくもらせ、顔を見合してなにか言いたそうだったが、娘の言うことだからと保険証二枚を預けてくれた。その時なぜ親が嫌な顔をするのか、わからなかった。だが、たとえ私が生徒でも、何が行われえているのかを知るようになった。カルテ箱に両親のカルテが入っていた。親のことだから気になって見てみると、病名が書いてある。急に不安になってカルテを開き、読んでみると、差しさわりのない内容が書かれ、そこから何回か診察に来たことになっていた。二親ともそうだった。私は親に一度も会っていなかった。それでも、私はそれが何を意味するのか解らなかった。医療事務をやっている受付の事務員にそのカルテを取り上げられた。

一年が過ぎ、二年目が終わって、私たちも准看護婦の資格試験を受けられることとなった。今は准看護師資格も国家試験になっているが、当時は各都道府県の資格試験だった。だから、当地で受からなければ受験日の遅い他県へ受けに行くことができた。去年は当院でも二人、受かることができず、他県へ急ぎ受験願を出して、事務の人に付き添われ、受験に行った。ふたりが受験に行った日、院長が、ばかだからとか、日ごろ要領ばかりで勉強しないからだと罵っているのを聞いた。確かに、彼女らは私たち後輩が入ってくると、いろんなことを私たちに押し付け、急に生活が派手になった。ある時など、生徒さんなのに化粧なんかまだ早い、と奥さんに怒られていた。私は化粧など想像もつかないことだったので関心もなかったが、それが怒られることだとも思ってみなかった。結局、私は世間知らずの子供だったということだった。

それでも、試験にはすべるまいと、私は教科書を夜中、待合室とか宿直室のベッドの中で勉強した。当地で試験にすべった先輩の一人は他県で合格した。残る一人はそちらでもすべった。この人は不合格と分かったその日の晩に、夜逃げのようにして逃げて帰った。私は、自分がいくら馬鹿でも、そうはなりたくなかった。

わたしが泣いた日 ー8ー

　私は字が汚い。どうしてもうまく書けない。それは教養の無さだと、まるであざ笑われているような気がしていつも気遅れした。教養なんかあるわけがない、中学でおわったのだから。しかし、准看の試験の時は、字の汚さを呪った。字が読み難くて不合格になるかもしれないと思った。丁寧に書けば、少々汚くても大丈夫と奥さんは励ましてくれた。だが、丁寧に書こうと思うと、今度は時間が掛かって焦った。</試験はあっという間に終わった。解答用紙が集められたあと、私は一気に青ざめた。名前を書いた記憶がなかった。私はもうこれでおしまいだと思った。

　帰りに私がそういうと、同期のものが意地悪そうに、
「またそんな言い訳を考えだしてぇ。」
と笑った。まさか、そんなことを言われるとは思ってもみなかった。
「ほんとよ、ほんとに書いたかどうか分からないの。」
というと、同期のものはもう相手にもしなかった。私は一人取り残され、後ろを歩いてかえることになった。

　結果は、一週間後に分かった。幸いにも、私は合格していた。私の言ったことを一蹴した同期のものがすべっていた。私は帰る家がないのだから必死だった。彼女も同じだったはずだ。だが、彼女は寄宿舎から消えるようにいなくなった。そのあとのことは知らない。噂で、どこかの誰かと結婚したと聞いた。

　一緒に最初の試験で合格した、もう一人の同期のものは、合格したとたん、医院を辞めた。そういえば、なかなか利にさとい人だったから、御礼奉公は必要ないという裁判の判決が出たことを知っていた。だから、院長にきつい言葉で問い詰められても平気だった。院長も、彼女を縛り付けもならず、悔しさをにじませながら見送るしかなかった。だが、陰では何かやってたらしい。医師会仲間に、彼女は雇わないようにと回覧したみたいだった。医師会は同じムジナだ。結局県外で病院勤めをすることになったとか。私はそこまでする気はなかった。准看となっても、今まで通り寄宿舎に住み、医院勤めを安い給料で続けた。家には帰れず、その上、少し上がった給料を親があてにしてた。妹たちの高校進学の学費だなんだと、親は私に言ってきた。私は医院からのお仕着せの白衣を着て、ナース帽をかぶり、静脈注射をするようになった。

わたしが泣いた日 ―9―

　長女になんか、生まれてこなければよかったと、私はいつも思っていた。今度のこともそうだ。妹や弟は高校に行かせてもらえる。私は自分で自分の生活を切り開くために、自分で捜してこの道を選んだ。それが、ほんの数年の差で上の学校に行きやすくなり、下のものは学校へ通う。それも、私の稼ぎを当てにしてだ。それでもいいと私は思った。仕方がなかったんだと思う。親も精一杯なんだから。

　同期の者四人のうち、二人までいなくなり、寄宿舎は少し閑散となった。残った同期のものもお給料に少し余裕ができたからか、それともお給料は全部自分のために使えるからか、お化粧もし、服も買った。私も服こそ買ったが、安売りの吊るし物で、大して見栄えのしないものだった。私はそれを着てどこへでも行った。それしかなかったからだ。家にもそれを着て帰った。しかし母さえそれが真新しいものだとは気が付かなかった。服なんて誰も買ってくれないのに、そこまで見てないのだ。そして私は実家に自分の場所を見つけられなかった。わたしはもうこの家には居ない者となり、わたしの居たところに妹が入り込んで、初めからそこに居たように振る舞っていた。もう何を言っても元には戻らないと分かった。私は医院の寄宿舎に帰った。

わたしが泣いた日 ―10―

もう准看養成のために、個人病院が生徒を雇い、それを看護学校に通わせるなんてことは時代遅れの事になりかかっていた。こんな雇い方が丁稚奉公のような悪弊だと、世は非難する世になっていったからだ。もう私のように、お金のないものが働きながら身過ぎ世過ぎをするすべを身に着けることは出来なくなっていった。私の雇われた医院も、私たちの後、生徒を雇おうとはしなかった。看護婦は自分でお金を出して看護学校に通い、資格を取ってきた者を、私たちより高給で雇うようになった。私は、後から入ってきた准看より安い給料で働くことになってしまった。あなたは寄宿舎に住んで食事も医院のあてがいだからその分給料は安くなるのだと、奥さんから言い渡された。通いになってもいいのよと、暗に寄宿舎を出るようにも言われた。行く当てのない私は、黙って寄宿舎に住み続けた。しかし、同期のものが結婚することになり、寄宿舎から出てしまうと、奥さんの言うまま、近くの安いアパートに引っ越した。持って出る荷物などほんの少しで、寄宿舎にもともとあった座り机と布団が一流れ、そして汚れのこびりついた鏡台など、医院で置いても処分に困るようなものをもらい、木造アパートの狭い一室に置いた。

私が泣いた日 ー11ー

通いになってからは、私も仕事は楽になりはした。看護婦としての通常業務のほかの外回りの清掃とか飼い犬の散歩、院長の子供の学校への送り迎えなどしなくてもよくなった。本当は、それは生徒の役割なのだが、その生徒がいないので寄宿舎にいる間はそのまま引き続いてしていた仕事だった。もっとも、子供たちが幼稚園から小学校に上がり、送り迎えがいらなくなったからでもあった。ほかに、外回りの清掃などもせずに済んだ。たぶん看護婦不足が言われだしたからだろうということは私でもわかった。何か言い渡されたわけではなかったが、そんな雑用は住み込みの女中さんがするようになった。そうだ、女中さんがいた、そんな時代のことだったのだ。

院長の代診に大学での同期の先生が来るようになった。代診の先生は隣の市の大病院の外科に勤務していた。これは言わばアルバイトでもあったし、この先生の新規開業の準備でもあった。代診の先生は、院長と違って紳士だった。白衣は当然着てたが、きちんとワイシャツにネクタイを必ずしていた。ものの言い方も親切で丁寧だった。ヘアースタイルもきちんと整えられていた。院長の傲慢で見下すような言い方ではなかったので、患者さんには大変受けが良かった。看護婦も緊張を強いられることなく、それゆえ逆に確実な仕事ができた。

その先生が、診察室で私のことを話しているのを聞いた。開業した時に、あの看護婦を譲ってくれないかというのだ。あれはドジで愚図だよと院長が言った。そんなことないよ、よくやってると思うよ、と言ってくれた。あれぇ、蓼食う虫か？と院長が言う。ちがうよ、護婦が足りなくてこまってるんだ、と話していた。蓼食う虫が何のことかはわからなかった。 まあ本人に聞いておくと院長が言った。

私が泣いた日 ―12―

私が勤め先を変わる日は案外早かった。一か月前ほどに、院長と奥さんに呼ばれ、変わる気があるかと訊かれた。私は迷った。勤め先なんて、ここしか知らない。外へ出るとどんなことが待っているのか、想像もつかなかった。考えてみます、そう答えるほかなかった。だが、それは院長と奥さんの期待してた答えではなかったようだった。この人たちは、言わば丁稚奉公のようなもので、行儀見習いから衣食住すべて面倒を見て、自分たちが一人前にしたと思っていたようだ。先に辞めていった者たちのことを、後ろ足で砂をかけるようなことをしてとののしっていた。辞める時、親御さんがやってきて、結婚させますんでと挨拶した子もいたが、これも影であしざまに言っていた。だから、私も悪く言われるんだと思った。

私は婦長に相談した。すると、行きなさいと、簡単に言われた。私はかわいそうに思っていたのという。あなたは準看試験も、病院に迷惑かけずに一発で合格した。看護婦以外の仕事も黙ってやって、文句も言わなかった。私、ここしか知りませんから、というと、だから行ったほうがいいのよと、婦長は言う。世間は広いわよ、ここだけが全部じゃないんだから。看護婦はどこへ行っても食べられる、そう言って婦長は、私がこんなこと言ったって、言わないでね、と笑った。私は翌日奥さんに、行きますと返事した。奥さんの顔が曇った。人が足りないのではない。私に裏切られた思いだと、その顔を見ればわかった。

しかし、他へ移るとなると、引っ越さなければならない。もうこの医院は何も教えてくれはしなかった。とりあえず、今のアパートの大家さんに引っ越す日を告げ、荷物を運び出す業者を手配した。引っ越し先は次の医院の先生が確保してくれていた。そのアパートを私は見ていない。次の勤め先のすぐ近くだとしか知らなかった。それでよかった。どんな部屋だろうと、寝起きができればそれでよかった。アパートの礼金敷金は、次の勤め先の院長が用意してくれた。といっても、無償というわけではなく、立て替えるだけでそれは私の借金になった。まるで女郎屋の前借ねと婦長さんが言った。

それでも、引っ越し屋さんについては、医院出入りの薬局の人に頼んで、そちらにやってもらうことになり、引っ越し屋さんは一週間前に断った。だから、私の借金は礼金敷金だけで済んだ。それにしても、思わぬ大きな借金に私はおののいた。

私がいよいよ出てゆくとき、奥さんと婦長さんが見送ってくれた。奥さんはその日までのお給料と少しのお手当を渡してくれた。後を付いて見送ってくれた婦長さんが、そっと、よかったね、あなただけよ、お手当までくれた人は、とささやいた。軽トラックの助手席で、私は泣いた。

私が泣いた日 ー13ー

なんで親があいさつに来ないんだと、前の院長は怒っていたらしい。遅れてきた父と母がそう言ってた。受付の前でその怒鳴り声に父たちは出くわした。あの子はしっかりした子ですから、どこへ行っても勤まるでしょうとお追従のように言われても、まともに聞くことはできなかったと父が言った。私の新しい部屋を見て、母が狭くて汚いねと言った。いいのよ、暮らして行ければそれでいいのと答えるしかなかった。不安は私のほうが強かった。

父が新しい勤め先の先生に挨拶に行くと言い、三人で部屋を出た。部屋の荷物は置き去りのままだった。新しい医院までの道すがら、父がお給料は上がるんだろうなと言い出した。母がそれをたしなめた。しかし、父はお給料が上がったら、仕送りを少しでもいいから増やしてくれと言う。下の妹が高校に進学するからだと言った。弟は中学を出ると、大工の見習いに行くことが決まっていた。それなのに妹は高校へ行くのだ。私は複雑な思いだった。のちに、妹は高校を卒業すると、県都の大きな銀行に就職することができた。学校は出すもんだと、父が自慢げにそう行言ってるのを聞いた。とにかく、その父の申し出に、私は頷くしかなかった。

父たちが帰った後、私はひとり部屋を片付け、そのあとを掃除する箒と塵取りを買いに表通りに出た。小間物屋さんがあるのを、引っ越しの車の助手席で見つけておいた。店でそれらを買い、横を見ると、レースの花瓶敷きが置いてあった。前の医院の奥さんがくれたお手当を思い出し、思い切ってそれも買った。花瓶なんてなかったが、その代わりに牛乳瓶をその上に置いた。レースの花瓶敷きは、欲しくてほしくて仕方のなかったものだった。牛乳瓶に、道端の花を挿した。

寝て起きて、時には白衣のまま帰ってきてねっころがる、そんな生活が始まった。それは前の時と同じだった。夜中でも、急患だといえば、婦長と私が呼び出された。ほんの300mしか離れていないのだから仕方ないといえばその通りだが、夜、寝てなくとも翌日も平常勤務だった。医院だから入院患者は一九床と決まっているが、時には宿直室にベッドを置き、人数制限を超えて患者を収容した。

今度の先生はよく点滴をした。狭い個室に診察ベッドを二台並べ、患者を寝かせて、時には一時間超えで点滴をする。患者はなぜか、それを有難がった。しかし点滴の針を血管の出ない患者さんに刺すのは、看護婦泣かせだった。上腕にゴムチューブを巻き、不安定な針を持って血管を探る。のちには翼状針ができて、看護婦にも患者さんにも負担が少なくなったが、私の時は留置針ばかりで大変だった。細い血管にチューブのついた普通の注射針を刺し、アルコール綿花を分厚く重ねて絆創膏で固定しなければならない。だから患者さんがちょっと腕を動かすと点滴液が漏れた。針を刺したところが次第に膨れ上がり、患者さんは痛がった。そして看護婦は針を再度刺さなければならない。だが、院長が引き抜いて連れてきた婦長さんは、それが極端に少なかった。逆に言えば、私は未熟だということかと思った。だから、患者さんから、婦長さんにしてもらってと、面と向かって言われても、悔しいというより、ほっとした。

前の医院と比べ、難しい病気の患者さんも増えた。手術もたくさんあった。そして、看取る患者さんも時にはあった。裏口退院というんだいうことも、こうして知った。それから、なくなる寸前までの宙を浮くような慌ただしさと、死後処置の怖さも知った。いまではエンゼルケアというらしいが、これも婦長さんに教わった。婦長さんは、これもてきぱきと行った。手術用手袋をつけ、鼻腔、尿道口、アナルに綿球を詰めてゆく。これが最後のさぎょうだ。その前に体に残った排泄物を出してしまう。まるで司祭が執り行う儀式のようだ。私は嗚咽と嘔吐を繰り返しながら手伝った。そして、もう耐えられなくて、明日辞表を出して看護婦を辞めようと思った。それを婦長は見抜いたのか、病室を出るとき、これで辞めるなんて言わないでねと言った。裏口で院長と婦長に並んで患者を見送るとき、私はそれでも辞めようと思った。最後まで看取ってあげるのが看護婦の勤めなの、婦長はそう言った。そして、結局私は辞めなかった。あの時の光景は頭に焼き付いているが、それに耐えているのは私だけではないと、婦長を見ているとわかったからだ。それが看護婦の務めと私も覚悟した。

この医院に勤め出して、私も看護婦の仕事は１０年近くになり、年も二十代後半となっていた。周りは皆、結婚してしまった。同期のものの中には看護婦を辞めたものもいた。だが、私は結婚などできるとは思っていなかった。私は自分が醜女なのを知っていた。親元を早くから離れた私は、それぞれ独立して生活している下の兄弟たちがどうしてるかも具体的には知らなかったが、家でそれぞれ何かあったらしかった。弟は近所の人の強引な勧めで、一回目の結婚をして子供を一人設けた。結婚式なんて派手にもやらず、それも貧しいからかと思っていたが、理由があったようだった。私は相手の女人

の顔をほんの数回見ただけで、急にいなくなった。その人は子供こそいなかったが再婚で、陰気な顔をしていた。式といっても花嫁が再婚ということもあり、派手なことは控えた身内だけの質素なものだった、。私も列席はした。そして、お酒をもって姉だと挨拶に行ったが、花嫁はうつむいたままでまともに顔も見られなかった。弟をよろしくお願いしますと一応挨拶はした。しかしこれにもはっきりとした答えはなかった。あとは父と仲人の馬鹿騒ぎで披露宴は終わった。

それから三年後、一歳半になる女の子を置いて、弟の嫁は精神科に入院して帰ってこなかった。弟は子供を連れて離婚した。これには仲人も否応はなかったらしい。弟は子供を母に預けて懸命に働いた。それしかなかったと、弟は私に言った。私は遠く離れて、もう何もできなかった。

朝の診察が始まったばかりの時、急に受付が騒がしくなった。そして、受付の一人が診察室に飛び込んできた。彼女は慌てて、前の医院の院長が急死したとあたりをはばからず院長に言った。電話してきたのは婦長さんだったようだ。前の院長は胆石を持病に持っていた。朝方、そのための腹痛で婦長を呼び出し、ブスコパンをうてと言ったらしい。言われるまま、婦長は注射をした。それがアナフラキシーショックを起こさせたようだ。ほんの数分後に喉を詰まらせ、絶息状態になって青ざめて悶絶し、こと切れた。ただうろたえる奥さんに、婦長は救急車を呼んでくださいと怒鳴りつけた。そして、院長の胸をたたき、心臓マッサージをして、救急車を待った。看護婦は強心剤を注射できない。ひたすら心臓マッサージを続け、時折聴診器で心音も確かめたが、戻ってこない。横で奥さんが泣き叫んでいた。どうしてくれるのよ、あんたが殺したと責められた。奥さんとともに、婦長さんも救急車に乗って総合病院へむかった。そういった経緯だったらしい。

その夜、通夜に出かけた。今の院長が行くというので、車に便乗させてもらった。前の病院が辛いと思ったことはなかった。人使いの荒い医院だとの評判だったが、仕事はこうしたもんだと思っていた。しかし、今度の医院に勤め出してみると、やはり辛いところがあったと思う。それでも、一度そんな辛いことを経験しているから、今の仕事に耐えられる。前はこんなもんじゃなかったと思って、体が動く。車を運転している院長越しにフロントガラスの景色を見ながらも、そんなことしか思い出さない。

通夜に平服で行こうとしていると、今の院長の奥さんが、

あら、喪服を持ってないの

と言われた。はい持っていませんと答えると、

じゃあ、黒い服は持ってない？

という。そういったものは、看護学校の制服しかなかった。

そう、じゃあ待ってて

と言って、奥から黒のスーツを持ってきてくれた。そして、

いまからじゃあ、喪服は間に合わないから、明日の葬式もこれで行くといいわ

と言って数珠も持たせてくれた。一瞬、晴れ着を着たような錯覚を覚えた。私は車の中で身を固くしていた。

翌日は、朝から葬儀の手伝いに行くことになった。手伝いにこさせますからと今の院長が奥さんに挨拶して、そうなった。ついこの前ここを離れたと思うのに、なんだか知らないことろに来たようで、戸惑った。何か微妙に違う。しかし、奥さんに言われる前

から会葬客にお茶を運び、医師会の先生にはお見送りにも出た。黒のスーツが間に合った。

おお、今度は君が婦長になったのか

と、あまり事情を知らない先生が言った。私は首を振り、有難うございましたと頭を下げた。そして、初七日を終えて、私は今の院長とまた車で帰った。奥さんは私の手を握って嗚咽した。

その医院は外から医師を雇い、しばらくはやっていたが、後継者のいないまま閉院してしまった。私は帰るところがなくなったようになった。

アルバイトに来ていた公立病院の医師が言った、おお今度は君が婦長になったのかという言葉が妙に残っていた。たとえそれがお世辞とわかっていても、妙に心の中でもやもやと騒いだ。個人病院だって、婦長は正看護婦でないとなれない。わたしは思いついて、前の医院の婦長さんに電話してみた。先にはご苦労様と婦長さんはねぎらってくれた。奥さんが、落ち着いたらお礼をしなくちゃって言ってたわよという。それはいいんです、婦長さん、働きながら正看護婦になれる方法ってあるんだすか、と聞いた。そういう道があることは、なんとなく知っていたからだ。しかし、身近にそんな手段があるとは、見当もつかなかった。すると、そうね、**の国立病院の付属看護学校に夜間のコースがあって、そこで三年勉強すると、受験資格ができるらしいわよ、と教えてくれた。そして、そうしたいの？と聞き返してきた。はいと答えた。少し沈黙があった。そこの整形外科の婦長が、私の同期なの、今度、聞いといたげるけど、あなた、だいじょうぶ？今の医院、辞められる？という。やめます、と言い切った。じゃあ、待っててね、なかなか電話がつながらないの、解ったら、れんらくする、そういって、電話は切れた。胸が躍った。何か悪いことをしているようだし、一人っきりになったようにも思えた。

あなた、*日に**病院までいける？と返事があった。夜勤明けをその日に鳴るようにすれば・・・と、大急ぎで考えた。いけると思いますと、そう思った時には答えていた。

県都ではあったが、指定された病院まで行くには、国鉄駅から市電に乗らなければならなかった。私は田舎者だから、そんなことにも慣れていなくてものおじした。だが、そんなことは言っていられない。市電の始発駅で電車を待ち、行く先を確かめて乗り込んだ。**行きに乗るのよと婦長さんが教えてくれていた。切符は買っていた。その時、何時の電車に乗ればいいのかも、窓口で聞いていた。駅の時計で時間も確かめた。私は窓の外ばかり見ていた。別に珍しいわけじゃない。不安で、確かめていただけだった。景色は次第に変わり、建物が密集していた地域から、畑と川が見える郊外に出て行った。そして、線路だけが伸びていて、人気のない駅を過ぎてゆき、聞き取りにくい車内アナウンスが私の目的とする駅の名前を言ったように思えた。私は立ち上がって扉の前に立った。駅名を書いた看板が見えた。私はとにかく降りた。そこからタクシーで十分はかかると思うわと婦長さんは言ってたが、そんな余裕はなかったので、駅前のお店で目指す病院へ行く道を聞いた。歩いてゆくのかね、３０分以上はかかると思うよとおばさんが言った。私は礼を言い、日差しに照り付けられながら道をたどった。道は単純だった。とにかく今歩いている道をずっと歩き続け、病院の案内板を見つけて、そこを曲がっていけばいいだけだった。それでも私は緊張して、ただただ歩き続けた。バスやら車が走り、砂埃が舞った。三十分は歩いたが、看板にはたどり着かなかった。たまたま通りかかった人に、もう一度訪ねてみた。すると、もう三十分ぐらいかかるといわれた。額から汗が落ちた。それでも歩くしかなかった。時間が迫っていた。私は焦って、小走りに走った。後から訪ねた人の言った三十分ほどはかからなかった。息を切らし、看板を曲がり、病院の玄関をはいって病棟を訪ねた。約束より三十分ほど遅れていた。

詰所で、病棟婦長さんはと尋ねると、奥に座っていた看護婦が私をにらんだ。**さんね、遅刻よ、ときつく言われた。すみませんと頭を下げるしかなかった。婦長さんが私の前に立った。そして、噴き出した。砂埃にまみれた服と、汗に濡れた顔がなんとも健気だったと後で言ってた。しかしその時は、顔ぐらい洗いなさいと言っただけだった。

婦長さんにあまり時間がなかったので、面談は十五分ほどで終わった。私は半年先にこの病院に勤め、かつ夜間の看護学校に通うことになった。ただし、看護学校の入学試験に受かることが、このことの条件だった。準看の免許証をコピーし、履歴書と願書を書いて出すこと、そして高校程度の学科試験と看護学の試験が入試科目だった。そのうえ、面接もあった。合否は一週間先に発表になる。半年しかなかった。帰りに病棟婦

長が受験参考書をくれた。そして、病院の看板前のバス停を教えてくれた。そういえば、バスの走っているのも見ていたのだった。

試験と聞いて、一応わかっていたつもりだったが、途端に気持ちが萎えた。学歴のない私に、女学校または高校程度の学科試験は無理だと思ったからだ。それでも帰りの汽車の中で受験参考書を開いてみた。英語もあった。数学も国語もある。私はもうあきらめようと思った。そんな試験なんか受かるはずがなかった。そう思いながら、一緒にくれた願書も見てみた。今日会った病棟婦長さんがその中の一枚を出して、これは必ず書いてもらいなさいねと特に念を押した書類があった。その時は上の空だったのだが、よく見ると推薦状と書いてあった。医師二名の推薦を受けるようになっていた。誰でもいいの、と言っていたようだった。それを見ながら、私はただ添付する書類の一枚だとしか理解してなかった。それに、推薦してもらえる先生なんかいなかった。もう私の未来は開けないものと思った。

翌日、前の医院の婦長さんから電話がかかった。私は電話で話しながら、ふいに泣いてしまった。私はもうだめです、そういって声を押し殺して泣いた。何言ってるの、いい子だって**さんが言ってたわよ、何とかなるから、もらった書類、全部もってらっしゃい、婦長さんがそう言った。

翌々日の明けの日に、私は前の婦長さんの自宅を訪ねた。お茶とおかしまで出してくれた。わたしはねぇ、勉強する子が大好きなの、今の婦長さんもそういってたわよ、だから・・・、そう言いながら、願書と履歴書などの書類の中から推薦状をみつけて、これだけ預かるわね、と言った。そのあとは、受験参考書を見ながら、解るところだけでいいから、毎日勉強しなさい、準看試験の時の教科書ももってるわよね、それも勉強しとくのよ、と助言してくれた。それでも、私の気持ちは晴れなかった。だが、この人たちは私を応援してくれていると思うと、自然と、参考書に手が行った。解らないまま、その中の一行一行を読んでゆく。その間、夜勤もやった。むしろ、その夜勤の間のほうが、集中して勉強できた。ナースコールで勉強が途切れても、巡回の後でも、本を呼んだ。そして、それが三日続くと死んだように眠った。

受験日まであと三ヶ月となった時、前の婦長さんから呼び出しが掛かった。残りの書類全部を持って来いとのことだった。私は願書一式をもって、婦長さん宅を訪ねた。すると、あら、まだかいてなかったの、と言われた。うけてもうかりませんから、と泣いた。そんなことないわよ、受けてみなくちゃわからないじゃない、と婦長さんは言う。でも、受けるためには、今の病院を辞めなくちゃなりませんし、答えた。受験するということは、合格を前提に勤め先を変わり、今の病院を辞めるということだった。そうだったわね、でも、人生、一歩踏み出す時は何かを掛けなくっちゃ、と婦長さんは言う。それと、不合格なら、私が勤め先ぐらい探してあげる、今は看護婦が足りなくって、引く手あまたなんだから。そういって、残りの書類を全部、この場で書かされた。そして、それに推薦状を加えて、大型封筒に入れ、のりで封をして、帰りに郵便局からこれをだしておくのよ、かならず書留にしてね、と強く言い添えられた。そのあと、婦長さんは、今の医院の院長に、受験日二か月前には挨拶しておくのよと言った。病院も辞めることになるといってね。受かればですよね、うかれば・・・。なにいってんの、うかるわよ。わたしがおまじないをしておいたんだから。そういって笑った。

帰り道、そんなことってあるのだろうかと訝んだ。でも、一点でも多く点数を取るように勉強しとくのよ、と言った婦長さんの声がまた浮かんだ。そして、一か月して、わたしは院長に、事情をいってやめることになるとうち明けた。院長は一瞬怒って怖い顔になり、そのあと冷静にそうかとだけ言った。もう引き返せなくなった。夜勤の時、院長の奥さんが冷静さを欠いた顔で、あんたなんか高看になれると思ってんの、となじってきた。学校に入るのだって試験があるのよ、ろくな学校も出てないくせに、受かるはずがないじゃないと言いはなった。まあ、恩を忘れて、辞めるなら辞めたらいいわ、そのうえ、試験にはうからなかったら、帰るところはないと思いなさいね、そういって、奥へ引っ込んだ。

それからは、まるで針の筵だった。夜勤や準夜勤を執拗に命じられた。他の同僚からも院長の意向を受けて、まるでいじめのように仕事を割り振られた。緊急手術にも、私が呼び出された。だが、そんななか、婦長さんだけが、陰から助けてくれた。２か月なんてあっという間だった。その間、私はひたすら受験参考書を開き、解ろうと解るまいと、お経を唱えるように声を出して読んだ。それだけしかできなかったのだ。

試験は二日に及んだ。初日午前中は英数国の学科試験、午後は看護学の試験だった。いまなら、社会人選抜の制度もあり、学科試験などは免除になるのだろうが、私の時はそうはいかなかった。私は試験当日の午前中で、もう帰ろうと思った。解答用紙に答えがほとんど書けなかった。でも、泣きながら試験はうけた。いいわね、最後まで試験は受けてかえるのよ、と前の医院の婦長さんから言われていたからだ。しかし、もう何も考えられなかった。ふいに親を恨んだ。私には上の学校へ行かせてくれなかった、そうできなかったことは解っている、でも妹は行かせたじゃないか、私の援助でいかせたじゃあ、と歩きながら泣いた。もう、帰るところもない、明日働くところもない、そう思って泣いた。私は独りぼっちだった。

帰りに、今度の病院の病棟婦長さんのところへ立ち寄った。お礼だけは言っとかなくちゃと思ったのだが、もう何も言葉が出なかった。すると、その顔を見て婦長さんが、なんて顔をしてるのよ、あしたの面接は必ず来るのよ、いいわね、私も面接官の一人なんだから、恥をかかさないでね、解ったわよね、と背中をたたかれた。私はただ頷くしかなかった。

翌日の面接は朝早くから、受験番号順に行われた。しかし、昨日の成績では受からないと思ったのか、何人かは欠席していた。私も来るのではなかったと思った。３７番目といっても、十人ほどいなかったので思ったより早く面接の順が来た。

面接室に入ると、奥に横長のテーブルに三人の面接官が座っていた。私は椅子の横に立ち、名前を名乗った。昨日の言葉通り、病棟婦長もテーブルの右に座っていた。すると、病棟婦長がその人に、**さんの書類ですと言いながら三通の紙を渡した。そして、もう一人の女性も何か書いたものを一枚渡した。お座りくださいと、落ち着いた声で男の人が椅子を指示して、書類を読んだ。そして、ふいに髪をかきあげながら、この学校を受験する人の中では、ちょっと年上ですなあと言う。そうだった。受験している人たちをみると、ほとんど私より若い人だった。年いってるしなあ、と髪を抑えるしぐさで、男の面接官が言う。あら、年いってたらいけないんですか、と病棟婦長がちょっと強く言った。いや、そういうわけじゃあないんだが、と言い訳するようになまへんじする。それと、学科の成績が・・・、と言い添えた。そうですね、年齢が高いのですが、その分、準看としての経験は豊富だと思います、それと、学科試験の悪いのは、戦後の混乱期にそだったせいもあります、しかし、看護学の成績は優秀じゃありませんか、どうです、先生？と婦長さんが援護してくれた。すると、男の面接官が、あなたはどうしてこの学校を受験されたんですかと訊いてきた。何か答えなくちゃと必死だった。私は学校を出るとすぐに準看になる道を自分で探し、一人で**の医院を訪ねて採用してもらいました。それから３年、医院の仕事をしながら学校に通い、試験もやっと通って準看になりました。でも、私、自分が何も知らないって思うんです。先生に言われたことしかできないんです、看護婦はそれでいいんだといわれますが、私の知らないことが患者さんに起こった時、どうしたらいいのか、解りません。それがこわいんです。患者さんの症状を先生に的確に説明して、次の処置の支持を受けるのが看護婦だと思います。だから、私、もっと勉強したくて受験しました。病棟婦長はうなずきながら聞いてくれた。男の面接官も納得はしてくれたようだが、顔を婦長のほうに向けて、紙のどこかを指し示して、ちょっと首を横に振った。すると、婦長が下からもう一枚の紙を出して見せた。そして、先生、いいんですか、と小さく言った。おいおい、こういうのは先に見せといてくれよ、そうじゃなかったら、俺の首など、すぐ飛んじゃうよ。そういって私の方に顔を向け、夜間を受験してるんですね、たいへんだと思いますよ、頑張れますか？と訊いてきた。はい、頑張れます、がんばります、と答えた。そうすると面接官は書類に何か書いて、横の女性に渡した。午後１時になって、校舎前の掲示板に合格発表が張り出された。定員は２０名だったが、合格者は２１名だった。そしてその合格者の番号の中に、私の番号も入っていた。これが私の転機だった。

合格発表があった翌日、私は**医院のあてがってくれていたアパートを追い出されるように出ていった。アパートを出る時は誰も来てはくれなかった。当たり前だと思う。便利に使えるうちは追い回してこき使い、自分の思うようにならなくなると、唾するように顔をそむける。それが世間だと知っていた。親までが医院をやめるというと、今までの仕送りはどうなるんだと言ってきた。最初は妹の学資、次は父の飲み代、そして、年とともに次第に弱ってきた父母の生活費と、私の送るお金はあてにされ続けた。私は、もう私の思うようにさせて、私はこれから働きながら自分のために勉強するの、だからお金がいるのよと返事した。赤い鼻で、目の濁った父が怒った。母は何も言わず、路頭に迷うような眼をした。上の学校にまで行った妹がいるでしょ、今度はそっちに頼んでよと、私は大声を出してしまった。あの子はいいとこに勤めているから、着るものもお付き合いもあるし、だからお金がいるのよと母が言う。お前は長女だろ、親に仕送りするのがそんなに嫌やかと父が怒鳴る。下の子も一人前になって親の助けができるようになったと思うわ、私はもう十分にしてきたはずよ、だからもう思うようにさせてください、そう言って頭を下げ、親から離れた。お前のような恩知らずは勘当だ、帰ってくるな、もう帰るところなんかないと思えと父の怒鳴る声が背中に聞こえた。

親と、これまでの勤め先を失い、私はゆく当てがなかった。そんな私を、前の婦長さんが拾ってくれた。一か月でしょ、私のところへ来たらいいわと言ってくれた。私は布団袋一袋と少しの着るものの入った衣装缶とともに、婦長さんのところにお世話になった。その荷物について、あらこれだけ？後からまだ来るんでしょと婦長さんは言った。それに首を振ると、いらぬことを言ったとすまなさそうにしながら、婦長さんは私を招き入れてくれた。小さな一軒家だった。

婦長さんは戦前からここに住んでいた。というより、ここに嫁いで来たのだった。そのことについて、婦長さんは私が居候をしている最中のよもやま話に、相手は陸軍将校さんだったとか、しかし、結婚して間もなくご主人は外地に行ってしまった。そこで、ご主人の留守中、婦長さんも何かお国のためになることをと考えて看護婦になることを決意し、陸軍の看護婦養成課程に志願したと話してくれた。当時の看護婦養成課程は二年だった。だが国家の非常時だけに教育は厳しく、苛烈を極めた。いわば、私には想像もつかないことだが、兵隊教育と同じことであったようだ。

でもね、と婦長さんは言った。主人はよく手紙をくれたの、結婚して一緒に暮らした時間より長く、手紙のやり取りをしたわ。文面はね、やっぱり職業軍人だっただけに、どこか堅苦しくて紋切型なところがあったわ。共に暮らしたのが三か月、手紙のやり取りが一年と半年。後は戦死公報と、少しの遺品だけ。私には手元に残った手紙だけが夫だった。遺骨が戻ってきたのは、まだ戦況が厳しくなかったからで、後のことを考えると幸運だったと思うの。私たち遺族は遺骨を待って葬儀を行えられました。それにはまだこちらに残っていた部隊の人たちが総出で参列してくれて、まるで英雄扱いだった。私が遺骨を抱いて出ると、気オー付け！総員、かしらあ、みぎ！かしらアー、ひだり！と両側に並んだ兵隊さんが敬礼をしてくれた。たぶん、師団長付き将校だったからだとおもう。そんな中、私はじっと遺骨を抱いて歩いて行った。それは、いまでも覚えているわ。

でもね、緊張してたからかしら、私はあんまり悲しくなかった。こんなことを言うと、お前は夫を愛してなかったのかといわれそうだったから、今まで一度もそんなこと言ったことないのよ。女同士だから言えるけど、短い期間でも、子供こそできなかったけど夫婦の契りはありました。しかし、二人で交わした言葉は、数えられるほどしかなかった。夫は今でもよく知らない人なの。軍刀を手にして立ってる写真がいつの間にか、私の思い出す夫の唯一の姿になってしまった。それしかなかったからかもしれないわね。あの遺影はその写真から、顔だけ拡大して写真屋さんがつくってくれたの。笑うでもなく、話しかけてくれるでもなく、私、自分が年取っていくにつれ、夫がだんだん弟みたいに思えてきて、そのうち、息子に見えてくるかもしれないって思ってるの。私が年を取って行く証拠ね。そうよ、死んだ人は年取らない。生きてるから年取ってゆく。不公平よね。でも、わたし、死んだら、あっちで夫と大恋愛するの。そう思うのも、やっぱり、あの人は私の結婚して一緒になることが決まってた人だったからなのよ。きっとそう。

ああ、この人も、ご主人を愛したかったんだと、私はおもった。いつの間にか頬を伝った涙を拭って、私は婦長さんを見た。

次の新しい病院の病棟婦長は、私の同期なの。だから、あなたのことも信用してたわ。あなたが言うのなら、絶対大丈夫だと思うって。私も、あなたのような女の子が欲しかった。だから、ずうっと応援してる。帰る所がなかったら、私のところへ帰ってらっしゃい。いつでも歓迎する。婦長さんはそう言ってくれた。この後病院を移り、新しい生活になってからも、私は汚い字で恥ずかしかったが、この婦長さんだけには手紙を

書いた。頑張ってます、頑張りますと。

今回移った病院は、国立であるだけに入院病棟も七つあり、診療科も多岐にわたった。私が配属されたのは、高等看護学校の夜間に通うことも考慮されたのか、整形外科病棟だった。たぶん、この病棟はすぐに命にかかわるようなクランケが少ないからだっただろうと思う。そして、その病棟の婦長さんが私をうけいれてくれた、あの前の婦長さんの同期の人だった。しかし、学校に行ってるからと言って、勤務をおろそかにしないでね、つらいときは言って、でも何とかなるとは思わないで、大変なのはみな同じなんだからと言い渡された。

病院にあいさつに入った翌日が、看護学校の入学式だった。といっても同期生の殆どが、私より年下だった。勤務も翌日から始まった。仕事と学業の他に、私は新しい生活の体制を整える必要もあった。目まぐるしい日々が続いた。そんな中で、私は学校でおばさんというあだ名を付けられていた。

大体、看護婦になろうという女の子は、鼻っ柱の強い子が多かった。だからとし上だからといって、容赦はなかった。そんな子らに負けるわけにはいかない。見渡せば、肌も張りのある、育ちのよさそうな子らばかりだった。私はその子らの中で、回りに挨拶こそすれ、友人を求めようとはしなかった。そして、勤務中も時間を見て予習をし、授業に臨んだ。夜間の部に通う子らはみな真剣だった。そんな中に、ひとり、私のように孤立している子がいた。昼間の部の看護学校に合格できず、やむなく夜間に通うことになった子だと、何となくうわさが聞こえていた。少しひ弱そうな、素直な性格のようだった。

看護学校の授業だからといって、何も特殊な授業をするわけではない。テキストに従って講義があり、時折知識の確認のために、講師から生徒に質問が飛ぶ。手術道具の名称とか、病名にしったがって症状の特徴を述べたり、衛生知識の確認、手術の際の手洗い方法など、看護婦として当然の知識がいつも問われた。ある時、そのひ弱そうな子に質問が飛んだ。生徒は質問がされると、関の横に立って答えるのだが、その子は立って一瞬間を置き、ふっと崩れ落ちた。横の席だった私は、急ぎその子の横に行き、顔色と呼吸を見て脈を取り、瞼を返してみた。その子は失神までには至らなかったようだった。ふうっと大きく息をし、目を開いた。どうかね、と講師だった内科医が私に聞いた。脈はすこし早くて弱いようです。講師がもう一度脈を取った。そしてやはり瞼を返してみた。起立性貧血のようだね。そう私に言い、その子に、大丈夫かね、ちょっと横になってなさい、と指示し、保健室のベッドに連れて行ってくれと私に言った。その日の授業は、これでつぶれた。

その子は、それから一年足らずで亡くなった。起立性貧血は子宮がんの慢性的な出血で起こったものだと、後の検査で分かった。手術はされたが、もう病巣が広がりすぎていて取り切れなかった。看護婦が自分の病気に気が付かなかったんですと、親御さんが泣いた。いや、気が付いてたと思いますよ、でも、若くて未婚の娘さんは、恥ずかしくて診察を受けられなかったんだとおもいます、そんな例はよく見てきました。それにしても、残念ですと、教室の前の廊下で、親御さんと教官二人が話していた。教室には、彼女が座っていた机に、花が生けられていた。お医者さんなんてね、処置をするだけして、あとはほったらかし、ああしとけ、こうしとけと言いっぱなしで全部こちらにお任せ、だから、本当の治療って看護婦がしてるのよ、そういって看護学教官は笑った。看護婦がしっかりしてなくっちゃ駄目なのよ、べんきょうしとかなくっちゃいけないのよ。ここだけの話だけどね。そんな話に、彼女も皆も一緒に、声をひそめて笑った。私が付いて、看護できればよかったのにと思った。

高等看護学校の日々は苦しいことばかりだったように思える。授業は午後五時半からの始まりだったから、病院での勤務は、いつでも5時で終わるように、病棟で配慮してくれていた。だが、急患などが来た場合、それを振り捨てて学校へ向かうわけにはいかなかった。それでも、心を鬼にして勤務から離れた。しかし、他人はそれを見ないふりして見ていた。こんな時だって、勤務時間が終わったって帰る人もいるのよと、聞かせるともなく言う言葉を聞かなければならなかった。ああもして、えらくなりたいのかしらねえ。私なんか家庭があるから、あんな風なわけにはいかないわ。下働きのまんま一生終わるのよ。あんな人がそのうち高看になって、婦長でございって、威張るのよ。私は夜間に苦労して通って、国家試験にも合格したのというのが自慢話になるの。そんなのって鼻持ちならないわね。そんな言葉が背中に突き刺さった。

針の筵とはこのことかと思った。看護生徒の時は、学校に通うのが仕事だった。だから、私は感謝して惜しみなく働いた。そして、ここでも勤務時間中は、必死に勤めた。だが、それが認められる環境ではないということかと思った。私はもう何も知らない生徒ではなく、一人前に働ける看護婦だ。それは周りにいる看護婦もおなじだった。だから、私が優遇されるのが気に入らないのだ。さらに、私が高看の試験に通れば、彼女らより上に立つことになる。鼻持ちならないと言われるはずだった。

ある晩、夜勤に付いていると、婦長がまわってきて、教科書を読んでいる私に言った。勉強？慌てて教科書を隠すと、いいのよ、べんきょうして、と言ってくれた。昔、私たちも、トイレの暗い電気で教科書を読んでべんきょうしたりした。灯火管制のときだって、試験は待ってくれないから、懐中電灯で照らしながら、本を読んだわ。すると、遠くでドーンドーンって爆弾の破裂する音が聞こえるの、でも不思議と怖くなかった。私は絶対看護婦になれると思っていた。いや、絶対にならなくっちゃならなかったの。試験に落ちたりしたら、非国民よ。私たちはお国の費用で、看護婦養成課程に行かせてもらったそのうえに、月五円の俸給まで頂いてたんだから。あなたを紹介してきた前の婦長さんは、その時からの戦友よ。私たちは飯上げの時に、ばっかんを一緒に担いだ仲なのよ。麦稈って木製の桶よ。それを天秤棒で担ぐの。重かった。でも、実家は水呑み百姓だったから、麦とお米のごはんをたべていたけど、ここじゃ白米だけのご飯が食べられた。おいしかったわ。有難かった。あの人も一緒だった。でもね、女学校を出た人もたくさんいたのよ。そんな人は、私たちを見下していた。だから余計に負けたくなかった。二人で一生懸命勉強した。そうやって、私とあの人がいつも、一番か二番だった。いい？勉強する期間って、ほんの二、三年よ。その間に勉強したことで一生食べてゆ

くの。だから、ほかのことには目をつぶって、いま頑張りなさい。そう言って、婦長さんは帰っていった。

看護学校が２年めの終わりのころだった。そのころには、同級生が何人かがいなくなっていた。準看の学校と違って、高看の学校は厳しかった。時々に定期的に行われる実力テストで及第点を取らないと、教員室に呼ばれた。それが二度三度続くと、落第や退学の勧告が言いわたされた。教員室に呼ばれた同級生が、暗い顔をして戻ってくるのを何度か見た。一度など、教員室から帰った同級生が、仲の良い友人に慰められていたが、急に泣き伏して止まらなかった。翌日、彼女は来なかった。

そんな中、私も一度、及第点に届かない点数を取ったことがあった。案の定、私も教員室に呼ばれた。しかし、どうしたぁ、体調でもわるかったか？と言われただけだった。今日の問題の間違えたところは、教科書のここととここに書かれているから、復習しておけ、と教えてくれた。のちに、高看の国家試験で、その部分の問題が出て、私は楽々と回答でき、深く感謝した。間違えたところこそ、強く印象に残っていた。

だが、いなくなった同級生は、成績不振によるものばかりではなかった。三年は長かった。あの子宮がんで亡くなった子のほかにも、親の介護でやめねばならない子、学資の続かなくなった子、そして、結婚することになって、こころざし半ばであきらめた子もいた。私にも、そんな話が舞い込んできた。私がかかりだった男性患者の母親から、息子のこと、どうおもう？と、それとなく訊かれた。はい、もうすぐ退院できるとおもいますよ、先生もそうおっしゃってますし、と答えると、そうじゃないのよ、息子とお付き合いしてみる気はないかって聞いてるのよ、と腕をつかまれながら言われた。そして、息子が退院して、職場復帰したら、一席設けるから来て、いいわね、必ずよ、と強引に言い渡された。そんなことは初めてであったので、どぎまぎして返事もできずにいると、患者のお母さんはもうさっさと向こうへ行ってしまっていた。

まもなくその患者さんは退院した。その時、お母さんが婦長さんや私に頭を下げながら、私のほうを見たときは意味深な顔つきをした。それがなにかは私には分かったが、婦長さんもそれなりの察しがついたらしい。あなた、何か言われたでしょう、含み笑いしながら、婦長さんが言った。はい、と私は正直に答えた。嫁に来ないかっとでもいわれた？ はい。私はそう言いながら、カッと顔に血が上るのを感じた。こんなことを言われるのは、私が看護婦として未熟だからだと思った。真剣に看護にあたっていれば、そんなことは言われるはずがないと思うからだ。そう、よかったわね、と婦長さんが言った。ふいに肩透かしを食ったように思った。あら、どうしてですか、私は、そんな不遜な見方をされるような看護をしていたと思われたのが悔しいです。そんなことないわよ、一生懸命であったからこそ、嫁にと思われてのことだと思うわよ。そういわれて、私は意気消沈した。よかったじゃない。で、どこかで改めて見合いの席にでもでかけてゆくの？ わかりません、退院したのですから。もうそんなことはないのじゃないですか。そう答えて、私はもう忘れた。

だか、お母さんが後日病棟に現れた。退院後の診察の時に、改めてお礼に来たと言っていた。私は病棟患者のカルテを整理しながら、お母さんに頭を下げた。すると、私の手に、すっとメモが差し入れられた。そして、待ってますからとささやかれた。不意を突かれてどぎまぎしているうちに、お母さんは背を向けてナースステイションを出て行ってしまった。思わず立ち上がってお母さんの背中を見送っていると、婦長さんが、どうしたの、なにかいってきた？と聞いてきた。私はの中のメモを広げて婦長さんに見せた。メモには次の日曜の午後の時間と、市内の某有名料亭の名前が書いてあり、お礼がしたいので、ぜひおいでください、ご都合が悪ければ、下記電話番号にお知らせを、と書いてあった。ふーん、さすが年の功ね、うまい言い訳を考えてあるわ、いいじゃない、いってらしゃい、おいしいものをごちそうになって、あとは野となれよ、と言う。そんなあ、と婦長さんの顔を見ると、大丈夫、あの人たちは、白衣のあなたしか見てないの、白衣コンプレックスね、だから、平服に着替えてゆくとびっくりして、あなたかどうかも分からないこともあるのよ、そんなものよ、あとはあなたが冷静にかんがえたらいいわ、こういうことって、よくあることよ、でも、ごちそうが食べられるとおもって行けばいいのよ、そういって、仕事に戻っていった。

思いもよらない席にまねかれ、私は戸惑い、緊張して出かけて行った。見合いの席であることは分かっていたが、始めからどうなるものとも思っていなかったので、一人で出かけた。そうでなければ、誰か後見に付いて行ってもらうのだが、それにふさわしい人に思い当たらなかったことも、一人で出かけた理由であった。それに、相手がどう思っていようと、私に結婚する意志はなかった。そうと決めていて、このような席に出かけてゆくのは不遜と思ったが、断るにしても相手方に会って話さなければ、誠意は伝わらないと思った。しかし、私はたじろいでいた。私には着飾る服もなかった。普段着を少し見映え良くしたほどのものしか持っていなかったからだ。惨めな思いだった。バッグも靴も同じことだ。でもいいんだ、ことわる以外の選択肢はないのだからと、私は胸を張って出かけた。

だが、瀟洒な料亭の門をくぐると、気後れは頂点に達した。一度奥に向かって声をかけたが、返事はなく、もう帰ろうかとさえ思った。今まさに踵を返して帰ろうとしかかっていた時、廊下の奥から人が出てきた。すみません、おまたせいたしまして、****様でいらっしゃいますか、お待ち申しておりました。ささ、どうぞ、おあがりくださいませ、 と綺麗な和服姿の女将と思しき人が案内してくれた。もう引き返せないと覚悟を決めた。

相手方がいるだろう座敷に前で、女将は正座し、声をかけた。****様をご案内してまいりました。はい、おとおししてください。室内から声がすると、女将は障子戸に手をかけ、軽く開いて、持ち替えて大きく開けた。私はそんなときの作法など知らない。私は女将の後で突っ立っていただけだった。どうぞ、と女将に促され、私はそのまま歩いて部屋に入っていった。そうすることは、たぶん相当無作法なことだろうとは思ったが、どうすればいいのか何も知らないのだからなすすべがなかった。私はそれが恥ずかしくて消え入りそうだった。

私はお母さんの手招きで床の間の前に座ったのは、さすがに無作法と座った後ですぐ気づいた。私はあわてて座布団を外し、卓のわきに座りなおして、今日はお招きいただき、ありがとうございます、とあいさつした。そのあと、すぐに結婚とかを考える段階にないことを伝えようと思ったが、私の顔色を見抜いていたお母上様に言葉を引き取られ、かつ穏やかそうに微笑んでいるお父上様に圧倒されて、上座に座ってしまった。対面の席に、息子さんが座っていた。ご両親に比べ、年若いだけに存在感が薄いと思ってしまった。そういえば、入院中、痛くても黙って耐えて、それを訴えなかった。手術の翌朝から、癒着を防ぐために歩けと言われると、点滴台を押して、おなかに手を当ててトイレにも行った。だから、厄介な患者ではなかったし、私が特に世話をしたということもなかった。なのに、なぜ私が見合い相手に選ばれたのか。そう思いながら、息子さんの顔をみると、私は急に恥ずかしさがこみ上げてきて、かっと顔が赤らむのが分かった。病院で看護していたのだから、良く知っているはずなのに、目の前の人は背広を着てネクタイをしている。それだけで別人に見えた。それに場所も違う。向こうも白衣でない私に戸惑っているのだろう、なんだか眩しそうな目で私を見ていた。私は後悔していた。ここへはくるのではなかった、来れば、事情を話してお断りできると思ったのは間違いだったと気付いたのだ。しかし、長引かせるわけにはいかなかった。私は脇に座りなおし、正座で手を突いて頭を下げて謝った。

このような席に私をお招きいただいて、ありがとうございます、しかし、私は今高等看護学校に通っている身です、ですから、結婚なんて考える身ではありません、申し訳ありませんが、この話はなかったことにしてください。

そういって、私は席を立とうとした。

まあまあ、そう急がず、そんなに性急に結論をださないで、あなたのご事情は病棟婦長さんから聞いています、それを分かったうえで、うちの息子はあなたとお見合いしたいと言ってるんです、それをわかってやってくれませんか。

それがお母上様の答えだった。そう言って、お母上は席を立ちかけた私を座りなおさせた。

まず、ここで話をして、それからちょっと付き合ってみて、そのあとで結論を出せばいいのよ。慌てることないわよ。

そういわれ、私はなんだか丸め込まれたような気がした。だが、そのあとは次々と出てくる料理と、お母さんの話の面白さに流され、いつの間にか相当な時間を過ごしてしまった。そして、次の休みの日を聞き出され、息子がアパートの前まで迎えに行きますか

らと約束までさせられてしまっていた。

　断り切れなかったと、病棟婦長さんには報告した。すると、そうでしょうねと婦長さんは笑った。どうも、こうなることは分かっていたらしい。あなたがどうしても嫌なら、言ってね。私の口から、断ってあげるから。そう言ってくれた。私は、次の休みにお相手とデートするとは言わなかった。その時直接断ってもいいと思っていたからだ。そして、どうしても断り切れなかったら、婦長さんに頼もうと思っていた。
　果たして、その日は時間通りに、アパートのドアがノックされた。私は見合いの時の服装で表に出た。アパートの住人たちに男の人と連れ立っているところをみられるのは、少々迷惑だった。私もそうだったが、お相手の服装もお見合いの時と同じだった。そのことに気が付くと、不意におかしくなった。笑ってはいけないと思ったが、ちょっと吹き出しそうになった。えっ！何かおかしかったですか？と訊かれて、私は手を振って否定した。気が高ぶって、少し大げさな反応をしていたらしい。しかし、これで二人とも気が楽になったことは間違いなかった。
　その日、二人は電車に乗って市内に出、街中を歩いて城跡公園にも行った。ともに並んで電車の席に座り、お互いの腕が触れ合うのも意識した。街中の、当時はやり始めたブティックの前で、立ち止まると、不意に手をつかまれて中に連れ込まれた。
　ぼくは、あなたはこんな服が似合うと思うんですけど。
そう言って、マネキンの来ている服を指さされた。
　サイズは分かりません。だから試着してみてください。
そういうと、店員さんに、
　昨日頼んでおいたと思うんですけど、この人に試着をお願いします。
と言っていた。店員はこぼれそうなほどの笑みで私を見、試着室に私を連れて行って、もう用意されていた服を私に着させた。もう否応はなかった。私は店員さんのお手伝いでその服を着た。さっとカーテンが引かれ、
　どうでしょう！
とお披露目された。見合い相手の息子さんの目が、ぱっと輝き、一度に表情が和んだ。あっ、私、この人と結婚するかもしれないと、その時、私は思った。

息子さんに、これからのことをどう思っているのか、訊かれた。彼は手に先ほどの洋服の入った洋服箱を持っていた。昔はこうだったのだ。今ならブランド袋に入れて、これはこれで誇らしげにもってかえったのだろうが。

彼にそう尋ねられても、私は今目の前のことで精いっぱいで、先のことまで考える余裕などなくなっていたというのが正直なところだった。だから、先のことなどわかりませんとしか，言いようがなかった。でも正看護婦にはなりたいとおもっています。ですから、この先何年かは、結婚など考えられません。そうだ、結婚すれば、家庭ができ、結婚生活が待っている、そして、子供ができ、出産と育児、それが女の使命かもしれないが、男と同じく女も志をもって学んでもいいのではないかと思っているといった。そんな話など、誰ともしたことがなかった。それが、するすると出てくるのだ。まさに臆面もなく話せた。彼が答えた。それを、私にも応援させてくれませんか。わがままは言いません、一日のうちで、ほんの一瞬だけでいいです、私のほうにむいてくれれば、私はあなたを応援し続けられます。

男はね、最初はそんなうまいことをいうのよ。病棟婦長が言った。たとえ、息子さんがそれでいいと言ってても、結婚してしまえば周りがそれを許さないのよ。結婚って現実生活なの。朝起きて、すると女は朝ご飯を作らなくてはいけないし、旦那様がご出勤の際には見送らなければならないし、家事の全部が女の肩にのしかかってきて、それをするのは当然のことになり、自分のことなど何もできなくなるの。だから、私は結婚できなかった。

そうだ、婦長さんは結婚していなかった。

どうする、断ってあげようか？

そういわれて、戸惑っている自分がいるのに気がつき、それがどうしてか、分からなかった。

　そういわれて、戸惑っている自分がいるのに気がつき、それがどうしてか、分からなかった 。次のデートの日、私は硬い気持ちで彼の後を付いて行ってた。彼は県内の行楽地を歩きながら、楽しそうに一人で話していた。彼の話を聞くのは、それはそれで楽しかったのだが、どこか他所の架空の話のようにも聞こえていた。だから、どこをどう歩いたのか、分からなかった。
　今日は、楽しくなかったですか。
そういわれて、私は言おうと決意していたことを言った。
　すいません、明夫さんが私を選んでくれたことは、感謝しています。でも、たぶん、私と結婚したら、後悔するとおもいます。ですから、もうお付き合いは終わりにしたほうがいいと思います。
すると、彼は突然、アハハと笑い出した そんなことを考えていたのですか。たぶん、そんなことは何度も言われると思ってました。まあ、もう少しお付き合いしましょう。そうしましょ。

彼はめげなかった。しかし、高看養成所はもうすぐ卒業を迎えようとしていて、ということは高看の国家試験が間近になってきているということだった。私は焦っていた。失敗はできない。寸刻を惜しんで勉強したかった。私は、もう次のお約束はできないと彼に告げた。いいですよ、勉強に打ち込んでくださいと、彼はあっさり引き下がった。これで終わりにできると私は思った。

それからしばらく彼から連絡はなく、私は勉強に打ち込むことができた。それが良いことか、悲しいことかと、思わぬ感情の交錯があったが、それも心の片隅の波紋だった。いや、その程度のことと思い込もうと努めた。もう後戻りのできる年齢ではないと自覚してもがいた。一つは結婚のこと，もう一つは高看受験。その両方が平行なレールであって、両立はできないことと分かっていたからだ。もう余分なことは考えまいと、巻き起こる波紋を振り払った。

当日は、看護学校から集団で受験に赴いた。これがありがたかった。朝、看護学校の校庭に集合し、受験票の確認と、会場での必要な物の確認をしたので、安心して会場に行くことができた。だが、来なかったものが二名いた。そんな形での脱落者がいようとは思わなかったので、皆に少し動揺が走った。しかし、それに付いての先生たちの対応は、私たちを励ました。

もう、何も考えないで！自分のしてきたことを信じなさい。こういっちゃ、実も蓋もないけど、今ここでのあなたたちの実力が、すでに合否を決めてるの。それを表に出すだけ。運なんてない！受かる人は受かるし、滑る人は滑っているの。試験ってそんなもんよ。わかった？だけど、私たちはあなたたちが全員合格できるように指導してきた。慌てないで。それだけ考えて試験を受けるように。大丈夫だからね。先生はそう言って皆に深呼吸させ、受験会場に出発した。試験科目は、人体の構造と機能、疾病の成り立ちと回復の促進、健康支援と社会保障制度、基礎看護学、成人看護学、老年看護学、小児看護学、母性看護学、精神看護学、在宅看護論及び看護の統合と実践と、並べると大変なことになる。

しかし、試験は一日で終わる。午前の部、午後の部の二部制で、問題数は 午前中は必修問題30問、 一般問題120問 で、午後が 一般問題30問、状況設定問題60問となっており、それぞれが四者択一であったり、五者択一、五者択二といったひっかけとも言えそうな意地の悪い設定もしてあった。必修問題は八十パーセント正解が絶対条件で、これは間違えられない。そのほかについては、合格基準は60%代後半から70%代前半とされ、その都度設定されるようだった。こうした試験であったから、受験者の九十パーセント近くが合格する試験でもあった。しかし、受験生にとっては、一日で二百四十問の問題を回答しなければならないのは、苛酷だった。おわってみると、一度に疲れが噴き出し、貧血を起こしそうだった。

しかし、このような緊張が一日で終わるのはむしろ有り難かった。でなければ、受験に来なかった二人のように、私も翌日は受験を拒否して部屋を出られないかもしれなかった。このような思いは他の人も同じだったようで、帰りのバスは誰も口をきこうとしなかった。そんな時、突然降車ボタンが鳴る。一緒に行ってたものは学校まで帰るので、何も予期してないところで鳴る降車ボタンは、皆を驚かせるに十分だった。その時、ああ、私、落ちたわと思う人もいた。

だが、結局、同期のものは皆合格した。入学時二十二名、最終学年までに四名脱落、そして、受験の時に二名受験拒否。計十六名。受験したものは皆合格だった。本当につらい三年間だった。とはいえ、私は仕事も安定しており、勉強時間も十分とはいかなかったが、確保されていた。同期のものの中には、開業医に努める看護婦だったものもいた。受験拒否した二人もそうだった。彼らは翌年受験したらしい。しかし、合格したとは聞かなかった。

とにかく、資格は取れた。すると、病院内での私に対する扱いが変わった。看護学校へ通っていた間は準看でしかなく、試験に合格すると高看。だからといって中身が変わったわけではないのにより責任ある立場に立たされ、支持を出さねばならなくなった。婦長も私に代理を頼むようになった。

通学が無くなったので、夜勤も通常に戻され、日数も増えた。そして、この病院は夜勤の場合、緊急手術もあるので、高看が必ず一名はどこか病棟にいて手術助手を務められるように配置していた。私もその中に加えられ、手術場に立つこともあった。私も、いずれそんなこともあるかと思っていたので、器械出しの時から、医師が次に何を要求してくるかを必死に見ていた。それには手術の術式と手順をよく理解していなければならない。しかし、ここに困ったことがあった。手術道具を解説した本がないのだ。私は医療機械のプロパーに、道具のカタログをもらえるように頼んだが、写真カタログは高価なものなので、一介の看護婦ごときにくれるはずもなかった。そこで、私はその時々の道具をノートに描き、名前と用途を書き留めた。鑷子、開創器、持針器と書き込み、どんな時に使われたかを書いておいた。

そんなことが必要だと強く感じたのは、特に救急搬送されてきた患者が緊急手術となった場合、器械を慌てて出して消毒し、手術場を整えて手術できるようにするには二〜三時間かかるからだ。緊急手術はそんなに待っていられない。外来でできる手術ならまだしも、開腹を伴う手術は時間との勝負ということもある。だからといって、前もって用意をして待っている性質のものでもない。それゆえ、手術場を取り仕切る婦長の力量が問われる。主治医から手術と支持が出たとたん、配下の看護婦にてきぱきと支持を出す。麻酔医の手配と、手術場の準備、必要な器械を揃え、消毒するものは順に消毒する。手術を支持した主治医が手術前の検査を行っている間にこうした準備をし、患者への医師の説明と同意を得た時点で、すぐさま患者を手術場に搬送できるようにする。こうできれば最適だが、医師をいらつかせ、患者の容体の急変を見ることもある。そんなことを経験した私は、懸命に器械のことを覚えた。こういっては何だが、医師だって器械の名称は正式ではなく、自己流で覚えていることも多々ある。さすがに手術場婦長はそんな医師の癖を全部心得ていた。わたしもそれをメモし、婦長の指示で即座に動いた。新参者ではあったが、次第に的確に動けるようになり、現場で他の看護婦が私に指示を聞くようなことが増えていった。そして、二〜三年経つと、婦長からの指示が私に降りてくるようになった。私は病棟看護婦から手術場看護婦に配置換えになった。

それとは別に、高看試験に合格して間もなく、病棟婦長から見合い相手の人とはどうするのかと聞かれた。私は黙っているしかなかった。すると、メモが渡された。合格おめでとう、**日、**時、家族一同で待っています。是非おいでください。そう書いてあった。ごめん、色々と聞いていたのよ、あなた、出かけるしかないわね、いってご返事しなさい。どうご返事するかはあなた次第。でも良いご縁だと、私は思うなあ。こんな人がいたら、私も行かず後家にならなくて済んだと思うわ。そういう婦長も実は行かず後家ではなく、互いに自立して暮らしながら、心寄せ合う人がいることを私は知っていた。結婚という形をとれないから、結婚してないだけ。そんな形もあるのかと思っていた。

私を引き立ててくれた婦長さんたちは、それぞれ幸福な、といえば語弊があるが、普通の結婚はできてなかった。私を今の病院に紹介し、看護学校へも通えるようにしてくれた婦長さんのもとへお礼に出かけた。この人はもう現役を引いて、家で一人暮らしをしていた。久しぶりに訪ねてみると、白衣姿とは違って、普通の服を着て普通の暮らしをしていた。それが逆にまぶしく見えた。古い木造の住宅だが、小さな庭もあり、草も生えていなかった。ほら見て。ここに胡瓜を植えてみたの。するとね、明日収穫しようと思っていると、たった一日なのに、こんなお化け胡瓜になっちゃうの。そういってコロコロ笑った。なにか、肩の荷が降りたようで、ほっとして生活しているのがよくわかった。婦長さん、うらやましいです。そういうと、なにいってるの、こういう生活は、あなたにはまだ三十年先よ。その間に、時代も変わったのだから、私たちとは違った新しい生き方ができるはずよと言われた。子供を産みなさい。それが大事。これほど大事なことはないのよ。私やあの人にできなかったことをやって見せて。時代は変わったのだろうか。私には比べようがないので分からない。でも、できそうだとは分かる。しかし、妊娠したからと、今の病院でも退職してゆく看護婦も多い。でも、と思った。婦長さんの口から、子供を産みなさいといわれて初めて、 ああ、子供がほしいと思った。この言葉で、私は結婚を決意した。翌日、私は今の主人とご両親に、よろしくお願いいたしますと、頭を下げた。

だが、それで済むはずがないと分かっていた。向こうの両親が、私の親たちに挨拶に行くと言う。それが必要だとは、私にも分かっていた。しかし、この私さえ、何年も会っていない。あの飲んだくれの父と、その周りをおろおろすることしか出来ない母と、弟と妹。それでも弟は一度、私に会いに来た。家を出て、住み込みの大工修行のなかで、私に小箱を作って持ってきてくれた。私はそれに針と糸のお裁縫道具をいれて、今も大事に持っている。無口な弟が、はにかむように笑って、手渡してくれた。父はだいぶ弱っているようだと言っていた。 派手好きな妹は、今は高校を卒業して銀行の事務で仕事に就いているらしい。弟はそのことに余り触れたくなさそうだった。恥知らずなことをしてと吐き捨てるように独り言を言っていた。そんな家に、向こうの両親を連れて行っていいものかと、 私は迷った。いいよ、まず俺が挨拶にいってくる、それからにしたらと、彼が言ってくれた。しかし、それではただの先送りだと私は思った。私は、もうこの席でその話をしておかなければと思った。そして、彼の両親に親のことを包み隠さず話した。顔が曇るのが分かった。でもね、とお母さんのがお父さんを見ながら、こちらはお嫁さんに貰うほうだから、ご実家のことは・・・、ね、と取り繕う。こんな時代、みんな貧しいんだ、どこにでもある話じゃないか、家だって、親父と僕が働いているから、まともに食っていけるけど、どちらかが欠けたらどうなるものか、わかりゃしないと、彼が庇ってくれた。戦後十数年、まだ誰しもが貧しかった。

その日、後から私を送っていく時、彼が言った。実はもうお母さんにだけは会っていると。お母さんはとても喜んでくれた。でも、お父さんは実際、体調を崩して、仕事も行ったり休んだりを繰り返しで、心配しているとのことだった。私はこれをきっかけに、一度かえってみることにした。

休みの日、私は前もって実家近くの商店街で名物饅頭を買った。その時代は、何とか饅頭と言うのがおみあげになったのだ。迷いはした。親の家に帰るのに、おみあげがいるのかどうか、分からなかった。さらに饅頭がふさわしいかどうかも分からなかった。そして、そんな振る舞いが、親にどんな印象を与えるかも考えた。だが、それも含めて、他人行儀であったほうがいいかもしれないと考えたのだ。私は親と自分から縁を切ってきた。 家の戸を開けると、母が出てきた。急におろおろして、手を取っておかえりと言う。その少し老けた母の髪は、白さを増していた。部屋に上がり、手に抱えていたお土産を渡す。なんだか、ぎこちない会話が細々と続く。父はまだ仕事から帰ってないと言う。お父さんはもう怒ってないからね、大丈夫だからねと念を押す。そんな母の、年取った顔を見たくなかった。今度、結婚するのかいと母が訊いてきた。彼が訪ねてきていたことを思い出した。一応、結婚の申し込みをお受けするのはしたと答えた。今どきの人は、親の許しがなくとも結婚できるからね、いいんじゃない？と母が言う。それに、お前が結婚するからと言って、嫁入り道具の一つも持たせてやる甲斐性はないからね、と淋しそうに言う。そんな母も、父とは三々九度の盃も交わしたわけではなかったそうだ。昔の庶民はそんなものだった。あの人はいいね、いい人だ、きっとお前を大事にしてくれる、お母さんはそう思ってるよ。私は父を待たず、母のその言葉を聞いて帰った。父は毎日飲んだくれて帰ってくる。それは今もそうだったからだ。

そのあと、二か月程して、私と彼の両親が、近くの料亭で顔を合わせた。彼の両親が、私の親たちを招待しての顔合わせと言う形を取ってくれた。家では飲んだくれて威張り散らしている父が、小さく背をかがめて、かしこまっていた。ああ、この人もそのあたりにいる普通の男と変わりはないんだ、と私は思った。家の中ではどんなに横暴に怒鳴り散らしていられても、外ではただの小さな男でしかなかった。そんな父が、娘をよろしくお願いしますと、手をついて挨拶してくれた。ふいに熱いものがこみあげてきて仕方なかった。

結婚式はそう急ぐこともないという理由から、両親の顔合わせの後半年して執り行なうこととなった。その間に二人はしなければならないことがたくさんあった。しかし、そのほとんどは、彼のお母さんと私の母との間で決められていった。ただ、新居は自分たちで探しなさいと言われた。私はそのことに驚いた。当然彼の家に嫁ぐものと思っていたからだ。狭いのよ、若夫婦と親二人が暮らすには、と彼の母が言う。長屋暮らししか知らない私から見たら、彼の家はとんでもない広さに見えた。それでも彼の母は、狭くなると言うのだ。ところが、ちょっと不安に駆られる私をよそに、彼はのんきに不動産屋周りをし始めた。それも賃貸ではなく、一軒家を捜す。だめです、若いうちからそんな贅沢を身に付けたら、後々困ったことになります。いいんだ、家なら僕が買うから。そんな押し問答が続いた。思えば一番楽しい時だったかもしれない。

家のことは、結局お義父さんの知り合いの不動産屋さんに頼み、適当な中古物件を紹介してもらった。というより、それもお義父さんたちの思惑通りに事が運んだということだったかもしれない。そこは彼の実家から歩いて十分ほどのところで、いわば理想的な距離と言えた。しかし、そんなことのほかに、私は仕事のこともあったし、結婚式のこと、その他、様々のことに翻弄されていった。そして、婚約期間など、あっという間に過ぎ去った。どこか、新婚旅行に行こうと彼が言った。九州、宮崎の青島とフェニックス公園、ついで南紀白浜温泉が新婚旅行のメッカとなっていた時代だった。だが、新婚旅行は私の仕事が許さなかった。私をここまでにしてくれた病棟婦長から、あなた、次の手術場婦長になるのよ、と囁かれていた。それは、今の手術場婦長が私を後継にと考えていると言う話だった。私はそんなものになりたくはなかった。医者さえ、手術場婦長には気を使った話し方をした。総婦長の次に重要なポストと、病院内でも認識されていた。総婦長室は、一階病棟の奥にあり、医師もノックして入った。手術場婦長も、手術場のある階の一角に部屋を与えられていた。そして、それぞれに小会議が出来るテーブルと折りたたみ椅子があった。総婦長室では、病棟婦長と救急婦長、そして手術場婦長が定期的にあつまり、会議を持った。そんな中でも、手術場婦長は総婦長の次席として扱われた。あと三年したら、今の手術場婦長も定年なの、その前に総婦長が引退すれば、次の総婦長は今の手術場婦長が昇格するわ、でも、どっちが先か、分からないわね。そういって病棟婦長は笑った。いずれにしても、手術場婦長なんて大変なことになると、私は思って憂鬱になった。遊んでなんかいられないわよ、今からがだいじなの、手術場婦長に見込まれたのだから、それにこたえなくっちゃね。婦長はそういって、私の肩を叩いた。私はもう三十歳を越していた。看護学生となってからなら、看護婦歴

二十年になろうとしていた。

病棟婦長を経験しないまま、手術場婦長になるなんて異例なことだった。台一、私はこの病院では新参者でしかなく、また、病棟婦長にもなったことがなかった。だから、まさかそんなことなどないだろうと高を括っていた。しかし、なにいってるの、新参者でも、もう六年近くでしょ、この病院に生え抜きの看護婦なんて何人いると思ってるの、みんなあちこちから寄ってきた看護婦ばっかりよ、なかには十年つとめているひともいるわ、でも、出入りが激しいのが看護婦って商売よ、みんな自分の腕で食っていけるから、ちょっと気に入らなかったらプイと出て行っちゃう、あなたはそうじゃないでしょ？私はそう思ってる、だから、私も推薦したの、学校の先生もみんなそう、あなたは優秀だって言ってたわよ、そうじゃなかったら、そんなに早く手術器械のことは覚えられない、それと、手術の手順も呑み込みが早くて、例えば､開腹手術中にならその手術中、医師から「ハサミ！」と言われても、、クーパー、長クーパー、直剪、メッツェン、スーパーメッツェンなど様々な種類の中から、適切なハサミを選んで手渡してくれる、そんな器械出しをしてくれる看護婦が術者から全幅の信頼を得られるようになるの、あなた、若い子に言ってたじゃない、次に何を渡したらいいかは、先生の手を見れば分かるのよ、ハサミなら、こんなハサミって先生の手がその恰好をしているのって、だから、手術場婦長が感心していたわ。婦長がそういった。そういわれて期待したわけじゃない、しかし、私にもそんな日が来るかもしれないと半分思い定めた。だから、手術があるときは、自分が器械出しをしない時も、他の看護婦と並んで外回りに付いた。

結婚式では、あの角隠しを巻いた、重くかさばる鬘をかぶせられ、重い衣装を着せられた上に帯を思いっきり強く締められて、体全体がずしんと重くて足が前に出なかった。それでも叔母に手を引かれ、借り物の草履を履いてそろそろと主人の家のご近所さまに挨拶回りをして回った。遠く離れた土地からやってきてくれた叔母が、その日は有難かった。そうでなくとも自分のことで精一杯だったから、その叔母のことに余り気がつかなかったのだが、叔母はかの地で離婚し、母一人で子供を二人養っていた。その叔母が、あなただけは幸せになってと囁いた。それがどういう意味か、そのときはわからなかった。だが、後で思うと、それは叔母自身のことだけでなく、母や妹のことを言っていたのだとわかった。薄幸な母と世間様から後ろ指さされる妹、それを思うと顔から火が出そうになり、涙が流れた。

結婚式の後、しばらくして夫と二人で実家のあいさつに行った。昔と変わらず古びた借家が、一層薄汚れて小さくなったように思えた。行くことは数日前からつたえてあったのだが、外に立っても人の気配が感じられない。それでも一応声を掛け、戸を開けた。開けた玄関先は、履物が飛び散らかり、ほこりまみれだった。そのなかに、赤いハイヒールが脱ぎ捨ててあった。突然弟の怒号が響いた。何を言っているのかはわからない。だが、妹の声は分かった。愛は自由でしょ、私はあの人に愛されているの、私もあの人を愛しているわ。もてあそばれているのが分からないのか。家を出た人が何を偉そうに。そのあと、何か物が倒れるような音がして、お兄ちゃんやめて、もういいからやめて、という母の声が響いた。親父、おやじはどう思ってるんだ、これでいいのか。そのあと、くぐもった声が何か言ってた。あなた、帰りましょ。私は泣きながら夫の袖を引っ張った。夫も黙って頷き、背を返した。それが妹の声を聞いた最後だった。妹は父の最期の時にも帰らなかった。連絡が取れなかったこともあったが、連絡が取れても帰らなかったかもしれなかった。弟は、後継ぎと思うからか、帰りはした。だが、さしてつらそうにもしてなかった。泣いていたのは母だった。あんな父でも、母にとっては大事だったのだろうか。

父を看取ったのは私だった。最後に気弱そうに、お前に注射してもらったら、治るような気がすると言った。父は私の病院の内科病棟に入院し、母に付き添われて最後を迎えた。その時も弟は来なかった。私も肉親の、それも父に注射しているような気がせず、他の患者さんに接しているのと同じだった。だが、最後に駆けつけた時の母の声には涙が一気に流れた。エンジェルケアは、病棟看護婦に頼んだ。

私は、手術場副婦長のときに、子供を産んだ。男の子だった。だが、その妊娠期間中も出産後もひたすら仕事に追われて、何をどう過ごしたかもわからなかった。悪阻もあった。何度か貧血も経験した。しかしそれをどうと言ってられなかった。そんな私を見かねてお姑さんが手助けしてくれた。常日頃でさえ滞りがちな日々の家事も食事のことも引き受けて、その上私の体調まで考えて食事を作ってくれた。実家の母も来てくれたが、入り込む隙間がない体で、実の娘の世話もできずに帰っていった。帰っても母一人で、家に待つ人もいなかった。

予定日の二週間前から産休をもらい、家に休んだ。病棟婦長と先の医院の婦長さん二人が訪ねてきてくれた。子供を持てなかった二人が、まるでお祖母ちゃんになったように喜んでいた。どっちだろうね、男かな女かな、どっちでもいいけど、母子ともに無事生まれてきてくれたらいいね。ごく普通の、ありきたりな会話が、切実な願いのように響いた。さすがに母も、この時は毎日通ってきてくれた。仏頂面した弟も来た。この年で叔父さんか。それが弟の言った一言だった。そして、今度連れてくるよとボソッと言った。誰？結婚相手。母も頷いた。良い子よ、私は喜んでいる。そう言って、人並みの幸せを喜んでいるようだった。結婚式は何時？そう聞いても、弟は首を傾げるだけだった。来年、俺も年季明けだ。そしたら、結婚する。でも、姉さんみたいに結婚式なんか出来やしない。金ないから。そう言って寂しそうだった。

弟の結婚式は、借家の近くの旅館で行われた。その頃はこれが普通で、まだ贅沢な方だった。お金は弟の年季明けの祝い金と、お嫁さんの側の親が出した。こちらに比べて、お嫁さんの側はまだ裕福だったからだろう。負い目が残った。弟夫婦は新婚旅行にも行かず、市内のぼろアパートを新居にした。弟の腕一本の稼ぎで暮らしてゆくことになった。母は頼りない思いであったと思う。妹も出ていき、弟も独立し、母は一人になったということだ。それでも、何かしらの仕事はするようになっていたから、それだけでも安心していられた。私がどんな仕事と訊いても、母は言葉を濁して、多くを言わなかったが、掃除婦さんのようなことをしているようだった。

私は子供を二人生んだ。二度目の出産も最初と同じく、つわりだ臨月だと言ってられない忙しさで過ぎてしまった。婦長さん、あんたもよく頑張るね、と院長からも言われた。倒れないでくれよ、あんたに倒れられると、手術場が回っていかなくなるんだから。そういって、手を振って、院長は行ってしまった。私も、もう後継者を育てておかなけれななならない時期にきたと思った。しかし、年若い看護婦の中に、これはと思う子は見いだせなかった。そのうち出てくるだろうと、思うことにした。

私は、よく大学病院へも見学に出かけさせられた。若手の意欲ある医師と一緒に、新しい術式の手術が行われるのを勉強に行くのだ。しかし、そんな手術を外から見ても、何の参考にもならない。医師の手元が見えないからだ。ある時、私は院長に紹介状を書いてもらい、手術場の中に入って見られるようにした。大学病院の教授は、私をぎろっと睨んだ。それでも私は、手術着をきて髪を包み、マスクをして手術台の斜め横から、執刀医の手元と機械出しの看護婦を見守った。無影灯の光の中で、手術は行われている。前立ちと執刀医のマスクでくぐもった声がきこえる。その横で看護婦が医師の指示で、医師の開いた手に軽く叩きつけるように手術機械を渡す。医師は持ち変えることなく、手術を行う。そこに遅滞はなかった。私はその場で立ち尽くしてしまった。

術後の検討会には、私も出席させてもらった。たかが看護婦の身で、それも他院のものが検討会に出席するなんて、なんとおこがましいとは思ったのだが、本院の手術場看護婦も出席していると聞いたので、どうしても同席し、彼女らがどんな発言をするのか、聞いてみたかったのだ。すると、術後の挨拶が執刀医と担当部長からあった後、一番最初に執刀医から礼を述べられたのが、彼女たちだった。手術中、何かざわついた時があった。××はあるか、と声が飛んだ。すると、はい！ときつい返事が帰ってきて、助手の看護婦が別な機械の台を即座に脇に置き、そこから器械を医師に渡した。彼女らは予め用意してあったのだと、今わかった。いざということもあるので、私もそういったことは心がけてはいるが、今回のようなまったく新しい術式に、何かの折の用意まで整えておけるかというと、とても自信がなかった。

帰り道、同行させていただいた医師の運転する車の中で、私は考え込んでしまった。私のいる地点など、とても及ぶところではないと思った。どうしました、婦長さん？医師が話しかけてきた。私の立っているところが遠く及ばない地点であっても、次の人たちはさらに前へ行ってもらわなければならない、そうおもって、先生、次のこんな機会には、若い人も同行させてください、おねがいします、と頭をさげた。

誰か、当てはあるのかねと訊かれた。当てはあった。しかし、それをこちらから指名するのはどうだろうと思った。そんなことの後、しばらく私は一人で考え続けた。そして、外科部長と院長に相談を持ちかけ、募集という形を取ることにした。そんなことをすれば事は大げさになると、外科部長は慎重に構えたが、院長が次の世代を要請するのも我々の使命だと賛成に回ってくれた。院長も部長も伝手を頼って、研修に協力してくれる大学病院を捜してくれた。そして、そこで新しい術式の手術が行われる場合だけではなく、難手術が予想される時とか、専門医による手術が行われる場合等を含めて、当院とは異なるシチュエーションの手術に若手を立ち会わせてもらえる状況が整えられた。

ところが、一端募集を始めても、応募してくる看護婦が出てこなかった。出る杭は打たれるとでも思っているのだろうかと考えた。内々で心当たりに打診してみても、私は子供がいますしとか、主人が転勤族なものですから、責任ある立場に就くのは、帰ってご迷惑をかけることになりますからと、それなりの答えが返ってくるばかりだった。外科部長が、大々的に募集したからいけなかったんだよと言った。事が公になっちまったから、かえって応募しにくくなったんだというのだ。将来の幹部候補生みたいに思われるのが、ダメなんだよ。事はとん挫した。しかし、私はあきらめなかった。昔、私が引き上げてもらったように、私も誰かを育てなければと思っていた。

このことが沈静化し、誰もが忘れたころ、私は一人の若い人に声をかけた。その子は、前へ前へと出てくる子ではなく、いつも手を動かしている、病室からの呼び出しにもすっと応じて、適切な処置のできる子だった。私はその子に、外科部長の鞄持ちについてきてと声をかけた。病棟婦長には、部長のせいにして断りを入れた。なんか重い道具を持っていくのに、力持ちの若い子がいいというのよ。すると、病棟婦長は、訳知り顔でうなづいた。

その日は、彼女は非番だった。だから、本当は嫌だったかもしれない。しかし、あまり目立たない普段着で、彼女はやってきた。手に、私の指示通り、看護婦の制服を入れた袋を持っていた。彼女は、地元にできた公立高校の看護科を出ていた。もう私たちの時代とは違った、そんな時代になっていたのだ。

病棟婦長からも何か言われたらしく、彼女はなにも聞かないで付いてきた。私も何も言わなかった。朝早く先生とバスに乗り、大学病院前で降りて先生を先頭に病院へ入っていった。私たちに着替えのロッカールームなんてあるはずもなく、会議室のドアを内側から鍵をかけて白衣に着替えた。これは手術前のカンファレンスに出席するためだ。ほかに手術着も用意してある。私たちは前もって私たちを受け入れてくれた外科教授にあいさつに行った。教授はもう診察着に着替えて、シャーカステンのレントゲン写真を見ていた。そして私たちを見ると、おお、早いね、と声をかけてくれた。この人は私たちの病院へも来て、何度か手術をしてたので顔見知りだった。婦長さん、また今度手術に出かけますから、その時はよろしくと、教授のほうから挨拶してくれた。

婦長さん、今日はなにがあるんですか？と助手で連れてきた子に訊かれた。今日は特別な手術があるわけではなかった。トレーニングよ、この病院では医師と看護婦やX線技師などの手術スタッフが新しい術式の手術を行う前に、実際の手術を想定してトレーニングをするの。だから、手術の段取りと、そこで起こるかもしれない事故を考えられる限り全部想定して、それについてどう対処するかを全員で訓練するの。それを聞いて、彼女は別世界のことを聞いたような顔をした。医療の世界では医師がオールマイティであって、他のスタッフはその指示に従ってさえいればいいというのが常識だった。逆に医師に差し出がましい口をきくなんて出来ることではなかった。だが、それを覆して、全員で手術に参加し、医療事故を防ごうというのだ。それは彼女にとっても意識の大転換であったようだ。私はそれを彼女に知らせたかった。そして、それが私の看護婦として医療現場に立つときに目指してきたことだった。そのためには常に学ばなければならない。看護婦として必要なものは、新しい知識も技術も学び続けなければならないと思っていた。私には無理です、たぶん。彼女は消え入りそうな声でそう言った。何言ってるの、命の現場では、医師も看護婦もないの、みなが自分の立場で向かわなければならないの。大丈夫よ、あなたはそうしてきたじゃない。そういったが、彼女は一層固くなった。

たとえトレーニングだからといって、患者さんがいないことをのぞけば、他はすべて実際と同じだった。患者さんの手術室への入室、手術台への移動、麻酔前の患者さん本人による氏名と生年月日の申告による本人確認、カルテを見ての手術部位と術式の確認、レントゲン、CT、MRI画像の確認と手順を踏んで手術前の準備を終える。消毒を終え、各モニターもつけて手術野被覆ドレープをかぶせ、手術が始まる。医師が患者名と病名、術式を告げる。開腹手術なら、前立ちの医師がまずメスをもって切開することが多い。

しかし、今日は研修医の手術トレーニングであったから、そう複雑な術式ではなかった。こういった外科研修医の始めての手術といえば、アッペ、胆石が選ばれるのが常だ。今日は胆石の手術の手順確認だった。トレーニングを受ける研修医は、本当に始めての手術のようで、見るからに緊張していた。しかし、周りはみな熟練者ばかりであったから、胆石手術と聞いて、むしろ気が抜けた感があった。指導医が前立ちをする。研修医が手術室の時計を見上げ、患者名と病名、手術部位、術式を告げる。手術場婦長がカルテをチェックし、間違いないことを確認して、お願いします、と告げる。執刀医がメスと叫ぶ。当然のことだが、面倒な消毒こそしてないものの、手術用具はすべて用意してある。また、医師が新米だけに、機械出しの看護師はベテランが付いている。だから手渡される用具に遺漏はない。メッツェン、と医師が叫ぶ。と、看護師の手が止まった。先生、それは大きすぎるよ。戸惑って機械を渡さない看護師に代わって指導医が言った。ああ、すいません。外回りの看護師が、執刀医の額の汗を拭く。胆石手術だって開腹手術にかわりがない。スーパーメッツェンが手渡された。と、指導医が突然叫んだ。

地震！

執刀医が用具を取り落とした。

電源喪失！

手術室の明かりが消え、本当に闇になった。外回りの看護師が

モニターが落ちました。そう言って、手術室の室内電話に走った。バッテリーライトを持ってきて！すると、あらかじめ用意してあったのか、準備室からスタンドライトと予備電源が持ち込まれた.

病院に用意された補助電源に切り替わるには五分かかる。

先生、手術、続行しますか、温存しますか。

指導医が訊く。

続けます。

そうだね、視野も確保されているし、出血も心配ない、あとは生理食塩水での術野洗浄と創の閉鎖だから続けましょう。

今日は驚かされた。手術事故の想定に地震が出てくるとは思わなかった。医師が帰り道、頭を書きながらそう言った。そうだ、そんなことなんか思いもよらなかった。しかし、そう来るか。医師が空を見上げながら言った。突然そう言われたら、俺だって鋏

を落とすよ。、その通り、ありえないわけではない。とうぜん、そう言ったことも想定しておかなければならないと思った。あの病院ではバッテリーライトも補助電源も、準備室に用意してあるそうだ。ところが、こちらの病院にはそういった備品すらない。私は連れてきた若い子のことなど忘れて、考え込んでしまった。先生、これは院長に提言しましょ。そうだよな、準備ができてませんでしたでは済まないよな。バスの中でも、看護師に、今回の地震という想定は知らされていたんですかと尋ねたことを思い出していた。いいえ、何にも知らされていませんでしたというのが答えだった。でも、地震という想定は以前にもあったんでしょ？と聞くと、いいえ、これも初めてですとの答えだった。それでいて、あの反応と事後処理に私は打ちのめされていた。

日々追われていた。家庭のこと、病院のこと。しかし、考えてみれば、こま鼠のようにからからと水車を回しているだけの毎日だった。子供のことも毎日見てるようで見てなかった。夫のことも同じだ。女が要職にあれば、家庭はおろそかになる。それを母と義母が補ってくれていたが、二人ともいなくなってしまった。母を亡くした父が、昔とは打って変わった様子で私の子供二人を見てくれた。それが不思議でならなかった。しかし、何より孫がかわいいらしい。二人の男の子を小学校から中学卒業まで見守り、やかましいことも言わず、見てくれて終わった。私はその三人ともを、恩返しに看取った。そして気が付くと、私は時代遅れになっていた。髪に混じった白髪と重い膝が体にまとわりついてきた。私はもう後進に後を譲る時期になっていた。しかし、病棟婦長とか総婦長の下の主任婦長にと打診されても、私は自分がそうなって働いているところを想像できなかった。そして、自分でも限界を感じてはいるのに手術場婦長の立場を慮ってか、病院は強引に配置換えしなかった。たぶん持て余し者になっていたのかもしれない。

今年も恒例の、看護生徒の病院見学の日が来た。かつて私も通った看護学校の生徒さんたちが、病院の見学に来る。このあと、三年生も看護実習にやってくる。考えてみると、彼女らは私の娘よりはるかに若くて、顔も幼く、まるで子供子供している。ああっと思ってしまう。昔は私もそうだったのだろうか。これまで、こんなことなど考えたこともなかったのに、今年はついそう思って彼女らを見た。

婦長さん、ご説明願いますか。

引率の看護学校の校長が言う。私は例年通りの説明を一通りする。しかしこの日は、違った言葉が飛び出した。

みなさん、皆さんはご両親がご健在ですか。

そう、よかったですね。でも、そのご両親もいつか病気になり、お亡くなりになる。その時、あなたたちは看護婦としてふるまえますか。娘として泣いてうろたえますか。生徒たちは戸惑って、俯いたり顔を見合せたししている。私はなぜ不意にこんなことをいいだしたのか。

私たちは人間の定めの前には無力です。でも、無力ながらも出来ることはあります。懸命に看護すること。患者さんに寄り添い、一緒に病気と闘い、よりよい生を全うさせてあげること。それが看護婦の使命です。よおく勉強してください。あなたたちの使命は、そこにあります。

何かおこがましいことを言ってしまったと思った。すると、看護学校の校長が拍手し始めた。つられてだろう、生徒さんたちも拍手してくれた。私は頬に血がのぼるのを感じた。頭を下げ、顔を上げると、私の頬に涙が伝わっていた。若い人、これからはあなたたちの時代だ、がんばって！！そう思って、この子たちの顔を一人一人見つめた。

それから何か月かして、私は請われて、看護学校の講師になった。総看護婦次長と言われたが、私は辞表を出して、看護学校に移った。私はかつて私をここまで導いてくれた人たちのことを忘れてなかった。あの人たちが私にしてくれたことを、次の人たちに返すことが私の使命と思った。また私に勉強する日が戻ってきた。

お月様とピアノ

　ショッピングモールから駅に向かう通路の途中に、ピアノが置かれました。そのピアノを置いたのはこの通路の両側に並んだ専門店の一つであるピアノ屋さんでした。でも、そのお店をピアノ屋さんと呼んでいいのでしょうか。そもそも、そのお店はこの専門店街で一番目立つ場所にありながら、一番地味なお店でありました。といいますのも、この通路に専門店街が出来た時、それぞれのお店の場所を恨みっこなしのくじ引きで決めようということになったんです。すると、望んでもいなかったこの場所に、たまたまピアノ屋さんがあたったと、こういうわけです。最初、ピアノ屋さんのおじいさんは頑として断ったのですが、これも決めたことだからと言われて仕方なくここに店を開きました。それが二年経ち、三年になってみると、これはこれで落ち着いてしまい、誰も気に止めなくなりました。いまそのお店に鎮座しているのは、古びたピアノが二台と、何やら見慣れない工具と机と電話、それだけです。店主はもう月もあがったこんな時間に、まだ眼鏡を押し下げて鼻眼鏡にし、ピアノの中を覗き込んでいます。ですから、このちょっと髪の淋しくなった店主のやっているお店は、ピアノ工房と言った方がいいのかもしれません。店主はお客さんの様々な要望に応えて、ピアノの欲しい人にはピアノを、治してほしい人には修理を、調律するのも仕事、何処かへ運んでほしければ、これは一人では出来ないので、他の人も頼んで運んだりしてきたのでした。しかし、こうも子供が少なくなった昨今、ピアノを買ってくれる人も殆どいなくなり、だから本業の調律を依頼してくれる人が少なくなって、さびしく仕事をを続けているのでした。

　通路に置かれたピアノは、ごく普通のアップライトピアノで、色も定番の黒の漆塗りでしたから、ピアノが置かれたその日から早やさほど目立たず、振り返って見たり気付いたりした人は殆どいませんでした。そこで店主は、どなたでもどうぞご自由にお弾きくださいと看板でも立てようかと考えましたが、それではかえって誰も弾かないかもしれないと思い返し、様子を見ることにしました。

　ところが、そのピアノにいち早く気づいたものがありました。それは、通路の明り窓から金色の光りを投げかけるお月さまでした。

　おや、おめずらしい新人さんだこと。

そう独り言のようにお月さまは囁きました。でも、それにはだあれも答えません。お月さまは、他の景色と同様に、その新入りピアノさんも明るく照らして、やがて西に傾いて行きました。

小さな淑女

髪に可愛いおリボンを付けた、まだ小さな女の子が手にレッスンバックを下げて、もう片一方の手をおばあさまに引かれ、この通路を歩いて来ました。いつもよりだいぶおそくなっていましたので、通路を歩く人影は殆どありませんでした。女の子は少しべそをかいていました。

おばあさま、わたし、もうピアノはいや。

おばあさまを見上げて、女の子は言いました。

そう・・・。

と答えたおばあさまの顔は曇っていました。女の子がもういやというのも無理はありません。この子は先日のピアノの発表会で大失敗を演じてしまったのです。それを思うと、おばあさまもこれ以上言えないのでした。

この子が発表会で、なぜ失敗したのかと言うと、実はこの子はまだ幼くて、十分に楽譜が読めなかったからです。それでもこの子は、耳でちゃあんと覚えられました。つまり、この子はここまでのメロディーはこう弾けばいいと、先生の演奏を聴けば覚えられたのです。右手も左手も、両方ともです。この子が楽譜を読めないのは、まだ幼ない

のですから仕方ないのかもしれませんが、反対に、これはこれで特別な才能と言えるのかもしれませんしかし、周りはそんなことと思わず、楽譜が読めるものとおもっていましたから、今回の発表会も、年齢のわりには難曲が課題曲にされました。それでも、時間はかかりましたが、女の子はそれをほぼ完ぺきに弾けるようになりました。

さて発表会当日になって、女の子は自分の順番が近づいてくると、胸がドキドキして、緊張で一杯になりました。名前がアナウンスされ、女の子はステージに上がりました。客席は暗く、ステージだけにライトが当たり、その光の中で女の子の演奏が始まりました。順調な滑り出しでした。おかあさまもおばあさまも、まるで我がことのようにドキドキして聞いておりました。ところが、その曲の、本当に何でもない些細なところで、女の子の指が止まってしまいました。おかあさまもおばあさまも、多分緊張で指が動かなくなったのだと思いました。おかあさまももおばあさまも、そして先生も、楽譜を見て！楽譜を見て！と心の中で叫んだと思います。でも女の子は鍵盤を見つめて、必死に次の音を思い出そうとしておりました。本当はほんの短い間だったのかもしれません。でも、ホール全体にとっては永遠より長い沈黙でした。ポンと、音が鳴りました。そして、曲が流れ始めました。聞いていたすべての人がほっとしたのでした。

曲が終わり、女の子は椅子を立ち、礼をしてステージを降りました。盛大な拍手が鳴り響きました。でも、女の子には聞こえませんでした。そして、先生やママのもとへ泣きそうになりながら帰りました。そうです、女の子の小さな肩には、心が潰れそうなほどの悲しみがのしかかっておりました。それを多分絶望と言うのだと思います。女の子は、初めてその絶望を知ったのでした。女の子はおかあさまに縋り、頬に大粒の涙を流しながら声を殺してないてしまいました。

通路を歩いていると、女の子は発表会の前の晩に見た夢を思い出しました。それはこうです。

黄金の月明かりが砕け散って、海は一面に輝いておりました。暗い空にはお月さま、海面には女の子とピアノ。すると、ピアノがあぶくと共に沈んでいきます。女の子も一緒に海の底へ沈んでいきます。鍵盤蓋が開き、ピアノは曲を奏で始めました。女の子は懸命に泳ぎました。女の子がやっとピアノに追いすがると、音がもっとたくさんのあぶくになって登ってゆき、明るい海面ではじけてお月さままで響きました。すてき！と女の子は思いました。

今、あの夢のように、黄金の月の光りがピアノを照らし出しています。ピアノなんかもう嫌だとダダをこねたことも忘れ、女の子はピアに駆け寄り、椅子に腰掛け、鍵盤蓋をあけました。月明かりの下に黒鍵と白鍵がはっきり見えます。女の子は鍵盤に指を置き、ポジションを取りました。どこかで指揮者のダクトが振り降ろされたようです。女の子は、ママが作ってくれた発表会の衣裳になっておりました。真っ白なフリルの衣裳に、真紅のバラのコサージュ、髪はリボンで括ってもらい、靴までお揃いの真紅でした。シンフォニーの始まりです。海の底の夢のように、音が旋律になって登っていきます。暗い通路でそれを聞いているのはおばあさまだけ。いえいえ、お月さまも耳を澄ませて聞いておりました。

おばあさま、私、ずうっとピアノを弾いていたい。

小さい淑女はおばあさまにそう言いました。

おじさんのレコード

あの小さな淑女がこのピアノを弾いたのを、誰かが見ていたわけではありません。しかし、それがきっかけのようになって、時々誰かがピアノを弾くようになりました。そうと気付いた専門店街の有志たちは、ピアノの前にベンチを置いたり観葉植物を置いて、いつでも人が座って休んで憩うことができるように準備しました。こうしてピアノの広場が出来ました。

その日は夕方から雨でした。そして夜も更けて人通りがまばらになったころ、叔父さんが眼鏡に滴をしたたらせて、急ぎ足で通路を歩いてきました。手に薄くて四角な包みを大事そうに持っています。その人はピアノの広場を見ると足を止め、ベンチに腰掛けました。彼は顔と眼鏡をぬぐいたかったのでした。外はそれほど冷たい雨でした。彼は顔と髪を拭き、ほっとして、脇に置いていた包みを取り上げて、中身を取り出して眺め入りました。それは角の擦れた一枚の中古レコードでした。彼はそのレコードを、まるで宝物を見るようにまじまじと見直しました。彼はそれを何年も捜して、やっと手に入れたのでした。

CDなんかとちがって、レコードジャケットはそれだけでアートだと彼は思っていました。いま取り出したレコードジャケットには、金髪の美しい女性がプリントされています。彼はそれにじっと見入っていました。すると、彼はくすっと笑う声と視線を感じました。広場の向こうのベンチにご婦人が休んでおりました。

いやあ、すみません、おかしかったですか。家に帰るまで待てなくて、つい子供みたいな真似をしてしまいました。

そう言って、レコードをご婦人に見せ、

あまり派手に人気のあった歌手じゃありませんが、私はこれをずうっと捜していたんです。

と話しかけました。するとご婦人から、

　綺麗な人ですね。

と答が返ってきました。

そうです。私はこの人に三度も憧れました。それも、その憧れた人が同じ人だったとは知らずにです。

と彼は語り出しました。彼は何故このご婦人にこうも気安く話せたのでしょう。彼はそんなことも意識せず、話を続けました。

わたしが学生だった頃、昔の映画を二本立て、三本立てで安くみられる二番館、三番館が出てきました。安いといっても私のような貧乏学生には、一回の入館料が一日の食費より高かいのですから、めったに観には行けませんでした。ところがその日は、悪友がどうしても付き合えと言い張って無理やり連れて行かれました。映画は三本立てで入れ替えなしの、しかも土曜の夜のオールナイトでした。悪友のお目当てはソフィア・ローレンの「島の女」でした。もっとも、今ではこの映画は、原題の「いるかに乗った少年」の方で知られていますが。

この映画はソフィア・ローレンのデビュー作で、友人はそのソフィア・ローレンの野性的な容姿に憧れてたようです。ところが、田舎者の私はそもそもソフィア・ローレンと言う女優さんさえ、あまりよくしりません。ですから、映画のオープニングに流れたテーマ曲も、最初はあまりまともに聞いていなかったのです。ところが歌声が流れ始めた途端、ふいに魅せられるように引き込まれました。田舎者に外国の女性歌手の事など、知るはずがありません。しかし、何にも知らない私の心が鷲掴みにされたました。なんというか、気品に満ちて、優雅で、大人の女性、貴婦人の歌声でした。私はその映画館で、島の女をもう一度耳をそばだてて聞きました。

あの当時のことですから、その映画のテーマ曲を歌っているのが誰かなんて、調べようもありませんでした。そしてそのうち時間がたって、そのことは次第に忘れてしまいました。ところが或る時、本屋の店先に置かれたスイング・ジャーナルの表紙に載っている、凄い美人の女性歌手に気が付きました。私は思わずそれを手に取って、まじまじと見入りました。そして表紙の人という記事を探して読んでみると、その人はジュリー・ロンドンと言う名前のジャズシンガーで、余りの美貌から歌手としてだけでなく、女優として映画にも出演しているとありました。本当に美しいと思いました。しかし、その人のレコードを買う余裕もなくて、私に出来たことは頭の中に表紙の写真を仕舞い込むことだけでした。

以来私はジャズ好きになり、FMラジオでジャズを聞いたり、友人のところでレコードを聞かせてもらったり、雑誌を読みあさったりするようになりました。そして、いつの間にやら、いっぱしのジャズ通になったつもりになって、隣町に出来たジャズ喫茶に友人と出かけてみようということになり、その町から大学に通っている友人に連れて行ってもらいました。そりゃあもう、一人でそんなところに行く勇気なんて、私にはありません。友人と一緒に、恐る恐る店のドアを開けて入っていくと、やはりそこは見たこともない雰囲気で、薄暗くて、足元も危なっかしくて、帰ろうか、来なけりゃよかったなんて気持ちが交互しました。で、なんとか席に着いたのですが、注文を聞きに来たボーイさんと友人が何やら親しげに話をはじめたのを訊くと、ボーイさんは友人の高校の時の同級生で、ここでアルバイトしてると解りました。それで私は一度に気が楽になったんですが、

何かおかけしましょうか。

と訊かれると、誰それのこれこれをと、すらすら言えるほどの知識はなく、

　女性ボーカルを何か・・・。

としか言えませんでした。

先にリクエストされていた何曲かが流れた後、レコードが架け替えられたようで、それが私のリクエストだとは知らずにコーヒーを飲んでいますと、ピアノが曲を奏で始め、女性の声が歌い始めました。ミスティという曲でした。私はその歌声にはっとしました

。あの「いるかに乗った少年」の曲を歌っていた声とわかったからです。それで友人に、これ、誰が歌ってるのと訊くと、友人は黙ってカウンターの方を指さします。そこに飾られていたレコードジャケットがこれだったんです。そして、その歌手がスイング・ジャーナルの表紙を飾っていたのと同一人物だってことも、気が付きました。それでやっと私は、映画の時に心臓を掴まれるような思いをした歌声と、雑誌の表紙で魅入られた歌手が同じ人だと解ったんです。私はこうして三度、同じ人に憧れました。

　とは言っても、もう大学を出て就職し、結婚して子育てをしてと、ごく普通の人生を送っている間はそんなことは忘れてしまっていましたが、こうして子供も独立し、妻にも先立たれて定年になってみると、突然そんなことを思い出しましてね、このレコードを探し回り、やっと今日、手に入れたんです。それでつい、子供のような振舞いをしてしまいました。早く持って帰って聞いてみようとおもっています。どうも、長話をお聞かせして申し訳ありません。有難うございました。

そういって、叔父さんは頭を下げ、濡れた髪をもう一度掻き上げて、足早に去りました。残ったご婦人がふっと立ち上がり、叔父さんを見送りながら言いました。

　そんな話、一度も聞かしてくれませんでしたね。でも、良いわ、何も彼もがなくなっても、そうやって泣かないで遊んでいてくれたら私は安心。レコード、楽しんでね。

　月の光の差し込む所には、そんな異空間が出現しているかもしれません。

少年の秘密

　少年は、本当はギターが少しだけ得意でした。でも、誰とはなく通路のピアノを演奏しているのを見て、あんな風にピアノが弾けたらと思うようになりました。しかし、手近かにピアノはないし、教えてくれる人もいません。ですから、無理とあきらめていました。

それでも少年はこの通路を通るたびに、ああピアノが弾けたらと、そんな思いを繰り返しました。その彼のもとに、電子ピアノが現れました。勤め先の店長が倉庫に電子ピアノを持ってきて放りこんだのです。

娘が出て行ってしまったら、ピアノが邪魔でね。

と言います。娘さんは出て行きました。親の賛成しない結婚でした。社長はさみしそうでした。ですからピアノも見たくなかったのかもしれません。本物のピアノなんか高くて買えないので、それでも娘さんの為と無理して買った電子ピアノでした。それを買って来た時の、弾けるように笑って喜んだ娘さんの顔を、どうしても思い出します。

いいんだ！

店長はそう一人言って、電子ピアノを倉庫に仕舞いこみました。

　少年は店長に、そのピアノで練習してもいいかと恐る恐る訊いてみました。すると、いいよ、と一言で許してくれました。

もういいんだ！

その時も店長は、心の中でそう繰り返しました。

　倉庫は、行き倒れた少年が、結局この会社に雇われることになるまで寝泊まりしていた所でしたので、少年にはなじみ深いところでした。休み時間、少年は、今までもここで一人、ギターの練習もしていました。しかし、事がピアノです。もちろん教えてくれる人はいませんから、困り果てました。自己流だっていいじゃないかと少年は思いました。彼には弾いてみたい曲がありました。ジョン・レノンのイマジンでした。ギター

ではこの曲をよく弾いていましたから、ピアノも独学で大丈夫とおもってたのですが、ことはピアノです。そう上手くはいきません。指をどこに置いて、どう動かせば弾けるのか、まったくわかりませんでした。一本指のジャズピアニストもいるんだ、できるさ、と彼は頑張りました。そんな彼を応援してくれたのは、実はこのピアノの持ち主である社長の娘さんでした。彼女は社長のいない時を見計らって会社にやって来て、社長の様子を聞いたりしたのでした。彼はその時、ピアノを教えてくださいと頼みました。いいわよ、そういって、娘さんは倉庫のピアノで弾き方を教えることになりました。その娘さんも、最初倉庫のピアノを見た時は、そっとピアノを撫でて涙ぐんでおりました。

　娘さんは、彼に打鍵の仕方から教えました。そして、運指から、ちょっと難しい黒鍵の弾き方まで進みました。おかげで、たどたどしくはありますが、彼は次第に一人でも練習できるまでになりました。

　なんでイマジンが弾きたいの？

そう訊かれて、彼は、ある人がこの曲を教えてくれたからと答えました。実は、そのある人とは養護施設の児童指導員でした。少年は小学生の低学年からそこで育ちました。しかし、養護施設では高校受験に失敗すると、義務教育は終わったからと、退所しなければならない規則でした。それゆえ指導員は、彼に懸命に勉強を教えてくれました。その指導員がイマジンをよく歌っていたのです。ですから、少年にとっては一番懐かしく、また幸せな思いを思い出せる曲でした。

　イマジンって、反戦の曲だったよね。

と娘さんが言いました。

　ハンセン？

少年にはよく分かりませんでした。少年にとって、この曲は人々が幸せに暮らしていると想像してごらんと歌っていると思っていました。少年自身、施設の中でいつも心安らかに暮らすことを夢見ていました。ですから彼は、

I`m a dreamer

でした。

　仕事の合間にピアノを練習するようになって三カ月が経ちました。彼は漸く弾けるようになりました。彼はいつもより遅い時間にピアノの広場に行きました。そして人影がないのを確かめて鍵盤蓋を開け、練習の通り弾いてみました。アーコスティックピアノの鍵盤は電子ピアノに比べて格段に重く、決していつも通りには弾けませんでした。でも、引っかかりながらもなんとか弾き終えると、後ろのベンチから拍手が起こりました。一人のご婦人でした。少年は恥ずかしくて居たたまれず、席を立って逃げ出しました。

　有難う、また聞かせてね。

そう、ご婦人は少年に声を掛けました。

ところが、少年を見ていたのは、このご婦人だけではありませんでした。その影は、少年の後を気付かれないように付いて行き、彼のアパートを確かめると、帰っていきました。

　それから数日経って、少年は社長の娘さんにピアノの広場に連れて行かれました。偶然、先日のご婦人もベンチにおりました。

　こんにちは、また、この前の曲、聞かしてくれるの？

微笑みながら、ご婦人が言いました。少年は娘さんに促され、ピアノの前に座ってイマジンを弾き出しました。小さな子供を連れたお母さんがベンチに座り、その横にご主人も座りました。年配の男の人も立ったまま聞いています。社長さんまで来ていました。少年は夢中で、そんな事には気が付きませんでした。だから、社長さんの横に二つの影が寄り添っているのも知りませんでした。

　少年はイマジンを何とか弾き終えました。すると、ご婦人が拍手しながら、

　何か他の曲も聞かせて。

と言いました。実は、少年は違った曲も練習していました。これもジョン・レノンのハ

ッピークリスマスでした。皆で飾ったクリスマスツリーとちっぽけなケーキ、少年の一番楽しかった、施設でのクリスマスでした。

　少年が曲を弾き終えると、影が動きました。一人は地元の警察官、もう一人は少年を追って来た警察官でした。そしてその警察官は、少年を母親の虐待から保護してくれた人でもありました。少年はその警察官を認め、社長さんと娘さんがここへ連れて来てくれた意味も分かりました。少年は聴衆に頭を下げ、自分を見つめている警察官のもとへ近づきました。警察官は少年に頷きながら寄り添い、社長さんたちに無言で挨拶をして少年を連れて行きました。

後日、社長さん宅に施設の指導員が訪ねて来て、少年がご迷惑をかけたと謝りました。

　いやあ、真面目によく働く、素直で良い子でしたよ。

そういうと、指導員は急に涙ぐみ、

良い子なんです。悪い事なんかしたくなかったはずなんです。

と、話し始めました。

　少年の母親は、夫の暴力から少年と共に逃げたのでした。そして最初の頃は懸命に働いて、少年と暮らしていたのでしたが、心の傷からか、いつの間にかお酒とパチンコにのめり込み、生活保護をもらうようになって、そこから支給されるお金の殆どをパチンコとお酒につぎ込むようになりました。そして、食べるものも無くなると、母親は少年に、スーパーで万引きをやらせるようになりました。少年はそれで何度か捕まったりしましたが、母親が何とか言いのがれ、警察沙汰には成らずに済んできました。

　そんな荒れた生活をしていた母でしたが、少年に優しくなることもありました。それはパチンコに勝って、小金を手に入れた時でした。そんな時、母は少年をスーパーに連れて行き、上機嫌で何か好きなものを買ってやるといいました。少年の好きなものは、たまに母が買ってくれるジャムパンでした。彼はそれしか知りませんでした。しかし少年は、ジャムパンを買ってくれることより悪いことをしなくて済むことの方がうれしか

ったのでした。ですから、母親を見上げながら、

僕はいいから、母ちゃんの好きなお酒を買いなよ。

と答えたのでした。

　しかし、そんなことが続くはずがありません。親子は警察に捕まり、母親は実刑、少年は保護されて養護施設にいくことになりました。父親は少年を引き取りませんでした。少年はもう一人でした。そして、月日が経っても、誰も養護施設で暮らす少年に連絡してくる人はいませんでした。

　少年の学力は、小学校低学年まで碌に通学していなかったことが祟って、ずうっと低迷したままでした。それでも少年が中学三年生になると、少年の係の指導員は懸命に勉強を見てやりました。彼は少年をこのまま退所させるには忍びなかったのです。少年もそんな現実は分かっていました。ですから、勉強にも懸命に付いてゆき、受験校も近郊の高校では偏差値の一番低い高校にしました。合格発表の日、彼は一人で見に行きました。彼の受験番号はありませんでした。彼は、合格して喜ぶ人たちと同じように、入学案内の入った封筒をもらって帰りました。これが本当になることが、彼の願いであったからでした。

　満十五才なった年の三月末で、彼は退所になりました。そして施設の世話で、住み込みの仕事に就きました。彼は黙って仕事を覚え、日々を過ごすようになりました。そんな少年の不幸は、とうに出所していた母が彼の居場所を知ったことでした。そして、母親は半ば強引に少年の勤め先に申し入れ、彼と一緒に暮らすようにしました。

　母親と少年は、クーラーもない安アパートで暮らし始めました。その当初こそ、母親も働きに行っていましたが、以前の通り、何時の間か昼間から飲んだくれて過ごすようになりました。そんな或る日、母が少年に、お酒がないんだよとしなだれかかっていったそうです。少年は体の奥底から怒りがこみあげてきて、母を強く突き飛ばしました。母は壁に頭をぶつけて、動かなくなりました。少年は部屋を飛び出ていきました。母を殺したかもしれないと思ったのです。逃げなきゃ、そうおもった一心で、少年は勤め先の事務所へ行き、社長がお給料を出してくるロッカーをこじ開け、そこにあったお金を全部握って街を出ました。そして、その逃亡先で急に発熱し、行倒れてしまった所を、

こちらの社長さんに拾われたのだといっておりました。

　彼は、待っていたんです。

指導員は社長と娘さんにそういいました。

　私か、彼を以前保護した児童係の警察官をここで待っていたと、面会に行ったときに言ってました。
指導員は、そう言い残して、帰ったのでした。

　そんなことがあったからでしょうか。悪い噂が立って、パタッとピアノを弾く人が居なくなりました。ピアノの広場のベンチに座って休んでいたご婦人は、ちょっと淋しそうでした。そのご婦人が帰った後、少しやつれた中年の女性が、ベンチに倒れ込むように腰かけました。手には少し大きめのバッグと四角い箱を持っていました。そして彼女がちょっと目をつぶると、向こうの方で若い男が、

　腹減った、飯食いに行こうぜ。

と大きな声でいうのがきこえました。その後ろを若いお嬢さんが小走りでついて来ておりました。ところが、その後ろからついてきたお嬢さんがピアノ広場のピアノに気が付きました。そして、

　ちょっと待って。

と、彼女の先をモンシロチョウのようにひらひらと行く若い男に言い、ピアノの椅子におずおずと座って、ちょっと試しに弾きはじめました。指は覚えていたようです。彼女は座り直して、昔習った曲を弾き始めました。ベンチで休んでいた中年女性から見ると、彼女は若いけど少しお化粧の濃い、ニュースでいうなら飲食業と紹介されるお仕事の女性のようでした。

　彼女が曲に詰まって、ピアノから手を放したとき、中年女性が声を掛けました。

　お上手ね。

すると、彼女はまた鍵盤から急いで手を放し、恥ずかしそうに俯きました。その濃いルージュに似ず、どこか育ちのよさそうな、そして幼さの残った瞳が涙で光りました。

　この曲は母とよく練習した曲だったんです。母は私が一生懸命弾くと、上手ねじょうずね、と褒めてくれました。だから、もっと上手になりたくて、もっともっと練習しま

した。その母が亡くなってもう五年になります。その五年の間に、私は夢を失くし、夢の見方さえも忘れてしまいました。

　ご苦労されたのね。

と答えました。すると、彼女の連れが、

　なにやってるんだ、腹減った、飯食いにいこうぜ。

と遠くから声を掛けてきました。

　可愛いあなたにはちょっと不釣り合いなお連れさまのようね。

と中年女性が言うと、

　いいんです。あの人は私を、私が知らないところへ連れて行ってくれるんです。だから私、あいつに付いて行ってるんです。

そう言って、頬を一筋濡らして立ちあがり、

　今行くから待って。

と言い、軽く会釈をして立ち去りました。そこで中年女性は夢から醒めました。ああ、あの子は私、あの男の子はあなた、と思いました。

　あなたの口癖だったわね。腹減った、何か食いに行こうぜって。同級生だったあなたとお店で初めて出くわした時も、付いたのが私と知ってびっくりして、急にしどろもどろになって、突然、おい、この店は何時に終わるんだと訊いてきて、何時と答えると、俺、出口で待ってるから、そのあと飯食いに行こうぜって言いましたね。そして私の返事も聞かずに席を立って、フロアーマネージャが、何かお気を悪くされましたでしょうかって、跳んできた。いや、急用を思い出して、飲んでる場合じゃなくなったんで帰るとこだわ。でも只で出て行くわけにはいかねぇよなと、ポケットから一万円札を出してマネージャーに握らせてお店をでてった。私はもうあっけにとられるしかなかった。だからこのことは、お店が終わるまで頭の片すみから離れなかったけど、本当にあなた

が出口で待ってるなんて思わなかった。ところが、おつかれさまあって同僚と声かけあって店を出たら貴方が待ってて、待ちくたびれて腹減った、飯食いに行こうぜといって、私が付いてきてるかどうかも確かめないでさっさとあっち向いて行ってしまう。私はもう小走りで付いて行くしかなかった。角を曲がると、俺、良い店知ってるんだ、任しときな。安くて旨い店に連れて行ってやるから。そう言って、またさっさと歩いて行く。私はまた追いかけるしかなかった。

お店に入ると、店主が、おっ、いい子連れてきたね、お前の彼女か、って言いましたよね。するとあなたは得意そうに、そうだよ、俺の彼女だって言った。学校を卒業して以来、初めて会ったのに、彼女ってなによって、私、怒ってた。でもその後も、私の知らないところに連れて行ってくれるあなたにずうっと付いて行った。

あの時の事は、今でも覚えてる。どっか行きたいと言うと、隣の県の温泉に日帰りで連れて行かれた。こんなんじゃないってダダを捏ねて怒ると、すまない、俺は修学旅行もろくにいけなかったから、何処へ行けばいいか、全然見当がつかないんだって、横向いて言いましたよね。

でも、もっと驚かされたのは、翌日突然、中古のオートバイをローンで買って来て、私にヘルメットをかぶせて、これでどこへでもつれていってやる、って言ってくれたことでした。私、泣き笑いに笑って、貴方の背中にしがみついて、市内を一周してもらった。

私、幸せでした。好きとは一度も言われなかったけれど、私の知らないところへ沢山つれていってくれました。楽しかった。

そういって、彼女は傍らの遺骨の入った箱を胸に抱いて立ち上がりました。彼女はご主人が息を引き取ったとき、そっとご主人の唇に接吻してお別れしたのでした。そしていま、誰も待っていない家に帰ってゆきます。それをお月さまが、明かり窓から照らしていました。

　中年の男性が、すっかり疲れた様子でベンチに座り込みました。ここにも、かつて人生に迷い、あげくに何かを諦めなければならなかった男がいました。男は旅行鞄を前に抱き、上半身を持たせかけて、ふうっと息を吐きました。何年ぶりでこの地へきたのでしょう。彼はこの地を誰に見送られることもなく去りました。ここでの仕事を捨て、格下の職に、ただ生活するためだけに赴きました。それ以来、この地を訪れることはありませんでした。

　彼の子供二人の親権は分かれた妻に行き、彼とは養育費のみの繋がりになって会うこともありませんでした。それは元妻と子供が嫌がったからではなく、元妻が再婚し、義理の父となった男が連れ子まで養子にしたからでした。元妻から子供を新しい父親の養子にすることに同意せよと迫られたとき、もうどうでもいいと男は同意して、その代わり養育費を半減すると言い渡しました。それに怒って、半狂乱になってののしる元妻を尻目に、男はこの地を離れました。

しかしもう来ることもないとおもっていたこの地を、彼は業務命令で来訪しました。長い間離れていても、JRの駅を出て地下鉄に乗り換える時、まるで昨日もそうしてきたように体が動きました。彼は地下鉄に乗りこむと、昔からしてきた通り、座席には座らず、立って動き出した地下鉄の窓から外を見ていました。彼の視線の先に、反対車線のプラットホームがありました。そこには多くの人が電車の来るのを待って並んでいます。そしてその中を、頭に三角巾を巻き、菜っ葉服の制服を着て掃除をして回っているおばさんが居ました。彼は顔をぶつけるように窓に近づけ、その姿に見入りました。再婚相手が亡くなったとは聞いていましたが、それを機会に、元妻は実家に帰ったと風の便りで聞いていました。ところが彼の視線の遠い先に、元妻の老けた顔がありました。彼はふいに目頭が熱くなり、涙が流れるのを覚えました。次の駅で電車を降りて引っ返そう、そして、元気だったかと声を掛けようと衝動的に思いました。しかし、それが出来るのかとも、動き出した電車内で思い返しました。あの離婚までの日々は地獄でした。そう思って見ているうちに次第にスピードを増す窓の向こうで、髪を金色に染めて高いヒールのサンダルをはいた若い娘が彼女の側に立ち、何か言っています。元妻は菜っ葉服のポケットから財布を出して中からお金を渡しました。背中を向けた若い娘

の顔は分かりません。ああどうなんだ、私は彼女たちの前に立てるのか、何か言えるのか、そう思うと、嗚咽が漏れました。電車は駅を離れて行きます。中年男が声を殺して泣いているなんて、なんてみっともないんだと思いました。迷いました。それでも彼は電車を降り、帰る電車に乗って彼女のいたプラットホームに戻りました。しかしもう彼女たちの姿は見えず、探しようもありません。彼は暫くこのプラットホームに佇み、諦めて、改めて電車を乗り直して、このピアノの広場に行き合わせたのでした。人生はやり直しなどできない。私は何を得て、なにを失ったのかと、思いました。彼は明日も駅で誰かを探すでしょう。しかし、彼は誰も見つけられますまい。お月さまはそんな彼を照らしていました。

雨の日のシンデレラ

そんな話は、この大都会では掃いて捨てるほどあることです。今もピアノの広場の観葉樹の影にそっと隠れた女性がいます。その彼女が目で追っている雑踏の先には、少しくたびれたレインコートの男がうつむき加減で歩いて行きます。二年前に別れた人でした。あの人は結局妻子の元に返り、私は一人で生きてゆくことを選んだ、それだけのことと彼女は思いました。二年間で彼の横顔は相応にくすみ、私は髪を切って変わってしまった、そう思いながら、彼女は男を見送りました。

その彼女の視界の中を、女が走ります、何もかも、夫と子供さえ振り捨てて、男のもとへと裏切りの女が走ります。まわりの人は誰もそんなことなど知りません。

そして、さらにその前を、傘を二本、胸に抱えて駅の方に向かって歩く女の人がおりました。彼女は、雨の日は必ず、もう帰らない夫を迎えに行きます。そして出札口の混雑する中にじっと立って夫を待ちます。彼女の事を知っている駅員は、彼女を雨の日のシンデレラと呼んでおりました。その彼女の後をそっとつけてきていた母親が、頃合いを見計らって彼女の夫は入れ違いで家に帰って来たから、急いで帰ろうと言います。心を病んだ雨の日のシンデレラは、それで納得して帰ります。それが雨の日の毎回の事でした。

　月の光に誘われて、酔って外に出てみたのだが、ちょっと耳障りな声の多重奏が気に障った。振り返ると、女学生の集団だった。その一人が、ショパンの別れの曲を弾いていた。女学生のリーダーらしき子が、

そうだよね、蛍の光なんかより、こっちの方がいいよね。

と言っている。

　むかしはさあ、校歌と君が代と蛍の光が卒業式の時の定番だったらしいじゃない。でも、蛍の光って、なんかダサいよね。なに歌ってるのか全然分かんないし。

　そうよ、こっちの方がいいよ。でも、ピアノ上手ね。

そう言いながら、取り囲んでいる一人が、演奏している子の肩に手を置いた。そして、

　ねえ、今日はどうだった？

と、ついでのように訊いた。本当はそっちの方こそ訊きたかったことなのに、さもさりげなさを装った言い方だった。

　あいつったら、ホントにはっきりしないね。こんなかわいい子をふったら、ただじゃ置かないんだから。

　そうよ、昨日だって、みんなで取り囲んで、この子に第二ボタン、やってくれる？っていったら、ポカンとしてた。ああいうのを、ハトに豆鉄砲って言うのよね。

　よっ、ことわざ少女！

それはことわざじゃない。慣用句っていうんだと老女は思った。老女は酔いもあって、ピアノ広場のベンチに腰掛けた。喉が渇いていた。でも本当は、聞き耳をたてての事だった。

　なんか、思いっ切り、ひいてたよね。

　そうよ、だから鋏を渡して、さっさとしなさよって脅したのよ。そしたら大慌てでボタンを切って渡してきた。

こんないい子からコクってるんだから、ちゃあんと答えなさいよ。どおすんのっていった時の顔ったらなかった。

そしたら、何を血迷ったのか、残りのボタン全部切って渡してきたのよね。これにはもうふきだしちゃったわよ。

ピアノを弾いていた子が俯いてしまった。

有難う、みんな。昨日、皆が言ってくれて約束させてくれたから、あいつも、ちゃあんと駅に来てくれて、それで、デイトしてきた。

そう！で、どこ行ったの？

すると、女の子は三駅先のショッピングモールへいって、そこで映画を見て、ゲームセンターで遊んで、海の見える公園を一緒に歩いて帰って来たと答えた。

そうだよね、そんなとこしかないよね。でもあいつにしては上出来じゃない。

うん。でも、映画はマカロニウエスタンで、楽しくなかった。私は或る愛の詩の方がみたかったのに。

そんなもんよ、最初は。で、これから先は？

わかんない。あの人は明日から大学の下宿先を決めに行っちゃうらしいし。私も一週間先には行かなくちゃならないから。そしたら、もう離れ離れで、連絡先もわかんなくなっちゃう。

そっか、そうなるか。

そう言って、一瞬沈黙があった。

　いいじゃないの、いい恋をしたじゃない。

恋せよ乙女よ。

つい口ばしを突っ込んでしまった。その声に振り返った少女たちは、一様にギョッとなって口を噤んだ。老女は目尻に深いしわが刻まれ、目やにさえ見えた。それでも赤く塗られた唇がポッカリ開いて、欠けた歯を見せながら言葉をしゃべる。

　いい？時は待っちゃあくれない。一人として見逃さず、容赦なく連れ去ってしまう。女もこの年になると、みんなこうさ。こんな私でも、昔は美しいと言って、いろんな男が言い寄ってきた。いまじゃあ、誰一人近寄っても来ない。あんたたちもこうなる前に恋をしなさい。

　でもね、恋だ愛だと、本人は自分一人が特別なことをしてるみたいに思い込んで、悩んでみたり怒ったりするけどね、見てごらん、あそこを歩いてる男も女も、皆、自分の恋物語を後生大事に抱え込んでるのさ。あんたたちの親もね。恋なんて、そんなあり来たりの、それでも特別なものなんだ。あんたたちも自分の綺麗な恋物語を作って、それを後生大事に生きて行けばいいさ。私はそれが出来なくて、こうして毎日酔いしれている。

そうさ、昔、男が居てね、その男は九十九日間通って来た。あと一日で百日という日に、その男は約束を果たせず死んじゃった。その男の怨みがとりついて、今でも私は九十九年待たされている。でも、私は待っている。取りつくほどの恨みを残して私を愛してくれたのなら、私もあの人を百年待っている。

　ほら、見てごらん、昔の私はこんなに綺麗だったんだ。

老女はふらりと立ち上がり、曲がった腰に両手を広げ、ふわりと回って見せた。少女たちは何かを見た。だが一回りした老女は、酔いのせいでふらふらっとよろめき、ベンチに寄り掛かった。少女たちは、いま一瞬見えたものと、ベンチに縋る老女の有様に声も出なかった。

おばあさん、誰？

わたし？私は、またの名を卒塔婆小町。

えっ？ソトヤマ、マチコ？

それでいいよ。ソトヤマ、マチコ。

立ちながらそう答え、老女は向こうに歩き出した。

違うよ。卒塔婆小町って言ったのよ。

だれ？それ。

小野小町よ。花の色は うつりにけりな いたづらに わが身よにふる ながめせしまにって百人一首の和歌を詠んだ人。

いよっ、ことわざ少女！

ああ、おばあさん、消えちゃった。

　季節は移り、クリスマスシーズンを迎えました。専門店街の人々も暮れの書き入れ時と、店を飾り、通りを飾って景気よくクリスマスソングを流しました。もちろん、ピアノの広場もクリスマスツリーを飾り、店主の娘さんでピアノの弾ける人を駆り出してクリスマスソングを弾かせました。やはり生演奏は違いました。ジングルベルや赤鼻のトナカイさんの曲が流れると、子供が喜びました。人が足をとめ、子供もはしゃぎます。それで少しは店の売り上げも増えたようでした。

　しかし、昼間にぎやかだった分、夜は余計にさみしくなります。ピアノ工房のおじいさんは夜なべをしてピアノの修理をしていました。すると、少し白髪まじりの男性が工房を覗きました。そして、ピアノの方に戻って、それは見事に枯葉を弾き始めました。工房のおじいさんは鼻眼鏡越しにピアノの方を見ました。そこには、かつて共に闘ったピアニストがおりました。

　今、ピアノの生産台数は矢張り中国が一番で、年間三十二万台以上を作っております。しかし、その以前、昭和四十二年ごろは日本が世界一でした。ピアノ工房のおじいさんは、日本のピアノがそこに達するまでの苦しい時代を、メーカー第一線の調律師として闘ってきたのでした。そして欧米にも輸出されるまでになったのでしたが、当初は安かろう悪かろう、西洋音楽の伝統のない国で作られたピアノは信用できないと、見向きもされませんでした、しかし、値段の安さと塗り仕上げの丁寧さ、品質にばらつきがなく、かつキータッチの心地よさと軽やかな音が次第に認められるようになりました。そして、ピアノコンテストの演奏ピアノとして採用されるまでにもなったのです。

しかし、おじいさんは、年のせいでそうなるまえに引退しました。そのおじいさんには心残りがありました。調律師として応援してきた有望なピアニストを入賞させられなかったことでした。

それは突然、ピアニストがおじいさんにコンテスト会場のピアノの調律をやってもらいたいと言い出したことから始まりました。しかし、会場専属の調律師が居る限り、それは無理なことです。おじいさんはそっと首を横に振り、引き下がりました。

調律師は黒子です。コンテストが始まる前に会場から去るのが通例です。しかし、おじ

いさんはそのことが何か気になり、留まっていました。そして、それまで会場に姿を見せないようにしていたのですが、あのピアニストの番になって会場に入り、演奏を聴きました。すると、一音だけ、音が微妙に揺れるのがわかりました。それも一番重要な音が微妙に揺らぎます。おじいさんの耳は、その微妙な揺らぎを捉えました。会場に専属の調律師が見えました。おじいさんが彼を見つめると、彼もおじいさんを見返し、ふっと目を逸らせました。ああっと思わず声が、おじいさんの口から洩れました。どうすることもできなかったとはいえ、これは私の責任とおじいさんは思いました。果たしてピアニストはそのキーを弾くことに躊躇い、ありようもなく崩れて曲はボロボロになり、入賞を果たせませんでした。おじいさんは、この出来事の後、辞表を出して会社を辞めました。

今、あの時のピアニストがおじいさんの店の前のピアノを弾いています。彼は店のドアを開けておじいさんが出てくると椅子から立って深々と頭を下げました。

先生、おひさしゅうございます。

彼は今、本来志したクラッシックを離れ、ジャズピアニストに転向して世界的に有名になっておりました。おじいさんもただ黙って頭を下げるしかありませんでした。何年ぶりだったでしょう。しかし、ジャズアレンジの枯葉は見事でした。

先生のお仕事でしょうか。鍵盤を一つ弾いただけで解ります。

新しい分野でのご成功、おめでとうございます。

とおじいさんは答えました。ピアニストはまるでビル・エバンスのようにソフィスティケイトされた、しかしビル・エバンスとは全く違った洗練のされ方で高く評価されておりました。やはり、共にクラッシックの基礎が身に付いたジャズでありました。ピアニストは今度、この地でコンサートを行うことになってやってきていたのです。そして、たまたまこのピアノの広場に通りかかりました。彼はこのピアノの広場の事は聞いておりました。しかし、そのピアノを置いたのがかつてお世話になっていたおじいさんとはしりませんでした。それでも、彼の絶対聴音感とキーのタッチを知る指は、その仕事をしたのがおじいさんだとわからせたのでした。彼はおじいさんに、コンサートの終わった後、ここでミニコンサートをやらせてくださいと申し出ました。おじいさんは、広場

のベンチに座っているおばあさんをみました。おばあさんは頷きました。おじいさんは、お願いしますと深々と頭を下げました。

　ミニコンサートの宣伝も準備も、専門店組合の方でしてくれました。しかし、準備不足は否めません。果たしてどれだけ人が集まってくれるのか、危惧しておりました。しかし実際始まってみると、準備の段階から既に何人かが席に座り、それにつられか通りがかりの人も足を止め、合わせると大人数の人になっていました。

ミニコンサートは変わった形で行われました。それはジャズコンサートと言うより現代音楽のアートパーフォーマンスと言った具合でした。演奏の構成は、ピアノとベースとドラムのトリオでした。そして、後から女性ボーカルが加わりました。元々ジャズなんて、余りポピュラーなものではありませんから、いきなり本格的なジャズをやっても受けないので、先日のジャズアレンジの枯葉、ワルツ・フォア・デイビー、いつか王子様が、スターダストなどスタンダードナンバーから演奏は始まりました。そして、聞きなれないアドリブの部分は出来るだけカットされて、メロディアスに演奏されました。なかでも一番反響が大きかったのは、千と千尋の神隠しをジャズアレンジにした演奏でした。これには、ママと一緒に聞いていた子供がいち早く反応し、立ち上がって体をスウィングさせながらリズムを取って踊っておりました。

ところで、お月さまのお顔の色って、日によってとか昇る高さによって違ってくるって、知ってましたか。お月さまが昇り始目の低い高さでは赤い顔、次第に昇って金色の顔、そして頂点近くでは銀色の顔に代わります。それが満月であったなら、この銀色に輝く月は明るく美しい。今まさに、ミニコンサートがたけなわになってきた時、お月さまの顔色は金から銀に変わろうとしていました。ここで、演奏だけでなく、ボーカルが加わりました。ピアノの横から天の羽衣のような絹のスカーフを巻いて女性歌手が登場しました。しかし、彼女が歌い出したのは、ジャズナンバーではありませんでした。

君恋る　あのみ空に

萱はさやさや　風はさやさや

衣擦れの　さやさやさらり

闇の中

君がのこせし筆のあと

言葉のあやに染められて

胸のほむらの紫に

群れて舞い跳ぶ

闇蛍

恋の道ゆく　通い路は

君待つ空に　さやさやと

風は音たて　踏み迷い

夢の浮橋　　たそ渡りけむ

絹のスカーフが天女の羽衣のように舞います。それはまるで、宙に浮かんでいるようでした。今日の月とアートパーフォーマンスが、そんな時空のよじれを呼んだのでしょうか。それとも、ただ重なっただけでしょうか。今日は茜色に染まった、血の色の月でした。通路に、なにか荒んだ空気が立ち込め、悲しみに満ち満ちました。昭和十八年、神宮外苑競技場の学徒出陣壮行会で行進した学生たちが、申し訳程度の訓練を経て、ま

たもこの大通りを行進し、外地に送り出されました。国威発揚がこの行進の目的でした。しかし見送られる者は死にに行く者、そして見送る者も後に続いて死んで行く者。見送る者の人垣が崩れ、学生たちの隊列に迫って、涙を流しながらなぜか万歳万歳と叫んでおりました。今、百鬼夜行の赤い月の月明かりの下、学生たちが隊列を組んで行進していきます。月が金色に変わって、学生たちの荷なった銃の銃剣がキラリキラリと煌めきました。そして月が銀色に変わって、彼らの影が軍靴の音と共に次第に薄れゆき、やがて消えてしまいました。

ピアノの広場にいつも来ているおばあさんが立ち上がりました。天女の舞いと今様風のジャズボーカルのアートパーフォーマンスは祈りのように続いておりました。隊列の去った向こうから、帯剣を手で押さえた予備少尉が彼女の前に立ち、敬礼しました。乙女が彼を抱きしめます。少年が少女の手を取って、花の咲く庭に連れてゆきます。彼らは生まれた時からの許嫁でした。それとは知らず、彼らはいつも、共に無邪気に遊んでおりました。それはまるで、ひとつがいの蝶のようでした。時期がきて、彼らは共に夫婦となる定めを告げられました。それを戦争が引き離しました。彼は骨さえ帰らず、彼女は妻にはなれませんでした。

いま演奏されているピアノは、おばあさんの嫁入り道具の一つでした。おばあさんは一生どこにも嫁がず、ピアノは家に残されたままになりました。戦後家は没落し、おばあさんは戦火を潜るよりも辛い日々を生きてきました。そしてもうこの世にとどまる日々が尽きようとしている年齢になり、おばあさんはピアノ工房のおじいさんにピアノを託しました。そして今、おばあさんはここで許嫁者と再会しました。

私はピアノ、おばあさんの側でこの人の一生を見守ってきたのでした。

ピアニストが、ドビッシーの月の光を弾き始めました。その音はまるで月の滴のようでした。銀色のお月さまが、のぞき込んで聞いています。もう私の役目も終わったようです。

Not a second time

こんな会合であの人を見かけるなんて、まあ、考えてみればあって当然のことだった。しかし驚いた。座敷に地区に人が沢山座っているのに、あの人はその後ろで簡易腰掛に座って足を組んでいた。どこか気取りが抜けていないのだと思った。会合が始まり、地区の自治会連合会の会長が会に始まりを告げ、挨拶している。私は手元の資料を見た。例年のことだから大体のことは解っている。いつもの通りの事業報告と、去年と変わらぬ事業内容、それに予算も例年通り。こんな会合なんて、そう意味があるとは思わないが、地域住民はこうして否応なく行政に組み込まれている。ごみの収集、回覧板、各自治会連合会への会費納入、赤い羽根の共同募金も自治会からの募金額が決まっていて、それで例年、あのように多額の寄付金になることも、こうして自治会長になってみるとわかる。あとは祭りだ。地区の祭りに若い衆が参加する。自治会からもこれに参加しなければならない。行列の一員として並ぶか、ほかのお役目を押し付けられるか。これは例年、順送りで必ず回ってくる。今年は幸いにも、４年に一回の何もない年にあたり、私は気が楽だった。しかし、何かお役目が当たっても、この高齢化だ、誰も引き受けてはくれない。何かあったら、自治会長がする他ない。一年交代の自治会長は例年そうしてきた。そんな事情も、今年、何度目かの会長職をつとめることになった私には解っている。ところが、ふと目をやると何かあったのか、あの人の目が泳いでいる。だからと言って知ったことではない。学校時代からひ弱な人だった。

そんな人が、昔、私にラブレターをくれた。それも気取った文句が書いてあった。迦陵頻伽の、なんて書いてあったって解りはしない。おまえ、高校生だろ。どこであんな言葉、見つけてきたんだ。そんなことを思い出しながら横顔を見ていると、視線でも感じたのか、こっちを向いた。なんだ、それは。ひらひらと手を振る。いい年して、こどもか？あの人、だあれと、一緒に来た人が訊く。同級生。そう答えると、ああそう、と納得した顔になった。訊いてきたこの人も同級生の奥さんだ。その同級生は今肺気腫に苦しみ、早く職を引いて療養暮らしに明け暮れている。奥さんとは同じ市役所で知り合い、結婚してコトブキ退職した。ところが夫が病気で退職するのが早かったから、奥さんが復職した。世間と隔絶したところで行われる公務員の特権だ。職に就くのでさえ市役所なんて、市会議員の引きがなければなれなかった。コネだ。今はそうはいかない。しかし、そんな時代があった。私だって同じだった。父が市会議員を何期かつとめたおかげで、市の職員になれた。そんな事情は皆知っていたから、私は鉄仮面をかぶって毎日つとめに出た。父は私が就職してからも、二期八年、議員をつとめ、議長にまでなった。だから誰も私に後ろ指を指さなかった。いや、指せなかった。

父は市長への立候補も勧められていた。立候補すれば当選しただろう。しかしそれは断っていた。市長になると二期、もしくは三期で辞めなければならない。もう年だからそれでいいと思っていたようなのだが、未だそれより長く議員をつとめるつもりだったらしい。もっとも父は、市長の激務を知っていた。そんなことはやりたくないというのが本音だったのかもしれない。それに市長になると、例えば娘の私を市役所に押し込むなんて、風当たりが強くて出来なくなる。それより市長を裏から操り、思い通りにするほうがいいと考えていたようだ。

私はそんな父のこととは別に、市役所での仕事を覚えることに必死だった。仕事は細かいことまで気配りしなければならない。また、何より記録することが求められていたが、最初は何を文書に残さなければならないのか解らなかった。まず一年だよと言ってくれた人があった。三年経てばもうベテランさ。そう言って細かく教えてくれた。官庁らしい文章の書き方まで解ってくるのは大変だった。関西の、偏差値の低いお嬢様私立女子大をヤット卒業してきただけだから、それはもう苦痛でしかなかった。出来上がった書類を課長にもっていくと、鉛筆でチェックされ、黙って突き返される。周りはたった一枚の書類をいじくって、あくびをしているというのに、私は過去の同じ書式の書類を参考にして書き直す。それが毎日だった。それでも印鑑証明とか住民票の発行とかの雑務はそれなりにこなせるようになり、そのうち、一人一台のパソコンが支給され、業務は煩雑化していたものが簡単になってきた。私は皆と反対に、パソコンには早く慣れることができた。定型化された書類は、あらかじめひな形が記入されていた。それに従って個別案件の固有名詞と必要事項を入力すれば書類は整う。計算事項も同じだ。数値を入力すれば、手計算しなくても良かった。

　それが何を言っているのか、まだ幼かったので私にはわからなかったが、それでも自分が特別なのだと、10才を超える頃には意識していた。そして、その言われた言葉にそぐうように自分なりに行動した。だから、子供のころから、本当に打ち解けた友人はいなかった。男の子たちは辛らつだった。

　　ちょっときれいだからって、すかしてらぁ！

そんなつもりはなかった。学級参観日に、母は羽織を着て後ろに立っていた。それは母の精一杯の構え方だったのだろうと、今は分かる。

　　お前の母ちゃん、きれいやなぁ。

その時もこういわれた。私は母に、もう学校に来ないでと言った。母は黙って悲しそうに俯いていた。それは私の出生に関係していた。私は私生児だった。でも、父はいつも側に居た。要するに、私は妾の子だったということだ。

　母が父の妾だったことで、母の弟、私の叔父も仕事が順調だった。叔父は戦後間もなくから学校納入の品を一手に取り扱って財を成した。それもこれも父の引きのおかげだった。そして、私は子供の時から美貌だったから、父は私を舐めるように可愛がった。いや、そんな風には思いたくない。だが私はそう意識せざるを得なかった。そんな私は、いつしか内に強いものを抱え込んでいながら、外見ではしとやかに弱々しく振る舞った。口数少なく、俯き加減でおとなしい子というのが、私だった。そして私の抱え込んでいる強い物とは、反抗心とか勝気とか反発とかでもあったし、子供らしくない狡さでもあった。だから、自分が綺麗とも思ったこともなく、かわいいとも思っていなかった。

　高校は地元の公立へはいった。それも進学をするための普通科ではなく、家庭科へ入った。私の学力ではそんなもんだった。地元の公立高校が、もとは女学校だったこともあって、家庭科なんて変わったクラスがあったからまさよかったのだ。でなければ私など、地元の学校に進学できず、一駅向こうの高校へわざわざ行かなければならなかったかもしれない。

　家庭科はそのままの内容で、男子学生など一人もいなかった。しかし、普通科が八クラス、家庭科が二クラスだったから、授業以外ではごく普通の学園生活であったし、クラブ活動もクラスの別にこだわりなく普通に行われていた。私は一つは弓道部に入部し、熱心に通った。私が弓道をしたいというと、母ではなく、父が喜んだ。そしてそれを聞いた一週間後には、市内の武具専門店に連れて行かれ、上衣、帯、袴、足袋の一そろいを買ってくれた。父は大正の人だったから、自身、そんなものに憧れがあったようだ

。次いで、弓一式も買おうとしたが、さずがに店の人から止められた。弓道部の顧問に相談して、少し練習してからにしろというのが、店の人の言い分だった。

Because

私のように全くの初心者は、部に備え付けの弱い弓で巻き藁を射ることからはじまった。それでも一応弓を選んでもらい、矢も引き尺に合わせて貸し出された。とはいうものの、道着の着方も解らなかったのだから初心者はどうしようもない。しかし、それも先輩に指導してもらって、何度か練習するうちに恰好がついて、一人で着られるようになった。そうしているうちに、弓道は、弓を引くことでも矢を射ることでも、まして、的に当てることでもないと次第にわかってきた。弓を引くことは、その前の立ち方、歩き方、というよりも歩の進め方、上半身の身の構え、足さばき、そしてその一つ一つの所作が大事とわかってきた。すると、心の在り様まで変わってくる。私は弓道にのめり込んだ。そんな日、わたしを凝視する視線に気が付いた。ふりかえると、ふっと目を逸らし、俯いた。まるで存在感のない、名前だけ知っている同級生だった。この人はこれから先もずうっとそうだった。いつも俯いて視線を合わすことがなかった。最後にあった時もそうだった。僕はどうしてもあなたをまっすぐ見られない。あなたは綺麗だ。これからもずうっときれいでいてください。いつの間にか身に付けた蓮っ葉な言い方で、努力しますと答えてやった。あいつの顔が曇った。まるでそんな言い方は似合わないとでも言いたげに顔を上げ、あなたは僕の永遠の美少女だから、そういって踵を返して、さっと立ち去った。唖然としながら、胸にときめきが残った。何も知らない少女のようにときめいた。

You've Got to Hide Your Love Away

　そんなことを口走る男じゃないと思ってた。もう十分年齢も重ねてきたから、そんなことも言えるようになったのかもしれないが、昔からどちらかといえば存在感の薄い男の子だった。だから、あの人、ひと？、男？どういえばいいのか、とにかくあの人の事は私の視界の中にはなかった。見かけても気をはらいもせず、気付きもしないといったふうだった。それがたまたま見かけるようになって、突然視界の中で広がった。地区の公民館活動だの、小学校の運動会の手伝いだのと、自治会関連で駆り出されることが出来ると、あいつも出て来てそこらあたりでごそごそしていた。そして私が重い荷物を一人で運んでいると、きゅうに荷物が奪われた。あいつが後ろから手をのばし、持って行ったのだ。不意を突かれた私は手ぶらのままあいつの後ろを歩いて行った。荷物は置くところが分かっていたのか、所定場所に置いてあいつが振り返った。そして、付いてきてた私を見て、逆に驚く仕草を見せた。なに？と私が聞くと、まじまじと私を見詰める。ちょっとムカッとなった。太ったっていいたいんでしょ。さっきも後ろからやって来て、そう思ったんでしょ。すると、あいつは首を慌ててふって、美魔女やね、とほざいた。そしてサッと身をひるがえす。そういえば、元々細い子だったけど、今もあまり贅肉のない、すらっとした体格のまんまだった。要するに、私のように中年太りしてないということだ。何か涼しそうなブルーのシャツをきて、上に薄いものを羽織っている。しかし、自分が細いままだと強調したそうにスリムのパンツを履いて、生の皮ベルトをしていた。頭にはキャップを被る。幾つのつもり？今まであいつのことを、ここまで考えたこともなかった。そして、そこまで考えて忘れた。

If I need someone

風が吹いていた。厚い雲が空を覆い、変調を予感させた。だからと言って、夫の葬儀を延期するわけにはいかない。朝から子供二人が会場の中と前で、葬儀客の相手をしていた。私は気が抜けたように、喪主の席で座り続けていた。しかし、悲しんでいたからではない。どうすればいいのか解らなかっただけだ。電話を受けた時は混乱しかなかった。別れさせた女から突然の夫の急変を告げられ、あとは何をどうしたのか覚えていない。病室に着いたときは、夫はこと切れていた。心筋梗塞と医者に言われた。私が付くまで救命措置は突けられていたが、親族の同意を得るまで形だけ行っていたにすぎなかった。救急のトップを思われる医師から措置を止める同意を求められ、頷くしかなかった。

同意書にサインしたところに、子供たちが到着した。その二人の後ろに女がいた。私は彼女の前に行って頭を下げた。救急車を呼び、夫をここに運び込んで、それから夫の急変を私に知らせてくれた。私は礼を言わなければならなかった。その義務がある、正妻としてそうしなければならない、そう思って頭を下げた。

夫の良くない噂は頻繁に聞こえていた。本来の電気工事が上手く行かなくなると、一緒に仕事をしていた弟と何やら胡散臭い仕事に手を染めていたことは知っていた。二人でハコバンに寝具、それも羽毛布団をのせ、何処かに出かけて行き、何日も帰らなかった。帰っても、二人して誑かした老人たちの間抜けぶりをあざ笑って、沢山の一万円札を数えた。それでも私は素知らぬ振りをした。もう父も母もいなかった。誰か相談に乗ってくれるほどの人もいない。まして、もう夫となった人は二人の子供の父親だった。

あばた面の弟は、胸ばかり大きな女を妻にしていた。そして夫と一緒にママさんバレーのコーチを引き受けていた。他に、違う日に交代でコーチをやっている男が、派手な顔つきの背の高い女を口説いていると専らの噂だった。隠していても噂は漏れる。というより、口説かれた女が限られた範囲でだが、吹聴していた。誰にもいわないでね。そう言って、露骨にセックスに誘われたといった。そんなセックスに興味を持つ女に見えた。こんな噂が私のところまで来るには時間が掛かっていた。夫もこんな情事に加担していたからだろう。旅先でも地元でも、仕事がうまくいかなくなってからは女遊びをして回った。弟の嫁が浮気して露見し、大騒動になって色々なことが表ざたになった。アンタもお兄さんと一緒になって、他の女を誘いまくってるじゃないの、あんた達は種馬か、汚らしいのはどっちよ、知らないとでも思ってるの。弟の嫁は開き直って罵った。そして、おねえさん、お兄さんもあの女とは別れさせた方がいいわよと、実名を挙げ

て告げ口をして子供を連れて出て行った。

　その日から私は夫を拒否するようになった。そして、わずかだが不正出血を見るようになった。しかし何日も続くわけではなく、治まって忘れた。そしてまた生理か不正出血か解らぬまま続いた。夫は以前と変わらず、仕事と言って留守を繰り返した。重苦しい日が続いた。子供も俯いて自分の部屋に閉じこもった。

　そんな日、長男が釣りに誘われた。同級生の父親が、安全な釣り公園ですから大丈夫ですよと電話をくれた。もう一人、長男の友達が一緒に行った。釣りの道具は、夫の物を持たせた。しかし、行った先で道具が合わなかったらしい。連れて行ってくれた父親が一応全員の仕掛けを用意してくれていて、それを竿に付け、オキアミを撒き餌して潮に乗って来たサヨリを釣った。撒き餌をし、子供たちの針に餌を付け、竿を振って子供に持たせる。すると見てる間に魚が掛かり、しもりうきがピーンと伸びて沈む。合わせるも何もあったもんではない。サッと引き揚げるとサヨリの尖った口ばしと銀色の体が光る。急いで糸を手繰り寄せ、軍手を履いた手で魚を外して、また餌を付け、仕掛けを海に入れさせる。撒き餌も怠らない。そうしないと魚が散ってしまう。それにしても、子供を３人連れての釣りは大変だったと思う。彼はもう自分の釣りどころではなかったはずだ。小一時間、サヨリは釣れっぱなしだった。父親の軍手はサヨリの鱗でピカピカに光っていたと、長男が報告してくれた。そして魚の波は終わった。それぞれのクーラーには、何本ものサヨリが入っていた。だが、長男の友達がまだ釣りたいと主張した。サヨリはもういないから、今度は底釣りするしかない。父親は自分の道具箱から何やら仕掛けを出して、それぞれの竿に付け替えてくれた。餌はイソメに替えられた。なんか釣れるといいな。そういって少し沖目に投げるよう言った。そして、少しずつ誘ってごらん。だからといって魚が都合よく掛かるわけではない。子供らが飽きてきたころ、友達の竿が曲がった。上がってきたのはキュウセンだった。初夏に釣れるサカナだ。子供らの目が変わった。軽く投げてはまた誘う。そうして何度か試行していると、長男の竿に、同じくキュウセンが掛かった。釣行は成功だった。子供たちのクーラーは十分に得物を入れていた。その日、私は少し多めの出血を見た。

For no one

私は仕事を休み、婦人科を受信した。帰る時、窓口で紹介状を渡された。そう何日も休むわけにはいかないので、その足で総合病院に行った。今度はご家族と来てくださいと言われた。子宮頸がんと診断され、手術を勧められた。私はタクシーで帰った。その間、私はしんと沈んだ頭で課長に病欠の届けを出し、母に付き添いと子供たちの面倒をお願いしようとか、そんなことを繰り返し考えていた。

夫との結婚は、夫の父親が強く望んだものだった。私の望んだものではない。結婚に夢を膨らませたことなどなかった。それに、私は大学の時、女になっていた。それだけのことだ。相手は大学でも続けていた弓道の大会で知り合った学生だった。今は顔も思い出せない。細くて色白の、抱きしめても手が回ってしまうほどの男だった。逢瀬はそういう関係になってからは２度か３度だった。結婚しようと言ったけれど、私はそれから会わなかった。どうして会いたくないのか、解らなかった。下宿を変え、弓道も辞めた。弓道部の子たちに、誰それ君があなたを心配してたわよと言われたけれど、なんで心配するのかしら、一二度挨拶しただけなのにねと誤魔化した。何か体を撫でまわされるような感じがした。

夫との結婚は、父が同意して決まった。引き合わされた後、何度か一緒に出掛けることはした。話も適当に合わせた。そして、黙って歩いているとき、じっと私の横顔に見入る夫の目を感じた。夫は私と同じ境遇だった。その時代はこんなこと、普通だったといえばそれまでだったが、彼は妾腹で認知もされていなかった。だからおおっぴらに父親からの援助はなかったが、誰もがそれを知っていて父親の威光を忖度し、まわりからはそれなりの扱いはされていた。それもあって結婚式は内々で行われ、新婚旅行もないままに新婚生活は始まった。そして次第に彼の粗暴な性格があらわになって、私は床を別にするようになった。多分、私がもう女になっていたことが彼をそうささせたのだろうと思った。それでも私は二度妊娠し、長女と長男を産んだ。まるで荒々しい、性欲のためのセックスをされた。終わると、夫は自分の寝床に帰って行った。それを私は不幸とは思わなかった。

私の子宮頸がんは２期の、いわば初期段階だと主治医に言われた。それでも生存率は６０パーセントと告げられた。長女はもう中学３年生。長男は中学１年生。長女の顔がこわばっていた。母一人がおろおろしていた。長男は病院に来なかった。夫は手術の時来ただけだった。もう終わった夫婦だった。

入院は１６日間。初めの二日、術前の検査があり、手術前日は下剤を飲んで絶食だった。長女が泣いて見送ってくれた。大丈夫よ、大丈夫。母が長女を慰めていた。私は

もう麻酔の中に半分眠っていた。手術は６時間かかったそうだ。ふっと麻酔に眠らされ、目覚めると酸素マスクが顔を覆っていた。下腹部が痛い。もう麻酔が切れていた。

翌日から、トイレと食事の時は歩けと言われた。何か重心が狂った人形のようにふらついた。あとはただ横になっているだけ。だが尿意があっても排泄できない。痛みよりそっちの方がつらかった。３時間おきに詰め所に行き、導尿してもらって排泄する。その量の多さに驚いた。４日掛かって、自力で排尿できるようになった。それから抜糸され、翌々日には退院だった。私は宙を浮くような感覚のまま歩いて病院を出、自宅に帰った。夫はいなかった。

だから私はもうどうでもよかった。夫は自分の稼いできたお金を家庭に一切入れなかった。帰ってくるのは帰ってきたが、それも弟と一緒に階下の店舗で何かしら品物を出したり入れたりするだけで、夜更けてでなければ上がってこなかった。私は弟の嫁からの電話で聞いた住所に出かけて行った。足が震えた。市内のボロアパートの一角だった。別れるなら別れても良かった。もうどちらの親も死んでいないから、夫も私も重しになる者はいなかった。だからどうにでもなれと覚悟は決まっていた。

薄い扉からテレビの音が漏れていた。女の声も聞こえる。私はもう一度振り返り、夫の車を確認して戸を叩いた。ハーイという声が返ってきた。そしてドアが開いた。光の影で女の顔が見えなかった。その向こうに片膝立てて夫が座っていた。私はグッと身を入れ、扉を後ろ手に閉めると、顔をひきつらせた女の顔を平手打ちした。女は飛ぶように引き下がった。テレビを見ていた夫の呑気そうな顔が振り返った。私は靴を脱いで部屋の中に入り、夫の前に座った。あなたはどうしたいのと言った。女は若かった。薄着の上からでも胸のふくらみが見て取れた。夫も声が枯れていた。粗野な顔つきだが、小心者だということは解っていた。何しに来たと訳の分からないことを言う。私は離婚届の用紙を出して夫にさししめした。これにサインする？そしたら私はこちらにこれだけ請求するわ。弁護士に作ってもらっていた慰謝料を書いた書類を女の方に渡した。そして養育費を払うという念書も夫の前に置いた。もっと修羅場になると思っていた。のしったり喚いたり、髪を掴んで引き摺られたりするかもしれないとも思っていた。それでも良かったのだ。私は女の顔を見た。唇が切れて震えていた。夫は黙り込み、下を向いて何も言わない。私は三通の書類を置いて立ち上がった。明日それにサインして持ってきてといって、帰ってとは言わなかった。

Any time at all

翌日だったか、翌々日だったか、覚えちゃいない。私が出勤しようと階下へ降りると、車庫スペースに夫の箱バンが入っていた。店舗に夫と義弟の声がしていた。私はそれをふり捨てて道に出、役所に向かった。先に学校に行った子供たちは夫に気が付いたのだろうか。私は子供たちに何も言ってなかった。心が固くなっていた。

それから何日も音沙汰がなかった。もう言葉を交わすのも嫌だった。しかし考えてみると、夫にも変える所がなかった。そんなことはどっちでもいい。女の安アパートにでも転がり込むだろう、そう思った。その後いつもの夫不在の日々が過ぎ、それが子供たちにも日常化してきたある日、帰ってみると夫がリビングでビールを飲んでいた。私は一瞬殺意を感じた。本当に後ろから手に持ったバッグで頭を殴ってやろうかと思った。夫は以前と変わらぬ様子でテレビを見ている。私は声もかけずに寝室へ行き、服を着替えた後、ベッドに座り込んだ。すると、ドアが開いて夫の顔がのぞいた。私は衝動的に目覚まし時計を投げた。そして慌てて閉められたドアに向かって、出て行きなさいよと怒鳴った。返事はなかった。

しばらくしてリビングに行ってみると、夫の姿はなかった。私はテーブルの上とか回り中を見た。離婚届の用紙が置いてないかと思ったからだ。しかし、何もなかった。あったのはビールの空き缶二本と空の弁当のケースだけだった。頭に血が昇り、胸を沈んでゆく冷たいものを感じた。死のうと生きてようと」どっちでもいいと、もはや赤の他人より遠いものを感じた。

それでも何日かすると、夫は同じことを繰り返した。言葉を交わすことはなかった。しかし、一度、私は夫に襲われた。夫が帰っていたので、寝室のベッドに座っていると、夫が突然入って来た。そして黙り込んだまま、私に向かって来て押し倒された。私は声を挙げた。胸を揉まれる。股に手を入れられ、唇を夫の口でふさがれた。やめて、やめてと繰り返した。その唇をまた塞がれる。私は私の体をまさぐる夫の手を掴み、唇を噛んだ。夫の体が跳ねた。私は胸元を直し、立ち上がった。そしてドアを指差し、出て行きなさいと言った。この家は、私の父が建ててくれたものよ、あなたに何の権利もないわ、でていけ！それは夫の自尊心を叩き潰すのに十分だったようだ。夫は何も言わず、ズボンを直しながら出て行った。玄関ドアの閉まる音がした。

それからは、階下の店舗に夫の車が止まっていることはあったが、もう住宅部分には入ってこなかった。子供たちも解っていたようだ。彼らも夫には声をかけなかった。もともと子供の事などかえりみなかった人だったから。彼は自分の性欲のはけ口を求めて女出入りの絶えなかった人だ。そんな人が、家庭の事など気に留めるはずがなかった

A Day In The Life

夫の葬儀には役所の人達のほとんどがやってきた。それが役所の慣行だ。私は喪主として祭壇の喪主席に座り、振り返って彼らを見た。田舎の事だから、夫がどのような死に方をしたかは、もう知れ渡っていると思って間違いなかった。同じ自治会の人達さえ、私を見る目がそう語っていた。背中にねばりつくような視線を感じた。子供らは叔父が付いていてくれた。常日頃はもう没交渉の人だった。私自身も大病をして先が見えない。子供のことだけが心配だった。

出棺の折り、ふっと腹上死という囁き声が聞こえた。かっと血が昇るのを覚えた。しかし、それに耐えて私は車に乗った。動き出した車のサイドミラーに、てんでに帰る人たちの背中が写っていた。

それから一週間して、思わぬ弔問客が来た。夫の取引先の人だという。部屋に上がって線香を手向けた後、私に向き直り、こんなこと、今言って申し訳ないが、と一枚の紙をだし、ご主人にはこれだけの売掛があるんだと言い出した。それには法外な金額が掛かれていた。こいつはそう待てないお金だから、早急に払ってもらいたいんだがねえという。なんのお金かは想像がついた。健康にいいんだと、殆ど詐欺まがいのやり方で年寄りを騙して品物を買わすやり口を夫もしていたようだ。それこそ役所の消費者相談に、そんな事案がよく相談されていた。私は突っぱねた。品物があるならそれを回収して、その残金を相談させてください。そうでないなら、一応今日はお帰り頂いて、そのうえで請求書と明細書とをお送りください。然るべきところと相談の上、ご返事します。そういうと、奥さん、そんな切り口上に物事を荒立てるもんじゃあない、こっちも商売だから、返すもんはかえしてもらわなきゃ困るんだよ、と声のすごみを持たせて言う。私はもう取り合わなかった。ご弔問、ありがとうございました、お帰り下さい。そう言って立ち上がり、電話の前に立った。そして受話器を持ち上げる私を見て、いや、これで失礼しますよと来訪者は席を立った。電話はとっさの思い付きだった。誰かを呼ぶ、警察に頼る、そんなことが脳裏に浮かんでいた。

玄関の扉を閉め、鍵をかけて、私は腰が抜けたようになった。震えが来た。何を残していったのかと夫を恨んだ。それからどれぐらいそうしていたか分からない。母さん、母さん、と長女の声がした。学校から帰ったらしい。立ち上がって、戸を開けた。不機嫌そうな声がした。鍵なんか掛けたことなかったじゃない。なんで鍵なんかするの。もう黙っているしかなかった。そのころから子供と気持ちを通わせられなくなっていった。ふいに見せる表情に、夫の顔が浮かんだ。私はそれを嫌悪した。子供のせいじゃないのに不快でたまらなかった。

取り立ての件は、夫の不倫の件で相談した弁護士に頼んで整理してもらった。彼は役所で行っている法律相談でお世話になっている人だった。若くて温厚だったが、電話でのやり取りは柔らかい口調で言ってはいても、中身は痛烈だった。これ以上付きまとうなら、警察にそうだんすることになります、よろしいでしょうか、当方はいっこうにかまわないんですが。警察の一語が出たところで終わった。彼らも身に覚えがあるんですよ、そう言って笑って終わった。

Cray Babe Cray

私は夫が建てたこの家で子供が巣立つまで住んだ。二人とも人並みの高校大学を出てくれればよかったのだが、長女は地元ではなく、一駅先の公立高校へ通った。長男は地元の私立高校へ行った。二人とも母親には必要なこともあまり話してくれず、家の中はいつも重苦しい空気が漂っていた。そして、二人とも自分の通っている学校にコンプレックスを感じているようだった。だからといって、もう仕方のないことだ。長女は、一駅先の高校が長刀で有名だったので、これに懸命になった。これも私が弓道をやっていたという話の影響だったろうか。長女は子供の時、私の弓道着姿の写真をよく見ていた。それにくらべ、男の子のことは解らなかった。私は子供と私の生活のために働くことばかりに集中し、子供のことに目がいかない日々の連続だった。それが子供のことに構わない言い訳になっていた。そして、そのしっぺ返しは、のちに返されてきた。

長女が先に家を出た。一応関西の大学へ入った。受験勉強らしい勉強もせず入れる大学だから、名も知られてなかった。それでもこの学校にやれたのは、夫の保険のおかげだった。私はこのお金を必死に守ってきた。夫が亡くなってしばらくして、義弟が、仕事で夫に出資していた金があるから返してくれと言ってきた。あの時、つまり、夫の死後すぐに借金の取り立てが来た時、義弟は寄り付きもしなかった。私はそのことを盾に、義弟を追い返した。あなたも一緒よ、下の事務所にある物は全部持って行っていいわ、でも、あなたに渡さなければならないお金はない、そういうと、義弟は車の鍵をだして、これは兄貴と仕事で使っていた車だから、貰っていくと言って帰った。義弟ともこれで終わった。私の顔が余程変わっていたのだろうか、私が口を開いたとき、義弟の顔が一瞬でこわばった。そして義弟が私の肩に手をかけた。私は後ろ手に持っていた果物ナイフを突きつけた。長男が背後に現れ、小さなバットを義弟のすねに叩きつけた。義弟は私に何をしようとしていたのか。義弟は足を抱え、唸り声をあげて座り込んだ。子供の力でも、長男は私を守った。長男がさらに一撃しようとするのを止め、ナイフで玄関を指し示し、出て行って、もう来ることは許しません、来たら警察を呼ぶわよと言った。顔を挙げた義弟に長男がバットを振り下ろした。耳を掠め、かたを打った。義弟はのけぞって倒れ、うつ伏せに直ると、玄関へ這って行った。長女が電話を握って後ろにいた。

夫の死亡保険は半年ほどして降りてきた。それを私は学資保険の一時払いのお金にしておいた。その保険のお金で、それぞれ入学準備も卒業の時も助けられた。だが長女の大学入学金は無理だった。私は共済組合から融資を受けた。退職金を担保に入れた。長男がそれを見ていた。そして、姉につらく当たった。僕は大丈夫だから、奨学金とバイ

トでやっていける学校にゆくから、そう言った。だが、長男は試験に合格しなかった。それで、地元の専門学校に通った。そして、姉より先に、地元の大手家電チェーン店に就職した。姉は大学を卒業すると同時に、出来ちゃった婚した。結婚式もなかった。

Hello Goodbye

　もうその辺りから、私は自分が生きてきた毎日を覚えていない。子供たちが高校へ行っているときは、長女が３年生なら、長男が１年生だった。高校は給食がなかったから、毎日お弁当を作らなければならなかった。これは自分のも作れるからよかったと言えばよかったのだが、上のこと下の子を合わせて５年間は長かった。特に長男は、学食を嫌った。購買でパンを買うのも断固拒否した。長女は通学路のパン屋でパンを買うのがお気に入りだったのだが、長男の頑なところは、よくわからなかった。お母さんを助けると思って学食にして。そういっても黙って首を横に振った。彼はお弁当を持って行くものだと思い込んでいたのだろうか。そんな毎日だから、自分の事は二の次だった。しかし、市役所でも私は次第に年かさになり、役職にも就くようになっていた。私にはそんなことどうでもよかったのだが、仕方なかった。もう自分の人生に女はなくなった。

　そんな時、席を立って依頼者に応答していたりコピー機へ向かっていたりしてると、視線を感じることがあった。なんだろう、女の勘？でも私は振り返ったり目で探したりはしなかった。わずらわしいばかりだと思ったからだ。しかし、一度、振り返ると目が合ってしまった。あいつだ。高校の時、ラブレターを送って来た同級生だ。今でも覚えている。迦陵頻伽がどうとか。わかりません。なんでしょうか。するとあいつが、手をひらひらさせて、さっと向こうへ行ってしまった。私はつい、目で追った。

　お母さん、彼氏作らないの？と長女が言う。お父さんが死んで１０年近くよ。もういいんじゃない。そうね。でもお母さんも十年、年を取ってしまったわ。もういいのよ、そんなこと。そうかなあ。私だったら、さっさと再婚するけどなあ。お母さんにはそんな暇ないわ。こんな大きなこぶ付きなんだから。そういうと、長女が、悪うございました、と向こうへ行ってしまった。でもね、お母さん、今でも綺麗よ、美人だわ。振り向いて行った。

　日常の中で、そんな話もすぐに消えさり、忘れた。夫のことさえ夢のように忘れた。私は次第と嫌なこと苦しいことがあっても、じっと頭を下げていればそのうち消えると思うようになった。そう思うようになってから、私は快活になった。さほど思い悩まないようにして、わざとさばさばとものを言い、回りともあっけらかんと話すようにした。しかし、人のうわさと悪口だけは言わなかった。それが私の処世術になった。